

竹 生 野 遺 跡

1988

石川県立埋蔵文化財センター

竹 生 野 遺 跡

石川県立埋蔵文化財センター



竹生野遺跡第1次調査 全景



竹生野遺跡第1次調査 第2・3号竪穴住居



竹生野遺跡第2次調査前期調査区(北から)



竹生野遺跡より宿東山遺跡・宿向山遺跡(調査中)を望む(南から)



竹生野遺跡第2次調査後期調査区(南から)



竹生野遺跡第2次調査後期調査区(北から)



竹生野遺跡第2次調査 第6号竪穴住居



竹生野遺跡第2次調査 第8号竪穴住居

目 次

	頁
第1章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査の契機と経過	9
第1節 調査の契機	9
第2節 調査の経過	9
第3章 竹生野遺跡第1次調査	15
第1節 概 要	15
第2節 遺構と遺物	15
第3節 まとめ	70
第4章 竹生野遺跡第2次調査	71
第1節 概 要	71
第2節 遺構と遺物	72
第3節 まとめ	164
第5章 南吉田葛山遺跡の調査	167
第1節 概 要	167
第2節 遺構と遺物	168
第3節 まとめ	180
第6章 考 察	183
第1節 旧石器時代の末森山麓	183
第2節 大型土坑の機能について－能登半島の弥生時代を中心に－	193
第3節 弥生時代後期後半の土器変遷について	217
第4節 竹生野遺跡出土須恵器について	229
第5節 中世～近世初頭における押水三箇荘地域の検証	241

挿 図 目 次

	頁
第1図 遺跡の位置	1
第2図 周辺の遺跡分布図	2
第3図 押水バイパス関連遺跡と周辺の小字名	5・6
第4図 竹生野遺跡第1次調査平面図	16
第5図 第1号竪穴住居実測図	17
第6図 第2号竪穴住居出土双孔円板実測図	18
第7図 第2号竪穴住居実測図	19
第8図 第3号竪穴住居実測図	21・22
第9図 第2号土坑実測図	23
第10図 第3号土坑実測図	24
第11図 第4号土坑実測図	25
第12図 第6号土坑実測図	26
第13図 第7号土坑実測図	26
第14図 第8号土坑実測図	27
第15図 第9号土坑実測図	27
第16図 第11号土坑実測図	29
第17図 第22・23号土坑実測図	30
第18図 第24号土坑実測図	32
第19図 第25～29号土坑実測図	33・34
第20図 第10・12～18・20・21号土坑実測図	37
第21図 第1・2号竪穴住居出土土器実測図	40
第22図 第2号竪穴住居出土土器実測図1	41
第23図 第2号竪穴住居出土土器実測図2	42
第24図 第3号竪穴住居出土土器実測図1	43
第25図 第3号竪穴住居出土土器実測図2	44
第26図 第3号竪穴住居出土土器実測図3	45
第27図 竪穴住居出土砥石・軽石実測図	46
第28図 第2・7号土坑出土土器実測図	47
第29図 第3・5号土坑出土土器実測図	48
第30図 第4号土坑出土土器実測図1	49
第31図 第4号土坑出土土器実測図2	50
第32図 第4号土坑出土土器実測図3	51
第33図 第4号土坑出土土器実測図4	52

第34图	第4号土坑出土土器实测图5	53
第35图	第8号土坑出土土器实测图1	54
第36图	第8号土坑出土土器实测图2	55
第37图	第9号土坑出土土器实测图1	56
第38图	第9号土坑出土土器实测图2	57
第39图	第11号土坑出土土器实测图	58
第40图	第11·24号土坑出土土器实测图	59
第41图	第22号土坑出土土器实测图1	60
第42图	第22号土坑出土土器实测图2	61
第43图	第22号土坑出土土器实测图3	62
第44图	第25号土坑出土土器实测图	63
第45图	第26号土坑出土土器实测图1	64
第46图	第26号土坑出土土器实测图2	65
第47图	第26号土坑出土土器实测图3	66
第48图	第27·29号土坑出土土器实测图	67
第49图	第28号土坑出土土器实测图1	68
第50图	第28号土坑出土土器实测图2	69
第51图	竹生野遺跡第2次調査平面图	73·74
第52图	旧石器時代石器A群(1)	77
第53图	旧石器時代石器A群(2)	78
第54图	旧石器時代石器B群(1)	79
第55图	旧石器時代石器B群(2)	80
第56图	旧石器時代石器B群(3)	81
第57图	旧石器時代石器B群平面分布图	82
第58图	第7号竖穴住居实测图	84
第59图	第7号竖穴住居出土遺物实测图	85
第60图	第12号土坑实测图	87
第61图	第12号土坑出土土器实测图	87
第62图	第67号土坑出土遺物实测图	88
第63图	第1号竖穴住居实测图	89
第64图	第1号竖穴住居出土土器实测图	90
第65图	第1号竖穴住居出土遺物实测图	91
第66图	第2号竖穴住居出土土器实测图	93
第67图	第5号竖穴住居出土土器实测图	94
第68图	第5号竖穴住居出土土器实测图	95
第69图	第6号竖穴住居实测图	96

第70图	第6号竖穴住居出土土器实测图1	97
第71图	第6号竖穴住居出土土器实测图2	98
第72图	第6号竖穴住居出土轻石实测图	99
第73图	第8号竖穴住居实测图	100
第74图	第8号竖穴住居出土土器实测图	101
第75图	第9号〔新〕竖穴住居实测图	103
第76图	第9号〔新〕·〔古〕竖穴住居出土土器实测图	105
第77图	第9号〔新〕竖穴住居出土土器实测图	106
第78图	第9号〔新〕竖穴住居出土遗物实测图	107
第79图	第9号〔古〕竖穴住居实测图	108
第80图	第10号竖穴住居实测图	109
第81图	第10号竖穴住居出土土器实测图	110
第82图	第11号竖穴住居实测图	112
第83图	第11号竖穴住居出土土器实测图1	114
第84图	第11号竖穴住居出土土器实测图2	115
第85图	第11号竖穴住居上層(第52号土坑)出土土器实测图1	116
第86图	第11号竖穴住居上層(第52号土坑)出土土器实测图2	117
第87图	第11号竖穴住居出土遗物实测图	118
第88图	第14号竖穴住居实测图	119
第89图	第14号竖穴住居出土土器实测图	120
第90图	第15号竖穴住居实测图	121
第91图	第15号竖穴住居出土遗物实测图	122
第92图	第16号竖穴住居出土土器实测图	123
第93图	第20号竖穴住居出土土器实测图	124
第94图	第21号竖穴住居实测图	124
第95图	第21号竖穴住居出土土器实测图1	125
第96图	第21号竖穴住居出土土器实测图2	126
第97图	第21号竖穴住居出土土器实测图3	127
第98图	第21号竖穴住居出土土器实测图4	128
第99图	第5号掘立柱建物实测图	129
第100图	第1号土坑实测图	129
第101图	第2·3号土坑实测图	130
第102图	第5号土坑实测图	130
第103图	第5号土坑出土遗物实测图	130
第104图	第11号土坑实测图	131
第105图	第11号土坑出土土器实测图	131

第106図	第13号土坑実測図	131
第107図	第26号土坑実測図	132
第108図	第26号土坑出土土器実測図	132
第109図	第50号土坑実測図	133
第110図	第56号土坑出土鉄器実測図	134
第111図	第58号土坑出土土器実測図	134
第112図	第59号土坑出土土器実測図	134
第113図	第7号溝出土土器実測図	135
第114図	包含層出土須恵器破片数分布図(1)	136
第115図	第1号掘立柱建物実測図	139
第116図	第3号掘立柱建物実測図	139
第117図	第2号掘立柱建物実測図	140
第118図	第4号掘立柱建物実測図	141
第119図	第5号掘立柱建物実測図	141
第120図	第4号土坑実測図	142
第121図	第6・7号土坑出土鉄器実測図	142
第122図	第6号土坑出土土器実測図	143
第123図	第9号土坑実測図	143
第124図	第10号土坑実測図	143
第125図	第25号土坑実測図	144
第126図	包含層出土須恵器破片数分布図(2)	144
第127図	第7号掘立柱建物実測図	145
第128図	第15号土坑実測図	146
第129図	第45号土坑実測図	146
第130図	第45号土坑出土土器実測図	146
第131図	第68号土坑実測図	147
第132図	第68号土坑出土土器実測図	147
第133図	塚実測図	149
第134図	土錘実測図	150
第135図	土錘の重量と孔径の相関図	150
第136図	第8号土坑出土土器実測図	151
第137図	第8号土坑実測図	151
第138図	行火実測図	152
第139図	包含層出土土器実測図1	153
第140図	包含層出土土器実測図2	154
第141図	包含層出土土器実測図3	155

第142図	包含層出土土器実測図 4	156
第143図	包含層出土土器実測図 5	157
第144図	ピット出土遺物実測図	157
第145図	包含層出土土器実測図 6	158
第146図	包含層出土土器実測図 7	159
第147図	包含層出土土器実測図 8	160
第148図	包含層出土土器実測図 9	161
第149図	包含層出土土器実測図10	162
第150図	包含層出土土器実測図11	163
第151図	包含層出土石製品実測図	164
第152図	南吉田葛山遺跡調査区割図	167
第153図	第 1 次調査区遺構配置図	169
第154図	第 7 号溝遺物出土状況平面実測図	171
第155図	第 4 調査区遺構配置図	171
第156図	第 1 調査区出土遺物実測図	172
第157図	第 2 調査区出土遺物実測図	173
第158図	第 3 調査区出土遺物実測図	175
第159図	第 4 調査区出土遺物実測図 1	177
第160図	第 4 調査区出土遺物実測図 2	178
第161図	第 4 調査区出土遺物実測図 3	179
第162図	末森山麓の旧石器時代遺跡	184
第163図	宿東山遺跡出土石器	185
第164図	宿向山遺跡出土石器	187
第165図	竹生野遺跡 B 群	192
第166図	大型土坑分布図	194
第167図	遺跡における大型土坑の位置 (縄文時代他)	196
第168図	大型土坑実測図 (縄文時代他)	197
第169図	大型土坑形態分類図 (縄文時代他)	203
第170図	大型土坑実測図 (弥生時代)	207
第171図	大型土坑形態分類図 (弥生時代)	211
第172図	新潟県下谷内遺跡の土坑と梯子	215
第173図	甕形土器変遷概念図 (I)	219・220
第174図	甕形土器変遷概念図 (II)	223・224
第175図	甕形土器変遷概念図 (III)	225・226
第176図	須恵器蓋坏の重ね焼き方法模式図	232
第177図	高松・押水窯跡群の分布	234

第178図	正友ヤチヤマ1・2号窯、冬野オオクボ1号窯採集須恵器	235
第179図	冬野オオクボ1号窯採集須恵器	236
第180図	加賀・能登の主要窯跡群と竹生野遺跡	237
第181図	第2次調査包含層出土須恵器の比率と時代	238
第182図	押水町周辺の地形図	243
第183図	能州末森城跡之図	246

表 目 次

	頁	
第1表	周辺遺跡地名表	3
第2表	土坑の層序一覧表1	38
第3表	土坑の層序一覧表2	39
第4表	出土地別石器点数表	72
第5表	石器一覧表	82・83
第6表	竹生野遺跡出土須恵器の産地分類	136
第7表	石川県内出土双孔円板一覧表	137
第8表	宿向山遺跡石器計測表	188
第9表	竹生野遺跡B群補遺資料計測表	192
第10表	大型土坑一覧表（縄文時代他）	198～201
第11表	各遺跡における大型土坑の類型（縄文時代他）	203
第12表	大型土坑一覧表（弥生時代）	204
第13表	各遺跡における大型土坑の類型（弥生時代）	208・209

図 版 目 次

巻頭図版 1	竹生野遺跡第 1 次調査	
巻頭図版 2	竹生野遺跡第 2 次調査	
巻頭図版 3	竹生野遺跡第 2 次調査	
巻頭図版 4	竹生野遺跡第 2 次調査	
図版 1	遺跡周辺の航空写真	
図版 2	竹生野遺跡航空写真	
図版 3	上 竹生野遺跡遠景（東から）	下 竹生野遺跡遠景（北から）
図版 4	竹生野遺跡第 1 次調査	
	上 調査前の遺跡（南から）	下 調査前の遺跡（北から）
図版 5	上 調査風景（北から）	下 調査風景（東から）
図版 6	上 第 1 号竪穴住居（北から）	下 第 2・3 号竪穴住居（北から）
図版 7	上 第 2・3 号竪穴住居と第 24 号土坑（東から）	下 第 2・3 号竪穴住居（西から）
図版 8	上 第 2～4 号土坑（南から）	下 第 2～4 号土坑（北から）
図版 9	上 第 2 号土坑	下 第 2 号土坑底面
図版 10	上 第 3 号土坑土器出土状況	下 第 3 号土坑
図版 11	上 第 4 号土坑土器出土状況	下 第 4 号土坑
図版 12	上 第 6 号土坑	下 第 6 号土坑（西から）
図版 13	上 第 7 号土坑	下 第 8 号土坑
図版 14	上 第 9 号土坑土器出土状況	下 第 9 号土坑
図版 15	上 第 11 号土坑（南から）	下 第 11 号土坑（西から）
図版 16	上 第 11 号土坑	下 第 11 号土坑
図版 17	上 第 22 号土坑土器出土状況（西から）	下 第 22・23 号土坑（東から）
図版 18	上 第 25 号土坑土器出土状況	下 第 25 号土坑
図版 19	上 第 24 号土坑の底面	下 第 28 号土坑（西から）
図版 20	上 第 26～29 号土坑（東から）	下 第 26～第 29 号土坑（南から）
図版 21	第 1・2 号竪穴住居出土遺物	
図版 22	第 3 号竪穴住居出土遺物	
図版 23	第 2・3・8 号土坑出土土器	
図版 24	第 4 号土坑出土土器 1	
図版 25	第 4 号土坑出土土器 2	
図版 26	第 7・9・11・22 号土坑出土土器	
図版 27	第 24・25・29 号土坑出土土器	
図版 28	第 26 号土坑出土土器	

- 図版29 第27・第28号土坑出土土器
- 図版30 竹生野遺跡第2次調査
航空写真（J～L－6・7区周辺）
- 図版31 航空写真（C～D－7・8区周辺）
- 図版32 航空写真（G～H－6・7区周辺）
- 図版33 航空写真（I～J－5・6区周辺）
- 図版34 航空写真（N～O－4・5区周辺）
- 図版35 航空写真（L～M－4・5区周辺）
- 図版36 航空写真（N～O－5・6区周辺）
- 図版37 航空写真（L～M－5・6区周辺）
- 図版38 航空写真（Q～R－4・5区周辺）
- 図版39 航空写真（O～P－4・5区周辺）
- 図版40 上 調査前風景（北から） 下 表土除去作業（北から）
- 図版41 上 作業風景（北から） 下 前期調査区完掘風景（北から）
- 図版42 上 第1号竪穴住居遺物出土状況（東から） 下 第1号竪穴住居（東から）
- 図版43 上 第2号竪穴住居（東から） 下 第3・4号竪穴住居（北から）
- 図版44 上 第5号竪穴住居（北から） 下 第6号竪穴住居（北から）
- 図版45 上 第6号竪穴住居土坑1～3（西から） 下 第7号竪穴住居（北から）
- 図版46 上 第8号竪穴住居（南から） 下 第8号竪穴住居土坑1・2（東から）
- 図版47 上 第9号〔新〕竪穴住居（東から） 下 第9号〔古〕竪穴住居（東から）
- 図版48 上 第10号竪穴住居（東から） 下 第11号竪穴住居（東から）
- 図版49 上 第14号竪穴住居（西から） 下 第20号竪穴住居（南から）
- 図版50 上 第21号竪穴住居遺物出土状況（北から） 下 第21号竪穴住居（南から）
- 図版51 上 第1号土坑（南から） 下 第2・3号土坑（北から）
- 図版52 上 第4号土坑（西から） 下 第5号土坑（北から）
- 図版53 上 第8号土坑（北から） 下 第10号土坑（北から）
- 図版54 上 第11号土坑（西から） 下 第12号土坑（東から）
- 図版55 上 第26号土坑（東から） 下 第27号土坑（西から）
- 図版56 上 第45号土坑（西から） 下 第68号土坑（南から）
- 図版57 上 塚（西から） 下 塚中心部の土坑（南から）
- 図版58 石器類(1)
- 図版59 石器類(2)
- 図版60 第1号竪穴住居出土遺物
- 図版61 第2・5・6号竪穴住居出土土器
- 図版62 第6・7号竪穴住居出土遺物
- 図版63 第7・9号竪穴住居出土土器、第8号竪穴住居出土遺物

- 図版64 第9号竪穴住居出土土器
 図版65 第9号竪穴住居出土石器、第10・11号竪穴住居出土土器
 図版66 第11号竪穴住居出土遺物
 図版67 第12号竪穴住居（第25号土坑）出土土器、第13号竪穴住居出土土器
 図版68 第14号竪穴住居出土遺物、第15号竪穴住居出土土器
 図版69 第15号竪穴住居出土遺物、第16・20・21号竪穴住居出土土器
 図版70 第21号竪穴住居出土土器
 図版71 第21号竪穴住居出土土器、第6・11・12号土坑出土土器
 図版72 第26・45・48・50・59・67号土坑出土土器、第56号土坑出土鉄製品
 図版73 第68号土坑出土土器、ピット130出土漆器
 図版74 包含層出土土器、包含層出土古墳時代遺物
 図版75 包含層出土土錘、包含層出土中世遺物
 図版76 南吉田葛山遺跡
 上 遺跡遠景（北・竹生野台地より） 下 第1調査区遺構検出状況
 図版77 上 第1調査区遺構完掘状況（南より） 下 第1号溝、第3・4号溝
 図版78 上 第2・8号溝 下 第6・7号溝
 図版79 上 第9号溝（第4調査区） 下 遺物出土状況
 図版80 第1・第3・第4調査区出土遺物
 図版81 第1・第3・第4調査区出土遺物
 図版82 第2・第4調査区出土遺物
 図版83 笹塔婆
 図版84 上 空中写真 下 調査参加者

例 言

1. 本書は石川県羽咋郡押水町竹生野地内に所在する竹生野遺跡および同町南吉田地内に所在する南吉田葛山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は一般国道159号線（押水バイパス）改築工事に係るもので、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが昭和54年・56年・57年に実施した。
3. 各遺跡の調査期間、面積および担当者は次のとおりである。
 竹生野遺跡第1次調査 昭和54年8月2日～昭和54年11月5日、昭和55年3月10日～昭和55年3月20日 面積約2,000㎡
 石川県立埋蔵文化財センター 主事 小嶋芳孝・河村好光（現県立金沢向陽高校教諭）
 嘱託 三浦純夫（現主事）
 竹生野遺跡第2次調査 昭和57年5月18日～昭和57年12月27日 面積約8,000㎡
 石川県立埋蔵文化財センター 主事 越坂一也 嘱託 土上正男（昭和58年退職）
 南吉田葛山遺跡 昭和56年6月16日～昭和56年10月31日 面積約3,000㎡
 石川県立埋蔵文化財センター 主事 浜野伸雄（現県立町野高校教諭）
4. 本遺跡の発掘調査と報告書刊行にあたっては次の方々および諸機関のご協力とご教示を得た。記して謝意を表す。
 岡本 晃、鮎井幸二、河原純之、桜井甚一、滋井 真、清水宣英、浜岡賢太郎、平口哲夫、東四柳史明、藤 則雄、村井一郎、村井伸行、村上吉郎、四柳嘉章、押水町教育委員会
 同町水道課、同町森林組合、同町中央公民館、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所、能登文化財保護連絡協議会、松井畜産（松井久雄）、アジア航測株式会社
5. 本遺跡の出土品整理作業については社団法人石川県埋蔵文化財整理協会に委託した。
6. 本書の執筆は次のように分担し、三浦との協議をもとに越坂が編集した。
 第1章 越坂、宮本直哉（石川考古学研究会会員） 第2章 三浦、越坂、浜野
 第3章 三浦、浜野 第4章 越坂、松山和彦、木立雅朗 第5章 浜野
 第6章 松山、三浦、浜野、木立、宮本
7. 本書の遺構・遺物挿図の表示は次のとおりである。
 （1）挿図の縮尺は図内に表示した。（2）方位はすべて磁北を示す。（3）水平基準線は海拔高で表示した。（4）遺物図版中のアミは赤彩・内面黒色等の調整を表し、その都度文中で説明する。（5）写真図版中の番号は挿図内番号と符合する。
8. 本調査で出土した遺物をはじめ遺構・遺物の実測図や写真等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

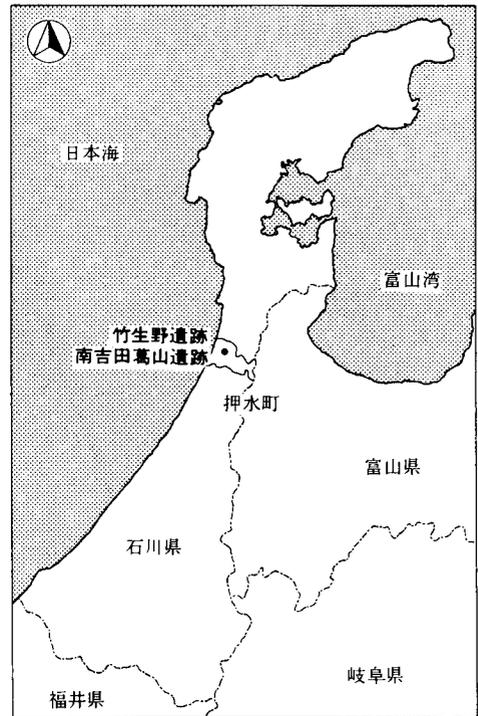
第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

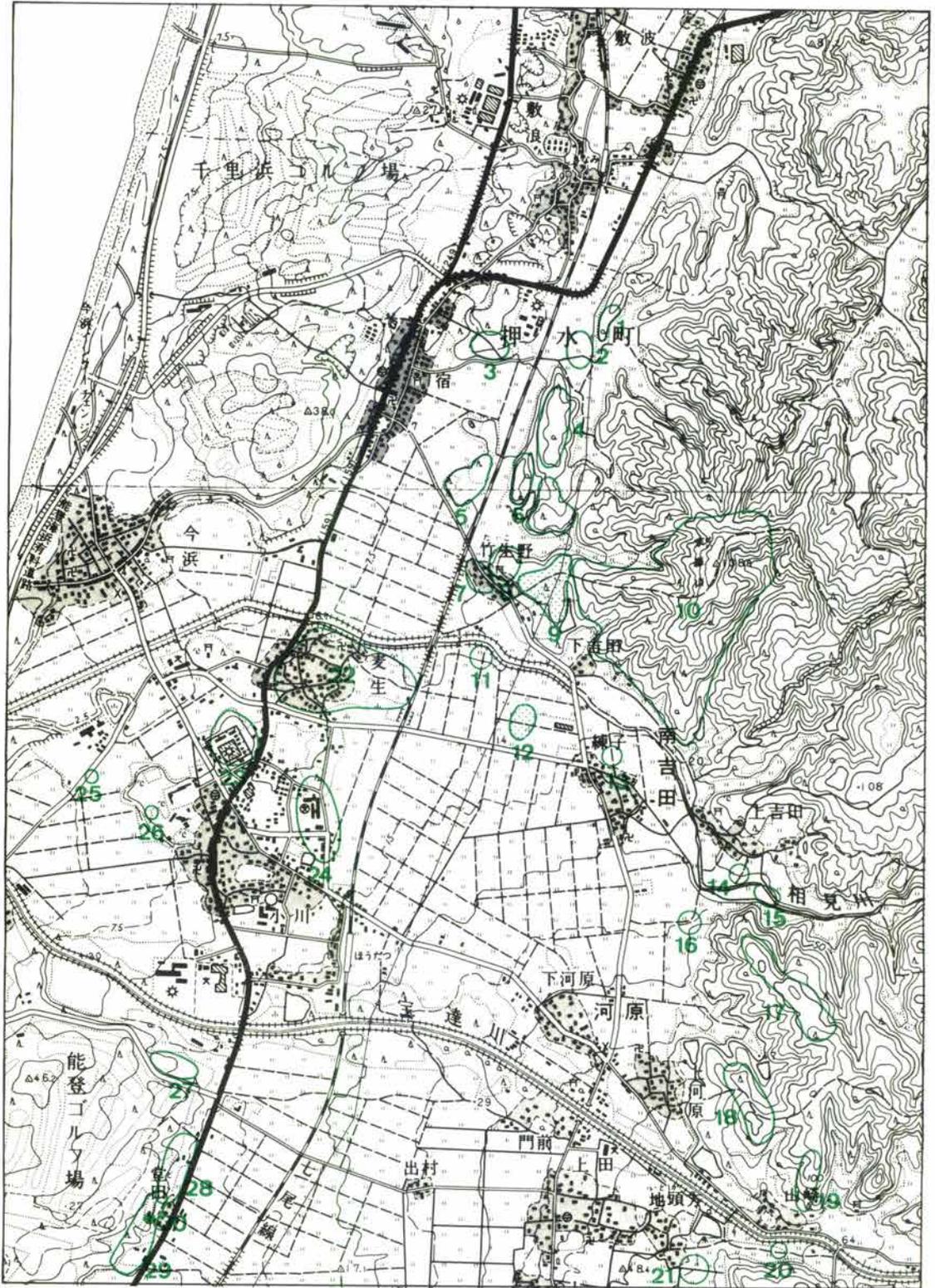
竹生野遺跡は、石川県羽咋郡押水町竹生野に、南吉田葛山遺跡は同町南吉田に位置する。押水町は日本海に大きく突出する能登半島の基部に位置し、東側は北東方向に伸びる石動・宝達山地を挟んで富山県と接し、西は日本海に面する。南北に長い石川県のほぼ中央部に位置する同町は、古来より能登と加賀を結ぶ交通の要所であり、本遺跡の立地を考えると重要である。現在町の総面積は53.73km²、人口総数9,202人(昭和60年10月1日現在)を数え、農業と繊維工業を基幹産業とする。

押水町の東部を占める能登半島の最高峰宝達山^{ほうだつさん}は標高637.4mの死火山で、花崗岩・飛驒変成岩類よりなる。薬草・金銀・石灰・蛍石をはじめとする多くの産物で知られることから、古来、宝を産する山として宝達山と呼ばれる。金鉱は天正年間から慶長年間に最盛期を迎え、諸国から坑夫が集まって多量の金を採掘した。現在でも坑道跡が残っており当時の繁栄を偲ばせる。この宝達山系に源を発する宝達・前田・相見^{あいみ}・大海川^{おおみ}の4河川は山麓部で扇状地を形成し、さらに沖積低地(押水低地)を西流、海岸部の帯状に伸びる砂丘を切って日本海に注ぐ。特に宝達川は県下でも有数の天井川として知られる。これらの河川は流長が16kmある大海川を除きいずれも5～6kmにすぎず急流が多い。そのため古くから水害に悩まされてきたことが文献や土馬などの考古資料からも窺い知ることができる。⁽¹⁾

竹生野遺跡は、宝達山系の北西端にある末森山(標高138m)の派生丘陵上に位置し、標高は32～38mを測る。末森山には末森の合戦で名高い末森城跡があり町の史跡に指定されている。このため土地の通称名にオオテモン、ササラキド、シロノシタ、サムライヤシキ、フルヤシキといった城に関する地名が多く残っている⁽²⁾(第3図)。本遺跡の小字名はバンネンジ(万念寺)、またはバンノジ(番野路)と呼ばれるが、いずれも文献等にはみられない。しかし竹生野遺跡について興味深い昔話が残っている。昔、竹生野の弥兵衛という人が、「この畑を掘ると金が出る。」という夢を毎晩みるので、ある日、この畑を掘り起こすと大きな金の塊まりが出てきた。それは末森城があった頃にこのあたりに屋敷をかまえて住んでいた侍が、おそらく軍資金か家宝として蓄えていたもので、当時、この場所をバンノジと呼び、一面に茶が植えられていたという話である[押水町教育委員会編 1982]。遺跡の西の丘陵(天皇山)には全長約56mの前方後円墳を含む天皇山



第1図 遺跡の位置



第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	宿エゾエ山中世墳墓群	中世	17	南吉田向山中世墳墓群	中世
2	宿エゾエ遺跡	奈良・平安	18	河原三つ子塚古墳群	古墳
3	宿ホシバ山遺跡	不詳	19	山崎横穴群	古墳
4	宿向山遺跡	旧石器～近世	20	上田永畑遺跡	不詳
5	竹生野トリゲヤマ遺跡	弥生・平安	21	上田地頭方遺跡	縄文
6	宿東山遺跡	旧石器～奈良	22	麦生五枚田遺跡	不詳
7	竹生野フルヤシキ遺跡	古墳末～平安、室町近世		麦生てらお遺跡	〃
				麦生野ごさばたけ遺跡	〃
8	竹生野天皇山古墳群	古墳	23	今浜新保山遺跡	縄文
9	竹生野遺跡	旧石器～近世	24	今浜墓田山遺跡	奈良～平安
10	末森城跡	中世	25	今浜A遺跡	不詳
11	麦生かわだ遺跡	不詳	26	今浜B遺跡	〃
12	南吉田葛山遺跡	〃	27	小川A遺跡	〃
13	南吉田穴田遺跡	〃	28	堂田遺跡	奈良～平安
14	南吉田古屋敷遺跡	〃	29	上田出西山遺跡	縄文～平安
15	南吉田堂の庭遺跡	〃	30	米出ドダヤマ中世墳墓群	中世
16	南吉田堂の後遺跡	〃			

古墳群が存在し、後円部には豊受比咩命・竹生姫命を祭る神明社が鎮座する。竹生野の地名の由来については、この古墳が垂仁天皇の皇女竹生姫の陵墓であるとする説、かつてこの地が竹のみ生える荒野であったとする説など諸説ある。また遺跡の南には相見川が流れ湿田水稻地帯を形成する。一方、南吉田葛山遺跡は竹生野遺跡から南へ約800m離れた、相見川左岸の低地に位置し、標高は約13mを測る。(越坂)

第2節 歴史的環境

押水町の考古学研究的歴史は古く、すでに明治20年代には北陸人類学会のメンバーを中心に遺物採集活動が行われ、その成果は会誌である北陸人類学会雑誌に発表されている〔宇野富良 1896、須藤求馬 1898他〕。昭和に入ると地元出身の秋田喜一（1895～1974）、嵯峨井亮（1910～1973）両氏を中心とする石川考古学研究会のメンバーが精力的に遺物採集、遺跡踏査、発掘調査を実施するなど当該地の歴史解明に貢献した。特に秋田氏はこれらの研究成果を中央の学会誌に投稿されるなど押水町および周辺の遺跡や遺物を全国の考古学研究者に紹介された業績は大きく、その著述は膨大な量にのぼる。一方、嵯峨井氏が収集された考古資料は昭和60年に遺族から同町に寄贈され、現在嵯峨井コレクションとして保管されている。以下、時代別に周辺の遺跡と歴史環境について述べてみたい。

旧石器時代 石川県内においてこれまで最も立ち遅れていた分野の一つである旧石器時代の研究も近年若手研究者の台頭により盛んになりつつあり、現在では遺跡の数も20を超える⁽³⁾。押水町地内では御館遺跡〔秋田 1964〕、竹生野遺跡〔越坂 1983〕、宿向山遺跡〔藤田・松山他 1987〕、

宿東山遺跡〔北野・本田他 1987〕、免田一本松遺跡〔松山 1987〕の5遺跡が知られ、いずれも宝達山麓の沖積低地に張りだした洪積台地上に立地する（御館遺跡は低地）。なかでも昭和35年の耕地整理中にナイフ・ブレイドが発見された御館遺跡は県内で最初に発見された旧石器時代の遺跡として学史的にも重要である。遺物の点数では50点近くにも達するが、まだユニットとして検出された例はなく実態の解明は今後の調査成果に待たれる。

縄文時代 縄文時代の遺跡の多くは宝達山麓の台地上に分布する。早期の遺跡では標高およそ340mの宝達山中で発見された木の実谷遺跡〔秋田 1969他〕が知られ、早期中葉に位置付けられている。また末葉の土器としては昭和61年に石川考古学研究会会員の津田耕吉氏によって押型文土器が耕地整理中の高松町野寺地内で発見されている。採集地の標高はおよそ80mを測る。前期の遺跡は竹生野遺跡の北の丘陵上にある宿向山遺跡、宿東山遺跡の2遺跡で前期初頭の佐波式期に比定される。また木の実谷遺跡の近くのコブシガセゴ遺跡〔秋田 1937〕では繊維土器が検出されている。中期になると遺跡の数も増え、砂丘地にも分布が拡大する。著明な遺跡としては東間坂手山遺跡〔嵯峨井・村井・松永 1965〕、上田地頭方遺跡〔秋田 1954〕がある。東間坂手山遺跡は前期末から中期前葉の遺跡で中期初頭の住居跡が検出された。また宿東山遺跡では中期初頭と中期末の遺物と中期のものと思われる20基を越す落し穴群が検出されている。この他、紺屋町ほんでん遺跡〔嵯峨井・村井 1969、1970〕では中期中葉から後期初頭にかけての遺物が出土している。後・晩期になると遺跡の数は再び減少する。後期の遺跡では上田うまばち遺跡〔高堀・西野 1983〕が、晩期の遺跡では東間たけのこし遺跡〔4〕が知られる。

弥生時代 弥生時代に入ると遺跡は海岸部に近い内列砂丘上に分布する。中期の遺跡では竹生野遺跡の北西600mにある竹生野鳥毛山遺跡〔谷・西野 1967〕と北川尻おさの山遺跡〔村井 1966〕が知られる。また昭和60年から61年にかけて高松町教育委員会によって調査された同町中沼C遺跡では該期の集落跡が確認されている。後期後半に入ると遺跡の数は増え、本遺跡をはじめ宿向山遺跡、宿東山遺跡が末森山の派生丘陵上に、上田出西山遺跡〔三浦 1980〕が内列砂丘上に位置する。水田跡は今のところ検出されていないが、今後集落周辺の低地部で発見される可能性が考えられる。

古墳時代 古墳時代の集落は弥生時代終末の遺跡の分布にほぼ合致する。本遺跡の周辺では宿向山遺跡、宿東山遺跡がある。古墳群は、前期に宿東山古墳群、中期に河原三つ子塚古墳群がみられる。特に宿東山1号墳からは方格規矩鏡の完形品が出土し話題となった。それに続く中期末から後期には竹生野天皇山古墳群、後期末には山崎横穴群が存在する。一方これらに対峙する冬野・森本の南側丘陵にも古墳群がみられる。前期から中期に冬野（森本）大塚古墳群〔橋本 1966〕、冬野小塚古墳群がある。冬野大塚古墳は径約38mで埴輪列を伴う。後期には横穴式石室をもつ正友古墳群、東間宝殿山古墳群〔秋田 1935〕、後期末には坪山横穴群が存在する。一方、当該地における須恵器生産の開始は後期末の古墳群の築造とほぼ同じ7世紀代で、前田川流域の紺屋町ムカイノ窯跡が最も古い形態をもつ〔川畑 1987〕。窯跡群は前田川流域の紺屋町古窯跡群と大海川流域の八野〔折戸 1985〕・黒川〔吉岡 1965〕・箕打〔村井・平田 1976〕などの古窯跡群が存在する。

（越坂）



第3図 押水バイパス関連遺跡と周辺の小字名 (S=1/6,000 アミは発掘調査区)

奈良・平安時代 越前国の北辺であった能登半島に能登国が置かれるのは、養老2年(718)である。この後天平13年(741)には廃止されて越中国に属するものの、天平勝宝9年(757)には再び設置された。律令制下の押水町は、『和名抄』にみえる羽咋郡八郷の大海郷と郷名は不明であるが別の郷に属したものとされる⁽⁵⁾。大海郷は南部の大海川・前田川流域に、もう一つの郷は相見川流域から志雄町南部にかけての地域に該当する。『延喜式』によれば、両地域には相見神社、手速比咩神社、瀬戸比古神社が官社としてみえる。また加賀から能登国府への駅路も当該地域を通過しているが、駅は設置されていない。

当該期の遺跡は台地上のみならず砂丘地に分布を広げ、8～11世紀を通して継続的に集落が営まれている。また、この時期には相見川と宝達川に挟まれた砂丘地上(麦生・小川)でも遺跡が増加している。さらに旧大海瀉の縁辺部にも遺跡のまとまりが見い出せる。中でも北川尻ホシバ山遺跡は、8世紀前～中葉の24軒の堅穴住居と2棟の掘立柱建物が検出されており、律令村落の一類型として興味深い。この他にも古墳時代末から引き続いて高松・押水窯跡群が営まれる。この窯跡群は、8世紀前～中葉にかけて北部から南部への移動を挟みつつ、10世紀中葉頃までの長期にわたる継続的操業を行っている。

中世 承久3年(1221)能登国衙作成の大田文をみると、保延2年(1136)に大泉^{おおしみず}荘が200町歩の荘園として立券されている。現在の押水町から高松町北部にかけての羽咋郡内最大規模の荘園である。この大泉荘については詳細を知り得ないが、鎌倉時代初めには中院流の家領としてみえ、正安2年(1300)には堀川守忠領として確認できる。この後、建武2年(1335)に西園寺公重領としてみえる。以後、「大泉」との記載は文献史料から消え、天文8年(1539)に始めて「押水」の地名がみえる。これは「おおしみず」が訛ったものといわれている。

現在確認されている中世～近世初頭の遺跡は極めて少数であり、末森城跡と御館遺跡(館跡)の他に墳墓が数箇所確認されているにすぎない。中世墳墓は、宿エゾエ山中世墳墓群、南吉田向山中世墳墓群、米出ドダヤマ中世墓がある。本遺跡にも火葬墓が検出されており、今後当該地の墓制・葬制をさぐる貴重な資料の一つとなろう。御館遺跡は岡部六弥太忠澄の居館と伝えられてきたもので、現在も二重長方形の土塁や空堀が旧状を留めている。また末森城跡は佐々成政と前田利家との間で戦われた天正12年(1584)の末森合戦の舞台となったところである。標高138mの末森山にあって、加賀・能登・越中の三国の国境に近接する軍事上の要衝に立地する山城である。竹生野には大手口、南吉田には吉田口があり、本遺跡近辺の小字名にもこの城との関わりを示すものが多くある(第3図)。末森城については昭和60年度より押水町教育委員会が測量・試掘調査を行っており、その成果に期待したい。この他、畠山氏の一向宗禁制によって加賀国河北郡木越に移転した押水光専寺が、押水町小川に所在していたことが知られている。(宮本)

註

- (1) 土馬は水霊信仰に関する遺物と考えられ、現在、石川県内では16遺跡から30点におよぶ土馬の出土例が知られている〔田嶋明人・越坂一也他『永町ガマノマガリ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1987〕。窯跡を除くこれらの遺跡の大半は、水害の多い河川を臨む台地等で検出されている。このうち押水町では堂田遺跡(宝達川)と免田一本松遺跡(前田川)の2遺跡から須恵質の土馬が1点ずつ出土している。
- (2) 竹生野遺跡周辺の小字名については押水町教育委員会社会教育課の村井伸行氏から御教示をいただいた。なお同氏は、南吉田葛山遺跡の調査では石川県立埋蔵文化財センターの長期研修生として、また竹生野遺跡第2次調査では押水町教育委員会職員として発掘調査に多大な協力を得た。心から感謝致します。
- (3) 石川県立埋蔵文化財センター職員本田秀生、松山和彦両氏の教示による。
- (4) 押水町東間地内、前田川の右岸に位置する晩期前半の遺跡で、昭和36年に嵯峨井亮氏によって遺物が採集された。現在遺物は嵯峨井コレクションとして押水町教育委員会に保管されている。
- (5) 『能登志徴』等では高家郷とも言うが確証はない。



竹生野遺跡と末森山

第2章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

羽咋郡押水町を貫通する一般国道159号の交通渋滞は近年著しく、これを解消すべく、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所によって事業化がはかられたのは昭和48年であった。本書に収載した竹生野遺跡および南吉田葛山遺跡の発掘調査はこれを契機とするものである。押水バイパスは羽咋郡押水町宿から同町免田にいたる延長6.72km、幅員17mの道路である。

押水バイパスにかかる埋蔵文化財の分布調査・発掘調査等の協議の経過は、昭和61年度に刊行された『宿東山遺跡』『宿向山遺跡』に詳しい。ここでは、両書に依りながら、収載遺跡にかかる協議の経過を簡単に追ってみたい。

昭和54年1月・2月 石川県教育委員会文化財保護課が路線内の分布調査を実施。

昭和54年6月 石川県立埋蔵文化財センターが路線内の試掘調査を実施し、竹生野遺跡・南吉田葛山遺跡を確認。

昭和54年8月 竹生野遺跡第1次調査に着手。

昭和55年3月 竹生野遺跡第1次調査を終了。

昭和56年6月 南吉田葛山遺跡の調査に着手。

昭和56年10月 南吉田葛山遺跡の調査終了。

昭和57年6月 竹生野遺跡第2次調査に着手。

昭和57年12月 竹生野遺跡第2次調査終了。

押水バイパスにかかる埋蔵文化財調査は、このあと宿向山遺跡、宿東山遺跡、冬野遺跡を経て免田一本松遺跡ですべての現地調査を昭和61年度で終了した。

本書収載の2遺跡については、現地調査終了後遺物整理に着手し、昭和62年度の南吉田葛山遺跡の整理をもって終了している。遺物整理は社団法人石川県埋蔵文化財整理協会に委託した。

(三浦)

第2節 調査の経過

1 竹生野遺跡第1次調査

昭和54年8月2日に調査を開始し同55年3月20日に終了している。調査面積は2,000㎡である。遺跡は土取りにより西側が大きくえぐりとられており、台地上も50cm以上削平された状態にあり、遺物の散乱が見られた。このため表土の除去は必要なく、直ちに遺構検出に着手した。遺構は、予想に反して、大型の円筒形土坑が多く、径、深さとも2mをこえるものもあり、掘り下げに相当の時間を要した。作業員の人数が少なく全員が初めての発掘調査ということもあり、何かと試練の多い現場ではあった。ともあれ、8年間にわたる押水バイパス関係の埋蔵文化財調査が本遺跡をもって始まったのである。

(三浦)

2 竹生野遺跡第2次調査

日誌抄

5・18(火)晴 調査区内の樹木伐採作業開始。現場小屋建て上げ。

5・20(木)雨 発掘機材搬入。

5・22(土)晴 谷鞍部および調査区西南端の遺跡の広がりを確認するため9本のトレンチを設定。除草後、第1号トレンチより順次掘り下げ。

6・7(月)晴 杭打ち作業開始。旧林道を境とし南側を前期調査区、北側を後期調査区とする。台地部分の除草作業開始。谷鞍部の第3～9号トレンチから多量の遺物が出土したため調査対象区とすることを決定。重機による表土除去作業開始(～6・14)。

6・8(火)晴 台地部分の調査区東南端E・F-4区より北に向かって表土除去・遺構検出作業開始(～6・15)。

6・12(土)晴 J-5区で第1号竪穴住居検出。谷鞍部の杭打ち作業。

6・16(水)晴 谷鞍部をF-5～7区から北に向かって表土除去・遺構検出作業開始(～7・17)。

6・18(金)曇/晴 L-8区より石鏃、K-8区より石匙が出土し、縄文時代の遺跡の存在が期待される。L-8区より滑石製の有孔円板が出土。

6・25(金)晴 I-7区より土錘が多量に出土。

6・30(水)曇 I-7区より蛤刃形磨製石斧出土。能登文化財連絡協議会一行来跡。

7・5(月)晴 遺構検出作業と並行しながら遺構掘り下げ作業開始。I-7区、第4号土坑掘り下げ(～7・

14)。

7・17(土)曇 I-6区、第5号土坑掘り下げ(～7・24)。レベル移動。

7・19(月)曇 H・G-5・6区で第1～3号掘立柱建物を検出。いずれも同じ方位(東西)をさす。また遺構の周辺より8世紀後半から9世紀代の須恵器・土師器片が多量に出土。

7・21(水)晴 F-4区、第1～3号土坑掘り下げ。

7・23(金)晴 L-6区より鉄砲玉出土。末森合戦の遺物と思われる。H-5区、第8号土坑掘り下げ(～8・7)。

7・27(火)晴 埋蔵文化財センター運営委員会一行来跡。本日より国学院大学学生長谷川孝浩・小久保光浩・木本雅康君の3名が参加(～8・20)。

7・29(木)曇/晴 D-7区、第11～13号土坑(円筒土坑)掘り下げ。第1次調査で検出された土坑群の続きと思われる。

7・31(土)曇 K-7区、ピット-130より底部外面に「吉」銘のある漆器碗出土。

8・3(火)曇 J-5区、第1号竪穴住居掘り下げ(～8・30)。国学院大学大学院生清水宣義氏が調査に参加(～8・5)。

8・4(水)雨/晴 第1号竪穴住居より管玉出土。H-5区、第8号土坑掘り下げ(～8・20)。

8・5(木)晴 第1～3号掘立柱建物柱穴掘り下げ。金沢女子短期大学教授清水宣英氏来跡。

8・10(火)晴 I・J-4区、第2号竪穴住居掘り下げ(～8・20)。能登文化財連絡協議会一行約90名来跡。



試掘調査風景



第1号竪穴住居調査風景

- 8・22(日)曇 現地説明会
- 8・26(木)晴 31日の航空測量に備えて準備作業に入る。
- 8・31(火)晴 午前11時頃より航空測量開始。午後は遺構の個別写真撮影。
- 9・6(月)曇 本日より後期調査区の調査開始。除草作業。午後より前期調査区の工事開始。自分が掘った遺跡が破壊されるのを目のあたりに見るのは辛いものである。
- 9・7(火)晴 重機による表土除去作業開始(～9・10)。
- 9・8(水)晴 遺構検出作業開始(～10・2)。
- 9・10(金)曇/雨 M・L-4・5区で第5・6号堅穴住居検出。
- 9・24(金)曇/雨 重機による廃土処理作業開始(～9・27)。N-5区で、第7号堅穴住居検出。
- 9・28(火)曇/晴 R-4・5区で、第8号堅穴住居検出。
- 9・29(水)晴 本日より遺構検出作業と並行しながら遺構を掘り始める。
- 10・2(土)曇 L-4区、第6号堅穴住居掘り下げ(～10・22)。O-4区、第21号堅穴住居掘り下げ(～10・8)。
- 10・4(月)晴 前方後円墳状マウンドの除草・表土除去作業開始(～10・19)。同マウンド杭打ち作業。
- 10・13(水)晴 文化庁主任文化財調査官河原純之氏、石川考古学研究会会長櫻井基一氏、県教育委員会文化課小嶋孝孝氏来跡。
- 10・15(金)曇 N・O-6区、第10号堅穴住居掘り

下げ(～11・10)。

10・16(土)晴 前方後円墳状マウンドの後円部分で集石を伴う土坑を検出。中世以降の塚の可能性が高まる。

10・20(水)曇 N-5・6区、第9号(新)堅穴住居掘り下げ(～11・10)。紡錘車、勾玉出土。

10・22(金)晴 M・N-6区、第11号堅穴住居掘り下げ(～12・14)。

11・4(水)晴 第9号(新)堅穴住居より管玉出土。

11・12(金)曇/雨 N-2区、第14号堅穴住居掘り下げ(～11・27)。2回目の航空測量を26・27日頃に設定する。

11・15(月)晴 R-4・5区、第8号堅穴住居掘り下げ(～12・7)。

11・28(日)晴 先週は雨の日が多く仕事は一進一退をきわめる。航空測量も明日に延期となる。航空測量に向けて最後の追い込み。

11・29(月)晴/曇 午前11時より第2回の航空測量を実施。午後は遺構の個別写真の撮影。

12・2(木)曇/雨 航空測量終了後雨が続く。雨の中、第9号(新)堅穴住居床面で検出された第9号(古)堅穴住居を掘り下げ(～12・14)。

12・8(水)晴/曇 M-4区、第68号土坑掘り下げ(～12・13)。遺構壁面はかなり加熱を受けており、土師皿や加熱を受けて二次的に変形したと思われる甕が出土した。火葬墓の可能性が考えられる。

12・9(木)曇 第11号堅穴住居より旧石器時代の石刃が出土。これまでに検出された剥片類も旧石器時代の可能性が高まった。

12・14(火)曇/雨 第9号(古)・第11号堅穴住居



第11号土坑調査風景



第9号〔新〕堅穴住居出土状況

精査。遺構の補足測量を残して調査はほぼ終了。発掘機材撤収。

12・20（月）雨 降りしきる冷たい雨の中での遺構補

足実測終了。本日をもって竹生野遺跡第2次発掘調査（現地調査）を終了する。（越坂）

竹生野遺跡第1次発掘調査関係者

調査員 垣田修児 高田秀樹 滝下隆之 津田耕吉 土肥富士夫 浜野伸雄 東 泰三
福島正実 本田秀生 宮下栄仁 谷内碩央（以上石川考古学研究会会員）
宮島良次（近畿大学学生） 吉田敬次（京都産業大学学生）

作業員 山田三治 山田菊美 山田豊作 山田正治 湯上健一 湯上京子 米沢弘幸
米沢勇次郎（以上竹生野） 桶谷浅吉 中村元二 南谷輝明 山下伝一
山本はる 山本ふみ子（以上北川尻） 大野文作 岡本勇平 田畑正二
辻本栄作 松原栄次郎（以上宿） 定免信次郎 原田京子（以上麦生）
飯田あさの 高津八千代（以上今浜） 田中祐子（南吉田）

竹生野遺跡第2次発掘調査関係者

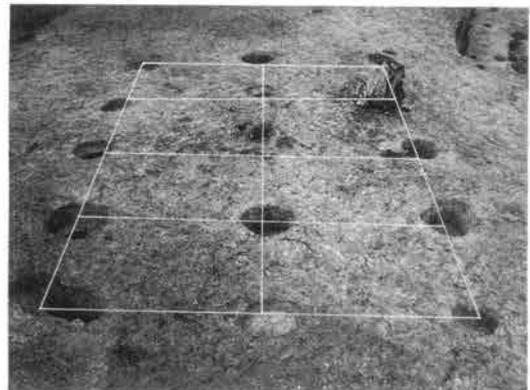
調査協力者 村井一郎（石川考古学研究会幹事） 村井伸行（押水町教委） 石橋克美（志賀町教委、センター長期研修生）

調査員 宮下栄仁 市堀元一（以上センター調査員） 清水宣義（国学院大学大学院生）
長谷川孝浩 小久保光浩 木本雅康（以上国学院大学学生）

作業員 稲田きくい 今井照美 山田きのえ 山田キヨイ 山田三治 山田豊作
山田正治 米沢あやの 米沢敦史 米沢和雄 米沢信夫 米沢外美子（以上竹



第21号竪穴住居 遺物出土状況



第7号掘立柱建物

生野) 甘池ふさ子 荒井とみ子 荒井礼子 上田元美 柴田君子 田中トキ
 谷口芳子 中村のぶ子 中森君子 藤島ときの 本田松子 本多 道
 松井かおる 松井静江 山口綾子 山口春野(以上南吉田) 定免きよ子
 定免国子 定免作二 定免信次郎 定免たきの 定免忠作 定免みゆき
 瀬戸政子 田畑 寿 原田京子 原田吉一 松田朗夫 松田外行 松田邦次
 (以上麦生) 角見きよい 小南広志 小南燐子 仙次みさお(以上宝達)
 船崎貞子 松浦ちよ(以上上田) 岡田乃ぶ 岡本 実 渋谷とし子
 馬場恒裕 松原栄次郎 松本葉子(以上宿) 上牧千代乃 上本光子
 上本よし子 作本ふみ子(以上門前) 岡本 徹(山崎) 田村良博
 中村俊幸(以上志雄町荻谷) 倉辺昌樹(志雄町敷波) 中橋ふみ子(志雄町
 柳瀬)

竹生野遺跡遺物整理作業等関係者

社団法人石川県埋蔵文化財整理協会 浅野豊子 小谷紀美子 小林直子 小屋玲子 新谷由子
 辻森由美子 馬場正子 松田智恵子 山岸康子 横山そのみ

作 業 員 宮本直哉(石川考古学研究会会員) 宮崎正裕 谷口宗治(以上奈良大学学生)

協 力 者 安宅 務 広岡吉紀(以上センター調査員)

3 南吉田葛山遺跡

日誌抄

- 6・18(木)晴 建設省との現地打合せで調査方法及び作業手順等を確認する。
- 6・19(金)晴 本日より現地調査開始。バックホーによる表土除去作業を行う。プレハブ設置。発掘機材搬入。
- 6・24(水)晴 本日より作業員による発掘開始。第1調査区より順次作業を進める。
- 7・6(月)晴 第1調査区、砂層面の精査。砂層面直上から漆器碗出土。
- 7・8(水)晴 第2調査区、砂層面までの掘り下げ作業。
- 7・16(木)曇/晴 第1調査区に地山確認のためのトレンチを設定し、掘り始める。併行して第2調査区でも地山確認のためのトレンチを設定する。
- 7・21(火)晴 本日午後、宝達小学校6年生が見学のために来跡。第3調査区で確認した包含層発掘。
- 8・1(土)晴 第1調査区に設定したトレンチで地山面確認。同時に南北にのびる溝状遺構を検出。
- 8・3(月)晴 第1調査区での遺構面確認によって、トレンチを拡張し、面的な調査を開始。
- 8・24(月)晴 第1調査区の拡張により、新に大溝を含む4条の溝を検出。引き続き遺構検出作業継続。第3調査区では一部を除いて地山面までの掘り下げ完了。遺構等は検出されず。
- 8・31(月)晴 第1調査区での検出遺構の発掘開始。
- 9・5(土)晴 第1調査区、遺構の発掘と併行して実測作業開始。
- 9・11(金)晴 本日、建設省より渡辺・佐々木の両氏が調査状況確認の為来跡。実測作業継続。
- 9・16(水)晴 第4調査区発掘開始。第1調査区、出土遺物の取り上げ作業。
- 9・21(月)晴 第4調査区、遺構検出作業。本日建設省より佐々木・佐渡の両氏調査状況確認の為来跡。
- 9・30(水)曇 第1調査区清掃、のち写真撮影。
- 10・3(土)晴/曇 第4調査区、出土遺物の実測作業。
- 10・13(火)晴 第2・第3調査区のセクション実測完了。第4調査区、D-128グリッド内で勾玉出土。



- 10・17(土)晴 第4調査区、D-128グリッド出土遺物の実測作業及びレベル測定。
- 10・20(火)晴 第4調査区、D-128グリッドで溝(第9号溝)検出。直ちに発掘。本日、センターより橋本次長他3名視察。
- 10・21(水)晴 第4調査区で検出した第9号溝の実測完了。本日をもって作業員による作業を終了する。
- 10・22(木)曇 最終図面整理。一部埋めもどし作業開始(重機による)。本日をもって現地調査を終了し、発掘機材を撤収する。(浜野)

調査協力者

岡本 徹	荻野 稔朗	尾角 修一
北谷 和彦	倉辺 昌樹	杉森 学
田畑 寿史	虎谷 弘樹	松井 勝彦
松田 邦次	松田 忠作	村井 直史
宮村 聡	甘池ふさ子	池田 和子
池田まつい	上本よし子	上本 光子
上牧千代野	角見きよの	作本ふみ子
柴田きみ子	定免 国子	定免たきの
定免みゆき	定免 よし	瀬戸まさ子
中橋ふみ子	中村のぶ子	原田 京子
藤島ときの	本田 松子	本田 道
松井かおる	松田 愛子	山口 稜子
山口 春野		

第3章 竹生野遺跡第1次調査

第1節 概要

遺跡は末森山から西南に派生する丘陵の南側の尾根上に占地する。調査対象区は土砂採取によりかなりの削平を被っていた。削平後の標高は最も高い所で34.5mを測る。調査区の西側は養豚場となっているが、地形は西に向かって緩斜面をなしていることより、この部分にも遺跡が広がっていた可能性は大きいといえる。本遺跡が最初に台帳に登録されたのは、養豚場に北接する畑地からの大型蛤刃石斧の発見を契機としている。

第1次調査では竪穴住居跡3基、土坑29基、ピットを検出している。対象区の削平の結果、平面形は変わらないものの、深さは本来の数値とはかなりの違いが生じているといえる。削平が著しいのは北側半分で、第1号竪穴住居にいたっては、10cmの深さを残すのみであった。

遺構の分布状況をみると竪穴住居が第1号住居と第2号・第3号住居の2群、大型土坑が4群に分かれている。北端部に位置する大型土坑は第2次調査検出の土坑2基とともに一群を形成している。

遺構の時期は、竪穴住居の第1号と第2号が古墳時代後期、第3号と大型土坑群は弥生時代後期と考えられる。不整形な土坑群については出土遺物がなく明らかにはできない。 (三浦)

第2節 遺構と遺物

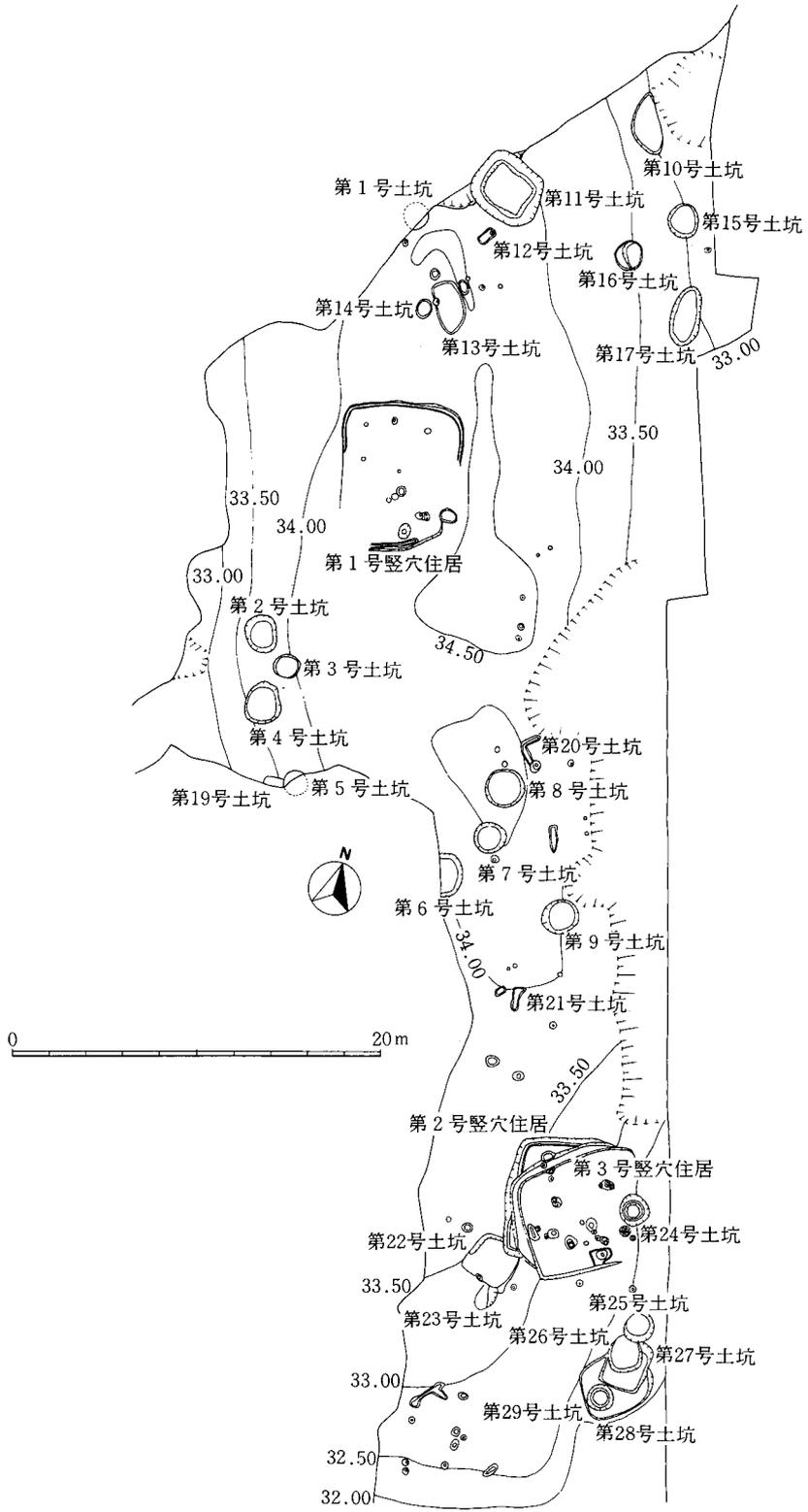
1 竪穴住居

第1号竪穴住居 (第5図、図版6)

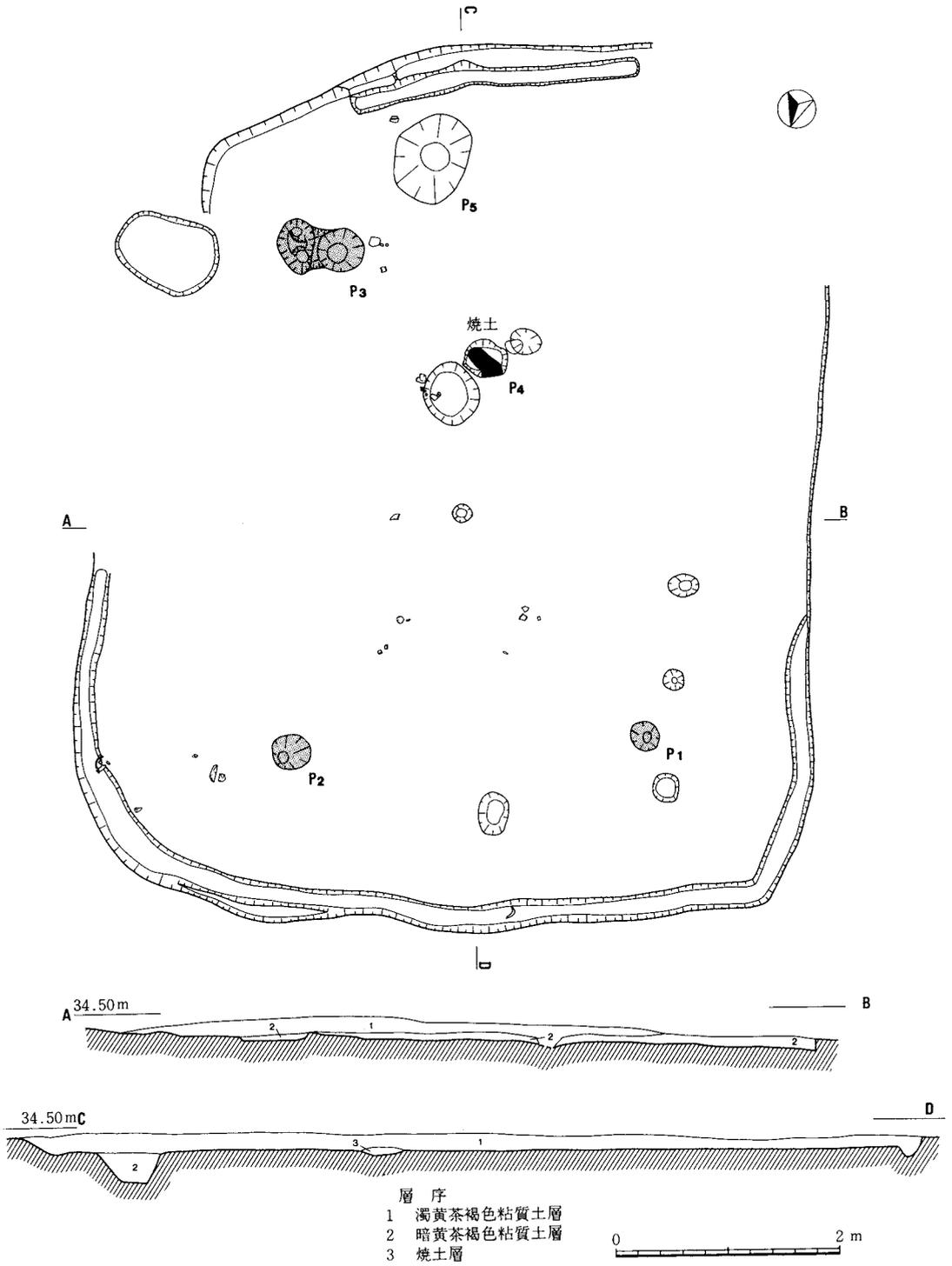
[遺構] 調査区の北半、標高34.00mコンタの巡る平坦部のほぼ中央に位置する。検出時点には既に構造上面が削平された状況であったことから、周壁高は低く、床面までの深さは15~20cm程度であった。平面プランは隅丸方形を呈すると考えられるが、南東辺で一部不明瞭な点が残る。規模は周溝と支柱との関連から、長径約8m、短径約6.2m程度と考えられる。軸方向はN-15°-W。支柱穴は3個検出したが、南隅に存在したと考えられるもう1個に関しては木根による攪乱のため不明。支柱は4本であったと推定できる。また、住居跡ほぼ中央の床面からは焼土並びにそれに伴うと思われるピットを検出している。確認できた覆土は2層。濁黄茶褐色粘質土層と暗黄茶褐色粘質土層である。

遺物 (第21図1~6・第27図1、図版21)

第1号竪穴住居から出土した遺物はいずれも小片であり、図化し得たのは掲示した6点にすぎない。1は径不明の須恵器の坏蓋である。覆土上層から出土した。稜の成形は雑で鈍い。2は口径11.0cm、残存高4.4cmを測る須恵器の坏身である。胎土・焼成共に良。調整は口縁部及び体部上位は回転ナデ、体部下半から底部にかけては回転ヘラケズリ。色調は内外面共に暗灰色を呈する。3は口径14.0cm、残存高2.1cmを測る須恵器甕の口縁片である。床面直上から出土した。4は



第4图 竹生野遺跡第1次調査平面図 (S = 1/400)



第5図 第1号竖穴住居実測図 (S = 1/60)

口径14.0cm、残存高6.5cmの土師器甕形土器片である。口縁部の外反度は弱く、胴部の張りも弱い。やや長胴スタイルの完器が想定されるものである。胎土・焼成共に不良。外面調整は摩耗のため不明。内面はナデ。5は口径13.4cmの鉢形土器である。体部を一部欠損するため器高を明確に計測することはできなかった。内外面共にヘラミガキ調整痕を留めるが、摩耗のため不明瞭な点が多い。6は床面直上から出土した甕の把手である。

第2号竪穴住居（第7図、図版6・7）

〔遺構〕調査区の南東部、土取りのため極端に狭くなった屋根の東側緩斜面上に位置する。遺構検出時より多量の遺物の散布が認められ、また土色の違い等からも住居跡の存在は明瞭であった。ただ、占地が斜面であるため、周壁は切り盛りによって形成されたと考えられたが、カット面に比べ盛り土部は崩落のために不明瞭であった。平面プランはほぼ方形。規模は南北6.9m、東西約7m（ただし東端に関しては推定）。軸方向はほぼ南北を指す。周溝は西側カット部では検出されたが、南辺及び東辺からは検出されなかった。また主柱に関しても4本と推定されるが、確認できたのは西側の2本の柱穴のみである。ただこの時点で、床面に多量の土器の細片が混入している事が確認されたことから、当住居跡の床面が整地によって造成されたものである事が判明したのである。しかし、この整地に際し混入した土器類が、当住居跡の直下で検出された第3号竪穴住居跡に伴うものとは考え難いことから、既に土取りによって消滅した尾根上からの流入・堆積遺物と考えた方が蓋然性が高い。

遺物（第6図、第21図7～18、第22・23図、第27図2・3、図版21）

第2号竪穴住居からは細片を含め、多量の遺物が出土している。ただ、その出土遺物に大きな時期差の認められるものが存在することから、当住居跡に伴うものと、そうでないものを区分して報告する。

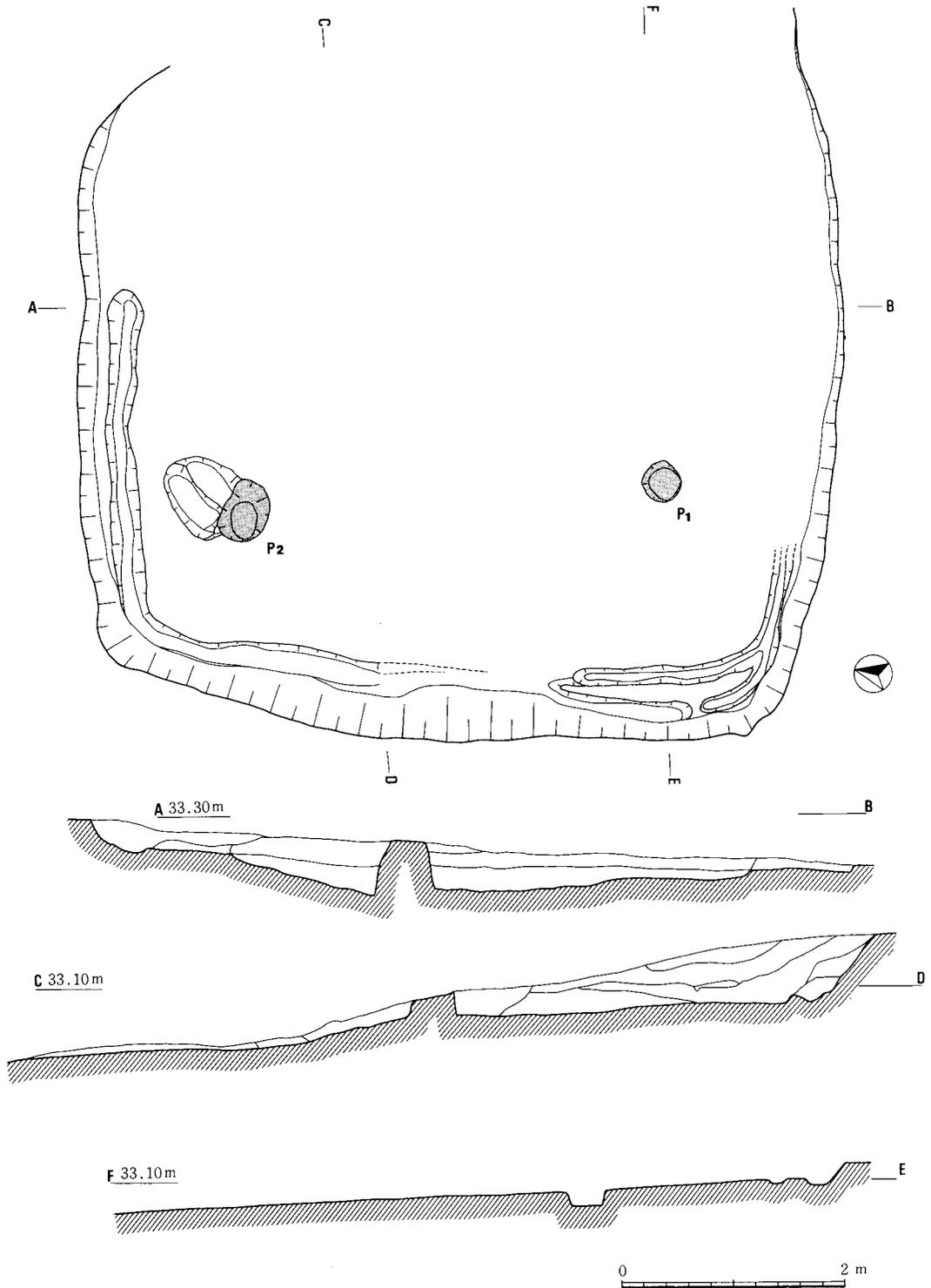
当住居跡に伴うものとしては、第21図7～18の須恵器の他、第21図26・27、第23図47・48等の土師器、それに、第6図の滑石製双孔円板が挙げられる。いずれも6世紀前半頃の所産と考えられるもので、第1号竪穴住居跡出土遺物とほぼ同時期に比定される。7～9はいずれも径不明の坏蓋である。破片が小さいために全形が窺えるものはないが、該期の特徴がよく観察される、胎土・焼成共に良好なものである。10は口径10.4cm、残存高3.4cmを測る坏身である。器厚は均一で、全体的に薄手の精品である。胎土・焼成共に良好。暗灰色を呈する。11、12、15は共に床面出土資料である。11は口径13.6cm、残存高3.1cmの広口壺である。12は口径10.4cm、残存高2.9cm。甕の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁帯下端には稜が形成される。頸部の締は強く、



第6図 第2号竪穴住居出土
双孔円板実測図（ $S = \frac{1}{2}$ ）

残存部下端径で5.2cmを測る。口縁帯及び頸部外面には波状文が巡る。内面には自然釉が認められる。15は脚部径9.4cmを測る短脚一段透しの高坏脚部片である。胎土・焼成共に良好の精品である。

上記以外の遺物については全て弥生終末期から古墳時代前期にかけての所産と考えられるものである。器種としては甕形土器、壺形土器、高坏等が認められるが、甕形土器が大半



第7図 第2号竪穴住居実測図 (S = 1/60)

を占める。いずれも床面からの出土であるが、第2号竪穴住居の床面自体、盛土・整地によって形成されていることから、これらの土器類は客土層に伴い床面及び床面下に混入したものと考えられるのである。そのため、第3号竪穴住居とも切り難して考える必要があると考えている。

第3号竪穴住居（第7図・図版6・7）

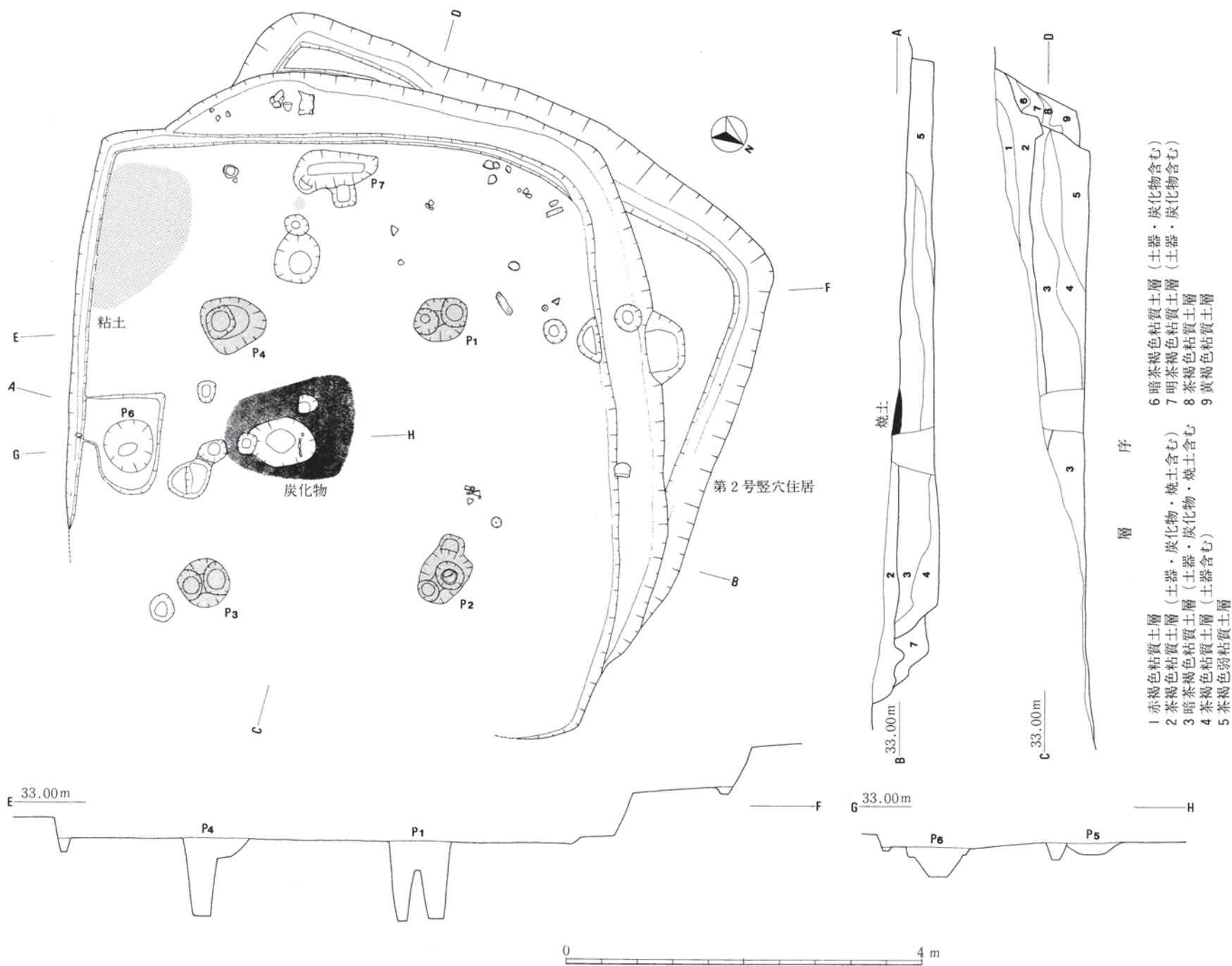
〔遺構〕第2号竪穴住居の直下で検出された住居跡で、第2号竪穴との床面のレベル差は約60cmにおよぶ。その覆土層の観察からも、第2号竪穴住居の床面が人為的に盛土・整地されたものであることが再確認されたのである。第3号竪穴は第2号竪穴とはやや軸を異にするものの、規模的には大差なく、平面プランも方形を呈する。第2号竪穴同様、東辺の周壁は崩壊によってか、あるいは造成時点からの状態なのかは判別できないが、不明瞭である。平面プランの計測数値は6.1m～6.7m。長軸の方向は概ねN-45°-Eである。床面は黄茶褐色粘質土の地山で、住居跡東端に至るまではほぼ平坦である。周溝は南西辺及び南東辺で確認されたが、他の2辺からは検出されていない。支柱穴は4ヶ所で確認された。当住居跡の対角線上にそれぞれ配置されていることから支柱は4本であったことは間違いない。ただ検出した支柱穴はいずれも2本分の柱穴から成っており、当住居跡自体、建て替えられている可能性が指摘されたのである。そこで、周壁の南西辺及び北西辺の不明瞭部分を精査した結果、床面レベルを異にする旧住居跡の残存部が確認されたのである。新たに確認された住居跡の残存部の形状から、平面プランは不整な略方形を呈したものと推定され、やや不明瞭な点は残るものの、先に検出された第3号竪穴の支柱穴と支柱の位置は重複しても不自然ではないと判断された。これにより、当地点では3棟の住居跡が存在したことが判明したが、最古の住居跡に関しては残存部も僅かであり、不明な点も多いことから、あえて抽出することは避けて、その存在のみを報告するに留めることにする。

さて、第3号竪穴の床面からは、支柱穴の他にも数個のピットが検出されている。中でも、支柱穴のほぼ中央部で検出されたピットは炉跡としての使用痕を留めるもので、多量の炭化物を包含していた。また、その周辺の床面にも多量の炭化物が検出されている。当床面の南隅からは乳白色の粘土が厚さ1～3cm程度貼り付けられている箇所も発見された。

遺物（第24図～第26図、第27図4～8、図版22）

第3号竪穴住居からは多量の土器片と共に数点の軽石と1点の砥石が出土している。土器類に関しては、いずれも弥生終末期に比定されるものと考えている。器種としては、甕形土器が大半を占めるが、他に壺形土器、鉢形土器、高坏・器台形土器、蓋形土器など、1戸の住居に必要な器種全てが認められた。ただ、貯蔵用としての壺形土器の点数が非常に少ないことや、弥生後期の特徴でもある長頸壺の、退化傾向を呈する姿さえも全く認められなかったこと等に関しては、当遺跡で数多く検出されている円筒土坑との関連で理解されるものとも考えている。甕形土器に関しては、有段口縁のものと、くの字口縁のものがほぼ均等に存在する。ただ、有段口縁の甕形土器のうち、口縁帯に擬凹線を巡らすものは僅かに2点のみで、有段口縁甕形土器の2割程度、甕形土器全体では1割にも満たない。また、口縁帯をナデ調整で仕上げる有段口縁甕形土器についても、内面有段部の屈曲は弱く、ほとんどが内面くの字化現象（有段口縁の退化現象）を呈しているのである。高坏・器台形土器に関しては、中型のものと小型のものが存在する。ただ、中型のもの（29・30）についても、脚部径及び高さは小型化傾向を呈しており、坏部の形状も椀状を呈するものと推察される。

（浜野）



第8図 第3号竖穴住居実測図 (S=1/60)

2 土 坑

土坑は大きく二つの形態に分けられる。一つは円形ないし方形の平面を呈し、つくりには規則性のある大型の土坑群である。もう一つは、対照的に不整形で、小さな土坑群である。前者には遺物が含まれており、後者にはない。平面的な分布をみると、前者が、調査区の北に一群、中央部に二群、南に一群認められるのに対し、後者は北に集中している。

大型の土坑ははじめに説明を加える第1号～第9号・第11号・第22号～第29号土坑である。不整形な土坑は第10号・第12号土坑～第21号土坑である。なお、土坑出土の土器はすべて弥生土器である。各個の説明において特にことわらないので了承されたい。

第1号土坑（第4図）

調査区の北端部にあつて、末森山へ登る道によってほとんど壊されているため発掘はしていない。径約1.5mを測る円筒形土坑と考えられる。

第2号土坑

第3号・第4号土坑とともに近接して一群をなしており、やや離れて南側に第5号・第19号土坑が存在する。

遺 構（第9図、図版第8・9）

平面は長楕円形を呈する。上端径2.06×1.65m、底面径1.6×1.3m、深さ1.73mを測る。壁面はやや外開きに立ち上る。覆土はほぼ水平に堆積しており、第1層と第2層には粒状炭化物、第3層には焼土粒および粘土粒を含み、第4層には焼土を含む。土器は第1層および第7層に含まれる。第7層の土器は甕形土器の一括である。底面には溝がめぐっており、幅12cm、深さ7cmを測る。

遺 物（第28図1～5、図版第23）

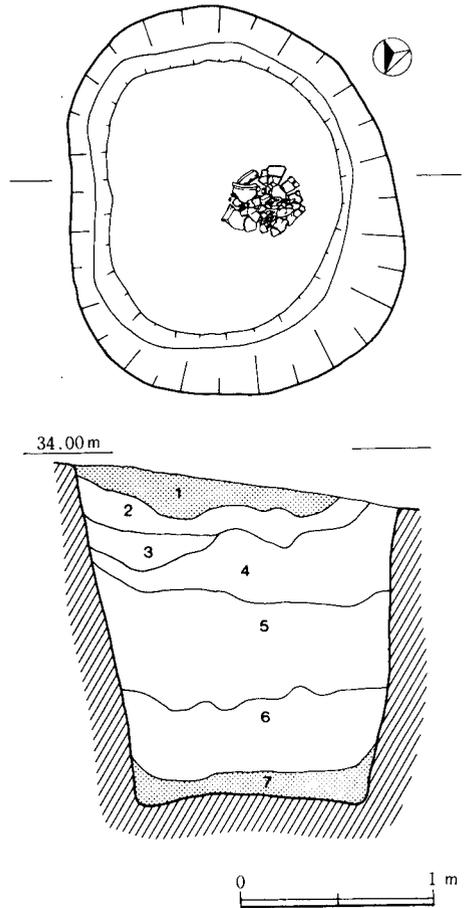
1・5が床面、他は覆土上層の出土である。

1～3は甕である。それぞれ形式が異なる。1は器高28.5cm、口径17.3cm、体部径（最大径、以下同じ）21cm、底径4.5cmを測る。体部下半に煤が付着する。4の壺は口径13cm、体部径13.3cm、底径は13cmを測る。

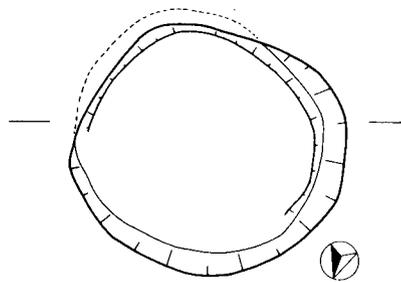
第3号土坑

遺 構（第10図、図版第8・10）

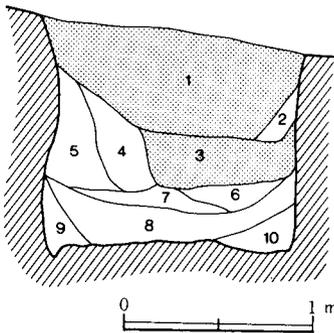
平面は略円形を呈する。上端径1.46×1.3m、底面径1.3×1.16m、深さ1.2mを測る。壁面は、西側がほぼ垂直に立ち上るが、東側はやや袋状を呈する。覆土は中央部にむかって下の堆積状況を示している。炭化物は第1層、第3層、第5層～第7層、第10層に見られ、とくに第3



第9図 第2号土坑実測図（ $S=1/40$ ）



34.30m



層に多い。底面は、南半部に溝が見られる。幅12cm、深さ6cmでV字状の断面形を呈する。

遺物(第29図1~12、図版第23)

すべて覆土中より出土している。

1~7は甕である。すべて有段口縁をもつが、若干の形態差をみせる。1は口径22.8cm、体部径22.3cmを測る。体部外面に煤がみられる。3の外面にも煤が付く。4・5は段部の突出が特徴的である。8は蓋である。頂部径4.2cm、孔径0.9cm、器高5.4cm、裾部径15cmを測る。9・10は高坏である。9の坏は有段となる。

第4号土坑

遺構(第11図、図版第8・11)

平面は略円形を呈し、南北方向に長い。上端径2.28×1.94m、底面径1.84×1.62m、深さ1.8mを測る。壁面はやや外開きに立ち上る。覆土は16の層に分けられる。下層

第10図 第3号土坑実測図(S=1/40)はほぼ水平な堆積をみせるが、遺物はほとんど含まない。これに対して上層は中央部が凹む、いわゆる凹レンズ状の堆積をみせ、土器の包含が多い。第1層・第2層は顕著である。底面に施設はない。

遺物(第30図~第34図、図版第24・25)

9・10・13~16・19・35・37・39は覆土下層からの出土で、他は上層出土である。

1~12は甕である。1~9は有段口縁をもつ。4は口径15.2cm、体部径17.5cmを測る。内面はナデである。5は口径は16.5cm、器高25.7cm、体部径21cm、底径3cmを測る。体部内面はケズリである。6は細い頸部が特徴である。7は丸い体部をもつ。口径17.5cm、体部径17cmを測る。8・9は同一形式である。10は口縁端部を面取りする。内面はハケである。11はくの字口縁をもつが端部を上下に拡張する。口径19.2cm、器高30.6cm、体部径25.7cm、底径5.4cmを測る。煤の付着が1・4~11の体部外面に見られる。

13~17は壺である。13、14、15は形式が異なるが、16・17は同形式とみてよい。13は第3号土坑出土の破片と接合できた。14の頸部にはヘラ記号が見られる。15も13と同じく第3号土坑との接合土器である。口径13.5cm、体部径21cmを測る。体部外面の下半に煤が見られる。16・17は口縁段部の突出が特徴的である。

18~22は蓋である。23~30は高坏である。24は第8号土坑出土の2片と接合できた。26~29は同一形式とみられる。27は口径27cm、器高16.7cm、脚径14.6cmを測る。30は第26号土坑との接合土器である。31~34は器台である。31は口縁部に3条の擬凹線が施される。口径23cm、器高18cm、脚径15.7cmを測る。32は口径19.6cm、器高13.8cm、脚径13cmを測る。35~38は鉢である。35・36は有段口縁をもつ。35は口径19.4cm、器高13.4cm、底径3.7cmを測る。口縁部と体部外面中位に煤が付着する。36も外面に煤が付く。37はくの字口縁をもつ。38は底部有孔である。口径17.5cm、

器高13.3cm、底径2cm、孔径0.6cmを測る。42の外底面には靨痕が見られる。底径6.2cmを測る。41・43・44・47の体部外面に煤が見られる。

土器のほかに覆土上層出土の鉄製品が1点ある。小片のため図化しえないが、刀子と思われる。幅1.2cm、背の厚さ4mmを測る鍛造品である。

第5号土坑

遺構(第4図)

土砂採取によって削られている。崖に約3分の1残存が見られたが、危険を伴うため発掘しなかった。径約1.5mの円筒形土坑と推定される。これに切られた第19号土坑も同じ理由で発掘していない。

遺物(第29図13・14)

覆土上層からの採集土器である。いずれも甕である。14は口縁部に擬凹線をもち、頸部にしまりがある。2点とも煤の付着が見られる。

第6号土坑

遺構(第12図、図版第12)

本土坑は第7号～第9号土坑とともに一群を形成している。第5号土坑と同様、土砂採取によって約2分の1が失われている。

平面はやや南北に長い楕円形と推定される。上端径2.1m、底面径1.8m、深さ1.05mを測る。壁面は外開きに立ち上る。覆土はほぼ単一土層といってもよく、粒状炭化物を少量含む。わずかに土器の小片が出土しているが図化に耐えるものはない。底面に施設はない。

第7号土坑

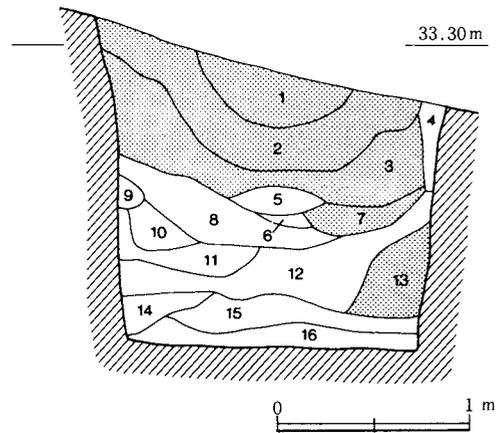
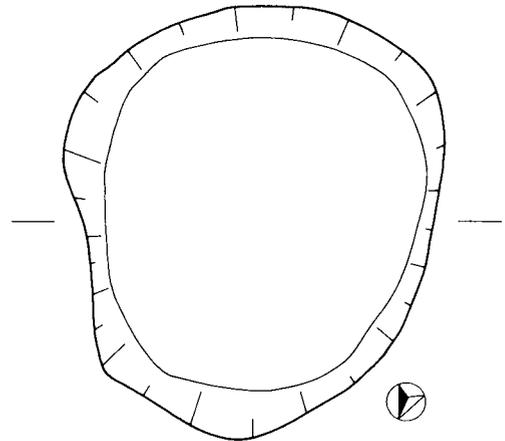
遺構(第13図、図版第13)

第6号土坑と約1m離れて存在する。略円を呈する平面形で、上端径1.75×1.65m、底面径は1.25m、深さ1.2mを測る。壁面はやや外開きに立ち上る。覆土はほぼ水平な堆積を示し、炭化物と土器を含む黄茶褐色砂質土層が上半部を占める。

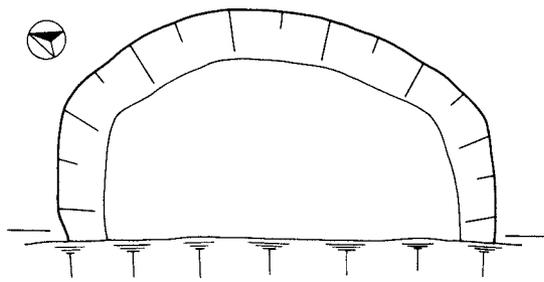
遺物(第28図6～10、図版第26)

いずれも第1層より出土したものである。

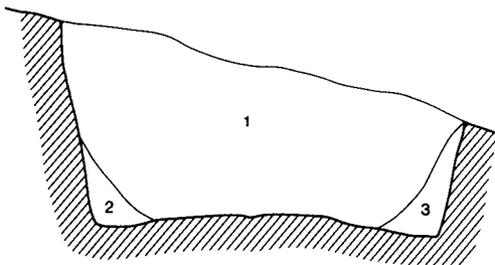
6～9は甕である。6・7は口縁部がほぼ垂直に立ち上り、肩部に刺突を施す。6の体部外面上半には煤が見られる。8・9は外開きの口縁部をもち、段部がやや突出する。ともに体部外面に煤が付着する。10は壺である。口径10.3cm、器高12.7cm、体部径14cm、底径2cmを測る。体部内面はナデである。



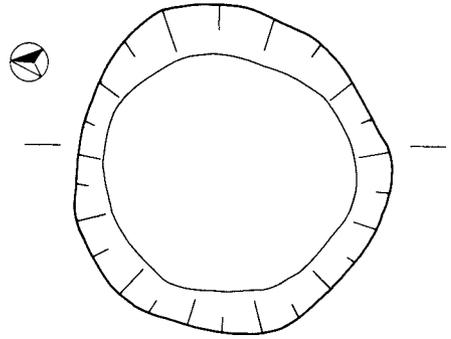
第11図 第4号土坑実測図(S=1/40)



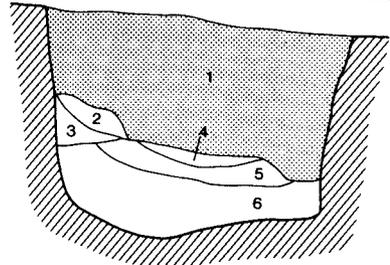
34.20m



第12図 第6号土坑実測図 (S=1/40)



34.30m



第13図 第7号土坑実測図 (S=1/40)

第8号土坑

遺構 (第14図、図版第13)

第7号土坑の約1m左に位置する。平面は円形を呈する。上端径2.15m、底面径1.8m、深さは1.1mを測る。覆土は厚さ10~20cmの層が凹レンズ状の堆積をみせる。土器は第2層・第3層と第11層から出土している。土器以外では第1層より砥石とモモの種核が各1点、第2層よりモモの種核が4点、スモモの種子が1点出土している。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で施設はない。

遺物 (第35図・第36図、図版第23)

1・4・5・10・14・16~18・23・26・28が覆土下層より、他は上層より出土している。

1~14は有段口縁の甕である。全形を窺いがたいものが多く、細分類は困難である。1~7は口縁部が外に開くものである。2・7の体部外面に煤の付着が見られる。8・9は受口気味の口縁部をもつ。10はまっすぐに立ち上る口縁部をもち肩部に刺突をもつ。11・12は口縁段部が突出する。12・14は短い口縁帯をもつものである。

15~18は壺である。15の頸部には縦に4条の線よりなるへう記号が見られる。16の口縁部には3条の擬凹線がある。18は口径11.7cm、器高28cm、体部径24cm、底径5.7cmを測る。体部内面はナデである。

19は蓋である。20~22は高坏である。20は口径は21.2cm、器高13cm、脚径11.5cmを測る。坏部の段が退化しつつある。23~24は器台である。23は口径21.8cm、器高14.4cm、脚径13.2cmを測る。27・28は鉢である。28は口径11cm、器高6.1cm、底径4.5cmを測る。内外面を測る。内外面とも赤

く塗られている。

土器以外の遺物である砥石と植物遺体に説明を加えよう。砥石は小片で、三辺しか残らないが板状を呈しており四辺とも使用されていたと考えられる。厚さ1.1cmを測る。植物遺体は、モモの種核が5点、スモモと思われる種子が1点である。モモの種核は3点が完形品、2点が破片である。完形品3点の計測値は、長さ、幅、厚さの順に記すと、1つめが2.03cm、0.94cm、1.29cm、2つめが1.74cm、1.45cm、1.11cm、3つめが1.59cm、1.44cm、1.30cmである。破片については、1点が長さ1.60cmを測りうるのみである。スモモと考えられる種子は長さ1.28cm、幅1.02cm、厚さ0.86cmを測る。

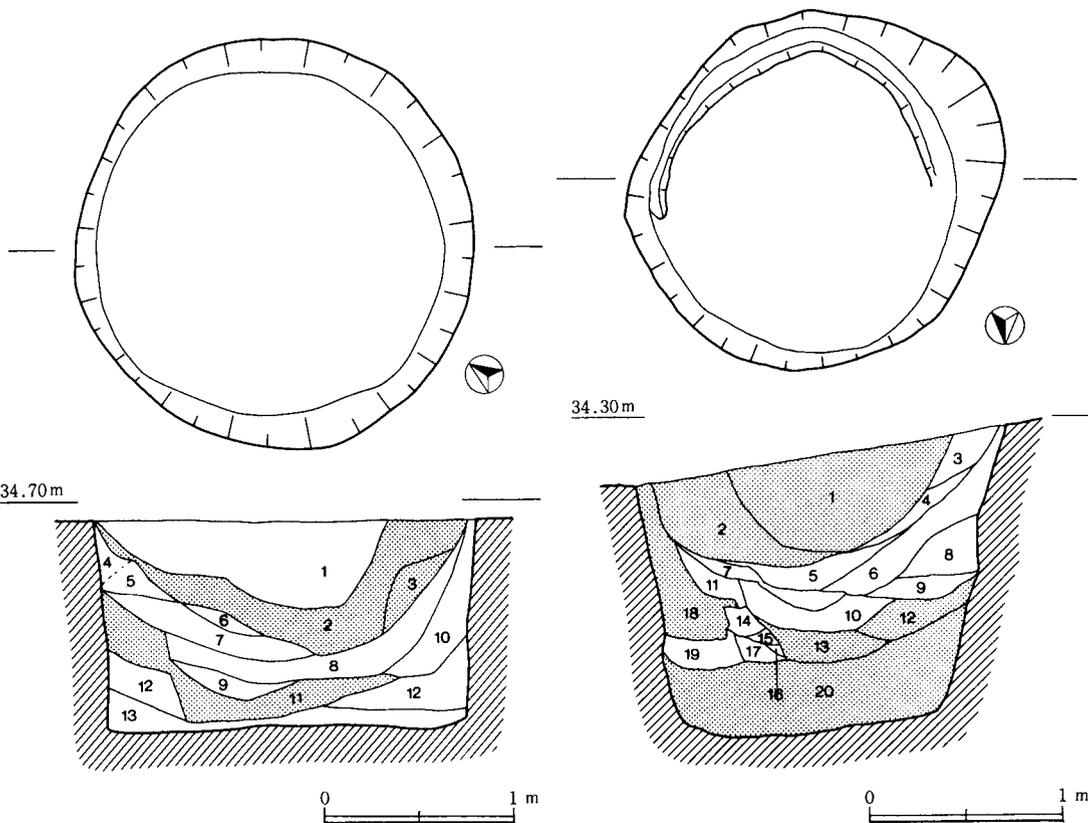
第9号土坑

遺構(第15図、図版第14)

第6号土坑の東約5mに位置する。やや不整であるが、平面は円形を呈する。上端径2.0×1.8m、底面径1.6m、深さ1.55mを測る。覆土は、上層と下層に厚い堆積があり、中位には細かい層が見られる。土器は上層と下層より出土している。壁面は外開きに立ち上る。底面では南側に壁溝が見られる。幅15cm、深さ4cmを測る。

遺物(第37図・第38図、図版第26)

11が床面、3・5・8・17・20~23・27が覆土下層、その他は覆土上層より出土している。



第14図 第8号土坑実測図 (S=1/40)

第15図 第9号土坑実測図 (S=1/40)

1～11は甕である。1・2は口縁の段部が突出する。3～5は口縁部内側の段が目立たない。6は受口気味である。7はほぼ直立する口縁部をもつ。9～11は擬凹線をもつが、9は工具の違いか明瞭なものではない。1・3・4・6・7・9～11の体部外面に煤が付着する。

12は壺である。口径19cm、頸部の長さ8.4cmを測る。13～15は蓋である。14は頂部径1.7cm、器高3.1cm、裾部径8.8cmを測る。15の頂部は有孔である。頂部径2.8cm、孔径1.8cmを測る。16・18・19は鉢である。16の体部外面には煤が付着する。19の内面は無段である。20～23は高坏である。20は口径27cm、器高15.4cm、脚径13.5cmを測る。坏部の稜の下には強いナデによる凹部が見られる。24は器台である。

第11号土坑

遺構（第16図、図版第15・16）

調査区の北側において末森山へ登る林道によって北側を削られている。第1号土坑の東側に約2.5m離れて存在する。後述の第28号土坑と並んで、本遺跡では最大級の土坑である。

平面は隅円の方角を呈し、上端では東西2.8m、南北2.35m、底面では東西2.8m、南北2.35mを測る。深さは2.3mを測る。覆土は下層に黄褐色の粘砂層が堆積しており、その上は20～30cmの厚さの層がやや傾きをもって堆積している。

遺物（第39図・第40図、図版第26）

2・21～23が覆土下層より出土、他は上層出土である。

1～12は甕である。1・2はやや垂直に口縁部が立ち上る。3・4は外反する口縁部をもつ。7～12はくの字口縁をもつ。8・9は口縁端部に面取りを施す。11・12は口縁端部をつまみ上げる。4・12の口縁部に煤が付着する。

13～16は壺である。15の体部内面は接合痕がよく残る。18は高坏である。口径35cmを測り、端部が肥厚する。

第22号・第23号土坑

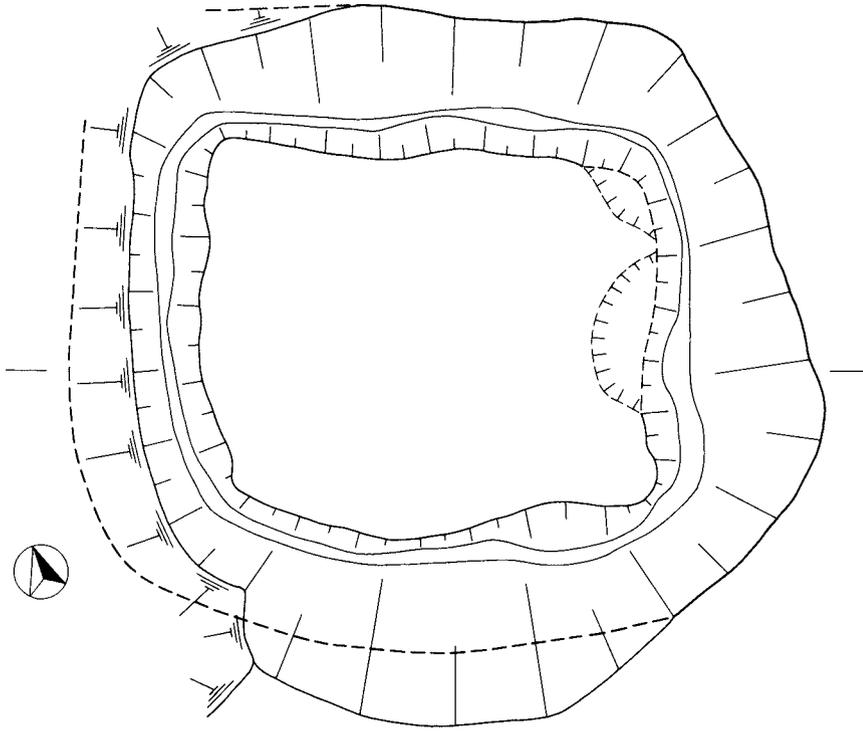
遺構（第17図、図版第17）

調査区の南側において第2号竪穴住居・第3号竪穴住居の南西隅に切られている。第23号土坑は、本土坑の南辺に接して横穴状に掘られた土坑である。二つの土坑は機能的にみれば一連のものと考えられる。

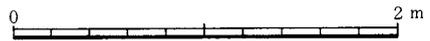
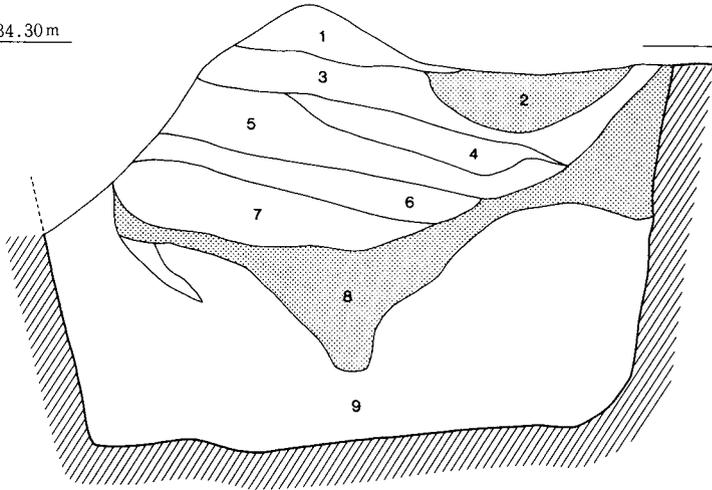
第22号土坑は平面方形の土坑で、隅を円くとり、東西方向に長く上端長3×2.8mを測る。底面長は2.5×2.35m、深さは1.7mを測る。壁面はやや外開きに立ち上る。底面の北辺から西辺にかけて溝が見られる。幅25cm、深さ5cmを測る。この他、底面に見られる施設として、南辺に接してピットがある。45×25cm、深さ27cmを測る。南西隅のピットは径、深さとも20cmを測る。

そして、この土坑で特筆すべき施設は、東辺、西辺、南辺に掘られた横穴状遺構である。東辺の穴は、底面より7cm上った地点より掘られており、開口部の幅36cm、高さ24cm、奥行30cm、奥部で高さ10cmを測る。西辺の穴はこれより大きい。底面より8cm上った地点より掘られており、開口部の幅100cm、高さ50cm、奥行100cmを測る。

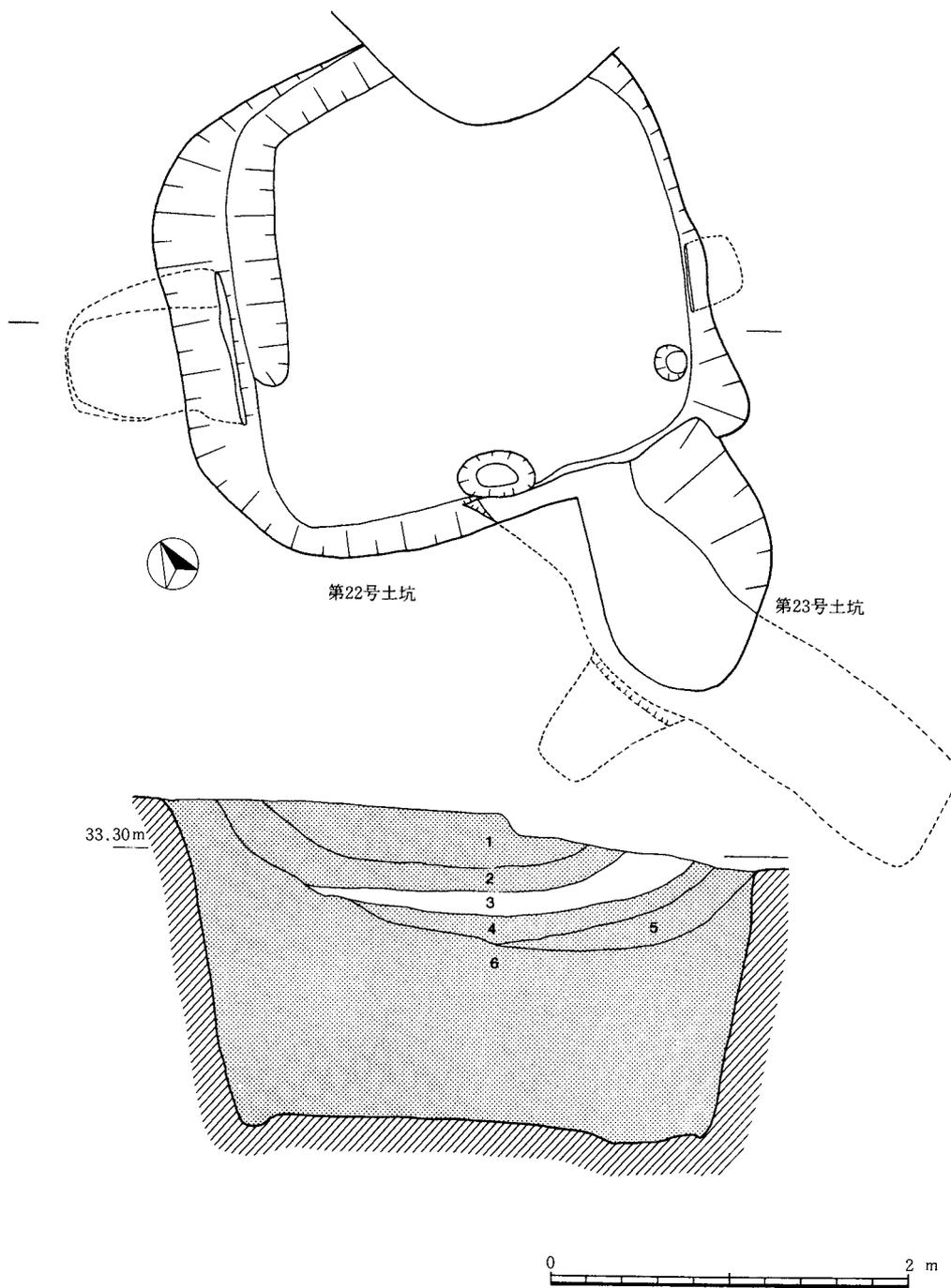
南辺に掘られた穴は最も大きい。これを第25号土坑と命名している。底面より3cm位上った地



34.30 m



第16図 第11号土坑実測図 (S=1/40)



第17图 第22号·23号土坑实测图 (S=1/40)

点より掘られており、南側に長方形の平面形をもつてのび、途中で、西にのびる穴が枝状に掘られる。入口より、奥に向かって約2分の1の天井部が崩落している。開口部の下幅95cm、上幅85cm、高さ90cmを測り、奥行は280cm、奥部の高さ40cmを測る。穴の奥へ行くほど床面が高くなっている。西にのびる枝穴は開口部の幅60cm、奥行60cm、奥部の幅30cmを測る。

各横穴とも中にはしまりのない土が入っており、土坑本体が埋まる過程で入りこんだものと考えられる。三辺に穴が見られることから、北辺にも同様の施設があった可能性がある。底面の溝やピットとともにこれらの横穴は土坑の性格を考えるうえで大きな意味をもつといえる。いずれも人為的な穴であり、床面とほぼ同じ高さで掘られているということは、その利用にかかわる施設とみることが可能であろう。

覆土をみるとほとんどの層に土器が入っている。

遺物（第41図～第43図、図版第26）

5・17・37が覆土下層、他は上層よりの出土である。

1～23は甕である。1～10は外開きの口縁部をもつ有段口縁の甕である。1は口径29.4cmを測る。11は受口気味の口縁部をもつ。13は口径15.6cm、器高16.1cm、体部径15.6cm、底径2.3cmを測る。体部内面はケズリである。14～16は口縁部が直立気味で、肩部に刺突をもつ。17～19は短い口縁帯をもつ。20・21は擬凹線をもつものである。22・23はくの字口縁である。7・13・17・23の体部外面に煤が見られる。

24～26は壺である。24は口径9.5cm、器高8.2cm、体部径8.7cm、底径1cmを測る。25は口径9.4cm、器高9.1cm、体部径11.8cm、底径3.5cmを測る。27～35は高坏である。27は口径24.3cmを測る。坏部の稜はゆるい。36は器台である。39・40は鉢である。39は把手がつく。

第24号土坑

遺構（第18図、図版第7・19）

第2号竪穴住居および第3号竪穴住居に切られている。平面は略円形を呈し、上端径は、1.78×1.55m、底面径は1.1m、深さ1.46mを測る。覆土は濁黄褐色粘質土層で、炭化物を少量混入する。底面より、土器と板状の炭化材2片、自然石が1点出土している。壁面はやや外開きに立ち上る。底面には溝がめぐり、幅20cm、深さ8cmを測る。

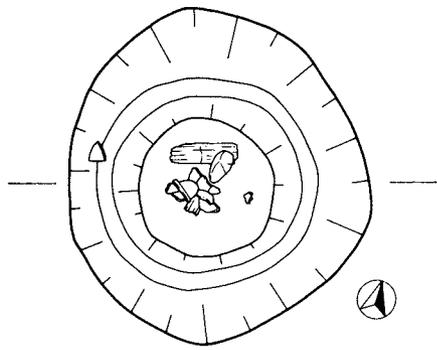
遺物（第40図1～6、図版第27）

1・2は甕である。1は口径14cm、器高15.3cm、体部径13.4cm、底径2cmを測る。体部外面下半に煤が付着する。3・4は高坏、5は把手付鉢である。体部上位に煤が見られる。6は皮袋形土器である。小片であるが、体部長14cm、体部幅6.5cm、頸部径4cmを推定できる。第26号土坑からも1点出土している。

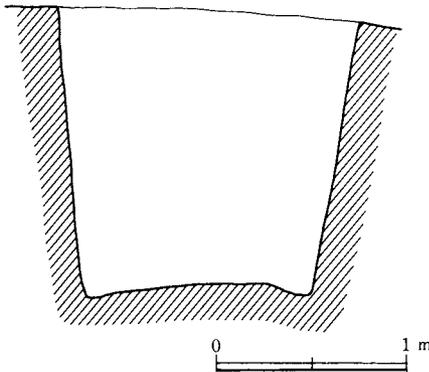
第25号土坑

遺構（第19図、図版第18）

調査区の南端に位置し、第26号土坑に切られている。平面円形を呈し、上端径1.75×1.6m、底面径1.3×1.2m、深さ2.08cmを測る。覆土は下層が淡黄褐色の粘質土層で占められるが、上層では凹レンズ状の堆積が見られる。第1層以外は炭化物を含むが、とくに第3層では多量に含ま



32.70m



第18図 第24号土坑実測図 (S=1/40)

本土坑の平面は不整の円形を呈する。南北方法に長く、上端径 $2 \times 1.8\text{m}$ 、底面径 $1.8 \times 1.5\text{m}$ 、深さ 2.6m を測る。覆土は北にむかって下る堆積をみせる。土器は下層に含まれている。壁面は、北側が内傾しつつ立ち上る。底面は平坦で施設をもたない。

遺物 (第45図～第47図、図版第28)

1～26は甕である。1～14は有段口縁をもつ。1は第27号土坑、第29号土坑出土の破片と接合できた。口径 21.8cm 、器高は 31.4cm 、体部径 26.8cm 、底径 5.5cm を測る。肩部に刺突を施し、体部外面下半に煤が見られる。体部内部はケズリである。2は第27号土坑出土の破片と接合できた。口径 14.8cm 、器高 16.3cm 、底径 4.4cm を測る。体部外面下半に煤が付着する。7～9の口縁部は内面に段をもたない。12・13は口縁端がせまい。14には擬凹線が施される。15～26はくの字口縁をもつ甕である。15～17は体部が丸く、口縁部の外面がやや丸みをおびる。15は口径 14.7cm 、体部径 21cm を測る。体部外面下半に煤が付着する。16は口径 15.5cm 、体部径 22.6cm を測る。体部外面全体に煤が付く。18～22は外反する口縁部をもつ。19は口径、器高、体部径とも 14.2cm を測る。底面をもたない。体部外面下半に煤が付く。20は第28号土坑、第29号土坑出土の破片と接合できた。体部外面下半に煤が付着する。22は第28号土坑、第29号土坑出土の破片と接合できた。23・24は口縁部が横にのびる。23は口径 16.5cm 、体部径 17cm を測る。25・26は口縁端部をつまみあげる。25は第28号土坑、第29号土坑出土の破片と接合できた。説明を加えたもの以外では5～7、9、11～14、17、23～25、36の外面に煤が見られる。

れ、土器も出土している。

遺物 (第44図、図版第27)

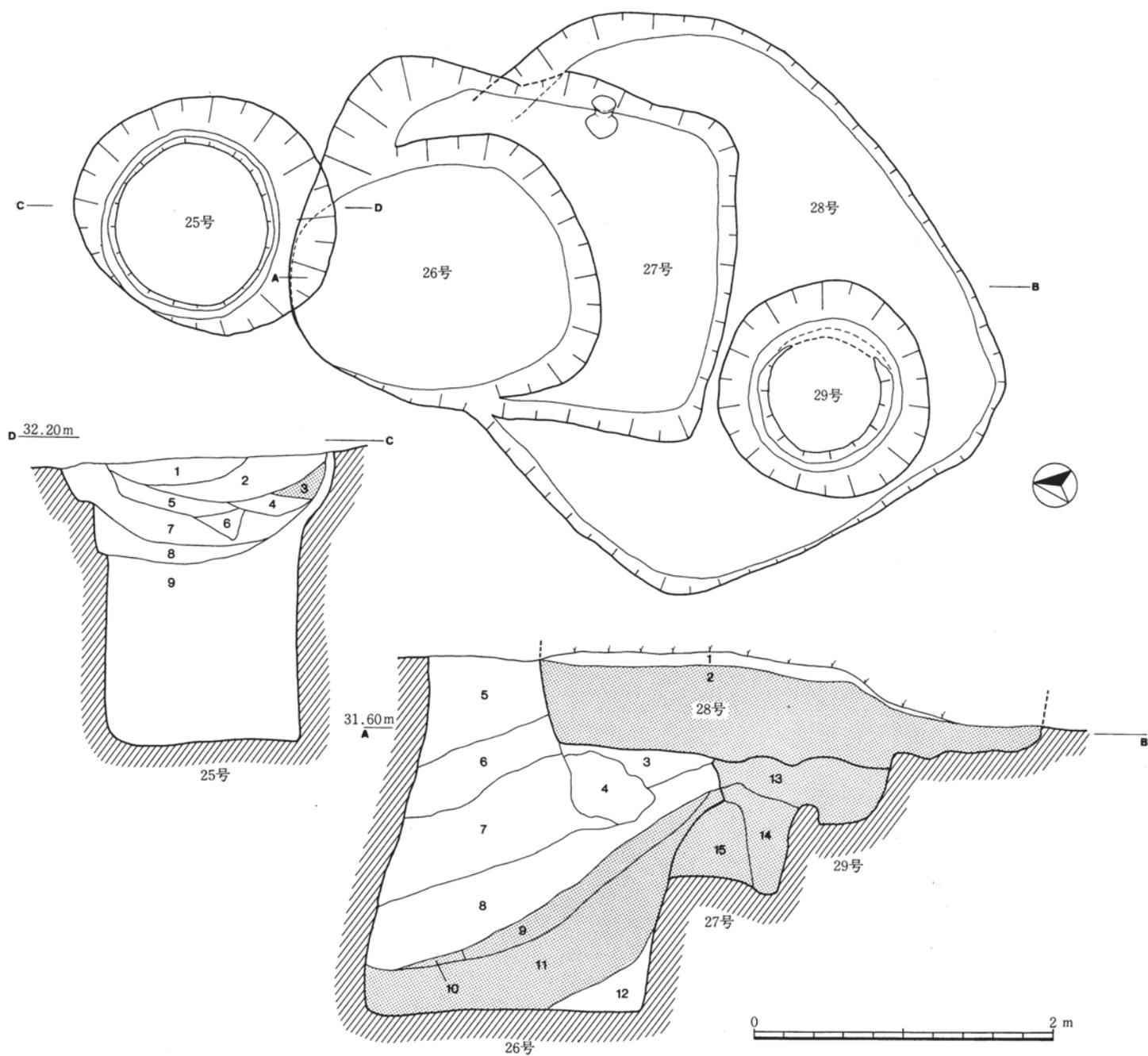
すべて覆土上層より出土している。

1・2は甕である。2の体部外面に煤が付く。3～5は壺である。3は第26号土坑、第28号土坑出土の破片と接合できた。4・5とも口縁の段部がわずかにのこる。5の段部には刻みが見られる。6は蓋、7・8は高坏である。7は口径 24.2cm 、器高 13.6cm 、脚径 12.5cm を測る。11は結合器台である。上部を欠失するが、水滴状の透孔をもった壺もしくは鉢形がのるものと思われる。脚部の段には刻み目と5条の擬凹線が見られる。脚径 14.3cm を測る。

第26号土坑

遺構 (第19図、図版第20)

第25号土坑を切っている。第25号土坑～第29号土坑の切り合い関係を示すと、 $28 > 26 > 27$ 、 $28 > 29$ 、 $26 > 25$ となる。本土坑の周辺においては第24号土坑、第25号土坑、第29号土坑のごとく平面が円形を呈し、底面に溝をもつ一群が早くつくられたと考えられよう。



第19图 第25号~第29号土坑实测图 (S=1/40)

27～31は高坏である。27、28とも口径18cmを測る。32は鉢である。33は皮袋形土器である。体部の長さ9.4cm、幅4.3cm、頸部の幅2.5cmを測る。外面はミガキ、内面はナデで、頸部は指によるオサエである。

第27号土坑

遺構 (第19図、図版第20)

南北方向に長い、平面長方形の土坑である。第26号土坑に切られているため底面の2分の1は失なわれている。上端長2.9×2.9m、底面長2.3×2m、深さ1.45mを測る。壁面はやや外開きに立ち上る。底面は平坦で施設はない。

遺物 (第48図1、図版第29)

床面より出土した壺である。口径13.5cm、器高29cm、頸部径10.6cm、体部径20cmを測る。底面はない。

第28号土坑

遺構 (第19図、図版第19・20)

平面は不整な長方形の土坑である。隅は円くつくられている。上端長3.8×3.2m、底面長3.5×3m、深さ0.7mを測る。覆土はほぼ単一の土層で占められる。壁面はやや外開きに立ち上がる。

遺物 (第49図・50図、図版第29)

1～14は甕である。1・2は口縁部の外反に特徴がある。3～8も外反する口縁部をもつが7はうすくつくった口縁端部と頸部が目立つ。第26号土坑出土の破片と接合できた。3は口径14cm、器高16.1cm、体部径16cm、底径2.3cmを測る。体部内面はナデである。9は直立する口縁部をもつ。10～14はくの字口縁をもつ。10・11は口縁端部を下に拡張する。10は口径14.8cm、体部径22cmを測る。11の体部内面はハケのあとケズリである。12・13は口縁上端がナデによりやや突出する。14は口縁端部を強くつまみ上げる。口径13.4cm、器高11.7cm、体部径13cm、底径は小さく1.7cmを測る。内面はケズリのあとナデである。2～5・7・10・11・14の体部外面に煤が見られる。

15～18は壺である。15・16は有段口縁といってもよいが、段部はかすかに残るのみである。16は第26号土坑出土の破片と接合できた。19は壺である。20は結合器台である。口径19.4cmを測る。段部に小さなキザミを施し、雨滴状の孔を穿つ。雨滴状の透孔は交互に天地を変えて配置されるのが通有である。22は有台の把手付鉢である。口径11.5cm、器高6.5cm、脚径6cmを測る。内外面ともミガキである。

第29号土坑

遺構 (第19図、図版第20)

円形の平面をもつ。上端径1.4m、底面径1.05m、深さ1.5mを測る。底面は平坦で、溝をめぐらせている。溝の幅は15cm、深さ4cmを測る。壁面は外開きに立ち上がる。

遺物 (第48図2～7、図版第27)

5は覆土下層、他は上層より出土している。

2・3は甕である。2は口径17.7cm、体部径21.5cmを測る。体部内面はナデである。2・3ともに体部外面に煤が付く。4～6は壺である。ただし4は鉢の可能性もある。7は高坏である。

第10号土坑（第20図）

不整な楕円形を呈する。上端の長軸3.35m、短軸は、東側が崩れているが1.6mを測る。底面の長軸は3.1m、深さは最深部で0.37mを測る。

第12号土坑（第20図）

第11号土坑の南に接している。長方形を呈し、中にピットが穿たれる。上端の長軸1m、短軸0.5m、深さ12cmを測る。

第13号土坑（第20図）

不整な長方形を呈する。上端の長軸2.8m、短軸1.6m、底面の長軸2.6m、深さ8cmを測る。

第14号土坑（第20図）

第13号土坑に東接し、楕円形を呈する。上端の長軸1.2m、短軸0.85m、深さ6cmを測る。

第15号土坑（第20図）

不整円形を呈する。やや南北方向に長く、上端の南北軸1.8m、東西軸1.65m、底面径は南北1.5m、深さは50cmを測る。

第16号土坑（第20図）

不整円形を呈し、2段掘りになっている。上端径1.5mで、深さ30cmを測る。

第17号土坑（第20図）

長楕円形を呈する。上端の長軸3.25m、短軸1.65m、底面の長軸2.7m、短軸1.15m、深さ70cmを測る。

第18号土坑（第20図）

第1号竪穴住居に東接する。上端の長軸0.95m、短軸0.7m、深さ7cmを測る。

第19号土坑

土砂採取のため削られており、第5号土坑に切られている。崖面にあって危険なため発掘していない。方形ないし長方形を呈する土坑であると推定される。

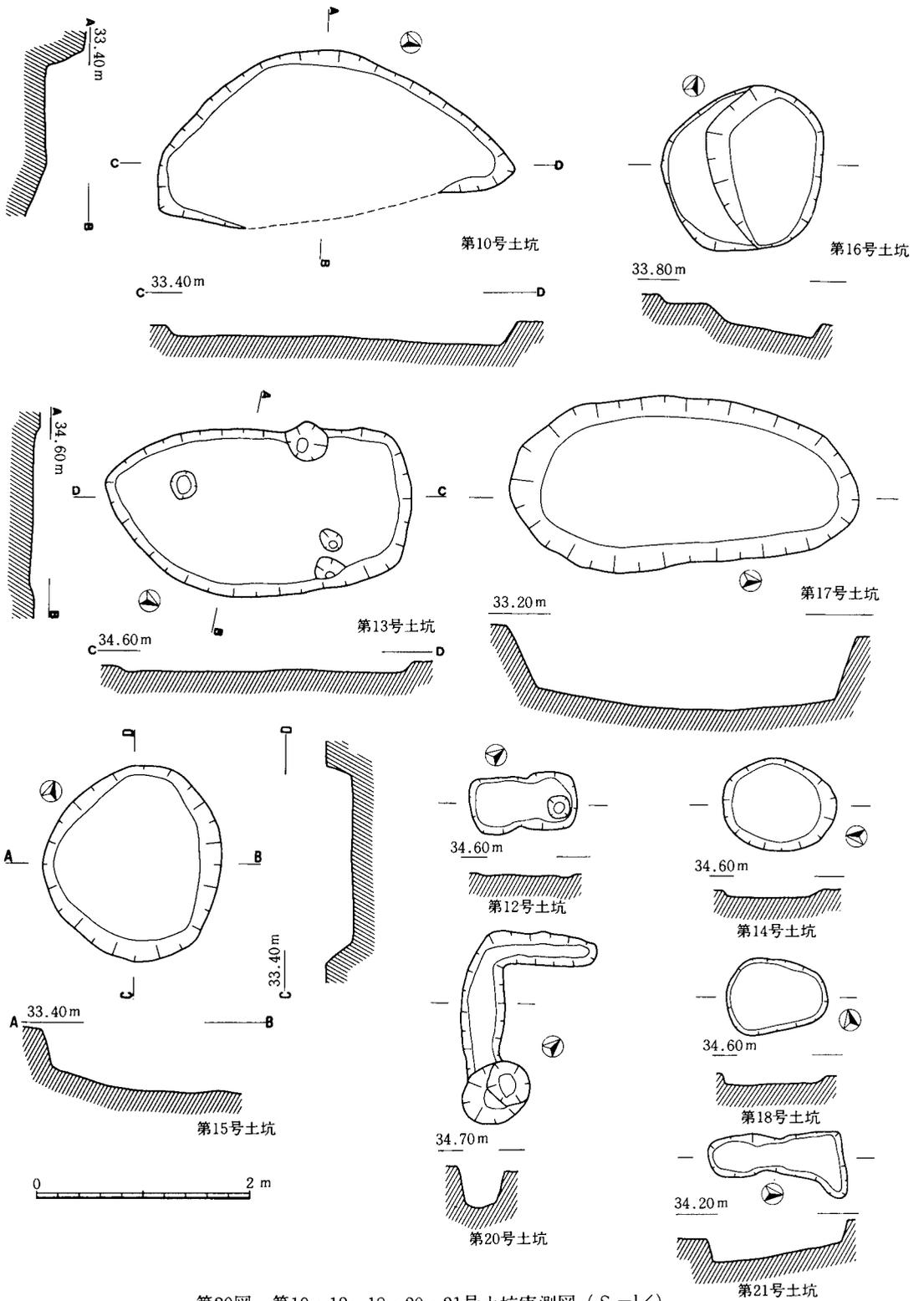
第20号土坑（第20図）

L字形を呈する。幅、深さとも0.4mを測る。

第21号土坑（第20図）

不整形である。長さ1.25m、中央部の幅0.4m、深さ20cmを測る。

（三浦）



第20図 第10・12~18・20・21号土坑実測図 (S=1/60)

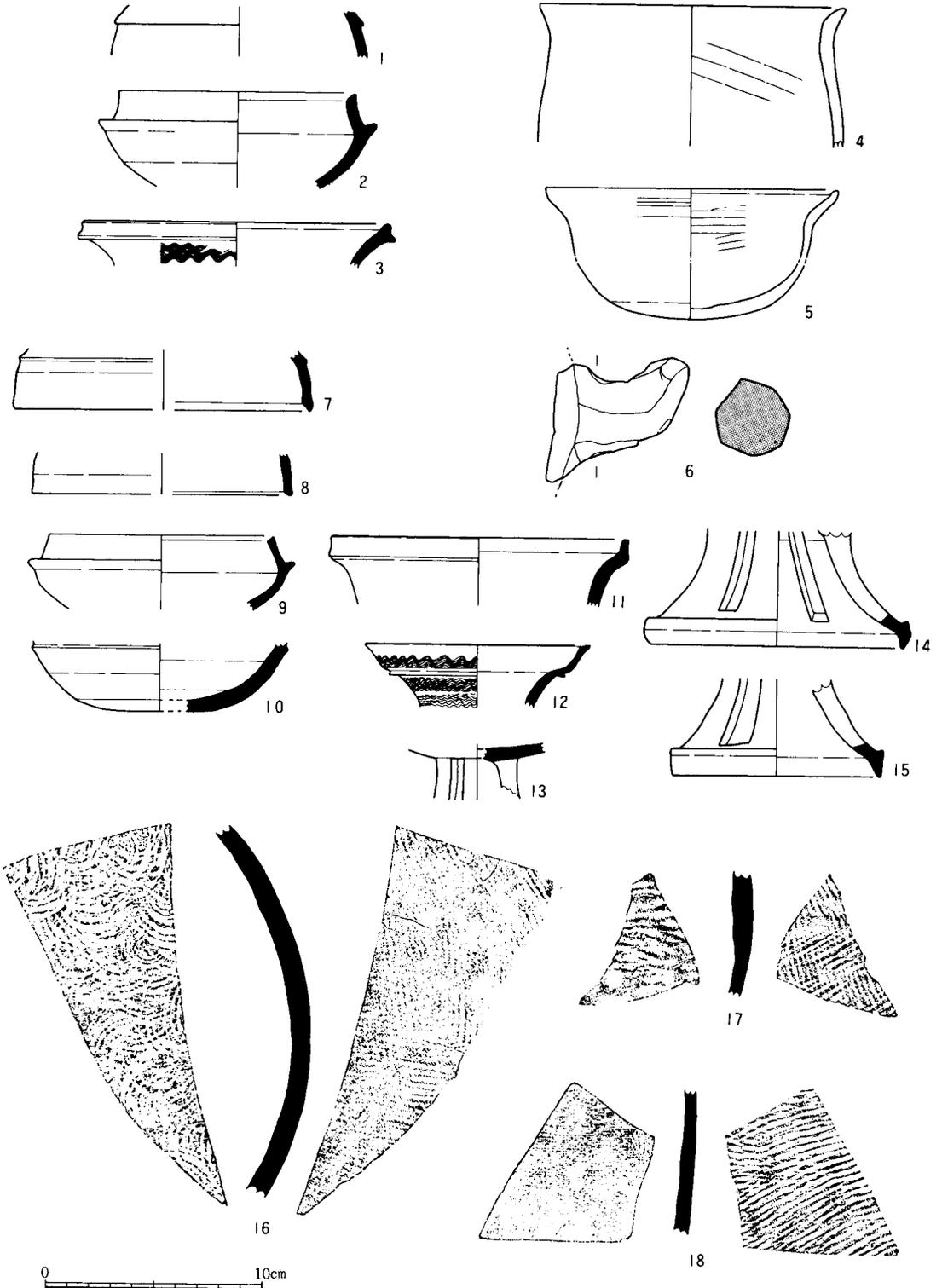
第2表 土坑の層序一覽(1)

(炭=炭化物)
 燒=燒土
 粘=粘土

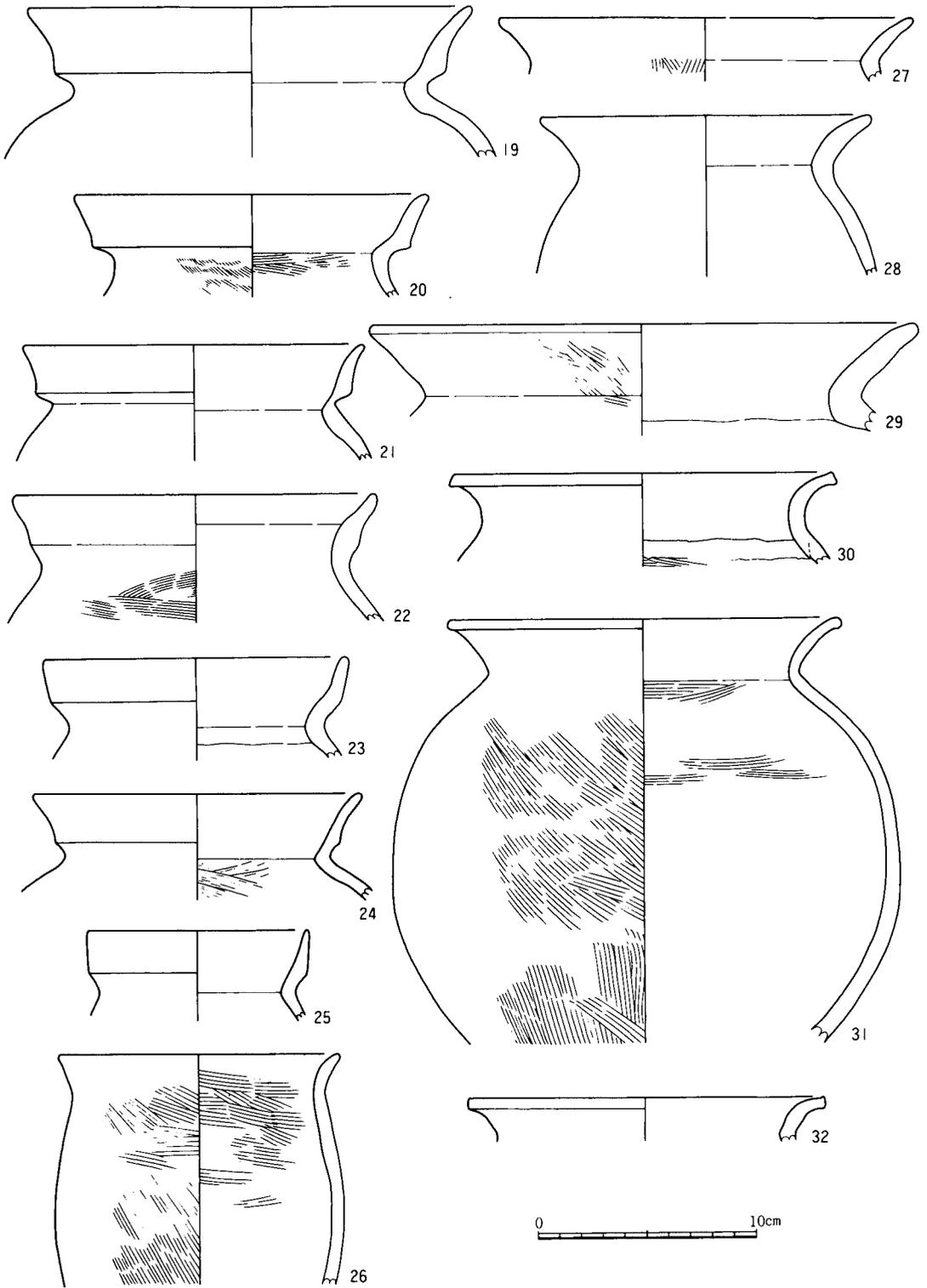
第2号土坑		12	明茶褐色粘質土層 (炭・燒)
1	濁茶褐色粘質土層 (炭)	13	明茶褐色粘質土層
2	茶褐色粘質土層 (炭)	14	明黄茶褐色砂質土層
3	黄褐色粘質土層 (燒・粘)	15	暗黄茶褐色粘質土層 (炭)
4	明黄褐色砂質土層 (燒)	16	橙黄茶褐色粘質土層
5	淡燈茶褐色粘質土層	第6号土坑	
6	同上	1	明赤褐色弱粘質土層 (炭)
7	暗茶褐色粘質土層	2	淡黄茶褐色砂質土層
第3号土坑		3	黄茶褐色粘質土層
1	黄茶褐色粘質土層 (炭)	第7号土坑	
2	明黄褐色粘質土層	1	黄茶褐色砂質土層 (炭)
3	黄茶褐色粘質土層 (炭多量)	2	淡黄茶褐色砂質土層
4	明茶褐色粘質土層	3	濁茶褐色粘質土層
5	茶褐色粘質土層 (炭)	4	明茶褐色粘質土層 (炭)
6	黄茶褐色粘質土層 (炭)	5	明茶褐色粘質土層
7	濁茶褐色粘質土層 (炭)	6	淡黄褐色粘質土層
8	濁茶褐色粘質土層	第8号土坑	
9	明茶褐色粘質土層	1	明茶褐色粘質土層 (炭)
10	黄茶褐色粘質土層 (炭)	2	茶褐色粘質土層 (炭・燒)
第4号土坑		3	明茶褐色粘質土層
1	茶褐色粘質土層 (炭)	4	暗茶褐色粘質土層
2	暗茶褐色粘質土層 (炭・燒)	5	同上
3	黄茶褐色粘質土層 (炭・燒)	6	黄灰色砂質
4	淡黄茶褐色粘質土層	7	茶褐色粘質土層 (炭・燒)
5	茶灰褐色粘質土層 (炭)	8	暗黄褐色粘質土層 (炭)
6	明黄茶灰色砂質土層	9	暗黄褐色粘質土層
7	明茶褐色粘質土層 (炭)	10	暗黄橙色粘質土層
8	明黄茶褐色粘質土層 (炭)	11	暗黄灰褐色粘質土層 (炭)
9	黄灰色砂質土層	12	暗黄灰色砂層
10	茶褐色粘質土層 (炭)	13	黄灰色砂層 (地山風化層)
11	明黄茶褐色粘質土層 (炭)		

第3表 土坑の層序一覧(2)

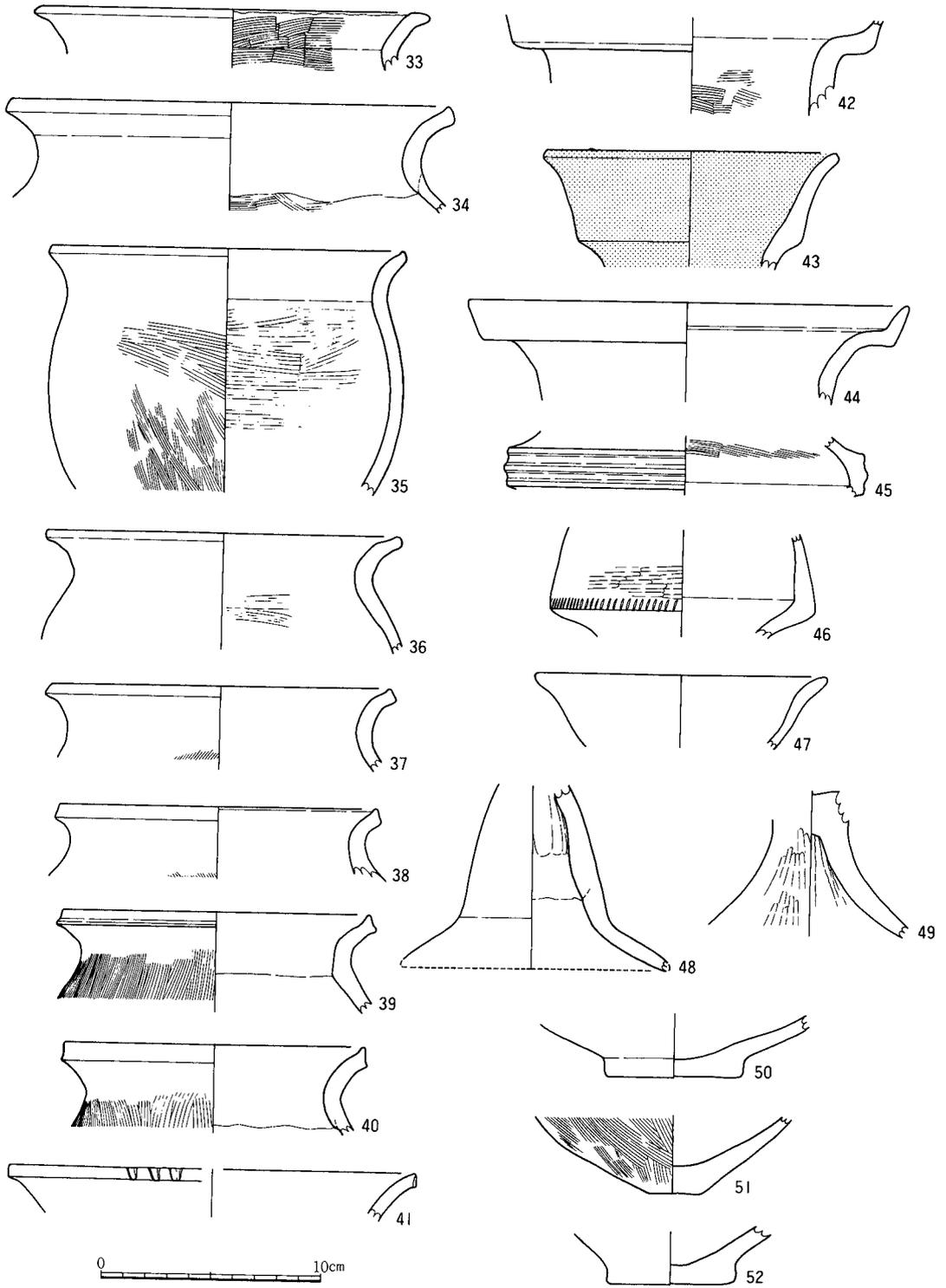
第9号土坑		第22号土坑	
1	黄茶褐色粘質土層 (炭)	1	黄茶褐色粘質土層
2	淡黄茶褐色粘質土層 (炭)	2	暗黄茶褐色粘質土層 (炭)
3	明黄褐色粘質土層	3	茶褐色粘質土層
4	淡黄褐色砂層	4	濁黄灰色粘質土層 (炭)
5	明黄灰色砂層	5	淡茶褐色粘質土層 (炭)
6	淡褐色粘質土層 (炭)	6	濁茶褐色粘質土層 (炭)
7	濁黄灰色粘質土層 (炭)	第25号土坑	
8	暗黄灰色砂層	1	黄褐色粘質土層
9	暗黄灰色粘質土層 (炭)	2	暗黄褐色粘質土層 (炭)
10	淡黒灰色粘質土層 (炭多量)	3	黒褐色粘質土層 (炭多量)
11	明茶褐色粘質土層	4	濁黄褐色粘質土層 (炭)
12	黄褐色粘質土層 (炭)	5	黄灰色砂質土層 (炭)
13	黄茶褐色砂層 (炭)	6	黄茶褐色粘質土層 (炭)
14	明茶褐色粘質土層	7	淡黄茶褐色粘質土層 (炭)
15	同 上	8	茶褐色粘質土層 (炭)
16	濁茶褐色砂層	9	淡茶褐色粘質土層 (炭)
17	茶褐色粘質土層	第26号～第29号土坑	
18	同 上	1	黄茶褐色粘質土層
19	茶灰褐色砂層	2	濁黄茶褐色粘質土層 (炭)
20	濁黄灰色砂層	3	黄褐色砂質土層 (炭・粘)
		4	淡茶褐色粘質土層 (粘)
		5	明黄茶褐色粘質土層 (粘)
		6	明黄褐色粘質土層 (粘)
		7	黄灰色砂質土層 (炭)
		8	黄褐色粘質土層
		9	暗黄褐色粘質土層
		10	暗黄灰色砂質土層
		11	濁黄褐色粘質土層 (炭・粘)
		12	暗茶褐色粘質土層
		13	黄褐色粘質土層 (炭・粘)
		14	黄茶褐色粘質土層 (炭)
		15	明茶褐色粘質土層
第11号土坑			
1	濁茶褐色粘質土層		
2	淡茶褐色粘質土層 (炭)		
3	淡茶褐色粘質土層 (炭) (若干砂質土多い)		
4	黄灰色砂質土層		
5	黄茶褐色砂質土層		
6	茶褐色粘質土層		
7	暗茶褐色粘質土層 (炭)		
8	暗黄茶褐色粘質土層 (炭・粘)		
9	黄褐色粘砂層 (炭・粘)		



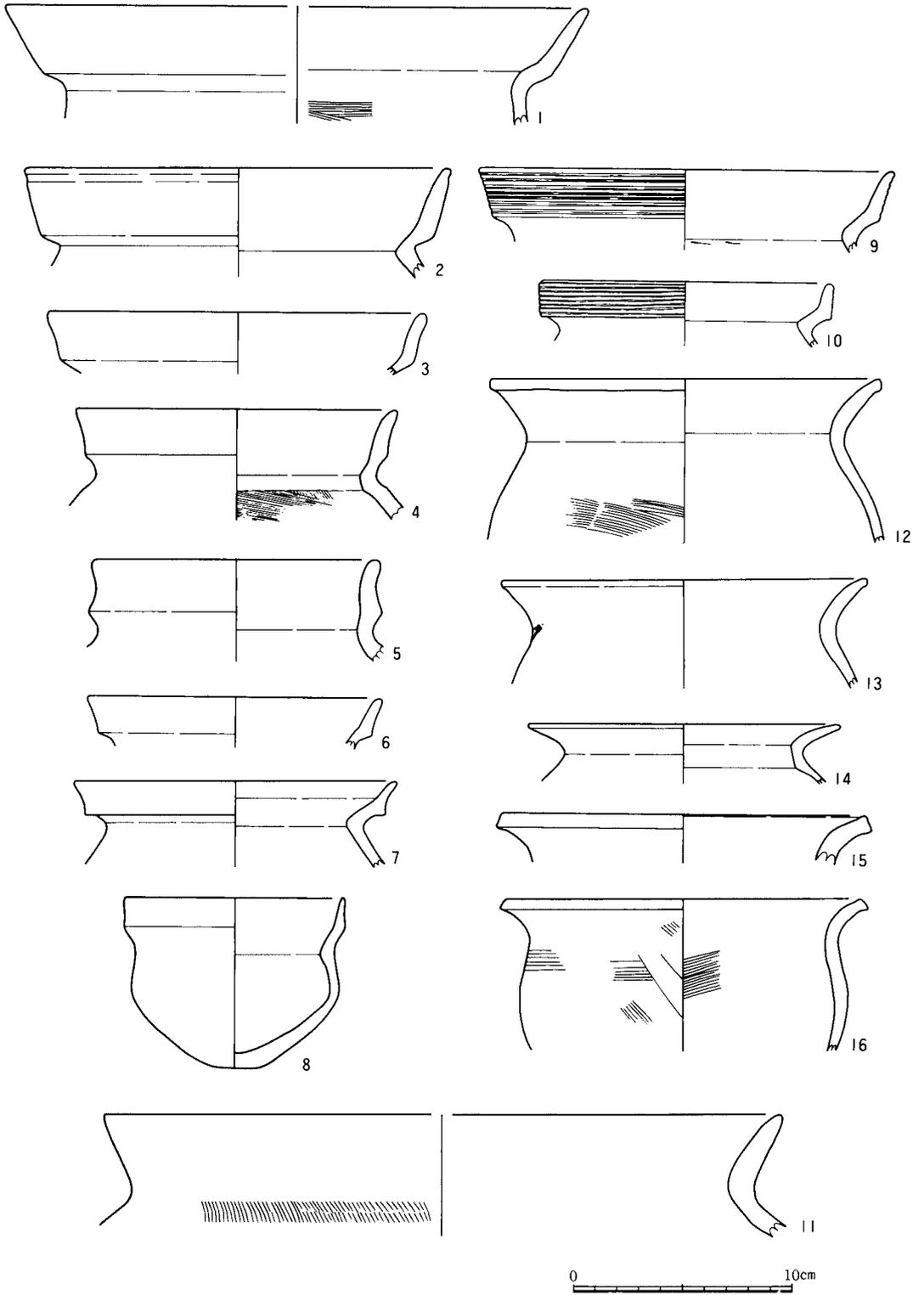
第21图 第1号·第2号竖穴住居出土土器实测图 (S=1/3)



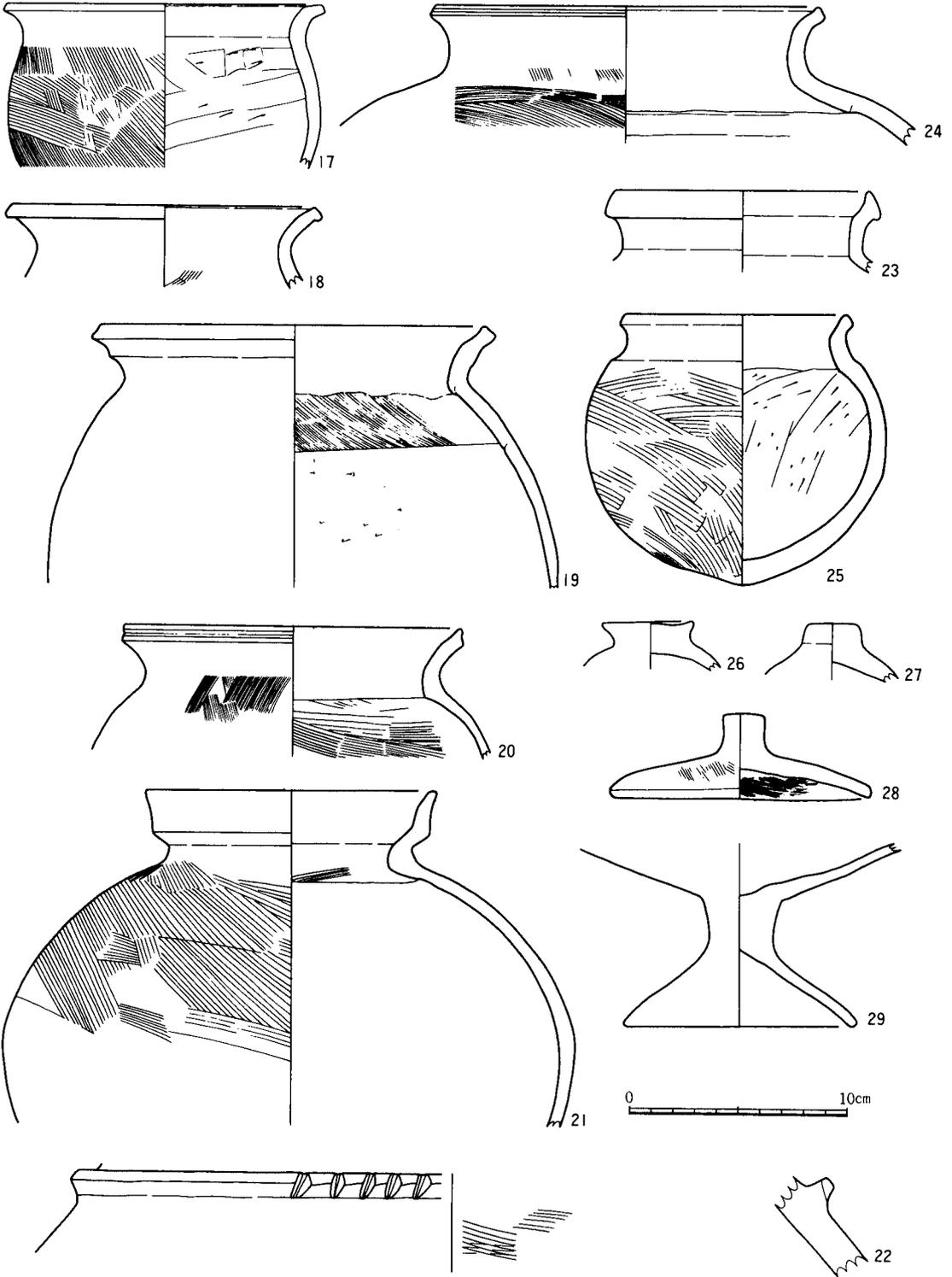
第22図 第2号竪穴住居出土土器実測図1 (S = 1/2)



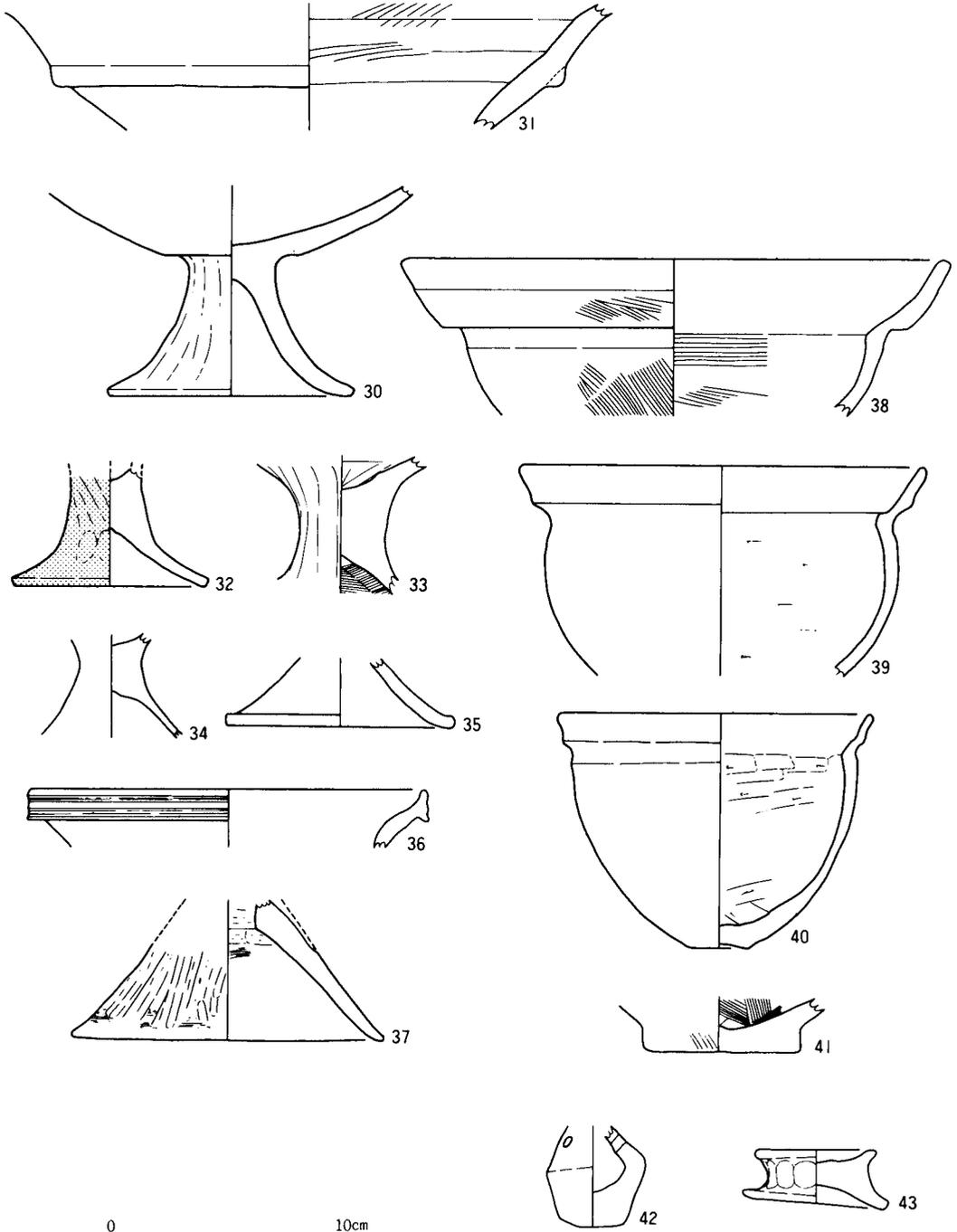
第23图 第2号竖穴住居出土土器实测图2 (S=1/3)



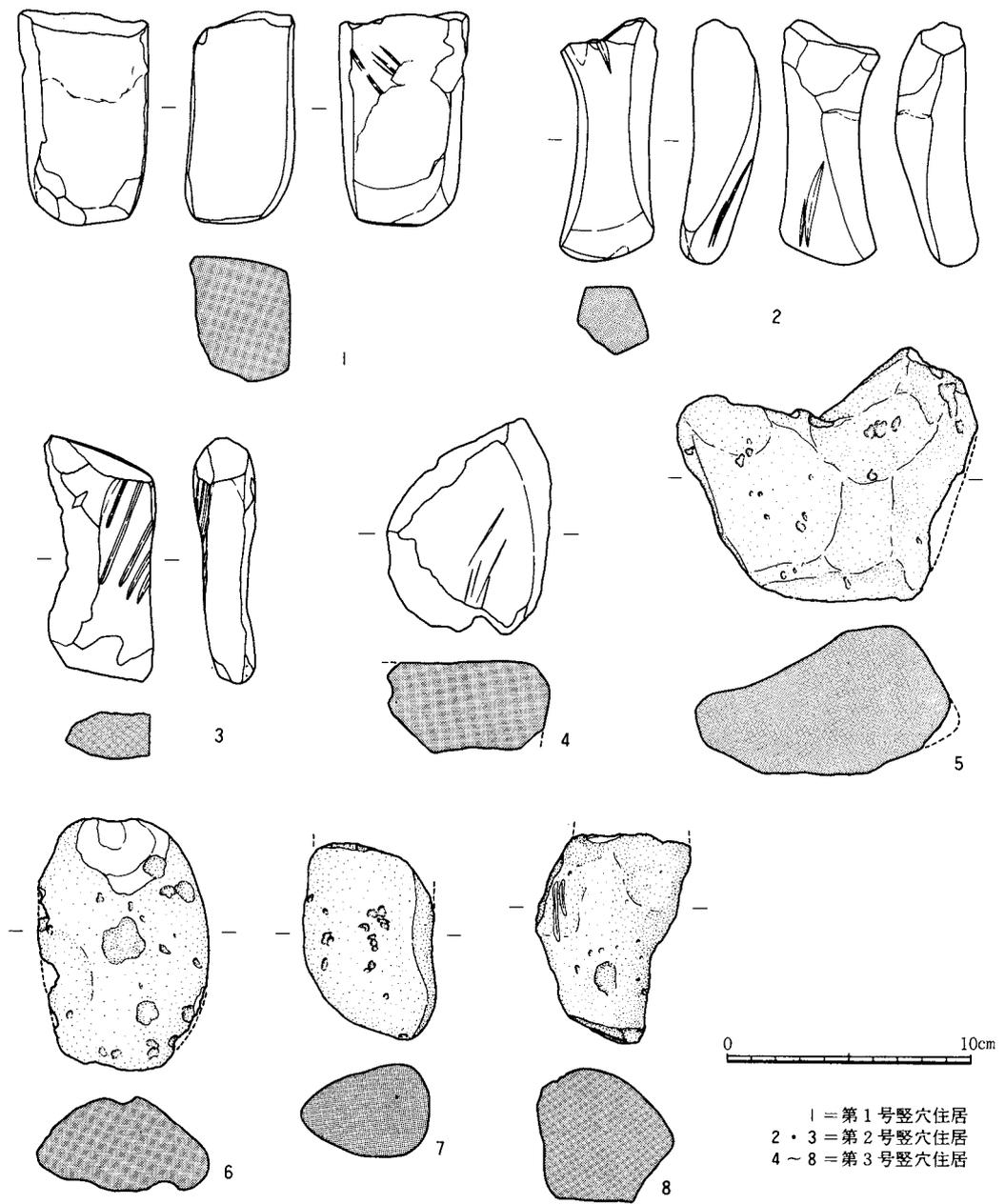
第24図 第3号竪穴住居出土土器実測図1 (S = 1/3)



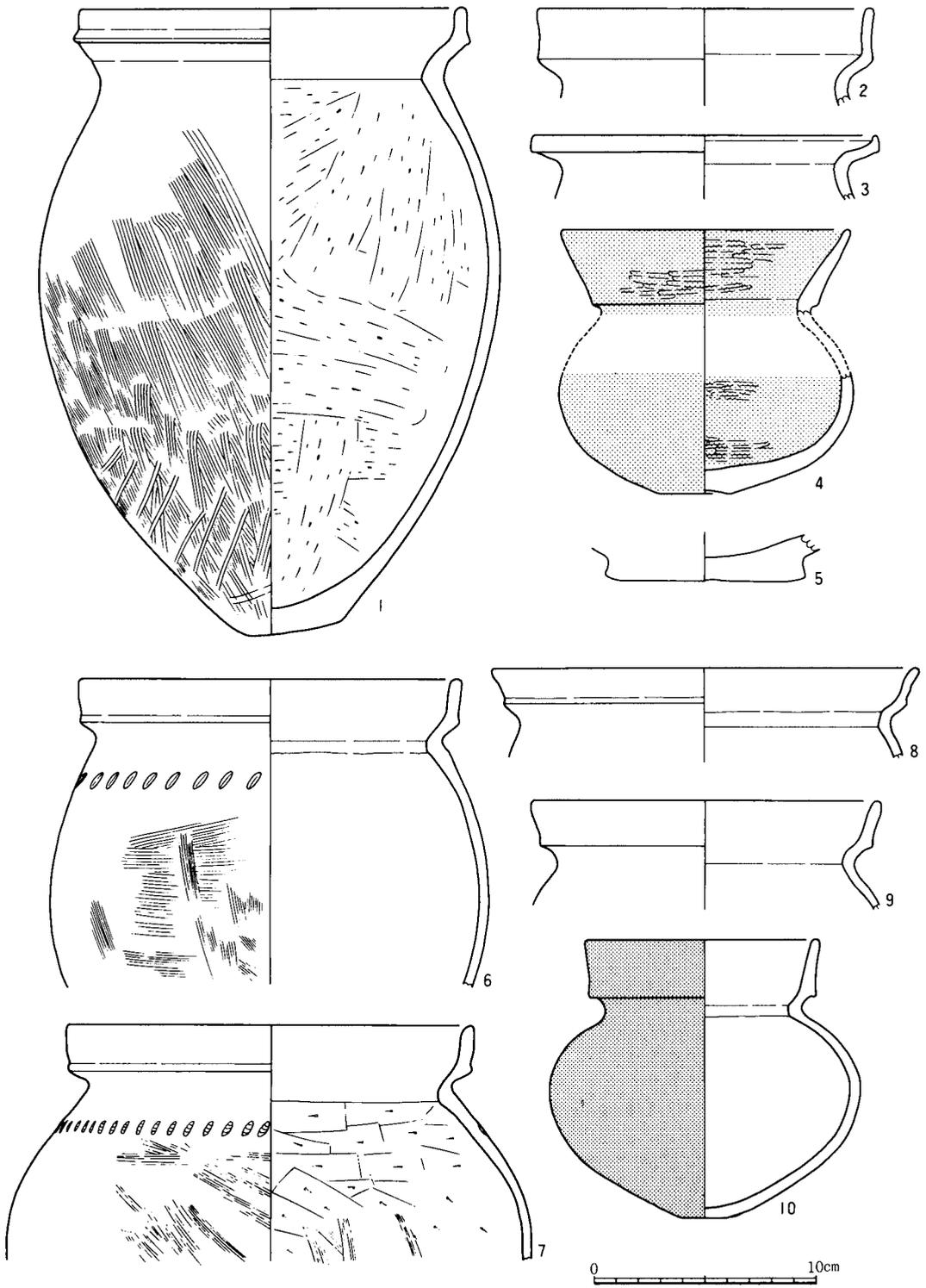
第25图 第3号竖穴住居出土土器实测图2 (S=1/3)



第26図 第3号竪穴住居出土土器実測図3 (S=1/3)

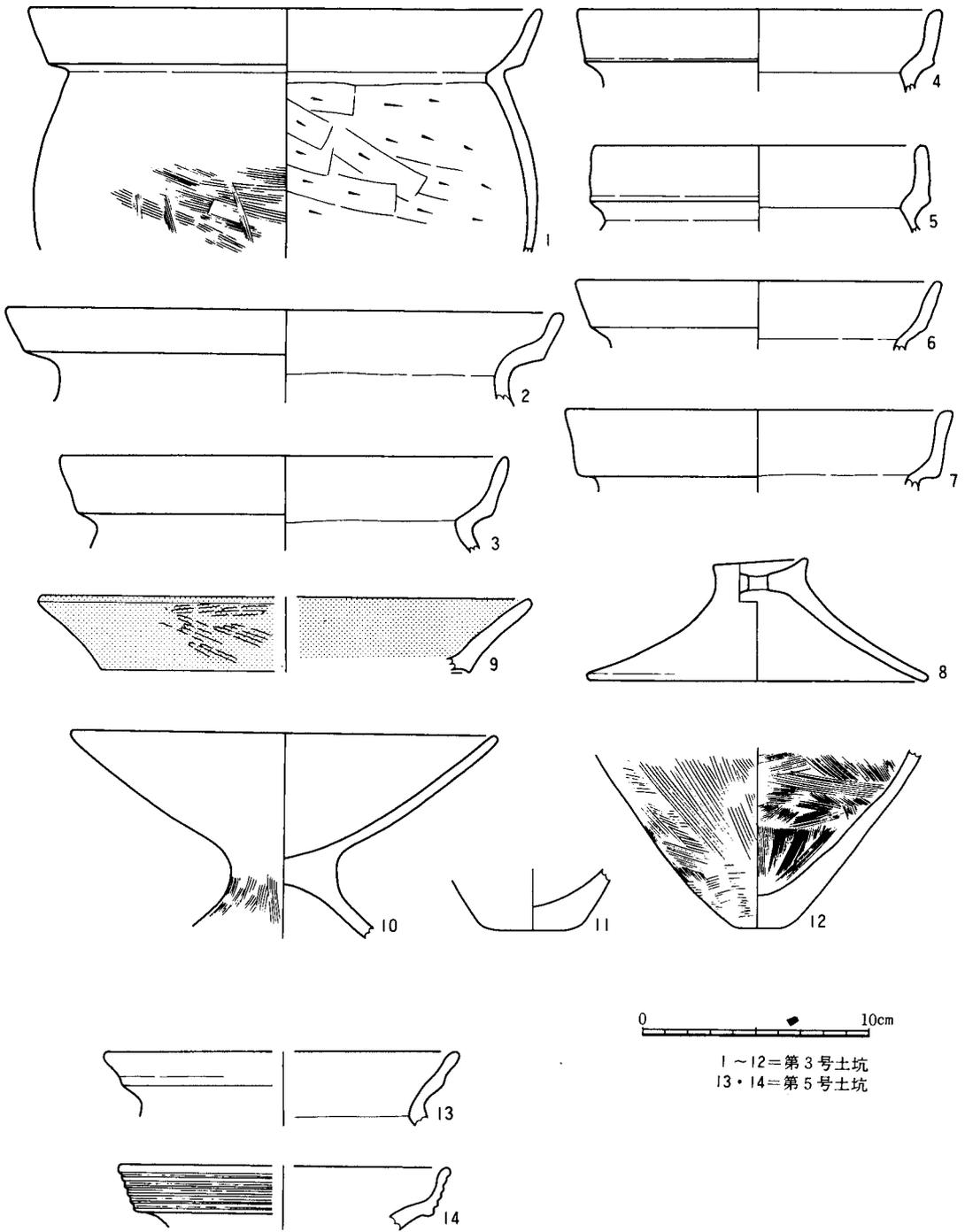


第27图 竖穴住居出土砾石・軽石実測図 (S = 1/2)

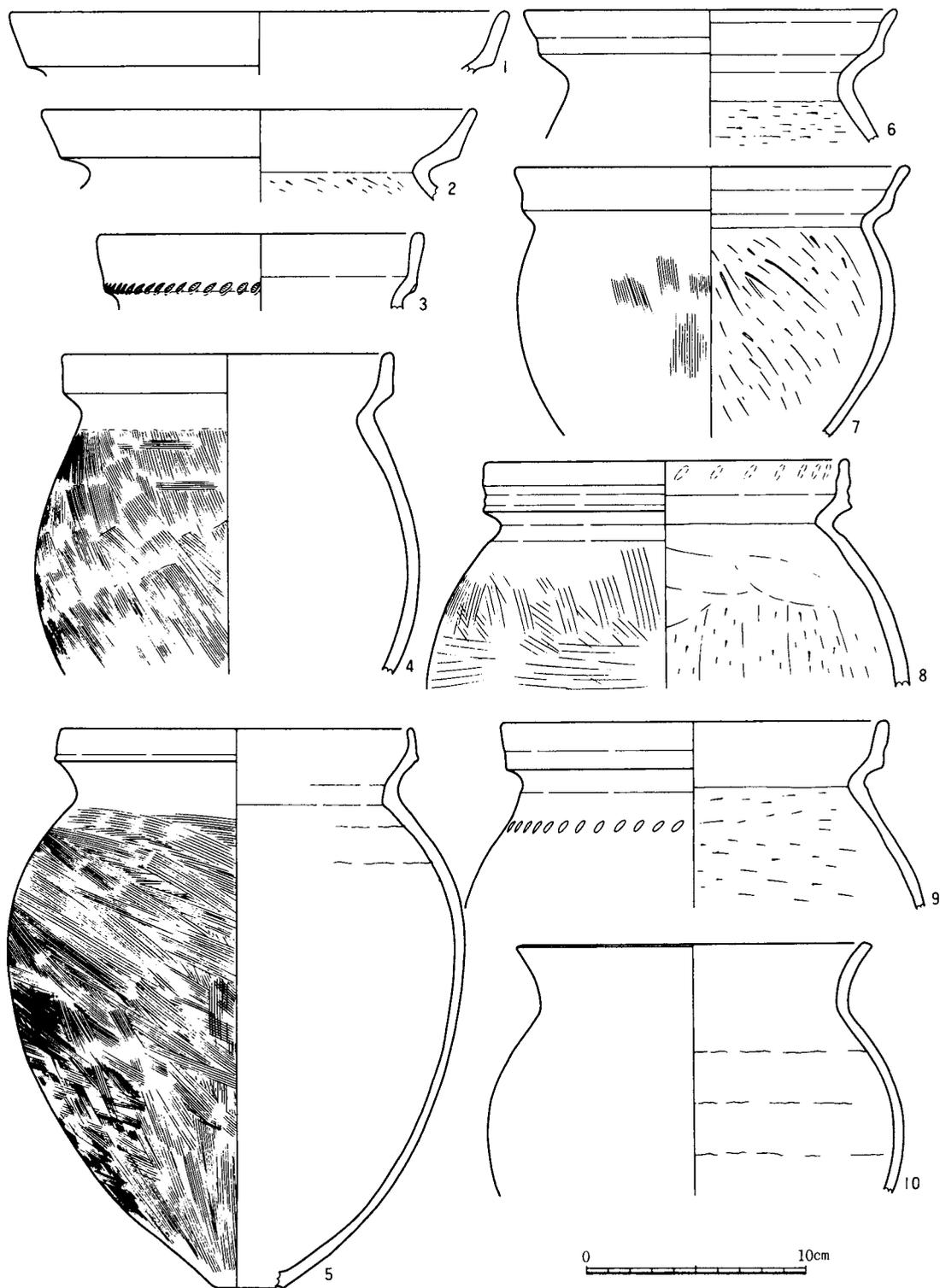


1 ~ 5 = 第2号土坑 6 ~ 10 = 第7号土坑

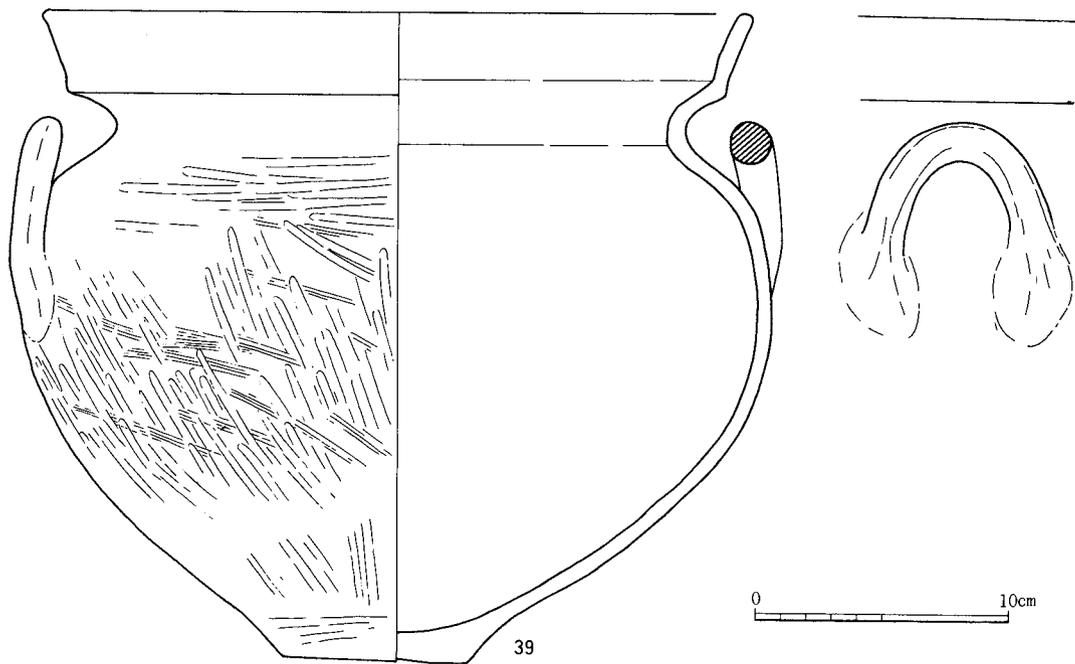
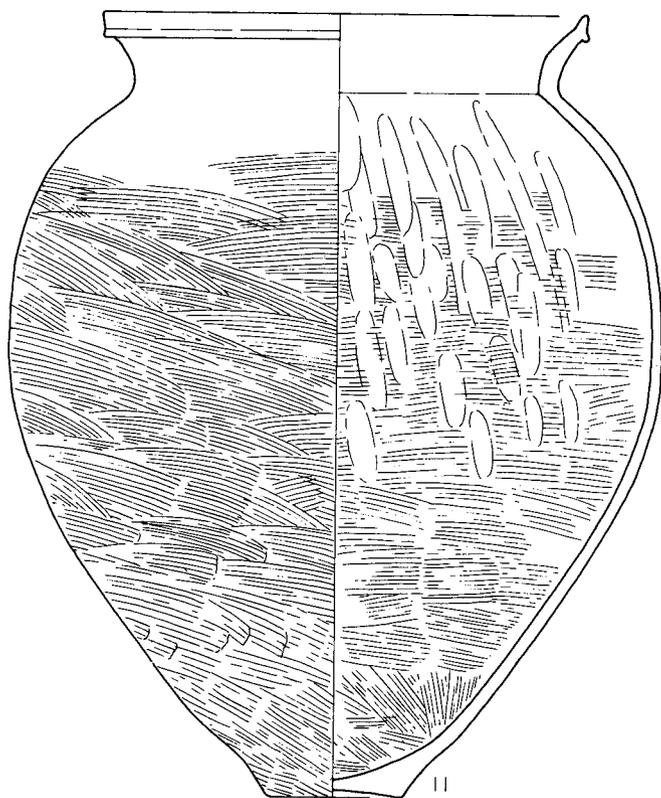
第28図 第2号・第7号土坑出土土器実測図 (S = 1/2)



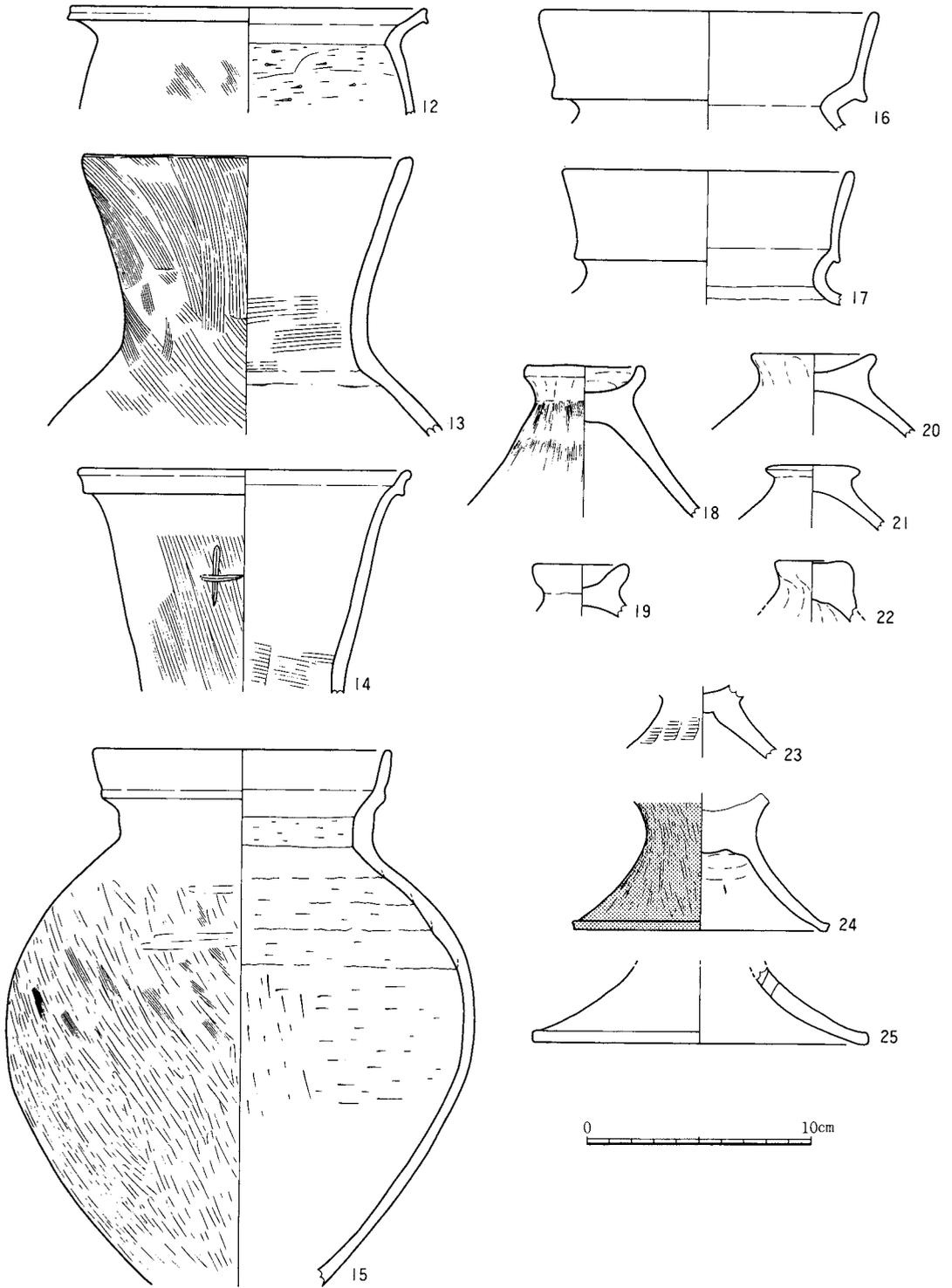
第29图 第3号·第5号土坑出土土器实测图 (S = 1/3)



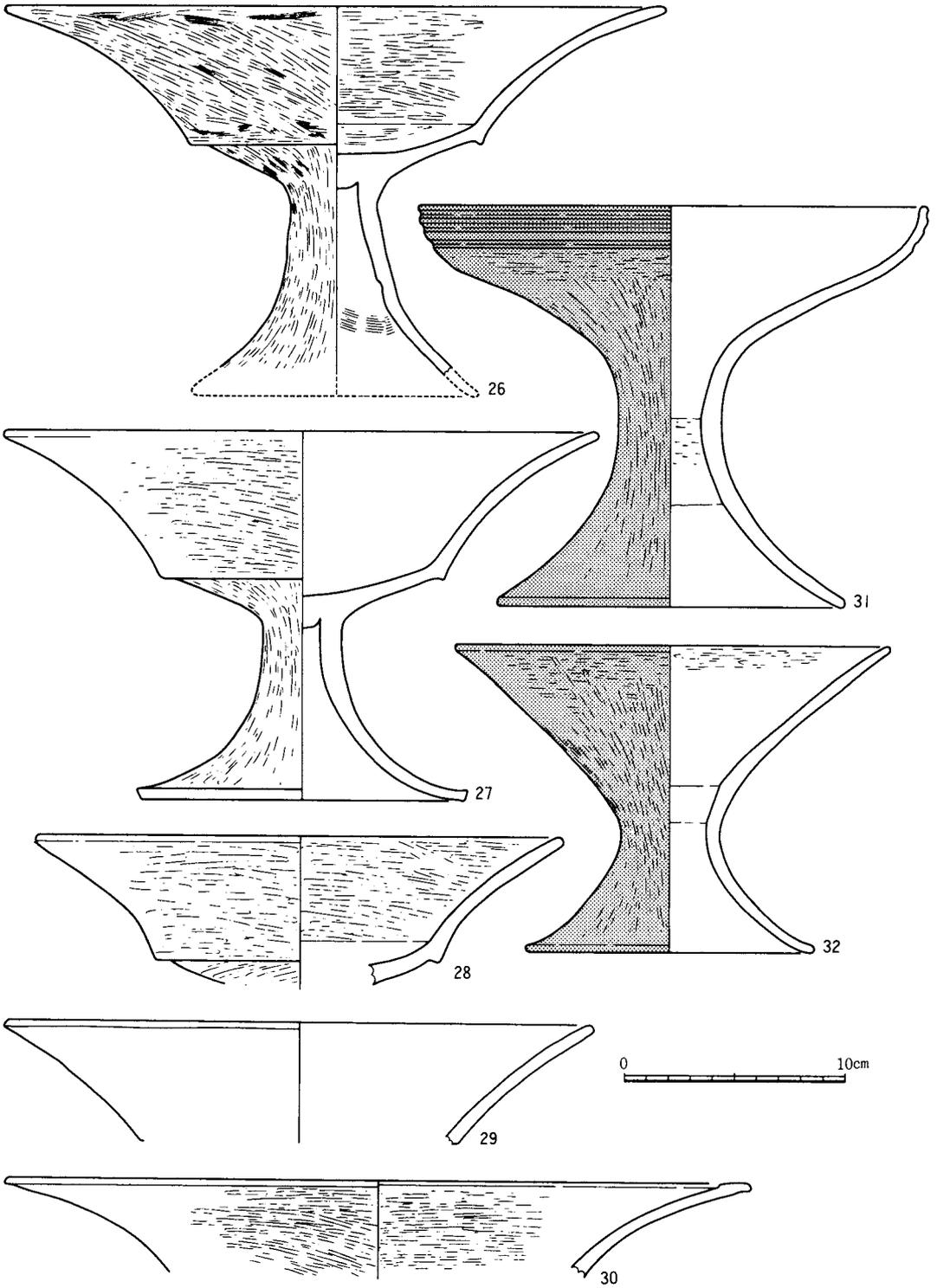
第30図 第4号土坑出土土器実測図1 (S=1/3)



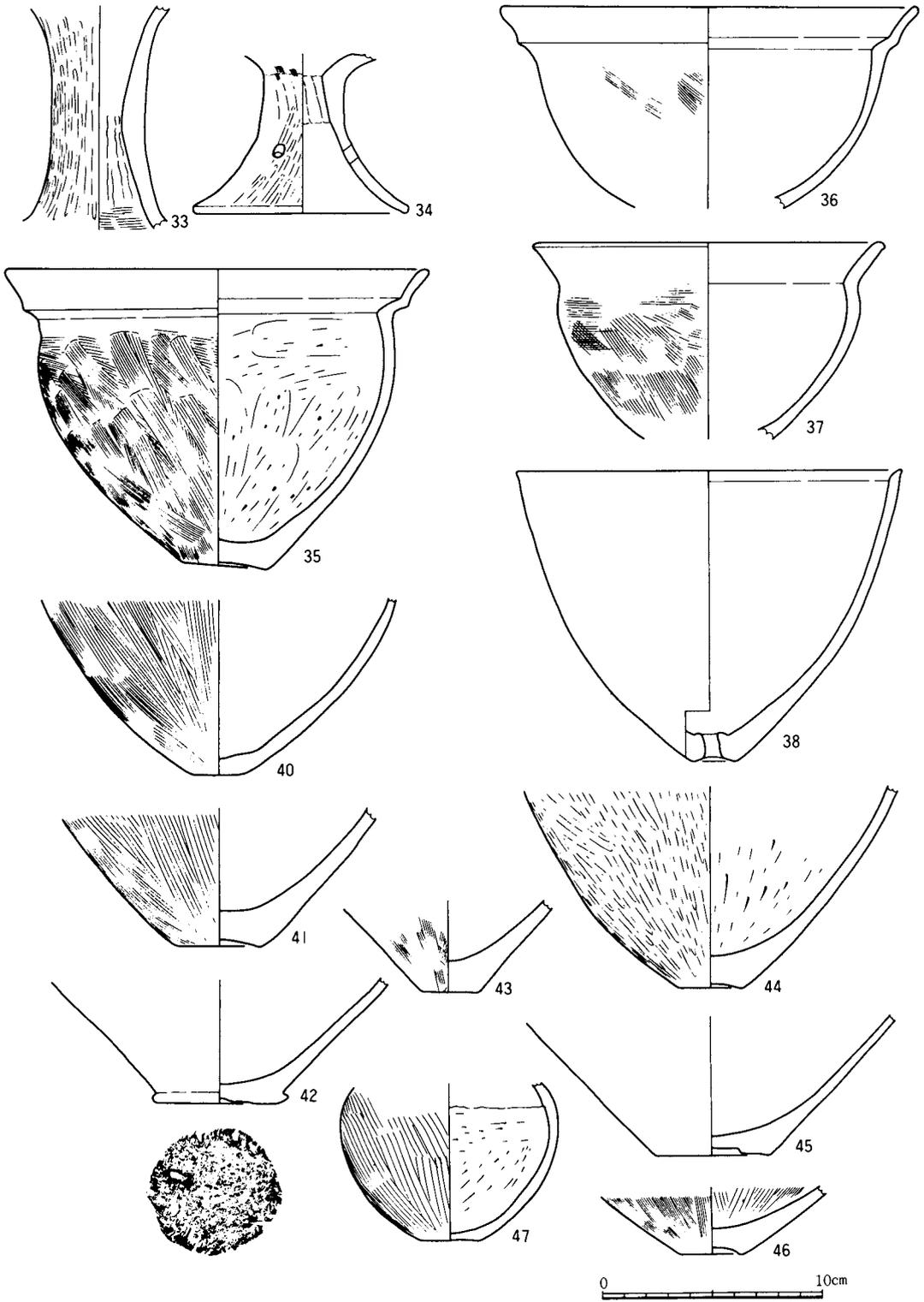
第31图 第4号土坑出土土器实测图2 (S=1/3)



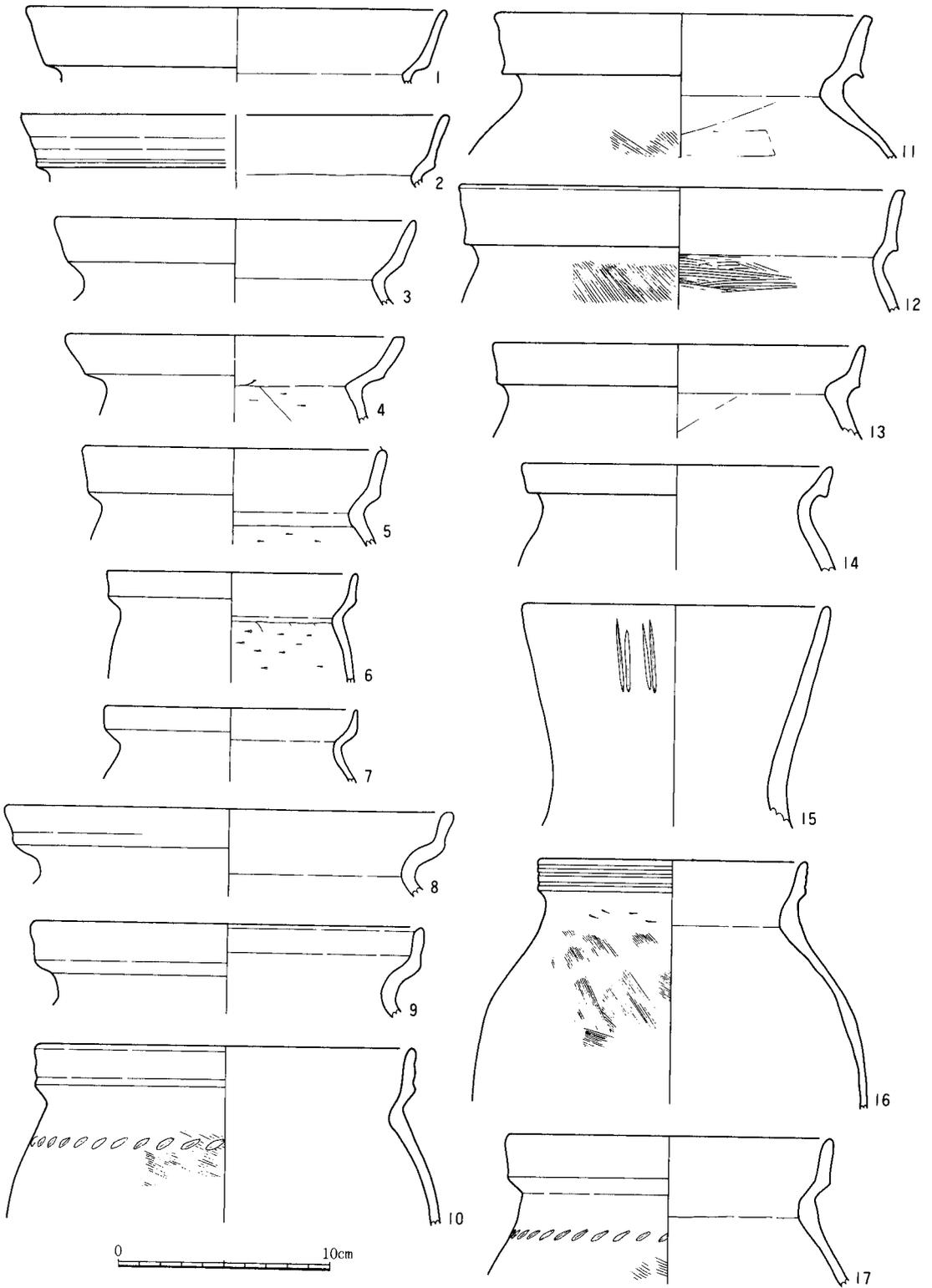
第32図 第4号土坑出土土器実測図3 (S = 1/3)



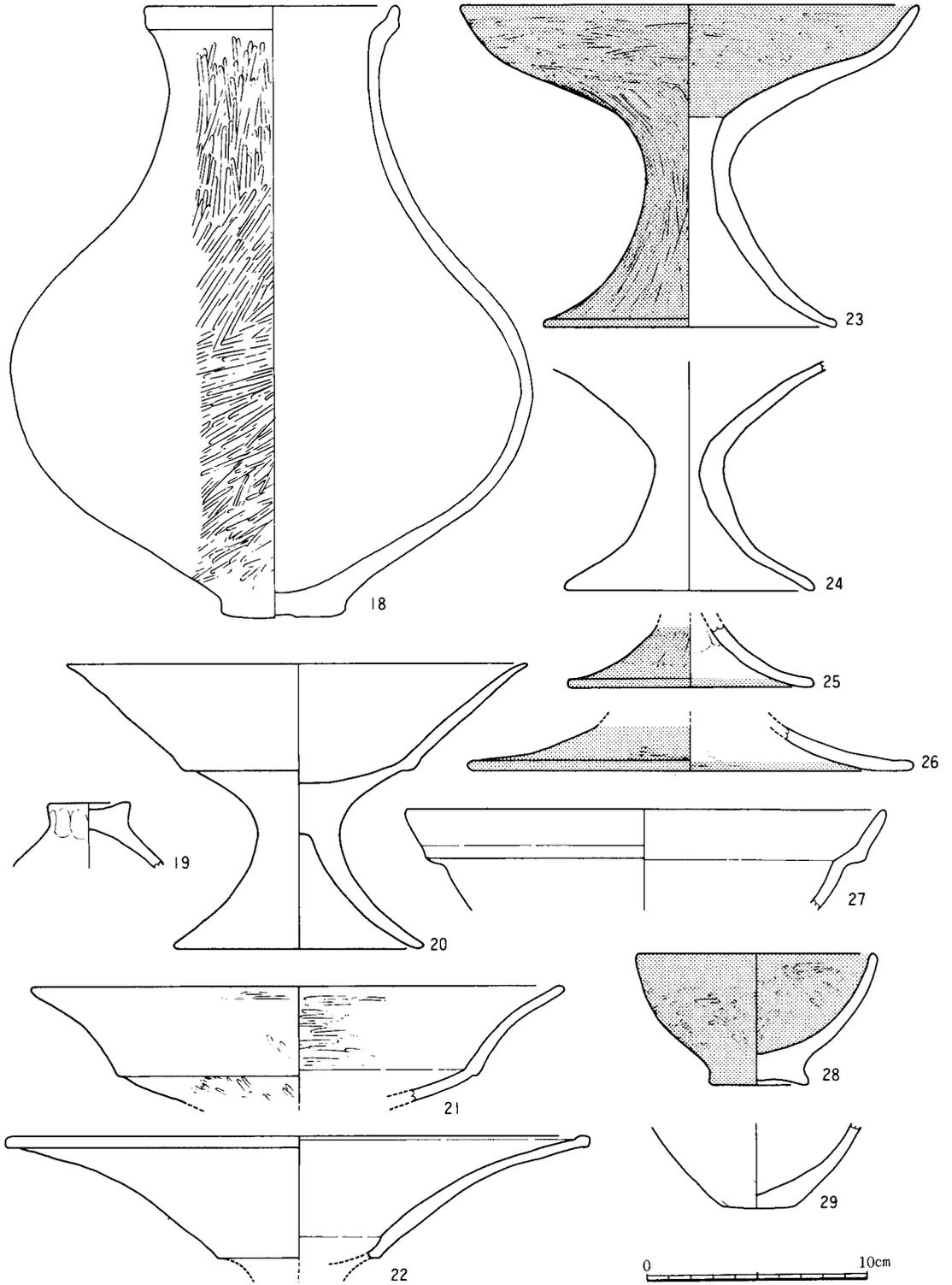
第33图 第4号土坑出土土器实测图4 (S=1/3)



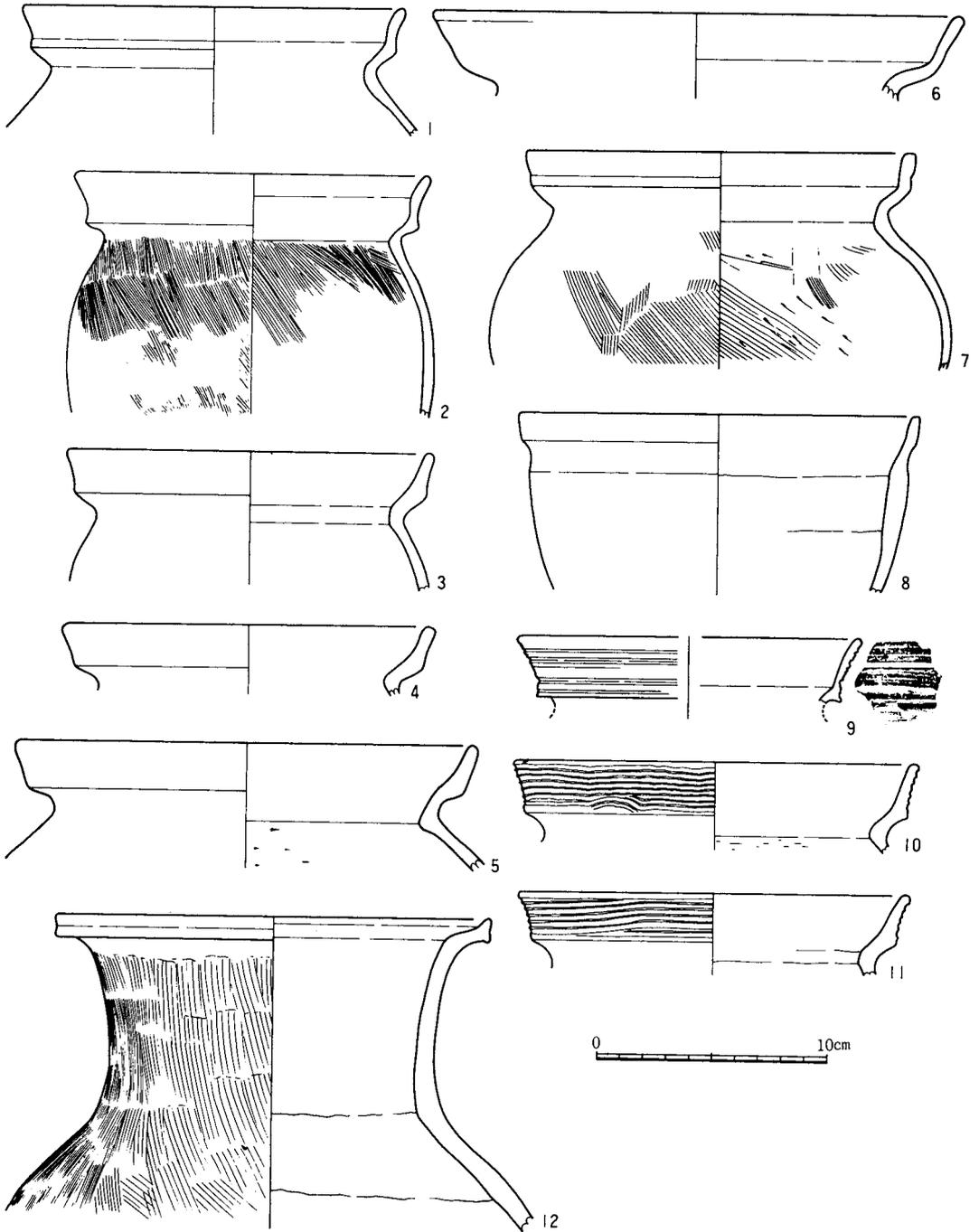
第34图 第4号土坑出土土器实测图5 (S = 1/3)



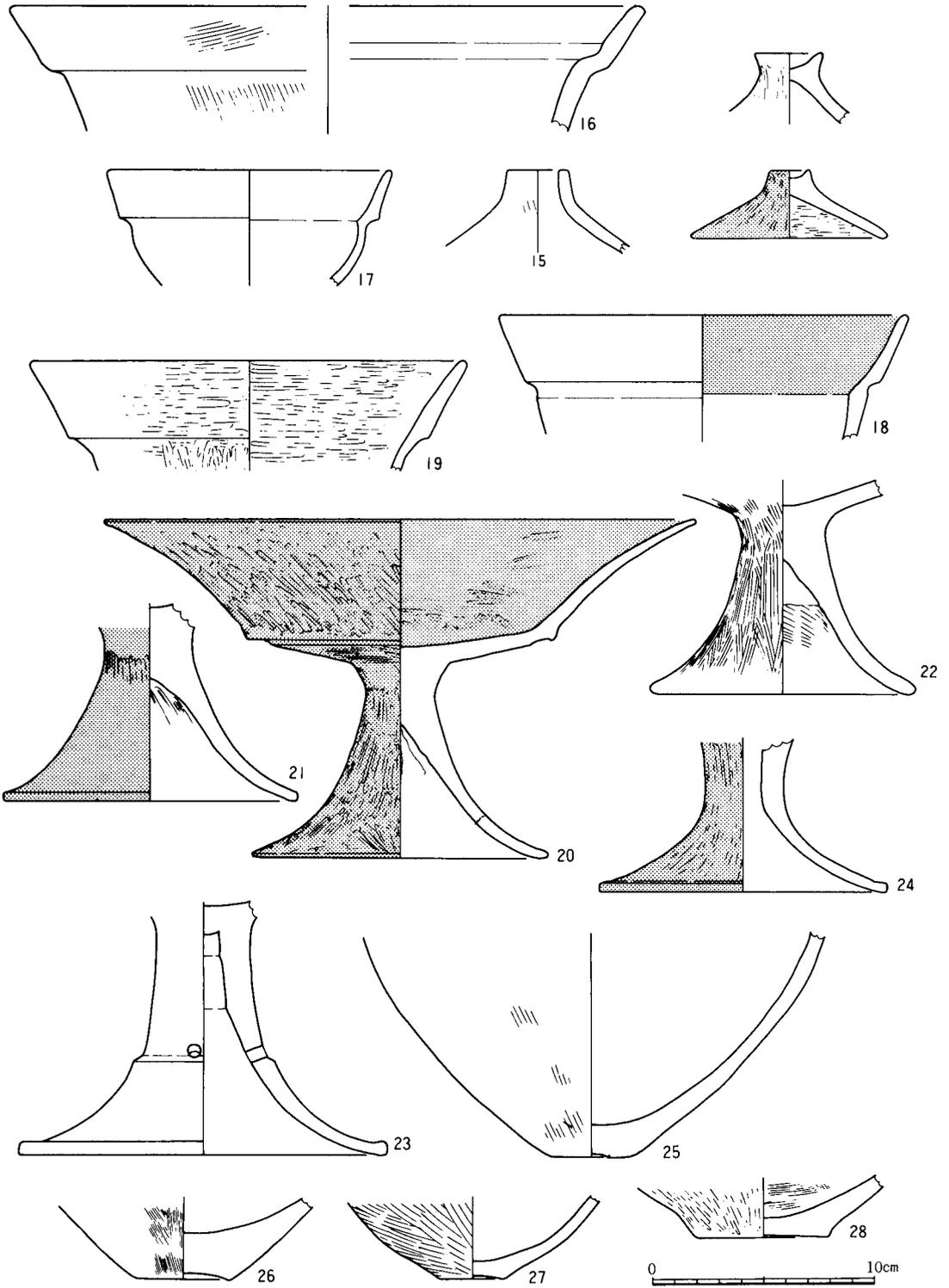
第35图 第8号土坑出土土器实测图1 (S=1/3)



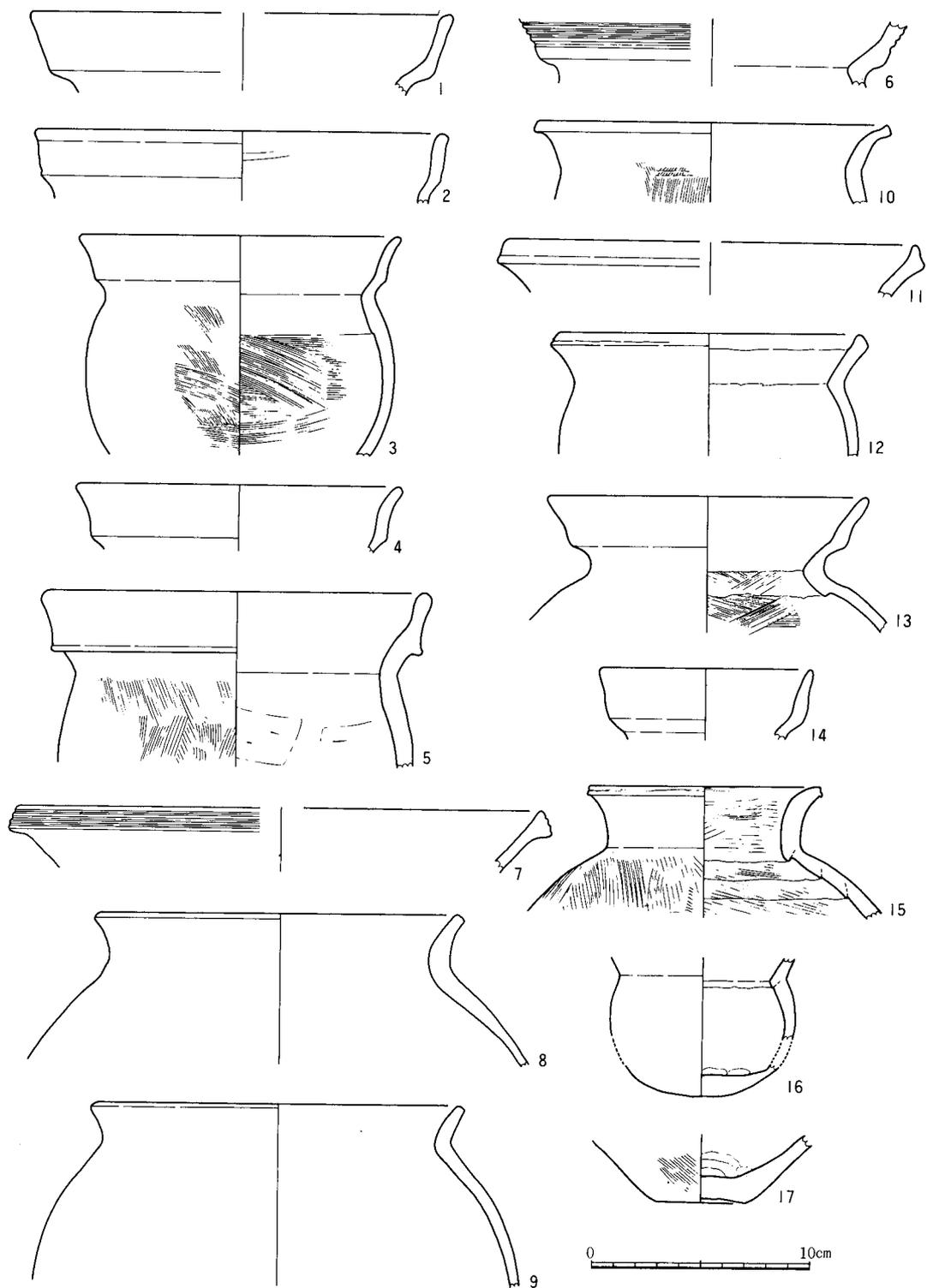
第36図 第8号土坑出土土器実測図2 (S = 1/2)



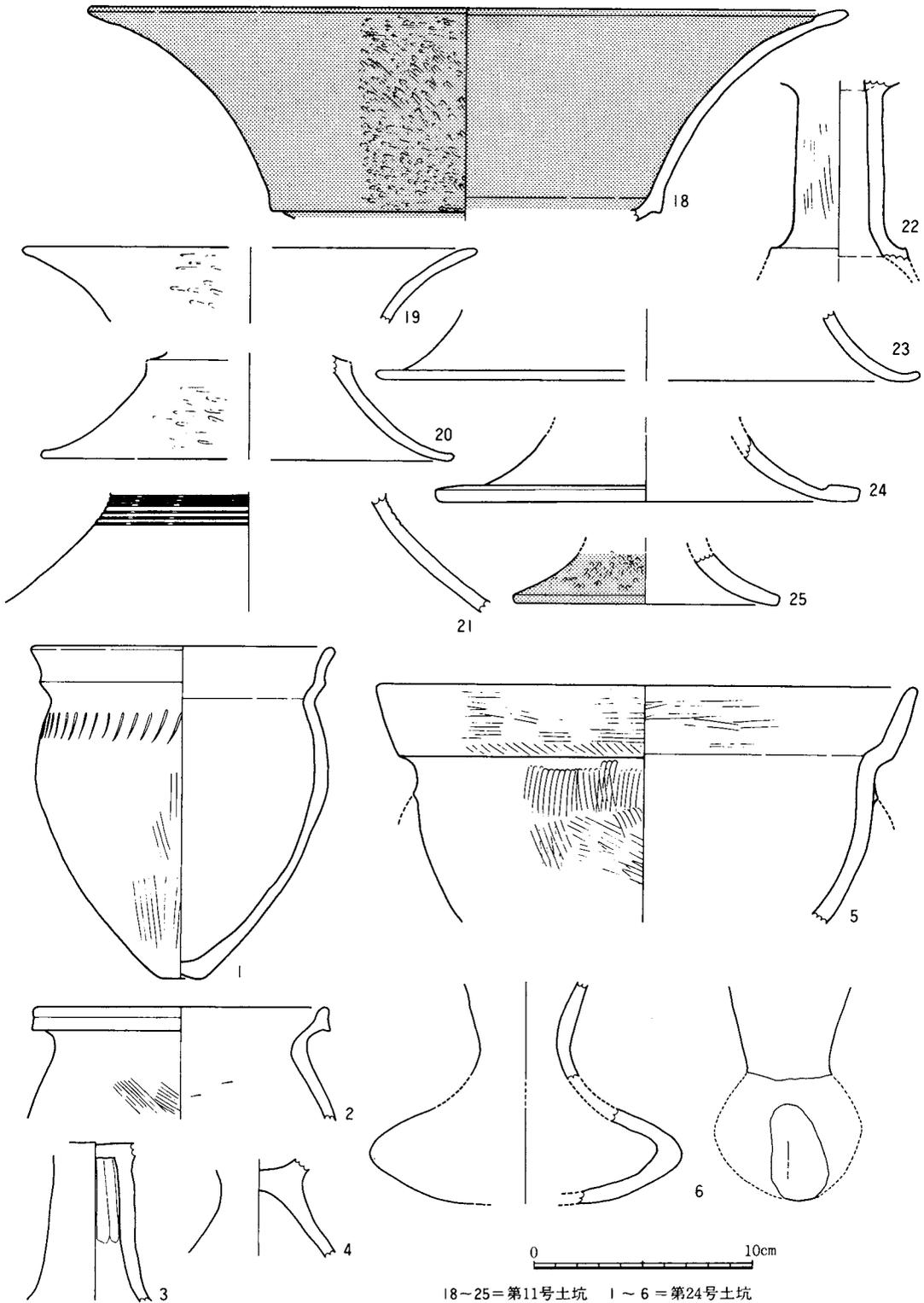
第37图 第9号土坑出土土器实测图1 (S=1/3)



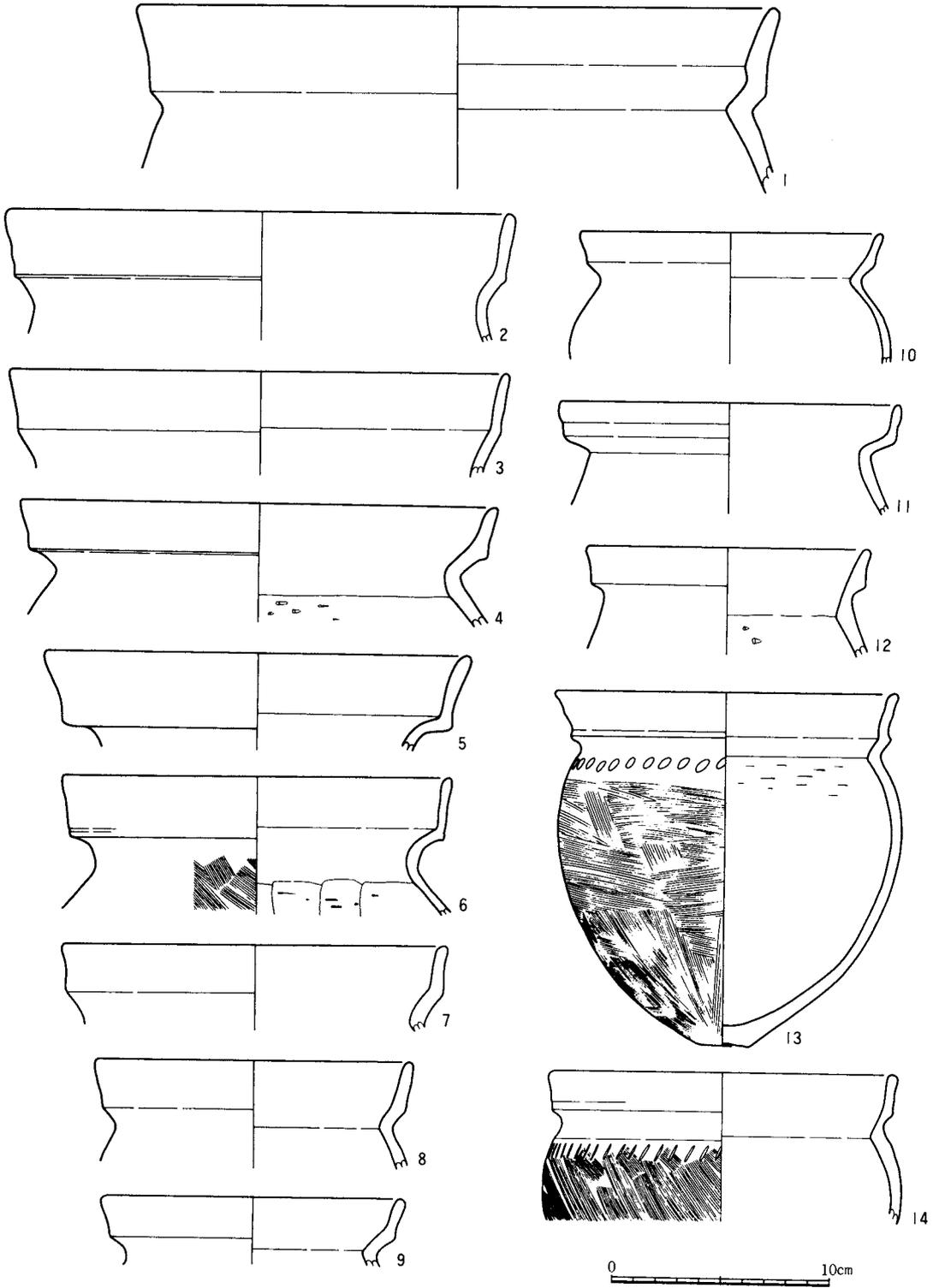
第38図 第9号土坑出土土器実測図2 (S 1/3)



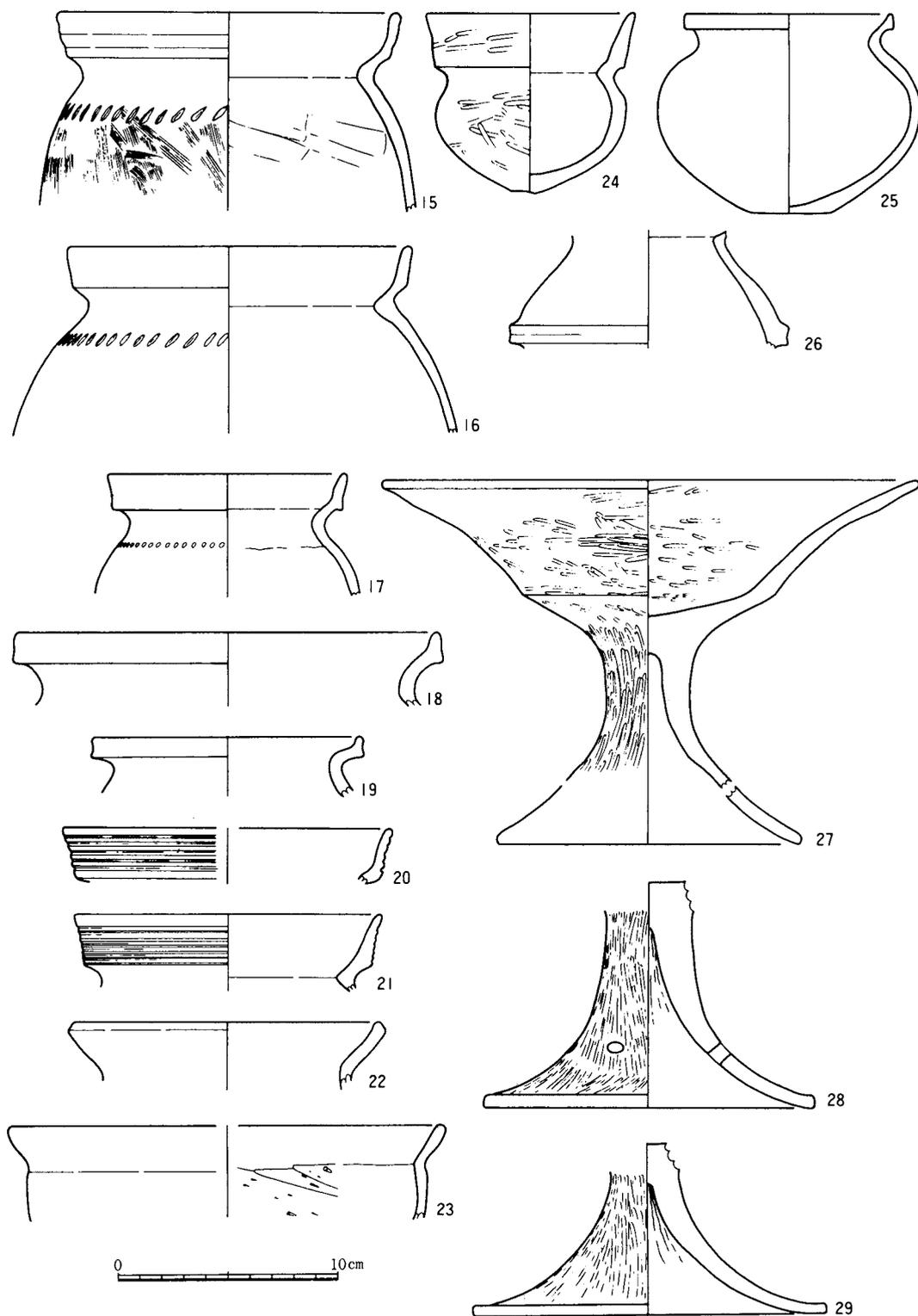
第39图 第11号土坑出土土器实测图 (S = 1/3)



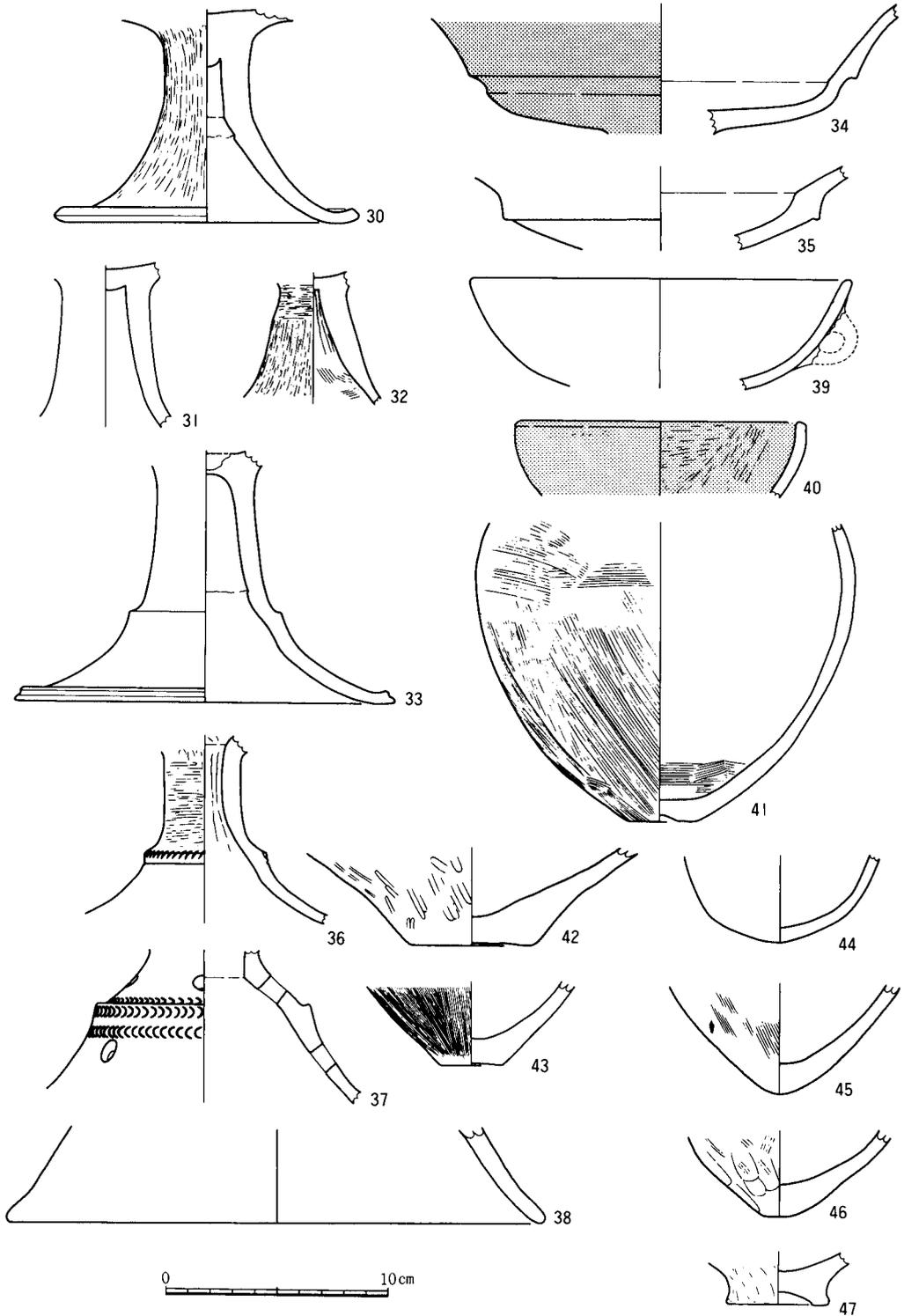
18-25=第11号土坑 1~6=第24号土坑
 第40图 第11号・第24号土坑出土土器実測図 (S=1/3)



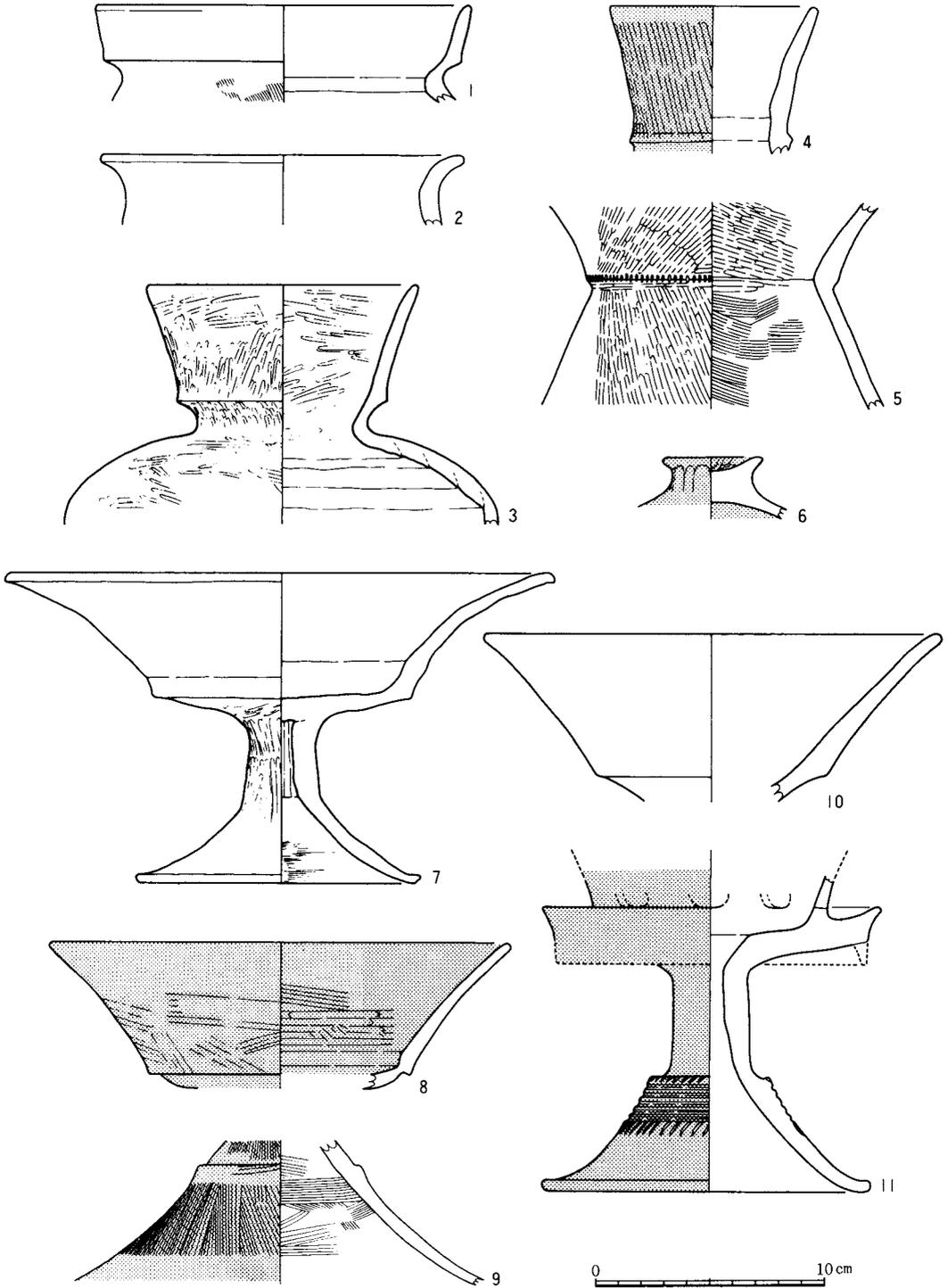
第41图 第22号土坑出土器实测图1 (S=1/3)



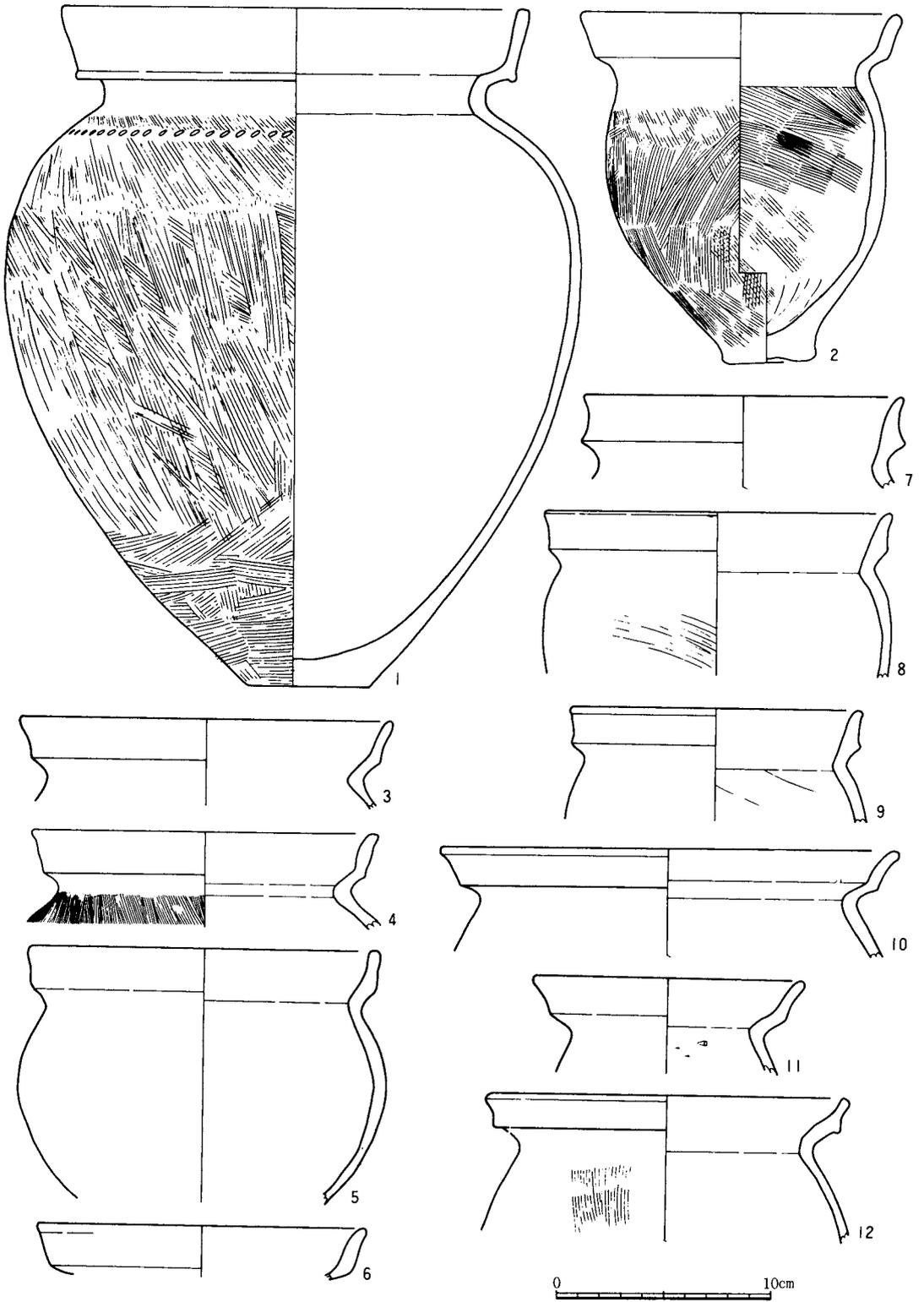
第42図 第22号土坑出土土器実測図2 (S=1/3)



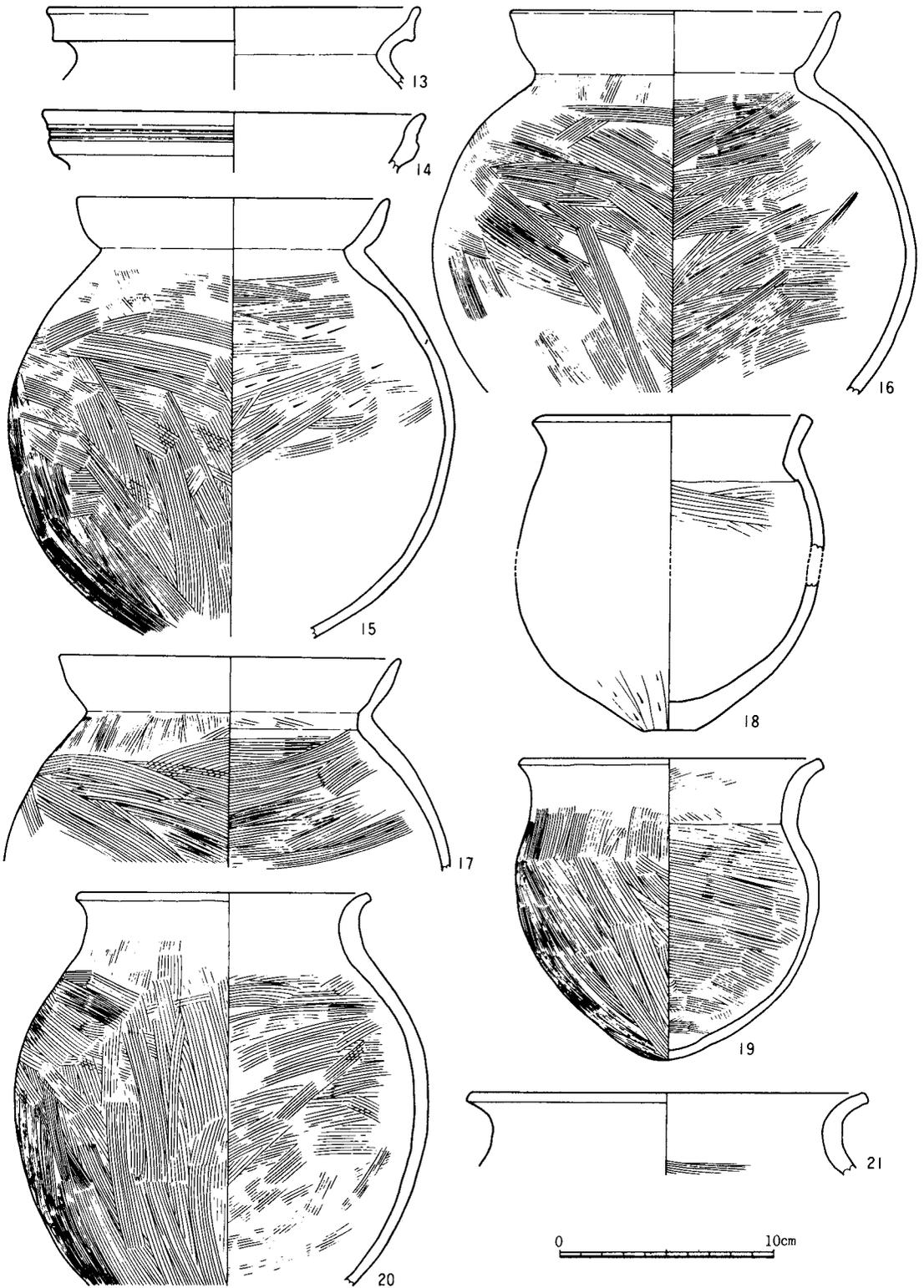
第43图 第22号土坑出土土器实测图3 (S=1/3)



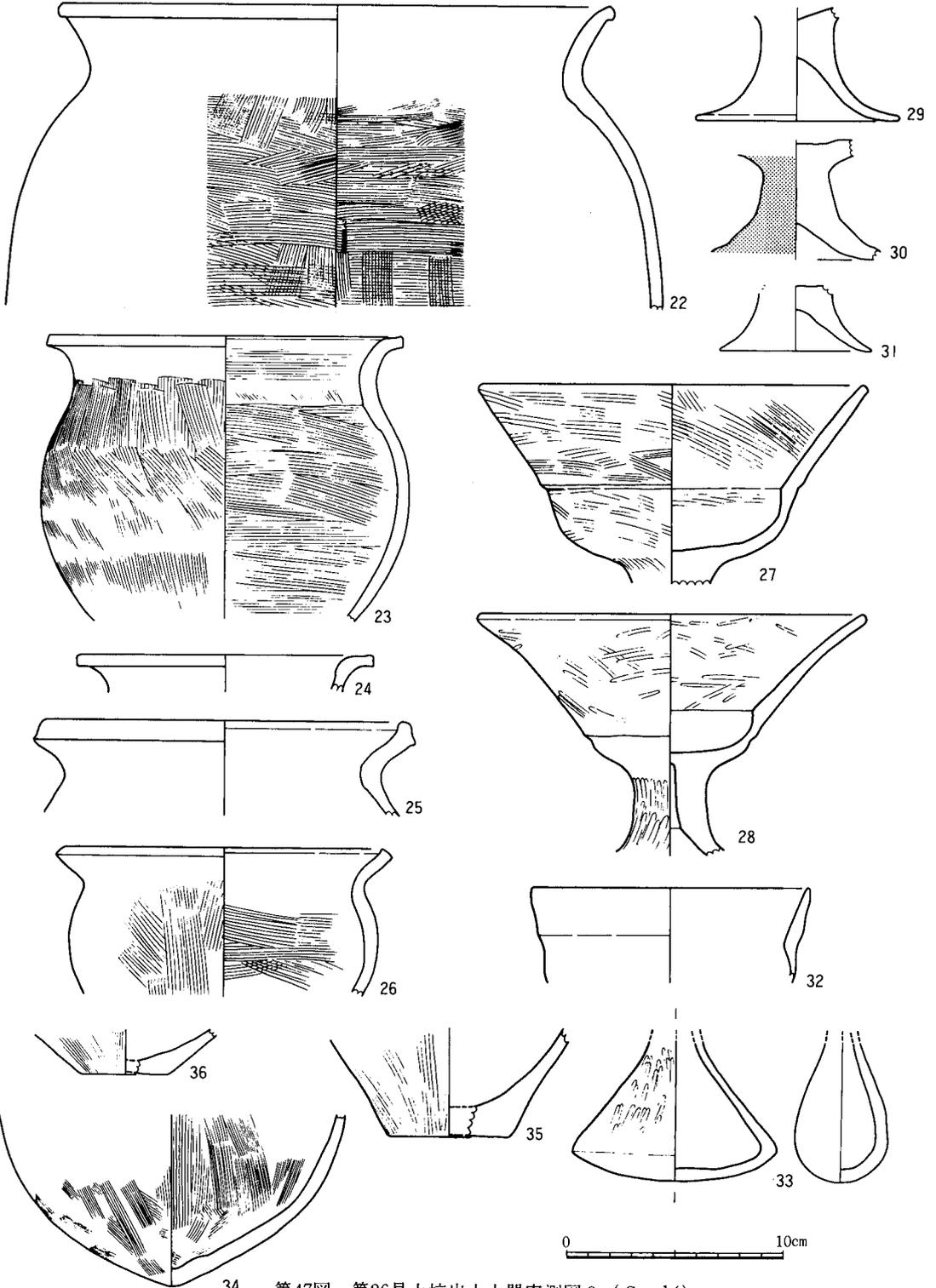
第44図 第25号土坑出土土器実測図 (S = 1/2)



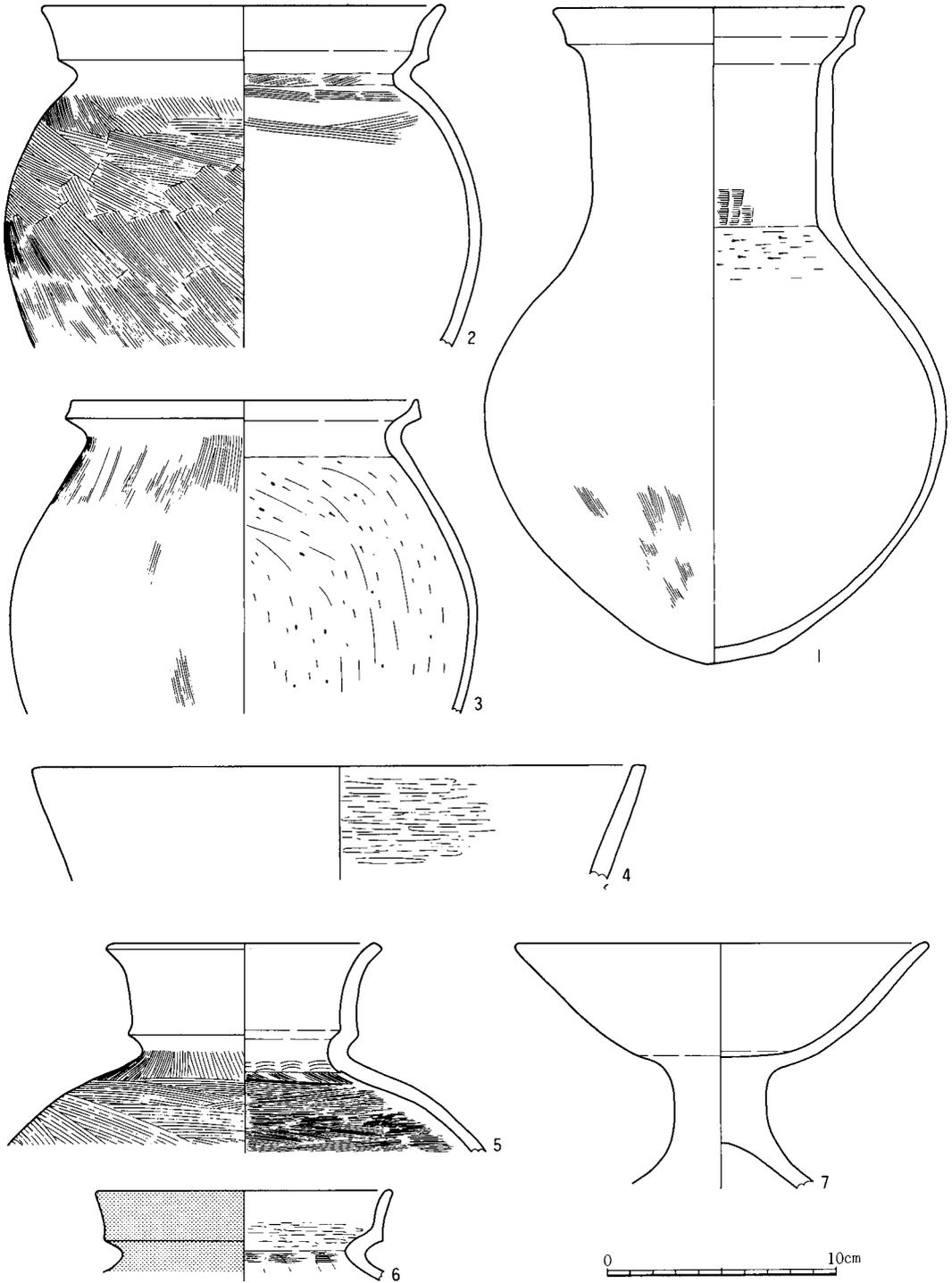
第45图 第26号土坑出土土器实测图1 (S 1/3)



第46号 第26号土坑出土土器実測図2 (S = 1/3)

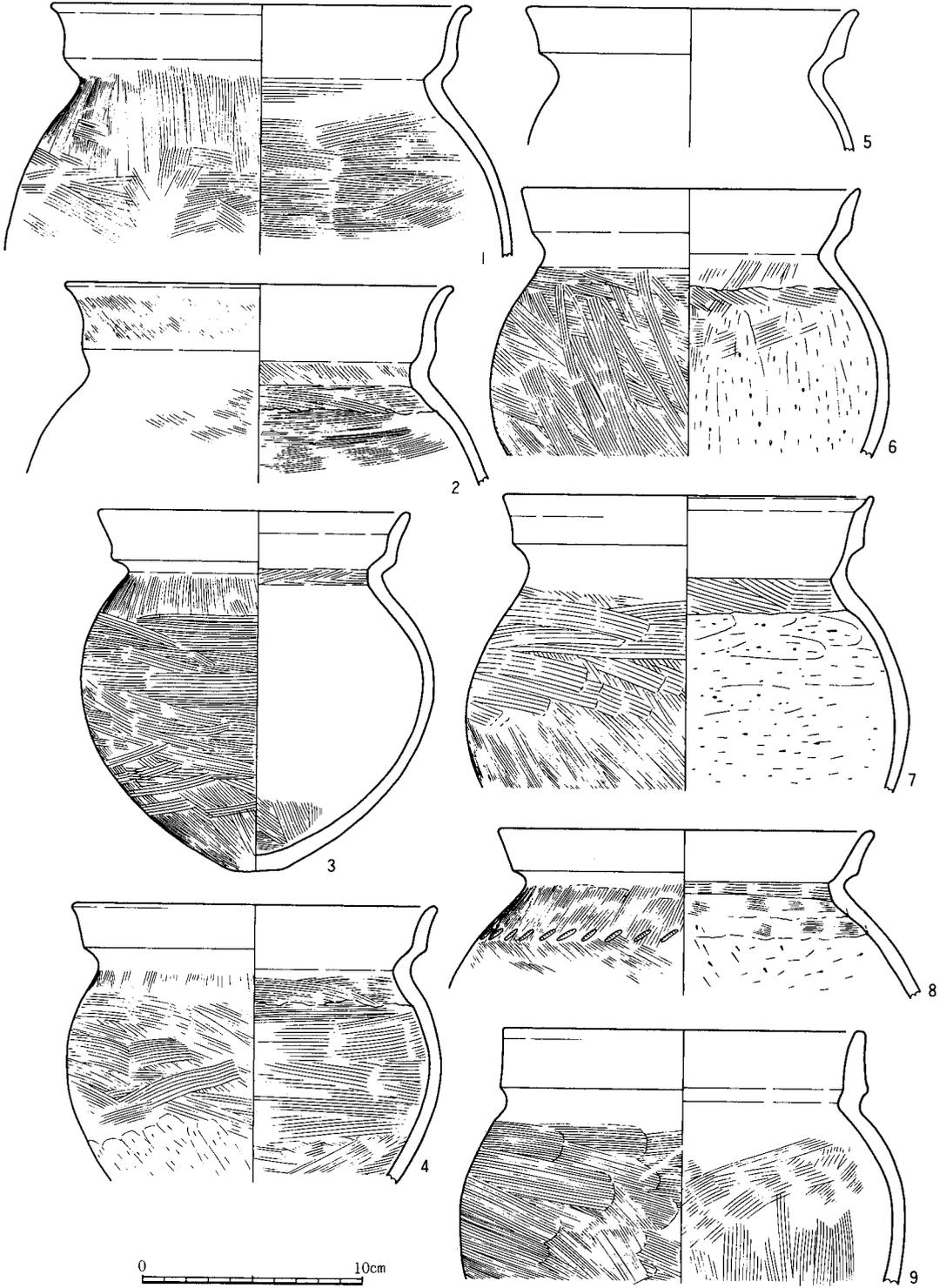


34 第47图 第26号土坑出土土器实测图3 (S=1/3)

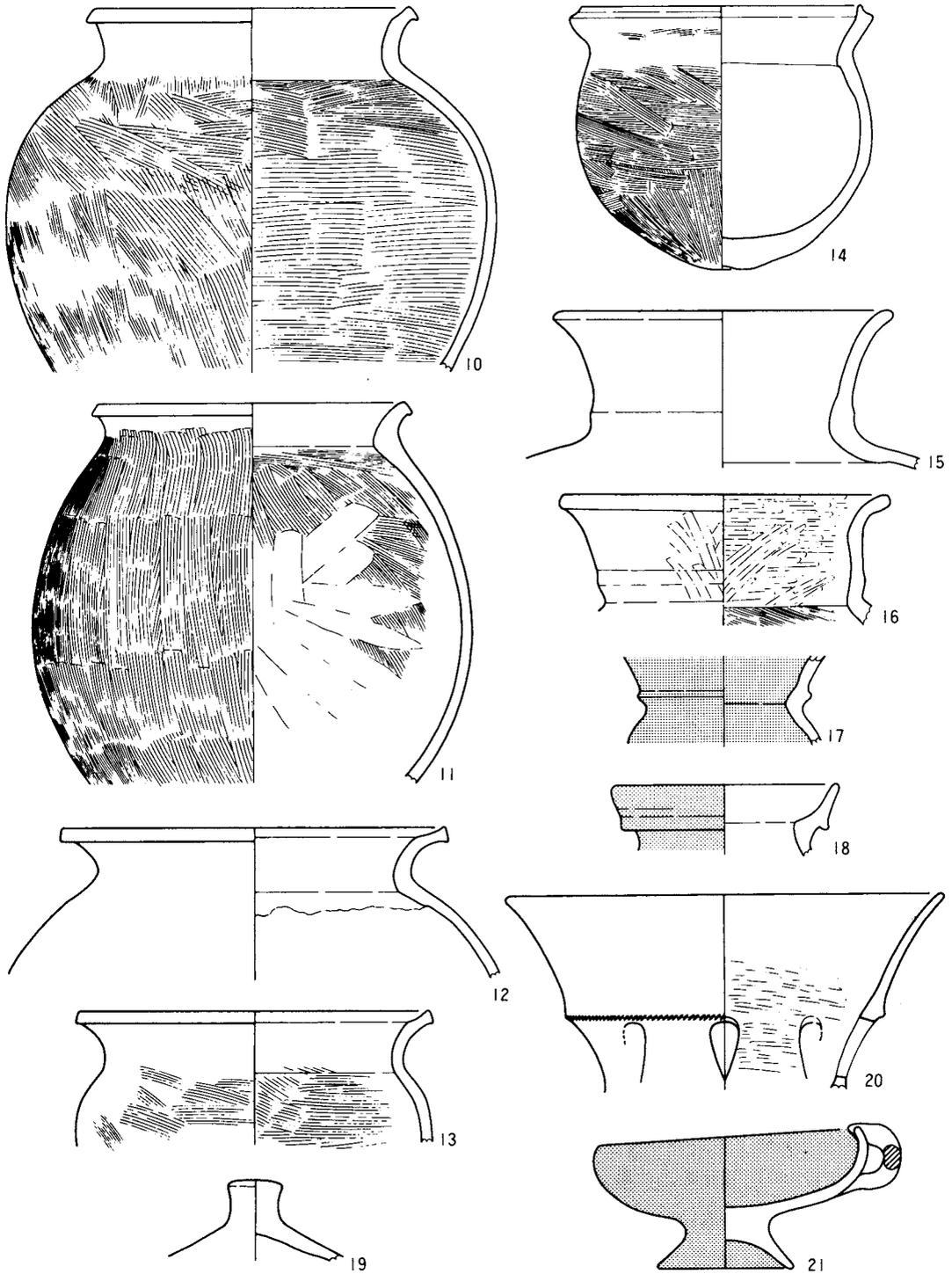


1 = 第27号土坑
2 ~ 7 = 第29号土坑

第48図 第27号・第29号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)



第49图 第28号土坑出土土器实测图1 (S = 1/3)



0 10cm

第50图 第28号土坑出土土器实测图2 (S=1/3)

第3節 まとめ

遺構の時期について 本遺跡における段階的整理は次章第3節において試みられているので詳細はそれによられたい。第1次調査においては弥生時代後期後葉の月影Ⅰ式期〔田島 1986〕並行と考えられる大型土坑群出土土器を最も早い時期においている。第2～5・7～9号土坑である。本遺跡の第Ⅱ期にあたる。これに続く月影Ⅱ式並行期のものとして、第3号竪穴住居と第11・22・24～29号土坑出土土器をあてている。本遺跡第Ⅲ期である。これに続くのがやや時期をおいた宮地式〔吉岡 1967〕の並行と思われる第1・2号竪穴住居である。

集落の動態について この問題についてはひとり竹生野遺跡に限らず、末森山麓遺跡群総体のなかで考える必要があることは言うまでもない。とくに調査成果の明らかになった宿東山、宿向山の両遺跡は本遺跡との強い連関を想定できる。

須恵器出現以前に限ってみれば、弥生時代後期後葉の法仏式期〔谷内尾 1984〕並行と考えられる時期に宿東山遺跡および宿向山遺跡に集落が出現する。宿東山遺跡では少量ながら鉄器の所有がみられる。これに続いて営まれるのが、本遺跡の大型土坑群である。これにともなう竪穴住居は検出されていないが、遺跡において竪穴住居の存在を予測せしめる西側の緩斜面が明らかでないため、この部分において並行期の住居が存在する可能性がある。さらにこれに続く月影Ⅱ式期には本遺跡において竪穴住居と大型土坑の並存が見られる。本遺跡の大半の竪穴住居がこの時期に営まれる。しかし、宿東山、宿向山の両遺跡においては集落は見られない。これに続く時期には先述の二遺跡を含めた三遺跡で集落が並存する。このなかで宿向山遺跡が「外来系」土器を多くっており、宿東山古墳群の造営と関連が指摘される〔北野 1986〕。

集落における竪穴住居の存在とともに注目されるのが大型の土坑群である。これは第1次調査で17基、第2次調査で2基検出している。竪穴住居掘削に劣らない作業量を要するこの土坑は、生活の基本的な部分において重要な位置を占めていたものと思われる。時期的には本遺跡の第Ⅱ期・Ⅲ期に存在する。なお、宿東山遺跡においても大型の土坑が22基検出されている。宿東山遺跡の大型土坑は縄文時代の遺物を出土するものがあるが、本遺跡では弥生時代後期の遺物に限られる。しかし、機能面における差異は明確にされていない。大型土坑については第6章において詳述した。

如上の諸問題を検討するための前提的作業として土器の位置づけを明確にする必要がある。本遺跡の調査は、末森山麓遺跡群のなかで、宿東山、宿向山両遺跡の間隙を埋める資料を提供した。周辺の遺跡では、河北潟北縁に位置する宇ノ気町鉢状茶臼山遺跡の資料が明らかにされた〔米沢・栃木 1987〕。これは本遺跡形成の初段階に並行する遺跡として検討に値する。この他古い段階では上田出西山遺跡、鹿首モリガフチ遺跡、倉垣遺跡、奥原遺跡など、新しい段階では国分高井山遺跡、徳前C遺跡などの資料に留意する必要があるだろう。これによって宝達山麓における土器組成の様相が明らかになるとと思われる。この点については第6章に述べられている。 (三浦)

第4章 竹生野遺跡第2次調査

第1節 概要

竹生野遺跡の第2次調査は、第1次調査区北側の小谷と台地部分を中心に約6,000㎡を調査した。調査区の区割は工事センター杭を利用して10mのグリッドを設定した(第51図)。現地は近世末から現代にかけて畑の開墾、植林、それに伴う林道建設等による度重なる開発のため地形は大きく変化し、特に台地部中央の東半(O・P・Q-3・4区)は畑地造成のため大規模な破壊を受けている。調査の結果、竪穴住居18棟、掘立柱建物7棟、土坑69基、塚1基、溝状遺構10条、畝溝⁽¹⁾40数条、その他性格不明のピットなどの遺構が検出された。竪穴住居は台地の縁辺部に、掘立柱建物は台地中央の平坦部と谷鞍部にそれぞれ位置する。台地部分の標高は約37m、谷部分は約31mを測る。竪穴住居は一辺の長さが5~6mの方形のものが多く、そのほとんどが竪穴東辺の中央付近に長方形で2段掘りの土坑をもつ。溝状遺構には浅く、短いものが多く性格は不明。遺構は弥生時代後期から古墳時代にかけてのものが大半を占め、奈良・平安時代、中世、近世のものもみられる。また遺構は検出されなかったが、旧石器66点、縄文時代の石器十数点が検出された。遺物は古墳時代のものを中心に遺物コンテナ(W60cm×D37cm×H14cm)で85ケース分が出土した。

弥生時代後期の遺構は竪穴住居1棟、土坑2基からなる。竪穴住居は台地部西南端で検出された。土坑は調査区南西隅で大型の土坑が1基検出され、第1次調査で検出された土坑群の続きと考えられる。当該期は竹生野第I・II・III期の3時期に細分される。

古墳時代の遺構は前段階と後段階の大きく2時期に分けられ、前段階の遺構は台地部の縁辺部を中心に竪穴住居5棟が検出された。土坑は台地部の北端で1基、調査区南端で2基それぞれ検出された。前段階は竹生野第IV・V・VI期の3時期に細分される。後段階の遺構は前段階に引き続き台地部の縁辺部に竪穴住居5棟、掘立柱建物1棟が検出された。土坑は時期の明確なものは少ないが、調査区の南側を中心に十数基検出された。後段階は竹生野第VII・VIII・IX・X期の4時期に細分される。なお各時期の詳細については後述する。

奈良・平安時代の遺構は谷の鞍部で掘立柱建物3棟が並んで検出された。建物の主軸はすべて同一方向(N-69°-E)をさす。また建物の周辺からは該期の須恵器や土師質土器が多量に出土しており、2基の土坑も検出された。

中世の遺構は台地部で塚1基、火葬炉と思われる土坑2基、墓坑と思われる土坑1基が検出され、小字名であるバンネンジ(万念寺)との関連が注目される。また谷鞍部で検出されたピットから「吉」銘の入った漆器椀が1点出土した。この他に末森の合戦関係の遺物として鉄砲の玉2点も出土している。

近世の遺構は調査区の南側で舟形の大型土坑が1基、近世頃と推定される5群からなる畝溝が検出された。
(越坂)

第2節 遺構と遺物

第4表 出土別石器点数表

1 旧石器時代

竹生野遺跡において竪穴住居の構築や土器の出土によって知り得る集落の始源は、弥生時代後期の法仏式土器並行期（竹生野第Ⅰ期）の頃である。しかし、第2次調査が進行する過程において、石鏃・石匙など縄文時代の石器とともに旧石器時代に遡る石器の出土が調査者によって注目され、そのうち旧石器時代資料については調査の翌年に一部が紹介されることとなった〔越坂 1983〕。今回の報告では縄文時代以前に属すると思われる石器類（石器・剝片・石片等を総称する）を便宜上下記の3つのグループに分けて扱うことにしたい。

出土遺構（グリッド）	A 群	B 群	C 群
第5号竪穴住居		1	
第6号竪穴住居	1		
第7号竪穴住居		15	1
第9号竪穴住居	3	19	
第11号竪穴住居	2	16	1
第21号竪穴住居	1		
第5号土坑			1
第45号土坑		1	
G-6区		1	1
G-7区	1		
H-5区			1
H-6区		1	
I-6区			1
K-8区			1
L-7区		1	
L-8区		1	1
M-3区		1	
Q-4区		1	
小計	8	58	8

A群 濃飛流紋岩・珪化凝灰岩系の石材を用い、旧石器時代と考えてほぼ間違いないとされる一群。

B群 A・C両群以外という形で消去法的に抽出された一群。

C群 縄文時代に属すると思われる一群（石鏃・石匙）。

これらは総数が74点、そのうちA群が8、B群が58、そしてC群が8点を占める。B群が数量的に主体をなす理由の一つとして、そこに様々な内容を包摂している結果である場合も想定せねばならぬであろう。ともあれ、ここではC群を縄文時代以降として別稿に譲り、専らA・B両群、すなわち旧石器時代に遡り得る石器群を対象としていくことにする。

本遺跡の石器類の扱いを難しくしている要因の一つとして、その出土状況の特異性をあげることができる。A・B両群66点のうちで竪穴住居・土坑などの弥生時代以後の遺構覆土中からの出土が59点を数え、実に全体のはほぼ9割近くに達することになる。もちろんこのことは石器類の殆どがすでに元来の包蔵地点から遊離した状態にあったことを示すに過ぎず、その状態から石器類の帰属する年代を論ずることができないことは言うまでもない。次に平面的な分布についてみていくなれば、第2次調査地区の西側のほぼ中央を占める第7・9・11号竪穴住居（弥生時代～古墳時代）付近に集中する状況が窺え、これら三者の覆土中にA群が8点中5点、B群が58点中50点が含まれることになり、両群全体の約83%を占める。なおC群は8点中2点のみがこれら覆土中からの出土で必ずしも分布の中心が一致しないことがわかる。蛇足ながら付近の竪穴住居は第7→11→9→10号の順で営まれ、検出面で標高36～37mを測る。

A群

鋸歯縁石器（第52図1） 断面が三角形の縦長の剝片を素材とし、背面は2面の剝離面と頭

U T S R Q P O N M L K J I H G F E D C B A



第51図 竹生野遺跡第2次調査平面図 (S=1/400)

部調整痕からなるようである。1回の加撃で抉り部を作出するいわゆるクラトン型ノッチを並列させることによって、左右両側縁を鋸歯状に仕上げている。二次加工はいずれも周辺から主軸へという方向でなされるが、左側縁では背面、右側縁では腹面側において施される点が異なる。ただし後者に比して前者は小規模であり、両者が同様の性格を有するかどうかはなお検討の余地を残す。また腹面側の左上にみえる細い調整はクラトン型ノッチとは明らかに性質を異にするとと思われる。基部（打点）は折損したものか残存しない。

石刃（第52図2・3） 2は本遺跡における旧石器時代遺物の存在を認識する端緒となったもので、すでに紹介済み。比較的小さな（幅9mm、最大厚2mm）打面を有する一方、先端部付近で最も広くしかも分厚くなっている。背面に残る剝離痕の方向からみて両設打面石核から剝取されたと考えられる。先端部の腹面と接する縁辺に使用痕と思われるものが一部みられ、或いは搔器のごとく用いられたのかもしれない。3も2と同様に両設打面石核から剝取されたようであり、比較的薄手である。先端部にみられる面は折り取りによるか折損かそれとも180度方向からの剝離の先端部痕か判然としない。しかし基部については明らかに折損が認められ、そのため打点は現存しない。

剥片（第52図4、第53図5～8） 5・6は小形で横長の形状を呈する。前者は先端がヒンジフラクチャー気味となるほか、二次加工となる可能性のある剝離が若干みられる。後者は山なりの打面を有し、腹面上半に大きな打瘤裂痕がみられる。背面の状況から同様の剥片が連続的に剝取されたことが窺われる。7は長幅指数が100に近い剥片を用い、背面側に残る剝離痕の方向と主剝離方向とが約90度異なる。広くて平坦な剝離面が打面とされているようである。また左側縁は自然面となっている。4は先端部を大きく欠損しており縦長か横長かは不明。背面には剥片剝離痕6面がみられ、そのうちの5者からは縦長剥片が剝取された可能性が高い。8は形状横長で本遺跡出土中最も大きな剥片である。先端はヒンジフラクチャーを呈する。背面左下部は節理面において剝落している。また、背面には打面を同じくすると思われるネガティブな剝離面が3面みられる。打面は遺存状態不良だが現況から推して少なくとも2面の剝離面からなっているようである。

B群

二次加工を有する剥片（第54図9） 9は不定形剥片を素材とし先端部背面側に3つ以上の細かい調整加工を施す。或いは先端部加工のナイフ形石器の一種ではないかとの見方もできようが、ここでは結論を保留したい。

剥片（第54図10～14、第55図15～20） 10は横長剥片を素材とし、一見左側縁及び下端に二次加工を施すように思えるが、規則性に乏しく削器とするには疑問が残る。11・12は縁辺に折り断ったような面をもつ剥片、すなわち折断剥片と考えられる。11は左右両側が、また12では打面を含む上端に続き右上方が折断されている。13・14は刃縁に並行するようにして稜が走る。調整といえるようなものは見当たらないが、前者の右側及び後者の左側において折断が行われた可能性が指摘されようか。15～17は小形の剥片であり、15については小形寸づまりの剥片といえる。その先端には180度方向からの剝離に伴う先端部痕2つを残すが、両者ともにヒンジフラクチャーを

呈している。16は18と同様に細長い線状の打面を有する。また18は背面と腹面で剥離方向が90度異なる。

石核（第56図21～23） 3点が出土している。そこから想定される剥片剥離技術は三者三様といえるが、単一の打面のみの21と頻繁に打面転位を繰り返す22・23に分けることができよう。21は剥片素材の石核で、縦長剥片の一側面を打面として小形寸づまりの剥片を連続的に剥取している。作業面となるのは素材の腹面側である。類例としては宿東山遺跡の石核⁽²⁾をあげることができ、ともに交互剥離状を呈さないという意味で共通する。22はいわゆるサイコロ状の石核で一面に大きく自然面を残す。主として小形寸づまりの剥片が生産されたと考えられる。22では23と異なり規格性に乏しい不定形な剥片が剥離された可能性が高い。また石材中にかなりの節理がみられ、必ずしも石核として適していないように見受けられる。

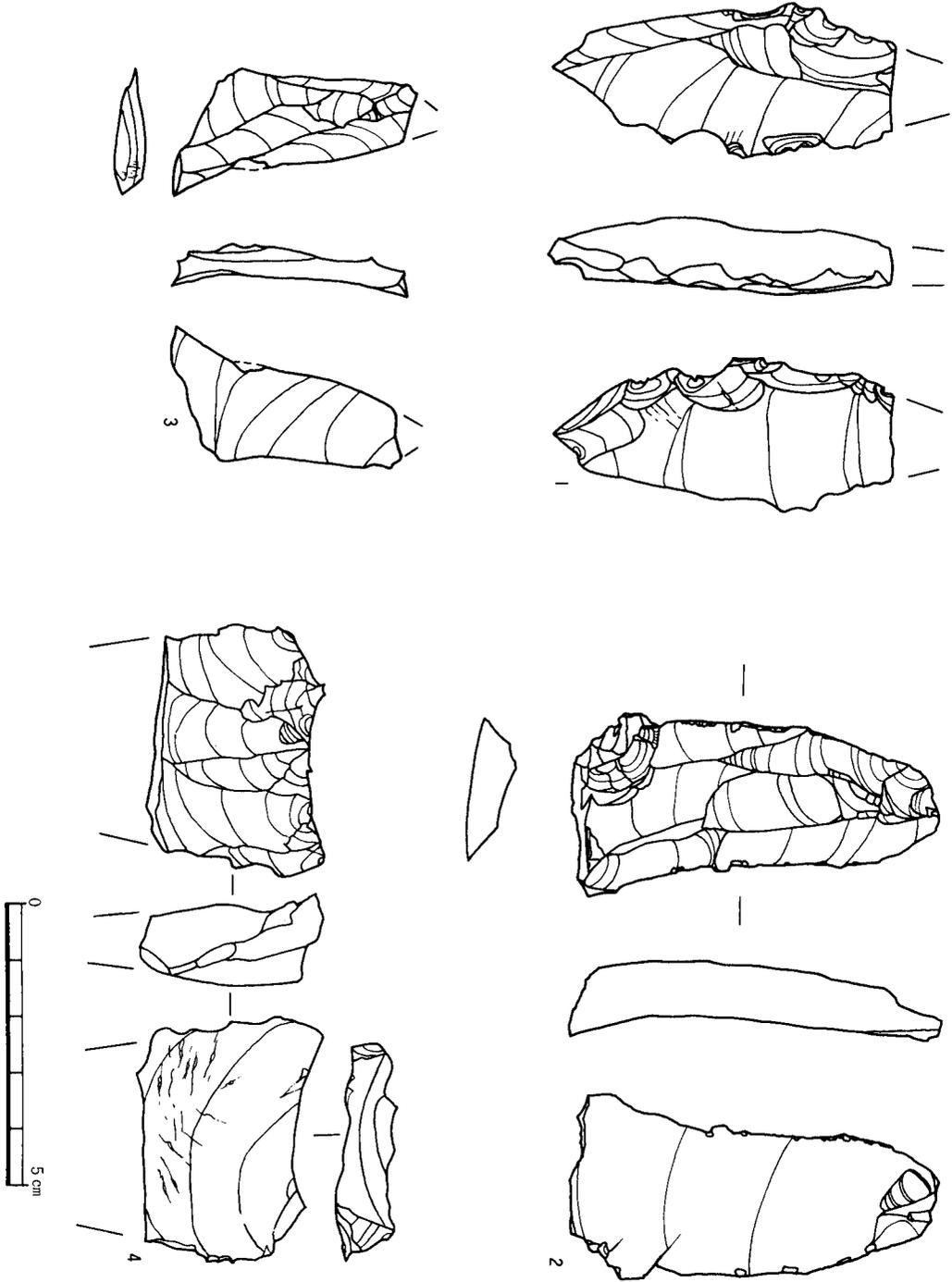
以上のようにA群については全点を報告できたが、B群については紙数等の都合により一部を掲載したのに留まり大半を割愛せざるを得なかった。後者の実測個体を選ぶに際して、群の性格を代表するものを優先させるように配慮したつもりだが、どこまでその全体像を伝えられたかは甚だ不安である。今一度その出土状況及び石器群の性格について若干付け加えることによっていくらかでも参考にして頂ければ大変に幸いである。

前述のように両群の石器類は第7・9・11号という3軒の竪穴住居の覆土中に集中する傾向にある。調査担当者によれば、この付近の表土はきわめて薄く地表下わずか20cmでもって地山（赤土）に移行するような状態で、重機による表土除去は地表の植物の根を取り除く程度で表土下半及び遺構検出については人力で調査を進めたという。それにもかかわらず3軒の覆土以外からは全く石器類は出土せず、さらに調査終了時に周辺の地山を断ち割るために5箇所の試掘坑（1m×1m）を設定したものの何ら追加資料を得ることができなかった。これらの点から判断すれば、恐らくこの地に存在したであろうブロックないしユニットは竪穴住居の造営に伴って破壊された可能性が高いのではなからうか。次に3軒の床面近くのレベルで出土したB群の資料についてその平面的分布を示せば第57図のとおりとなる。ここからはどちらかといえば竪穴住居の中心部よりも壁周溝に近い位置から多く出土している様子が窺える。一応現時点では竪穴を掘削した際の土砂が住居の周堤などとして盛られ、廃絶後にそこから流れ込んだ疑いが強いのではないかとの解釈を示しておくことにしたい。また窪みとして残された住居の跡を故意に埋める場合も想定されよう。

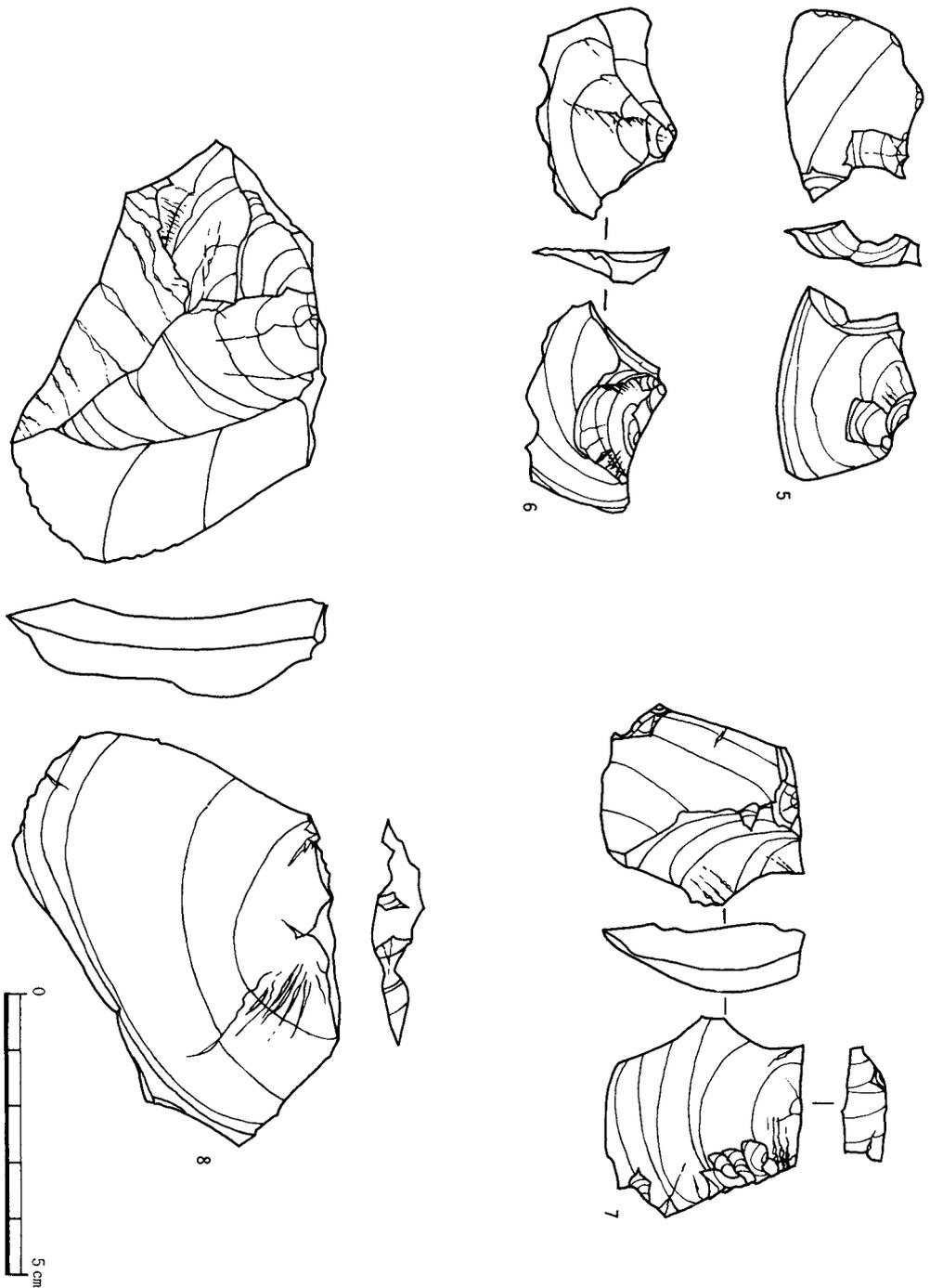
最後に改めて繰り返せばA・B両群は分布の中心をほぼ等しくするとはいえ、同時期の所産、すなわちある特定の間人集団によって遺されたかどうかという点はもちろん、各群が単一の内容からなるかどうかとも疑問である。或いはA群の一部とB群の一部とで同一の石器群を構成するという場合も考えられ得る。しかしながらA群とB群の間では同一母岩という関係は認められず、加えてA群では石刃を含めて縦長剥片を連続的に剥取する技術が特徴で、その一部に両設打面石核の存在が想定されるのに対して、B群では小形寸づまり剥片も含めて不定形剥片が卓越するという剥片剥離技術の差異が指摘されるだろう。このような点も踏まえて類例を待ちつつ両群の関係やその位置付けを究明していくことが肝要かと思われる。

本稿を記すにあたって北陸旧石器文化研究会をはじめとする方々に実見・御教示を頂くことができた。芳名を記すとともに衷心より感謝申し上げる次第である。なおそれを必ずしも活かしかれなかったのは偏に筆者の責任である。

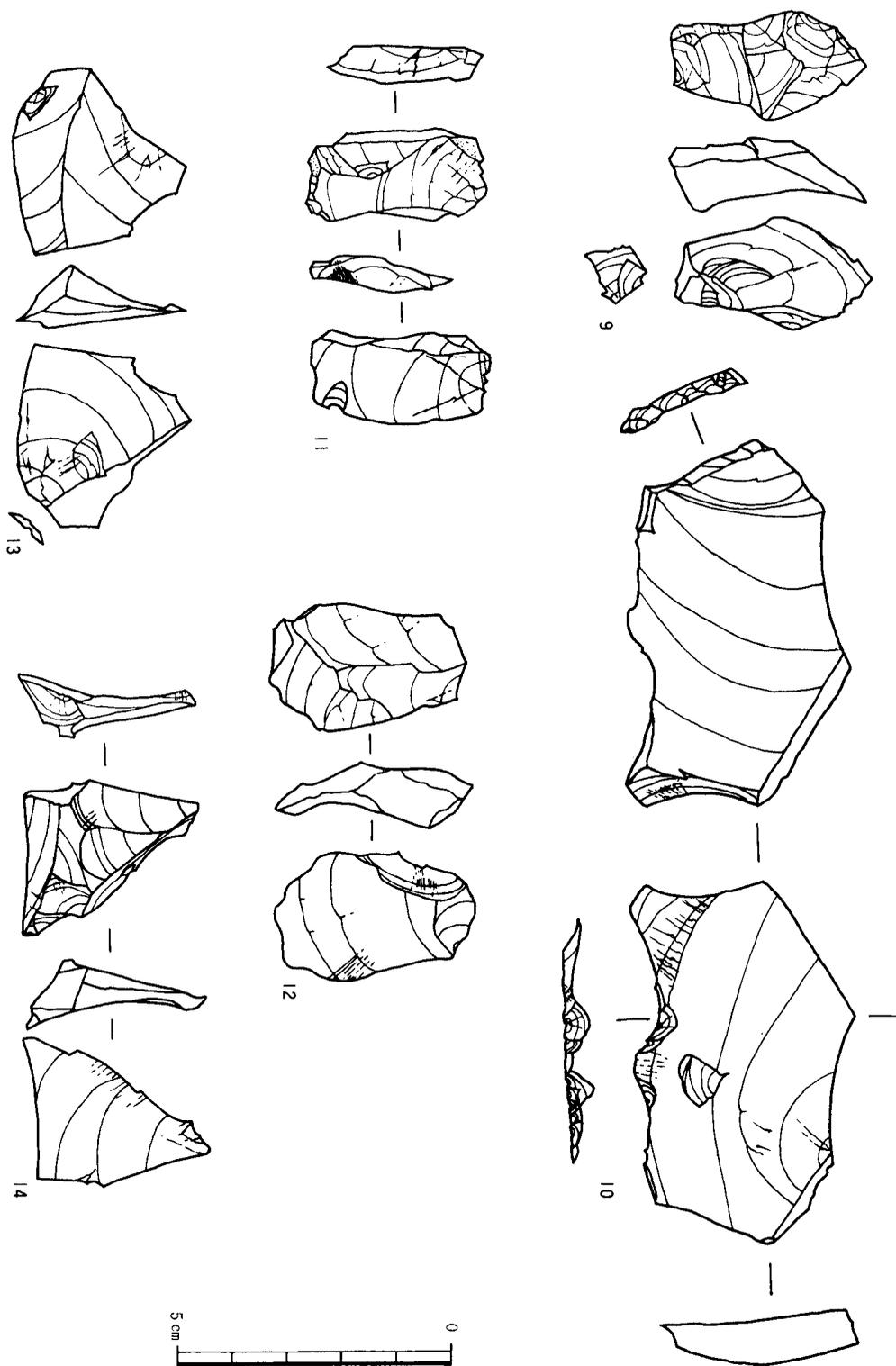
樫田 誠・西井龍儀・平口哲夫・本田秀生・麻柄一志・松島吉信・山本正敏（五十音順、敬称略）（松山）



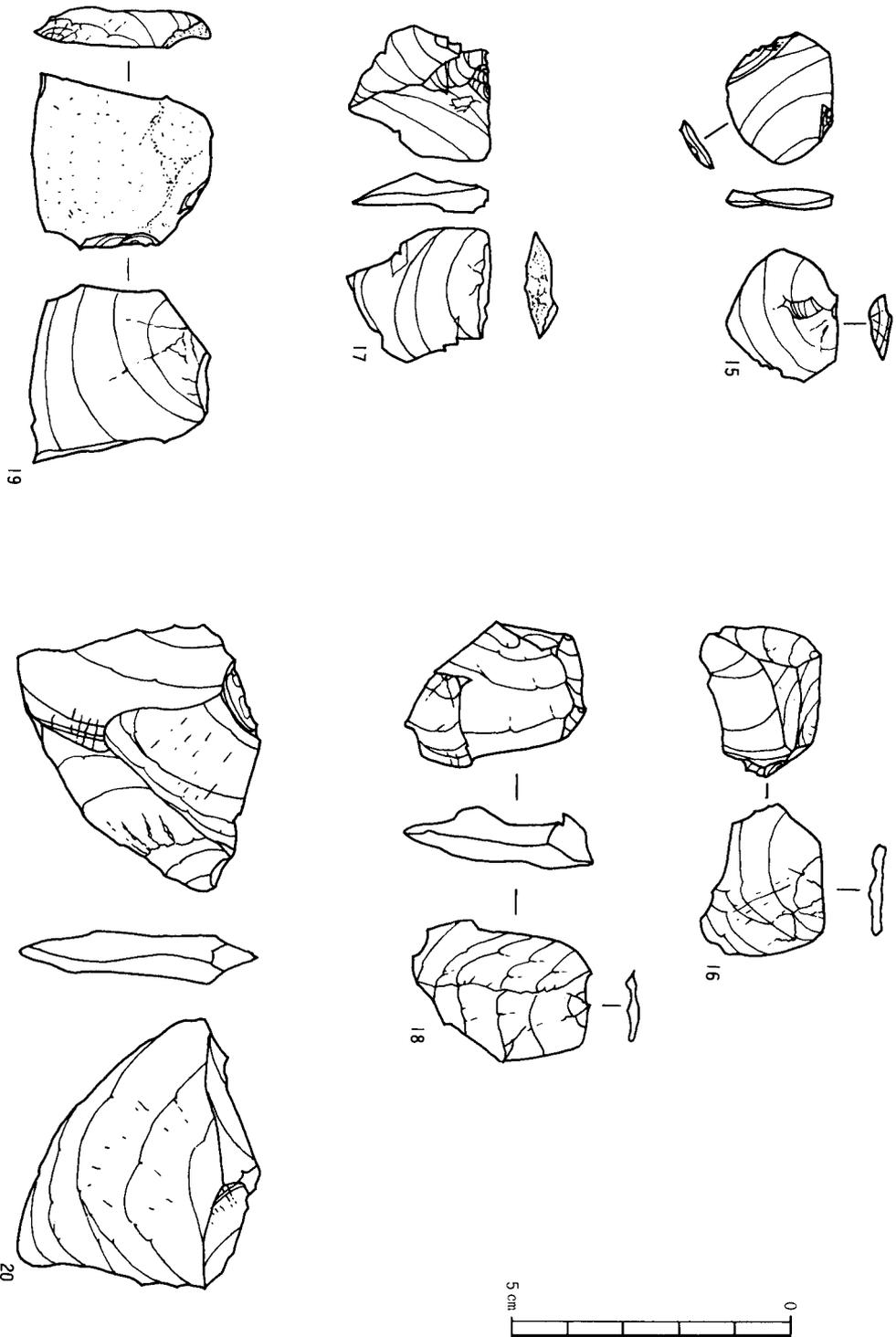
第52図 旧石器時代石器A群(1) (S = 4/5)



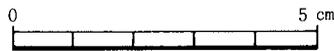
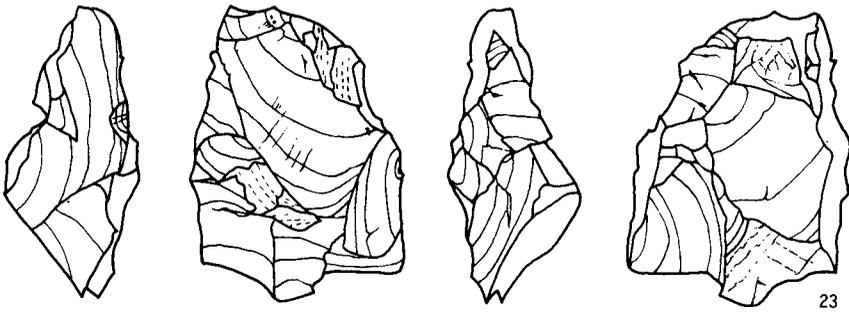
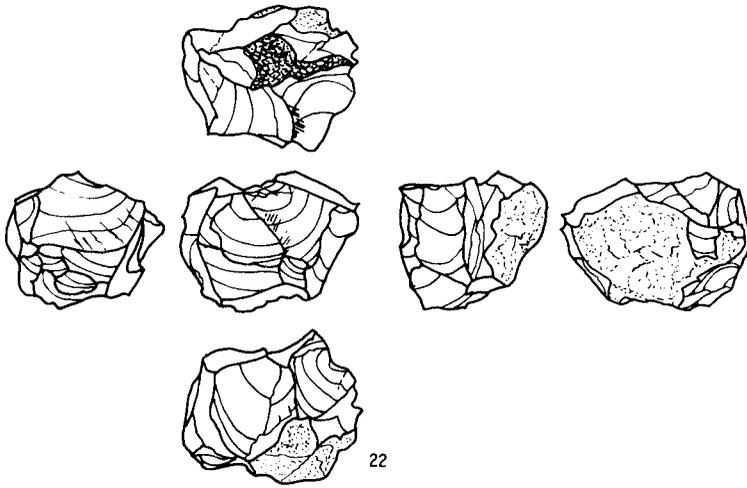
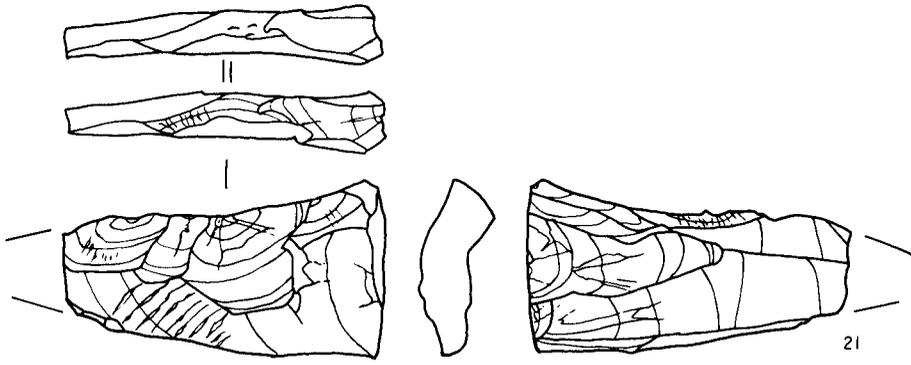
第53図 旧石器時代石器A群(2) (S = 1/2)



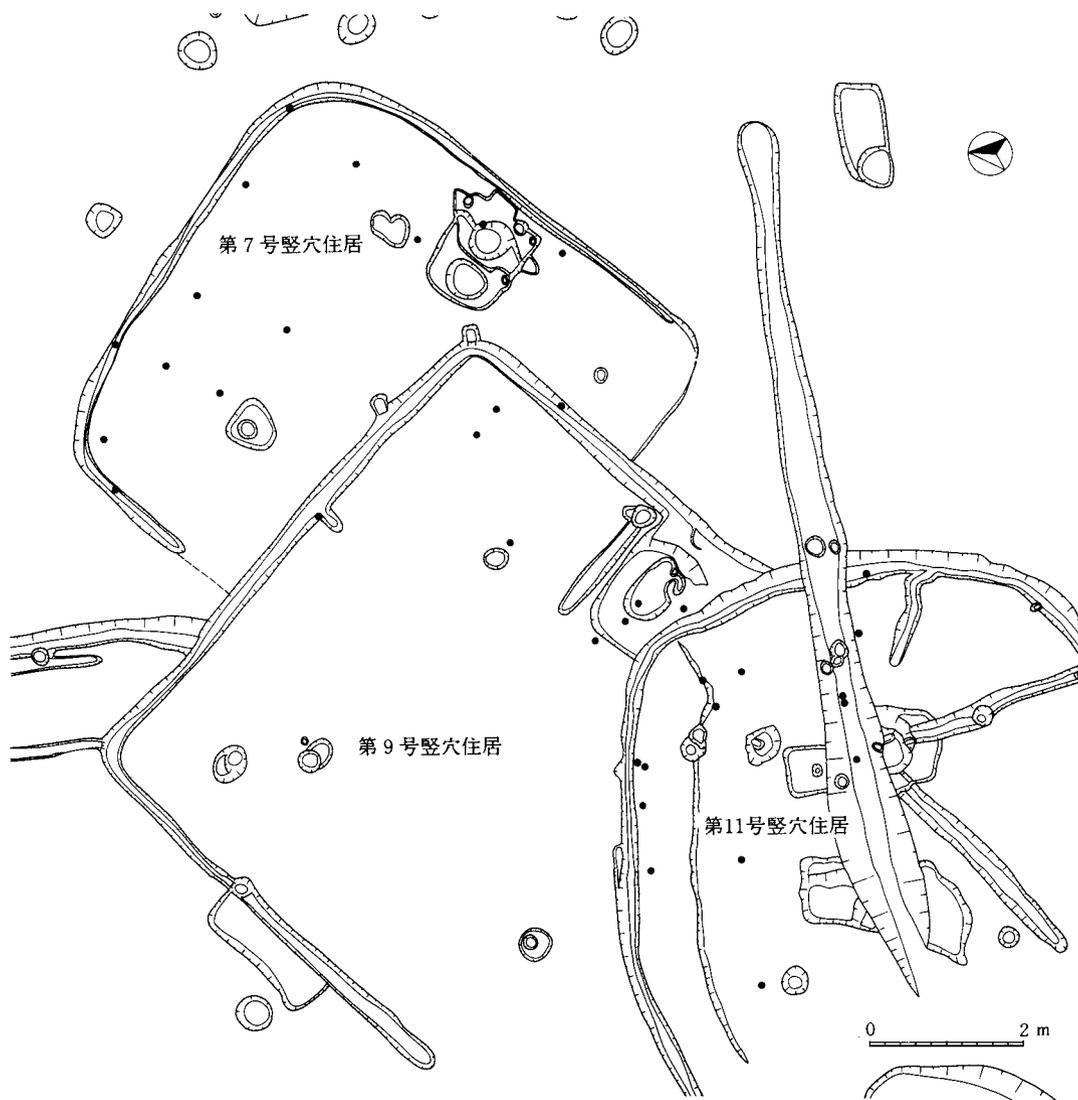
第54図 旧石器時代石器B群(1) (S=4/5)



第55図 旧石器時代石器B群(2) (S = 1/6)



第56図 旧石器時代石器B群(3) (S=1/6)



第57図 旧石器時代石器B群平面分布図 (S=1/100)

第5表 石器一覧表

図番号	器種	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号
1	鋸齒縁石器	第9号竖穴住居	珪化凝灰岩	(6.0)	2.7	1.1	(16.0)	1
2	石刃	第11号竖穴住居	濃飛流絞岩	6.4	3.2	0.9	19.4	2
3	石刃	G-7	珪化凝灰岩	(4.0)	2.2	0.5	(3.7)	3
4	剥片	第9号竖穴住居	珪化凝灰岩	(3.2)	4.4	1.2	(17.0)	4
5	剥片	第21号竖穴住居	珪化凝灰岩	3.4	3.0	0.6	5.3	5
6	剥片	第9号竖穴住居	珪化凝灰岩	2.7	3.9	0.6	3.2	6
7	剥片	第6号竖穴住居	珪化凝灰岩	3.5	3.3	1.1	13.5	7
8	剥片	第11号竖穴住居	珪化凝灰岩	5.2	7.5	1.7	51.7	8
9	二次加工を有する剥片	第7号竖穴住居	玉髓	3.4	2.1	1.0	6.8	10
10	剥片	第7号竖穴住居	鉄石英	4.3	6.7	1.4	30.5	9

第5表 石器一覧表

11	剥片	M-3区	メノウ	3.2	1.6	0.9	5.5	11
12	剥片	第7号竪穴住居	玉髓	3.5	2.4	1.0	6.9	12
13	剥片	第9号竪穴住居	玉髓	3.1	3.5	1.0	6.5	—
14	剥片	第9号竪穴住居	玉髓	3.3	2.8	1.0	5.8	13
15	剥片	第11号竪穴住居	メノウ	1.7	2.2	0.4	2.1	—
16	剥片	第7号竪穴住居	珪岩	1.8	2.6	0.7	4.0	15
17	剥片	第11号竪穴住居	メノウ	2.4	2.2	0.5	2.8	—
18	剥片	第7号竪穴住居	チャート	3.0	2.3	0.9	7.2	14
19	剥片	第9号竪穴住居	鉄石英	3.0	2.9	0.9	8.5	16
20	剥片	第11号竪穴住居	輝石安山岩	4.3	4.7	0.7	14.2	17
21	石核	第11号竪穴住居	蛋白石	(5.3)	3.0	1.4	(16.1)	18
22	石核	第11号竪穴住居	メノウ	2.0	2.7	2.3	16.7	19
23	石核	第7号竪穴住居	鉄石英	4.6	3.3	2.1	32.1	—

()は遺存値(長さ・幅・厚さ=cm、重量=g)

2 縄文時代

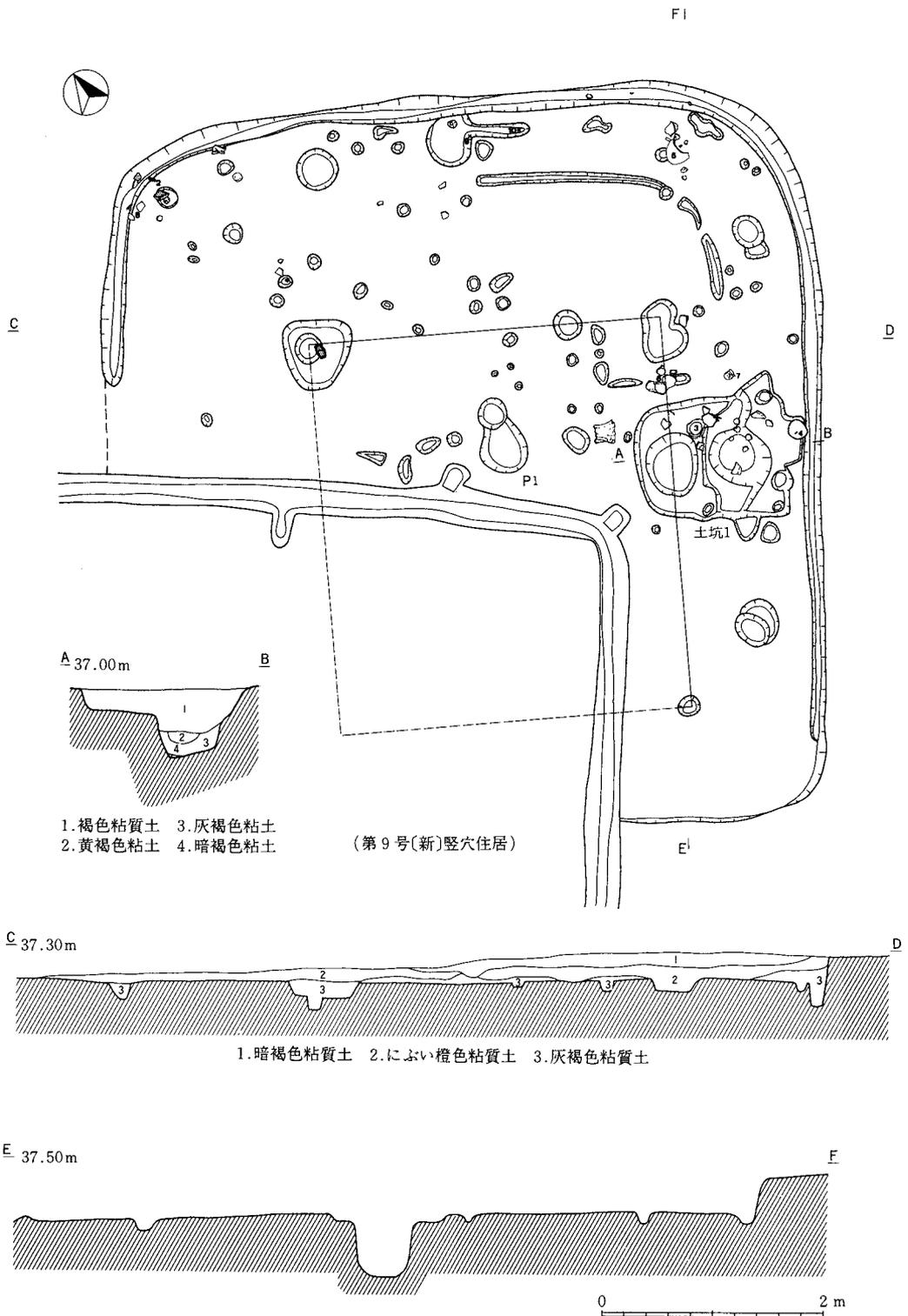
縄文時代の遺構はまったく検出されなかったが、包含層および竪穴住居等の覆土から石鏃・石匙が出土した。石鏃は凹基無茎鏃と平基無茎鏃に分類される。⁽³⁾凹基無茎鏃(第151図1他)はいずれも小型で7点が出土した。また平基無茎鏃は大型品(同図5)と小型品(同図2)に細分される。大型品の長さは4.8cm、小型品の長さの平均値は2.1cmを測る。材質はすべて輝石安山岩からなる。しかし石鏃だけで時期決定を行うことは不可能で、また縄文土器が1点もみられないことから、これらの遺物が弥生時代に帰属することも当然考えなければならない。石匙(同図7)はフリント製の横長型で、長さ5.9cm、幅2.8cm、厚さ0.9cmを測り、一端につまみをもつ。刃部は片面のみに施され、刃角は70°前後である。

3 弥生時代

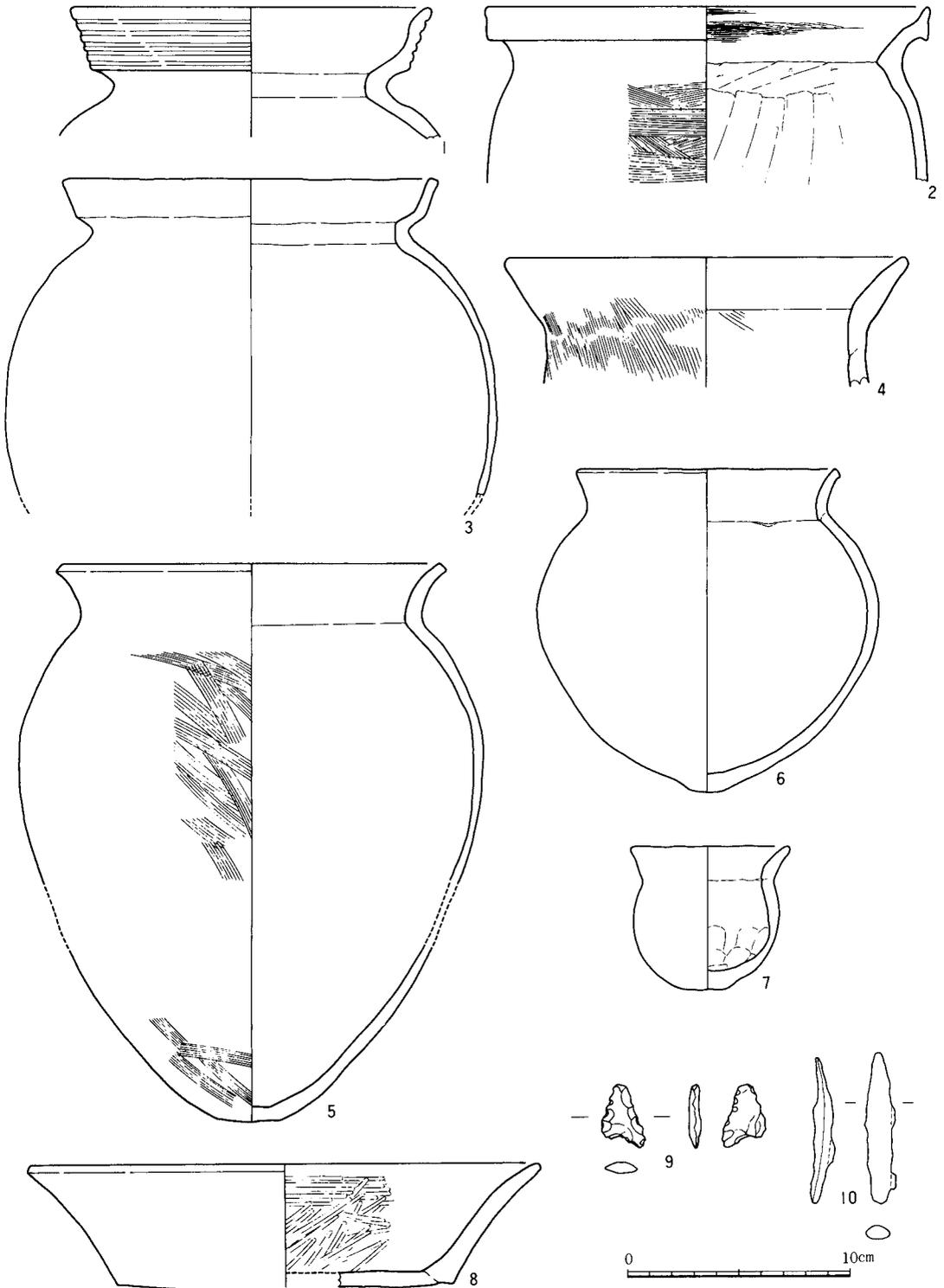
(1) 竪穴住居

第7号竪穴住居(第58・59図、図版45・62・63)

[遺構] N-5区で検出された6.5m×6.4mの隅円方形の竪穴住居で周溝を伴い、南西隅を第9号竪穴住居に切られる。主軸はN-33°-Eをさす。北西隅の柱穴は確認できなかったが主柱穴は4本と考えられ、柱間寸法は一辺3.2mを測る。遺構の覆土は3層からなり、南東方向から流れ込むように堆積する。第1層は暗褐色粘質土で炭化物を多く含む。第2層はにぶい橙色粘質土で炭化物を含む。第3層は灰褐色粘質土で炭化物を含み、第1・2層に比べて粘性が強くなる。遺構東辺部中央で長方形2段掘りの土坑が検出された(土坑1)。長軸1.3m、短軸1.1m、深さ20cmの長方形の土坑東側に50cm×60cmの楕円形のピットを40cm程掘り込む。覆土は4層からなり、第3層からは炭化物が多量に検出された。遺構中央のピット(P1)からも多量の炭化物が出土し、



第58図 第7号竖穴住居実測図 (S = 1/60)



第59図 第7号竪穴住居出土遺物実測図 (S = 1/3、9はS = 1/2)

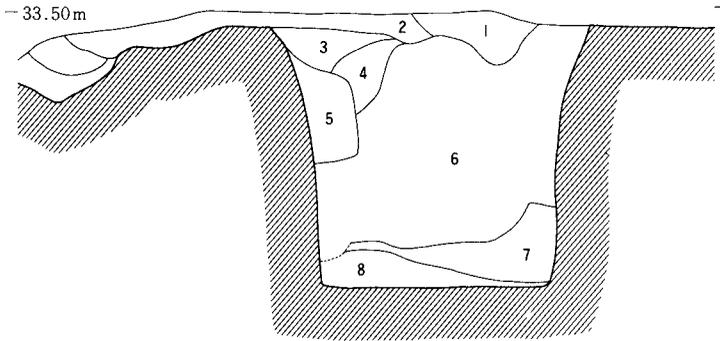
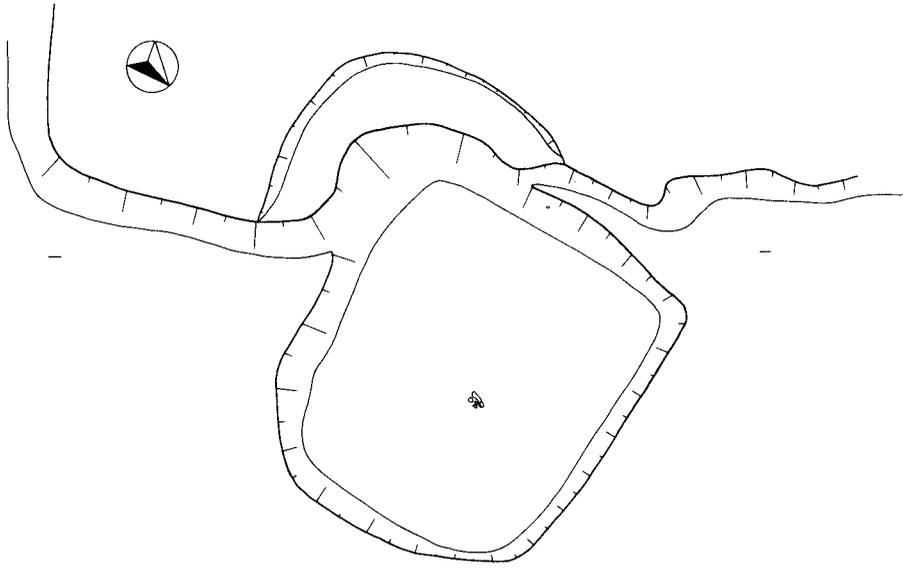
炉の可能性も考えられる。また北東隅の50cm内側で周溝に平行する長さ約3mの溝が検出された。遺構の時期は竹生野第Ⅲ期に比定される。

〔遺物〕1～6は甕形土器。1は口縁部に擬凹線文を施すもので口径16.3cmを測る。色調は褐色を呈し、胎土には石英等の礫・粗砂粒を多量に含み海綿骨片も含む。2は北西隅の周溝上面から出土した「く」字口縁の土器で、口縁端部をつまみ上げて狭い口縁帯をつくる。口径は20cmを測る。器面調整は口縁部に内・外面ともにナデ調整、胴部外面にハケ調整、内面に縦位のケズリ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には石英等の礫・粗砂粒を多量に含み海綿骨片や赤色酸化粒も含む。3・4は土坑1の上面から出土した土器で、3は口径16.4cm、胴部最大径22.6cm、4は口径17.8cmを測る。5は北東隅の床面直上から出土した口縁部が「く」字状に外反する長胴の甕形土器で口縁端部を面取りする。口径17.2cm、胴部最大径21.5cm、底径2.8cm、器高25cm（推定）を測る。器面が著しく摩滅しており、器面調整等は不明。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には石英等の礫・粗砂粒を多量に含み海綿骨片も含む。6は北東隅の主柱穴と土坑1の間の床面直上から出土した胴の張る「く」字口縁の土器で、口径11.6cm、胴部最大径15.5cm、底径1.3cm、器高14.7cmを測る。色調はにぶい黄褐色で、胴部外面には煤が付着する。7は小型丸底土器（埴）で、口径7.0cm、底径2.0cm、器高6.5cmを測る。色調は黄橙色で、胎土には礫、微細な海綿骨片、赤色酸化粒を含む。8は2とほぼ同じ地点から出土した高杯の杯部。9は凹基無茎の石鉢。10は鉄製品で長さ6.9cm、幅1.5cm、厚さ1.0cm、重さ8.2gを測り、北側の壁付近の上面から出土した。刀子と思われる。

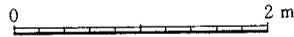
(2) 土 坑

第12号土坑（第60・61図、図版54・71）

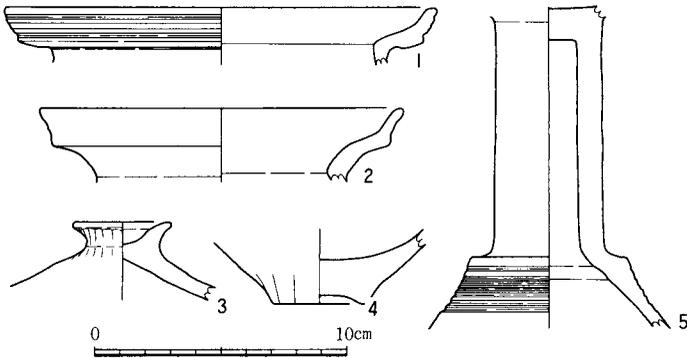
調査区の南西隅、N-6区で検出された隅円方形の大型土坑。削平等により遺構南西隅の一部を遺し上面はとばされる。遺存する遺構の規模は長軸3.1m、短軸2.6mで、深さ2.1mを測る。遺構の覆土は8層からなる。第1層は明褐色粘質土で炭化物をわずかに含む。第2層は橙色粘質土で小礫、鉄分、粘土ブロックを含み、炭化物もわずかに含む。第3層は明黄褐色砂質土層で第2層と同じく小礫、鉄分、粘土ブロック、炭化物を含む。第4層は橙色粘質土で炭化物をわずかに含む。第5層は黄褐色砂質土で鉄分、小礫を含む。第6層は橙色砂質土で炭化物、鉄分、粘土ブロックを含み、小礫を多く含む。第7層はオリーブ砂で礫を含み鉄分も多く含む。第8層は橙色粘質土で鉄分、小礫を含む。遺物は第6層の中層から弥生土器が出土したが、図示できたのはわずか5点にすぎない。1は口縁部外面に板状工具による沈線が認められる甕形土器。口径16.8cmを測り、口縁部はゆるく内湾し、外面の屈曲部に稜をもつ。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には粗砂粒を含み海綿骨片もわずかに含む。外面には煤が付着する。2は有段口縁の壺形土器で口径14.2cmを測る。口縁部は外反し、外面の屈曲部に稜をもつ。色調はにぶい黄褐色で、胎土には砂粒、赤色酸化粒を含み海綿骨片を多量に含む。3は蓋形土器で紐径3.7cmを測る。色調は外面が褐灰色、内面がにぶい橙色を呈し、胎土には石英等の粗砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を多量に含む。5は棒状有段脚を有する高杯脚部。色調は浅黄褐色で、胎土には石英・雲母等の砂粒を含



- 1. 明褐色粘質土
- 2. 橙色砂質土
- 3. 明黄褐色砂質土
- 4. 橙色粘質土
- 5. 黄褐色砂質土
- 6. 橙色砂質土
- 7. オリーブ砂
- 8. 橙色砂質土



第60図 第12号土坑実測図 (S = 1/60)

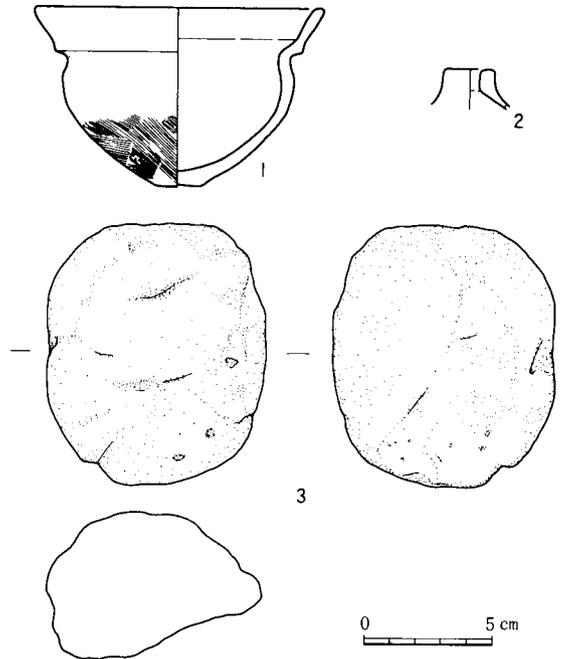


第61図 第12号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)

み海綿骨片は認められない。また図示できなかったが土器外面に赤彩を施した壺の胴部と思われる破片がみられる。胎土には海綿骨片を多量に含み、長いものは3mmにも達する。遺構の時期は竹生野第Ⅰ期に比定される。

第67号土坑（第62図、図版72）

〇-4・5区で検出された土坑で、遺構の東半を第66号土坑に切られているため規模等は不明。遺物の量は少ない。1は小型の鉢形土器で、口径11.2cm、胴部最大径9.2cm、底径1.7cm、器高7.0cmを測る。口縁部には内・外面ともにナデ調整、体部には外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には石英等の粗砂粒を多く含み海綿骨片、赤色酸化粒もわずかに含む。2は蓋形土器の紐部と思われ、紐径1.9cmを測



第62図 第67号土坑出土遺物実測図（S = 1/3）

り、ほぼ中央部に径0.6cmの円孔を穿つ。3は軽石で長さ10.2cm、幅6.6cm、厚さ5.8cm、重さ106.5gを測る。遺構の時期は竹生野第Ⅲ期に比定される。

4 古墳時代

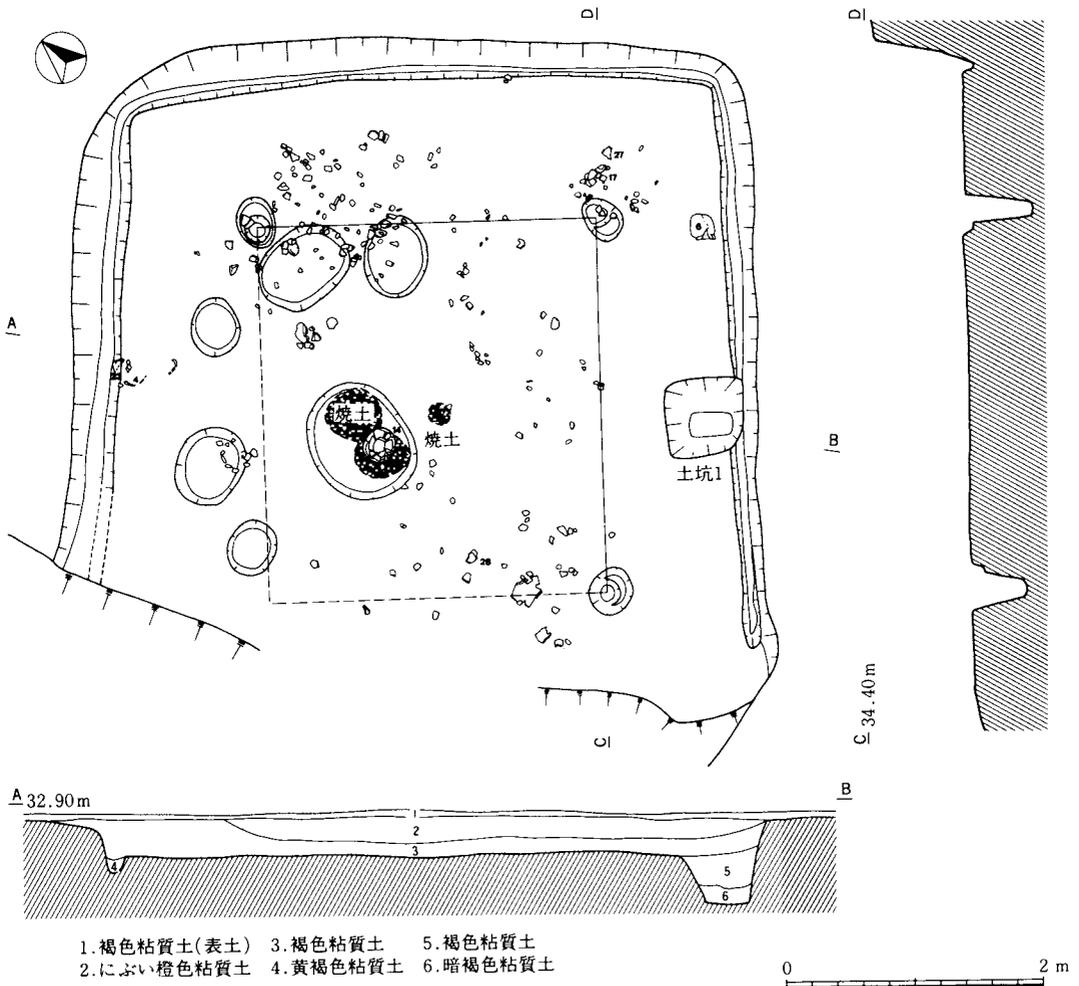
(1) 竪穴住居

第1号竪穴住居（第63～65図、図版42・60）

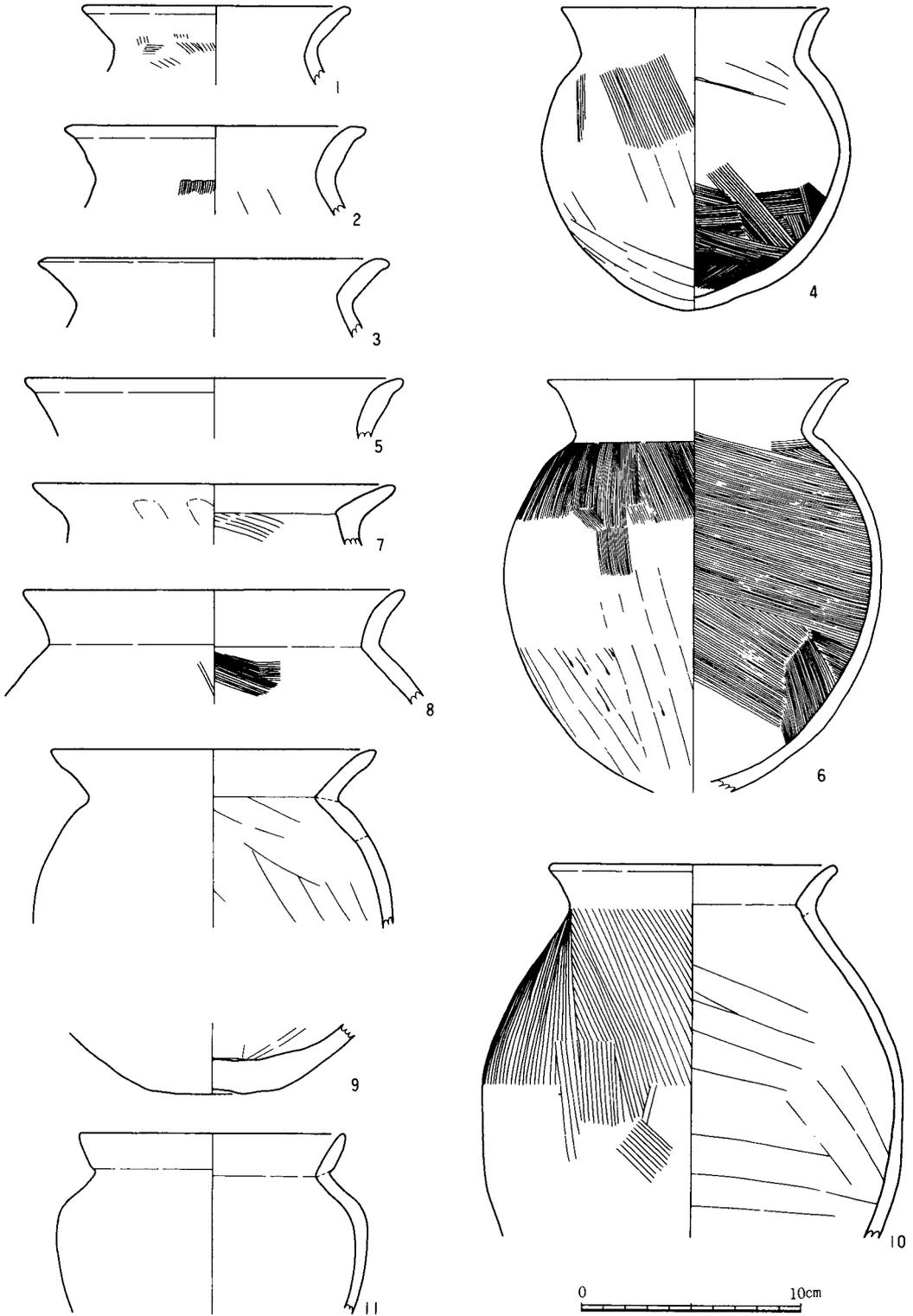
〔遺構〕 J-5区で検出された5.4m×5m（推定）の方形の竪穴住居で、北西隅は削平による破壊を受けている。主軸はN-43°-Wをさす。支柱穴は4本と考えられ、北西の隅柱を除いて3本の柱穴が確認された。柱間寸法は3.0m×2.7mを測る。周溝は西辺部を除いて確認された。覆土は2層からなる。上層（第2層）はにぶい橙色粘土で炭化物を多く含み多量の遺物が出土した。下層（第3層）は褐色粘質土で炭化物を非常に多く含み多量の遺物が出土した。遺構のほぼ中央で焼土が検出され炉跡と推定される。また南辺部中央で一辺約60cm、深さ40cmの土坑が検出された。覆土は2層からなり、上層（第5層）は褐色粘質土、下層（第6層）は暗褐色粘質土でいずれも炭化物を含む。本竪穴住居から破片総数4,926点、およそ29kgにもおよぶ多量の土器が出土した。そのほとんどが土器器で、須恵器片は12点、130gを数えるにすぎない。遺構の時期は竹生野第Ⅶ期に比定される。

〔遺物〕 1～10は甕形土器ですべて「く」字状に外反する口縁部をもつ。4は北辺中央の周溝付近床面で検出された口径14.0cm、胴部最大径14.0cm、器高13.8cmを測る小型品。口縁部は内・外面ともにナデ調整を施す。胴部は、内面上部にナデ調整、下部から底部にかけてハケ調整を施す。外面には上半がハケ調整、下半から底部にかけてケズリ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈

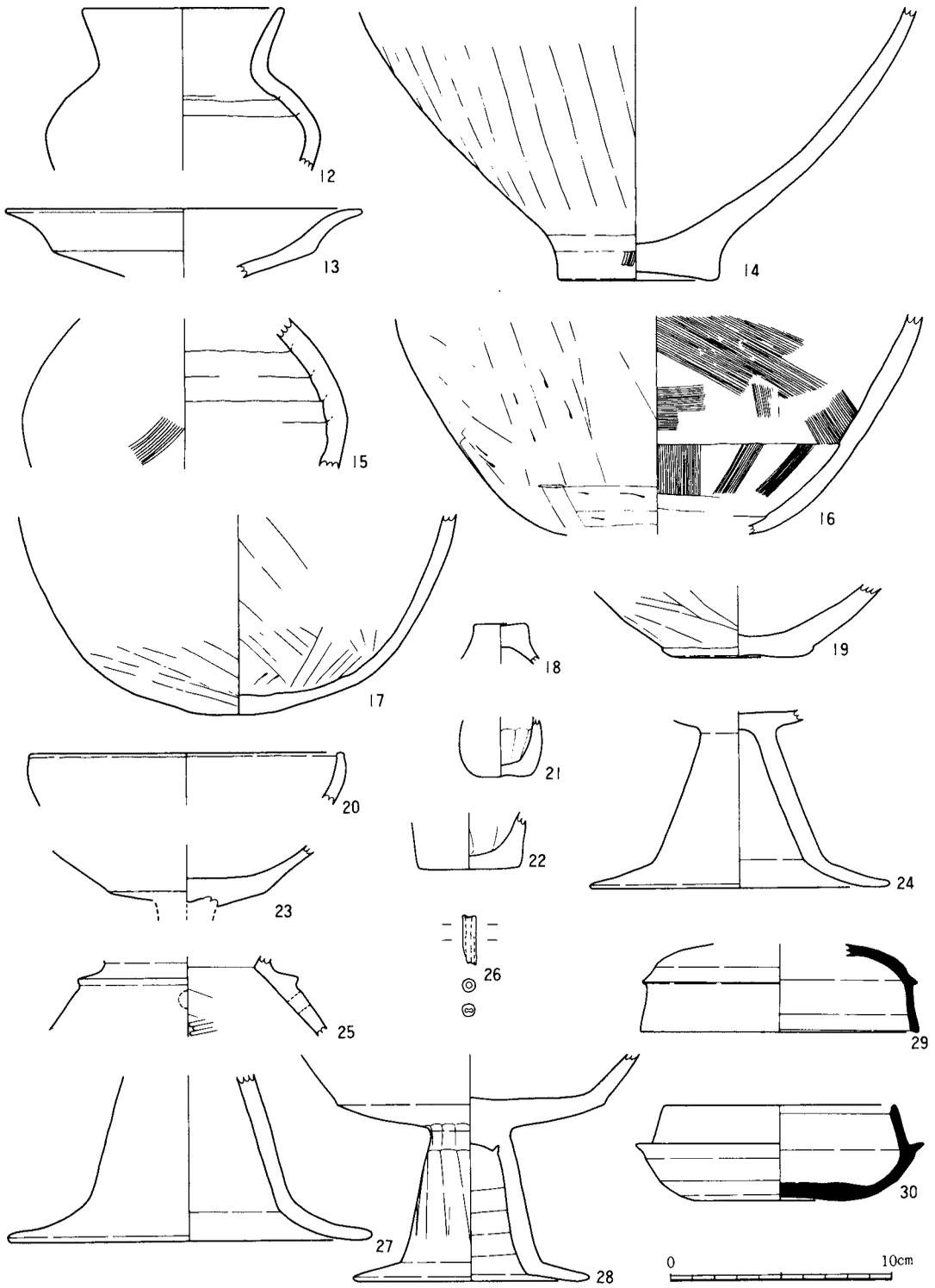
し、胎土には石英等の粗砂粒と海綿骨片を多量に含む。胴部下半には煤が付着する。6は南辺東の周溝付近床面で検出され、口径13.6cm、胴部最大径17.1cm、器高19cm（推定）を測る。4と同じように胴部外面上半にハケ調整、下半にケズリ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には石英等の粗砂粒や海綿骨片を含む。外面には煤が付着し、口縁部上半と胴部張出部分が著しい。10は口径12.6cm、胴部最大径19.1cmの長胴の甕で、器面摩滅のため調整は不明であるが全体に粗いハケ調整を施す。7～9ともに口縁部の屈曲が鋭い。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には石英等の粗砂粒を多量に含み海綿骨片もわずかに含む。胴部張出部分に煤が付着する。12・13・15は壺形土器。12は口径9.0cm、胴部最大径12.5cmの小型品で、胴部下半に煤が付着する。13は強く外反する有段口縁をもつもので口径16.2cmを測る。14は甕形土器の底部で焼土面上で検出された。18は蓋形土器。20は椀形土器と思われ、口径14.3cmで口縁端部を面取りする。21は小型手づくね土器。23・24・27・28は高杯形土器。すべて破片のため全体の器形は不明であるが、杯部は23・28のように鋭い稜をもち、脚部は24・27・28のように裾部で屈曲して開くものと思われる。



第63図 第1号竪穴住居実測図 (S=1/60)



第64图 第1号竖穴住居出土土器実测图 (S=1/3)



第65図 第1号竖穴住居出土遺物実測図 (S = 1/3)

28は脚部径10.8cm、残存高10.4cmを測る。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には細砂粒、海綿骨片を含む。25は鼓形器台で脚部に円形の透かしをもつ。色調はにぶい橙色で、胎土には雲母等の細砂粒、海綿骨片を含み赤色酸化粒もわずかに含む。26は緑色凝灰岩製の管玉破片で両端を欠損する。直径0.6cmで、両端から穿孔するが一方が最初にうまくできなかつたらしくもう一度穿孔し直している。29は須恵器の杯蓋で、口径12.5cm、器高4.0cmを測る。口縁部は外反気味に下がり、口縁端部に内傾する凹面をもつ。鋭い稜をもち稜径12.4cmを測る。30は須恵器の杯身で口径10.4cm、底径7.5cm、器高4.4cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり、口縁端部は内傾しやや凹む面をもつ。受部は長く上外方へ伸び、受部径は13.1cmを測る。いずれも色調は内・外面ともに灰色、断面は紫灰色を呈す。29・30ともにTK23期〔田辺 1982〕に比定される。また図示できなかったが遺構北東部の床面付近で長さ6.7cm、重さ20gの棒状の鉄製品が検出されている。

第2号竪穴住居（第66図、図版43・61）

〔遺構〕 I・J-4・5区、第1号竪穴住居の南側で検出された方形の竪穴住居。遺構西側の大半が削平により破壊されており、東辺の周溝のみ検出された。残存する東辺部の長さは4.7mを測り、主軸はN-26°-Wをさす。遺構の時期は竹生野第IV期に比定される。

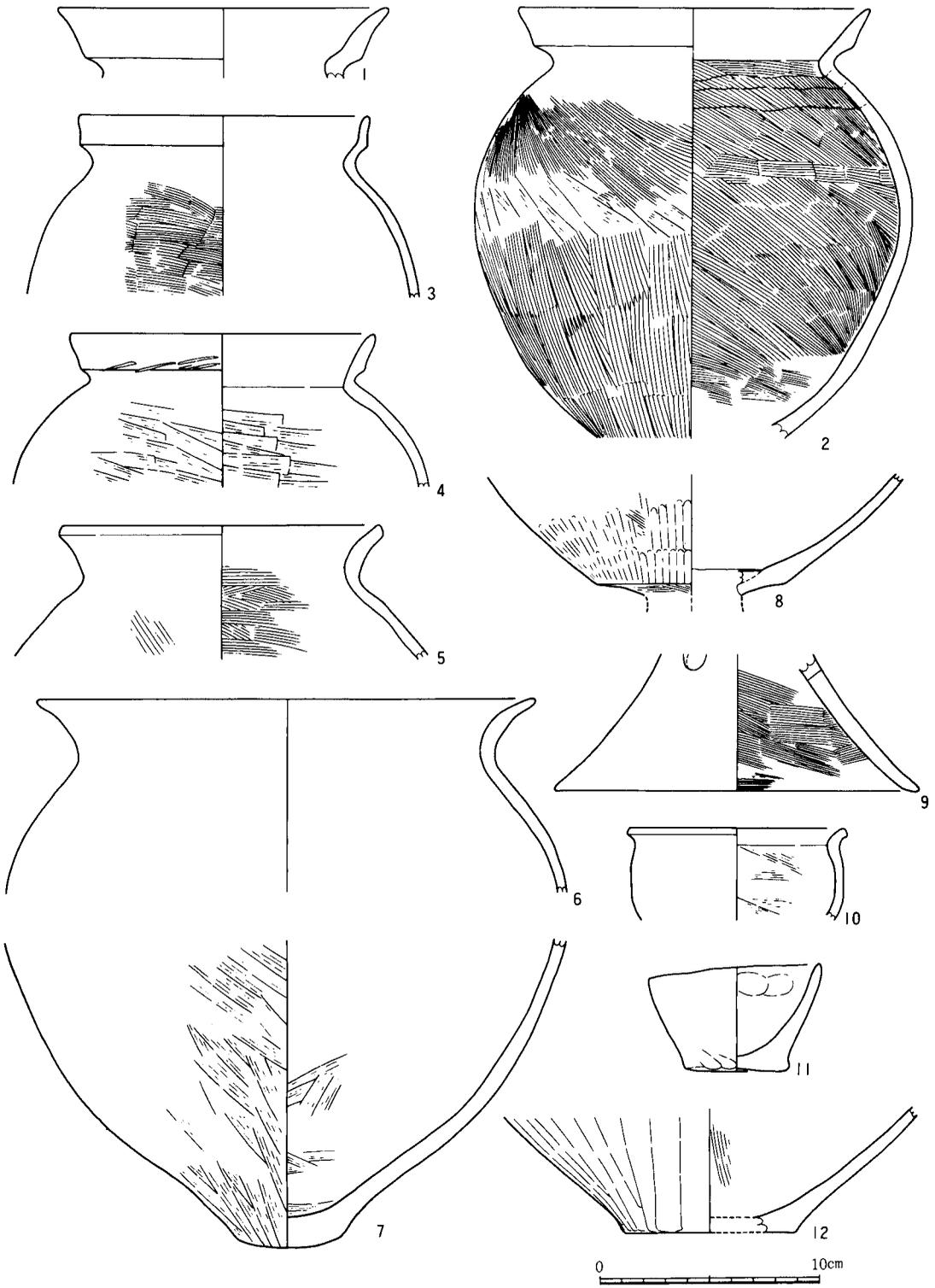
〔遺物〕 1～7は甕形土器で、1～4は有段口縁を、5・6は「く」字口縁を呈する。1・2は口縁部が鋭く外反し、外面にナデ調整を施す。2は口径16.0cm、胴部最大径20.2cm、器高21.5cm（推定）を測り、胴部は内・外面ともにハケ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には礫・粗砂粒、海綿骨片を含み赤色酸化粒もわずかに含む。3は口径13.2cmで、口縁部が直立気味に立ち上がる。4は1・2の口縁部に類似するが外反度は弱い。口径14.0cmで、口縁部外面にヘラ状工具による右上がりの沈線が、胴部には内・外面ともにナデ調整が施される。5は口径14.6cmで口縁端部を面取りする。6・7は同一個体と考えられ、口径23.0cm、胴部最大径26cm（推定）、器高25cm（推定）を測る。口縁部は大きく外反し、口唇部を薄く尖り気味に仕上げる。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には石英等の礫を多量に含み海綿骨片も含む。8は高杯の杯部で外面にミガキ調整を施す。9は「八」字状に開く高杯もしくは器台の脚部で、底径16.6cmを測る。外面にミガキ調整を、内面にハケ調整を施す。10は小型の鉢で口径9.8cmを測り、口縁部は「く」字状に外反し端部を面取りする。11は手づくね土器で、口径7.8cm、底径4.7cm、器高約5cmを測る。

第3号竪穴住居（図版43）

K-6区の谷部で周溝の一部が検出された。一辺4m程度の方形の竪穴住居と考えられ、主軸はN-19°-Wをさす。遺構の北東隅で長方形2段掘りの土坑が検出された。長軸1.3m、短軸0.8m、深さ約5cmの長方形土坑の南端に60cm×40cmの楕円形のピットをさらに56cm程掘り込む。遺物はまったく出土しなかった。遺構の時期は不明。

第4号竪穴住居（図版43）

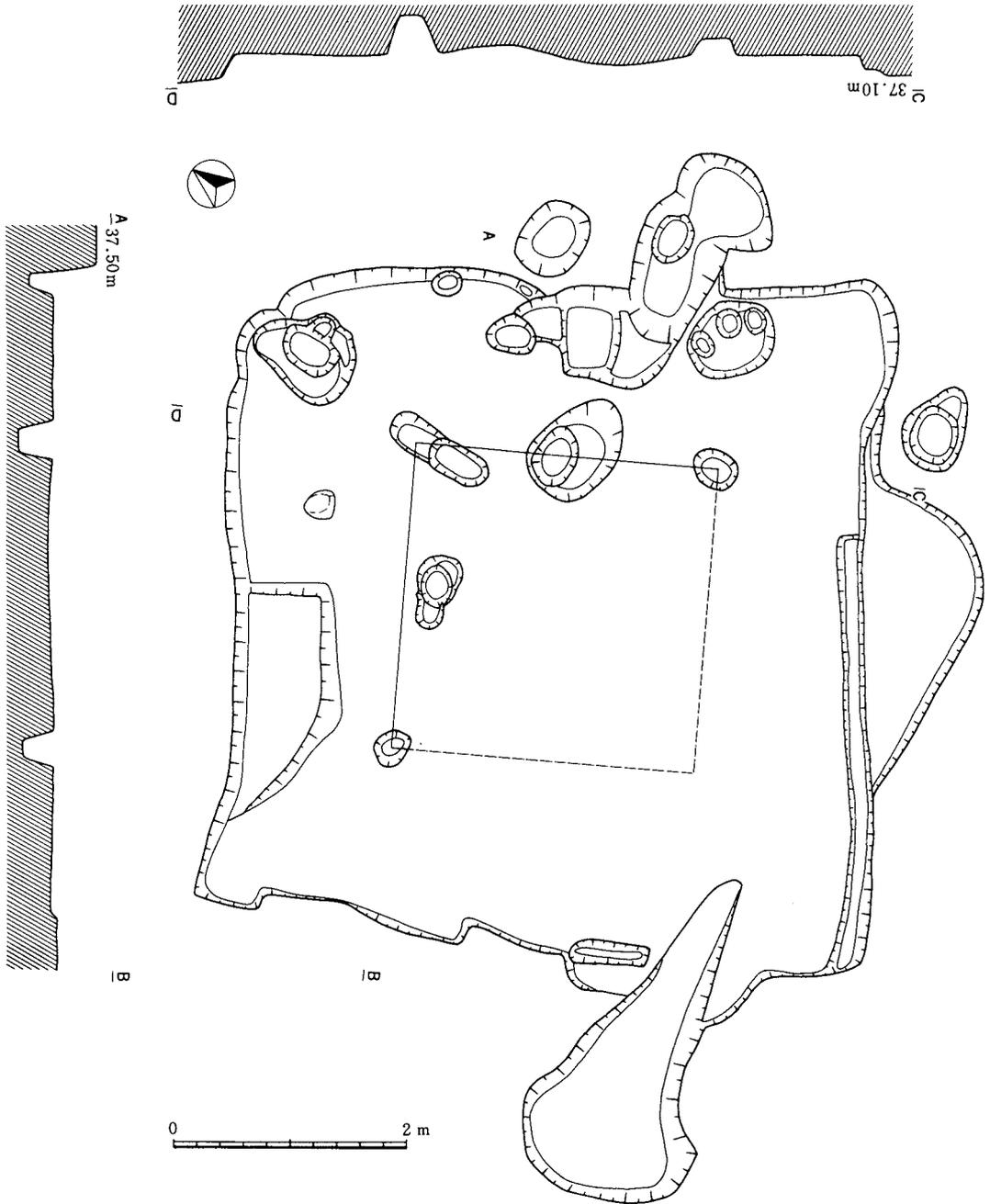
J・K-6区、第3号竪穴住居のすぐ南で周溝の一部が検出された。主軸は第3号竪穴住居とはほぼ同じN-24°-Wをさす。主柱穴と思われる柱穴が検出されたが、2間×2間の配置をなし（3.7m×3.6m、ただし北西隅の柱は未検出）、掘立柱建物の倉庫の可能性も考えられる。遺構の時期は不明。



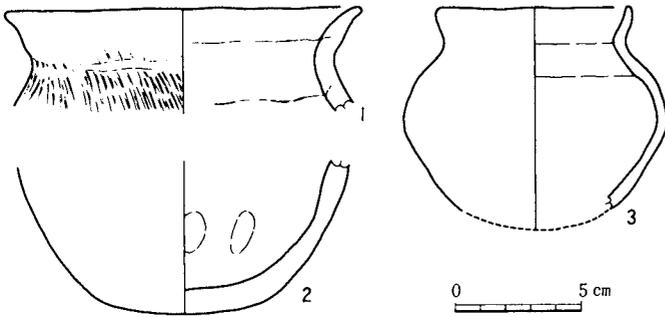
第66図 第2号竖穴住居出土土器実測図 (S=1/3)

第5号竪穴住居（第67・68図、図版44・61）

〔遺構〕 調査区のほぼ中央、L・M-4・5区で検出された5.9m×5.5mの方形の竪穴住居で、主軸はN-53°-Eをさす。南西の隅柱は確認されなかったが他の3本の柱穴は検出され主柱穴は4本と考えられる。柱間寸法は一辺が2.6mを測る。別の遺構とかなり切り合っており遺存状態は良くない。覆土には竹の根や木の根が入り込みかなり攪乱を受けるが、にぶい褐色粘質土で



第67図 第5号竪穴住居実測図 (S=1/60)



第68図 第5号竪穴住居出土土器実測図

炭化物を含む。出土遺物もきわめて少なく明確な時期は不明であるが、竹生野第VI期頃と推定される。

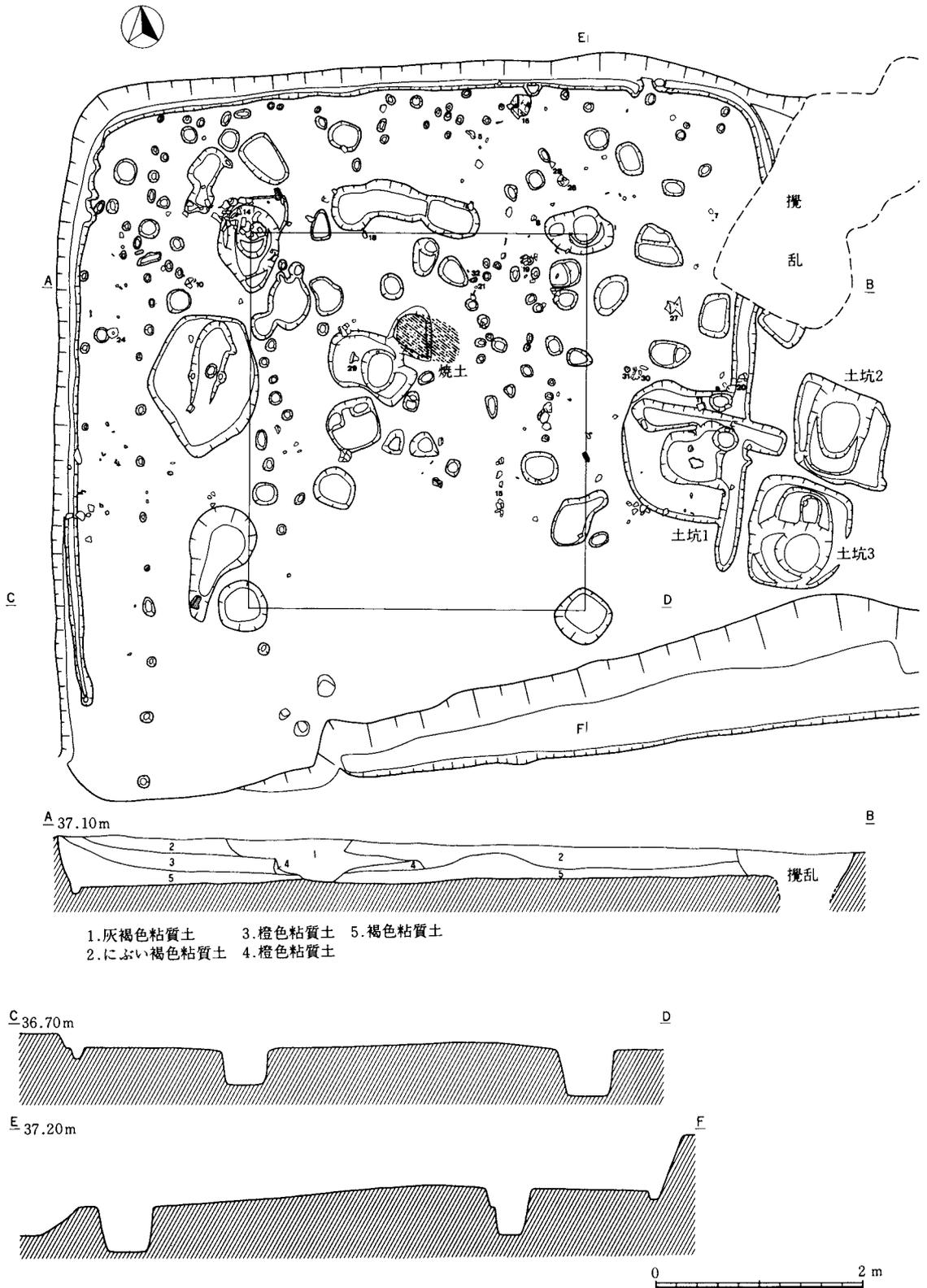
〔遺物〕 土師器と須恵器がわずかに出土した。しかしいずれも小片のため図示できたのは3点にすぎない。1は「く」字口縁の甕形土器で、口径13.8cmを測る。色調はにぶい橙色を呈し、

胎土には礫や赤色酸化粒を含み微細な海綿骨片を多量に含む。2は底部片で、色調はにぶい橙色を呈し、胎土には石英・雲母等の砂粒、微細な海綿骨片を多量に含む。3は壺形の小型土器で、口径7.5cm、器高9cm（推定）を測る。器面の摩滅が著しく調整等は不明。

第6号竪穴住居（第69～72図、図版45・61・62）

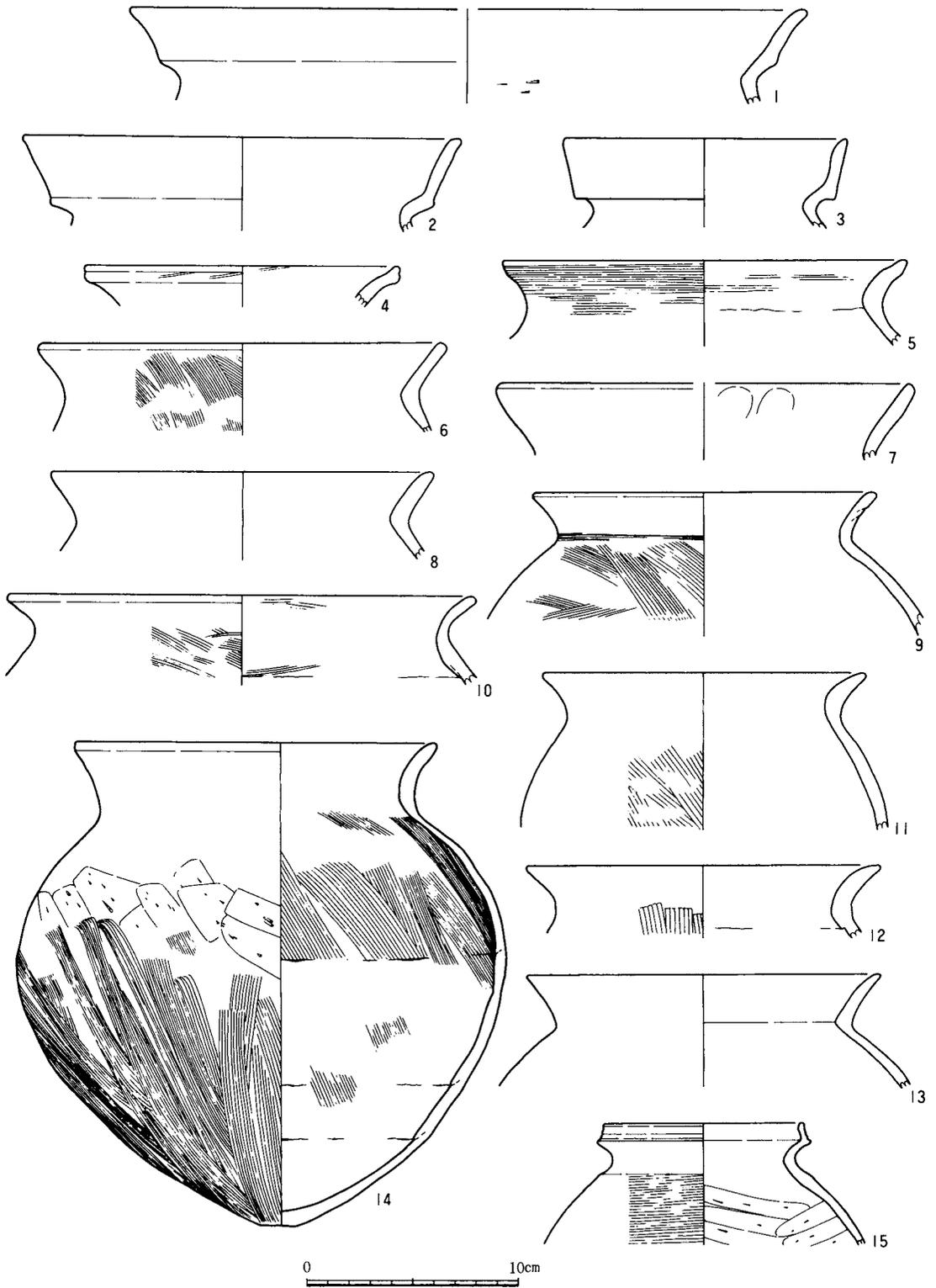
〔遺構〕 第5号竪穴住居の南東部で検出された一辺が約7mの方形の竪穴住居で、周溝を伴う。遺構南側の一部は旧林道により、北東隅は電柱によりそれぞれ破壊を受ける。主軸はN-2°-Eをさす。主柱穴は4本で、深さは40～45cm、柱間寸法は3.5m×3.3mを測る。遺構のほぼ中央で炭化物や焼土を含んだ土坑が検出され、炉跡と考えられる。また東辺部では長方形2段掘りの土坑が3基検出された（土坑1～3）。土坑1は周溝の内側で検出され、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ3cmの長方形の土坑の東隅に一辺50cm程度の方形の土坑をさらに40cmほど掘り込む。内側の土坑の上面を灰白色の粘土で覆い、中には炭化物と焼土を多量に含む。土坑2・3もほぼ同じ内容を示すが周溝の外側で検出されている。一方西側では径3～4cmの小さいピットが南北方向に一直に並ぶ。覆土は5層からなる。第1層は灰褐色粘質土で木の根による攪乱と思われる。第2層はにぶい褐色粘質土で炭化物を含み比較的多くの遺物が出土した。この層まで竹の根が入り込む。第3層は橙色粘質土で炭化物を含み遺物を比較的多く含む。第4層は橙色粘質土で地山質土ブロックを含む。第5層は褐色粘質土で炭化物をわずかに含み、遺物を多量に含む。遺構の時期は竹生野第VI期に比定される。

〔遺物〕 1～3・15は有段口縁の甕形土器である。1・2は口縁部が緩く外反し、胎土には石英等の砂粒や海綿骨片を多く含む。3は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。口径13.0cmを測り、胎土には雲母片を多く含むが海綿骨片はまったく含まない。15は鋭く内屈した短い口縁部をもつ山陰系甕形土器で、遺構中央南よりの床面で検出された。口径9.1cmを測り、内・外面ともにナデ調整を施すが胴部内面にはケズリ調整が施される。色調は黄橙色を呈し、胎土には砂粒、微細な海綿骨片を含む。4～14・16は「く」字口縁の甕形土器である。4は口径14.6cmの小型品で、口縁端部の中央に沈線を巡らす。5は口縁端部をつまんで先細りに仕上げた後、内・外面ともにナデ調整を施す。口径は18.6cmを測り、胎土には石英等の礫や海綿骨片を含む。9は口径15.7cmで、口縁部は内・外面ともにナデ調整を、胴部は外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。胎土には

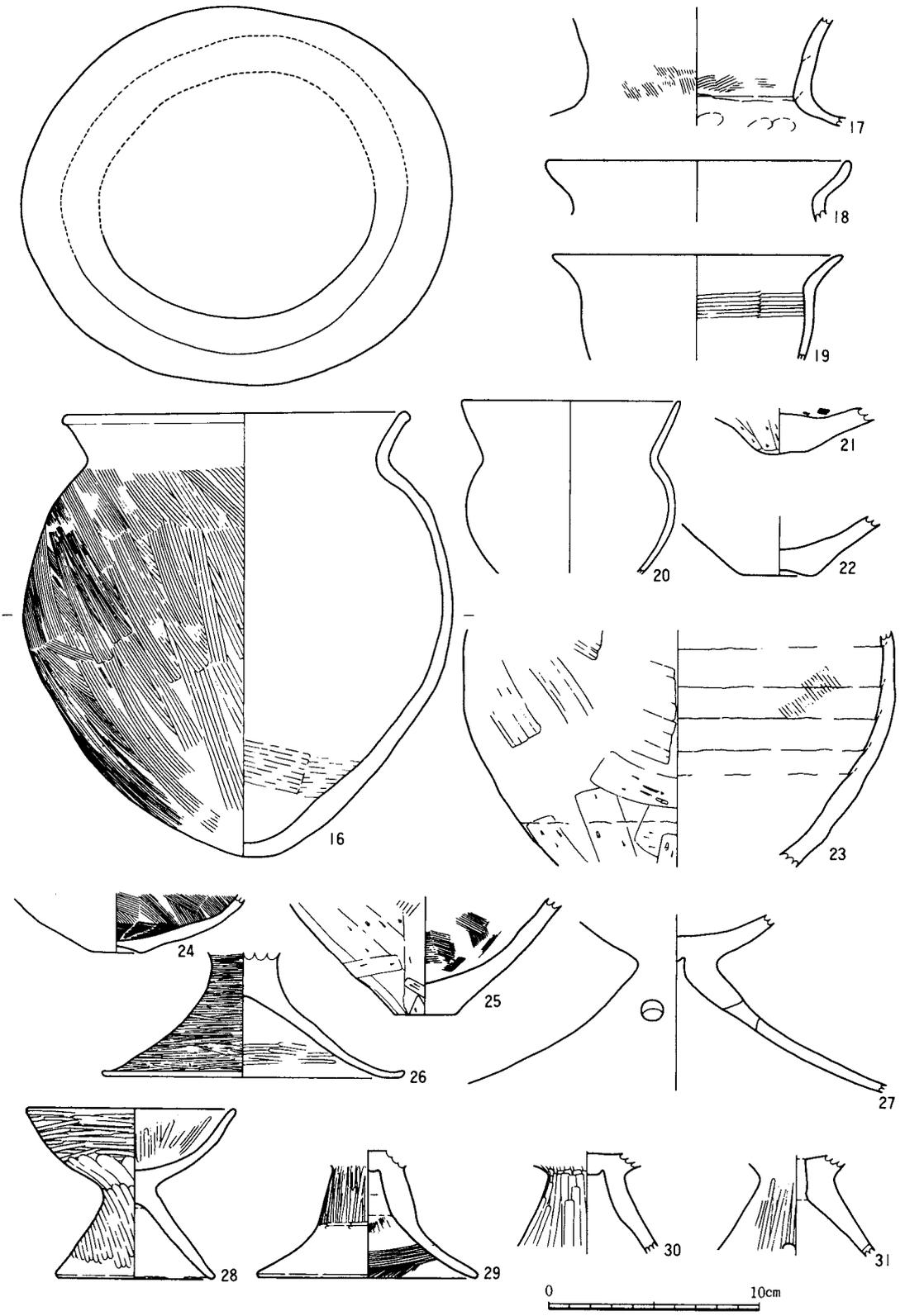


- 1. 灰褐色粘質土 3. 橙色粘質土 5. 褐色粘質土
- 2. にぶい褐色粘質土 4. 橙色粘質土

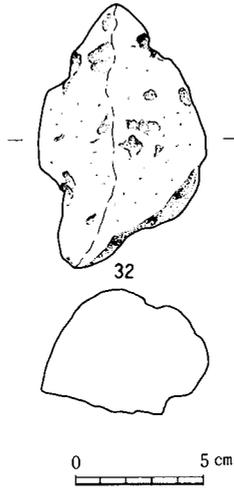
第69図 第6号竖穴住居実測図



第70図 第6号竖穴住居出土土器実測図1 (S=1/2)



第71图 第6号竖穴住居出土土器实测图 2 (S=1/3)

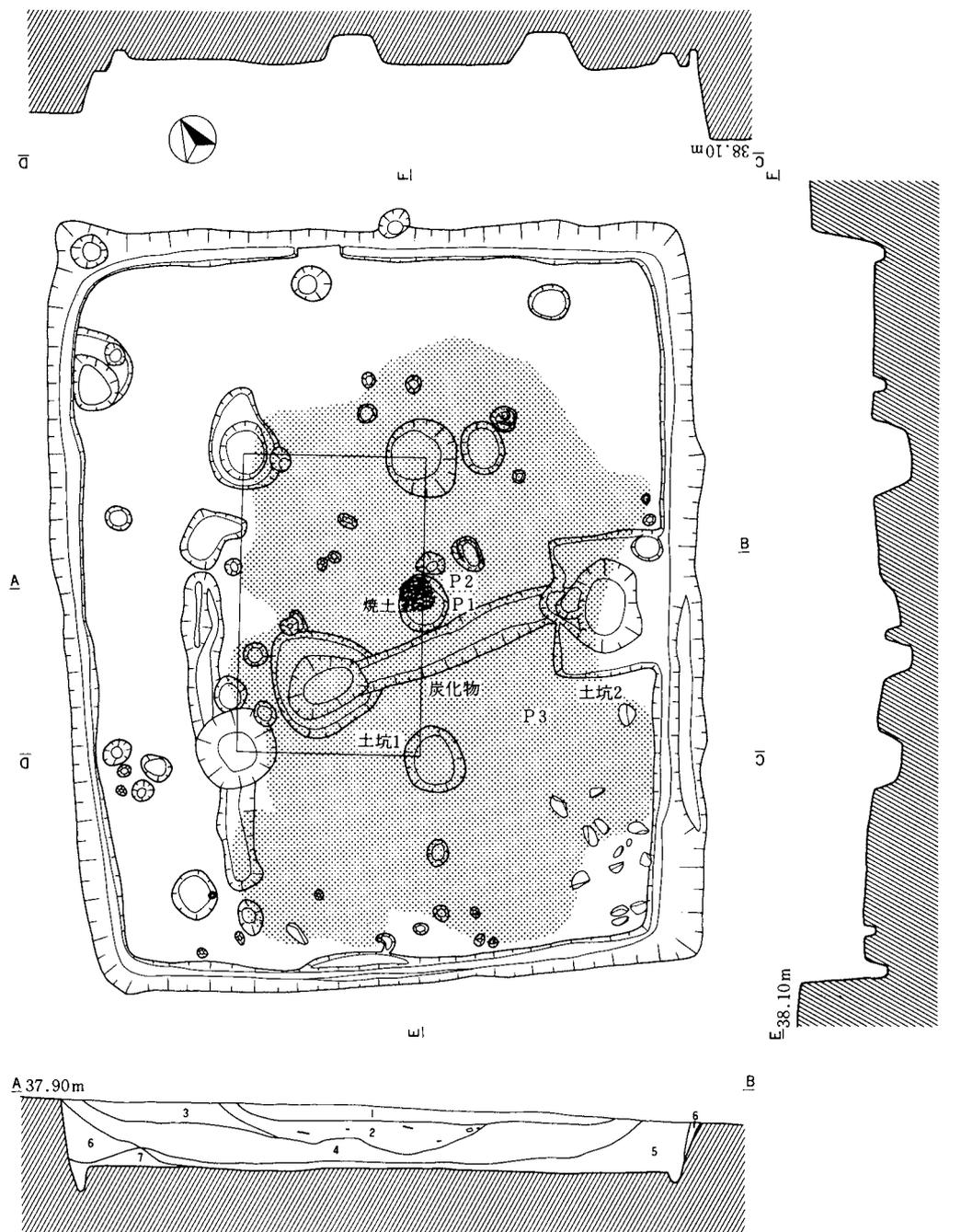


第72図 第6号竪穴住居出土軽石実測図
(S=1/4)

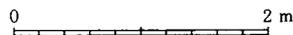
赤色酸化粒や石英等の礫を含み、微細な海綿骨片を多量に含む。11～13は口縁端部が先細りするもので、13は口径16.3cmを測り、口縁部外面に煤が付着する。14は口径16.7cm、胴部最大径22.9cm、底径1.5cm、器高22.6cmを測り、色調は黄橙色を呈す。北西隅の主柱穴の直上で検出された。口縁部には内・外面ともにナデ調整を施し、胴部には外面の上半にナデ調整、下半にハケ調整を、内面にはハケ調整を施す。胎土には石英粒等の礫、微細な海綿骨片を多く含む。16は口縁部の長径16.7cm、短径14cm（推定）、胴部張出部分の長径20.5cm、短径17.8cmの扁平な甕で、器高は21.1cmを測る。遺構北辺中央の周溝付近で検出された。口縁部には内・外面ともにナデ調整を、胴部には外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。色調は黄橙色であるが胴部下半は黒褐色を呈す。胎土には粗砂粒や微細な海綿骨片を多量に含む。17は壺片で内・外面ともにハケ調整後、ナデ調整を施す。色調は橙色を呈し、胎土には砂粒、赤色酸化粒、海綿骨片を含む。18・19は小型の鉢形土器、20は土坑1北の周溝内で検出された小型の壺形土器で、口径10.2cm、器高9cm（推定）を測る。色調は黄橙色を呈し、胎土には石英等の礫・粗砂粒、海綿骨片を含む。器面摩滅のため調整等は不明。26～30は高杯形土器である。26は北東隅の主柱穴の北、27は土坑1の北、29は遺構ほぼ中央のそれぞれ床面で検出された。脚部はいずれも大きく「八」字状に開き27は脚部の3箇所には円形の透かしをもつ。28は26の北の床面で検出された内湾気味に立ち上がる杯部と直線的に開く脚部をもつ。口径9.7cm、底径7.6cm、器高8.2cmを測り、杯部には内・外面ともにヘラミガキ調整を、脚部には外面にヘラミガキ調整、内面にナデ調整を施す。色調は黄橙色を呈し、胎土には石英・雲母等の礫・粗砂粒、海綿骨片を多量に含む。31は器台の脚部で、土坑1の北西隅の床面で30とともに検出された。32は軽石で長さ10.4cm、最大幅6.5cm、重さ31gを測る。

第8号竪穴住居（第73・74図、図版46・63）

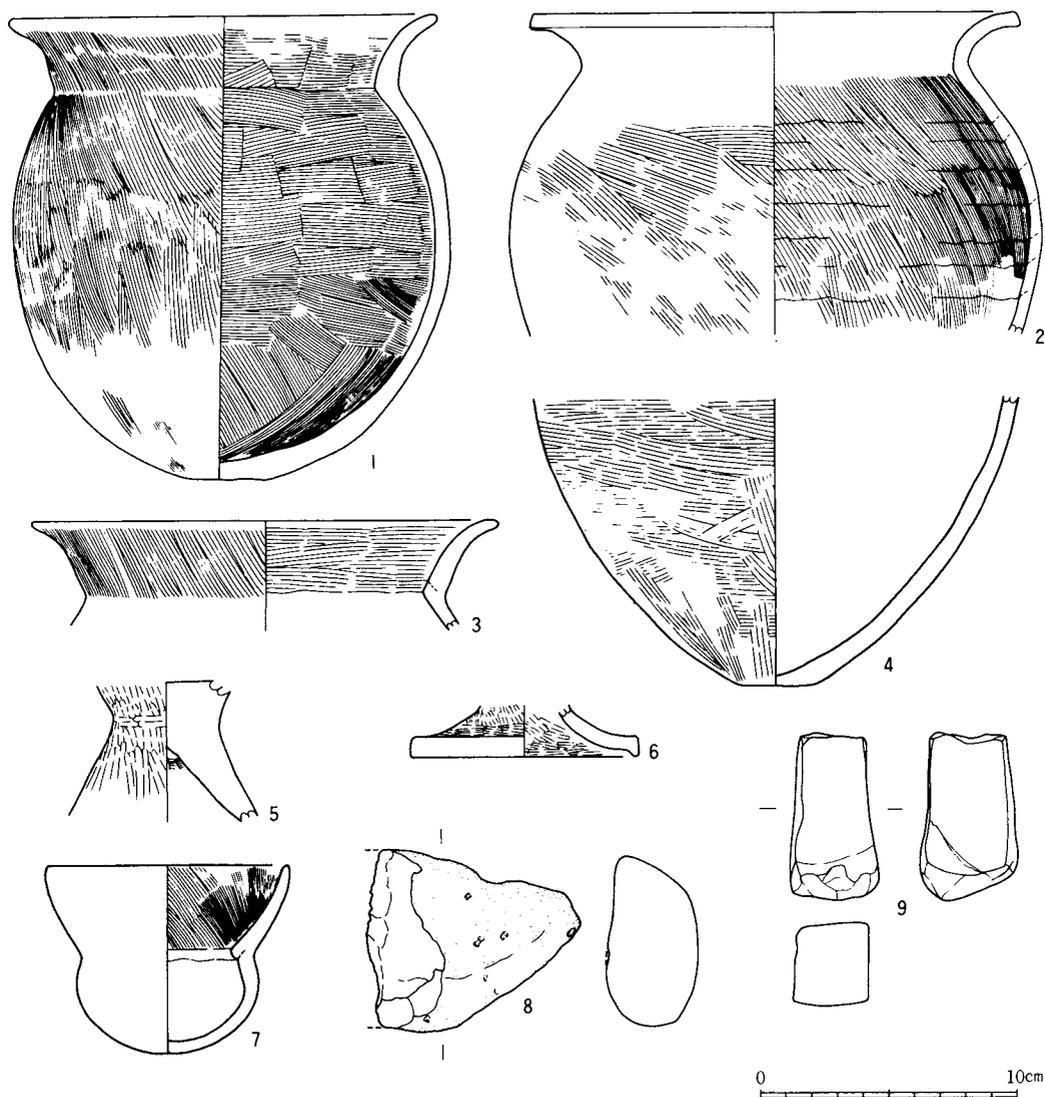
Q・R-4・5区、調査区の北端で検出された6.5m×5.5mの長方形の竪穴住居。主軸はN-25°-Eをさす。主柱穴は4本で、柱間寸法は長軸2.5m、短軸1.6mを測る。周溝を有し、幅10～15cm、深さ10～20cmを測る。覆土は7層からなる。第1層は暗褐色粘質土で炭化物を多量に含む。第2層は黒褐色粘質土で炭化物を多量に含む。本層で比較的まとまった遺物が出土した。第3層はにぶい橙色粘質土で炭化物を含む。第4層はにぶい橙色粘質土で炭化物、多量の地山質土ブロックを含む。第5層は灰褐色粘質土で炭化物を多く含む。第3・4層に比べて遺物の量は少なくなり、礫を多量に含む。第6層は橙色粘質土で炭化物、地山質土ブロックをわずかに含む。第7層はにぶい橙色粘質土で炭化物、地山質土ブロックを含む。遺構床面の南西よりの広い範囲にわたって炭化物が検出され、ほぼ中央では焼土を伴うピット(P1)が検出された。さらにこのピットに接するピット(P2)からは炭化物が多量に検出された。また遺構の中央で楕円形2



- 1. 暗褐色粘質土 3. にふい橙色粘質土 5. 灰褐色粘質土 7. にふい橙色粘質土
- 2. 黒褐色粘質土 4. にふい橙色粘質土 6. 橙色粘質土



第73図 第8号竖穴住居実測図 (S=1/60)



第74図 第8号竪穴住居出土土器実測図 (S=1/3)

段掘り土坑(土坑1)が、東辺中央で長方形2段掘り土坑(土坑2)がそれぞれ検出された。土坑1は直径95cm、深さ4cm程の略円形土坑の中央に65cm×50cmの楕円形土坑をさらに38.5cm掘り込む。土坑2は120cm×90cm、深さ5cmの長方形土坑の中央に80cm×60cmの楕円形土坑をさらに50cm程掘り込む。覆土はいずれも暗褐色粘質土でわずかに炭化物を含み、底面近くには黒褐色粘質土で炭化物を多量に含む層が堆積する。これらの土坑は幅35cm、深さ26cmの溝で連結する。遺構の時期は竹生野第VI期に比定される。

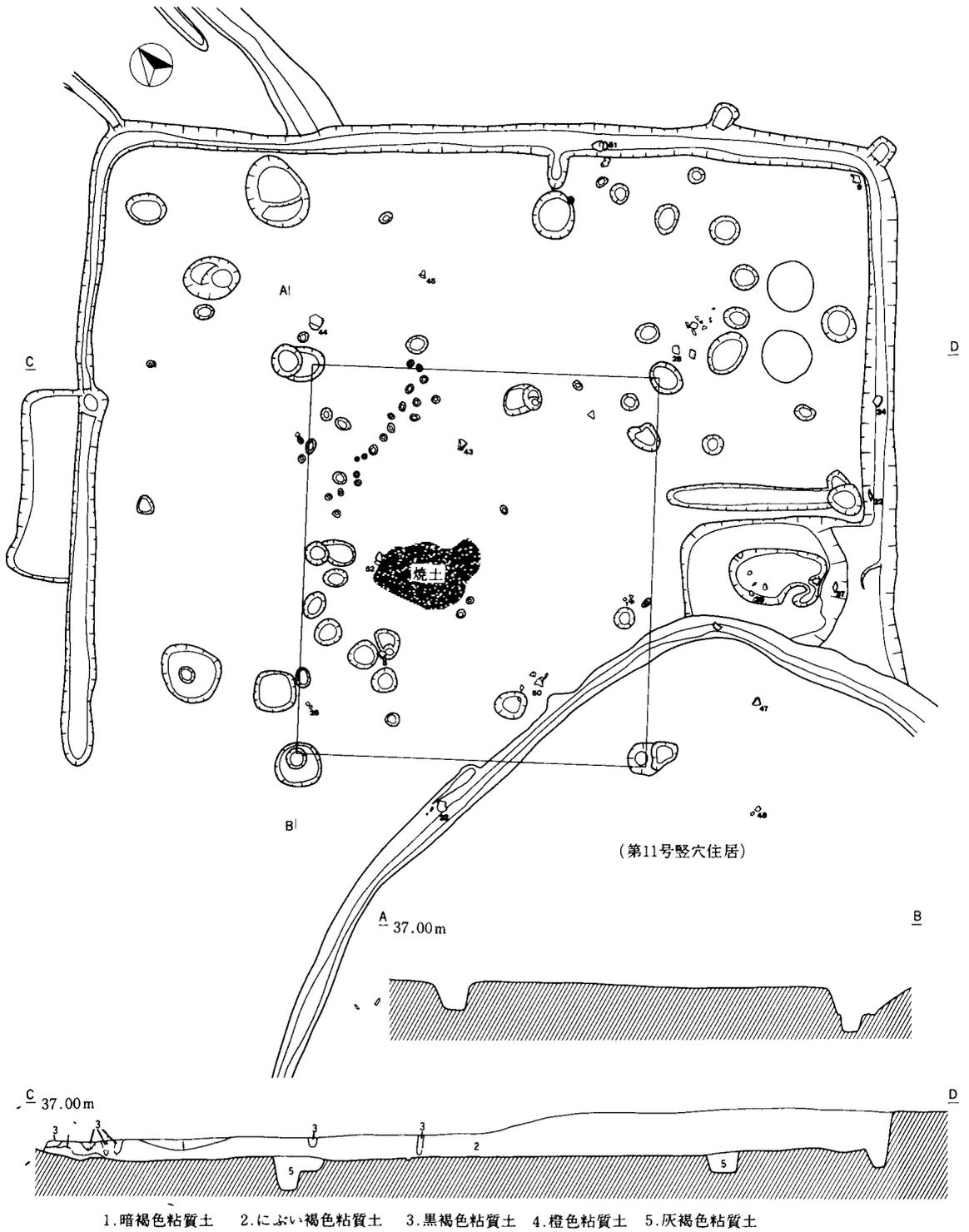
[遺物] 出土遺物の量は全体的に少なく図示できたものも少ない。第2層から1～3・5・7・9などの遺物が出土した。1～4は甕形土器で口縁部は「く」字状に外反する。1は口径16.9cm、胴部最大径17.2cm、器高17.3cmで、3とともに外反気味に立ち上がる口縁部は中程でさらに外反する。器面全体にハケ調整を施した後、口縁端部の内・外面をナデ調整で仕上げる。色調は

内面が黒褐色、外面は赤褐色を呈すが外面には煤が付着する。2は口縁部が大きく外反し端部に面取りを施す土器で、口径18.8cm、胴部最大径21.0cmを測る。口縁部にナデ調整を、胴部にハケ調整を施す。色調は黄橙色呈し、胎土には石英等の粗砂粒や海綿骨片を含む。4は北辺中央の周溝内で検出された。色調は黄橙色を呈し、胎土には粗砂粒や赤色酸化粒を多く含み海綿骨片も含む。5・6は高杯形土器の脚部で6は器台の可能性も考えられる。7は小型丸底土器で、口径9.4cm、器高7.3cmを測る。口縁部内面はハケ調整を、他はていねいなナデ調整を施す。色調は黄橙色で胎土には砂粒、海綿骨片を含む。8は軽石で土坑2の南西隅近くの小ピット(P3)から2点出土した内の1点である。9は砥石で中央部付近で欠損する。また図示できなかったが北西側の覆土(第4層)からヤマトシジミかと思われる二枚貝の殻頂付近の破片が検出された。

第9号〔新〕竪穴住居(第75~78図、図版47・63・64)

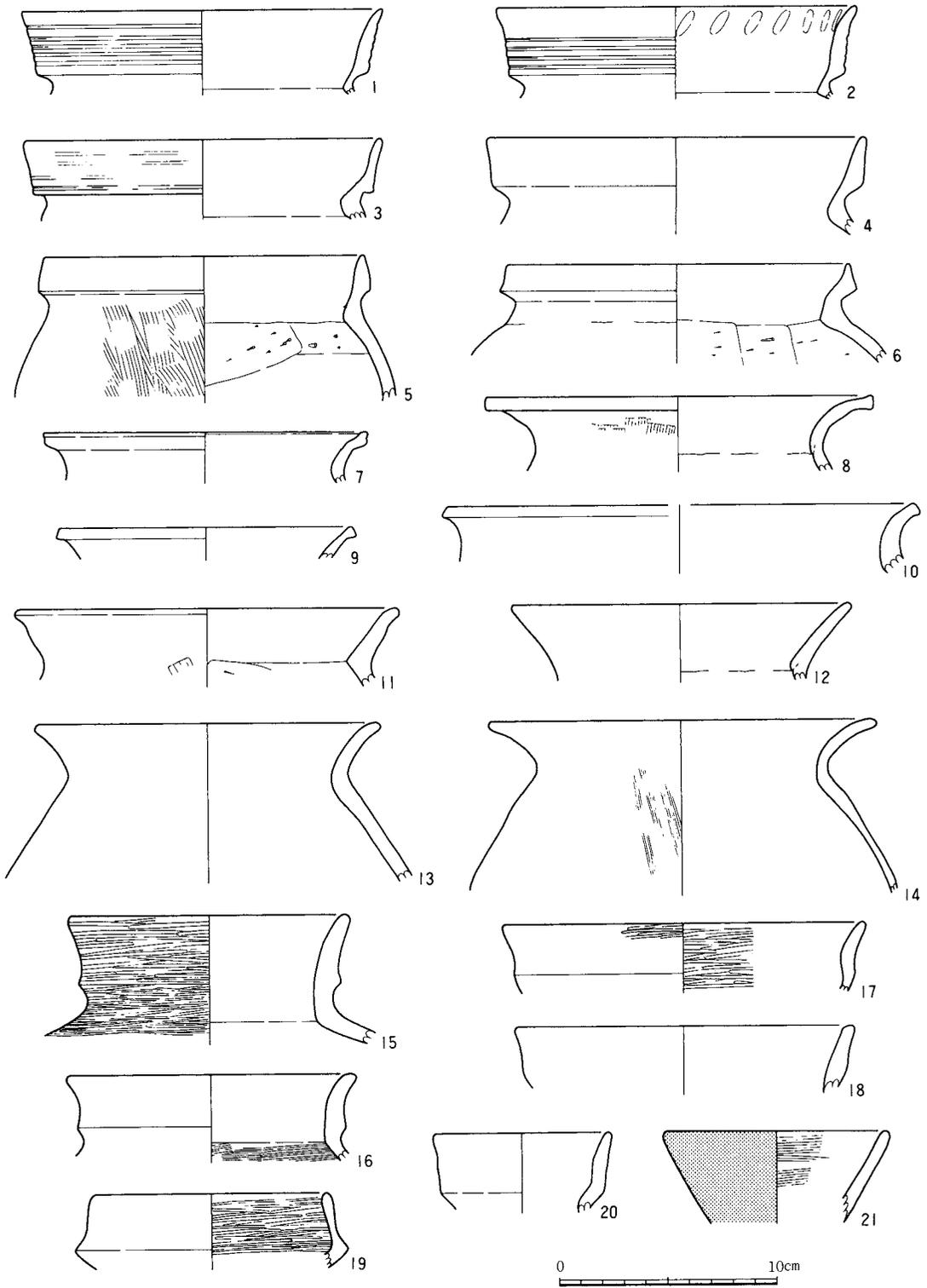
〔遺構〕 M・N-5・6区で第7・10・11号竪穴住居と切り合って検出されたが、南半部にかなりの削平を受けており、南側で遺構は検出されなかった。第7・11号竪穴住居を切り、第10号竪穴住居に切られる。一辺の長さがおよそ8mの方形プランを呈し、本遺跡で最大の規模を誇る。主柱穴は4本で、柱間寸法は3.8m×3.5mを測る。主軸はN-52°-Wをさす。覆土はにぶい褐色粘質土の単層で、炭化物を多く含み多量の遺物が出土した。周溝は南辺を除き検出され、幅15~30cm、深さ15~20cmを測る。遺構のほぼ中央で焼土が、東辺中央で長方形2段掘り土坑が検出された。土坑は長軸1.8m、短軸1.1m、深さ23cmの長方形土坑の東側に95cm×55cmの長円形ピットをさらに24cmほど掘り込む。覆土は暗褐色粘質土の単層で炭化物、黄褐色粘質土の粒子をわずかに含み、上部土坑の西隅で多量の小石が検出された。また土坑の北側に接して長さ1.7m、幅25cm、深さ約40cmの溝状遺構が検出された。遺構の時期は竹生野第Ⅱ区に比定される。

〔遺物〕 1と13を除いた土器が出土したが、時期の異なった3基の竪穴住居と切り合っているため遺物の時期にかなりばらつきが認められる。2~12・14は甕形土器である。2~4は有段口縁をもつもので、2・3は口縁部に擬凹線文を、4はナデ調整を施す。2は口径16.4cmで、口縁部内面に指頭圧痕が認められる。色調は外面が暗灰黄色、内面がにぶい黄橙色を呈し、胎土に粗砂粒、赤色酸化粒を多量に含み海綿骨片も含む。3・4は胎土に石英等の礫・粗砂粒を多量に含む。5・6は口縁部の下端を膨らませ有段口縁とするもので、先細りの口縁端部はほぼ直立する。5は口径14.6cm、口縁部は内・外面ともにヨコナデ調整を、胴部外面にはハケ調整、内面にはケズリ調整をそれぞれ施す。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には礫を多く含む。6は口径14.2cmで、器面がかなり摩滅しているため詳細は不明であるが5と同じ器面調整を行うものと思われる。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には石英・雲母等の礫・粗砂粒を多量に含み海綿骨片も含む。7~14は口縁部が「く」字状に外反するもの。7は口縁端部をつまみ上げ狭い口縁帯をもつ。色調は黒色を呈し、胎土には石英等の礫・粗砂粒、海綿骨片を含む。8~10は口縁端部を面取りするもの。8は口径17.6cmで、口縁部がかなり大きく外反する。色調は外面が黒褐色、内面がにぶい黄橙色(口縁端部は黒褐色)を呈し、胎土には石英・雲母等の礫・粗砂粒、海綿骨片を多量に含む。10は浅黄橙色を呈し、胎土には礫、赤色酸化粒、海綿骨片を含む。11・12は頸部で強く屈曲して外反するもの。11は黒褐色で胎土に粗砂粒を含み海綿骨片は細かく多い。12は口径15.4cmで、胎

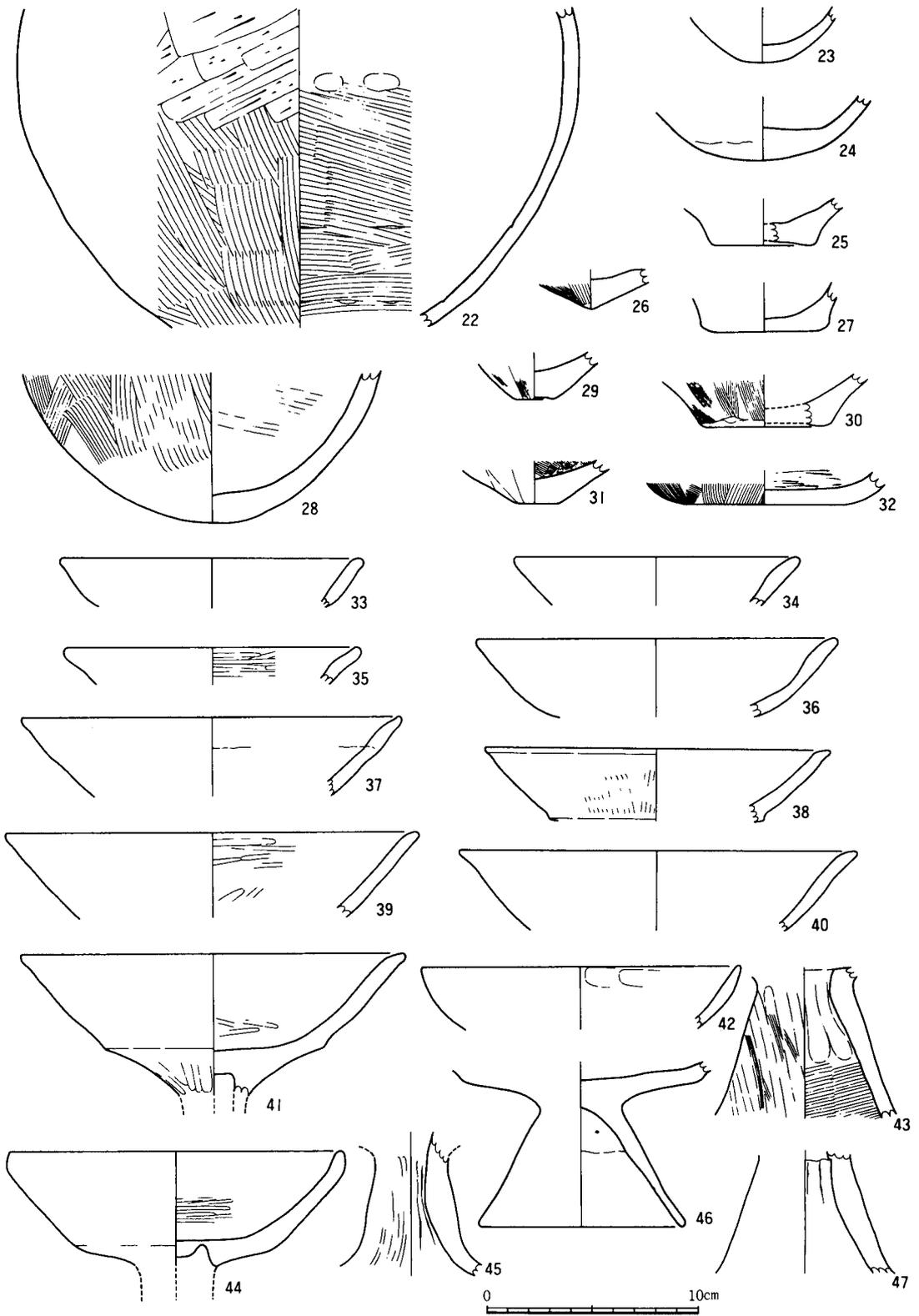


第75図 第9号(新)竖穴住居実測図 (S = 1/60)

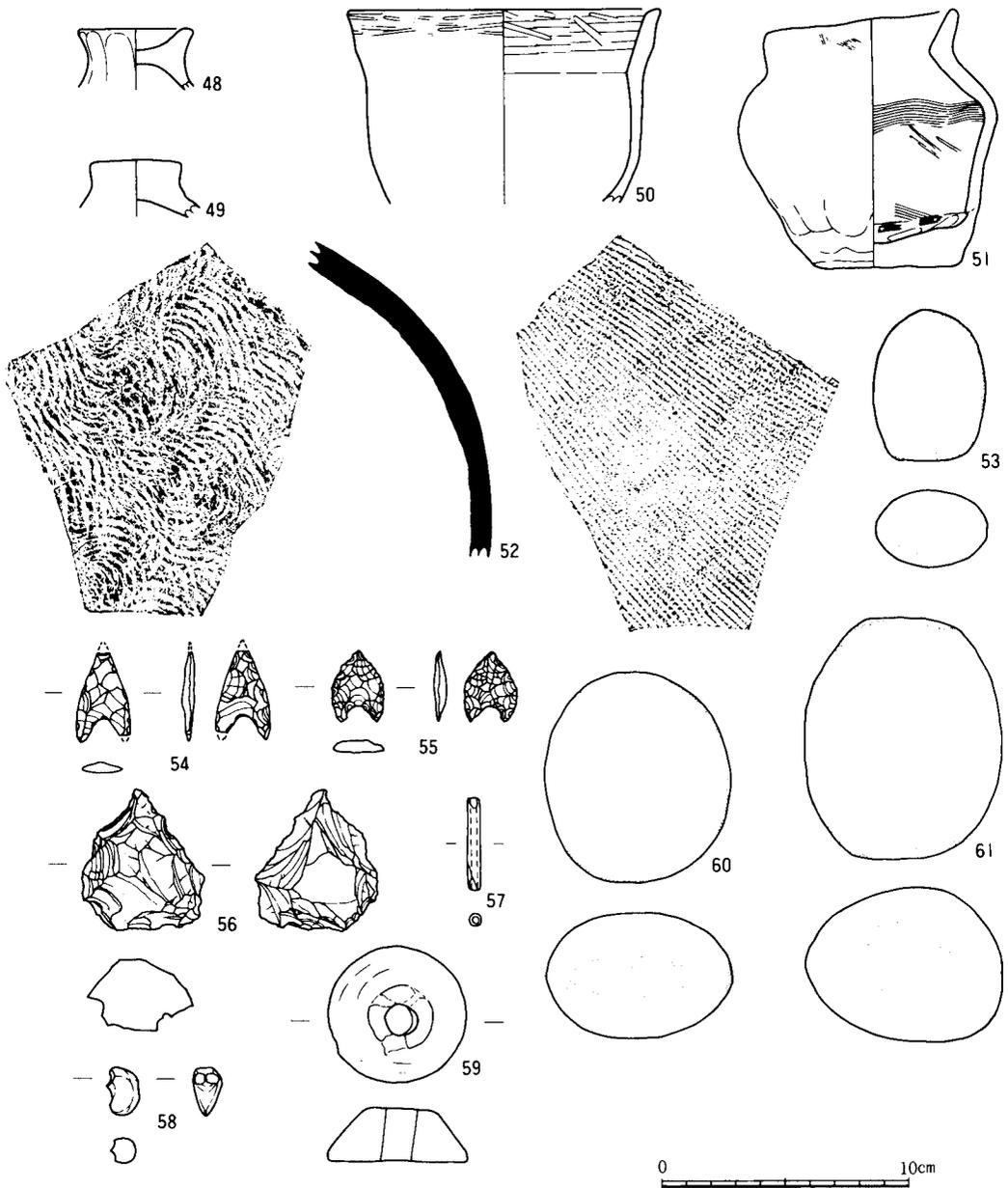
土に粗砂粒、赤色酸化粒、微細な海綿骨片を含む。色調は外面が浅黄橙色、内面が黒褐色を呈す。14は口縁部が大きく外反するもので、口径17.4cmを測る。色調は黄橙色を呈し、口縁部外面の一部に煤が付着する。胎土には石英等の礫、海綿骨片を多く含む。15・16・20・21は壺形土器。15・16は有段口縁で、有段部下端がタガ状に張り出す。15は口径12.6cmで、外面にヘラミガキ調整を施す。色調は黄橙色で、石英・雲母等の礫、赤色酸化粒を含み海綿骨片は少ない。16は口径13.0cmで、内・外面ともにナデ調整を施す。色調は外面がにぶい橙色、内面が黒色で、雲母片等の砂粒、海綿骨片を含む。20も15・16に類似するがタガ状の張り出しはみられない。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には石英・雲母等の粗砂粒を多く含むが海綿骨片は観察されなかった。21は「く」字口縁で、口径10cmを測る。色調は浅黄橙色を呈し、外面には赤彩を施す。胎土には雲母等の砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。17・18は鉢形土器。17は口径16.4cmの内面黒色土器で、内・外面ともにヘラミガキ調整を施す。外面は灰色を呈し、胎土には細砂粒と微細な海綿骨片を含む。19は須恵器の杯に似た器形の内面黒色土器で、口径11.4cmを測る。外面は浅黄橙色を呈し、胎土には細砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。22～32は甕形土器もしくは壺形土器の底部。33～47は高杯形土器であるが、小片が多いため鉢形土器との区別はつけ難い。41は口径17.9cmを測り、杯部は途中で屈曲して内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。色調は橙色で、胎土には細砂粒、海綿骨片、多量の赤色酸化粒を含む。調整は器面摩滅のため不明。44は口径15.4cmで、途中でわずかに屈曲し、直線的に開き、口縁端部は直立する。内・外面ともにヘラミガキ調整が施される。色調は黄橙色を呈し、胎土には細砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。48・49は蓋形土器の紐部。48は紐頂部が凹むもので紐径4.7cmを測る。色調は黄橙色で、胎土には礫、赤色酸化粒を多量に含み海綿骨片は少ない。49は紐径3.8cmを測る。色調は橙色で、胎土には粒径3mm程度の礫を多く含み海綿骨片、赤色酸化粒も含む。50は小型の鉢形土器で、口径13.6cmを測る。口縁部には内・外面ともにヘラミガキ調整を施す。色調は体部外面が橙色、内面および口縁部外面は黒色を呈し、胎土には砂粒、赤色酸化粒を含み海綿骨片は少ない。51は小型の壺形土器で口径7.7cm、底径6.0cm、器高10.5cmを測る。色調はにぶい橙色で、胎土に砂粒、海綿骨片を含む。52は須恵器の甕の破片で外面に平行叩き目文、内面に同心円文を施す。第10号竪穴住居でまとまって出土した個体に類似し、同竪穴住居につく可能性も考えられる。53・61は敲石で、飛驒地方でトチの実の皮をむくトチタタキ石に類似する⁽⁴⁾。石材は53が白色凝灰岩、61が石英安山岩と思われる。53は長さ6.1cm、幅4.3cm、厚さ3.1cm、重さ130gを測る。敲打により下端部がかなり摩滅し、上端部から一方の側縁にかけても敲打痕が認められる。61は長さ9.8cm、幅7.9cm、厚さ6.3cm、重さ672gを測り、両端部に敲打痕が認められる。60は石英安山岩製の磨石。長さ8.5cm、幅7.5cm、厚さ5.1cm、重さ468gを測り、側縁に使用痕が認められる。54・55は凹基無茎の石鏃。56は石錐と考えられ、剝片の一边を片面から加工調整し断面三角形に仕上げる。輝石安山岩製で、長さ3.7cm、幅3.3cm、厚さ1.8cm、重さ19.7gを測り、錐部は0.6cmと短い。57は緑色凝灰岩製の管玉で、長さ2.5cm、径0.4cm、重さ0.4gを測る。58は緑色凝灰岩製の勾玉で、頭部を欠損する。59は滑石製の紡錘車。上面直径1.8cm、底面直径3.7cm、高さ1.4cmの裁頭円錐形を呈し、中央に直径0.8cmの穴を穿つ。重さは23.0gを測る。



第76図 第9号〔新〕竪穴住居出土土器実測図1 (S = 1/3 1・13は第9号〔古〕竪穴住居出土土器)



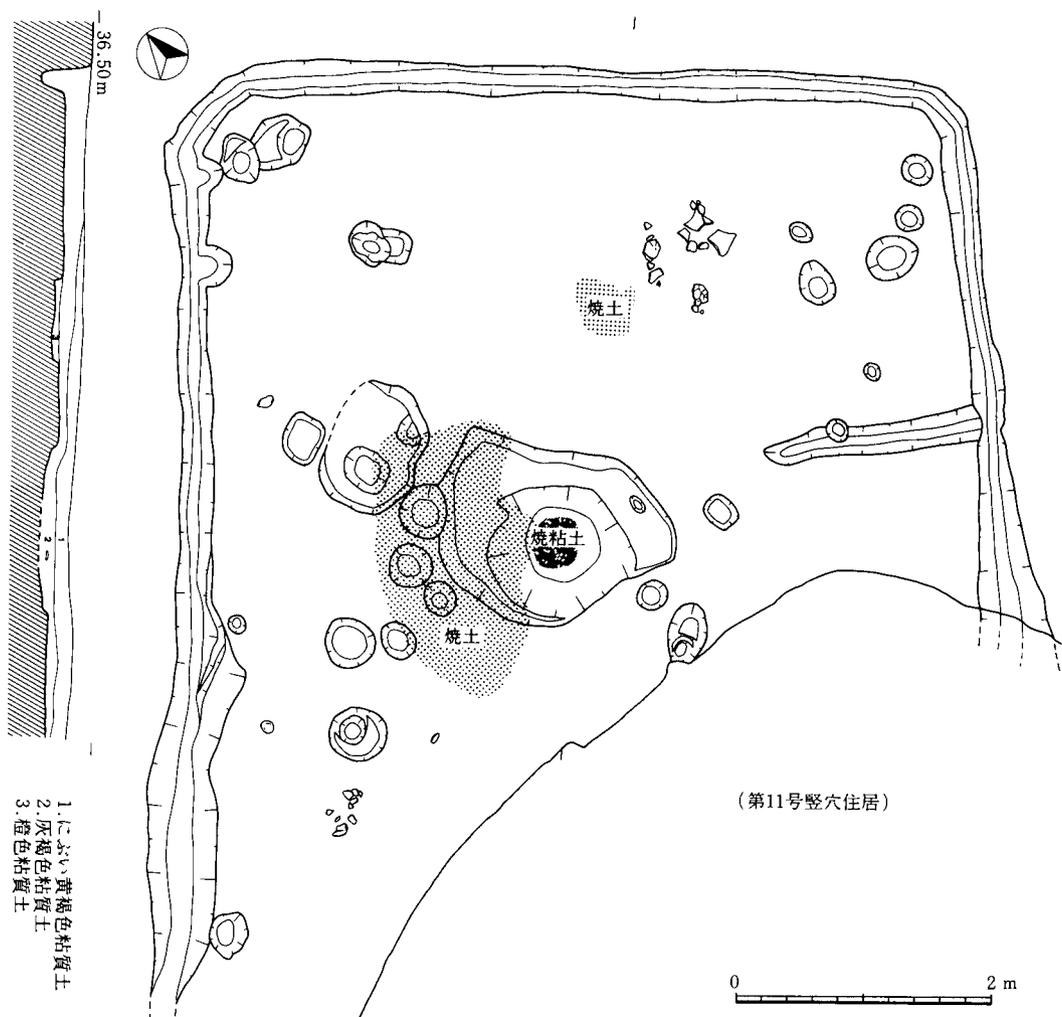
第77图 第9号(新)竖穴住居出土土器实测图2 (S=1/3)



第78図 第9号〔新〕竪穴住居出土遺物実測図 (S = 1/3 54~59は S = 1/2)

第9号〔古〕竪穴住居 (第76・79図、図版47)

[遺構] 第9号〔新〕竪穴住居の床面で検出された。7.5m (推定) × 6.7mの長方形プランで周溝を有する。主軸はN-36°-Eをさす。支柱穴は新たに確認されなかったが第9号〔新〕竪穴住居の支柱穴が一部重複しているため4本の可能性が考えられる。覆土は2層からなる。第1層はにぶい黄褐色粘質土。第9号〔新〕竪穴住居築造の際に踏み固められたものと思われ、しまりがある。炭化物をわずかに含む。第2層は灰褐色粘質土。炭化物を含み、遺物もわずかに含む。本層もしまりは良好。遺構床面の中央に焼土が広く堆積し、焼土の下から長軸1.9m、短軸1.4m、深



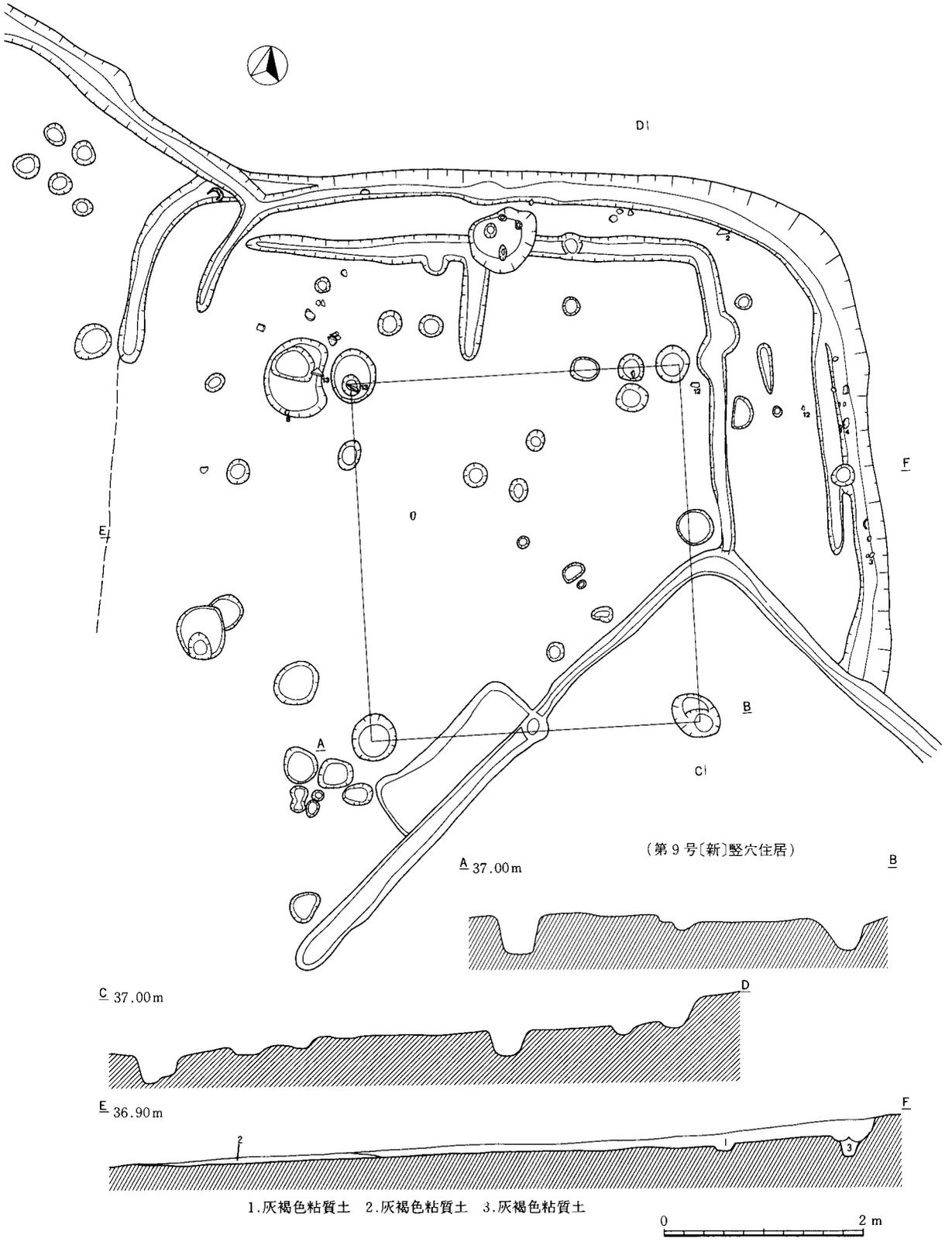
第79図 第9号〔古〕竪穴住居実測図 (S=1/60)

さ8cmの楕円形の土坑が検出された。炉跡と考えられ、土坑の底から焼けた粘土塊が検出された。土坑の覆土は橙色粘質土で焼土が混じる。出土遺物が少ないため明確な時期は不明であるが、竹生野第Ⅸ期頃と考えられる。

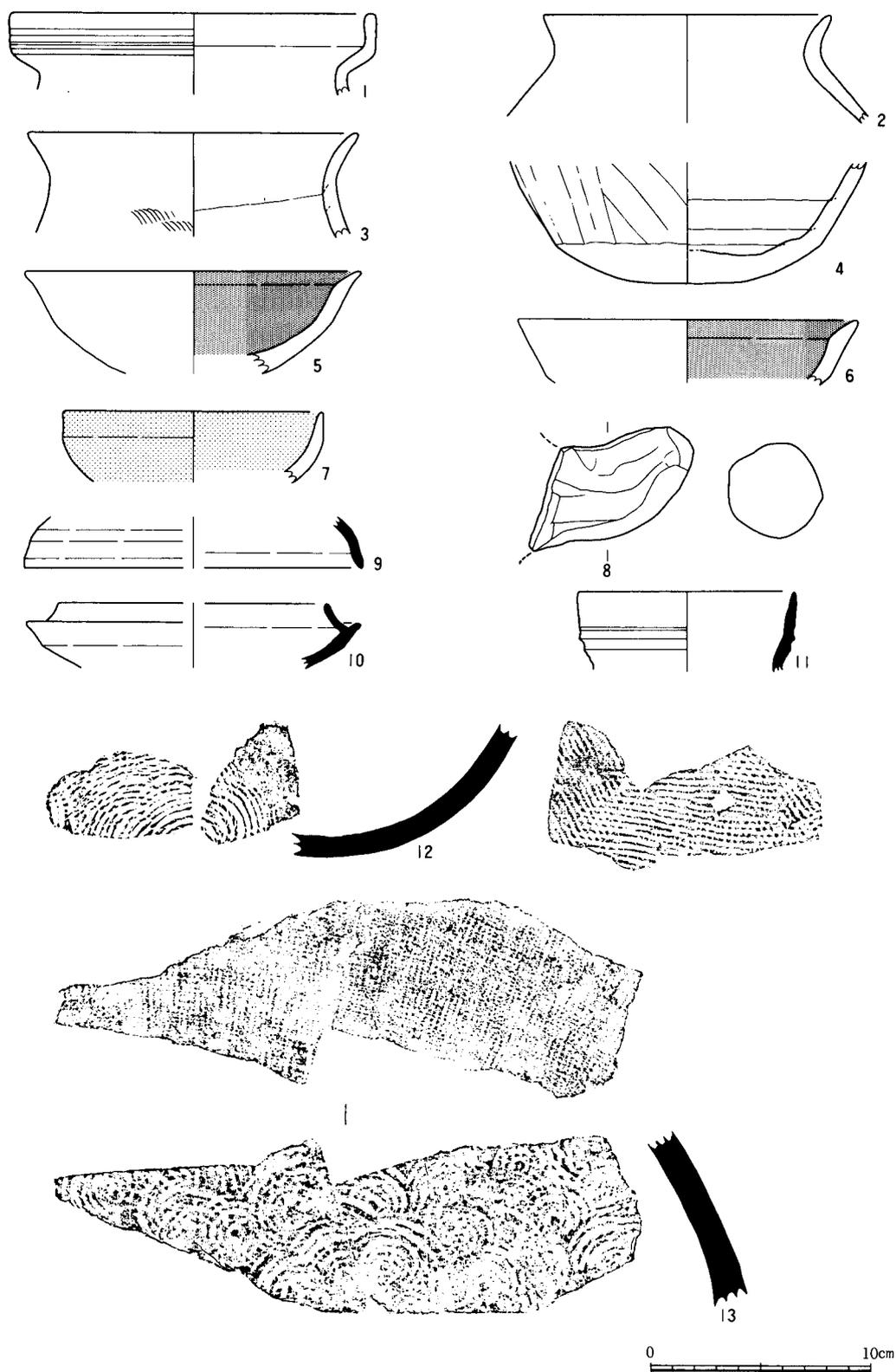
〔遺物〕 出土した遺物はいずれも小片で胴部片が大半を占めるため、図示し得た遺物はわずか2点にすぎない。1は有段口縁の甕形土器。口径は16.6cmを測り、口縁部に擬凹線文を施す。色調は黄橙色で、胎土に粗砂粒、赤色酸化粒を多く含み海綿骨片も含む。13は「く」字口縁の甕形土器で、口径15.5cmを測る。色調は黄橙色で、胎土には石英等の礫や微細な海綿骨片を多量に含む。

第10号竪穴住居 (第80・81図、図版48・65)

〔遺構〕 N・0-6区、第9号竪穴住居の北西に接して検出されたが、全体にかなりの削平を受けており南側で遺構は検出されなかった。一辺7m程度の隅円方形プランを呈し、主軸はN-



第80图 第10号竖穴住居实测图 (S = 1/60)



第81图 第10号竖穴住居出土土器实测图 (S=1/3)

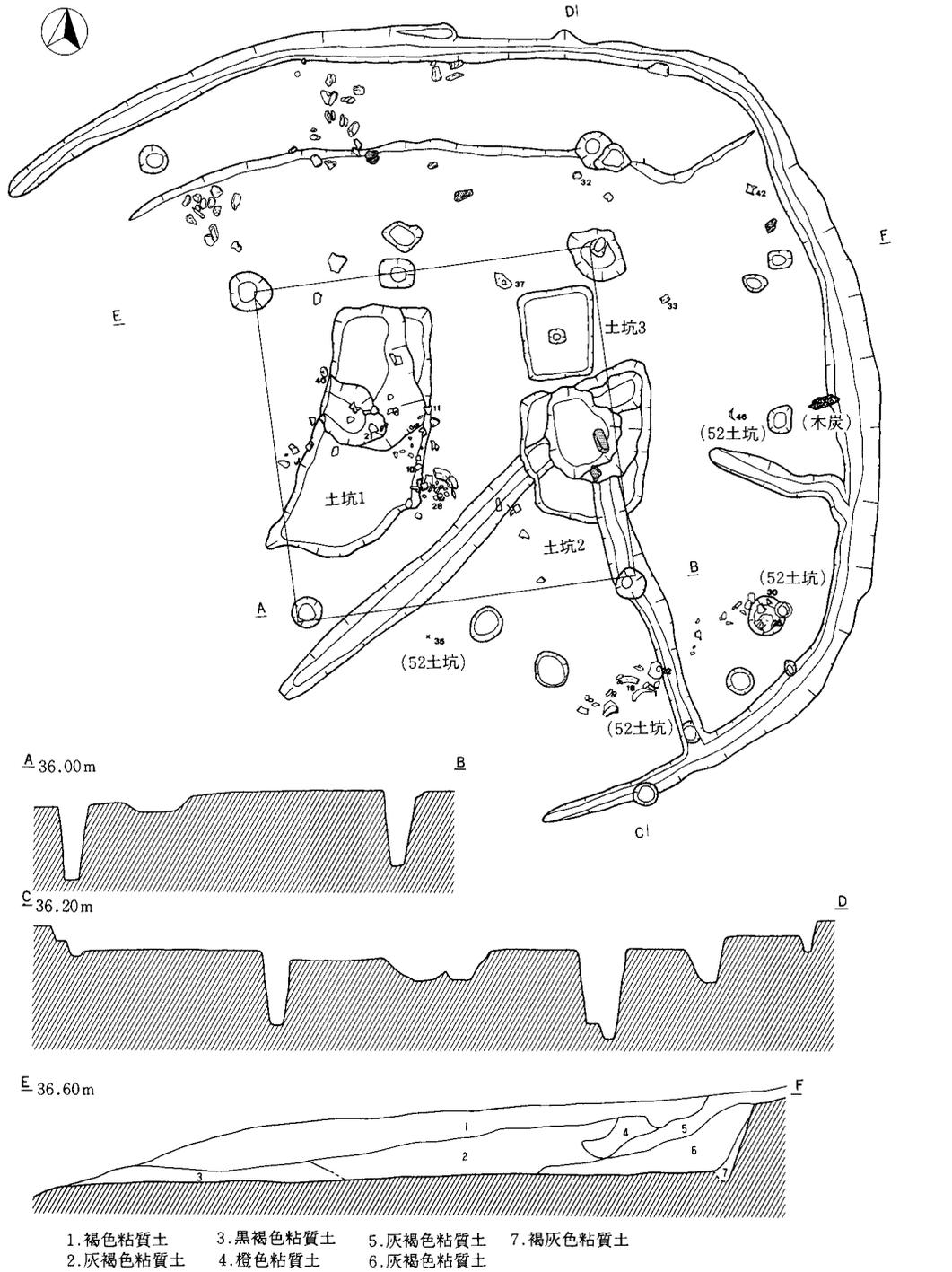
85°-Eをさす。主柱穴は4本で柱間寸法は3.6m×3.4mを測る。覆土は2層確認された。第1層は灰褐色粘質土で炭化物を多く含み多量の遺物が出土した。第2層は灰褐色粘質土で地山質土ブロックを含む。いずれも竹の根による攪乱を受ける。遺構北側で周溝が錯綜し少なくとも3回の建替え・拡張が行われたものと思われる。遺構の時期は竹生野第X期に比定される。

〔遺物〕 1は擬凹線文を施す有段口縁の甕形土器で、口縁部は直立する。色調は暗灰黄色を呈し、胎土に粗砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。2・3は「く」字口縁の甕形土器で、2は北東隅の床面で、3は東側の周溝内で検出された。2は口径13.0cmで、口縁端部が先細りする。3は口径15.0cmで、口縁部の外傾度は小さい。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には石英等の礫・粗砂粒を含む。海綿骨片は含まない。5・6は内面黒色の椀形土器で、途中で屈曲し内湾気味に立ち上がり、口縁部は外側に伸びる。5は口径15.2cm、6は15.4cmを測る。5・6ともに色調は外面が浅黄橙色を呈し、胎土には石英・雲母等の礫・砂粒を含み海綿骨片は含まない。5・6は同一個体の可能性も考えられる。7は赤彩を施す鉢形土器。内湾気味に立ち上がり、先細りする口縁端部は直立する。8は甕形土器の把手で、北西隅の主柱穴付近で検出された。9は須恵器の杯蓋でにぶい赤褐色を呈す。10は須恵器杯身で青灰色を呈す。9・10ともにTK209期に比定される。11は壺の口縁部で、口径9.8cmを測る。器面は黒く発色し光沢をもつ。13は須恵器の甕片で、外面に格子叩き目文、内面に同心円文を施す。胎土には礫・砂粒を含む。

第11号竪穴住居（第82～87図、図版48・65～67）

〔遺構〕 M-6区で検出された。遺構の上面北側が第9号竪穴住居に、中央が第7号溝にそれぞれ切られる。そのため出土遺物にはかなりの時期差が認められる。また南西部は削平により破壊を受けている。遺構は一辺約7mの隅円方形プランで、主軸はN-80°-Eをさす。主柱穴は4本で、柱間寸法は3.0m×2.9mを測る。柱穴は直径25～40cmの円形で、深さは65cmを測る。周溝を有するが南西部では確認されなかった。覆土は7層からなる。第1層は褐色粘質土で、炭化物を含み遺物もわずかに出土する。第2層は灰褐色粘質土で、炭化物を多く含み多量の土器の他、剝片・石鏃等の石器も出土した。第3層は黒褐色粘質土で、炭化物を多く含み第2層よりも多量の土器が出土した。第4層は橙色粘質土。第5層は灰褐色粘質土で東側より流れ込むように堆積する。炭化物はほとんどみられない。第6層は灰褐色粘質土で、炭化物を多く含むが遺物は少ない。第7層は褐色粘質土。遺構の中央で3基の土坑が検出された（土坑1～3）。土坑1は長軸2.2m、短軸1.0m、深さ約10cmの長方形に近い土坑の中央を長径60cmの楕円形ピットをさらに30cm程掘り込む。本土坑周辺で比較的多くの遺物が出土した。土坑2は長軸1.2m、短軸1.1m、深さ約6cmの方形の土坑で、北側に長径70cmの楕円形ピットをさらに60cm程掘り込む。幅20～30cm、深さ約6cmの溝が周溝から伸び本土坑に連結する。土坑3は長軸76cm、短軸65cm、深さ64cmの長方形土坑で中央に直径約15cm、深さ44cmのピットが検出された。これらの土坑から遺物は検出されなかった。また北壁の周溝から内側に約1mの範囲が床面より約10cm高く壇状となる。ベッド状遺構に類似し、周辺で礫がまとまって出土した。遺構の時期は竹生野第IV期に比定される。

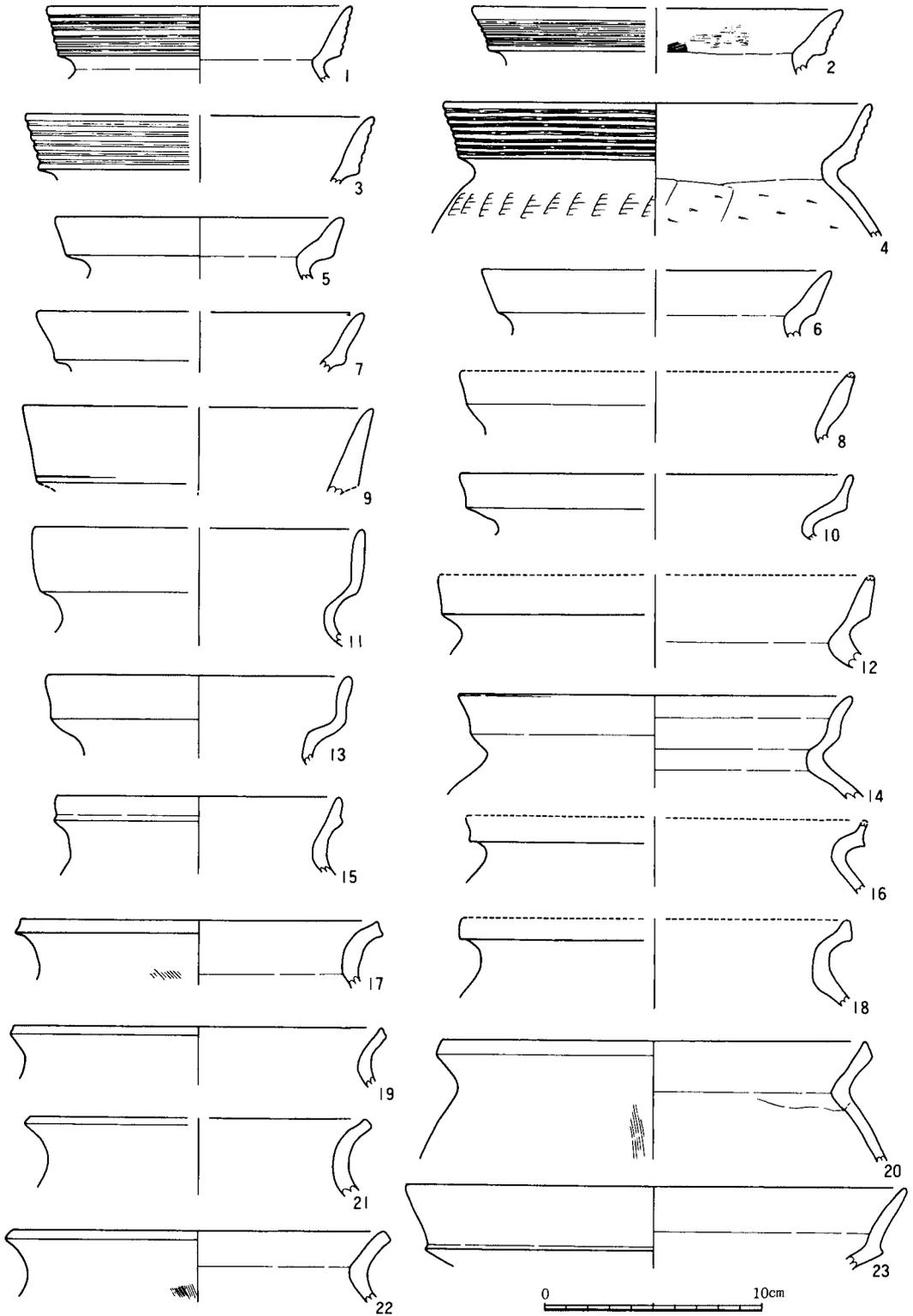
〔遺物〕 当初、本遺構は南東部で長軸約3m、短軸約2mの楕円形の第52号土坑として掘られていたが、第9号竪穴住居の床面や第7号溝の下で隅円方形のプランが検出されたため竪穴住居



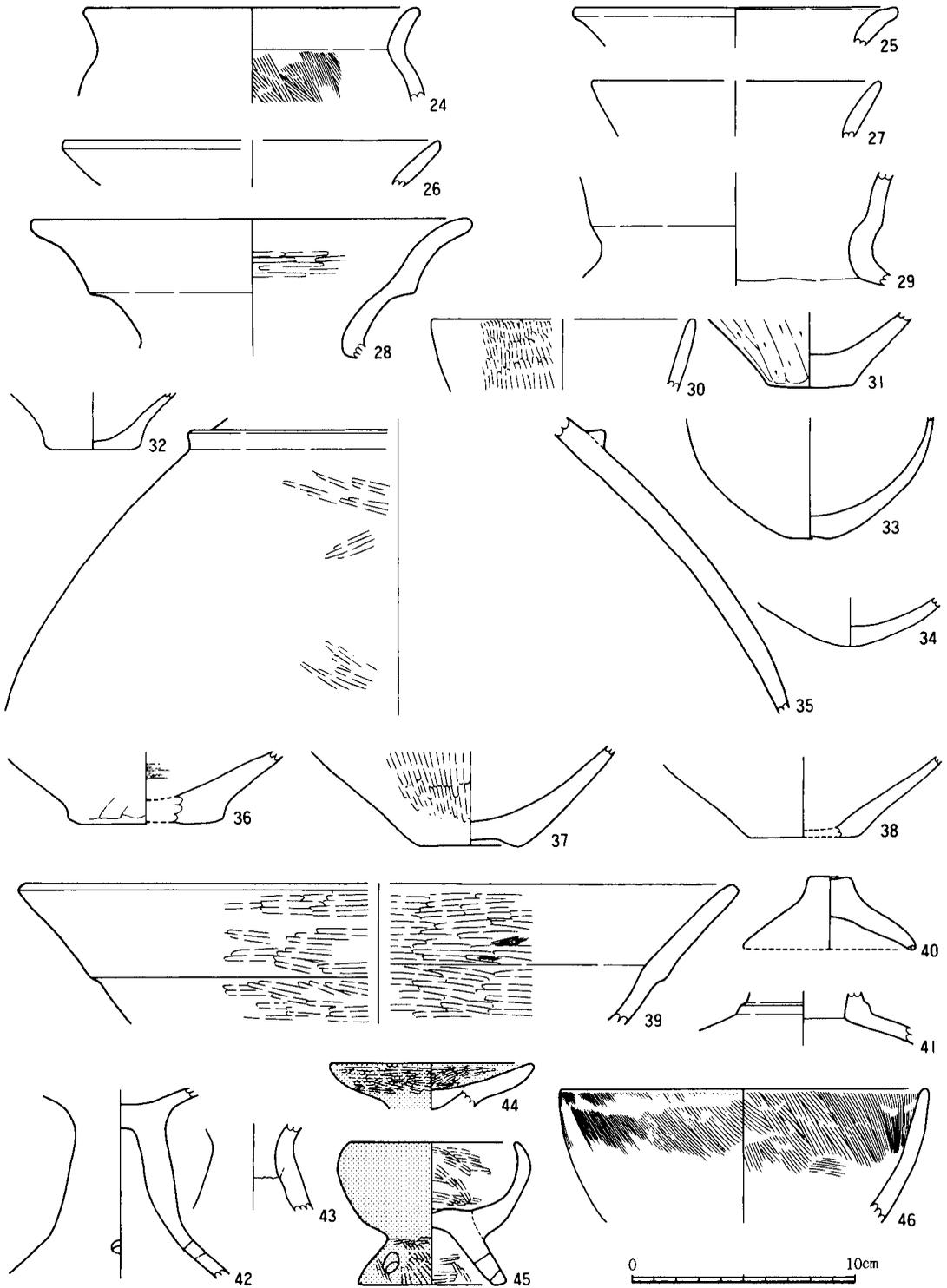
第82图 第11号竖穴住居实测图 (S = 1/60)

であることが確認された。本稿では遺構上層部の遺物を第52号土坑、下層部の遺物を第11号竪穴住居の出土遺物として分けて扱い、下層の遺物を中心に記述する。なお第82図中の遺物1・18・22・25・30・36・46は第11号竪穴住居床面出土遺物ではなく、覆土上層（第52号土坑）出土遺物を本遺構平面図に重ねたものである。

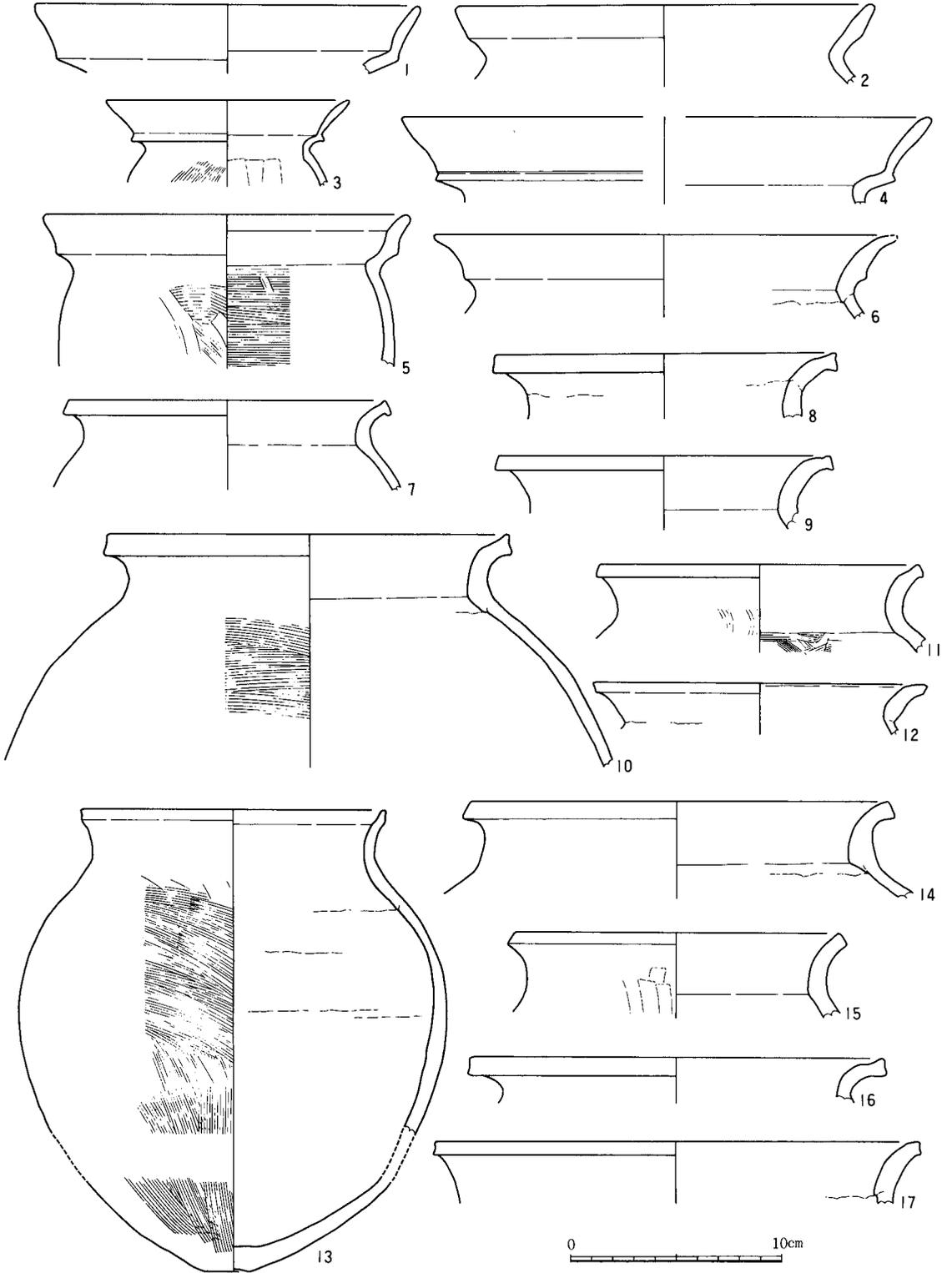
1～22、24～27は甕形土器で、1～16・18は有段口縁、その他は「く」字口縁をなす。1～4は口縁部に擬凹線文を施す。4は口径19.4cmを測り、肩部にクシ状工具による刺突痕を施す。色調は外面が黄橙色、内面が暗灰黄色を呈し、胎土には粗砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。5～14の有段口縁の土器は、口縁部が外反する類（5～10、12・14）と口縁部が直立気味に立ち上がる類（11・13）に細別される。13は口径13.8cmを測り、内・外面ともにナデ調整を施す。色調は黄橙色を呈し、雲母片等の砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。14は口径18.0cm、直立気味に立ち上がる口縁部は中程で外反する。色調は黄橙色を呈し、胎土には石英等の礫や海綿骨片を含む。15・16・18は狭い有段口縁をもつ土器で、口縁部下端に断面三角形の膨らみをもつ。17・21・22は口縁端部に面取りを施す土器。17は口径16.4cm、内・外面ともにナデ調整を施し、胴部にはハケ調整を施すものと思われる。色調は灰褐色を呈し、胎土には石英・雲母等の粗砂粒、海綿骨片を多く含む。19・20は口縁端部をつまみ、長く面取りする土器で、口縁端部は内傾する。20は口径19.4cmを測る。器面がかなり摩滅しているため調整は不明瞭であるが、口縁部にナデ調整、胴部外面にハケ調整を施す。色調は黄橙色を呈すが二次的な加熱を受けており、黒色化する。胎土には石英等の礫を多量に含み海綿骨片、赤色酸化粒も含む。24～27は口縁端部を丸くおさめる土器。24は口径15.0cm、口縁部にナデ調整、胴部内面にハケ調整を施す。色調は黄橙色を呈し、胎土には粗砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。なお27は壺形土器の可能性も考えられる。23・28～30・35は壺形土器である。23は口径23.0cmを測り、口縁部下端に鋭い稜をもつ。色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈し、胎土には粗砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。28は土坑1の周辺で10・11・21・40などの土器と一緒に検出された。口径19.6cm、外反する頸部をもち、口縁部も大きく外反する。焼成があまく器面調整等是不明瞭だが、内・外面ともにヘラミガキ調整を施す。色調はにぶい橙色で、胎土には粗砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。29は直立気味の頸部をもち、口縁部の外反度も弱いものと思われる。35は大型壺の頸部下端から胴部にかけての破片で、遺存部の胴部最大径は35.2cmを測る。頸部下端に幅1.2cm、高さ0.6cmの断面三角形の隆線文を施す。色調は外面が浅黄橙色、内面が褐灰色を呈し、胎土には石英等の礫・粗砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。39・46は鉢形土器。39は口縁部が外方に伸び、口縁部下端に稜をもつ。口径は32cm程度と推定され、内・外面ともにミガキ調整を施す。色調は外面が浅黄橙色、外面がにぶい黄橙色を呈し、胎土には雲母・石英等の礫・粗砂粒、赤色酸化粒を比較的多く含むが海綿骨片は少ない。40は蓋形土器。紐部径1.7cm、口径7.6cm、器高3.3cmを測り、紐頂部が凹む。41・42・44は高杯形土器、43は器台形土器で41は器台形土器の可能性も考えられる。44は口径9.2cm、器面にミガキ調整を施す。色調はにぶい橙色を呈し、かすかに赤彩の跡が認められる。45は小型台付鉢で、口径7.4cm、脚台部径6.5cm、器高6.5cmを測る。鉢部の口縁部は大きく内湾し、脚台部の3箇所には円形の透かしを有する。器面の摩滅が著しいが赤彩痕が認められる。



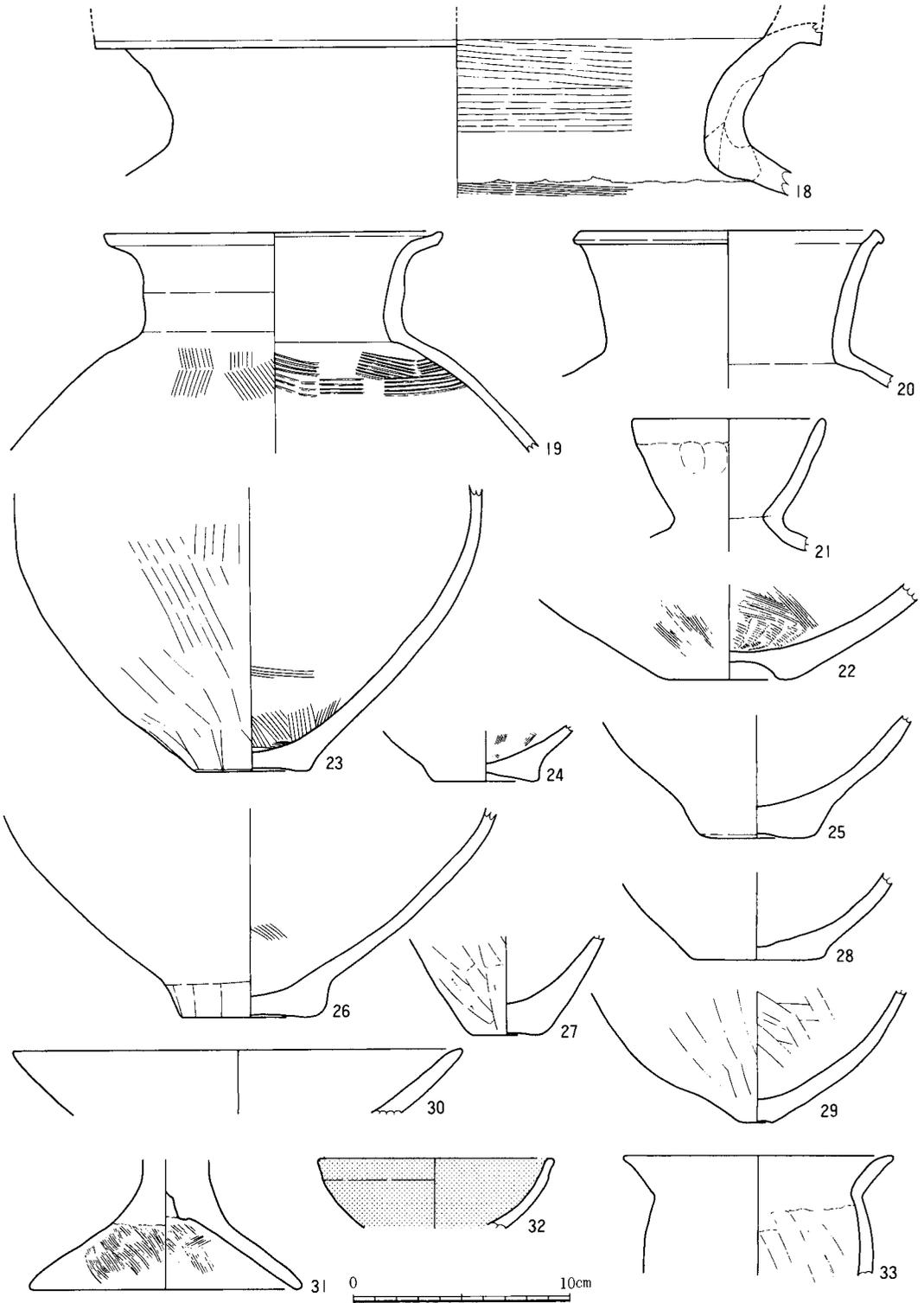
第83图 第11号竖穴住居出土土器实测图 1 (S=1/3)



第84図 第11号竪穴住居出土土器実測図 2 (S=1/3)



第85图 第11号竖穴住居上層(第52号土坑)出土土器実測図 1 (S = 1/3)



第86図 第11号竖穴住居上層(第52号土坑)出土土器実測図 2 (S = 1/3)

47～49は上層（第52号土坑）で検出された石器類。47は軽石で約1.5m離れた2地点で検出されたものが接合した。48は砥石で、長さ8.8cm、幅2.0cm、厚さ1.6cm、重さ37.2gを測る。使用のため両面とも中央部が凹む。49は凹基無茎の石鏃。

第13号竪穴住居

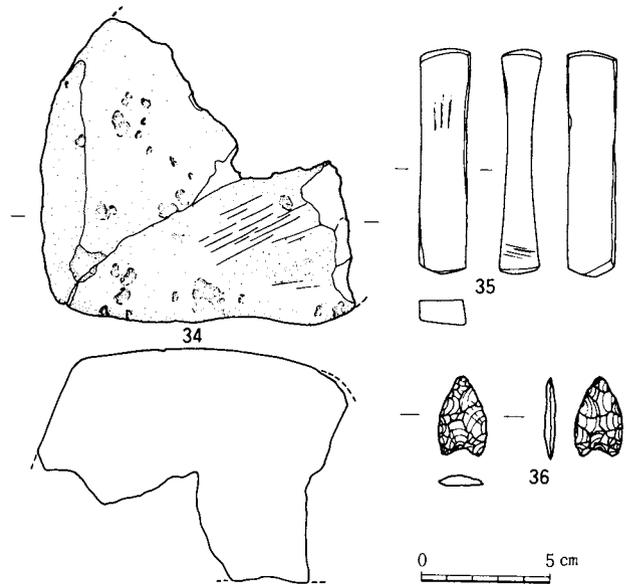
L-6区、第5号竪穴住居の南西に隣接して検出された。遺構西半が削平を受けているためプラン、規模等は不明。また柱穴等も検出されなかったことから竪穴住居以外の遺構の可能性

も考えられる。遺物は土師器片数十点が検出されたが、いずれも小片のため図示することができなかった。遺構の明確な時期は不明であるが、竹生野第Ⅶ期頃と推定される。

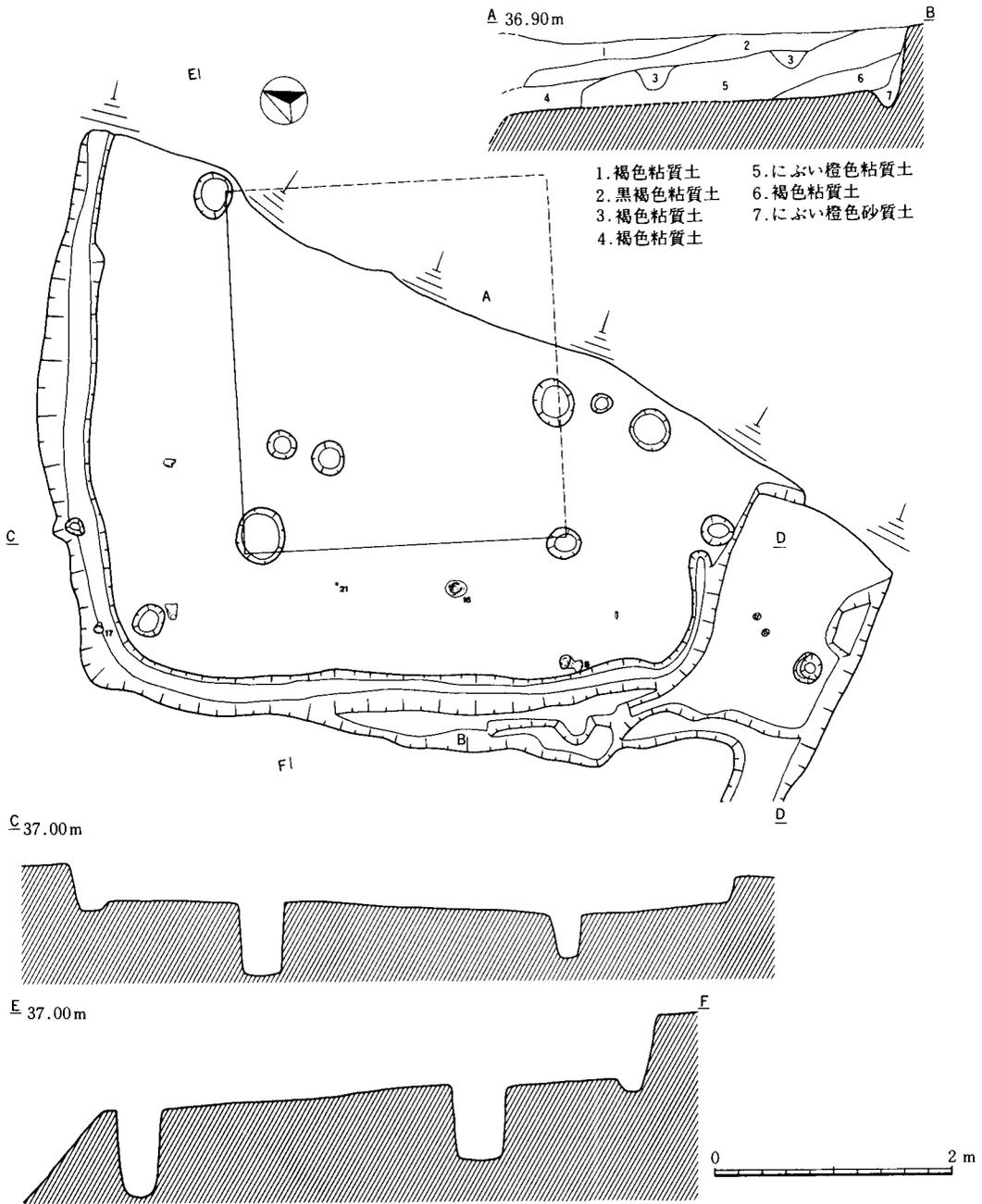
第14号竪穴住居（第88・89図、図版49・68）

〔遺構〕 N-2・3区で検出された。遺構の東半が開削により破壊を受けており全容を把握することはできないが、一辺約5.5mの隅円方形の竪穴住居と考えられ、主軸はN-68°-Eをさす。主柱穴は4本と考えられ、破壊された部分を除き3本の柱穴が検出された。柱間寸法は2.7m×2.5mを測る。覆土は7層が確認された。第1層は褐色粘質土で、竹の根によりかなり攪乱を受けしまりも悪い。第2層は黒褐色粘質土で、やはり根がかなり入り込みしまりも悪いが土師器・須恵器が検出された。第3層は褐色粘質土で、第2層の土がやや混じり込む。第4層は褐色粘質土。第5層はにぶい橙色粘質土で炭化物を含み粘性に富む。本層から多量の遺物が出土した。第6層は褐色粘質土で、炭化物や地山質土ブロックを含む。砂質が強くなる。第7層はにぶい橙色砂質土で、炭化物や地山質土ブロックを含む。遺構の時期は竹生野第Ⅸ期に比定される。

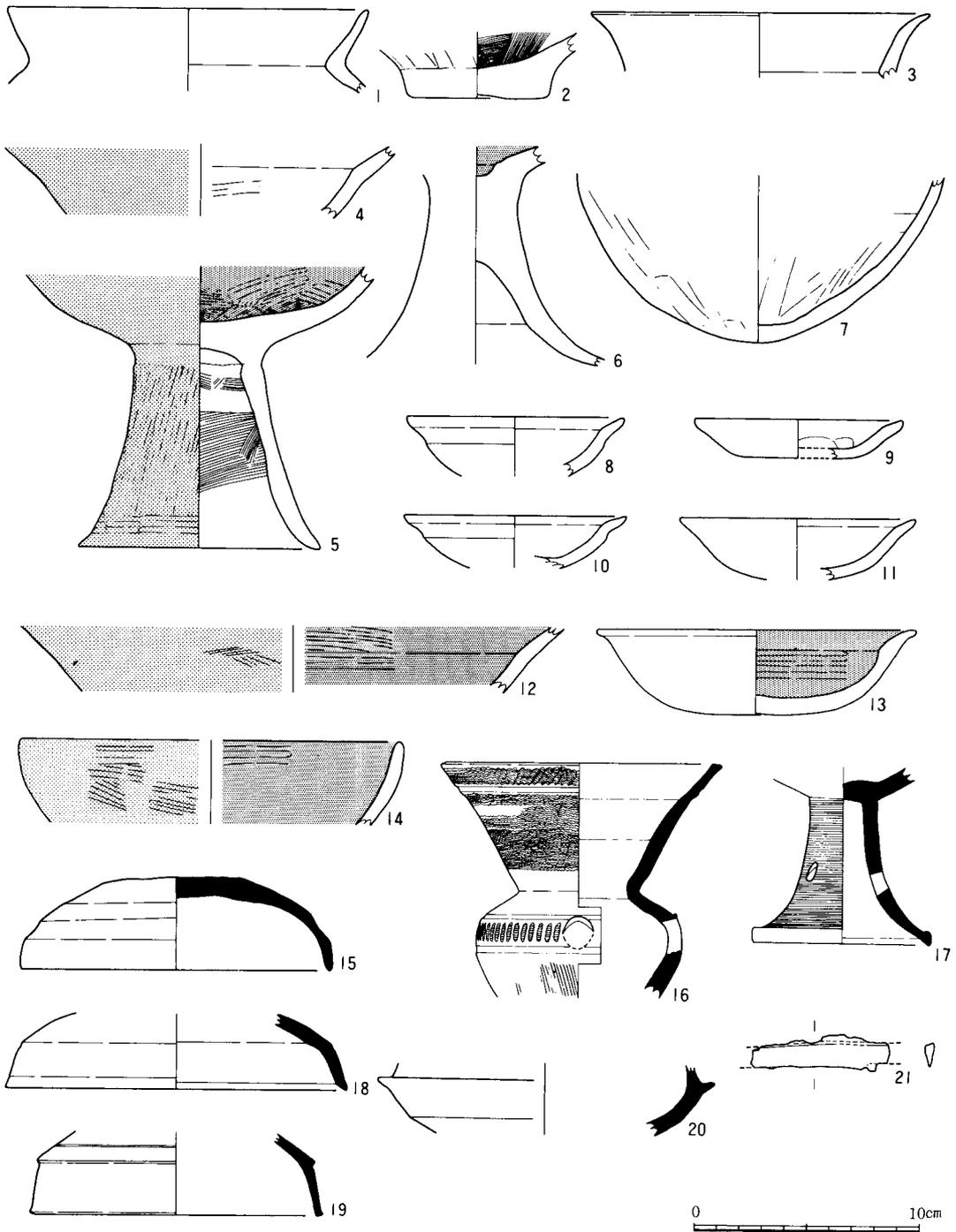
〔遺物〕 1～3・7は甕形土器で、口縁部は「く」字状に外反する。1は口径16.0cmを測り、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内・外面ともに摩滅が著しく調整等は不明。色調は外面が黄褐色、内面が灰色を呈し、胎土には石英等の礫、赤色酸化粒を含む。3は口縁部が外反し、口縁端部が先細りするもので、口径14.9cmを測る。7とは同一個体で、口縁部にナデ調整、胴部にハケ調整を施す。色調は外面が灰褐色、内面がにぶい橙色で、外面には煤が付着して黒色化し、口縁部外面が特に著しい。胎土には石英等の礫・粗砂粒、海綿骨片を含む。5・6は高杯形土器。5は遺構西片南の周溝付近床面で検出された。口縁部は欠損するが、脚部はゆるく「八」字状に開き、脚部径10.4cmを測る。杯部内面、脚部外面にミガキ調整を施し、杯部内面は黒色化する。また脚部内面にはハケ調整が施される。色調は外面がにぶい橙色、内面が灰色を呈し、外面に赤彩



第87図 第11号竪穴住居 出土遺物実測図（36はS=1/2）



を施す。胎土には細砂粒、微細な海綿骨片、赤色酸化粒を含む。8～11は中世の土師皿で後世の混入品。12～14は内面黒色の鉢形土器で、12・13には外面に赤彩を施す。13は口径14.0cm、器高3.8cmで、口縁端部は外反する。内面の体部と口縁部の境は明瞭で稜をもつ。外面の色調は浅黄橙色で、胎土には細砂粒、赤色酸化粒を含み海綿骨片は少ない。本遺構での須恵器の出土量は多く、杯蓋(15・18・19)、杯身(20)、甕(16)、高杯(17)、甕などからなる。15は口径13.6cm、器高4.1cmを測る。口縁部は垂直に下がり、端部は丸く、ナデ調整を施す。天井部は丸く中央部がや



第89図 第14号竪穴住居出土遺物実測図 (S=1/3)

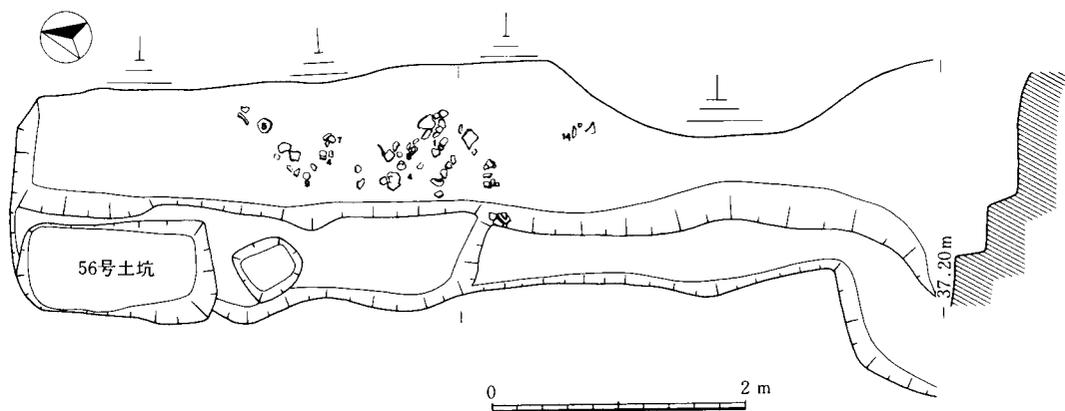
や平らで、内湾気味に下がり、回転ヘラ削りを施す。色調は灰白色で、胎土に細砂粒を含む。18は口径15.1cmを測り、天井部と口縁部の境に弱い稜をもち、口縁部はやや内湾気味に外方へ伸びる。口縁端部は外反し、内面に急傾斜で内傾する弱い凹面をもつ。色調は青灰色で、胎土に白色と黒色の細砂粒をわずかに含む。19は口径12.5cm、天井部と口縁部の境に鋭い稜をもつ。口縁部

はやや内湾気味に外方へ伸び、端部に面をもち外端部に稜をもつ。色調は灰色で、胎土に白色と黒色の細砂粒をわずかに含む。20は受部径15.1cmを測り、受部は上外方へ伸び端部は断面三角形を呈す。色調は外面が灰オリーブ色、内面がにぶい橙色を呈す。16は遺構西辺の中央部床面で検出された甕で、口径11.9cm、残存高10.4cmを測る。口縁部は頸部から外反して立ち上がり、端部に凹面をもつ。口頸部から口縁部にかけて波状文が施される。また口頸部上位には1条の隆線文がめぐる。肩部から胴部上半に幅1.5cmの2条の平行する沈線をめぐらし、その中をやや右上がりの縦方向の刺突文で補填する。またその中に円形の透かしを穿つ。胴部下半には縦位のハケ調整が施される。色調は外面が暗灰色、内面が灰色、断面が紫灰色を呈し、外面に光沢をもつ。口縁部と口頸部内面は降灰を受ける。胎土には細砂粒を含み礫もわずかに認められる。17は遺構北西隅の周溝内で検出された高杯の脚部で、脚部径7.8cm、残存高7.8cmを測る。脚部は上半でまっすぐに下がり、下半部で外反する。外面には横位のカキ目が認められ、中央よりやや下で3個の円形の透かしを内側へ穿つ。色調は16と同じ暗灰色で光沢をもち、胎土も16に類似する。須恵器の時期は16・17・19・20がMT15期、15・18がTK209期に比定される。20は刀子と思われる鉄製品で、残存長6.1cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ6.1gを測る。

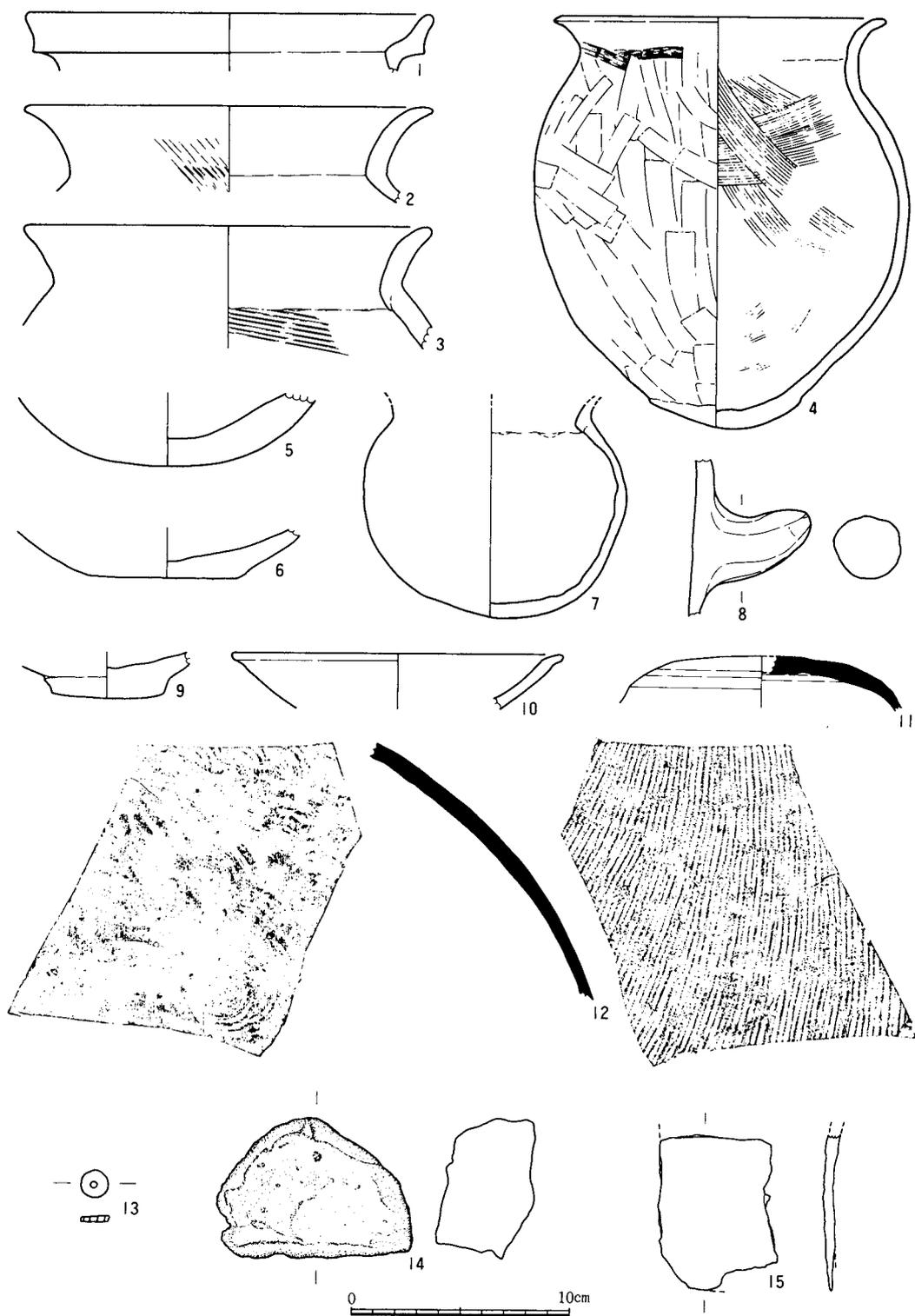
第15号竪穴住居（第90・91図、図版68・69）

〔遺構〕 M・N-2区、第14号竪穴住居の南側で検出された。やはり開削による破壊のため遺構西端部がわずかに検出されたにすぎない。そのため規模・プラン等遺構の概要は不明。遺構の時期は竹生野第Ⅷ期と推定される。

〔遺物〕 1～4は甕形土器。1は有段口縁で、口径18.2cmを測る。色調は灰黄褐色を呈し、胎土には雲母等の砂粒を含み海綿骨片は少ない。2～4は「く」字口縁で、口縁部は大きく外反する。2は口径18.4cmで、頸部で鋭く屈曲し口縁端部は先細りする。外面にはハケ調整を施す。色調は外面がにぶい褐色、内面が浅黄橙色で、口縁部外面には煤が付着する。胎土には石英等の礫、海綿骨片を含む。3は口径16.3cm、口縁部は2に比べて厚くシャープさに欠ける。色調は浅黄橙色で、胎土に雲母・石英等の砂粒を含み海綿骨片は少ない。4は口径14.5cm、胴部最大径16.9cm、器高18.4cmを測る。口縁部は肩部から直立気味に立ち上がり、途中から大きく外反する。口縁部



第90図 第15号竪穴住居実測図（S=1/60）



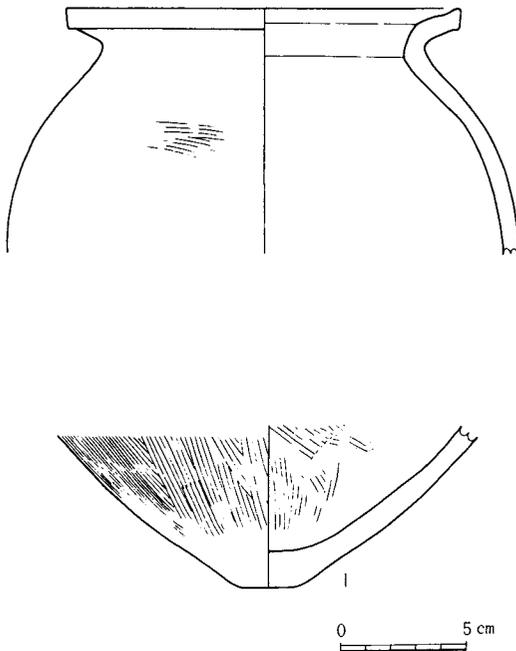
第91図 第15号竖穴住居出土遺物実測図 (S = 1/3)(13は原寸)

は内・外面ともにナデ調整を施す。胴部もナデ調整を行うが一部に上から下へヘラケズリ調整を施す。しかし底部にはヘラケズリが施されないためわずかに突出する。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には石英等の礫を含み、微細な海綿骨片を多量に含む。7は小型壺形土器で、口縁部を欠損する。胴部最大径12.0cm、残存高9.7cmを測る。色調は外面が黄橙色、内面および外面底部が暗灰色を呈す。胎土には礫・粗砂粒を含み、微細な海綿骨片を多量に含む。8は甕形土器の把手。色調は浅黄橙色で、胎土に石英等の粗砂粒を多量に含む、微細な海綿骨片も含む。10は鉢形土器で口径14.9cmを測る。色調は浅黄橙色で、胎土に雲母等の細砂粒、微細な海綿骨片を含む。11は須恵器の杯蓋。色調は灰白色で、天井部に自然釉が付着する。胎土には白い細砂粒をわずかに含む。12は須恵器の甕形土器で、外面に平行叩き目文、内面に同心円文を施す。色調は外面が灰色、内面が青灰色を呈し、胎土には白色や黒色の砂粒を含み、外面に黒い粒子が多量に付着する。13は滑石製の白玉で、直径0.4cm、厚さ0.1cm、重さ0.01gを測る。14は軽石で、長さ9.9cm、幅6.4cm、厚さ4.5cm（いずれも最大）、重さ82.0gを測る。15は鉄製品で、長さ7.0cm、残存幅5.2cm、厚さ0.5cm、重さ46.0gを測る。用途および時期等は不明。

第16号竪穴住居（第92図、図版69）

〔遺構〕 L-3区で検出されたが、削平や竹の根の攪乱により規模・プラン等は不明。遺物の量も非常に少ない。遺構の時期は竹生野第Ⅳ期頃と思われる。

〔遺物〕 1は「く」字口縁の甕形土器で、口径15.4cm、胴部最大径20.1cm、器高22cm(推定)を測る。口縁部は頸部で鋭く屈曲し、やや直立気味に立ち上がり、上方で大きく外反する。口縁端部に面取りを施し先端をややつまみ上げる。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には礫・砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。



第92図 第16号竪穴住居出土土器実測図(S=1/3)

第20号竪穴住居（第93図、図版49・69）

〔遺構〕 O-3区で検出された。一辺4.3m（東西）程度の方形の竪穴住居と思われ、北側の大部分は開削により消滅する。主軸はN-84°-Wをさす。遺構の時期は竹生野第Ⅶ～Ⅹ期頃と推定される。

〔遺物〕 遺物は土器器小片50数点と須恵器片4点が出土した。1は甕の底部付近の破片で、外面に平行叩き目文、内面に同心円文を施す。色調は外面が暗灰色、内面が灰色、断面が紫灰色を呈す。胎土には白色と黒色の粒子をわずかに含む。

第21号竪穴住居（第94～98図、

図版50・69・71）

〔遺構〕 O-4区、第20号竪穴住居の西側、第48号土坑に切られる形で検出された。

一辺3mの方形プランを呈し、周溝をもたない。本遺跡で最小の竪穴住居。主軸はN-57°-Wをさす。床面で支柱穴を検出することはできなかったが、南東隅を除くすべての隅で3個のピットが検出され、本遺構との関連が



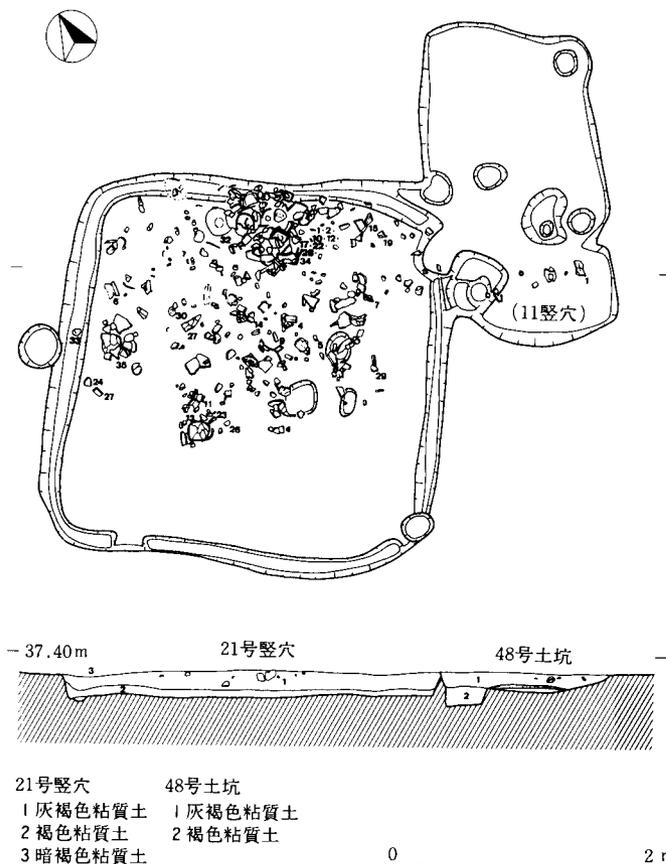
第93図 第20号竪穴住居出土土器実測図 (S=1/3)

考えられる。覆土は2層が確認された。第1層は灰褐色粘質土で炭化物を多量に含み、多量の遺物が出土した。第2層は褐色粘質土で地山の土に類似するが微細な炭化物を多く含む。遺構の時期は竹生野第IV期に比定される。

〔遺物〕 1~20は甕形土器で、1~4・6~8が有段口縁をもつもの、5・9~15が「く」字口縁で口縁端部をつまみ上げ狭い口縁帯とするもの、16~19は「く」字口縁で口縁端部に面取りを施すもの、20は口縁端部に面をもたない「く」字口縁をもつものに分類される。1・2は口縁部の下端を膨らませることにより有段口縁状に仕上げる土器。1は口径17.1cm、胴部最大径26.6cm、残存高25.9cmを測る。口縁部には内・外面ともにナデ調整を施し、口縁端部には面をもつ。

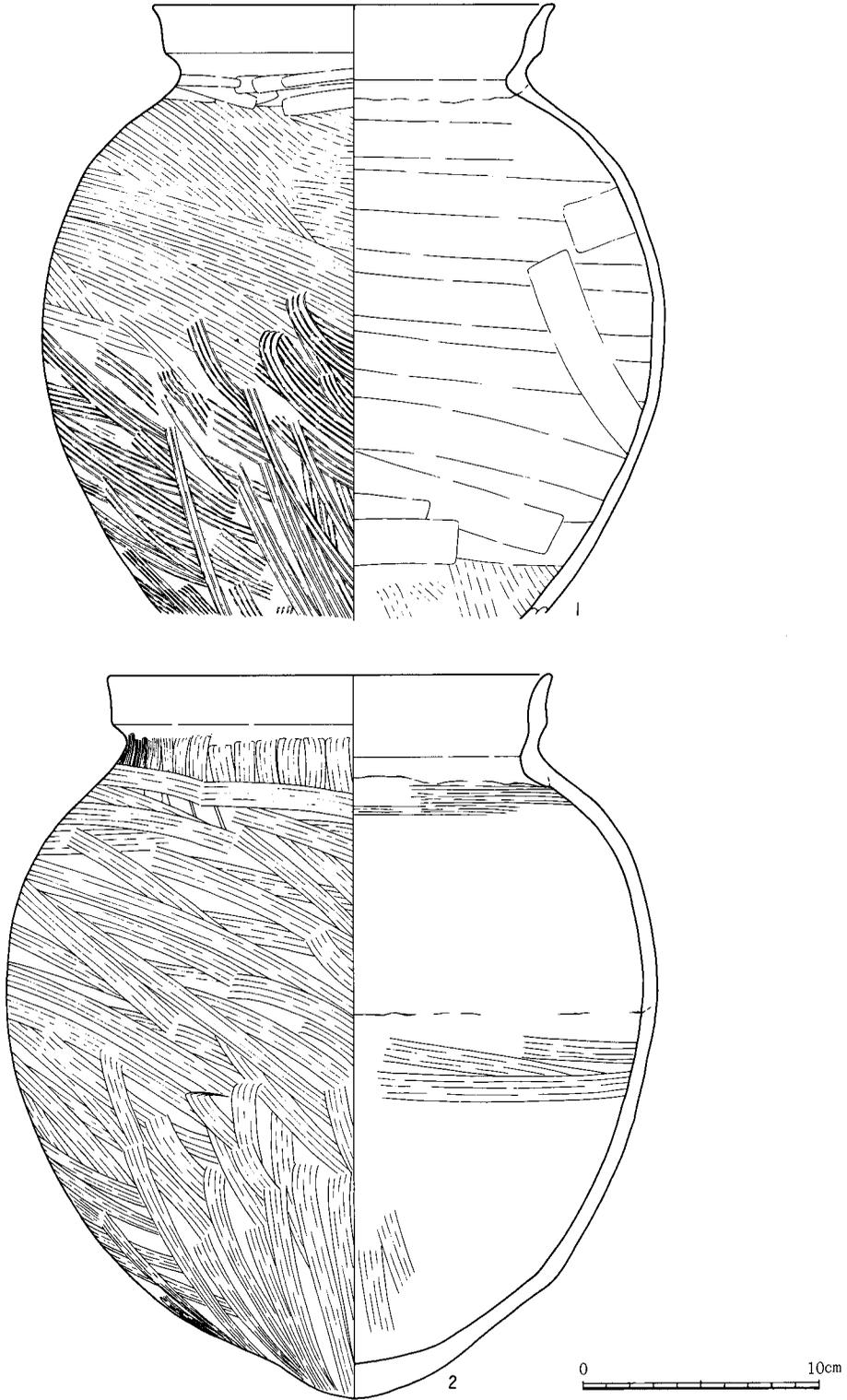
胴部には内・外面ともにハケ調整が施される。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土に粗砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。胴部下半には煤が付着する。2は口径18.8cm、胴部最大径27.8cm、器高30.8cmを測る。口縁部は1よりも直立気味に立ち上がり、口縁端部には面をもたない。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には礫・粗砂粒を多く含み、海綿骨片、赤色酸化粒も含む。胴部下半に煤が付着する。10は口径16.2cm、胴部最大径24.2cmを測る。口縁部にはナデ調整、胴部にはハケ調整を施す。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が浅黄橙色を呈し、外面に煤が付着する。胎土には石英・雲母等の礫・粗砂粒を含み微細な海綿骨片、赤色酸化粒をわずかに含む。

12は口径17.8cm、胴部最大径

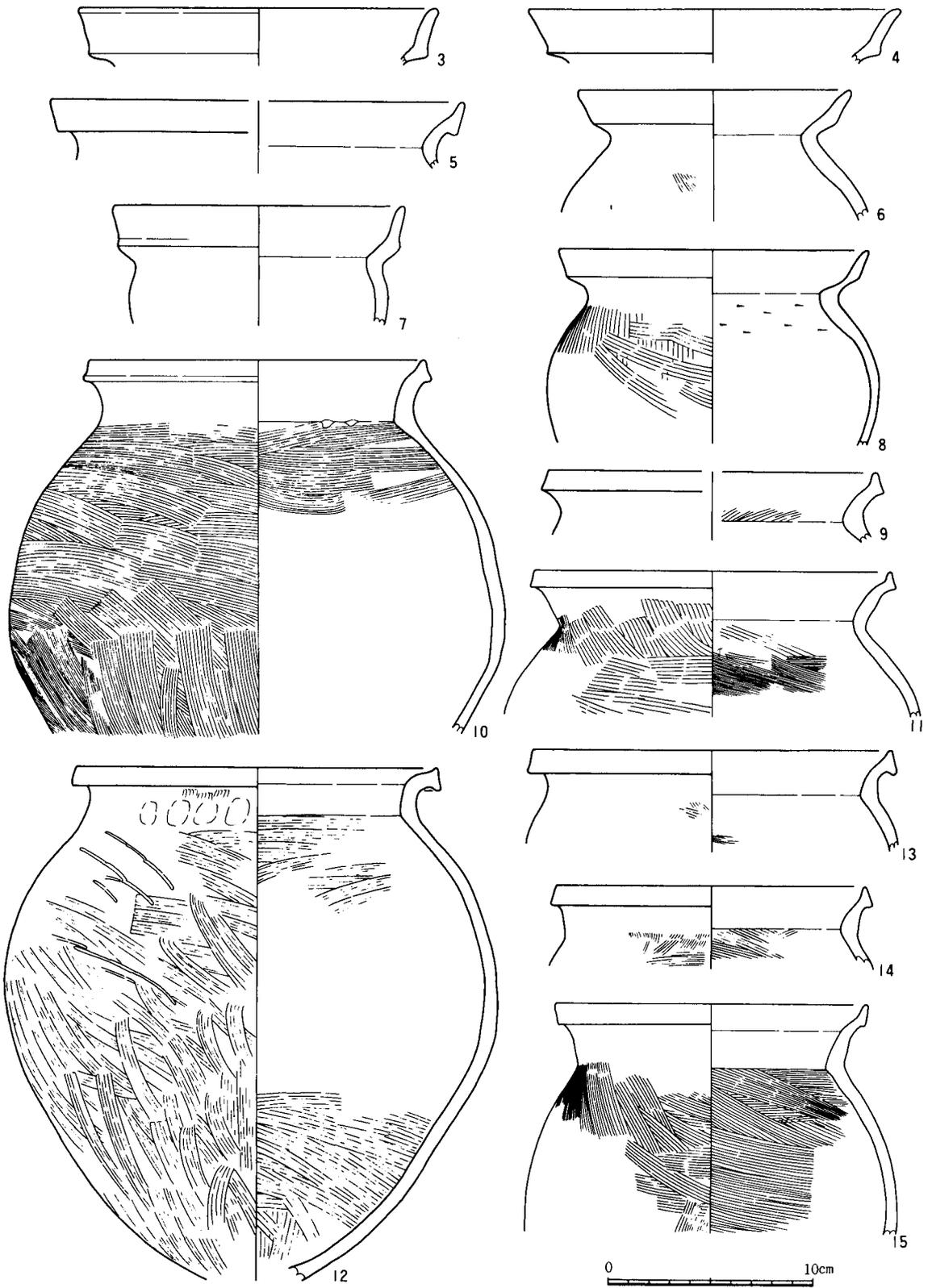


- | | |
|----------|----------|
| 21号竪穴 | 48号土坑 |
| 1 灰褐色粘質土 | 1 灰褐色粘質土 |
| 2 褐色粘質土 | 2 褐色粘質土 |
| 3 暗褐色粘質土 | |

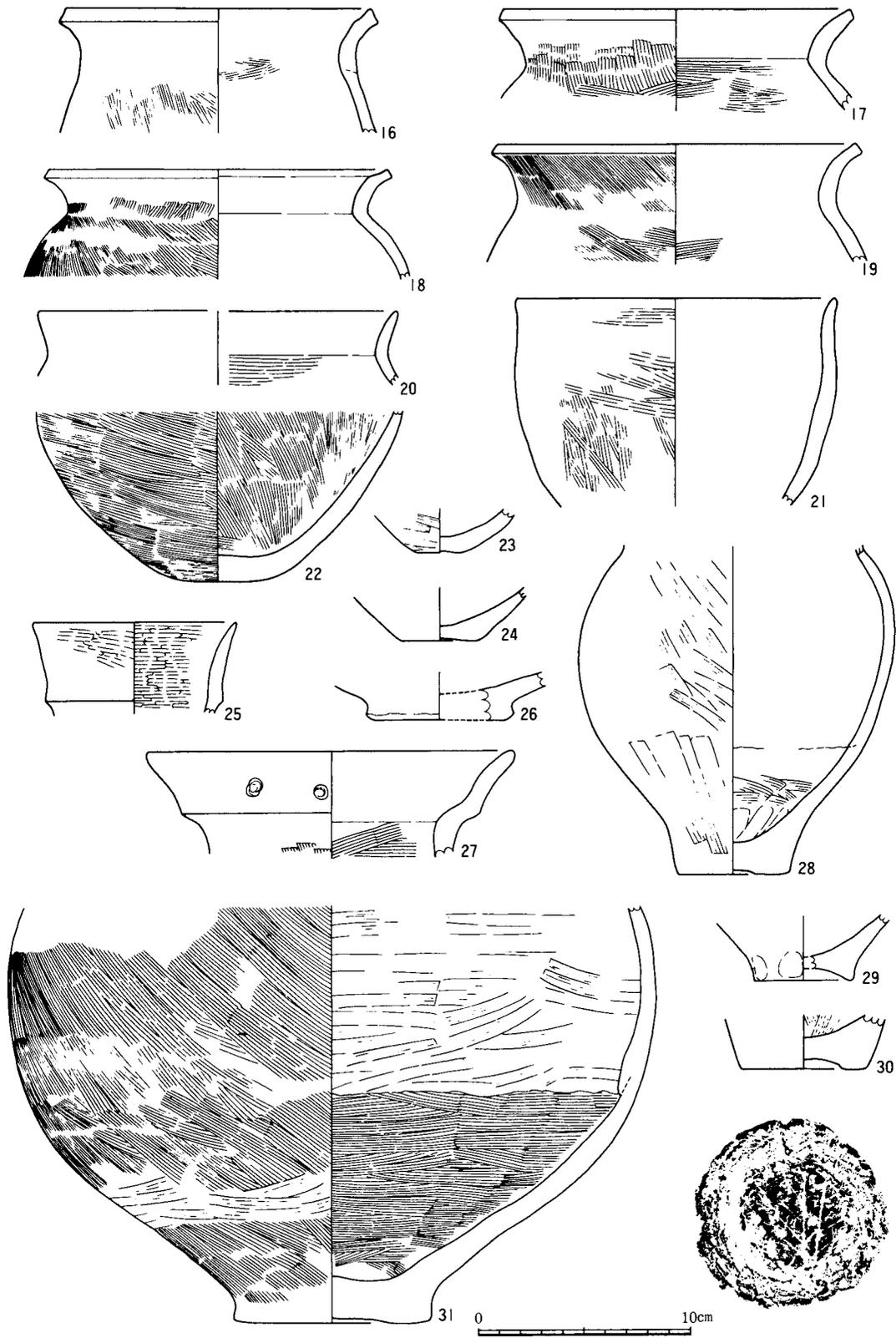
第94図 第21号竪穴住居・第48号土坑実測図



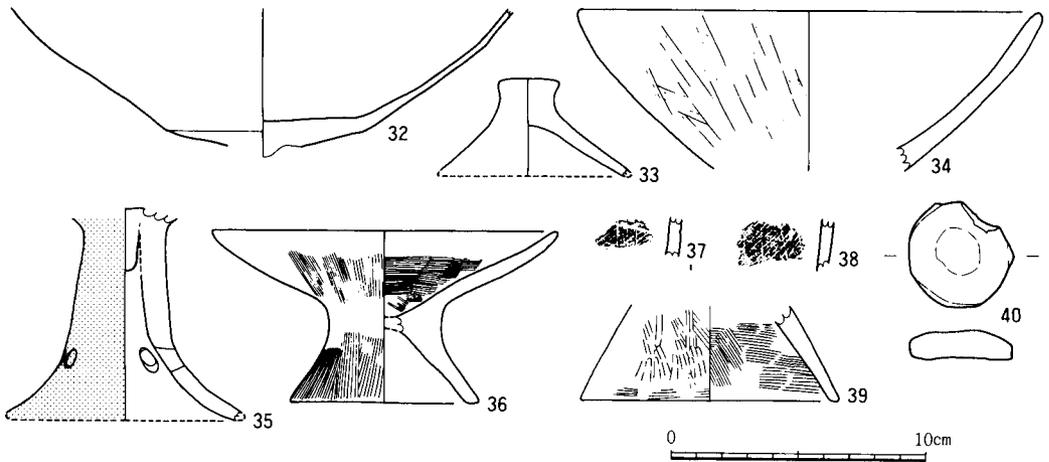
第95図 第21号竖穴住居出土土器実測図 1 (S=1/3)



第96图 第21号竖穴住居出土土器实测图 2 (S=1/3)



第97図 第21号竪穴住居出土土器実測図3 (S=1/3)



第98図 第21号竪穴住居出土土器実測図 4 (S=1/3)

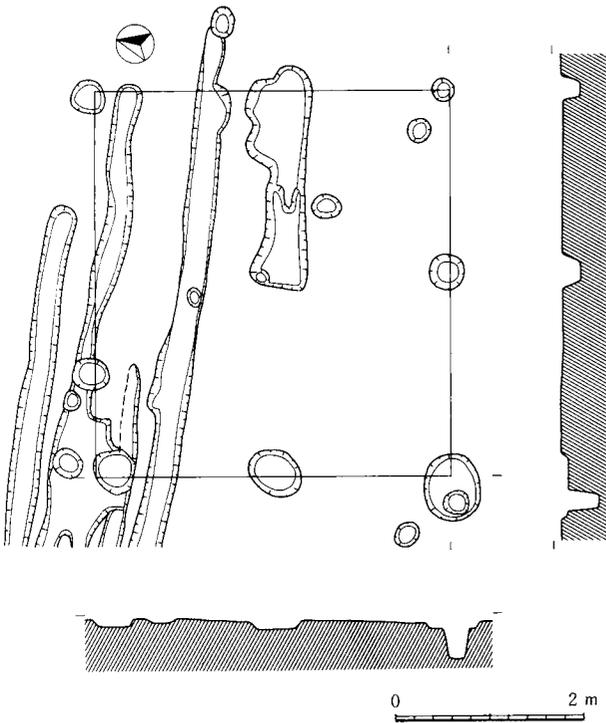
24.0cm、器高25.5cm(推定)を測る。器面調整は10と同じであるが口頸部に指頭圧痕が認められる。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には雲母等の粗砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含むが海綿骨片は非常に少ない。15は10~14と違って口縁端部は内傾せず、ほぼ直立気味に立ち上がる長胴の甕形土器。器面調整は10と同じで、口径は15.0cmを測る。色調は外面がにぶい橙色、内面が灰褐色を呈し、胎土には石英・雲母等の粗砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。16は口径14.4cmを測る長胴の土器。16~19のいずれも口縁部にナデ調整、胴部にハケ調整を施す。色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈し、胎土には礫・粗砂粒を含み海綿骨片もわずかに含む。17は口径16.2cmで、胎土に石英・雲母等の礫・粗砂粒を含み、海綿骨片、赤色酸化粒もわずかに含む。18は口径16.0cmを測り、口縁端部をつまんで丁寧になでる。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒、赤色酸化粒を含み海綿骨片は少なく全体的に細かい。20は口径17.0cmで、色調は外面が淡橙色、内面がにぶい黄橙色を呈す。胎土には石英・雲母等の粗砂粒、赤色酸化粒を含み海綿骨片もわずかに含む。21は鉢形土器で、口径14.9cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部がやや外傾する。外面にはハケ調整が施される。色調はにぶい黄橙色で、胎土には石英等の礫・粗砂粒を多く含み海綿骨片もわずかに含む。25・27・28・31は壺形土器。25は口径9.4cmの小型品で、内・外面ともにミガキ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には雲母等の砂粒、赤色酸化粒を含むが海綿骨片は確認されなかった。27は口径17.2cmを測る有段口縁の土器で。口縁部は先端で大きく外反し、口縁部外面に円形刺突文を施す。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には雲母等の砂粒、海綿骨片を多量に含む。31は胴部の張り出す土器で、胴部最大径30.6cm、底径9.3cmを測る。底部は突出し、中央に広葉樹の葉の圧痕を残すが、周辺部はナデ調整により消される。葉を土器の製作台にして用いたことが窺える。32・35・39は高杯形土器。32は高杯の杯部で、器厚が2mmと非常に薄い。内側から旧石器時代の石器(第53図5)が出土した。35は脚裾部に円形の透かしをもち、器面に赤彩を施す。33は蓋形土器で、口径7.9cm、紐径2.5cm、器高3.8cmを測る。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には石英・雲母等の粗砂粒を多量に含み海綿骨片も含む。34は鉢形土器で、口径17.9cmを測る。36は台付の浅鉢で、口径13.7cm、脚台径7.5cm、器高6.7cm

を測る。脚台部内面を除き器面全体にハケ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には石英・雲母等の礫・粗砂粒、赤色酸化粒を含み海綿骨片を含まない。37・38は同一個体で、器面に斜位の平行沈線文と縦位の沈線文を施す。器種等は不明。胎土に微細な海綿骨片を多量に含む。40は直径約4cmの土製円盤で、端部に面をもつ。片面の中央部がやや膨らみ、厚さ1.1cmを測る。

(2) 掘立柱建物

第5号掘立柱建物 (第99図、図版35)

M-3・4区、第6号竪穴住居の北側で検出された2間(4.0m)×2間(3.5m)の建物で、主軸はN-79°-Eをさす。倉庫と推定される。遺構検出面が耕作による削平を受けているため柱穴の規模等にかんがりのばらつきが認められるがほぼ円形プランを呈す。遺物は東側梁列北第1



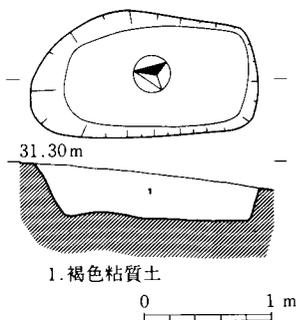
第99図 第5号掘立柱建物実測図 (S=1/60)

(須恵器・土師器片・軽石)・3(須恵器・土師器片)、西側梁列北第2(土師器片)の柱穴で検出された。遺構の明確な時期は不明であるが、竹生野第Ⅶ~Ⅹ期頃のものとして推定される。

(3) 土 坑

第1号土坑 (第100図)

F-4区、調査区の南西隅で検出された1.8m×1.0mの隅円長方形の土坑で、深さ31cmを測る。主軸はN-16°-Wをさす。覆土は褐色粘質土の単層で、炭化物を含むが遺物はまったく確認されなかった。遺構の時期は不明。



第100図 第1号土坑実測図 (S=1/60)

第2号土坑 (第101図)

同じくF-4区で検出された。2.0m×0.9mの長楕円形で、深さ10cmを測る。主軸はN-47°-Eをさす。覆土はにぶい褐色粘質土で炭化物・礫を含む。遺物は須恵器小片2点が出土した。1点は壺片と思われる、外面にカキ目を施し内面にベンガラと思われる赤い塗料が付着する。遺構の明確な時期は不明。

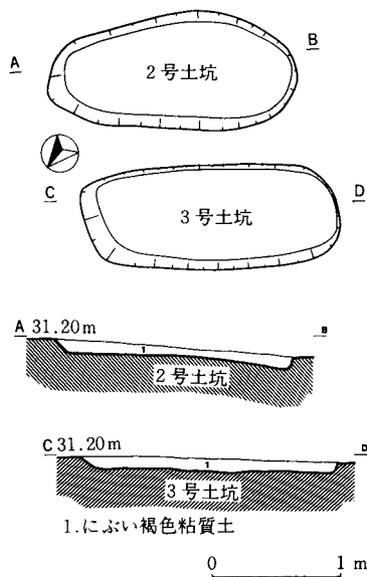
第3号土坑 (第101図)

F-4区、第2号土坑の西側に併存する2.0m×0.8mの隅円長方形の土坑で、深さ12cmを測る。主軸は第2号

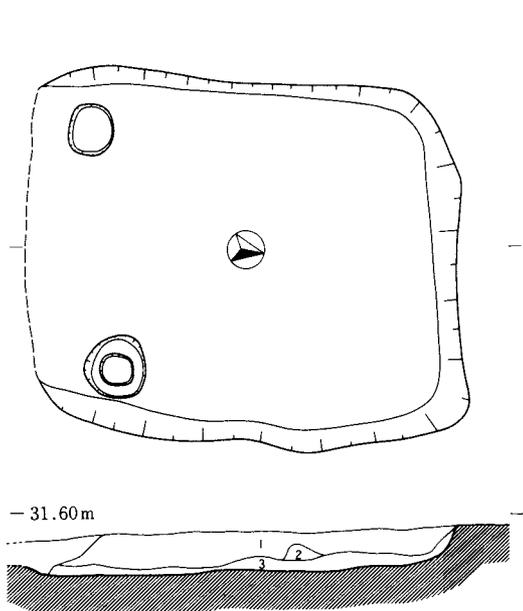
土坑と同じN-47°-Eをさす。覆土も同じにぶい褐色粘質土の単層で炭化物を含むが、遺物は検出されなかった。遺構の明確な時期は不明だが第2号土坑と同時期のものと思われる。第2・3号土坑はともに遺構上面が削平によりかなりの破壊を受けているものと思われる。

第5号土坑 (第102・103図、図版52)

H・I-6・7区で検出された3.4m×2.8mの長方形の土坑で、南側を第3号掘立柱建物の2基の柱穴に切られる。深さ32cmを測り、その形態から小型の竪穴住居の可能性も考えられる。主軸はN-11°-Wをさす。覆土は3層からなる。第1層はにぶい褐色粘質土で、炭化物・礫を含む。第2層は橙色粘土。第3層はにぶい褐色粘質土で、炭化物と橙色粘土ブロックを含む。遺構の南側は攪乱を受ける。明確な遺構の時期は不明。遺物は土師器が199点、須恵器が28点出土したが、いずれも小片である。1は小型の鉢形土器で口径14.2cmを測る。器面に赤彩を施し、胎土には細砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。2は凹基無茎の石鏃。3は碗形土器の高台部で混入品と思われる。4~6は須恵器片。4は壺形土器の頸部片と思われ、色調は外面が緑黒色、内面が緑灰色、断面が紫灰色を呈す。また図示できなかったが、第1層より鉄の塊が検

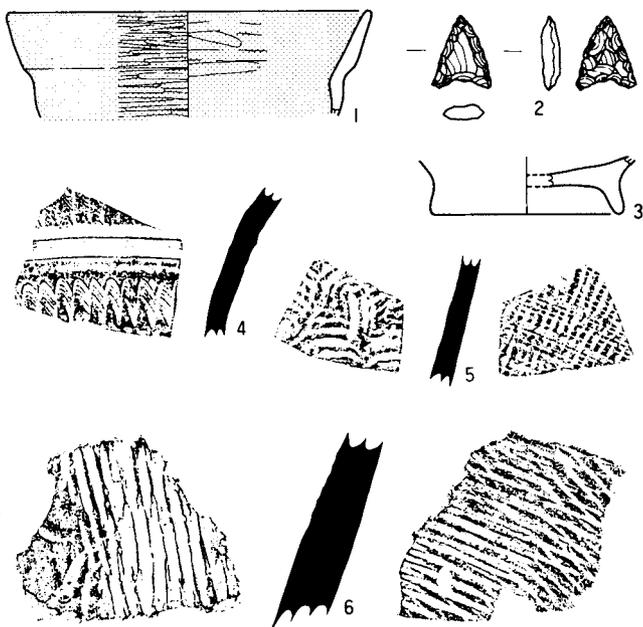


第101図 第2・3号土坑実測図 (S=1/2)

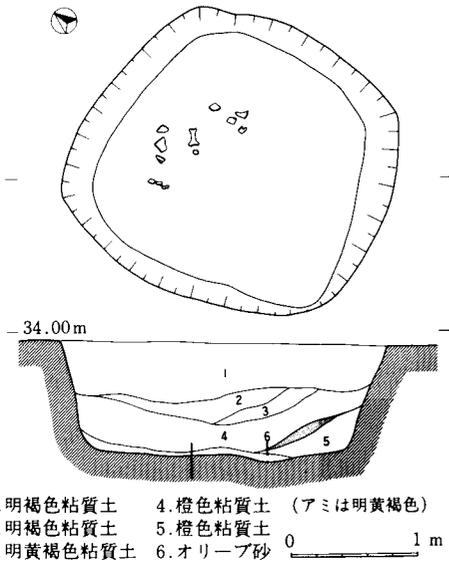


1. にぶい褐色粘質土 3. にぶい褐色粘質土
2. 橙色粘土

第102図 第5号土坑実測図 (S=1/2)



第103図 第5号土坑出土遺物実測図 (S=1/2)

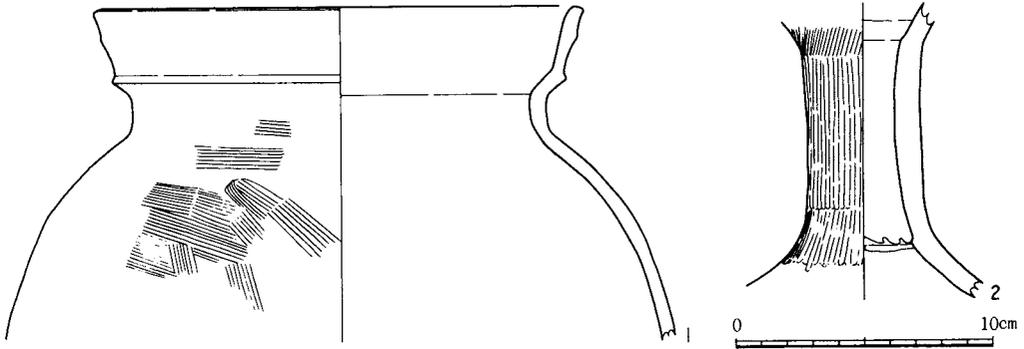


1. 明褐色粘質土 4. 橙色粘質土 (アミは明黄褐色)
 2. 明褐色粘質土 5. 橙色粘質土
 3. 明黄褐色粘質土 6. オリーブ砂 0 1 m
 第104図 第11号土坑実測図 (S=1/60)

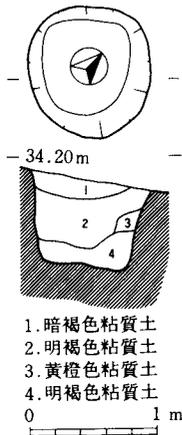
出された。重さ20.7gを測る。

第11号土坑 (第104・105図、図版54・71)

調査区の南西隅、D-7区で検出された隅円方形の大型土坑。長軸2.4m、短軸2.2m、深さ90cmを測る。覆土は6層からなる。第1層は明褐色粘質土で、炭化物を多量に含み鉄分、礫も含む。第2層は明褐色粘質土で、明黄褐色の砂質土ブロックを多く含み鉄分、礫も含む。第3層は明黄褐色粘質土で、炭化物、鉄分を含む。第4層は橙色粘質土で、炭化物、鉄分、明黄褐色砂質土ブロックを含む。層下部に明黄褐色の粘土ブロックが堆積する。第5層は橙色粘質土で、第4層と基本的には同じであるが炭化物、鉄分の量は少なくなる。第6層はオリーブ砂層で、床面に2~5cm程度の小石を敷きつめる。遺物は第1・2層から出土した。1は有段口縁をもつ山陰系の甕形土器で、口



第105図 第11号土坑出土土器実測図 (S=1/60) (1は第13号土坑出土土器と接合)



1. 暗褐色粘質土
 2. 明褐色粘質土
 3. 黄褐色粘質土
 4. 明褐色粘質土
 0 1 m
 第106図 第13号土坑実測図 (S=1/60)

径18.4cmを測る。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には石英・雲母等の礫・粗砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。2は器台の脚部で、器外面にミガキ調整を施す。色調は浅黄橙色で、胎土に細砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。遺構の時期は竹生野第IV期に比定される。

第13号土坑 (第106図)

D-7区、第11号土坑の南に接して検出された直径1.1mの土坑で、深さ69cmを測る。覆土は4層からなる。第1層は暗褐色粘質土で、炭化物を含む。第2層は明褐色粘質土で、炭化物・礫を含む。第3層は黄褐色粘質土。第4層は明褐色粘質土で、炭化物を含む。遺物は第2層から出土し、そのうちの何点かは第11号土坑出土の1

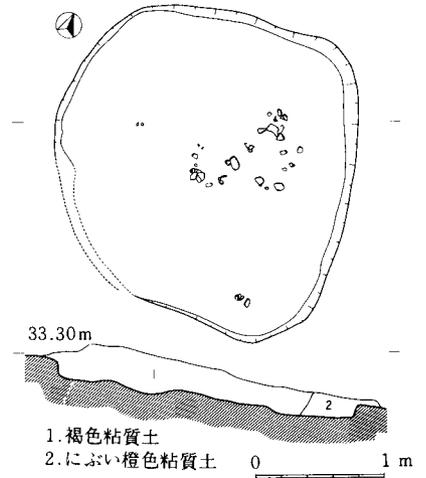
の甕形土器と接合した。遺構の時期は第11号土坑と同じ竹生野第IV期に比定される。

第23号土坑

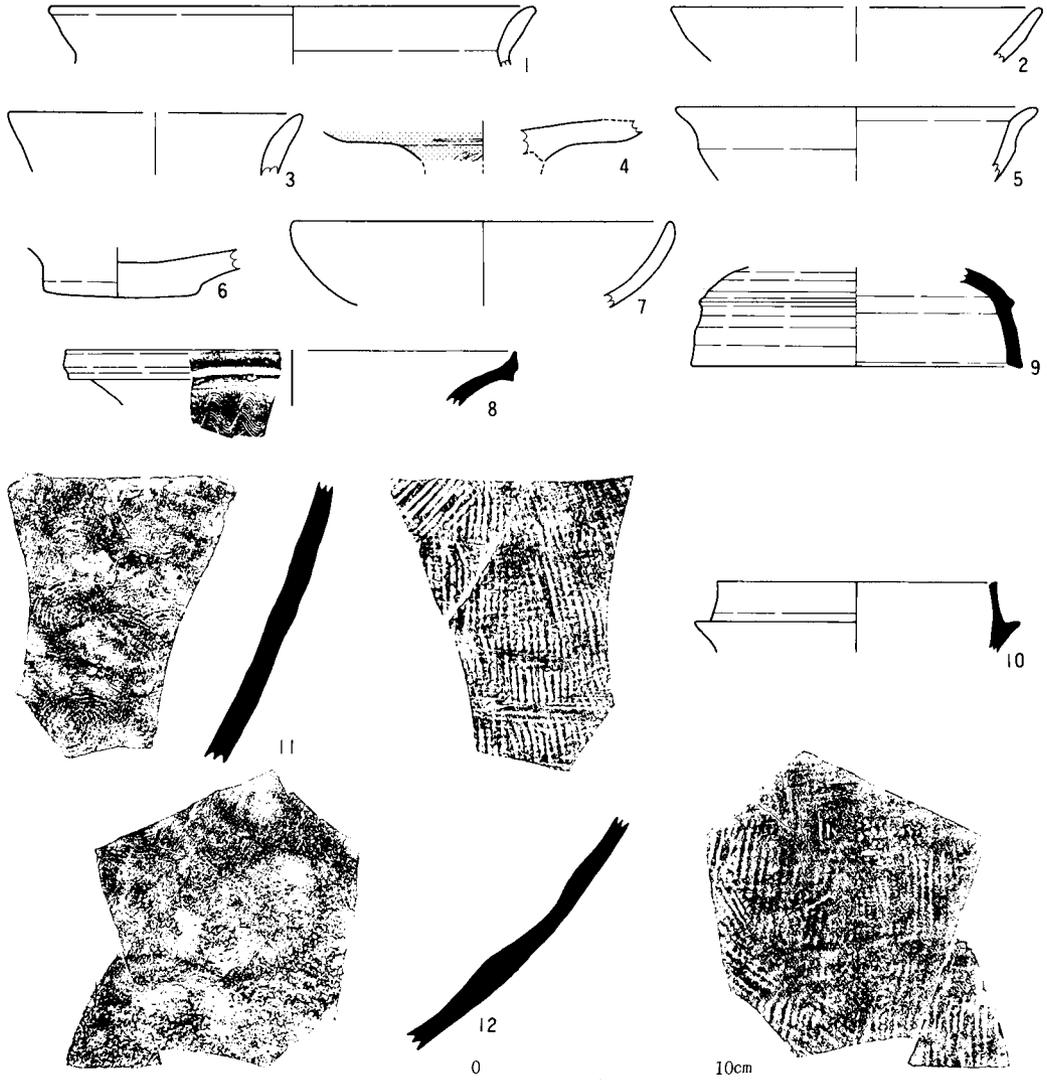
J・K-4区で検出された1.2m×1.0mの楕円形土坑で、深さ44cmを測る。覆土は暗褐色粘質土の単層。遺物は土師器の小片が数点、用途不明の鉄製品1点が出土する。遺構の明確な時期は不明。

第26号土坑 (第107・108図)

調査区の南西端、C-8・9区で検出された2.8m×2.3mの隅円方形の土坑で、深さ24cmを測る。遺構の上面は削平を受けているものと思われる。覆土は2層からなる。第1層は



第107図 第26号土坑実測図 (S=1/50)



第108図 第26号土坑出土土器実測図 (S=1/3)

褐色粘質土で炭化物と礫を含む。第2層はにぶい橙色粘質土で炭化物を含む。遺物は第1層より出土した。1・3は「く」字口縁をなす甕形土器で、1は口径19.0cmを測る。4は高杯形土器で、器面に赤彩を施す。胎土には砂粒、海綿骨片、赤色酸化粒を含む。海綿骨片の量は多く2mmを超える長いものも認められる。5・7は椀形土器。5は口縁部が大きく外反するもので、口径13.9cmを測る。7は口縁部が内湾するもので、口径14.9cmを測る。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒、海綿骨片を含む。8～12は須恵器。8は甕形土器の口縁部で口頸部から外反し、口縁端部は直立し口縁下端とともに稜をもつ。頸部には波状文を施す。9は杯蓋で口径12.9cmを測る。口縁部は内湾気味に広がり、口縁端部に内傾する凹面をもつ。稜は断面三角形を呈す。色調は青灰色を呈し、胎土には白と黒の粒子を含む。TK46期に比定される。10は杯身で口径約11cmを測る。口縁部は内傾し口縁端部には内傾する面をもつ。受部は鋭く上外方へ伸び断面三角形を呈す。ON47期に比定される。11・12は甕の胴部片と思われる。

第27号土坑

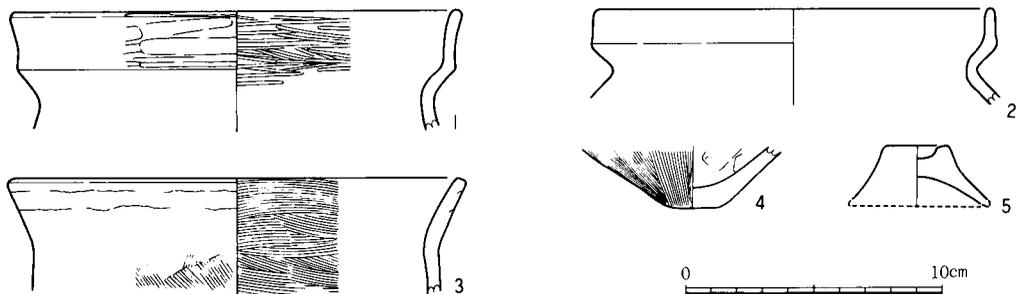
L-6区で検出された1.4m×0.9mの楕円形の土坑で、深さ67cmを測る。遺構の中層より土器や礫が出土した。土器は土師器10点、須恵器1点にすぎず、いずれも小片のため時期は不明。

第48号土坑（第94図）

O-4区で第21号竪穴住居と切り合った状態で検出された長方形の土坑で、長軸2.5m、短軸1.4m、深さ14cmを測る。覆土は灰褐色粘質土の単層で炭化物を多く含み、特に床面近くで帯状に堆積する。土層の堆積状況から第21号竪穴住居よりも新しいことが確認された。しかし遺物の一部が第21号竪穴住居の遺物と接合しており（第95図1）、両遺構の時期差はほとんどないものと思われる。したがって遺構の時期は竹生野第IV期頃と推定される。

第50号土坑（第109図、図版72）

O-3・4区で検出された不定形な土坑で、長軸1.9m、短軸1.4m、深さ53cmを測る。土坑からは土師器、小礫、軽石が出土した。1・2は有段口縁の甕形土器。1は口径17.3cmを測り、口縁部がわずかに外反する。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には石英等の粗砂粒を多量に含み海綿骨片、赤色酸化粒も含む。2は口径15.2cmを測り、口縁部は1より短くやや内傾する。3は鉢形土器で、口縁部は外反し口縁端部に面取りを施す。口径17.5cmで、胴部外面と内面にハケ調整を施す。色調・胎土ともに1に類似する。5は蓋形土器で、口径5.4cm（推定）、紐径2.3cm、器高2.2cmを測る。口縁部は「八」字状に開き、紐頂部は凹む。色調はオリーブ灰色を呈し、胎土には粗砂粒を多量に含み赤色酸化粒も含むが、海綿骨片は認められない。遺構の時期は竹生野第IV期に



第109図 第50号土坑出土土器実測図（S=1/2）

比定される。

第56号土坑（第110図）

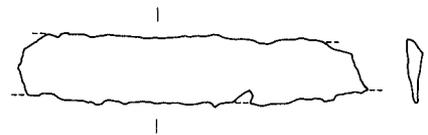
M・N-2区、第15号竪穴住居の西辺北側に接して検出された1.5m×0.6mの長方形の土坑で、深さ65cmを測る。遺物は土師器小片が数点と刀子と思われる鉄製品(1)が出土し、長さ13.6cm、幅2.7cm、厚さ0.6cm、重さ29.2gを測る。遺構の明確な時期は不明。

第58号土坑（第111図）

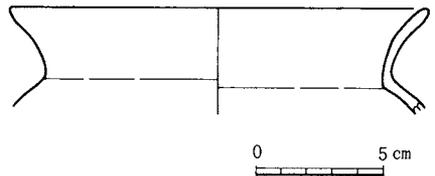
R-3・4区、塚の南側で検出された3.5m×2.7mの隅円長方形の土坑で、深さ30cmを測る。北西隅には第59号土坑が検出された。覆土は灰褐色粘質土の単層で、炭化物を含む。遺物は土師器小片が数点出土した。1は「く」字口縁の甕形土器で、口径16.2cmを測る。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には粗砂粒、海綿骨片を含む。遺構の時期は竹生野第Ⅶ期頃と思われる。

第59号土坑（第112図）

第58号土坑の床面で検出された1.2m×0.9mの楕円形の土坑で、深さは30cmを測る。覆土は灰褐色粘質土の単層で壺形土器(1)が出土した。外反気味に長く伸びる口縁部をもち、口径16.4cm、胴部最大径24.0cmを測る。胴部外面には縦位・横位のハケ調整を施し、部分的には格子目文風に仕上げる。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には石英等の礫・粗砂粒を含み海綿骨片は認められない。遺構の時期は竹生野第Ⅴ期に比定される。



第110図 第56号土坑出土遺物実測図 (S=1/2)



第111図 第58号土坑出土土器実測図 (S=1/2)

(4) 溝

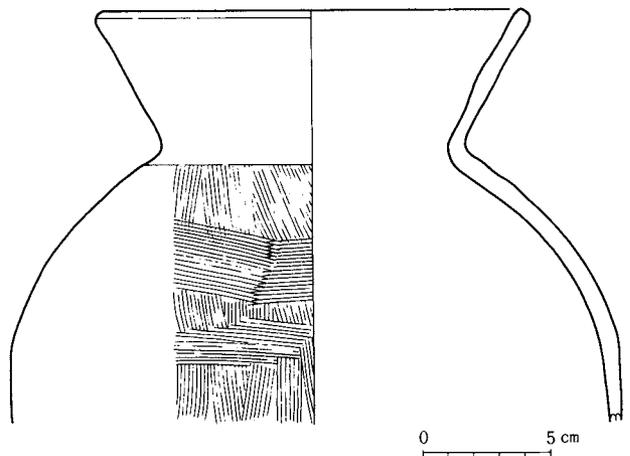
第7号溝（第113図）

M-5・6区で検出された幅0.3~1.0m、深さ約15cmの溝で、総延長11.5mを測る。覆土は黒褐色粘質土の単層で、地山質土ブロックと少量の炭化物を含む。遺物の量は非常に少ない。1は大型壺形土器の頸部で（頸部最大径約30cm）、上位に稜をもつ。

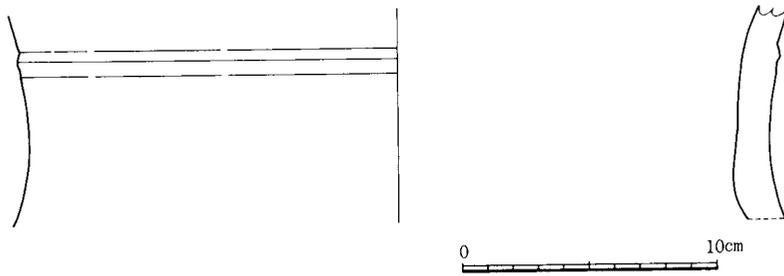
色調は灰色を呈し、礫・粗砂粒、海綿骨片を多量に含む。遺構の明確な時期は不明。

第9号溝

M・L-6区で検出された溝で、谷に向かって広がる。深さは約10cmを測る。覆土は暗褐色粘質土の単層で底部付近に炭化物をわずかに含む。遺物は土師器小片がわずかに出土した。遺構の明確な時期は不明。（越坂）



第112図 第59号土坑出土土器実測図 (S=1/2)



第113図 第7号溝出土土器実測図 (S=1/2)

(5) 包含層出土須恵器

包含層から出土した古墳時代の須恵器は、F～L-5～8区、L・M-3～6区の2箇所に集中する。特に、M-5・6区の集中は著しい。ここは第11号竪穴住居と重なるが時期が異なっている。おそらく、第9・10号竪穴住居付近から斜面に投棄されたか、もしくは流出したのであろう。遺物の散布状況は後述する奈良・平安時代のそれと比較すると興味深い。

古墳時代の須恵器は、胎土・色調・焼成・作り癖からA～Eの5つの群に分類できた。これらは産地を異にするものと考えられる。なお、それぞれの群の特徴は第6表に譲る。

A群 (第145図78～85)

79は蓋・杯の溶着資料である。杯蓋の口径は約11.1cmと小さく、TK47期〔田辺 1982〕に比定できるが、器内が厚く特徴的である。78・80も同様に口径が小さく、81の無蓋高杯、83・84の甕も同時期に比定できるだろう。85はMT15まで下がると思われる。ただし、これらは个性的なものも含むため、大阪南部窯跡群の編年と直接比較することにはためらいを感じざるを得ない。

B群 (第145図86～91)

88・91は作りも鋭く、篋削りも幅狭く入念である。TK216期に比定できる。86はTK208、90はTK23期と思われる。87・89はTK47期であろう。B群はTK216～TK47までの比較的長期間に及んでいる。

C群 (第145図92～95)

図化の困難な資料が多いが、ほぼTK23～TK47期のもと思われる。95は小形の高杯脚部と思われるが全体の器形は不明である。

D群 (第145図96)

大甕口縁部で、6世紀代後半のものであろう。

E群 (第146図97～102)

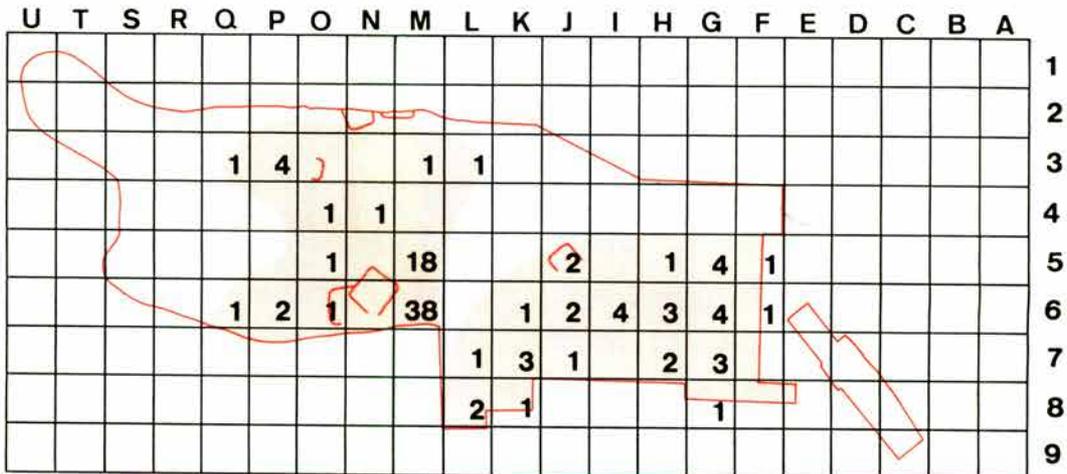
杯蓋97～99は天井部の稜線が沈線化しつつあり、TK10期頃のものと考えられる。杯身100・101はMT15期に、蓋103はTK47～MT15期に比定できる。いずれも他群に比べて作りが甘くなっている。102は有蓋高杯の杯蓋つまみ片である。なお、101は焼成が他に比べてやや甘く、白色砂粒を多く含んでいる。これをE'群としてE群とは区別しておく。

不明 (第146図105～110)

焼成が甘い等の理由で胎土の焼き上がりの特徴を十分に把握できないもの。特に古いものは少

第6表 竹野遺跡出土須恵器の産地分類

	色調	肉眼観察による胎土の特徴	形態・作り癖・焼成	時期
A群	灰 ＼ 青灰色	<ul style="list-style-type: none"> ・砂礫少なく精良。 ・粉っぽいサラサラした手ざわり。 ・黒色粒子多く、時として斑点状。 ・気胞が多く、軽い。 ・海綿骨針多量に含むものが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・器壁の厚いもの目立つ。 ・鋭さに欠けるがていねいな作り。 ・焼成の甘いものが多い。 	TK47 ＼ MK15
B群	青灰色	<ul style="list-style-type: none"> ・A群以上に砂礫少なく精良・緻密。 ・粉っぽくスリガラス状の質感。 	<ul style="list-style-type: none"> ・器壁薄く均一。 ・作りは鋭く、ていねい。 ・焼成はすべて堅緻。 	TK216 ＼ TK47
C群	暗灰色 (断面セピア)	<ul style="list-style-type: none"> ・B群に酷似。 ・ややあらいスリガラス状質感。 	<ul style="list-style-type: none"> ・B群が極めて堅緻に焼けたのか。 ・自然釉などで全体に黒っぽい。 	B群の年代幅 に含まれる。
D群	赤褐色	<ul style="list-style-type: none"> ・A～C群に比べ細砂粒多く、粗。 ・A～C群に比べあらい手ざわり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・酸化炎焼成のため赤く発色。 ・焼成良好。 	6C後半
E群	青灰色	<ul style="list-style-type: none"> ・D群より細砂粒多く、砂礫を含むものあり、全体に粗。 ・あらいコンクリートの質感。 	<ul style="list-style-type: none"> ・形がくずれ、雑な作り。 ・焼成堅緻なものが大半。 	TK10 ＼
F-1群	青灰色	<ul style="list-style-type: none"> ・砂礫含むものが多く、粗。 ・割れ口が鋭利なカドをもたず丸い。 ・多少コンクリートの質感。 	<ul style="list-style-type: none"> ・底部が著しく厚いものあり。 ・やや雑な作り。 ・生焼け品を一定量含む。 	8C後半 ＼ 10C
F-2群	青灰色 (断面クリーム色)	<ul style="list-style-type: none"> ・F-1群に比べ緻密。 ・割れ口が鋭いカドをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・焼成極めて堅緻。 	9Cか
不明	焼成不良品や上記の特徴にあてはまらない特異なもの。			5～6C



第114図 包含層出土須恵器破片数分布図(1) (6世紀代。赤色は6世紀代の住居。1辺10m。)

なく、A・D・E群のいずれかに含まれるのであろう。

(木立)

(6) その他の遺物

有孔円板 (第151図9、図版74)

有孔円板には孔を2つ有する双孔円板、1つ有する単孔円板、孔を有さない無孔円板に分類される。古くから研究が進められ、鏡の模造品とする説が有力である。本遺跡からは第1次調査で竪穴住居から1例検出されているが(第7図、図版21)、第2次調査でもK-8区包含層から出土した。遺物は滑石製の双孔円板で、最大径2.3cm、厚さ0.3cm、重さ2.4gを測る。2孔間の距離は0.8cmで、孔径はいずれも0.1cmを測り両面から穿孔する。また円板の両面には斜行する擦痕が認められる。現在、北陸地方では14点の有孔円板が出土している⁽⁷⁾。その内石川県では第7表に掲載した5遺跡で6点が出土している。遺物はすべて滑石製の双孔円板である。直径は本遺跡の遺物(3-b)を除きおおそ2.9cm前後、厚さはすべて0.3cm前後に収まり、神坂峠の分類の大型品に相当する。しかし2孔間の距離にはかなりのばらつきが認められ、直径を規定する規範力ほど2孔間の距離については強くなかったものと考えられる。遺物の時期は5世紀後半～6世紀前半(宮地式土器、田嶋編年土師器3様式Ⅱ期並行期)の所産と思われる。

第7表 石川県内出土双孔円板一覧表

(単位: cm)

No.	遺跡名	所在地	直径	厚さ	孔間幅	材質	時期	備考
1	鹿頭神明森古墳2号墳	羽咋郡富来町鹿頭	3.0	0.4	1.6	滑石	宮地式土器 並行期	石棺内清掃中に採集、管玉・土師器伴出 [橋本 1974]
2	宮地遺跡	鹿島郡鹿西町金丸	3.0	0.4	1.1	不明	宮地式土器 並行期	包含層出土、手づくね土器12点伴出 [吉岡・橋本 1965]
3	竹生野遺跡	羽咋郡押水町竹生野	3.0	0.2	1.5	滑石	5C. 後半～ 6C. 前半～	第1次調査、第2号竪穴住居覆土中
-a			2.3	0.3	0.8	滑石		第2次調査、包含層出土
-b			2.7	0.4	0.6	滑石	古墳時代	第1次調査、溝状遺構の底部から出土 [橋本・高橋1976]
4	古府クルビ遺跡	金沢市古府町	2.7	0.4	0.6	滑石	古墳時代	第1次調査、溝状遺構の底部から出土 [橋本・高橋1976]
5	漆町遺跡 金屋サンパンワリ地区	小松市漆町	2.8 (推定)	0.3	1.0	滑石	古墳時代	包含層から出土、玉類、土製模造品(舟・水鳥)等多数出土 [田嶋他 1986]

土製杓 (第143図、図版74-73)

長さ3.7cm、幅3.0cm、高さ2.9cmの頭部に棒状の把手を付けた土製杓で、凹部の法量は長さ2.5cm、幅2.0cm、深さ1.5cmを測り、断面は頭部と同じU字形を呈す。また把手は中空の可能性が高い。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には海綿骨片を多量に含む。現在、県内では土製杓に類似する遺物は7遺跡で8点出土している。その内訳は、羽咋郡志賀町鹿首モリガフチ遺跡[谷内尾・田中他 1984]、鹿島郡鹿島町徳前C遺跡[湯尻 1978]、押水町宿向山遺跡[藤田他 1987]、金沢市塚崎町塚崎遺跡[吉岡・小嶋他 1976]、金沢市近岡町近岡遺跡[戸潤・山本他 1986]の各遺跡で1点ずつ、加賀市片山津町片山津玉造遺跡[大場・小出他 1963]から2点である。宿

向山遺跡、近岡遺跡出土遺物が本遺跡出土の土製杓に類似する。また徳前C遺跡出土のものは匏杓に類似する。遺物の用途については実用品、祭祀遺物等が考えられるが、遺物の点数の少ないことを考慮すれば祭祀等の特殊な遺物と考えるのが妥当であろう。遺物の時期はいずれも弥生時代終末から古墳時代前期頃の所産と考えたい。

5 奈良・平安時代

(1) 掘立柱建物

第1号掘立柱建物（第115図、図版32）

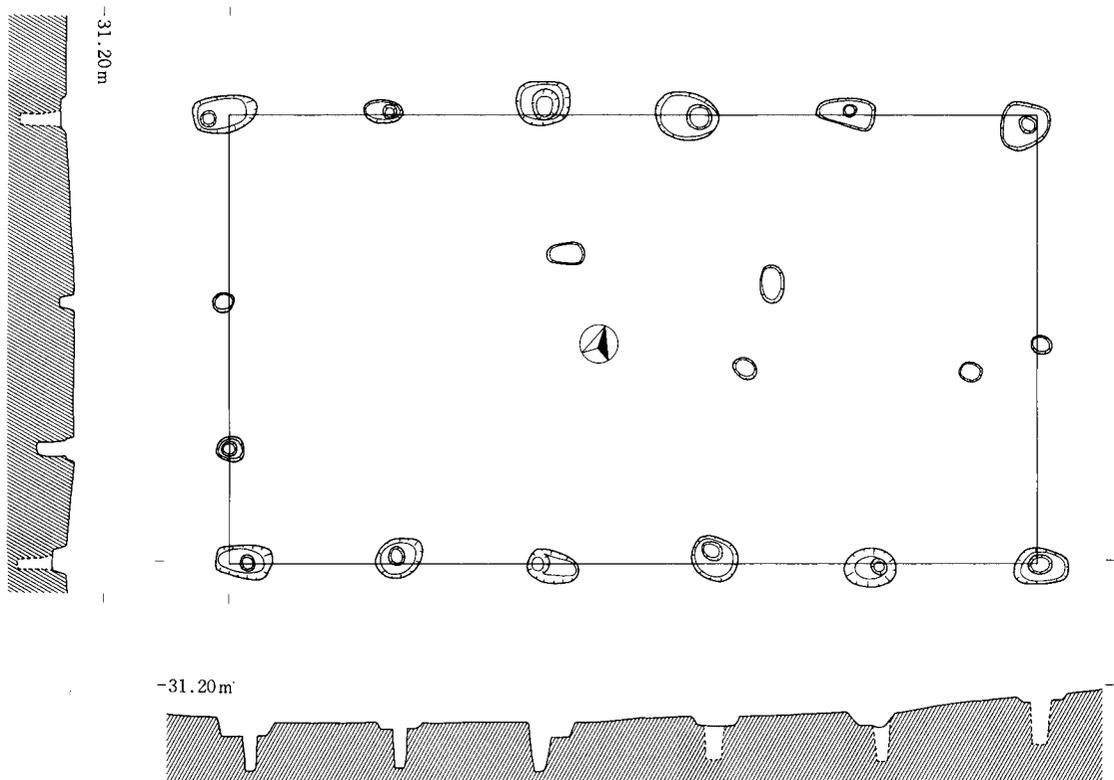
調査区の南隅、G-5・6区で検出された5間(8.5m)×2間(4.7m)の建物で、棟方向はN-69°-Eをさす。柱穴は桁列の柱穴が60cm×40cm程度の楕円形で、深さは50~60cmを測る。南・北側梁列北第2の柱穴は径20cmの円形で、深さ20cmを測る。柱穴の覆土は灰褐色粘質土で粘土ブロックを含み、北側桁列東第2・5、南側桁列東第2の柱穴から炭化物が多く検出された。柱間寸法は桁行が1.6m、梁行が約2.2mである。遺物は東側梁列北第2の柱穴を除くすべての柱穴から須恵器片、土師器片が出土した。

第2号掘立柱建物（第117図、図版32・33）

G-6・H-5・6区、第1号掘立柱建物の約2m北側で検出された5間(11.3m)×2間(5.2m)の建物で、主軸は第1号掘立柱建物と同じN-69°-Eをさす。柱穴にはかなりのばらつきが認められ、東側梁列北第2と南側桁列西第2の柱穴は直径20~25cmの円形と小さいが、他は60cm×50cm程度の楕円形で、深さ20~30cmを測る。北側桁列西第1の柱穴は深さ50cmと深い。柱穴の覆土は灰褐色粘質土。なお北側桁列西第2の柱穴に対応する柱穴と東側梁列北第2に相当する柱穴は検出されなかった。柱間寸法にはかなりのばらつきが認められる。遺物は検出されたすべての柱穴から土師器片が出土し、南側桁列西第1の柱穴からは須恵器片も出土した。

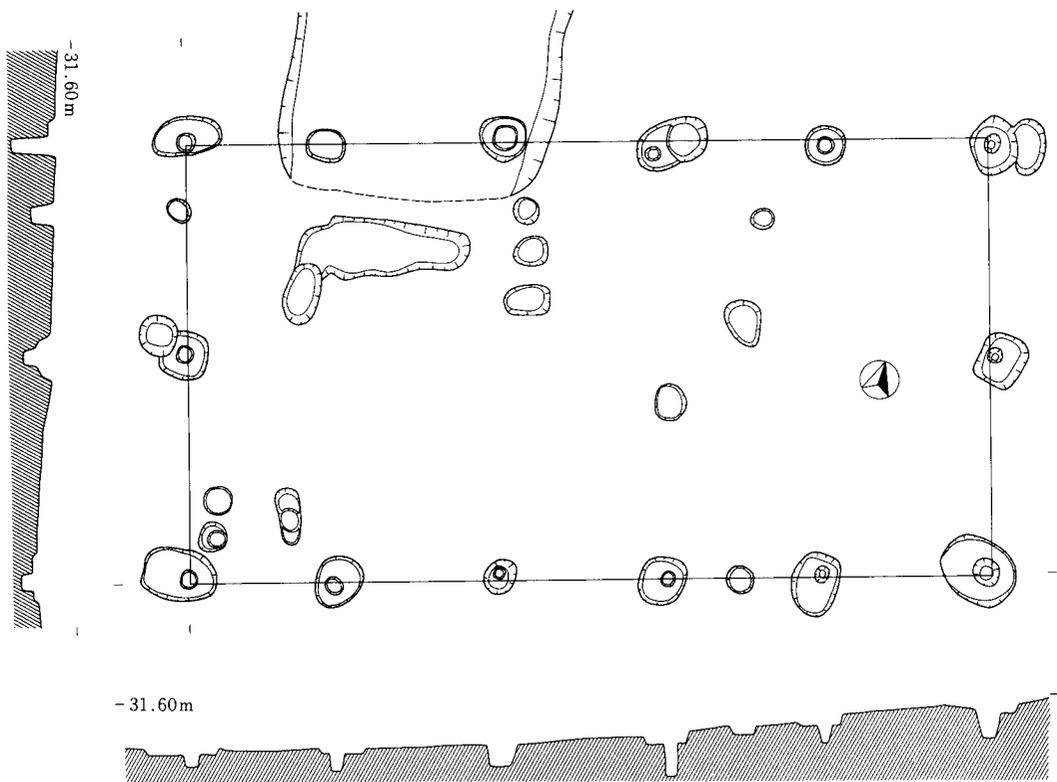
第3号掘立柱建物（第116図、図版32・33）

H-6・7、I-6区、第2号掘立柱建物の約2m北側で検出された5間(8.4m)×2間(4.6m)の建物で、主軸は第1・2号掘立柱建物と同じN-69°-Eをさす。また第1号掘立柱建物の梁列とほぼ同一軸線上に梁列が乗る。柱穴は規模・形態ともかなりばらつきが認められるが、柱痕の直径は約20cmを測る。東・西梁列北第2の柱穴は第1・2号掘立柱建物と違いいずれも直径約50cmの方形を呈す。北側桁列東第2・5は小さく40cm×40cmの方形、南側桁列東第4の柱穴も小さく40cm×30cmの楕円形を呈す。その他は50~80cm×50~60cmの楕円形で、深さはいずれも20~50cmを測る。柱穴の覆土は灰褐色粘質土で、東側梁列北第2の柱穴で炭化物が多く検出された。柱間寸法は桁行が1.7m（ただし桁列西第1・2の柱穴間の距離は1.5m）、梁行が2.3mを測る。遺物は北側桁列東第1・2(土師器片)・3(須恵器・土師器片)、南側桁列東第2(土師器片・礫)・3~5(須恵器・土師器片)・6(土師器片)の柱穴からそれぞれ出土した。第1~3号掘立柱建物の時期は平安時代前半(9世紀前半)頃と推定される。



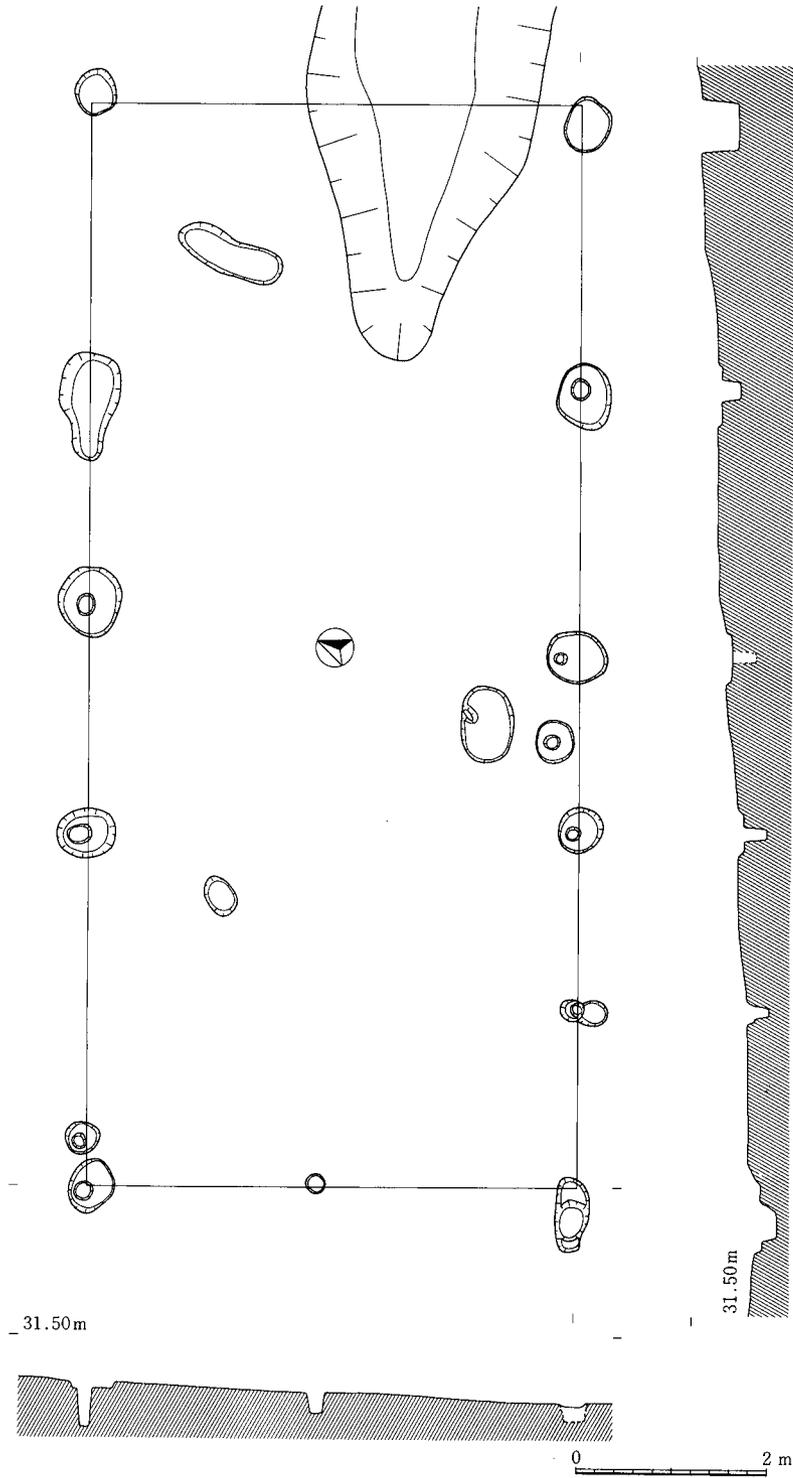
第115図 第1号掘立柱建物実測図 (S=1/60)

0 2 m

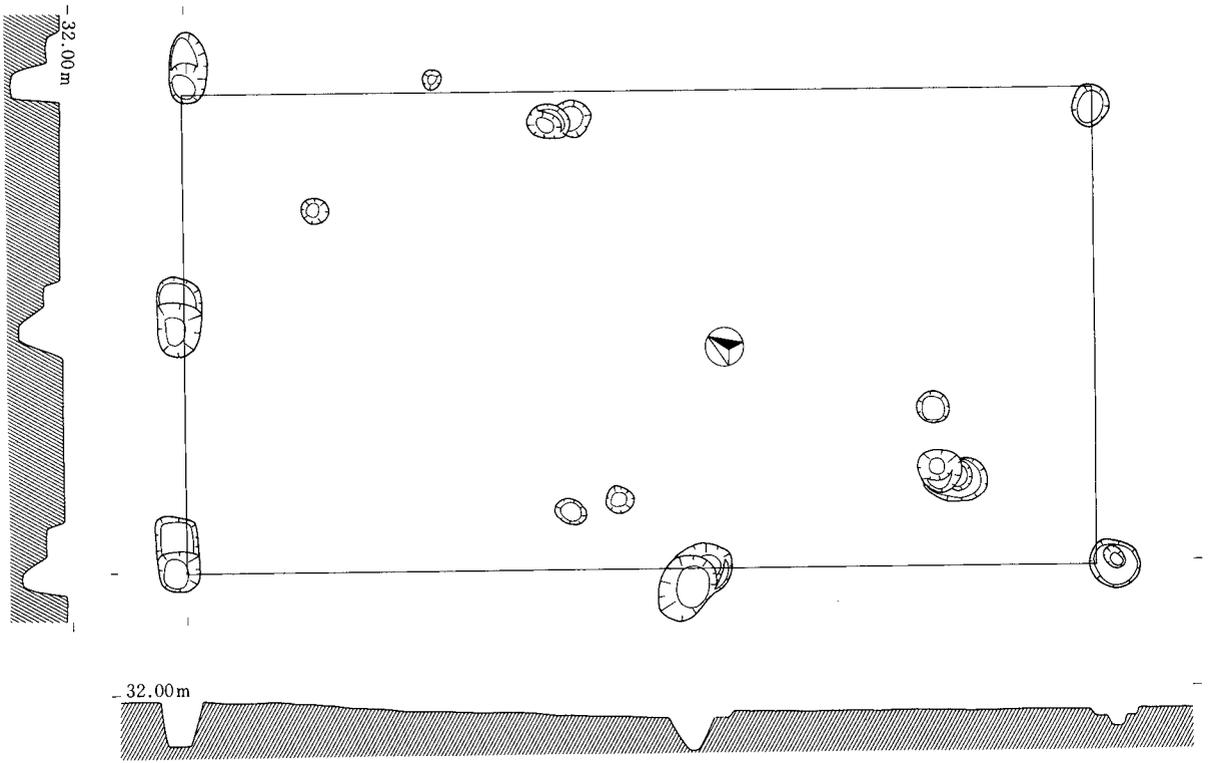


第116図 第3号掘立柱建物実測図 (S=1/60)

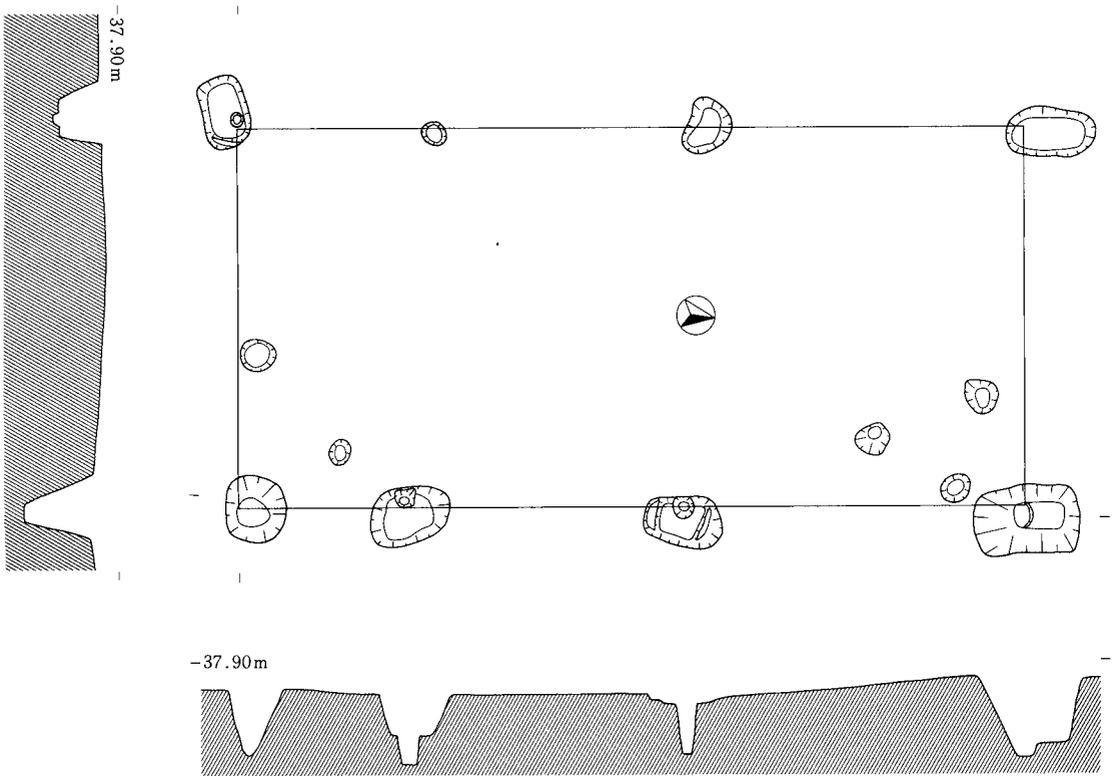
0 2 m



第117图 第2号掘立柱建物实测图 (S=1/80)



第118図 第4号掘立柱建物実測図 (S=1/80)



第119図 第6号掘立柱建物実測図 (S=1/80)

第4号掘立柱建物（第118図、図版30）

J-7、K-7・8区で検出された。4間(9.5m)×2間(5.0m)の建物と推定されるが詳細は不明。主軸はN-26°-Wをさす。柱穴は北側の梁列で80cm×45cmの長方形で深さ50cmのしっかりした柱穴が検出された他は、南側梁列の隅柱と西側桁列で3基の柱穴が検出されたにすぎない。柱穴の覆土は暗褐色粘質土。柱間寸法は梁列が2.5mで桁列は不明。遺物は検出されたすべての柱穴から土師器片が出土した。遺構の明確な時期は不明。

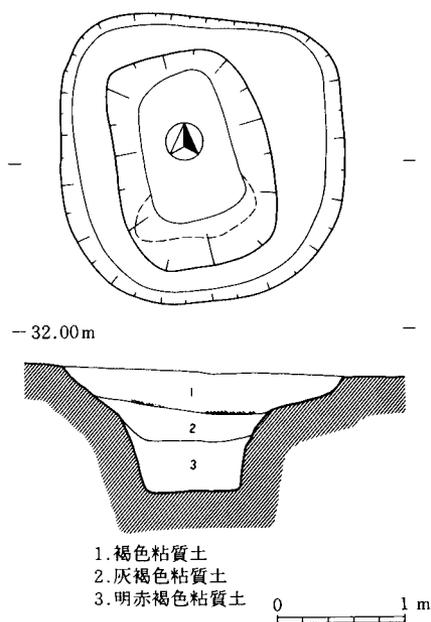
第6号掘立柱建物（第119図、図版39）

P-5区で検出された3間(8.2m)×1間(4.0m)の建物で、主軸はN-7°-Wをさす。柱穴にはばらつきが認められるが、そのほとんどが0.8~1.0m×0.5~0.7mの隅円長方形プランで、深さ50~80cmを測る。桁行の柱間寸法は北側から3.5m、3.0m、約2mを測る。遺物は東側桁列南第1の柱穴から鉄片数点、15.1gが出土した。遺構の時期は不明で、古墳時代にまで遡る可能性もある。

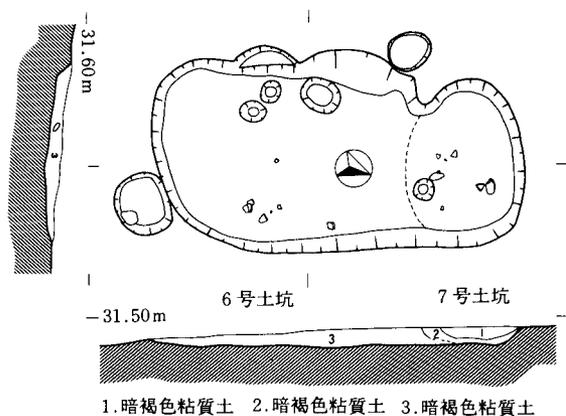
(2) 土 坑

第4号土坑（第120図、図版52）

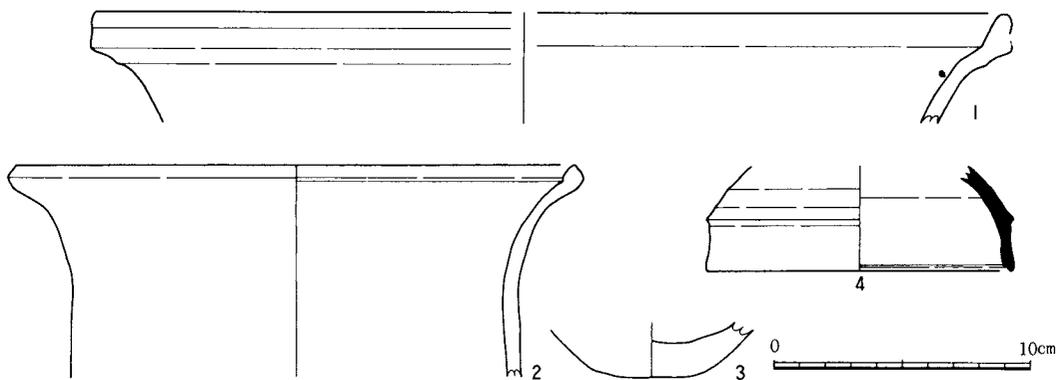
I-7区、第3号竪穴住居の北西側で検出された2段掘りの土坑。上面は一辺2.3m、深さ約20cmの隅円方形の土坑で、その中央部に1.8m×1.2mの隅円長方形の土坑をさらに95cm程掘り込む。覆土は3層からなり、ほぼ水平に堆積する。第1層は褐色粘質土で炭化物、小石、地山質土ブロックを多量に含み、特に層下部には炭化物が厚く堆積する。第2層は灰褐色粘質土で炭化物、鉄分を含み、小石も多く含む。第3層明赤褐色粘質土で炭化物を含み、床面付近で黒褐色粘質土がブロック状に混在する。遺物は第1・2層で土師器・須恵器片が数点出土したのみで時期は不



第120図 第4号土坑実測図 (S=1/60)



第121図 第6・7号土坑実測図 (S=1/60)

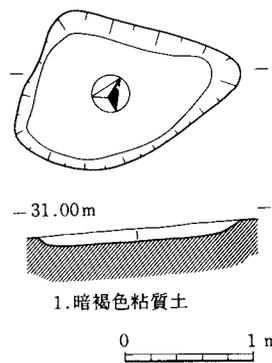


第122図 第6号土坑出土土器実測図 (S=1/3)

明。水溜として使用されたものと推定される。

第6号土坑 (第121・122図、図版32・71)

H-7区、第2・3号掘立柱建物のすぐ西側で検出された2.2m (推定)×1.6mの隅円長方形の土坑で、深さ14cmを測る。遺構の北側を第7号土坑に切られる。覆土は暗褐色粘質土の単層で、砂や橙色の粘土ブロックを含む。遺物は土師器56点、須恵器15点、礫8点が出土した。1は鍋形もしくは鉢形の土器で口径36cm(推定)を測る。口縁部は外反し、端部で内屈する。また口縁部外端面のほぼ中央に沈線を巡らす。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には雲母片を多く含む。2は甕形土器で、口径22.1cmを測る。口縁部は外反し端部で内屈する。色調は灰黄褐色を呈し、口縁部外面には煤が付着する。胎土には雲母片を多量に含む。4は須恵器の杯蓋で混じり込みと思われる。口径11.8cm、残存高4.1cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部には内傾する凹面をもつ。稜が断面三角形をなして外方へ伸びる。ON47期に比定される。遺構の時期は平安時代中期(10世紀前半)頃と推定される。



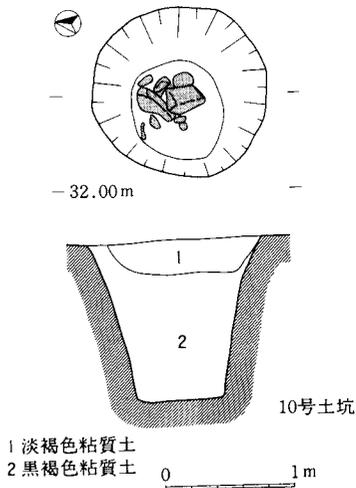
第123図 第9号土坑実測図 (S=1/60)

第9号土坑 (第123図、図版32)

F・G-5・6区、第1号掘立柱建物の南側で検出された不定形の土坑で、長軸1.8m、短軸1.3m、深さ7cmを測る。覆土は暗褐色粘質土の単層で炭化物を含む。遺物は土師器33点、須恵器16点、礫7点が出土したが土器はいずれも小片で明確な時期を決定するにはいたらなかった。土師器はすべて古墳時代のもと思われるが、須恵器の大半は奈良・平安時代のものである。

第10号土坑 (第124図、図版53)

J-7区で検出された1.4m×1.3mの円形の土坑で、深さ70cmを測る。床面は0.8m×0.7mの円形プランを呈す。覆土は2層からなる。第1層は明褐色粘質土で、炭化物と黄橙色粘土ブロックを含み

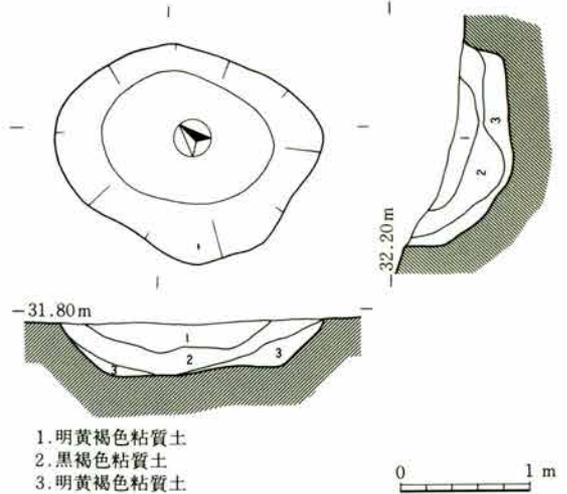


第124図 第10号土坑実測図

しまりは悪い。第2層は黒褐色粘質土で粘性が強い。遺物は第1層を中心に土師器が57点出土したが、大部分は古墳時代に属する。第2層から平安時代の須恵器の杯片2点、甕片1点、その他破片1点が出土した。本遺構も第4号土坑と同じ水溜として使用されたものと思われる。

第25号土坑 (第125図)

G-7区で検出された風倒木痕。2.1m×1.6mの楕円形を呈し、深さ50cmを測る。断面形態は深い皿形で、底面は1.3m×1.0mの楕円形を呈す。覆土は3層からなる。第1層は明黄褐色粘質土で炭化物を含み、遺構中央の上面に堆積する。第2層は黒褐色粘質土で炭化物を比較的多く含み、第1層の下に堆積する。遺構検出の際に本層がリング状に検出された。第3層は明黄褐色粘質土で炭化物を含む。第1～3層ともに土のしまりは良好。遺物はまったく検出されなかった。遺構の時期は不明であるが、周辺で奈良・平安時代の遺構が多数検出されていることから便宜的にここで扱った。

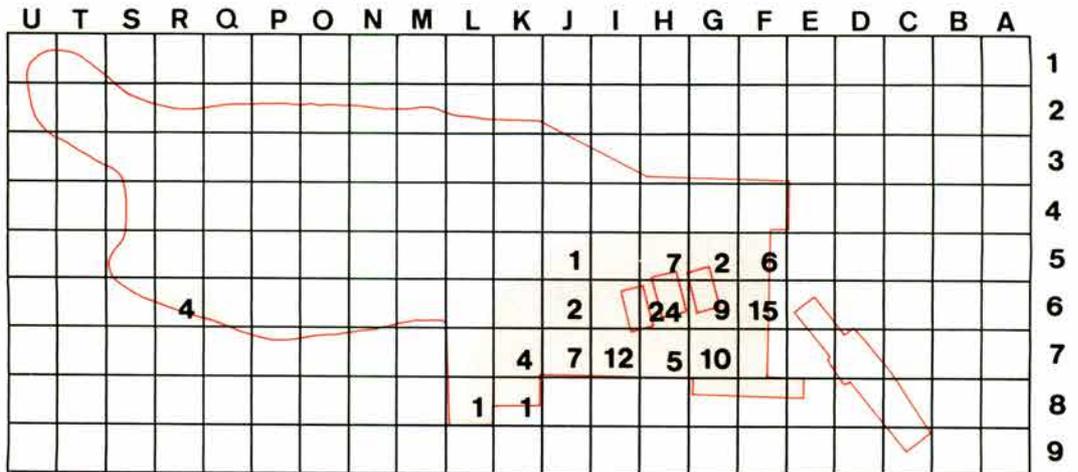


第125図 第25号土坑実測図 (S=1/60)

(3) 包含層出土須恵器

奈良・平安時代の須恵器は掘立柱建物周辺に集中して出土した。これらの須恵器はほぼ同一産地の製品と思われ、F-1群と呼ぶことにする。一部にやや緻密な胎土のものがあるので、これをF-2群として区別した。

なお、ここでは編年の参考として至近距離の高松・押水窯跡群の窯資料 [川畑 1987他] と対比するように努め、必要に応じて西暦(世紀)で年代を示した。



第126図 包含層出土須恵器破片数分布図(2) (8・9世紀代。赤色は8・9世紀代の住居)

杯蓋 (第147図115~124)

115はやや古い様相を残すが、他はそれより新しく黒川2号窯の資料に類似する。天井外面の篋削りはいずれも行われず、116には篋切り痕が残る。

有台杯 (第147図118~124)

123は高台がしっかりとふんばり、有台杯の中で最も古い。若緑ヤキノ2号窯かその直前頃に比定できるだろう。その他は黒川2号窯かそれ以降のものであろう。124の底部内面には篋記号が認められる。なお、有台杯の底部内面(見込み部分)はほとんどの個体にどの部位よりなめらかな面(「使用痕」)⁽⁸⁾が認められた。

無台杯 (第147図125~130)

125は径が小さく、123とほぼ同時期のものだろう。他はいずれも口縁の外傾が強く、器壁が薄いことから、黒川2号窯から若緑カラツノ窯の頃のものと思われる。

皿・椀 (第147図131~133)

131・132は若緑カツラノ窯の頃のものであろう。131は盤状だが不明。

壺 (第147図134・135、第148図136~139)

134・136は8世紀代にさかのぼるが、135は9世紀代であらう。他は不明。

甕 (第148図141~145)

おそらく8世紀代のものであるが、窯での資料が少なく、時期決定が難しい。144の内面当て具は平行文である。(木立)

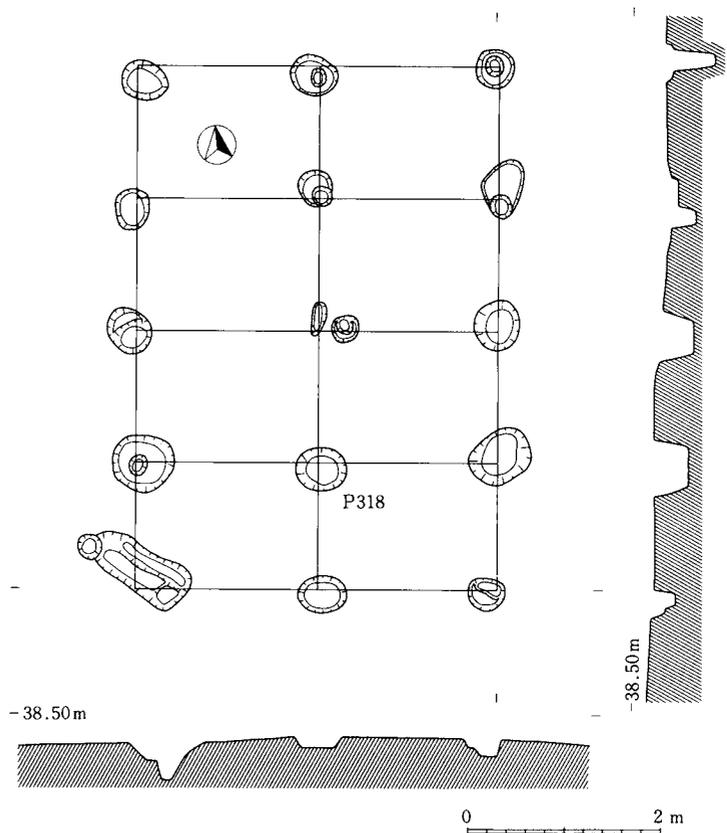
6 中 世

(1) 掘立柱建物

第7号掘立柱建物

(第127図、図版38・39)

調査区の北西端、Q・R-5区で検出された4間(5.5m)×2間(3.8m)の総柱建物で、主軸はN-1°-Wをさす。柱穴は形態・規模等にばらつきがみられ、小さいものは直径40cm程度の円形、大きいものは60cm×50cm程度の楕円形を呈す。柱穴の覆土は灰褐色粘質土で炭化物を多量に含む。柱間寸法は桁



第127図 第7号掘立柱建物実測図 (S=1/60)

行が1.4m、梁行が1.9mを測る。遺物はP-318から土師皿と思われる土器小片が出土した。

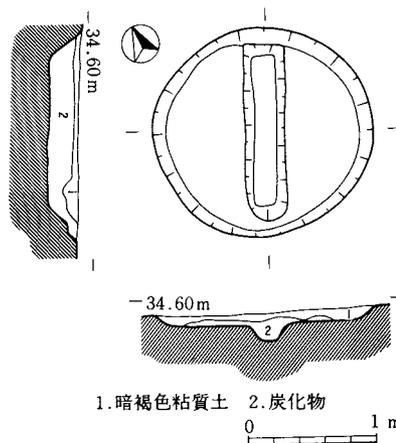
(2) 土 坑

第15号土坑 (第128図、図版33)

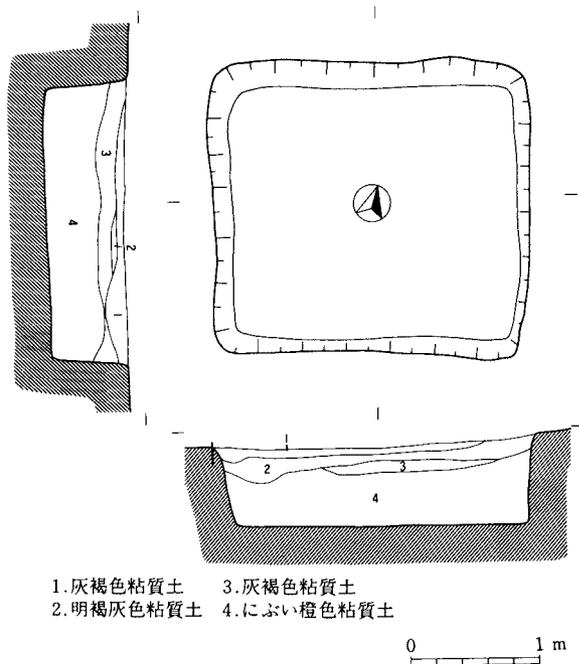
台地の南、I-4区で検出された1.7m×1.6mの円形の土坑で、火葬炉と思われる。約10cm掘下げた床面の中央に長さ1.4m、幅0.3m、深さ10cmの通風溝が検出された。溝の断面はU字形をなす。遺構の覆土は暗褐色粘質土で、床面および通風溝には木炭や焼土がぎっしり詰まる。通風溝の主軸はN-20°-Eをさす。人骨および遺物等はまったく検出されなかった。

第45号土坑 (第129・130図、図版56・72)

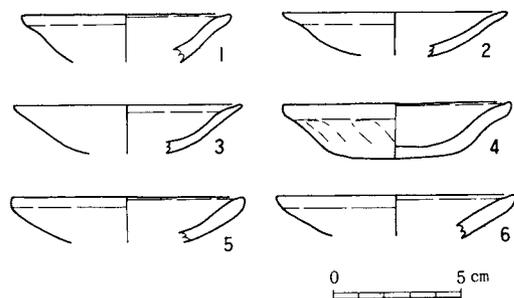
台地のほぼ中央、O-4・5区で検出された方形の土坑で、墓坑と思われる。第46・47号土坑を切る。長径2.5m、短径2.3m、深さ63cmを測り、主軸はN-77°-Eをさす。遺構の覆土は4層からなる。第1層は灰褐色粘質土で炭化物を含む。第2層は明褐灰色粘質土で炭化物を含む。第1・2層ともに土のしまりは良い。第3層は灰褐色粘質土で炭化物を含む。第4層はにぶい橙色粘質土で、炭化物(明らかに木炭とわかるものも含む)を多量に含み焼けた粘土塊も検出された。遺構の壁にはさして火熱を受けた痕跡は認められなかった。遺物は第2層を中心に土師皿22点、10数個体が出土した。1、2は内湾気味に立ち上がる体部が口縁部付近で外反する薄手の土器で口縁部にていねいなナデ調整を施す。1は口径9.0cm、器高2cm(推定)で、口縁端部にていねいなナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には雲母等の粗砂粒を含む。2は口径8.6cm、器高1.8cm(推定)を測る。色調は灰白色を呈し、口縁部外端面に黒



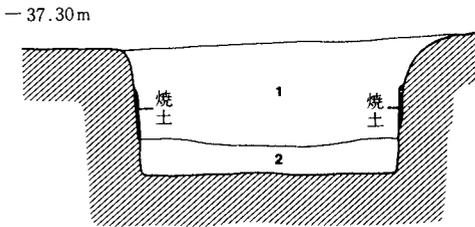
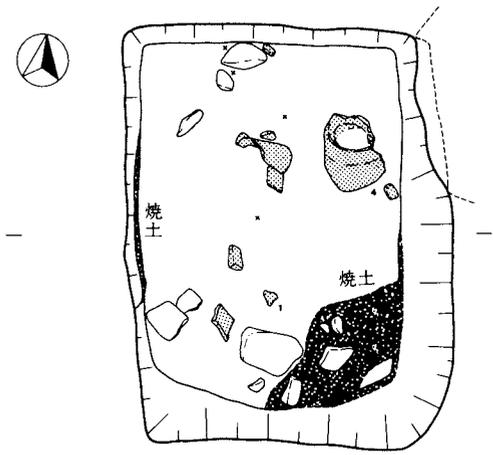
第128図 第15号土坑実測図 (S=1/60)



第129図 第45号土坑実測図 (S=1/60)

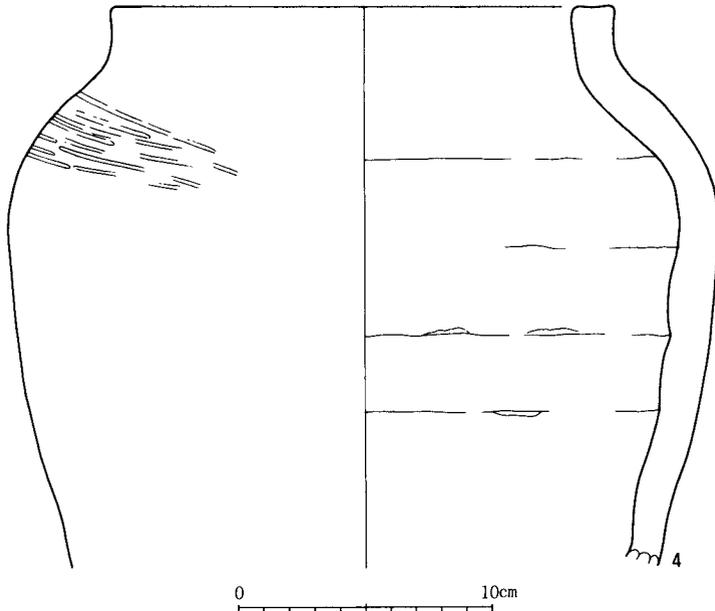
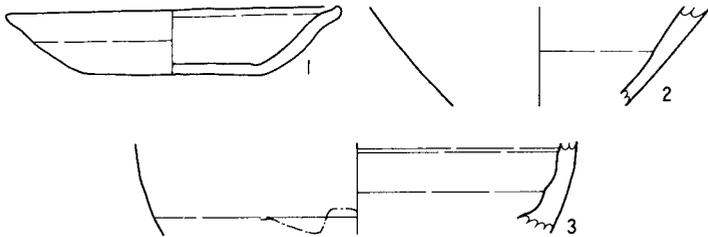


第130図 第45号土坑出土土器実測図 (S=1/3)



1. 暗褐色粘質土 2. 黒褐色粘性砂質土

第131図 第68号土坑実測図 (S=1/3)



第132図 第68号土坑出土土器実測図 (S=1/3)

いタール状のものが付着する。3・4は1・2とほぼ同じ器形で、器厚は肥厚する。3は口径8.2cmで、胎土には石英・雲母等の礫・粗砂粒を多く含む。4は口径8.9cm、器高2.2cmを測る。口縁端部はわずかに内屈し稜をもち、体部外面には指頭圧痕が認められる。また口縁部外端面から体部内面にかけて黒いタール状のものが付着する。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には雲母・石英等の粗砂粒を含み海綿骨片もごくわずかに含む。5は内湾気味に立ち上がり口縁端部が肥厚する土器で、口径9.2cmを測る。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には細砂粒を多量に含み海綿骨片も認められる。6は口径9.3cmで、口縁部内端面にていねいなナデ調整を施す。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には雲母等の砂粒を多く含み赤色酸化粒も含む。また図示できな

かったが、釘かと思われる鉄製品1点も出土した。長さ4.3cm、径0.8cm、重さ8.4gを測る。遺構の時期は15世紀末から16世紀前半、四柳編年IV-中期に比定される[四柳1987]。

第68号土坑 (第131・132図、
図版56・73)

M-4区、第45号土坑の南約15m地点の木の根を取り除いたところ検出された。長軸1.6m、短軸1.3mの長方形プランを呈し、深さ50cmを測る。主軸はN-6°-Wをさす。覆土は2層からなり、第1層は暗褐色粘質土、第2層は黒褐色粘性砂質土を呈す。両層ともに炭化物(木炭)を多量に含み、第1層下部で火熱を受けた礫が多数検出された。遺構南東隅の床面と壁、西側の壁は火熱を受けて赤化

する。通風溝は検出されなかったが、本遺構も火葬炉と思われる。遺物は第2層から土師皿・壺等の土器、鉄製品、焼けた粘土塊が出土している。1は口径13.0cm、底径6.8cm、器高2.8cmの土師皿で、内湾気味に立ち上がり口縁部付近で外反する。口縁部にていねいなナデ調整を施し、口縁端部は内屈する。色調は黄橙色を呈すが、二次的な火熱を受けて赤化する。胎土には石英等の礫・砂粒を多量に含み、海綿骨片も含む。2・3は瀬戸焼の鉄釉陶器片で、2は瓶子と思われる。4は越前焼と思われる壺で二次的な火熱を受けて大きく歪む(図版73-4参照)。実測図は変形前の形を想定して図上復元したものである。口径18.4cm、胴部最大径27.9cmを測る。器形は肩部が張る形式で、口縁部は直立し口縁端部に面をもつ。色調も二次的な火熱により変色するがにぶい赤褐色を呈し、胎土には黒・白色の砂粒を多く含む。鉄製品は図示できなかったが、長さ約7cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmを測り両端で「状に曲がり、曲がった部分は0.6cm×0.5cmの柱状となる。青森県の浪岡城跡で出土した芋の繊維を取る時の道具として木製の柄にはめ込んで使用するという芋引金に類似する〔工藤 1987〕。遺構の時期は第45号土坑と同じ15世紀末から16世紀前半に位置付けられる。

(3) 塚 (第133図、図版57)

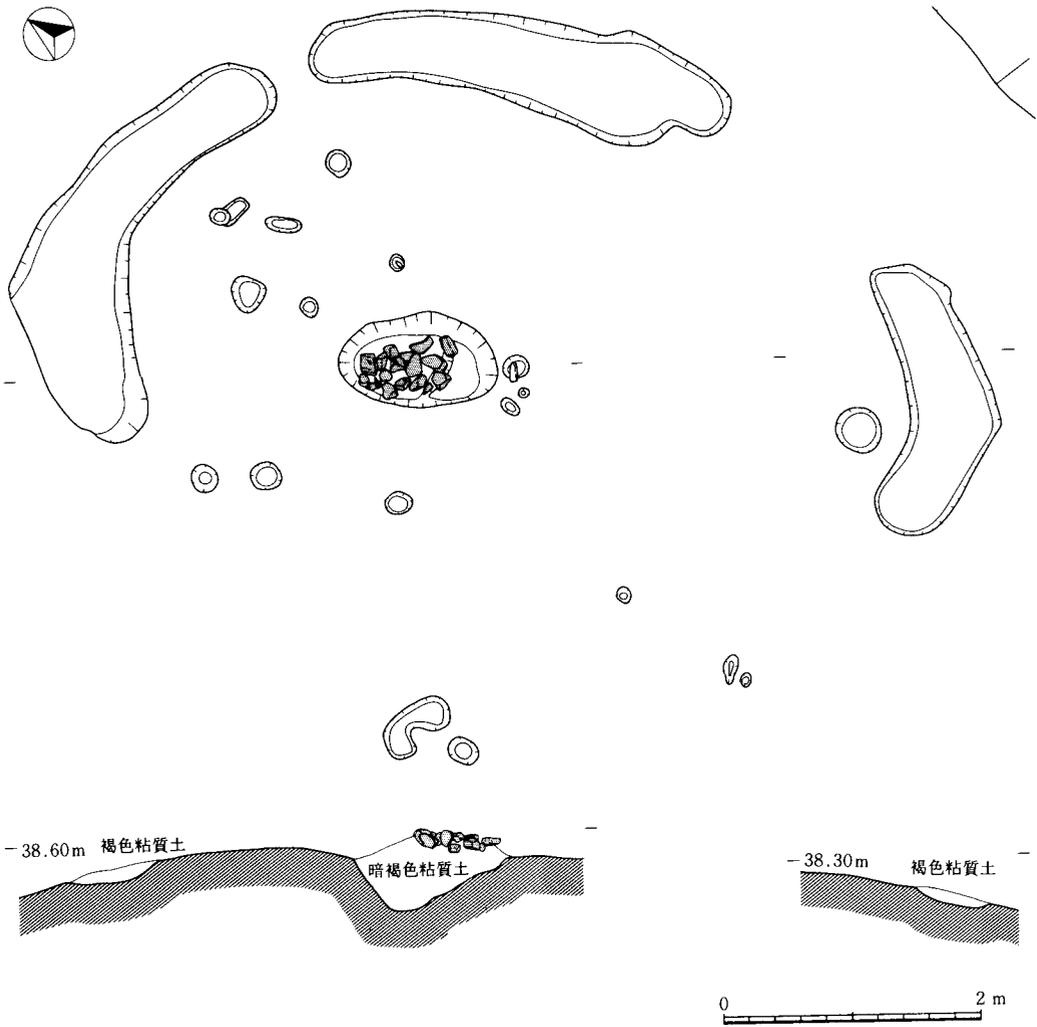
調査区の北東隅、R・S-3区で検出された。遺構は北東方向に伸びる尾根の基部に位置していたため、当初前方後円墳として調査された。マウンドは11m×9mの円形で、高さ60cmを測る。マウンドは盛り上げたものではなく、地形を利用しながらも一部旧表土を削平することにより造り上げられる。マウンドの最頂部で1.2m×0.7mの長楕円形の土坑が検出された。上面には集石がみられ、約55cm掘り下げられる。覆土は暗褐色粘質土で炭化物を含み比較的粘性に富む。また土坑の北・東・南側で幅50~90cm、深さ10cmの周溝が検出された。覆土は土坑とまったく同じで、土坑に伴うものであることは間違いない。聖域である塚との境界を意識して掘られた溝であろう。土坑、周溝から遺物はまったく検出されなかった。遺構の明確な時期は不明であるが、火葬炉や土坑とはほぼ同じ時期か、やや降る時期と考えたい。塚については大場磐雄博士が以前から考古学的に注目されており〔大場 1967〕、塚を富士塚・三山塚・狐塚・庚申塚・二十三夜塚などの民俗信仰上からの造立にかかるものと、行人塚・山伏塚・念仏塚・法印塚などの行人・同者の修業場または祭場、入定跡等の二つに大別しておられるが〔大場 1971〕、本遺跡の場合どれに該当するかは不明。とにかく民間信仰と密接な関係をもって造立されたものであろう。なお地元の人々にこの塚に伴う伝説等の有無を尋ねたが解答は得られなかった。

(4) その他の遺物

この他、包含層出土の遺物として鉄砲の玉、銅錘(分銅・権)、銅銭(□元通宝)、漆器椀、土錘、土師皿・播鉢・青磁・白磁等の土器類が出土した。

鉄砲の玉 (第151図12・13、図版75)

L-6区から2点出土した。12は最大径1.2cm、重さ7.3g、13は最大径1.3cm、重さ9.6gを測る。いずれも鉛製で球形を呈すが、遺物が風化していることもあり宿向山遺跡出土遺物のように



第133図 塚実測図 (S = 1/60)

型作りの痕跡は確認されなかった。

銅錘 (同図14、図版75)

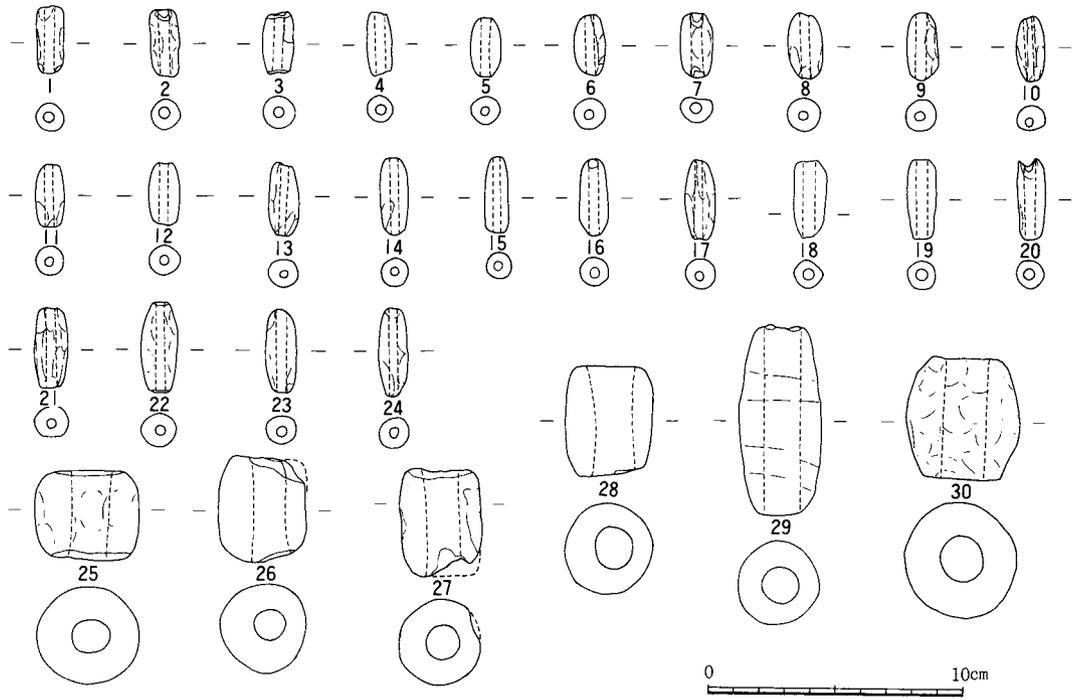
H-5区から1点出土した。りんご形を呈し、胴部外面にヒダを有するもので(浪岡城分類Ⅲ類)、高さ2.0cm、最大幅2.0cm、重さ26.5gを測る。また頂部には錘糸を通すための釣り環がわずかに遺存する。福井県・朝倉氏遺跡や青森県浪岡城跡で類例がみられ、浪岡城ではこのタイプも多く、天正年間以後に出現したとする説もある〔工藤 1987〕。

漆器椀 (第144図12、図版73)

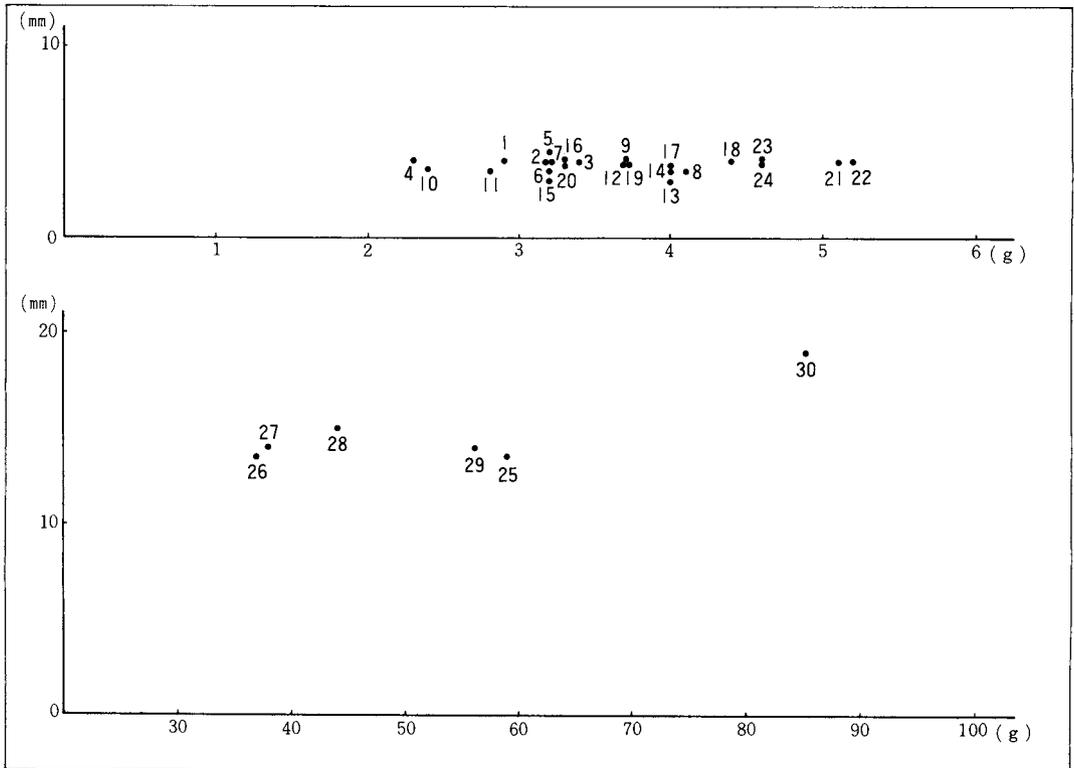
K-7区、ピット(P130)から出土した。口径9.9cm、底径5.2cm、器高3cm(推定)を測る。器面には赤色漆が塗られ、口縁部内面と外底部に黒色漆が塗られる。また外底部中央に赤色漆で「吉」銘が書かれる。根来風の特徴がみられ、16世紀代に位置付けられる。⁽⁹⁾

土錘 (第134図、図版75)

谷部分のH-7区を中心に32点、台地部分で2点の計34点が出土した。1~29は土師質、30は陶質である。すべての土錘を当該期に属するものと断定することはできないが、本稿では一括して



第134図 土錘実測図 (S = 1/3)



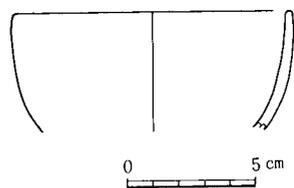
第135図 土錘の重量と孔径の相関図

扱う。遺物の形態は山本直人氏による分類のI類(側縁部がふくらむ形態)に該当する[山本 1986]。さらに形態差に注目すれば、Ia類(長さと同幅がほぼ等しいもの)、Ib類(長さが幅の2倍より短いもの)、Ic類(長さが幅の3倍より短いもの)、Id類(長さが幅の3倍以上のもの)の4タイプに細分され、Ia類5点、Ib類6点、Ic類22点、Id類1点を数える。第135図は土錘の機能と密接に関係する重量と孔径の相関関係を示したもので上段が小型品、下段が大型品を示す。その結果、土師質小型品、土師質大型品、陶質大型品の3タイプに分類された。土師質小型品は重量2.3g~5.2gの間ではらつきがみられるが、孔径はすべて0.4cmのライン付近に分布する。土師質大型品は重量36.6g~59.3g、孔径約1.4cmを測る。陶質大型品は重量85.4g、孔径1.8cmを測る。

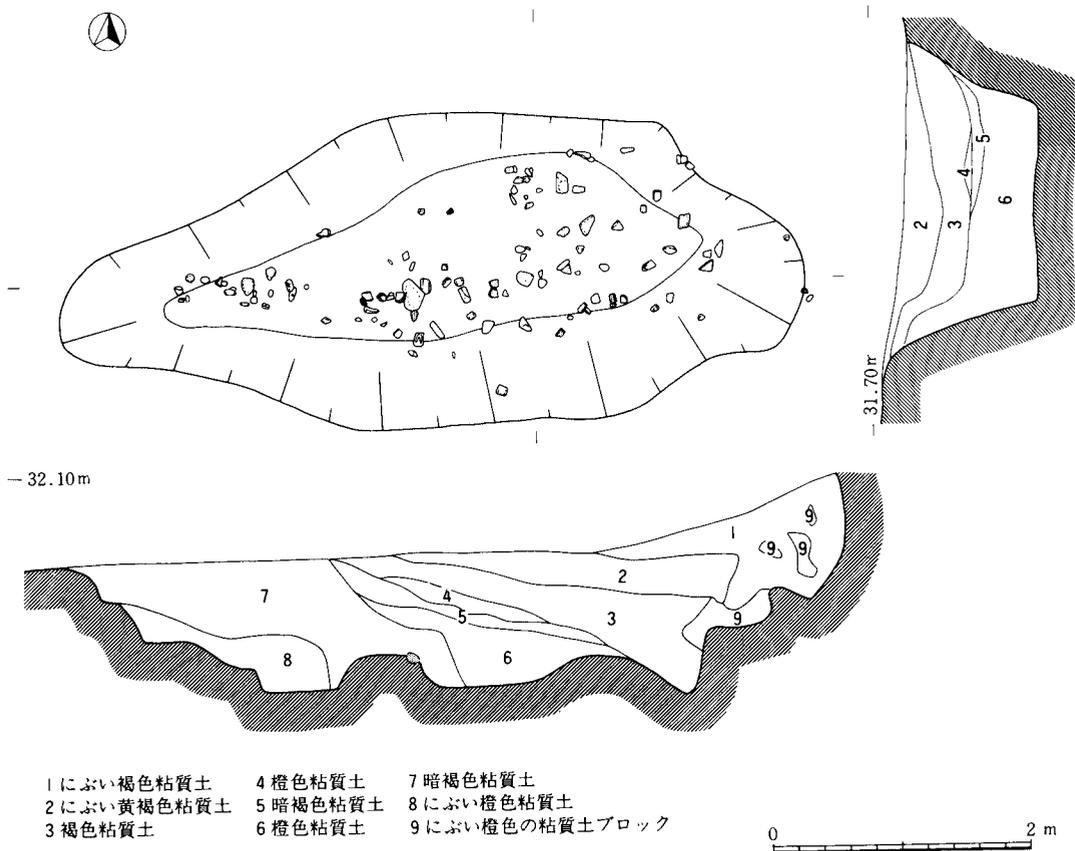
7 近 世

(1) 土 坑

近世の遺構はH-5区で検出された第8号土坑(第137図、図版53)1基のみである。遺構は長軸5.9m、短軸2.4mの舟形を呈し、深さ約1mを測る。覆土は9層からなり、東半で複雑に堆積する。第1層はにぶい褐色粘質土で木の根による攪乱層と思われる、地山質土

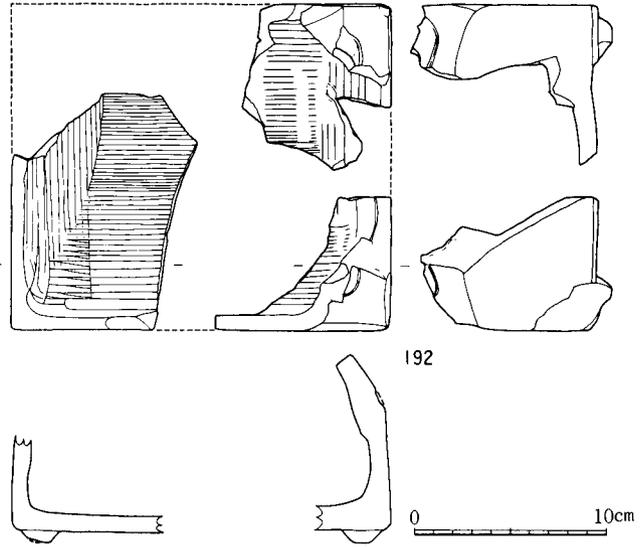


第136図 第8号土坑出土土器実測図



第137図 第8号土坑実測図

ブロックを多く含む。第2層はにぶい黄褐色粘質土で炭化物を含む。第3層は褐色粘質土。第4層は橙色粘質土で炭化物を含む。第5層は暗褐色粘質土で炭化物・橙色粘土ブロックを含む。第6層は橙色粘質土、しまりは良く地山質土に類似する。第7層は暗褐色粘質土で、炭化物を多く含む直径20cm程度の礫を含む。第8層にぶい橙色粘質土で、第7層と同じく炭化物や礫を含む。第9層はにぶい橙色粘質土がブロック状に堆積する。遺物は第6層から陶磁器が

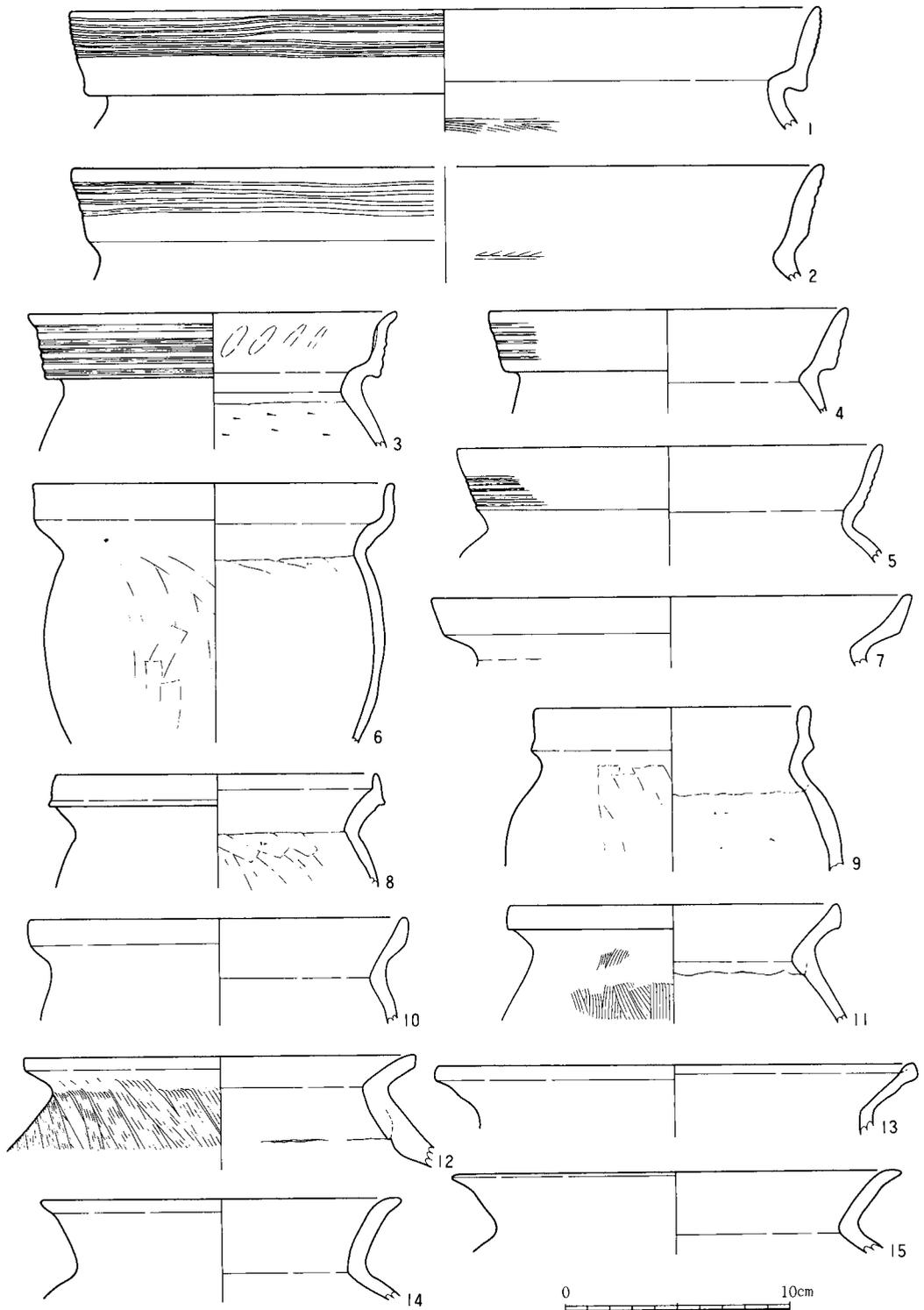


第138図 行火実測図 (S=1/4)

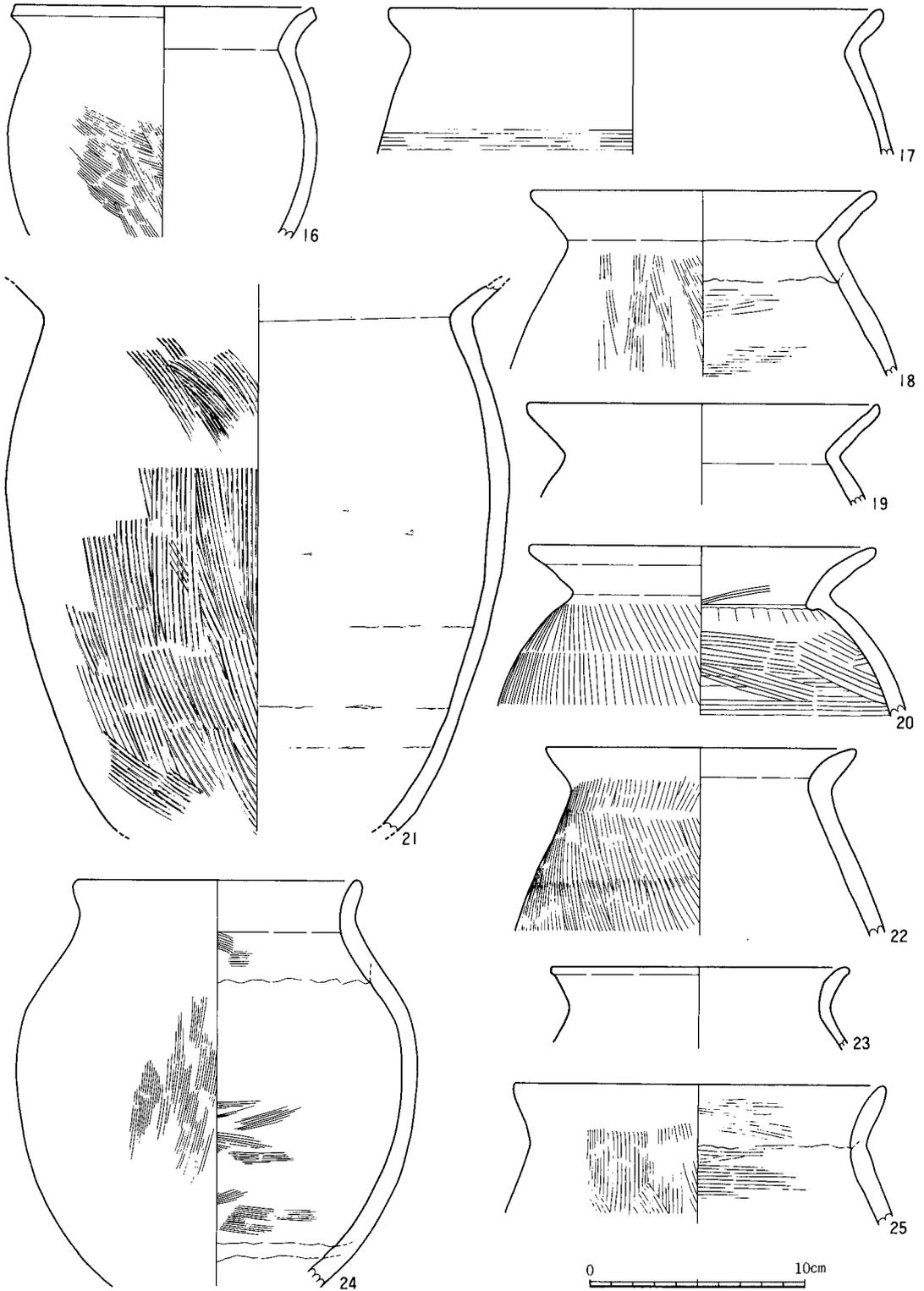
1点出土した(第136図)。口径10.4cmを測る碗で、底部を欠損する。色調は釉が灰白色を呈し、貫入が認められる。素地は淡黄色を呈す。遺構の性格や明確な時期は不明である。この他、近世の遺物については包含層からも何点か出土しており、碗(第149図183)、皿(同図182)、行火(第138図)等が確認された。昨年の秋に石川県立埋蔵文化財センターによって調査された竹生野遺跡フルヤシキ地区で近世の資料がまとめて出土しており、今後の遺物整理作業に期待される。

(2) 畝 溝

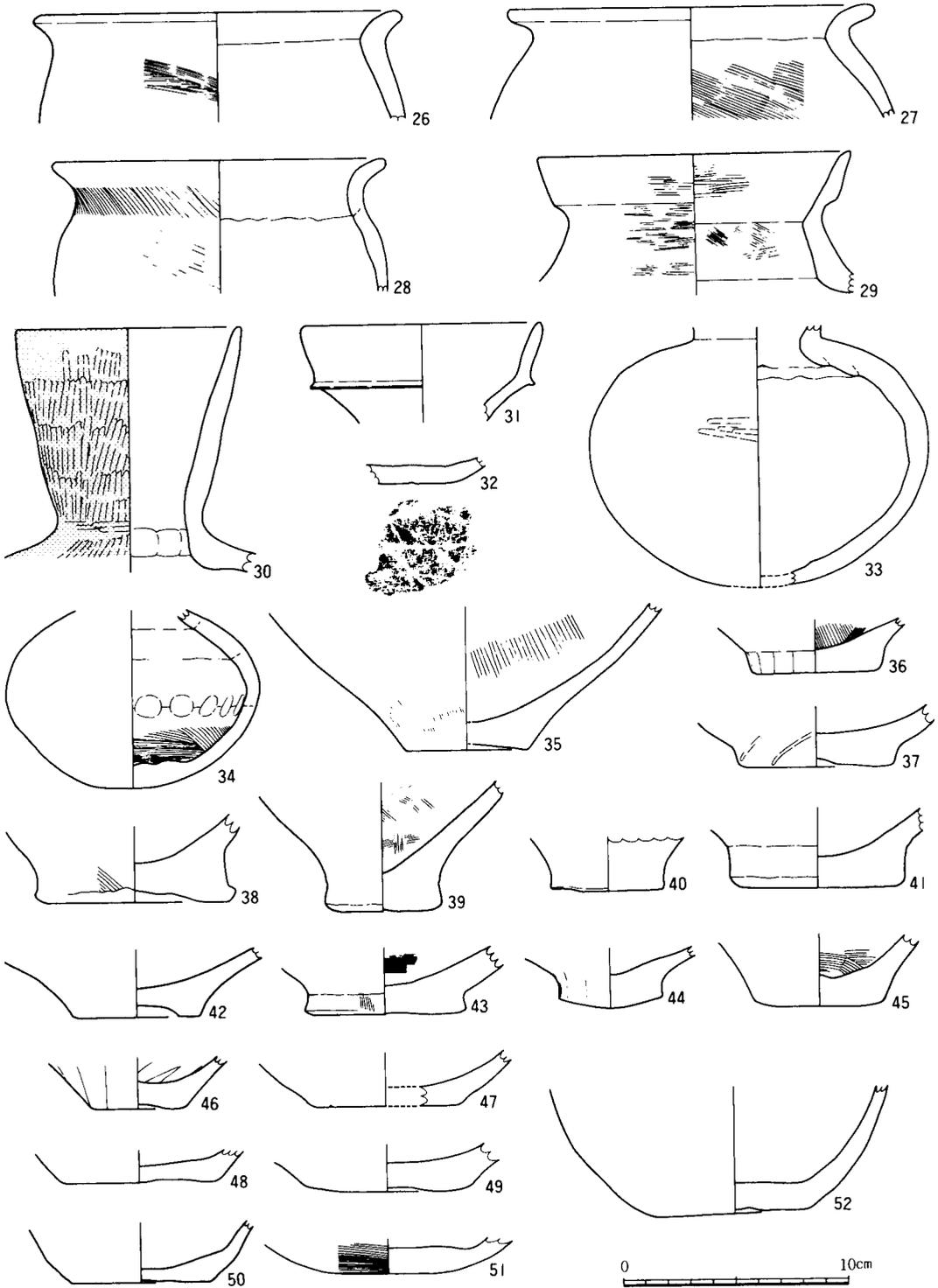
調査区南東隅のF・E-4区(第1畝溝群)、南西隅のF・E-7・8区(第2畝溝群)、中央部のM-3区(第3畝溝群)、M・N-3・4区(第4畝溝群)、N-3・4区(第5畝溝群)で42条の畝溝が検出された。遺構の規模は幅が20~30cm、長さ7~9m、深さ約5cmを測り、断面形態は浅いU字形をなす。第1畝溝群は4条の溝からなり主軸はN-46°-Wをさす。溝間の距離は1mを測る。覆土は暗灰褐色粘質土を呈す。第2畝溝群は北側で5条、南側で4条検出され、主軸はN-25°-Wをさす。溝間の距離は約1mを測る。遺構は砂層面を切って掘り込まれ、覆土は暗灰褐色粘質土を呈す。第3畝溝群は7条の溝からなり主軸はN-87°-Eをさす。溝間の距離は0.5~0.7mを測る。第4畝溝群は16条の溝からなり主軸はN-90°-Eをさす。溝間の距離は、北側が0.5~0.7mを測るが南側はかなり接する。第5畝溝群は6条の溝からなり主軸はN-86°-Eをさす。溝間の距離は約0.7mを測る。第3~5号畝溝群の覆土も灰褐色粘質土で、遺物はまったく出土しない。また溝間もしくは溝上に直径30~50cmのピットが溝に平行して整然と並んだ状態で検出された。当初は掘立柱建物の可能性も考えたが、ピットの深さがきわめて浅いことやピット間の距離が狭いことなどから作物の株か根の痕跡と考えた。遺構の明確な時期については不明だが、少なくともその主軸方位や覆土などから第1・2畝溝群と第3~5畝溝群がそれぞれほぼ同時期と考えられ、後者がやや新しいものと思われる。(越坂)



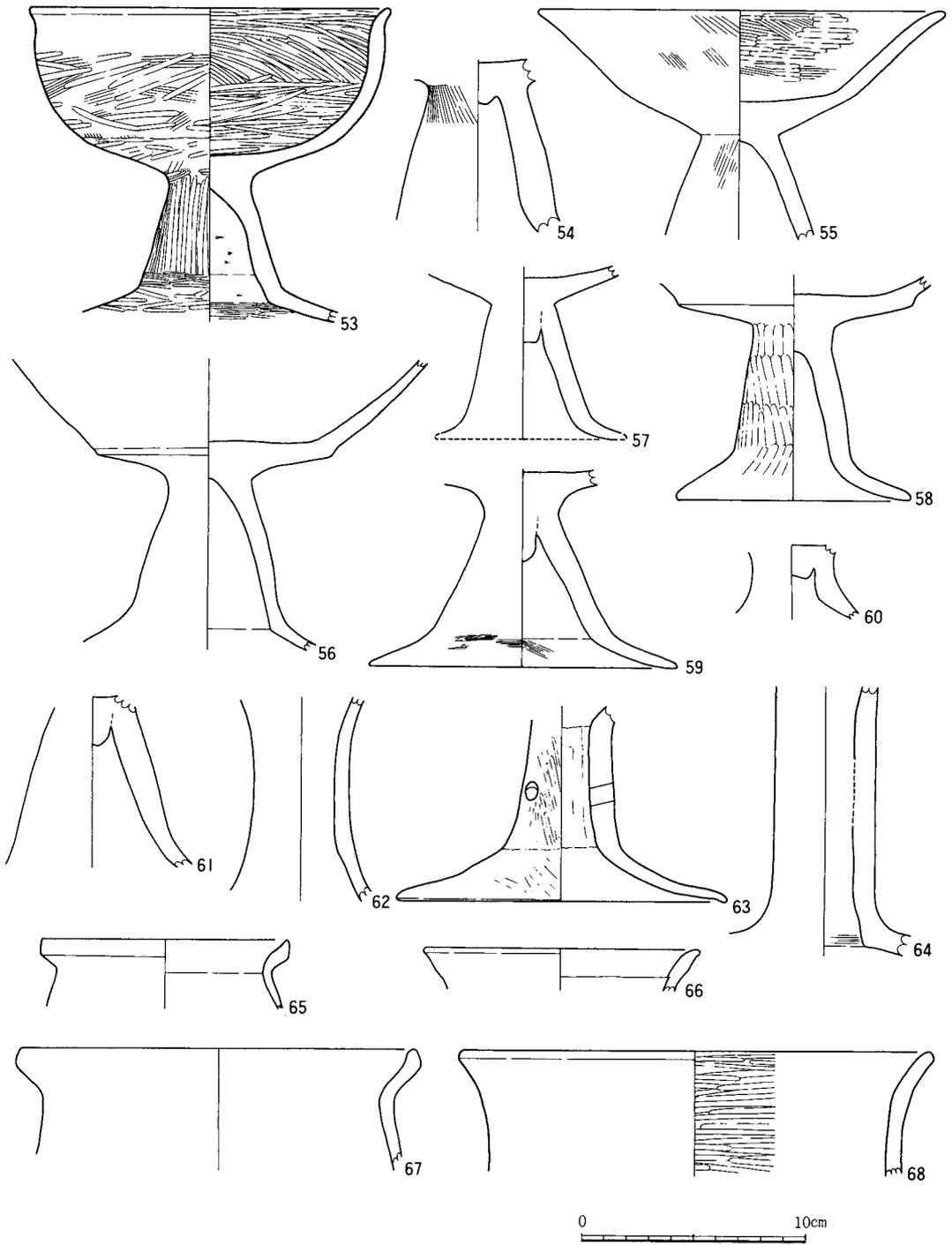
第139図 包含層出土土器実測図1 (S = 1/3)



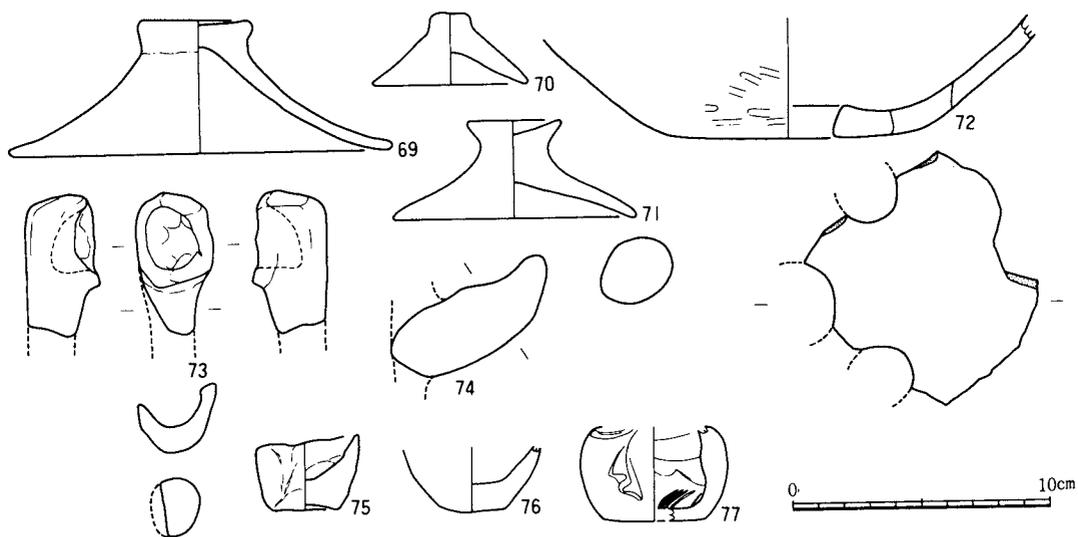
第140图 包含層出土土器实测图 2 (S = 1/3)



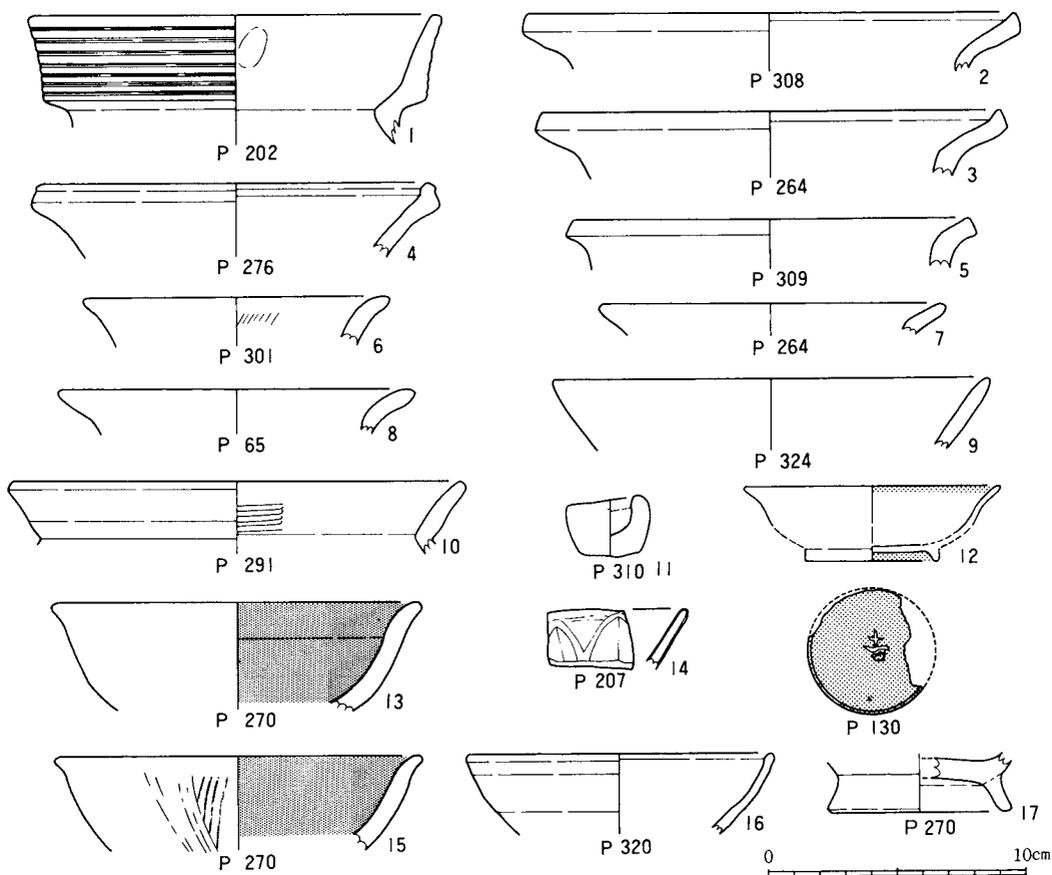
第141図 包含層出土土器実測図 3 (S=1/3)



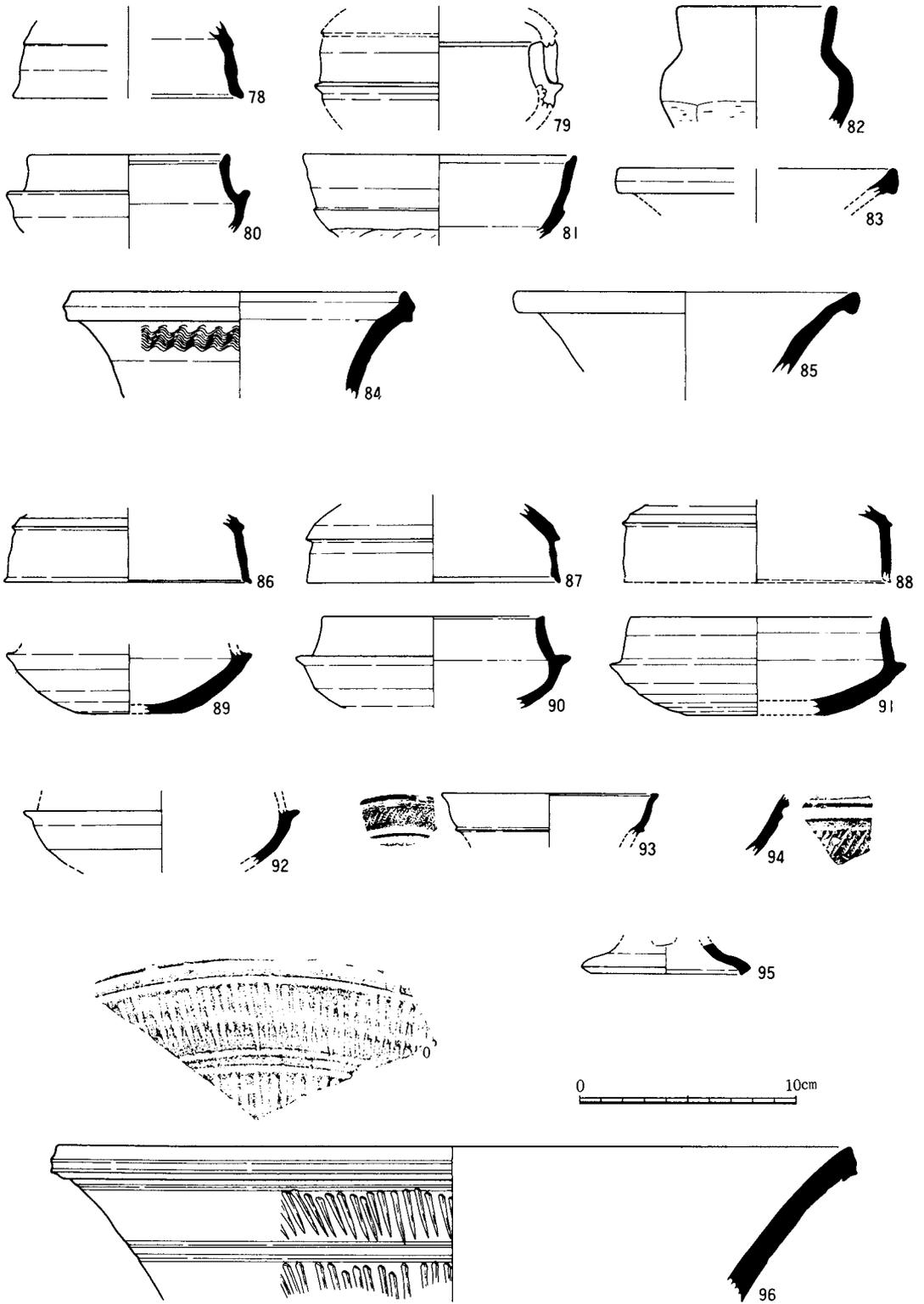
第142图 包含層出土土器实测图 4 (S=1/3)



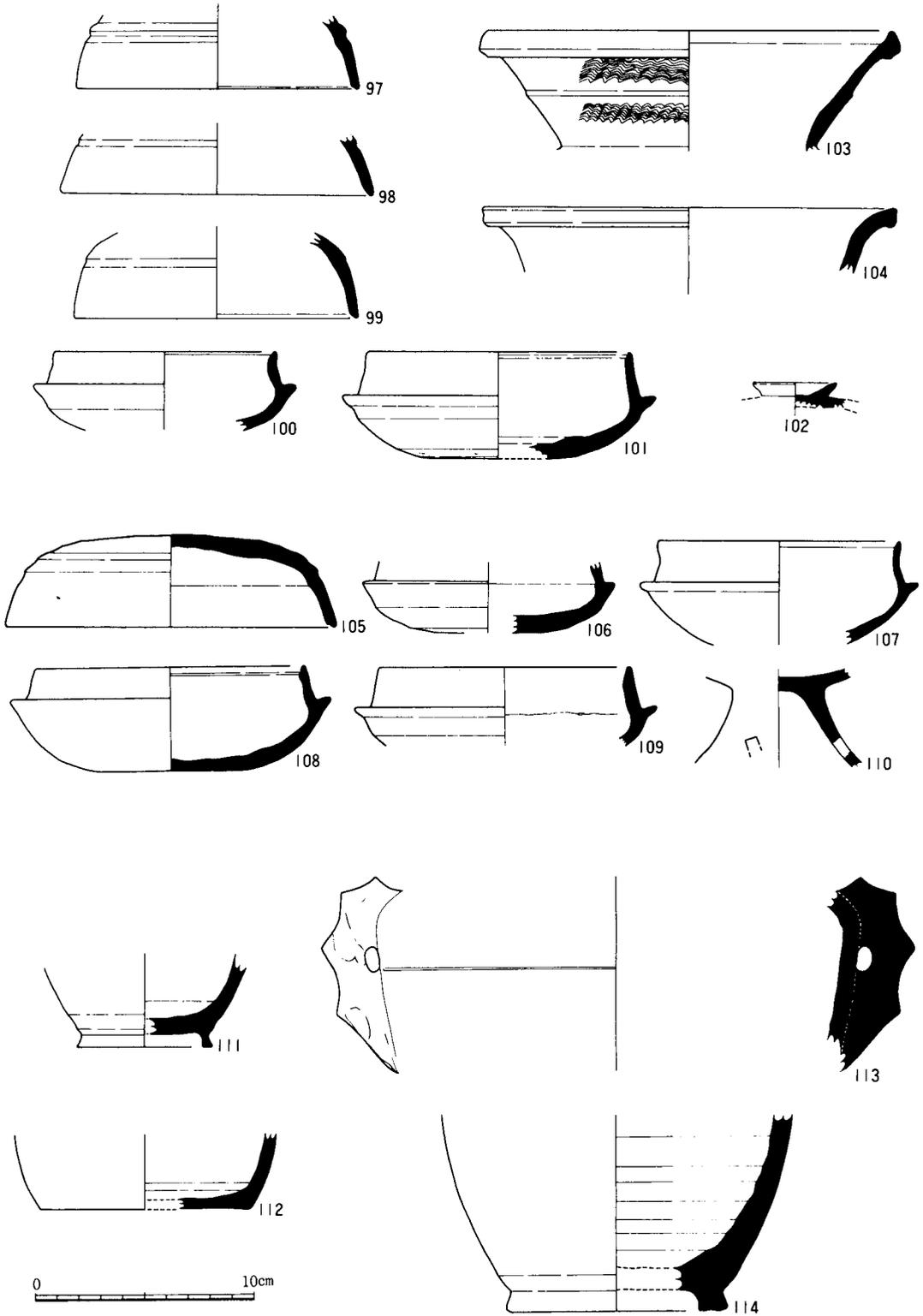
第143図 包含層出土土器実測図 (S=1/3)



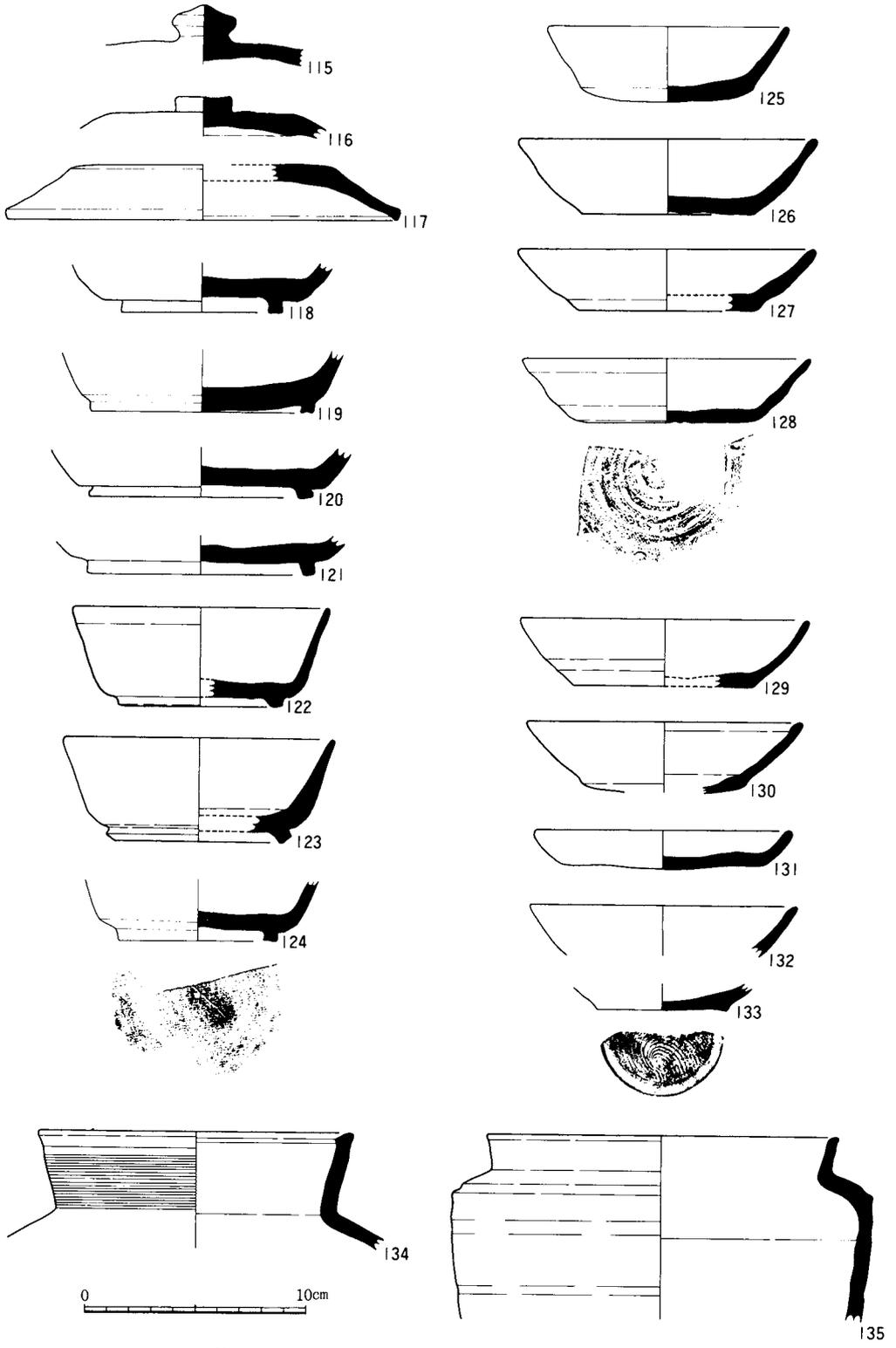
第144図 ビット出土遺物実測図 (S=1/3)



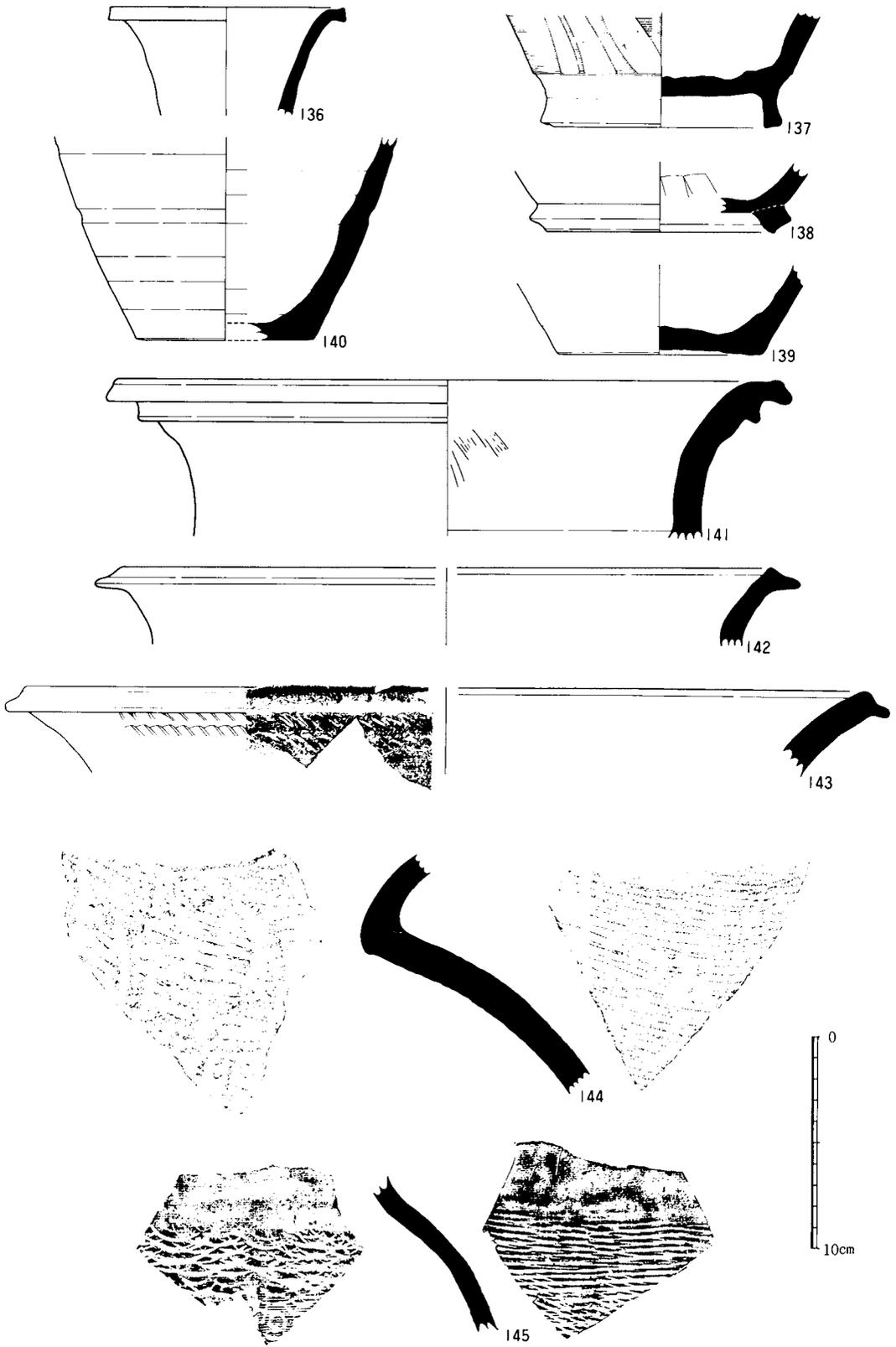
第145图 包含層出土土器実測図6 (S=1/3)(A群:78~85、B群:86~91、C群:92~95、D群:96)



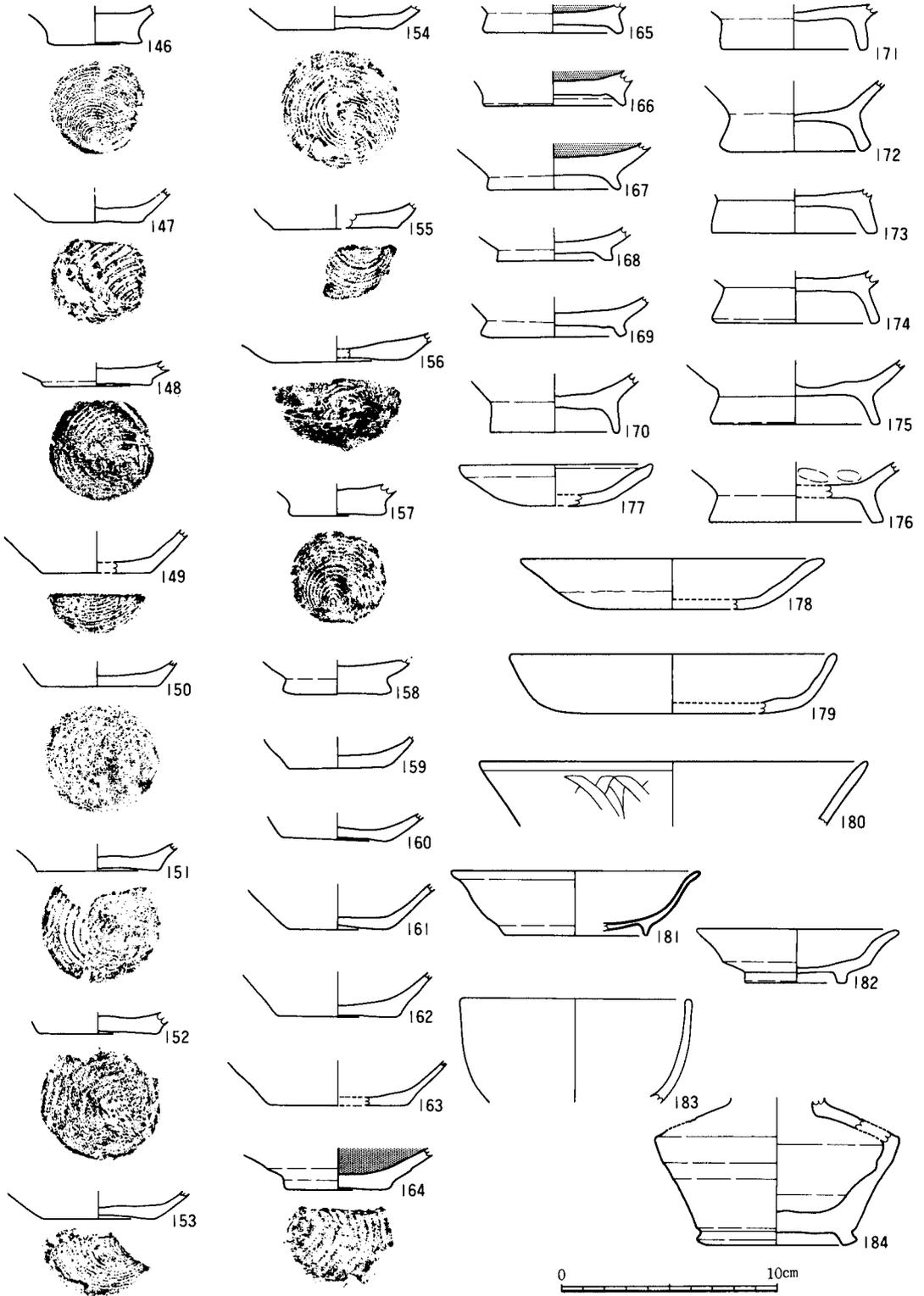
第146図 包含層出土土器実測図 7 (S=1/2)(E群:97~104、古墳時代不明:105~110、G群:111~114)



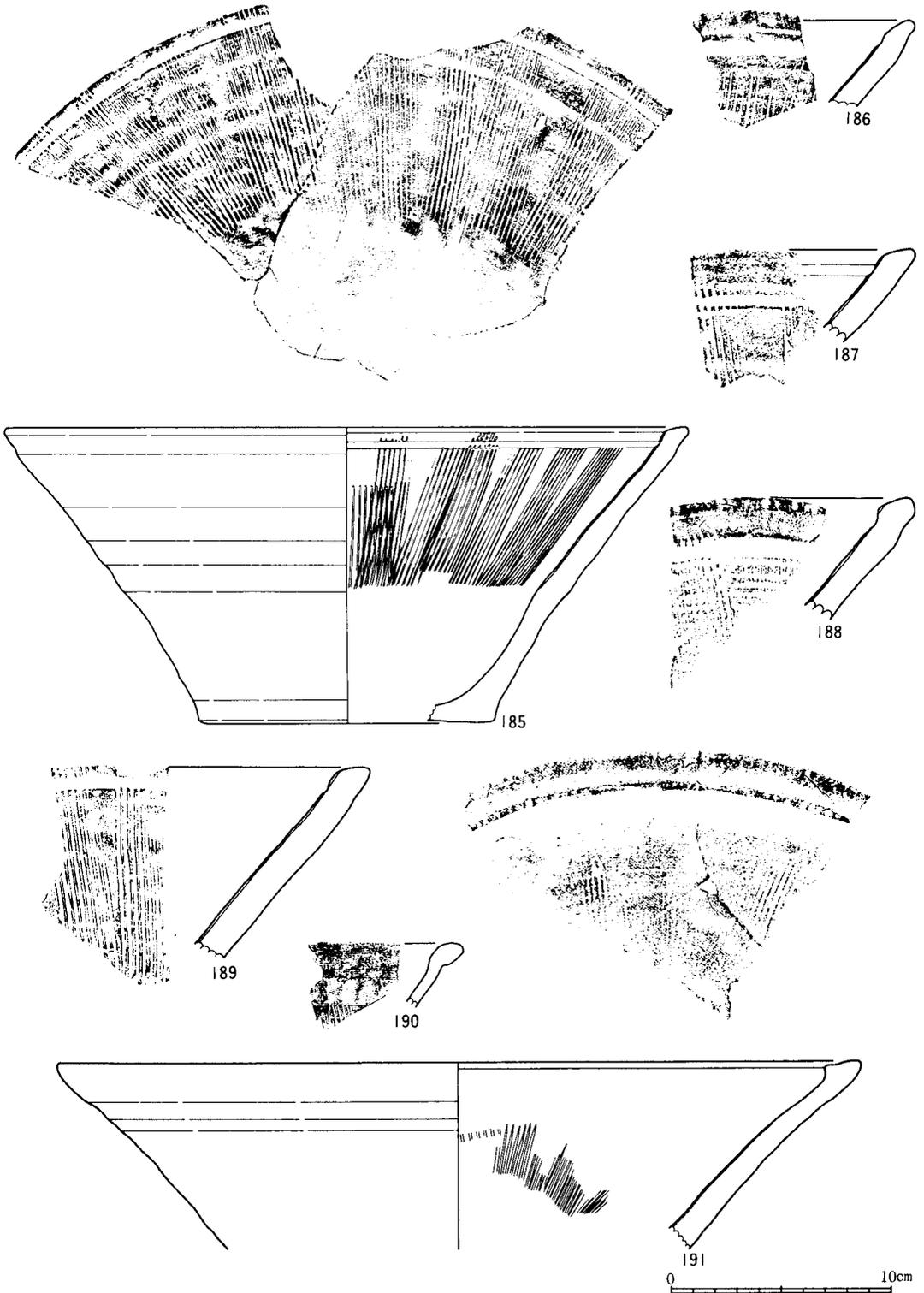
第147图 包含層出土土器实测图 8 (F群) (S=1/3)



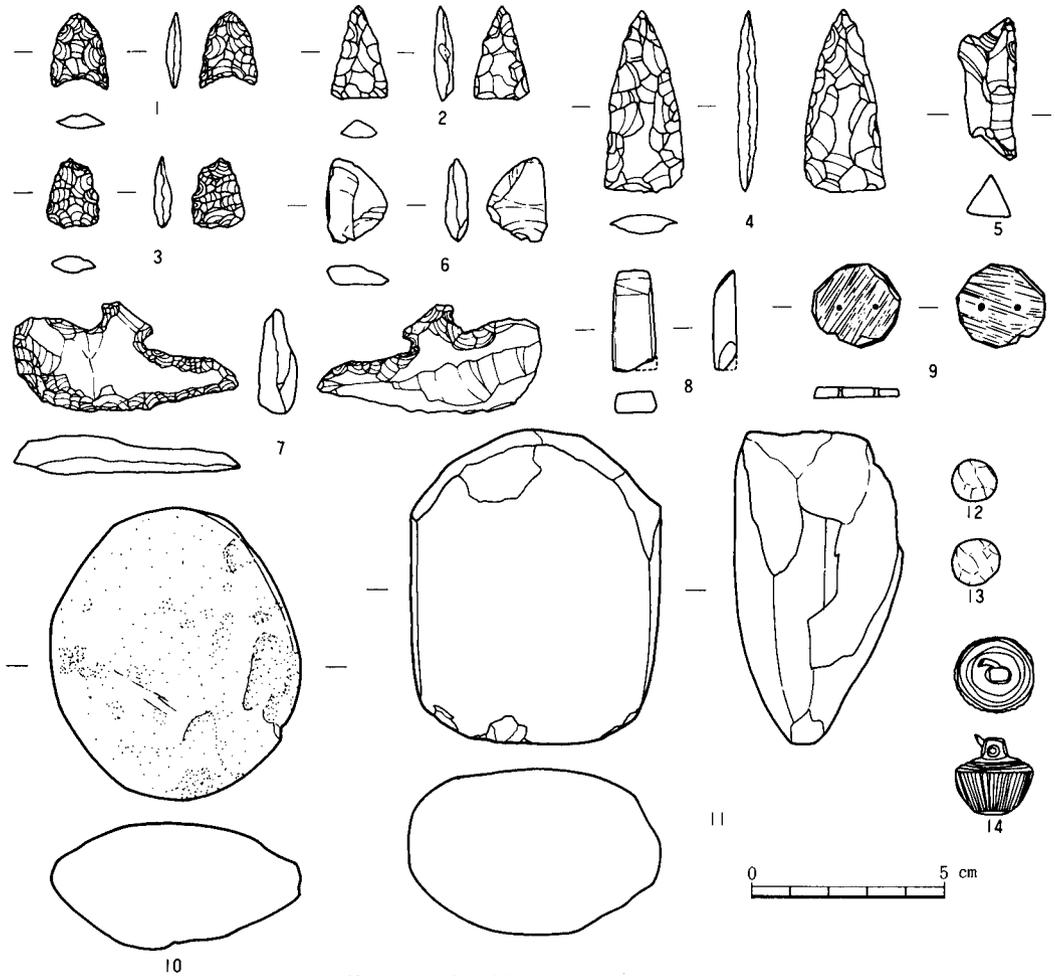
第148図 包含層出土土器実測図 9 (S = 1/2) (F群)



第149图 包含層出土土器实测图 10 (S = 1/3)



第150図 包含層出土土器実測図 11 (S = 1/3 185は S = 1/4)



第151図 包含層出土遺物実測図 (S = 1/2)

第3節 まとめ (弥生時代終末～古墳時代の竪穴住居の変遷)

竹生野遺跡第2次調査の結果、18棟の竪穴住居が検出された。第1次調査分を含めると21棟の竪穴住居が竹生野の台地上で検出されたことになる。竪穴住居は弥生時代終末の月影式土器並行期に出現するが、本遺跡の北に隣接する宿向山遺跡や宿東山遺跡では法仏式土器並行期より竪穴住居がまとまって出現し、宿向山遺跡のものがやや古い。本遺跡においても当該期には大型土坑等の遺構が検出される。古墳時代初頭には3棟の竪穴住居が検出され、北野編年第4段階〔北野 1986〕に比定される。この後竪穴住居は一時途絶えるが(ただし古府クルビ式土器並行期には土坑1基が検出される)、高島式土器並行期には2棟が検出され、その後再び途絶える。次に竪穴住居が現れるのは須恵器を伴う古墳時代の後段階で、TK23・ON46を伴う竪穴住居が3棟、TK47を伴うもの1棟、MT15・TK10を伴うもの2棟、TK209を伴うもの1棟が検出された。このように時期の明確な竪穴住居と土坑出土の遺物から弥生時代終末～古墳時代の竹生野遺跡を次の10期に区分した。

(1) 竹生野第Ⅰ期

法仏式土器並行期で北野編年第1段階に比定される。遺構は調査区の南端で検出された大型土坑(第12号土坑)1基のみであるが、当該期には先述のように隣接する宿向山遺跡や、宿東山遺跡で集落が営まれている。なおこの大型土坑については第6章第2節の三浦純夫氏の論考を参照されたい。

(2) 竹生野第Ⅱ期

月影Ⅰ式土器並行期で北野編年第2段階に比定される。本遺跡第1次調査で検出された大型土坑群の大半が相当するが、第2次調査では当該期の遺構はまったく検出されなかった。

(3) 竹生野第Ⅲ期

月影Ⅱ式土器並行期で北野編年第3段階に比定される。第1次調査では、大型土坑の一部と第3号竪穴住居が検出された。第2次調査でも第7号竪穴住居や第67号土坑が調査区のほぼ中央で検出された。第7号竪穴住居は一辺約6.5mの隅円方形プランを呈し、周溝と長方形2段掘りの土坑を伴う。

(4) 竹生野第Ⅳ期

本時期より古墳時代に入り、北野編年第4段階に比定される。当該期は土器の器種構成が大きく変化する時期で、外来系土器が出現する。[北野 1986]。本遺跡においても調査区中央部において第2・11・21号竪穴住居と調査区南端で第11号土坑が検出された。竪穴住居は3棟とも規模・形態は異なる。第2号竪穴住居はかなりの破壊を受けているが、一辺が約4.7mの方形プランを呈し周溝を伴う。第11号竪穴住居は一辺約7.2mの隅円方形プランを呈し、周溝を伴う。また遺構のほぼ中央に2段掘りの土坑を、北辺にベッド状遺構を有する。第2・11号竪穴住居はほぼ同じ主軸方向をさす。第21号竪穴住居は一辺約3mの方形プランを呈し、本遺跡で最小規模の竪穴住居である。周溝を伴うが主柱穴は確認されなかった。また当該期には宿向山遺跡においても竪穴住居がまとまって検出されている。

(5) 竹生野第Ⅴ期

古府クルビ式土器並行期。遺構は調査区の北端で検出された第59号土坑の1基のみで、当該期の竪穴住居は検出されなかった。

(6) 竹生野第Ⅵ期

高畠式土器並行期で、調査区の北側と中央部で第6・8号竪穴住居が検出された。第6号竪穴住居は比較的大型で1辺約7mの方形プランを呈する。第8号竪穴住居は6.5m×5.5mの長方形プランを呈す。いずれも周溝と長方形2段掘りの土坑を伴う。

(7) 竹生野第Ⅶ期

宮地式土器並行期で須恵器はTK23、ON46を伴出する。第1次調査では第1・2号竪穴住居が検出された。また、第2次調査でも調査区の中央部で第1・5・13号竪穴住居が、調査区の南西隅で第26号土坑が検出されている。第1・5号竪穴住居は一辺約5.5mの方形のプランを呈し、周溝を伴う。主軸方向はほぼ同じ方位をさす。

(8) 竹生野第Ⅷ期

須恵器のTK47並行期で、調査区中央部東端で第15号竪穴住居が検出されたにすぎない。またこの竪穴住居についてもかなりの破壊を受けており詳細は不明。

(9) 竹生野第Ⅸ期

須恵器のMT15・TK10並行期で、調査区中央部の東西両端で検出された第9〔古・新〕・14号堅穴住居が検出された。第9号〔新〕堅穴住居は一辺が約8mの方形プランを呈し本遺跡最大の規模を誇る。周溝と長方形2段掘りの土坑を伴う。第15号堅穴住居は1辺が約5.5mの方形プランを呈し、周溝を伴う。

(10) 竹生野第Ⅹ期

須恵器のTK209並行期で、調査区中央部西端で第10号堅穴住居が検出された。1辺が約7mの隅円方形プランを呈し、周溝を伴う。

本遺跡においては古墳時代初頭の竹生野第Ⅳ期と古墳時代後段階の竹生野第Ⅶ期の2時期に盛期を迎える。一方堅穴住居については、長方形2段掘り土坑を伴うものが多い(第1・3・6・7・8・9〔新〕・11号堅穴住居)。この種の土坑については従来特殊ピットと呼ばれ、攻玉用工作ピット、祭祀施設などと考えられてきた〔市堀 1983〕。しかし、本遺跡をはじめとする末森山山麓の堅穴住居には、この種のピットは普遍的に存在する。また特にこれらの遺跡で玉作を専門的にやってきたという証拠には乏しく、祭祀施設にしても遺構の数が多すぎるなどこの遺構の機能については、貯蔵穴説などを含めて再考を要す。

なお末筆ではあるが、本稿の執筆に際して数多くの方々や関係諸機関から有益なご教示を得ることができ、これらの方々については例言や調査の経緯で紹介させていただくとともに厚くお礼を申し上げます。この他、石川県立埋蔵文化財センター職員からも多くの助言を得ることができた。特に田嶋明人、三浦純夫、栃木英道、北野博司の各氏からは弥生～古墳時代の土器について、岡本恭一、木立雅朗の両氏からは須恵器について、平田天秋、藤田邦雄、垣内光次郎の各氏からは中・近世の遺物について、また山本直人、本田秀生、松山和彦の各氏からは石器についてそれぞれ助言を得ることができた。これらの方々の友情に深く感謝いたします。(越坂)

註

- (1) 畝溝とは幅20～30cm、長さ7～9m程度の断面U字形の素掘りの小溝で、10数条が並行して検出された。畑の畝間の溝とする説や水田耕作に伴うものとする説などあるが、本遺跡では遺構覆土や遺構面の土の感じから前説をとりたい。時期についても奈良・平安時代以降、近世までのいずれかの時期に属するものと思われるが、本稿では近世の遺構として扱う。
- (2) 『宿東山遺跡』(石川県立埋蔵文化財センター 1987)「第3章 遺構と遺物 第1節 旧石器時代」(本田秀生)の第17図14(32頁)をさす。
- (3) 石鏃の分類については鈴木道之助著『図録 石器の基礎知識 Ⅲ』縄文(柏書房 1981)の分類に従った。
- (4) 山本直人氏の御教示による。名古屋大学助教渡辺誠氏は「飛騨白川村のトチムキ石」(藤井祐介君追悼記念考古学論叢、1980)で飛騨地方の民俗例から磨石・敲石等の機能を考察されている。
- (5) ベッドもしくはベッド状遺構と呼び、寝台として使用されたものと思われる。弥生時代後期から古墳時代前期にかけて九州地方から中国地方にかけて分布する(宮本長二郎 「住居と倉庫」『弥生文化の研究』7 1986 雄山閣)。
- (6) 森 浩一氏の提言に従い、「陶器」とは呼ばない。
- (7) 現在、富山県で3点、福井県で5点の出土例が知られる(『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 附篇 国立歴史民俗博物館 1985 他)
- (8) これらの「使用痕」は、硯や転用硯に認められるほど極端になめらかでなく、墨痕もない転用硯であったことを示すのではなく、「食器」としての使用にかかわる痕跡であろう。
- (9) 四柳嘉章氏の御教示による。

第5章 南吉田葛山遺跡の調査

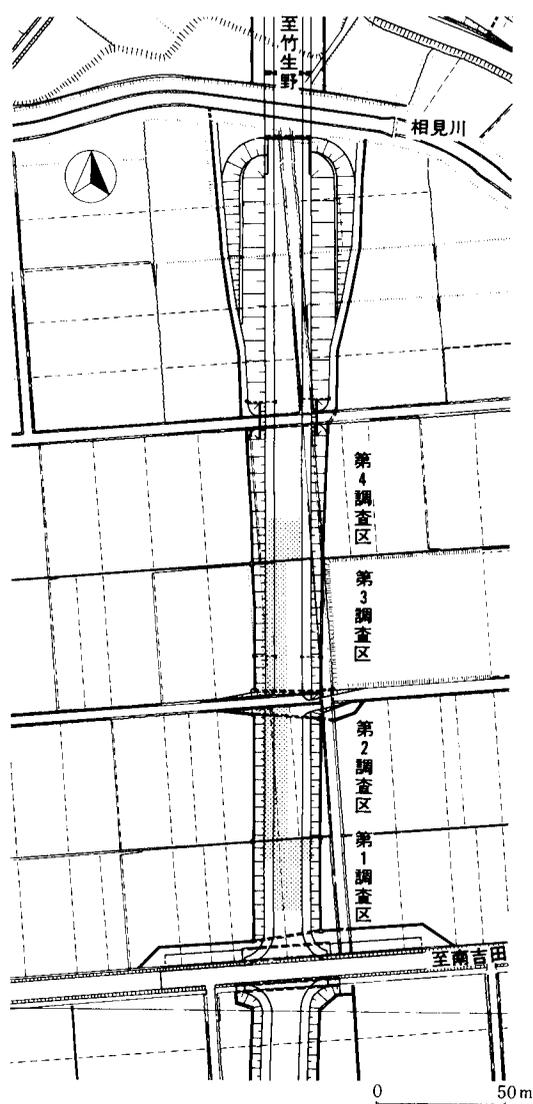
第1節 概要

南吉田葛山遺跡の発掘調査は、去る昭和54年度に建設省北陸地方建設局金沢工事事務所長からの依頼を受け、当埋蔵文化財センターが実施した『国道I59号線押水バイパス建設事業に係る埋蔵文化財分布調査』で確認された、約3,000㎡を対象としたものである。ただ、遺跡が、押水町内でも有数の暴れ川である、宝達・相見両河川によって形成された沖積平野に位置することから、分布調査で包含層の確認されなかった部分をも一部含めて発掘することにした。現地調査は昭和56年6月18日より開始した。

調査にあたっては、既設の農道、排水路等を配慮し、調査区を4区分することにした（第152図参照）。名称は南側からそれぞれ第1調査区、第2調査区、第3調査区、第4調査区である。また、各調査区内にはそれぞれ5mメッシュのグリッドを組み、面的調査に対応することにした。

調査は、まず第1調査区から開始し、分布調査で確認したレベルまで掘り下げて遺構の有無を再検した。その結果、河川の氾濫によって堆積したと考えられるきめの細かい砂礫層が一面に広がっていることを確認すると共に、摩滅した数点の土器片を発見した。この砂礫層の広がり第2調査区にも及んでおり、第2調査区の中央付近では特に砂礫粒が粗くなっていた。ただ、部分的に砂礫層を覆うかたちで暗茶褐色粘砂土層も堆積しており、この土層から漆器碗や笹塔婆などの遺物が出土したのである。しかし、精査の結果遺構は検出されず、これらの遺物は、河川の氾濫等によって二次堆積したものであるとの結論に至ったのである。

そこで再度第1調査区の砂礫層を掘り抜き、生活面を確認するためのトレンチを設定し、調査を継続したのである。その結果、地表下約2m地点で地山面を確認すると同時に南北向する溝状遺構を検出したのである。このため、予定を大幅に変更し、第1調査区の遺構面までを面



第152図 南吉田葛山遺跡調査区割図 (S=1/3,000)

的に掘り下げる作業に着手したのである。しかし、調査区外で排土場所が確保されないという状況から止むなく調査面積を縮小し、その範囲内で最大限の成果をあげるよう努力した。

第1調査区で検出した遺構は、8条の溝状遺構と数個のピットで、住居跡等は検出されなかった。ただ、溝内から出土した数点の土器片によって、これらの溝が弥生時代終末から古墳時代前期頃に造営されたものであることが判明したのである。これによって、竹生野遺跡を始めとする周辺の該期の遺跡とも関連させて考えられることになったのである。

第1調査区での生活面確認によって、第2調査区でも一部掘り下げを実施した。しかし、第1調査区からの遺構の伸びもなく、また新たな遺構の確認も出来なかったことから、全面を掘り下げる作業は断念することにした。ただ地山面が第3調査区の方角（北）に行くに従って高まることが確認出来たことで、当地区が旧地形においては傾斜地であった可能性が指摘されたのである。

第3調査区では、第2調査区で確認した地山面の状況を把握すると同時に、遺構の有無を確認した。第2調査区同様、排土場所確保の為、西側半分の調査であった。地山面の傾斜は第2調査区に引き続き緩やかではあるが高まっており、第4調査区に接する辺りでは、地表下1m程度となっている。ただ部分的に土器の小片が混在する落ち込みが検出され、注意をはらったが、堆積土中からの切り込みであり、自然流路的なものと考えて差しつかえないものと判断された。その他に遺構は確認されなかった。

第4調査区は、調査区北端に位置する区域で、分布調査時の報告では包含層の確認されなかった地区である。しかし、その報文には、過去の圃場整理の際に削平を受けた可能性が指摘されていることから、遺構が残存するか否かを確認することにしたのである。調査の結果、溝状遺構が遺存することを確認。また、その覆土上層及びその周辺から、勾玉を初め横盆や甑等が出土したのである。溝の両端は調査区外へ伸びていることから、その全様は不明だが、当溝が重要な意義を有したものであることは間違いなからう。また、当溝の北側で炭化物が帯状に連なり、かつほぼ方形に巡る遺構(?)を検出したが詳細は不明である。

以上、沖積平野での発掘の難しさを痛感した調査は、昭和56年10月22日をもって現地作業を無事終了した。

第2節 遺構と遺物

遺 構

検出した遺構は、大溝（第7号溝）を含む9条の溝状遺構と数個のピットである。うち、第4調査区で検出した第9号溝の他は全て第1調査区での検出遺構である。第2、第3調査区からは遺構は検出されなかった。

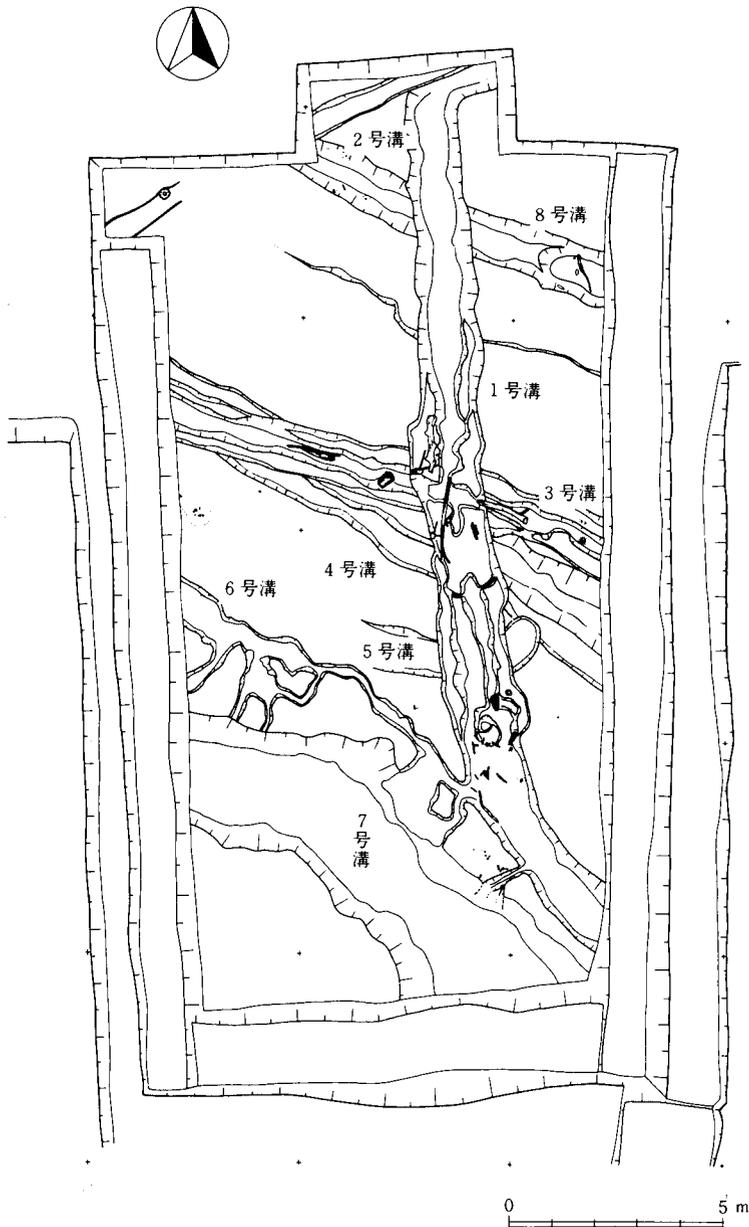
第1号溝（第153図、図版77）

第1調査区での遺構面を確認するきっかけとなった溝である。地表下2.2mで検出した。長さ21m以上、上幅1.2m～1.7m、深さ35～40cmを測る。断面は不整な皿状を呈す。覆土の下層には流水溝特有の砂質土層が、また上層には暗茶褐色泥炭層が堆積する。第1調査区のほぼ中央を南

北に伸び、調査区の北端で東向、南端では緩やかに南東向し、それぞれ調査区へ至る。当溝は5条の溝との切り合い(重複)関係を有する点で、各溝の機能時期限定に大きな成果を与えてくれたのである。溝内からは高坏脚部片1点と土錘1点の他、自然木片が若干出土した。

第2号溝 (第153図、図版78)

第1調査区の北西隅で検出。南西から北東向する、長さ9.5m以上、上幅60~70cm、深さ10~15cm程度の浅い溝である。北東端で1号溝を切ることから、第1調査区で検出された溝の中では最も新しい時期に造営されたものであることが判明した。覆土は暗茶褐色粘砂で、1号溝同様泥炭を含む。溝内からの出土遺物はない。



第153図 第1調査区遺構配置図 (S = 1/180)

第3号溝（第153図、図版77）

第1調査区のはぼ中央を東西に走る溝である。中央付近で1号溝に直交するかたちで切られることと、3号溝自体が4号溝に一部重複して造営されていることなどから、最低3期に渡る溝の造営期が存在したことを、この時点で確認したのである。3号溝は長さ11m以上、上幅1.1～1.4m、深さ17～22cmで、断面は浅い皿状を呈する。覆土は暗茶褐色粘質土と砂質土とが交互に堆積しており、埋没時の状況を窺わせている。溝内からは器台脚部片1点と杭を初めとする木片が多量に出土した。

第4号溝（第153図、図版77）

第1調査区のはぼ中央を南東から北西にかけてのびる溝である。一部重複するかたちで3号溝に切れ、また、直交するかたちで1号溝に切られる状況から、第1調査区で検出された遺構のうちでも最も古い時期に造営されたものであることが判明した。長さ11.5m以上、上幅1.5～2m、深さ20cm程度の浅い溝で、断面は不整な皿状を呈する。覆土は上層に暗茶褐色粘質土が、下層には砂質土が堆積しており、3号溝同様、木片を多量に包含する。

第5号溝（第153図）

第1調査区のはぼ中央を東西に走る溝であるが、深さが3～10cm程度と浅く、そのために西端では不明瞭となる。削平を受けている可能性が考えられる。長さ4.5m以上、上幅1.2m。1号溝に直交するかたちで切られる。断面は浅い皿状。覆土は暗茶褐色粘砂の単一層。溝内からの出土遺物はない。

第6号溝（第153図、図版78）

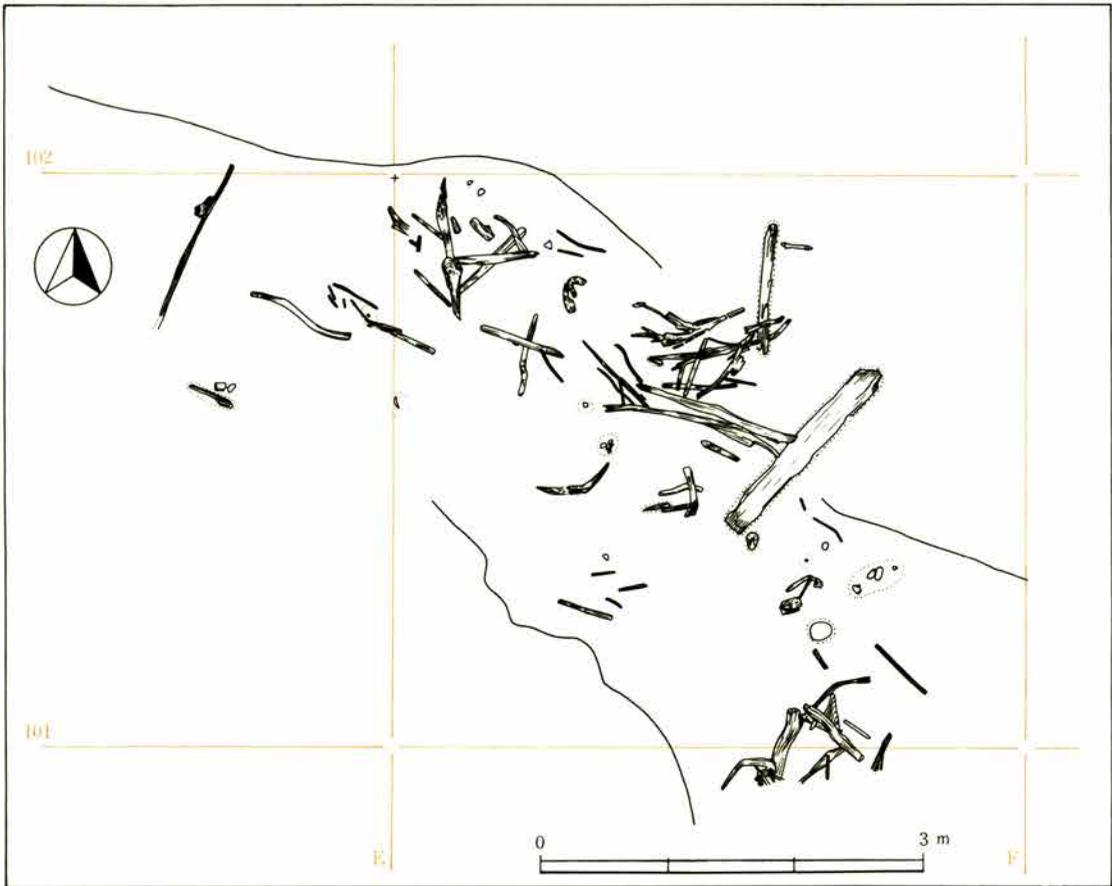
第1調査区の南半を南東から北西向する不整な溝状遺構である。南東端で1号溝と接するが、切り合いによる前後関係を明確にすることはできなかった。また、一部7号溝（大溝）とも接するが、前後関係については不明である。6号溝は長さ8m以上、上幅20cm～1m、深さ5～10cmと浅く、その形状から人為的なものかどうかには疑問は残るが、一応溝状遺構と称することにしたものである。覆土は暗茶褐色粘砂で、溝内からの出土遺物はない。

第7号溝（大溝）（第154図、図版78）

第1号調査区南東端から緩やかにカーブし北西向する、長さ10m以上、上幅3～3.5m、深さ55～70cmの溝で、その規模から大溝と称することにしたものである。覆土層の上層には濁暗茶灰色粘質土が堆積。多量の木片を初め、炭化物も多く混在する。以下泥炭を含む土層や砂質土層等が堆積しており、最下層には暗灰色の砂層が堆積していた。この最下層の砂層から弥生時代終末頃の甕の口縁片が出土したことから、当溝の造営時期が推察されたのである。また、当溝と1号溝及び6号溝が近接する付近で、多量の木材が集中的に出土していることや、加工された板材の出土、それに7号溝底で検出されたピット等の状況から、この地点に取水施設、あるいはそれに類する施設が存在した可能性も指摘されるのである。

第8号溝（第153図、図版78）

第1調査区北半で検出した、東西に走る溝である。3号溝とほぼ平行する。中央付近で1号溝に直交するかたちで切られる。長さ8m以上、上幅90cm～1.3m、深さ20～25cm。東端で一部深

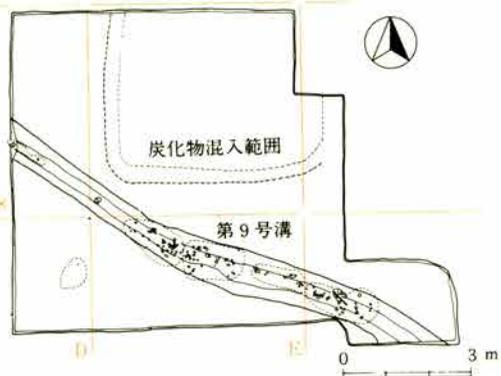


第154図 第7号溝遺物出土状況平面実測図 (S = 1/50)

さ50cmを測る落ち込みが検出された。覆土は暗茶褐色粘砂と泥炭層で、最下層に若干の砂の堆積が認められた。溝内からは少量の木片と土器の小片が出土している。

第9号溝 (第155図、図版79)

第4調査区、D-127・128グリッドで検出した、南東から北西向する溝で、両端はそれぞれC-128グリッド、E-127グリッドを經由し、ほぼ直線的に調査区外に伸びる。当初、遺物が帯状に出土したものの、遺構の輪郭がつかめず、溝の存在を確認することができなかったが、遺物取り上げ後に精査した結果、漸く検出したものである。溝は長さ10m以上、上幅65cm~1.1m、深さ20cm~30cm。覆土は暗青灰色粘質土の単一層で、地山土とほぼ同一土層であることから、意識的に埋められた可能性が強い。溝内からの出土遺物はないが、覆土上面からは、多量の土師器・須恵器の破片が出土しており、ほぼ溝に付く時期の遺物と考えて大過なからう。また、これらの遺物に混り、横釜・勾玉等が出土していることは、溝の性格を考えるうえで非常に興味深い。また、当溝の北側で検出された、方形に巡る炭化物含有部分¹²⁹が、住居跡の壁溝の残存部となる可能性もあるが、ほとんど深さのない状況から、明確にすることは出来なかった。



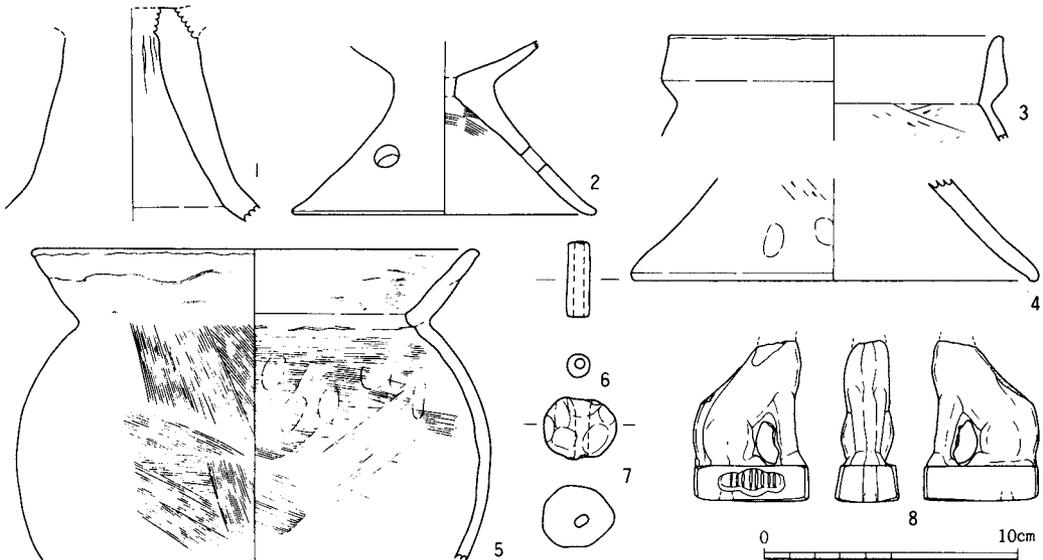
第155図 第4調査区遺構配置図 (S = 1/180)

遺物（第156図～161図、図版80～83）

今回の発掘調査で発見された遺物のほとんどは、包含層からの出土か、あるいは河川の氾濫等によって二次堆積した土層からの出土のものであり、遺構に伴って出土した例は僅かに数例である。しかし、当遺跡の時期・性格を考えるうえで貴重な遺物も含まれており、見逃がすことの出来ないものが多い。遺物の種類としては、土器・木器の他、土器品・鉄製品・玉類等、多岐に渡る。また、それぞれの遺物の時期も各期に渡っており、周辺の遺跡との関連を考えるうえでも貴重な資料を提供したといえよう。以下、各調査区ごとに分けて出土遺物を報告する。

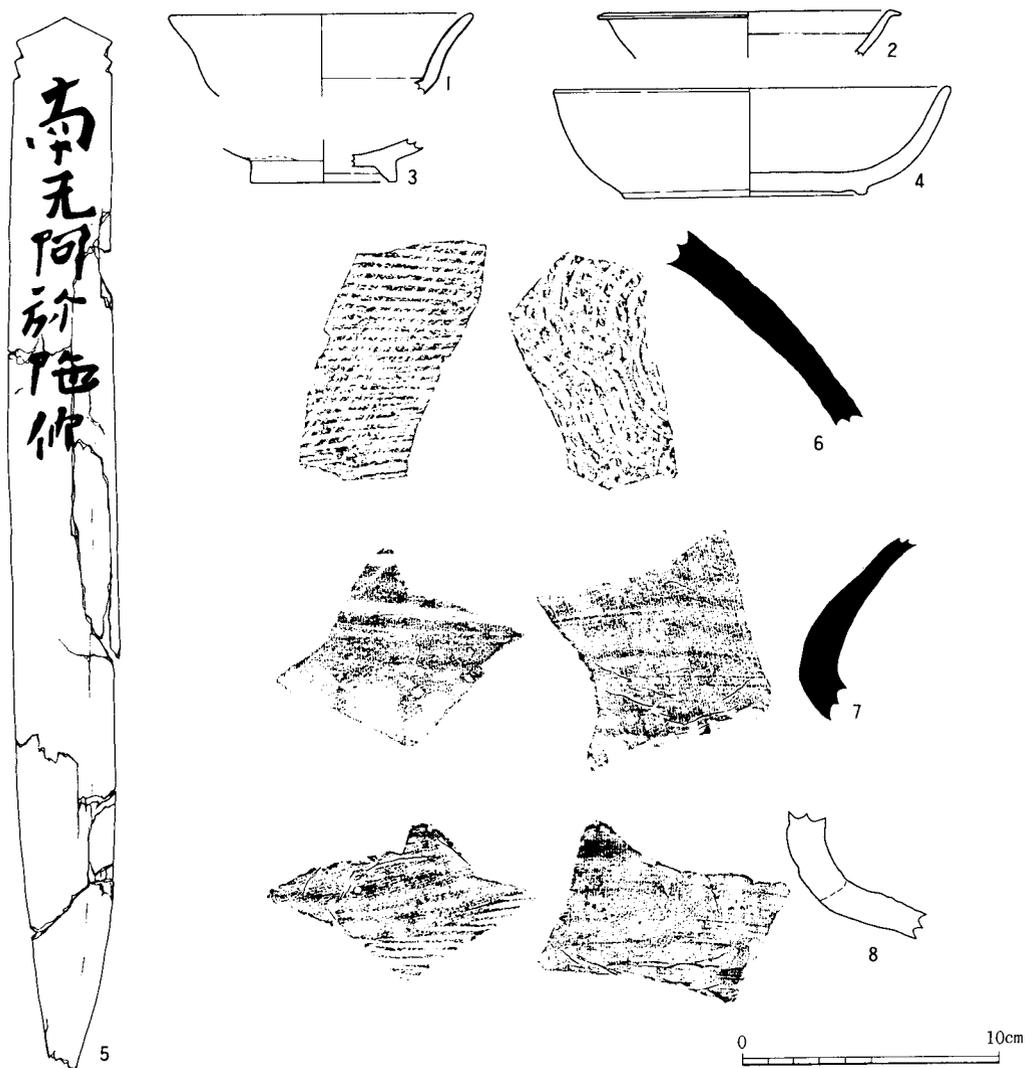
第1調査区出土遺物（第156図、図版80・81）

第1調査区から出土した遺物の中で、遺構内からの出土遺物として挙げられるものは、1～4の土器片と7の土錘、それに掲載不能となった多量の木製品（杭及び用途不明木製品等）がある。1は、第1号溝から出土した高坏の脚部片である。残存高8.3cm。磨滅が著しいために、調整等は不明だが、胎土は精選されており、内外面共にくすんだ橙色を呈する。製作技法は組み合わせ成形手法で、内面には絞り目が看取できる。2は第3号溝から出土した器台の脚部片である。底径11.8cm、残存高6.6cm。脚台部には経約1cmの透し穴が3孔穿たれている。外面の調整は摩擦により不明。ただ部分的に赤彩痕が認められる。内面はハケ調整の後ナデ調整されている。胎土には1mm～3mm程度の砂粒が若干含まれている。色調は内外面共に淡い橙色を呈する。3、4は共に第7号溝（大溝）最下層の砂層から出土したものである。3は口径12.8cm、残存高4.1cmを測る有段口縁甕形土器の口縁片である。口縁帯はナデ調整で仕上げられ、内面頸部以下はケズリである。有段口縁とは言うものの内面形状はくの字状を呈する。胎土に1mm～3mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で内外面共に黄褐色を呈する。4は底径15.8cm、残存高4cmを測る高坏か器台の脚部片である。内外面共にナデ調整されるが、外面に一部ケズリの痕跡を留める。胎土にはやや大粒の砂粒が含まれており、焼成もあまり良好とは言えない。5は第1調査区D-103



第156図 第1調査区出土遺物実測図（S = 1/3）・管玉のみ1/2

グリッド、地山直上出土の甕形土器である。口径17cm、残存高12.3cmを測る。調整は内外面共にハケで、内面には指頭圧痕を留める。胎土、焼成共に良好。外面に煤の付着が認められるが、色調は概ね黄橙色を呈している。6は、耕土直下で発見した、最大長2cm、最大幅0.6cm、内径0.25cm、重さ0.4gを測る緑色凝灰岩製の管玉である。河川の氾濫、あるいは圃場整備事業等によって二次堆積したと考えられる土層からの出土品である。7は1の高坏脚部片同様、第1号溝から出土した土錘である。最大長2.4cm、最大幅2.9cm、孔内径0.5cmを測る。灰褐色を呈し、焼成は良。指頭による調整痕を留める。8は耕土下1m前後の深さに広がる砂礫層中から出土した土製品である。この砂礫層の広がりには第2調査区にも及んでおり、河川の氾濫等によって流入堆積したものと考えられる。土製品の形状から、動物であることは理解できるが、顔の部分欠損しており、詳細は不明。型による製作と考えられ、底面に釘で固定した痕跡が認められることから、何らかの装飾に用いられたものとも考えられる。時期についても不明である。この他、第1調査区の同一砂礫層中から漆器碗の破片が出土しているが、図化不能のため割愛した。



第157図 第2調査区出土遺物実測図 (S=1/3)

第2調査区出土遺物（第157図、図版82・83）

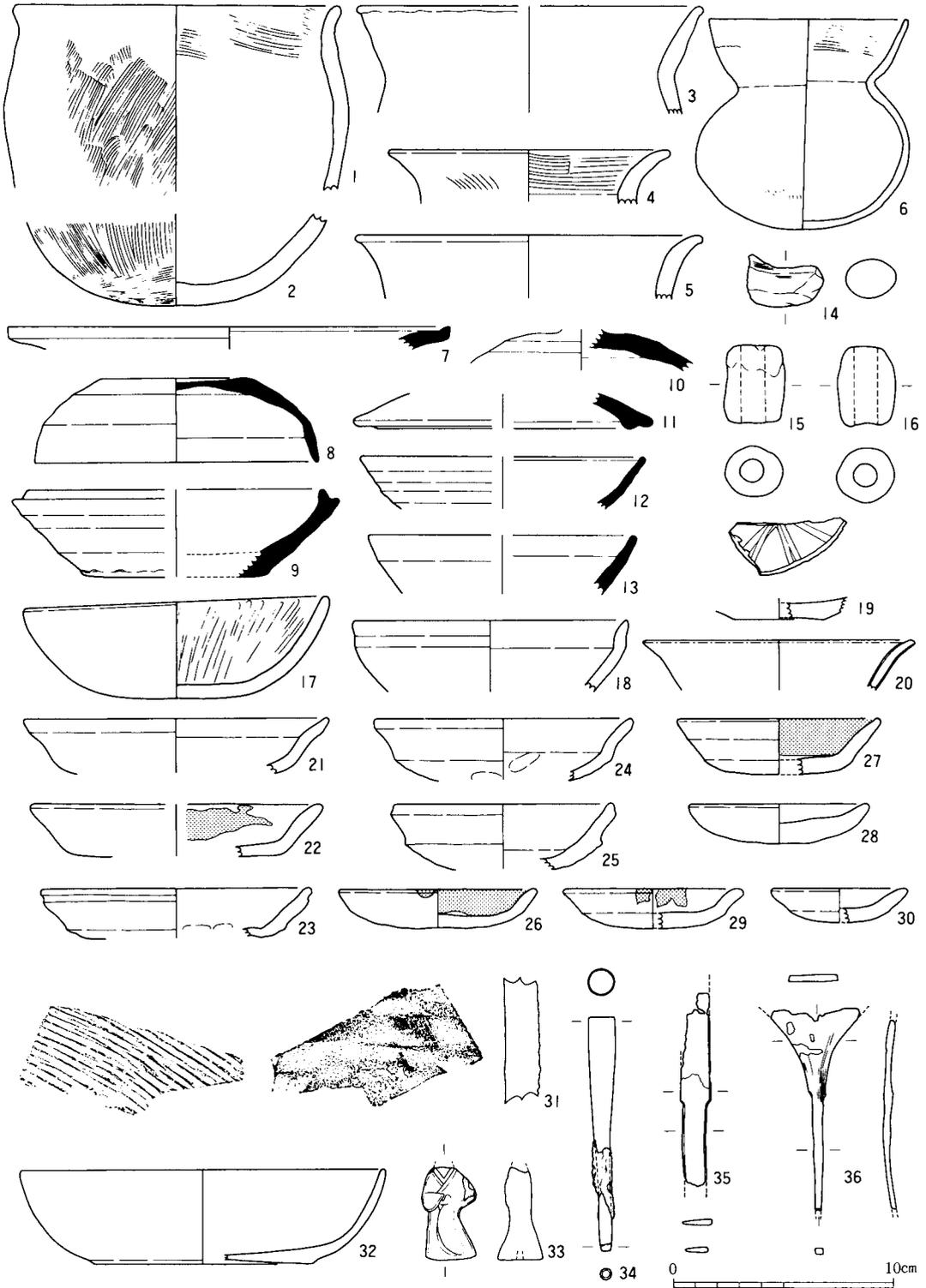
第2調査区から出土した遺物は、いずれも第1調査区で確認した砂礫層と同一レベル、同一土層出土のものである。ただ、第2調査区中央付近では砂礫粒も粗く、堆積土層も第1調査区よりも厚くなっている。また、部分的に暗茶褐色粘砂土層の広がりも認められ、主に、当土層中からの出土遺物が多かったようである。遺物には土師器の他、須恵器、青磁、白磁、珠洲焼など多種多様の土器類と、漆器椀、笹塔婆などの木製品とが認められる。ただ、土師器に関しては破片も小さく、磨滅も著しいために図化することはできなかった。

1は口径12cm、残存高4.2cmを測る青磁椀である。釉調はやや気泡含みで不透明である。内外面共に貫入が認められる。2、3は共に白磁椀で、2は口径12cm、残存高1.8cmを測る口縁片、3は底径5.8cm、残存高1.7cmを測る高台部片である。胎土、釉調共に良好で、2の外面には貫入が認められる。4は口径15.2cm、底径9.5cm、器高4.3cmを測る漆器椀である。土器に比べ遺存状態も良好で底面には削り出しによる高台が形成されている。5は残存長41cm、最大幅4.2cm、厚さ0.5cmを測る木製塔婆（笹塔婆）である。遺跡からの発掘資料としては県内初例のものであろう。名号は『南无阿弥陀佛』と判読されるが、一部不明瞭な点もある。6、7は共に第2調査区ほぼ中央の粗い砂礫層中から出土した、須恵器甕の肩部片と頸部片である。8もほぼ同一レベルの砂礫層から出土した珠洲焼き甕の頸部から肩部にかけての破片である。いずれも大型品を窺せるものである。

第3調査区出土遺物（第158図、図版80・81）

第3調査区から出土した遺物も第2調査区同様、流入堆積した土層からの出土例が大半を占める。ただ、第4調査区に近接する辺りからの出土遺物に関しては、時期的にも一定の範囲内でとえられるものが集中しており、第4調査区の出土遺物と共通する資料も多い。

1、2は同一個体と思われる土師器の甕形土器である。（いずれも第4調査区に近接する、D-125グリッドから出土したものである。）口径15cm、器高は15～16cm程度となろう。頸部の屈曲は緩く、口縁部も短い。また体部の張りも弱く、そのまま丸底の底部につながるものと考えられる。調整は外面及び口縁部内面がハケ、体部内面はナデ。体部外面には煤の付着が認められる。3～5も1同様、D-125グリッドから出土した土師器甕の口縁片である。ただ、1とは違い、いずれも口縁部の外反度の大きいものである。3は復元口径15.8cm、4は口径12.8cm、5は口径15.7cmをそれぞれ測る。6は口径9cm、器高9.8cmを測る土師器小型壺の完器である。第3調査区でもやや第2調査区寄りのD-119グリッドから出土した。器表の摩耗が著しいため調整痕は不明瞭だが、外面頸部はナデで仕上げられている。口縁内面はハケの後ナデ。体部内面はナデで、一部に指頭圧痕が認められる。胎土、焼成共に良。内外面共に淡橙褐色を呈する。7～13は須恵器の甕及び坏・蓋の破片である。8以外はいずれも小片であり、復元口径も正確さに欠ける程のものである。8は口径13cm、器高3.9cmを測る坏蓋である。天井外面に径7cm程度の面が形成されており、坏身と区別のつきにくい形態を呈する。調整は内外面共にナデ調整が施されるが、外面の天井部に近い、器高の1/4程度は回転ヘラ削りである。また、天井部にヘラ切り及びヘラ起し痕が認められる。器厚は不均一で胎土・焼成共に良好とは言えない。17は口径13.7cm、器高4.7

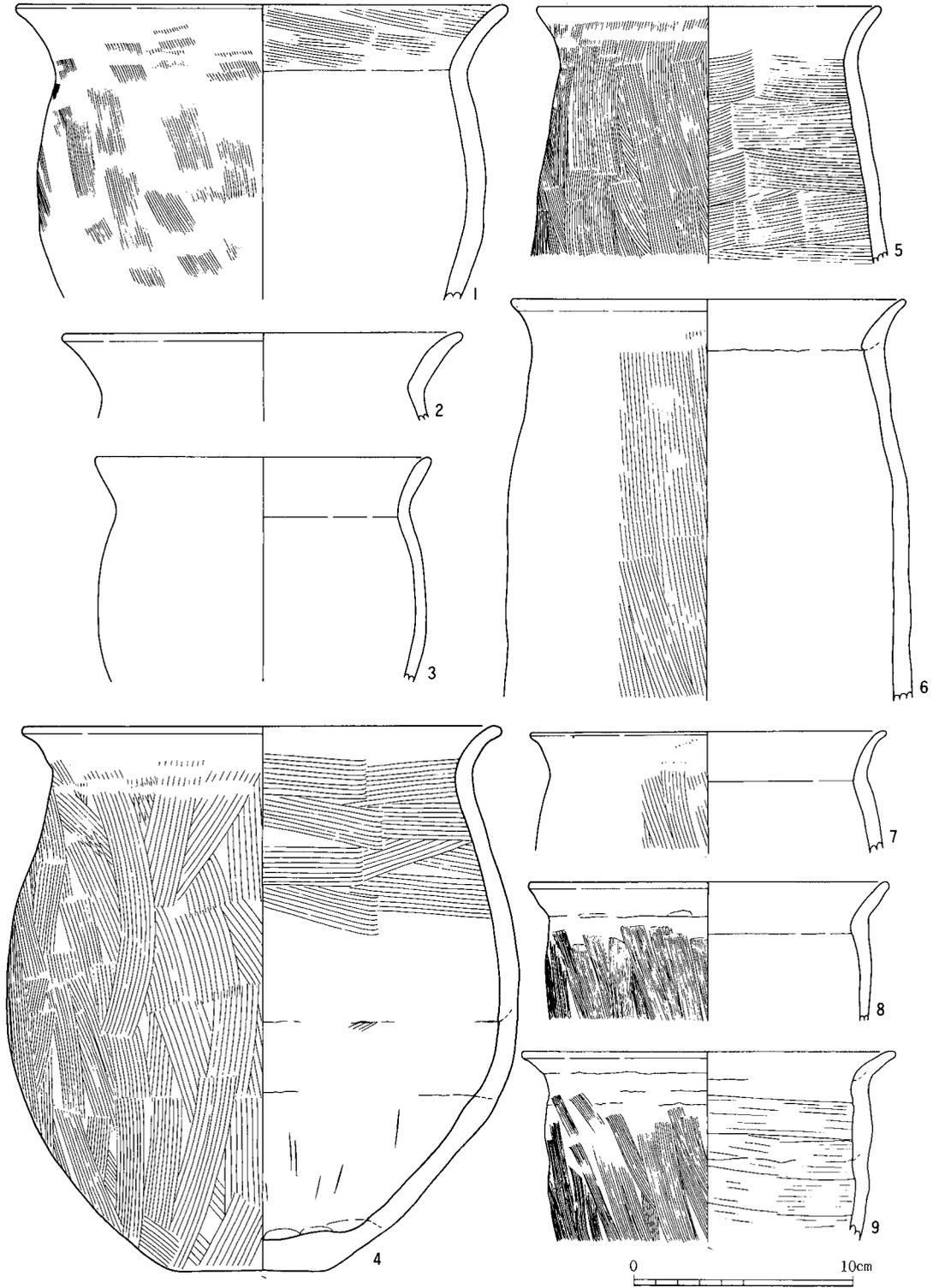


第158図 第3調査区出土遺物実測図 (S = 1/3)

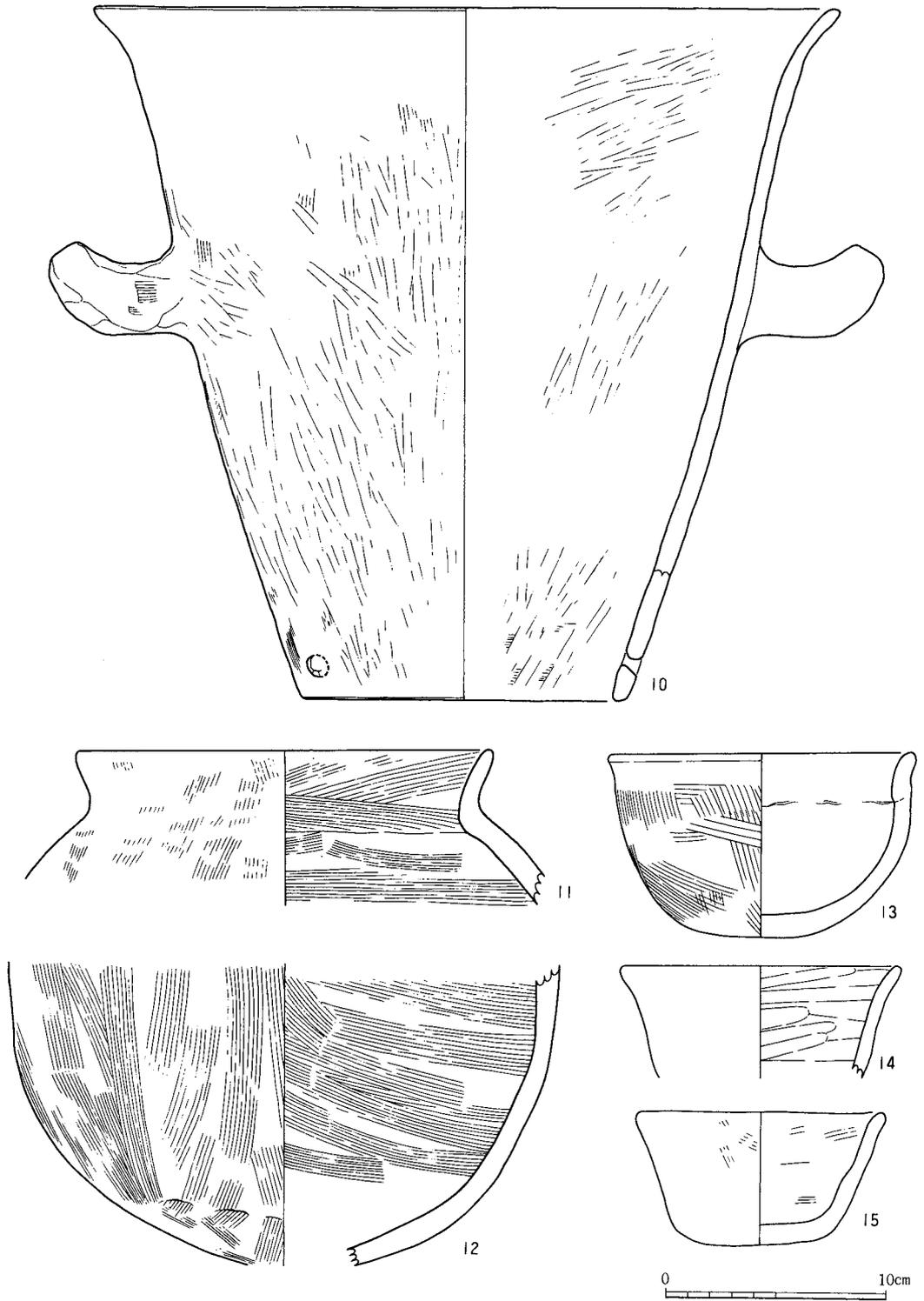
cmの土師器碗の完器でD-125グリッドから出土したものである。外面は摩耗が著しいために調整は不明。内面はヘラミガキで仕上げられている。胎土は精選されており、焼成も良好。淡橙褐色を呈する。18は口径12.6cm、残存高3.3cmを測る瀬戸の碗の破片である。19、20は共に白磁の皿片で、通称口ハゲと呼ばれるものである。21～30は土師質の皿である。いずれも第2調査区寄りの堆積土中から出土したものである。規格的には大型品（口径12cm以上のもの・21～24）、中型品（口径8cm～10cm程度のもの・25～29）、小型品（口径8cm以下のもの・30）に分類されるが、形態的にも、口縁部が内灣気味に立ち上がるもの、さらに腰が突き出るもの、平坦な底面から口縁部が直線的に外反するものなどに分類できる。燈明皿としての使用痕を留めるものも多く、22・26・27・29の内面には油煙による煤の付着が明瞭に観察できる。31は珠洲焼の甕の破片である。土師質皿出土地点に近接する堆積土中から出土したものである。32の漆器碗も同地区から出土した。口径16.6cm、底径10cm、器高4.3cmを測る。内底面から口唇部にかけて、部分的に付着物が認められる。33は人を形取った土製品（泥仏か）である。顔部欠損。残存高4.3cmを測る。第1調査区で出土した動物を形取った土製品同様、底面に固定した痕跡が認められるものである。最大長10.8cm、最大径1.15cm、最小径0.4cmを測る。D-125グリッドの耕作土直下から出土した。35は刀子である。残存長8.95cm、刃部幅1.35cm、柄幅1.05cmを測る。刃部先端は腐食により欠損する。36は鉄鏃である。正式には有莖広鋒雁股式鉄鏃と呼称されるものである。残存長9.3cm、刃部最大幅4cm、茎幅0.4cm、重さ8.1gを測る。雁股式の鏃は主として祭事や儀式等で使用されるものであるが、遺跡からの出土例は少なく、県下では初例である。第2調査区寄りのD-117グリッドから出土した。

第4調査区出土遺物（第159図～第161図、図版80～82）

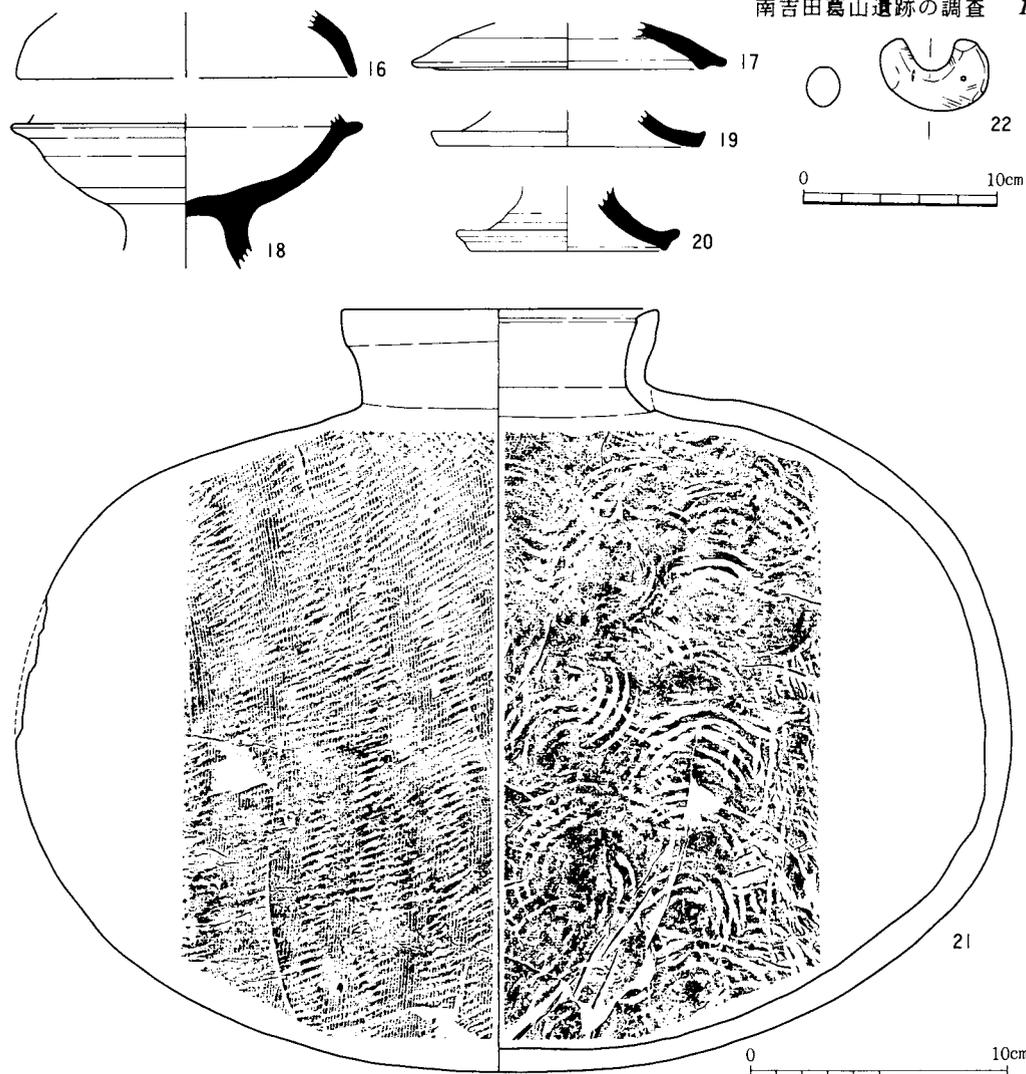
第4調査区から出土した遺物は概ね第9号溝の流れに添って帯状に連なる形で出土したものである。遺物の大半は土師器で占められる。他に数点の須恵器と1点の勾玉が出土している。いずれもD・E-127・128グリッドから出土したものである。1は口径22.3cm、残存高13.6cmを測る甕形土器である。胴部最大径は体部中位で20.6cmを測る。調整は外面及び口縁部内面がハケ、体部内面は丁寧なナデ。外面に煤の付着が認められる。4は口径21.3cm、器高25cmを測る甕形土器である。1同様外反度の大きな口縁に張りの強い体部が付くもので、底部は平底である。胴部最大径は体部中位で23.6cmを測る。調整は外面と内面頸部から体部上位にかけてはハケ、それ以外はナデで仕上げられている。ただ、内底面に指頭圧痕が、また部分的に粘土接合痕が観察されることなどから、調整はあまり丁寧とは言えない。焼成は並で、内外面共に淡黄褐色を呈する。5～9はいずれも長胴スタイルの甕形土器である。類似した器形に同様の調整が施され、全ての器面に煤の付着が認められた。10は口径33.7cm、底径14.8cm、器高31.2cmを測る甕である。E-127グリッドから出土した。調整は内外面共にハケの後ミガキ。口縁部にナデ調整を施す。胎土に微砂粒を多量含有。焼成は並。11、12は同一個体と考えられる甕形土器の口縁部片と体部片である。口縁の外反度はさほど大きくないが、肩部・胴部の張りは強く、球形に近い形態を呈するものと推察される。底部は丸底となろう。全体的に器肉は厚い。調整は内外面共にハケ。13～15は小型の鉢形土器である。13は口径13.5cm、器高8.4cm。口縁部内面に粘土接合痕を留める。調整は外



第159図 第4調査区出土遺物実測図1 (S=1/4)



第160図 第4調査区出土遺物実測図2 (S=1/3)



第161図 第4調査区出土遺物実測図3 (S=1/3)

面ハケ、内面はナデである。外面と口唇部に煤の付着が認められる。14は口径12.2cm、残存高5.1cm。摩耗が著しいために外面調整は不明。内面は炭素を吸着させて黒色とし、ミガキで仕上げている。胎土、焼成共に並である。15は口径11cm、底径6.5cm、器高6.1cm。摩耗のため内外面共に調整は不明瞭だが、ハケ及びナデの痕跡がかろうじて観察された。胎土、焼成共に並である。16~21はいずれも第4調査区D・E-127グリッドから出土した須恵器片である。16は口径不明の坏蓋口縁片である。残存部の調整は内外面共に回転ナデ。胎土、焼成共に並である。17は口径10.4cm、残存高1.7cm。16同様坏蓋片であるが、口縁部内面には丸味をおびたかえりがあり、16とは時期を異にするものである。天井部を欠損するが、宝珠形のつまみが付くものと推察される。天井部に施される回転ヘラ削りは2/3程度で口縁部は回転ナデ調整で仕上げられている。18は口縁部に立ち上がりを有する高坏の坏部片である。受け部径13.8cm、残存高6.1cmを測る。内外面共に回転ナデ調整で仕上げられるが、脚接合部外面で一部回転ヘラ削り痕を留めている。19・20は共に高坏脚部片である。19は脚部径10.8cm、20は脚部径7.6cmをそれぞれ測る。残存部の調整

は共に回転ナデ。胎土・焼成共に並で、いずれも灰白色を呈する。21は口径12.4cm、胴部最大径39cm、器高29.9cmを測る横瓶である。器厚も均一で、成形・調整・胎土・焼成共に良好な逸品である。外面調整は平行状タタキの後、カキ目。内面には青海波紋が明瞭に観察される。22はD-128グリッドで出土した勾玉である。最大長2.8cm、胴部径1cm、重さ5.6gを測る。石質は滑石で頭部に径1.2mmの孔が穿たれている。

第3節 ま と め

遺構について

検出した9条の溝状遺構の内、第9号溝を除く8条に関しては、溝内出土遺物および遺構の重複関係等から、造営時期を次のように理解することができよう。

第4号・8号溝→第3号・5号溝→第1号溝→第2号溝 *第6号溝に関しては、
 (第7号溝) (第7号溝) (第7号溝) あえて除外した

第1号溝に切られる溝は3号、4号、5号、8号の計4条。うち、第4号溝は第3号溝にも切られていることから、その前後関係は明白である。ただ、5号、8号の両溝に関しては、第1号溝造営期には既に廃棄されていたと判断されるものの、3号、4号との併存については、覆土の状況や流れの方向等から推察させるをえない。また、第7号溝に関しても、他溝との切り合い関係もなく、明確な判断材料は乏しい。ただ、第7号溝覆土最下層から出土した数点の土器片が、3号溝出土の器台脚部片よりやや先行する時期の所産とも考えられることから、3号溝が造営された頃には既に7号溝は機能していた可能性が強いのである。また同時に、7号溝の覆土堆積状況及び上層から出土した多量の木材（自然木を含む）等の出土状況からは、1号溝との関連も想定されることから、この7号溝の存続期間については、ある程度他溝より長期に渡ったものと考えられそうである。

いずれにしても、第7号溝覆土最下層出土の土器片は弥生時代終末期頃に比定され、また、第1号溝出土の高坏脚部片は、古墳時代前期に比定されることから、第1調査区で検出された上記溝状遺構の造営時期及び存続期間は、この範囲内でとらえられそうである。また、1号溝を切る2号溝については、前後関係の確認以外不明である。ただ、1号溝と共通する覆土層や、遺構上面を覆う泥炭層の状況等から、短期間で廃絶したものと推察される。

第9号溝に関しては、溝内からの出土遺物はなかったものの、遺構上面に散乱するかたちで検出された遺物の時期から、ほぼ6世紀後半から7世紀前半頃に造営されたものと考えている。この9号溝が検出された第4調査区は、前田川左岸に形成された自然堤防上に位置することから、第1調査区での営みが廃絶した後に活用された区域とも考えられるのである。ただ、9号溝の北側で検出された方形に巡る炭化物含有土層が、住居跡の壁溝の残存部である可能性もあることから、第1調査区周辺の低地が、生産空間（水田及び灌漑施設の造営地域）として、また、第4調

査区周辺の自然堤防上が生活空間としてそれぞれ機能していた可能性も指摘されるのである。

遺物について

検出した遺物のほとんどが包含層及び流入堆積土層からの出土であり、必ずしも当遺跡の性格を把握するための不可欠資料となりえたとは言い難い状況であった。しかし、遺構から出土した若干の資料によって、当遺跡の造営時期が弥生時代終末期から古墳時代に渡るものであることが確認されたことは、価値ある成果であったと判断している。また、それ以外の出土遺物に関して、いくつか注目されるものがある。その一つは、県内初の発掘資料となった笹塔婆の出土である。ほぼ完全な形で、かつ名号も判読可能な状態であったことから、県内外の木簡研究者からも注目される資料となった⁽¹⁾。この塔婆の時期に関しては、形態及び使用文字の特徴から、中世（南北朝頃か）の遺物と考えるべきである⁽²⁾。さらに、もう一つの注目される遺物として、第3調査区から出土した有莖広鋒雁股式鉄鍬がある。この雁股式鉄鍬についても県内の発掘資料としては初例である。雁股鍬は本来、狩猟時や戦時などでの実用具あるいは武器として用いられたものであり、狩股とも記されるものである。しかし、中・近世以降は実用武器としてではなく、祭事などにおける儀式用具として用いられるようになり、現在にまで伝世しているものもある。県外での遺跡出土の雁股鍬としては、宮城県多賀城跡出土例をはじめ、奈良県大和二塚古墳出土例など、古墳時代から奈良・平安・中世の各時期に渡り用いられていることが知られている。葛山遺跡出土の雁股式鉄鍬の時期については出土状況等から明確にはしえないが、同一堆積土層から出土している遺物などから、中世期の遺物と考えて大過なからう。

その他の出土遺物の中で特に注目されるのは第4調査区から出土した一群の土器である。第2、第3調査区調査区出土遺物のほとんどが、河川氾濫等による流入堆積土層からの出土であるのに対し、第4調査区出土遺物は遺構面直上からの出土であり、かつ若干の移動を考慮しても、ほぼ一定期間（時期）のまとまりが認められるからである。出土遺物は甕形土器の他、鉢形土器、甑などの土師器と、坏蓋・坏・高坏・横瓶などの須恵器、それに玉類として勾玉が出土している。甕形土器は大きく外反する口縁に張りの弱い体部が付く、いわゆる長胴スタイルのものが多い。やや張りの強い胴部のももあるが、いずれも、6世紀後半から7世紀前半頃の甕の特徴が認められるものである。類例として、志賀町中村畑遺跡出土土器群や中島町小牧・外遺跡出土土器群などが挙げられよう。須恵器の坏・蓋類についても、かえりの有無や、立ち上がりの有無などの特徴から、6世紀後葉から7世紀代にかけてのものと考えられ、土師器の時期と共通する。また、横瓶や勾玉など、主として葬祭用の遺物が共伴して出土しているのも、これら第4調査区出土遺物及び第9号溝の性格を考えるうえで非常に興味深い。筆者の調査時の印象は、第9号溝に関する何らかの儀式（溝埋めの祭祀か）に伴う遺物ではないかというものであった。しかし、現時点ではその可能性を指摘するに留めておきたい。

結 び

南吉田葛山遺跡は調査実施以前まで、奈良～平安時代の集落関係遺跡と考えられていた。しかし、今回の調査によって弥生終末期～古墳時代にかけての遺跡であることが判明。かつ各時期に渡る出土遺物は、河川氾濫等による流入堆積土に伴って二次堆積したものであることも明確に

なったのである。これによって、周辺の遺跡との関連についても新たな視点で捉えられるようになった。特に、葛山遺跡の北、相見川を挟む対岸の台地上に造営された竹生野遺跡とは、時期的にも共通することから、全く切り離して考えることは出来ない遺跡となったのである。現に竹生野遺跡は台地（尾根）上に営まれた集落遺跡であり、当然生活の基盤となる生産空間が必要不可欠である。そう考えると、竹生野遺跡の眼前に広がる低湿地帯は可耕地として恰好の条件を備えており、そこに造営されたのが葛山遺跡であったと推定されるのである。

最後に、連日炎天下での作業に参加・協力していただいた地元の方々に厚く御礼申し上げるとともに、本報告に際しいろいろと御配慮いただいた、県立埋蔵文化財センター職員の方々に感謝の意を表する次第である。

（浜野）

註

- （1） 思いもかけず当該笹塔婆が木簡学会の席上で紹介されたことから、多数の研究者に注目していただく機会を得ることが出来たのである。それに伴い『木簡研究』第4号に概略の報文を掲載するよう依頼を受け、未発表資料ながらも取りあえず資料紹介というかたちで協力することにした。

参照（『木簡研究』第4号 木簡学会 1982年）

- （2） 桜井甚一氏より御教示を得た。

第6章 考 察

第1節 旧石器時代の末森山麓

石川県下で最初に発掘調査が行われた旧石器時代の遺跡は^{とだしの}灯台笹遺跡（能美郡辰口町）で、それは1970年10月のことである。しかしその初頭に記念すべき事績があったとはいえ、後続するさしたる成果もみられず沈黙の70年代とでも称される停滞の様相が続いた⁽¹⁾。やがて80年代前半になると少しずつではあるが着実に資料増加がみられ、後半に入ってから1987年に加賀市宮地向山遺跡・志賀町赤住ナカノA遺跡が相ついで旧石器時代の遺跡として発掘調査された。「宮地・赤住以後」と呼ばれる県内における研究史上の新しい段階の到来を願う次第である。

さて竹生野遺跡の所在する羽咋郡押水町は、周知のように県下で最初に旧石器時代遺物が発見され、しかも現時点で最も多くその時代の遺跡が確認されている地域といえる。殊に北部の末森山麓では北から宿向山・宿東山そして本遺跡をあげることができる。一般国道159号線押水バイパス建設に伴う発掘調査の過程で確認されたこれらは、或いは尾根続き或いは谷を挟むとはいえきわめて近接した位置関係を有し（第162図参照）、バイパス路線でいえば約500mのうちに三者とも含まれることになる。本遺跡以外の2遺跡についてはすでに報告がなされているが⁽²⁾、今回この周辺の最後として報告を行うにあたって、1980年代前半を代表する新知見の一つである末森山麓の旧石器時代遺跡群の概要について改めて振り返ってみることもあながち無駄ではなからう。

1 宿東山遺跡^{しゅつかいやま}

本遺跡とは北に谷を隔てた低丘陵上に立地し、1985・86年度に石川県立埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた。87年には報告書が刊行され、それによれば「第1遺物集中地点」及び「第2遺物集中地点」の二箇所において旧石器時代の資料が確認されているという⁽³⁾。谷頭に面した標高約37mの緩斜面に位置する「第1遺物集中地点」ではナイフ形石器4点（第163図1～4）や石核（同5）をはじめとする20点余りが出土している。1は縦長剥片を素材とした基部加工のナイフ形石器で、基部のみを残す2についても同様である。3は広義の立野ヶ原型ナイフ形石器に含まれ、麻柄分類による「IC類」（麻柄 1986）に近似すると思われる。また4も小形寸づまりの剥片を用い、ポジ面である背面は石核素材の腹面と対応するものであろう。5の剥片素材の石核は富山県白岩薮ノ上遺跡のそれと⁽⁴⁾の類似が指摘でき、そこからは小形寸づまりの剥片が生産されたと考えられている。加えてこの地点から北西に約90m離れた尾根上の平坦地（標高約33m）に立地する「第2遺物集中地点」でも2点が検出されており、6はそのうちの縦長剥片を素材とする削器である。なお報告書刊行後に方格規矩鏡で知られる宿東山1号墳の周辺から出土した斧形石器（両面加工石器？、第163図7）・スクレイパー（斧形石器？、同8）に対しても或いは旧石器時代に遡るのではないかと指摘もなされており、このことも付記しておきたい。

2 宿向山遺跡^{しゅつかいやま}

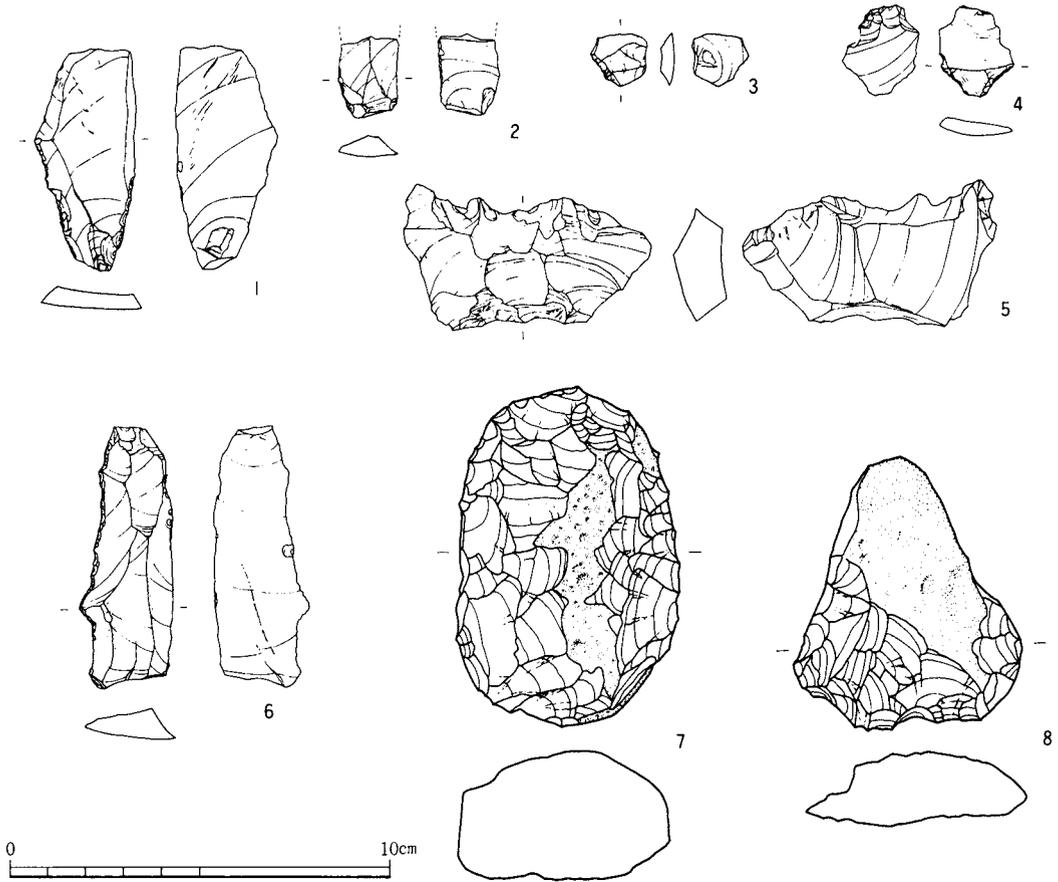
宿東山遺跡とは北に尾根続きであり、1982・83年度に石川県立埋蔵文化財センターによって発掘調査がなされた。87年に報告書が刊行されたが、旧石器時代資料について執筆を担当した筆者



第162図 末森山麓の旧石器時代遺跡 (1/5,000)

A = 宿向山遺跡局部磨製石斧出土地点
 C = 宿東山遺跡「第1遺物集中地点」
 E = 宿東山遺跡1号墳周辺

B = 宿向山遺跡石器分布範囲
 D = 宿東山遺跡「第2遺物集中地点」
 F = 竹生野遺跡遺物集中箇所



第163図 宿東山遺跡出土石器（〔北野博司他 1987〕より転載）（S=1/2）

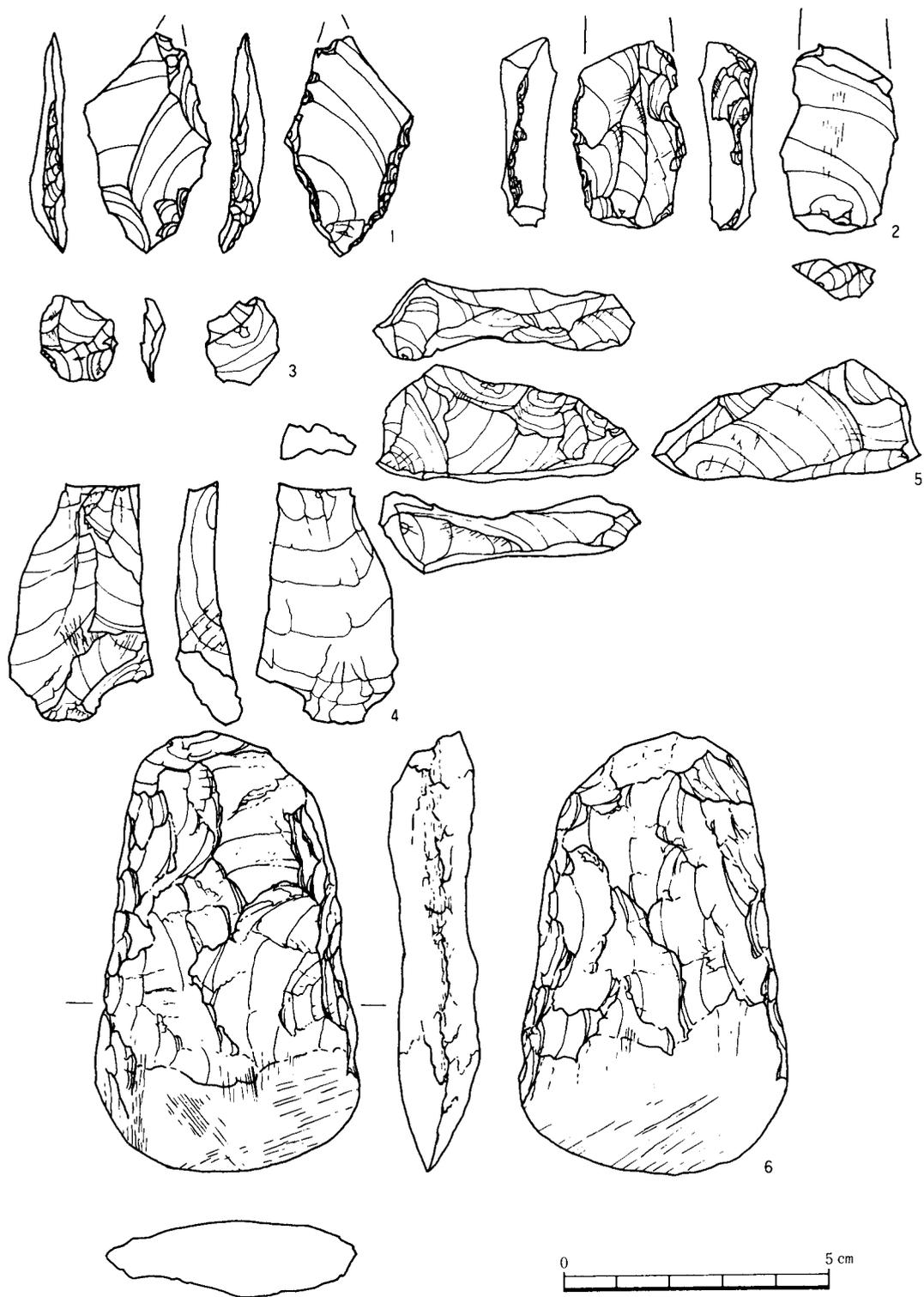
の不見識により数々の混乱を生じさせる結果となってしまった。まず遺物の点数は6点に過ぎないとしたが、本稿を記すにあたって再検討を行いもう少し増えることが判明した。今回やや遅きに失した観もあるが、その未発表分について改めて紹介することにしたい。また前回報告したナイフ形石器（第163図1として再掲）を「斜め整形」と即断し余りに安易に石器群の年代性について論じてしまったが、「ペン先形」であるとの指摘〔奥村 1987〕を頂くところとなった。さらに同報告書で縄文時代の磨製石斧として扱われた資料のうち1点⁽⁵⁾が旧石器時代の局部磨製石斧であることがわかり、これについても再び報告することにする。なお、旧石器時代の遺物は概ね調査区中央の土塁（末森城関連か）の内側に分布するようであり、宿東山遺跡の「第2遺物集中地点」からは尾根に沿って北へ150m余り、また標高は約40mを測る。調査担当者が「土塁を構築するに当たってはかなりの土を動かしており⁽⁶⁾」と指摘するように、付近の土層の状態は必ずしも良好とはいえない。ただし局部磨製石斧についてはここからさらに80m程北に離れた地点からの出土で、むしろ縄文時代前期初頭の土器（佐波式）の分布範囲に近接し、周辺には旧石器時代とする資料は明確には認められない。

さて、本遺跡からはナイフ形石器が3点出土しており、そのうち1については先述のとおり報告書より再掲載したものである⁽⁷⁾。恐らく不定形で横長の剥片を素材とし、基部を中心にそれを挟む左右両側縁に調整加工を施す。そのうち左側縁では腹面側で基部から2/3にわたって急角度の加工が行われ、また右側縁でも腹面側下半においてあたかも打面上端を除去するようにして急角

度の加工がなされる（打瘤は残る）とともに基部背面及び腹面側上半でいくらか平坦剥離も施されている。尖鋭な先端部・基部を有し、整形は素材形状修整的⁽⁸⁾であるといえる。2は縦長剥片を素材とした基部加工のナイフ形石器と思われるが、先端部は折損して現存しない。なお折れ面を含む右側縁上部を中心に二次加工が施され、或いは折損後にスクレイパーとしての機能を担ったのかもしれない。打面は複剥離打面だが、打面調整が行われたか否かについてはこの資料のみからは不明である。ナイフ形石器としての調整加工は主として左側縁にみられ、総じて腹面から背面へという方向でなされ、比較的微細な剥離が目立つ。3は小形寸づまりの剥片を素材としてその末端のごく一部に微細で浅い角度の調整加工を施す。立野ヶ原型ナイフ形石器の категорияに含まれるとすれば、麻柄分類の「IC類」に該当するだろう。背面の一部にポジティブな面が残る点や背面の構成などから、剥片或いは分割礫を素材とする石核の一端を打面とし打点を横に移動させながら剥片剥離が行われた様子が推測される。打面は平坦打面であり、剥離角はかなり大きく130度に近い。また縦長剥片である4においては、平坦打面からある程度作業面を固定したまま連続的に縦長剥片を剥取する技法の存在を想定することができよう。5は石核の残核であるが、各面に残る剥片剥離の状況からは、頻繁な打面転位を繰り返しながら小形寸づまり剥片が生産された状況が窺われる。図示しなかったが同様の技法により寸づまりな剥片を剥取したと思われる石核（残核）がもう1点存在する。最後の6とした局部磨製石斧は前にも触れた通り他の資料とは離れた地点からの出土となっている。やや濁った白っぽい色調を呈しており、ところどころに鈍い光沢を有する。打撃を加えることによって概形を作出し、その一端を表裏両面から磨き上げることによって刃部を形成させている。緩い円刃をなす刃部においては表裏の研磨面の結び合うところが直線的な稜線をなしており、その造作だけを取り上げれば後の時代の磨製石斧に比しても何ら遜色はない。ただ本資料は側部に面を有しておらず、その点において旧石器時代資料の特徴と一致する。丸くおさまる基部から刃部へ向けて幅を増しながら徐々に開いてゆくいわゆる撥形の形状を呈するが、自然面が看取されずどのような素材が用いられたかは不明である。恐らく両側部の両面における主軸へ向けての剥離の過程で除去されたか、或いはそれ以前の段階ですでに失っていたのかもしれない。以上6点の資料について紹介してきたが、前回報告書に掲載したなかには、かなり部厚い剥片を素材として求心的剥離によって不定形剥片を生産した石核、打面・作業面を頻繁に転位させながら剥取されたと思われる寸づまり剥片が含まれ、それらもこの遺跡における剥片剥離技術を考える際に参考となる資料である。

包含層（表土下部）出土資料として扱われていた宿向山遺跡の石器から、宿東山遺跡と共通する珪化凝灰岩・凝灰岩・輝石安山岩などの石材を用いたもののみを旧石器時代の石器としてピックアップし、鉄石英・メノウ類の資料について顧慮しなかったために昨年の報告書刊行時に混乱（結果的には資料の恣意的選択）を招いてしまった点を深く反省したい。

さて、これまで竹生野遺跡と同じく末森山麓の低丘陵地帯に近接して立地し、やはり旧石器時代資料の出土をみた2遺跡について概観してみた。これらの地点は標高でいえばいずれも33~45m位の範囲に含まれることになる。付近の地形を眺めてみて気がつくのは、末森山の頂から西へ派生する尾根と3遺跡の所在する地区の低丘陵が或いは地質的な条件を異にするのではないかと



第164图 宿向山遺跡出土石器 (S = 1/2)

第8表 宿向山遺跡石器計測表

No.	器種	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重量
1	ナイフ形石器	M-5区表土下層	珪化凝灰岩	(4.2)	2.5	0.5	(5.0)
2	ナイフ形石器	M-2区	鉄石英	(3.6)	2.2	1.2	(8.8)
3	ナイフ形石器	C-15区表土下層	玉髓	1.9	1.5	0.4	0.7
4	剥片	表土	メノウ	4.5	2.8	1.3	14.2
5	石核	M-8区表土下層	メノウ	2.5	4.9	1.6	15.6
6	局部磨製石斧	C-5区	?	8.4	5.1	1.8	74.5

(長さ・幅・厚さ=cm、重量=g)

いう点である。本田秀生がすでに指摘するよう⁽⁹⁾に宿東山・宿向山遺跡周辺の丘陵は、末森山から西へ伸びる尾根とは約90度方向を異にし、あたかも今日の海岸線と平行するようにはほぼ南北に走る3列の尾根からなっている。最も西側の海岸よりの尾根には前方後墳を2基含む宿東山古墳群の西支群が所在し、中列の北には宿向山遺跡が、そして鞍部を隔てて南の宿東山遺跡へと続いていく。後者の北端が「第2遺物集中地点」にあたり、また最高所には宿東山1号古墳が構築されている。さらに最も東、すなわち末森山寄りの尾根の頂上平坦部からやや下った西側斜面の一角には宿東山遺跡の「第1遺物集中地点」が営まれている。一方、竹生野遺跡について考えてみても、末森山から西へ伸びる急傾斜の尾根が調査区東方の奥ノ池と呼ばれる溜め池付近において大きくぐれ、それ以西では頂部になだらかな平坦地を有する低平な丘陵へと移行している。すなわちこの遺跡が立地する地点も末森山塊とは地質的な条件を異にする可能性が高いと思われる。押水町の北部を中心とする地域に関しては、自然科学の立場から地形・古環境について考察した藤則雄の論稿がある⁽¹⁰⁾。それによれば、末森山及びそこから西へ派生する尾根が中新世の「南吉田泥岩層」を基盤とするのに対し、3遺跡周辺の低丘陵は鮮新世の「竹生野シルト岩層」・「山崎砂岩層」を基盤としており、その点でも相違が認められよう。また、その鮮新世の基盤上には「第四紀更新統の海成段丘堆積物」(層厚約10mの「砂層」及びその上位の層厚約5mの「風化した赤褐色泥質砂層」からなり、堆積年代は「更新世後期」)が「不整合に被覆」するという。つまり末森山麓で旧石器時代の遺跡が立地するのは、低丘陵頂部の「いわゆる海成の堆積平坦面」上及びその付近ということになる。地形図で見る限り一帯の海成段丘は開析が進んでいるようであり、あちこちの小さな谷には湧水を塞ぎ止めて築かれたと思われる溜め池が点在している。遺跡の立地にとって水の確保が重要な要因であったはずだが、その面において末森山西麓は旧石器時代人の居住の条件を満たしていたのではなからうか。なお現時点の知見に基けば、末森山麓をはじめ志賀町の赤住ナカノ⁽¹¹⁾A・米浜遺跡⁽¹²⁾・富来町福浦ヘラソ遺跡⁽¹³⁾など能登半島西海岸では旧石器時代の遺跡が海成段丘に立地す傾向が窺え、富山県下の立地の状況と比較して対照的といえる。

さて、次に石器群についてみていくならば、末森山麓の3遺跡はいずれも多かれ少なかれ小形寸づまり剥片を伴っており、その意味でまずは富山県下で蓄積された資料をもとに近年提唱されてきている「立野ヶ原系石器群」⁽¹⁵⁾との関連が注目されようである。立野ヶ原型ナイフ形石器を伴う石器群について基礎的整理を試みた麻柄一志によれば、その石器群には「残核は一面に自然面を残すサイコロ状で、打面は何度も転位されている」石核と「大型の剥片の主要剥離面を作業面

とし、打点を横に移動させながら連続的に剝離する、いわゆる米ヶ森技法に近い」石核との2種類の石核が主体となって存在するという。〔麻柄 1986〕このうち前者については奥村吉信によって剝離工程の復原がなされ、模式図が示されている。〔奥村 1985〕まず、後者の剝片素材の石核については、宿東山遺跡(第163図5)と竹生野遺跡(第56図21)のそれを類例としてあげることができる。また、前者については竹生野遺跡の一面に自然面を残すサイコロ状の残核(第56図22)が典型例となろうが、ほとんど石核調整を介在させずに打面を頻繁に転位させながら小形寸づまりの剝片を生産した石核というように広義に解釈すれば、宿向山及び竹生野遺跡の資料の一部をその類例として扱ってもよいかもしれない。以上の点から末森山麓の3遺跡はいずれも石核、さらには剝片剝離技術のあり方から「立野ヶ原系石器群」との類縁性を指摘できるのではなかろうか。

宿東山遺跡では小形の寸づまり剝片を素材としたナイフ形石器及びそれを生産したであろう剝片素材の石核以外に、縦長剝片を素材とした基部加工のナイフ形石器もみられ、その形状や背面構成から石刃技法の存在も想定される。出土状況から考えて単一の石器群中に異なる二つの技法が存在するとしてほぼ間違いないが、ともに頁岩系⁽¹⁸⁾が用いられるという石材上の共通性が認められる。宿向山遺跡では前述のように3種類のナイフ形石器がみられ、奥村の指摘によれば「ペン先形」のナイフ形石器の素材と部厚い剝片を素材とした求心的剝離を行う石核が対応する関係にあるという〔奥村 1987〕。また、小形のナイフ形石器の調整加工は微細かつ平坦であり、その点では基部加工のナイフ形石器のそれと一脈通ずるかもしれない、その時代の調整加工のあり方を反映したものかどうか、多いに興味をもたれるところである。この遺跡の資料は出土状況が不良で、必ずしも単一の石器群と考えるとよいかどうか検討の余地を残すが、石材的には頁岩系に加えてメノウ・鉄石英類も用いられている。局部磨製石斧については、麻柄が北陸をはじめとする各地の事例を集成して検討を加えている〔麻柄 1985〕が、それによると富山県下では立野ヶ原型ナイフ形石器を中心とする石器群に伴う例が多く、宿向山例も地点的な隔りがあるとはいえ、必ずしも他の諸石器と著しく異なる年代を求めする必要もないように思われる。

竹生野遺跡の概要については第4章で記したとおりであるが、以上のように末森山麓の3遺跡について眺めてくれば、いずれも「立野ヶ原系石器群」との関連が指摘され得るとはいえ、その内容にはいくらかの違いがみられる。ここで検討せねばならないのはそのような内容のなかでの竹生野遺跡のA群とB群の関係である。頁岩系の石材の使用を特徴とするA群の一部には、石刃を含めた縦長剝片を連続的に生産する技法が認められ、何点かは両設打面石核から剝離されている。それとともに小形の寸づまりな剝片も別の技法によって生産されている。一方、これに対して鉄石英・メノウ・玉髓に加えて黒耀石・輝石安山岩・チャートなどを用いるB群はほとんどが長さ5cm以下の小形の剝片によって占められるが、それらを生産した技法は先述のように「立野ヶ原系石器群」と共通すると考えられる。ウウダイラ⁽¹⁷⁾・西原⁽¹⁸⁾・細谷No.3⁽¹⁹⁾など富山県下で「立野ヶ原系石器群」とされる遺跡では、縦長剝片(場合によっては石刃)を少量ながらもその組成中に認めることができ、よって両者は現時点の北陸地方の知見からは必ずしも相互に排他的な関係にあるとはいえない。また同一ユニットにおける石刃と小形寸づまり剝片の共存例として同県長山遺跡⁽²⁰⁾をあげることもできる。以上の点を勘案してもA群・B群と今まで便宜上二分して考え

てきた石器群に対してどうしても二つの異なる年代を与えねばならないという必要性は感じられない。たとえB群のすべてを旧石器時代の遺物と断定することがないにしても、その多くをA群とは全く性質が違うグループとして扱わねばならない理由も見当らないと思われる。竹生野遺跡A群の縦長剥片を生産する技法に打面調整が看取されないことも以上の想定を妨げないといえよう。つまり竹生野遺跡では頁岩系を用いた縦長剥片(石刃)と小形寸づまり剥片に加えて鉄石英・メノウ類をはじめとする小形寸づまり剥片によって石器群が構成されていると要約することもできるのではなからうか。末森山麓の3遺跡はいずれも「立野ヶ原系石器群」に包摂して考えるべき内容を有するといえようが、その組成や石材などの面では個々の間に差異もみられ、それが何に起因するかは今後の課題となってくるだろう。

年代に関しては、宿東山遺跡では小林武彦によって火山灰層序学的検討がなされ、⁽²¹⁾「第1遺跡物集中地点」におけるその結果と石器類の出土層位を併せて検討すれば、石器群はA T以前に遺された可能性が高い。また宿向山遺跡のナイフ形石器の1点(第164図1)が奥村の指摘どおり「ペン先形」であるとすれば、「ペン先形」は関東地方では特定の、あるいはそれに相当する層位に限られるという須藤隆司の見解〔須藤 1987〕に従って、宿向山例についても近接した年代を与えることも一つの考え方もかもしれないが、まだ検討すべき点多からう。竹生野遺跡については殆んど資料が遺構覆土中からの出土でその状況から年代性を論ずることはできないが、「立野ヶ原系石器群」をA T以前とする今日の北陸地方の趨勢(麻柄1986に代表されよう)に準ずれば、やはりそう考えるのが現段階では妥当といえそうである。

末森山麓以外にも能登半島で「立野ヶ原系石器群」との類縁性が指摘される第四の遺跡として、輪島市の宅田上野山遺跡をあげることができる。1986年に市教委によって発掘調査された地点とそこから東に数十m離れた表採による地点との2箇所から石器が採集されているが、石器の特徴から近接した時期の所産である可能性が大きいと思われる。両地点とも殆んどが頁石系の石材を用いる点とやや大形の縦長剥片と小形の寸づまり剥片からなる点において共通する。縦長剥片には見たところ部厚くゴロゴロしたものも含まれ、全体的に背面側の剝離方向が一定せずしかも打面調整は行われていないようである。小形のものには「立野ヶ原型ナイフ形石器」のカテゴリーに含めても差し支えないと思われるものが何点かみられる。

「立野ヶ原系石器群」については、これまで各地のA T降灰以前の石器群との対比において論じられる場合が多かった。層位的な出土例が豊富な南関東の千葉県下でも「立野ヶ原系石器群」にきわめて近い内容をもった石器群の出土が伝えられている。⁽²²⁾ 今後は年代的位置付けや地域的な広がりをはじめとする諸問題についてますます研究が深化するものと期待される。

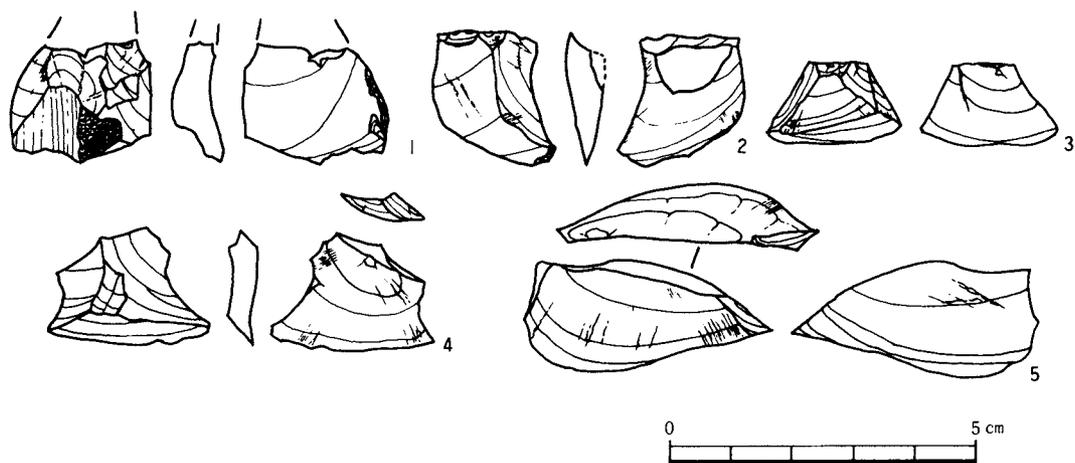
本稿をまとめるにあたっては、第4章2節同様に北陸旧石器文化研究会の方々より多くの御教示を得た。とりわけ未刊原稿の拝読をお許し頂いた松島吉信氏、局部磨製石斧の実測を引き受けて頂いた樫田誠氏には重ねてお礼を申し上げたい。また宿東山遺跡の資料再掲載にあたって便宜をはかって頂いた北野博司氏、宿向山遺跡の未発表資料の掲載について快諾された藤田邦雄氏、報告書未刊の宅田上野山遺跡について御教示を頂いた砂上正夫(輪島市文化課)・本田秀生(報告書執筆担当予定)の両氏に対して深く感謝申し上げる次第である。 (松山)

註

- (1) この間にも例えば金沢市塚崎遺跡(1971)などで旧石器時代の資料が出土していたが、それとして認識されることはなかった。
- (2) 北野博司他1987『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター及び藤田邦雄他1987『宿向山遺跡』石川県立埋蔵文化財センターをさす。
- (3) 宿東山遺跡については北野博司・本田秀生氏から多くの教示等を得た。
- (4) 松島吉信他1982『白岩藪ノ上遺跡調査概要(2)』立山町教育委員会の第9図5をさす。
- (5) (2)の『宿向山遺跡』の第83図44をさす。
- (6) (2)の『宿向山遺跡』における藤田邦雄の記述(P12)を引用した。
- (7) (2)の『宿向山遺跡』の第79図1を再掲載した。
- (8) 安蒜政雄1983「縦長ナイフ形石器の製作」『季刊考古学』第4号
- (9) (2)の『宿東山遺跡』P30を参照。
- (10) 藤 則雄1987「宿東山遺跡とその周辺の地質と古環境」で(2)の『宿東山遺跡』に所収(P10~22)
- (11) 石橋克美1988「志賀町赤住地区の発掘調査」で『拓影』(石川県立埋蔵文化財センター所報)第26号
- (12) 本田秀生1988「米浜遺跡の石器」『石川考古』第181号
- (13) 平口哲夫1981「ヘラソ遺跡出土のナイフ形石器」『石川考古』第135号
- (14) 西井龍儀1983「富山県の先土器時代研究の現状と問題点」『北陸の考古学』(石川考古学研究会々誌第26号) ただしそれと詳細な分布状況が不明でしかも地形発達史的背景を異にする能登半島とを単純に比較してよいものか疑問が残る。
- (15) この用語は平口哲夫1986「旧石器時代」『図説発掘が語る日本史』第3巻が初出とされる。その後、麻柄一志によって概念的に整理される〔麻柄1986〕とともに、1986年11月には北陸旧石器文化研究会などが主催したシンポジウム「日本海域における旧石器時代の東西交流」のテーマの一つとして取り上げるところとなった。ただし現時点での筆者の理解はあくまでも漠然としたものに過ぎず、したがって本稿では剥片剥離技術等においていわゆる立野ヶ原型ナイフ形石器を伴う石器群に関連づけられ得る石器群という意味ぐらいに、すなわち厳密な定義に基かないやや広義で包括的な用語として用いている。
- (16) 珪化凝灰岩や濃飛流紋岩、場合によっては凝灰岩の一部を含む。
- (17) 橋本正他1974『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第二次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- (18) 山本正敏他1977『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第五次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- (19) 西井龍儀1981「細谷No.3遺跡の石器群について」『大境』第7号(富山考古学会)
- (20) 山本正敏他1985『富山県八尾町長山遺跡、京ヶ峰古窯跡緊急発掘調査概要』八尾町教育委員会
- (21) 小林武彦1987「石川県押水町宿東山遺跡の遺物包含土層についての火山灰層序学的検討」、(2)の『宿東山遺跡』に所収
- (22) 財団法人千葉県文化財センター1988「四街道市池花南遺跡・御山遺跡・出口鐘塚遺跡」『昭和62年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』千葉県文化財法人連絡協議会

〔補遺〕

第4章稿了後に、竹生野遺跡のB群未掲載資料のうちにも図示せねばならないものが含まれるとのご指摘を頂いた。わずか5点ばかりであるが、ここに紹介することによって断片的記載に終わった同群の補遺としたい。第153図1は腹面の一部に微細で平坦な加工が施されている。2は背面左半にポジティブ面を残す寸づまり剥片で、先端部付近に調整加工?がみられる。3～5は同一母岩と思われ、5は折断剥片である。



第165図 竹生野遺跡B群(補遺) (S = 1/2)

第9表 竹生野遺跡B群補遺資料計測表

No.	器種	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重量
1	二次加工を有する剥片	第11号竪穴住居	メノウ	(2.0)	2.3	0.7	(3.6)
2	二次加工を有する剥片	第9号竪穴住居	鉄石英	2.3	2.0	(0.5)	(1.7)
3	剥片	第7号竪穴住居	玉髓	1.3	2.2	0.3	0.8
4	剥片	第7号竪穴住居	玉髓	1.9	2.1	0.5	1.7
5	剥片	第7号竪穴住居	玉髓	1.9	4.0	1.0	5.4

(長さ・幅・厚さ = cm、重量 = g)

第2節 大型土坑の機能について—能登半島の弥生時代を中心として—

1 はじめに

本遺跡より弥生時代後期後葉の土器⁽¹⁾を出す大型の土坑が19基検出されている。大型の土坑といってもその形態は多様であるが、円筒形と汎称されるものも含めて、一定の規格性を看取しうる土坑をとりあげることにした。その特徴の第一は、十分な深さにある。平面形は円形、方形のものが多い。それらは遺跡のなかでは他の不整形な土坑に比して截然と区別され、多くの例は群在する。

さて、この弥生時代の土器を出土する土坑の他に、大型土坑の例として縄文土器や石器を出土する土坑、もしくは遺物を出土しない土坑が知られている。その規模においては弥生時代の遺物を出す土坑よりやや小型であるものの、個々の比較においては似たような形状を示すものもある。これらについては、落とし穴として報告された例もあるが、例証に欠けており、弥生時代の遺物を出す土坑と弁別できる段階ではない。

小論では、弥生時代の大型土坑の機能を明らかにすることを目的とするが、縄文時代とされる土坑群についても、これを考えるための段階的作業として検討を試みたい。

2 既往の研究

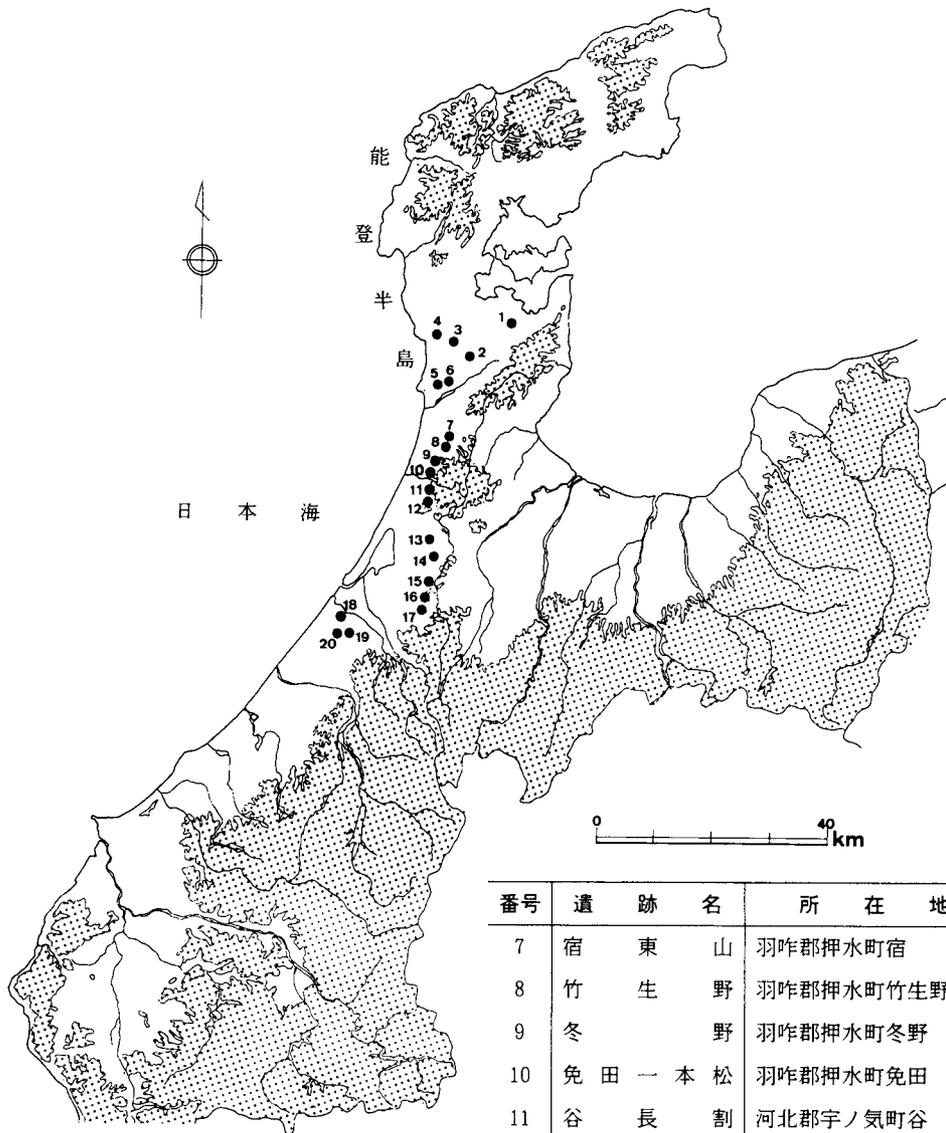
弥生時代の遺物を出す大型土坑（以下これを便宜的に弥生土坑と呼ぶ）にせよ縄文時代の遺物を出す大型土坑（以下これを便宜的に縄文土坑と呼ぶ）にせよ研究の対象となることは少なかった。ともに多くの労働力によって構築され、生活のなかで大きな比重を占める遺構であるという認識はされながら、出土土器のみに目が注がれていた。

北陸における弥生土坑を本格的に論じたのは吉岡康暢氏である〔吉岡 1976〕。同氏は、富山県小杉上野遺跡の調査において示された橋本正氏の貯蔵用土坑とする見解〔橋本正 1974〕に対し、塚崎遺跡の調査に立脚して、土坑群に墓坑としての機能を与えた。橋本澄夫氏は国分高井山遺跡の調査に寄せて、諸説を整理しながら、大型土坑は貯蔵穴ではないかとする説を提示された〔橋本澄 1984〕。そして、筆者はこれら先学の所説に依りながら、各遺跡の土坑の形態的検討を試みた〔三浦 1987〕。その結果、坑底施設の存在や形状より貯蔵穴と考えるのが妥当ではないかとの結論を導いた。

一方、縄文土坑に関する研究であるが、報告例では検討なしに落とし穴とするものがある。これは東日本における研究に依拠した結果と考えられるが、基礎的な検討を要するのは言うまでもない。遺物を出土しない土坑群に関して、谷内尾晋司氏の研究がある。同氏は中村畑遺跡の調査のなかで、土坑の壁面に付着した炭化物より、板壁の存在を推定し、水溜説を展開された〔谷内尾 1982〕。

3 遺跡の概要

能登半島における大型土坑検出遺跡は、北は邑知地溝帯北端部から南は金沢平野にかけて21例



番号	遺跡名	所在地
1	国分高井山	七尾市国分町
2	杉谷チャノバタケ	鹿島郡鹿西町金丸
3	中村畑	羽咋郡志賀町上棚
4	北吉田フルワ	羽咋郡志賀町北吉田
5	寺家オオバタケ	羽咋市寺家町
6	柳田シャコデ	羽咋市柳田町
6	柳田台地	羽咋市柳田町

番号	遺跡名	所在地
7	宿東山	羽咋郡押水町宿
8	竹生野	羽咋郡押水町竹生野
9	冬野	羽咋郡押水町冬野
10	免田一本松	羽咋郡押水町免田
11	谷長割	河北郡宇ノ気町谷
12	宇気塚越	河北郡宇ノ気町宇気
13	谷内石山	河北郡津幡町谷内
14	竹橋油木谷	河北郡津幡町竹橋
15	月影	金沢市月影町
16	岩出ウワノ	金沢市岩出町
17	塚崎	金沢市塚崎町
18	北塚B	金沢市北塚町
19	押野タチナカ	石川郡野々市町押野
20	御経塚シンデン	石川郡野々市町御経塚

第166図 大型土坑分布図

見られる（第166図）。その立地は、沖積平野の北塚B・押野タチナカ・御経塚シンデンの3遺跡を除いて洪積台地上である。

21の遺跡にみられる土坑を出土遺物によって分けると、先述のように、遺物のない土坑、縄文土器や石器を出す土坑、弥生土器を主として包含する土坑の三つに大別される。遺物のない例は、中村畑、北吉田フルワの両遺跡でみられる。縄文土器を出す例は、杉谷チャノバタケ、柳田シャコデ、柳田台地、宿東山、冬野、免田一本松、谷内石山、竹橋油木谷、岩出ウワノの各遺跡でみられる。弥生土器を出す例は、国分高井山、竹生野、冬野、谷長割、宇気塚越、月影、岩出ウワノ、塚崎、北塚B、押野タチナカ、御経塚シンデンの各遺跡でみられる。

続いて、遺物を出土しない土坑と縄文土坑の検討に移ろう。

(1) 遺物のない土坑の概要

中村畑遺跡では標高13～18mの丘陵尾根の西側斜面で17基検出された〔橋本澄・谷内尾 1982〕。調査担当者はこのうち11基を縄文時代の落とし穴とし、6基を掘削面の違いから古墳時代の水溜めと考えている。

北吉田フルワ遺跡では、標高28mを測る丘陵の斜面で9基検出された⁽³⁾。すべて円筒形である。規模は小さいもので径1m、深さ1.2m、大きいもので径1.45m、深さ3mを測る。この土坑群はほとんど開放状態にあり地元で落とし穴であるという伝承がのこっており、近世後期から近代前期の所産と推定される。

竹橋油木谷遺跡は標高30mを測る丘陵中腹に立地し、17基の土坑を検出している〔竹田 1985〕。このうち15基に坑底施設が見られる。平面形は円形ないし楕円形のものが多く、壁の立ち上りが急であると報告されている。

(2) 縄文土坑の概要

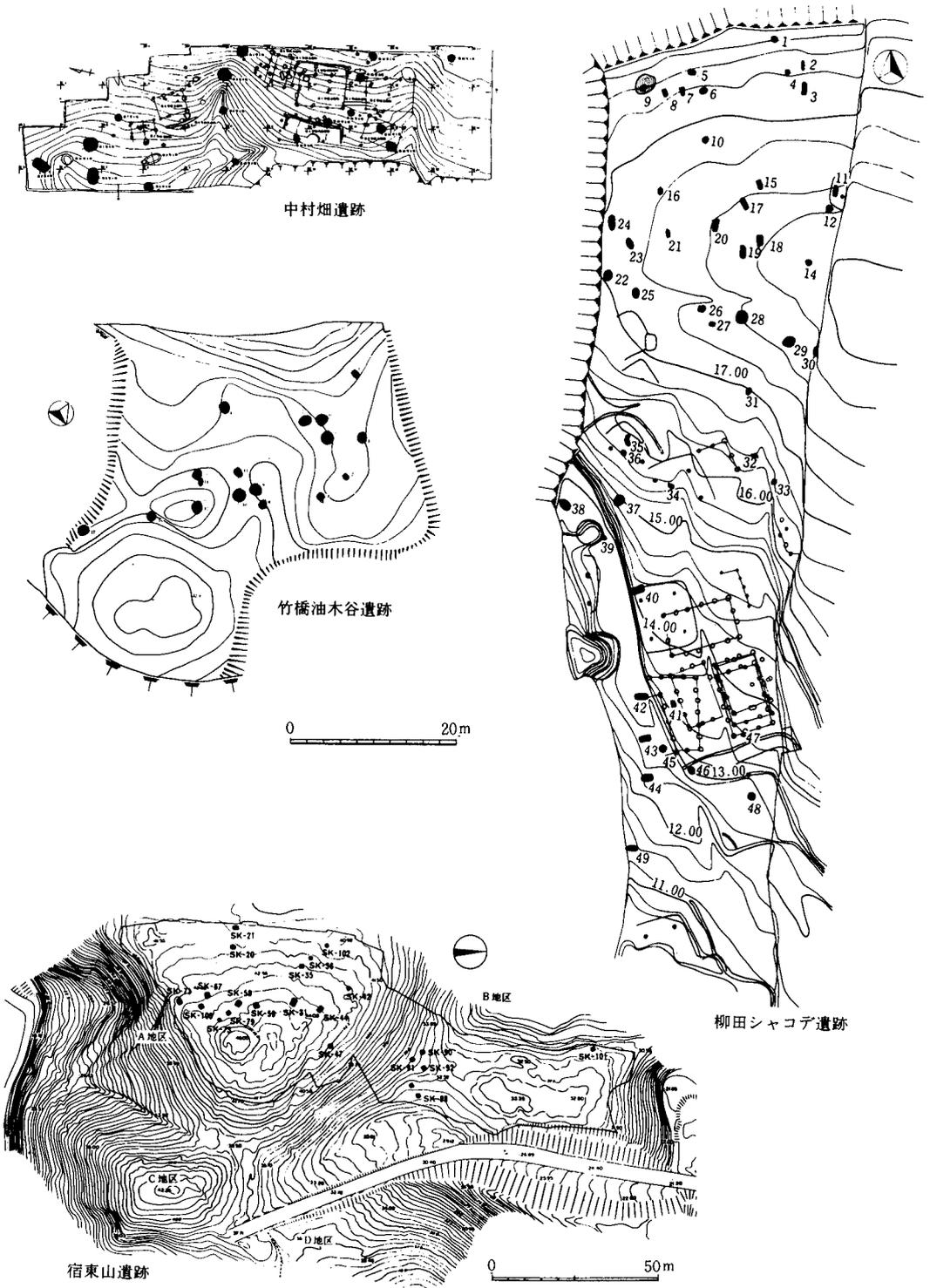
杉谷チャノバタケ遺跡は標高60～70mの丘陵上に立地する。標高63m付近に3基、75m付近に7基検出している⁽⁴⁾。前者より爪形文のある縄文土器が出土している。

柳田シャコデ、柳田台地、寺家オオバタケの3遺跡は近接して存在する。柳田シャコデ遺跡では48基のうち3基より縄文土器が〔河村 1984〕、寺家オオバタケ遺跡では55基のうち39基より縄文土器が出土しており、前期、中期の土器がほとんどである〔湯尻・越坂 1984〕。柳田台地遺跡でも前期後葉の土器の出土が確認されている⁽⁶⁾。

宿東山遺跡は標高30～45mの丘陵上に立地する。21基の土坑が検出され、うち6基より縄文土器、礫石錘、石鏃が出土している。免田一本松遺跡は標高18mを測り、約10基の土坑が検出されている⁽⁷⁾。

谷内石山遺跡は標高27mの丘陵上に立地し、2基の土坑を検出している。〔西野 1980〕。ともに縄文土器を出土している。

岩出ウワノ遺跡は標高20mの台地上に立地し、14基の土坑を検出している〔湯尻 1981〕。縄文土器のほかに石斧、石錘、石鏃が出土している。径1～2m、深さ1m前後のものが通有である。



第167図 遺跡における大型土坑の位置 (縄文時代他)



第168図 大型土坑実測図(縄文時代他)

第10表 大型土坑一覧表（縄文時代他）

中村畑遺跡

土坑番号	法 量 (cm)			出 土 遺 物	分 類
	上 端 部	底 面	深 さ		
1	180	90	160		I A
2	200 × 130	105	180		I A
3	150	80	150		II A ₁
4	140	125	170		I B
5	170 × 135	120 × 80	75		II A ₁
6	160 × 140	60	85		I A
7	75	50	60		I A
9	85 × 70		80		I B
10	80	35	55		II A ₁
12	100 × 89	60 × 52	150		I B
13	90	75 × 65	85		I B
14	80	50	80		II A ₁
15	90 × 75	85 × 60	70		II A ₁
16	110 × 72	85 × 58	80		II A ₁
17	105 × 90	70 × 60	140		I A
18	130 × 115	50	160		I A
19					I A

柳田シャコデ遺跡

土坑番号	法 量 (cm)			出 土 遺 物	分 類
	上 端 部	底 面	深 さ		
1	80		120		I A
2	130 × 50		135		II C
3	150 × 80		90		II C
4	90 × 60		120	縄文土器	I B
5	100		140		I A
6	110 × 90		120		II A ₁
7	130 × 50		165		II C
8	125 × 65		145		II C
9	90 × 70		180		I A
10	85 × 70		70		II A ₁
11	130 × 60		40		II C
12	105 × 80		85		IVA
14	70		50		I A
15	120 × 70		20		III C
16	70		90		I A
17	150 × 70		30		III C
18	140 × 90		150		II C
19	165 × 80		110		II C
20	140 × 90		15		II C
21	100 × 70		50		II C
22	110 × 90		110		II A ₁

23	140 × 80	60	Ⅱ C
24	180 × 90	180	Ⅲ C
25	120	130	Ⅱ A ₁
26	100	140	Ⅱ A ₂
27	90 × 70	95	I A
28	135	120	Ⅱ A ₂
29	150	140	Ⅳ A
30	110	25	Ⅳ A
31	85 × 60	65	Ⅱ A ₂
32	90 × 70	100	I A
33	90 × 60	110	Ⅱ A ₁
34	90 × 70	120	Ⅱ A ₁
35	120 × 65	125	I C
36	80 × 70	105	I B
37	175 × 110	100	Ⅱ C
38	140 × 110	100	Ⅱ A ₁
39	100 × 50	60	I C
40	140 × 70	65	Ⅱ C
41	120 × 90	105	Ⅱ A ₁
42	150 × 70	30	Ⅱ C
43	135 × 70	60	Ⅱ C
44	130 × 80	60	Ⅱ C
45	90 × 80	100	Ⅳ B
46	60 × 50	100	I A
47	80 × 65	130	I A
48	100 × 90	70	Ⅳ A
49	120 × 70	50	Ⅱ C

寺家オオバタケ遺跡

土坑番号	法 量 (cm)			出土遺物	分類
	上 端 部	底 面	深 さ		
1	80 × 110	70 × 70	62	縄文土器	
2	104	70 × 77	86	縄文土器	
3	108 × 90	64 × 62	96	縄文土器	
5	158 × 115	100 × 56	60	縄文土器 (前期)	
6	100 × 78	77 × 60	60	縄文土器 (中期)	
7	108	55 × 54	98	縄文土器 (中期)	
13	116 × 100	80 × 50	108	縄文土器 (中期)	
15	116 × 110	90 × 88	152	縄文土器 (前・中期)	
16	120 × 112	94 × 87	20	縄文土器	
17	126 × 107	90 × 57	78	縄文土器	
18	115 × 112	72 × 57	80	縄文土器	
19	96 × 87	40 × 30	84	縄文土器	
21	120 × 116	50 × 44	48	縄文土器 (中期)	
22	128 × 60	100 × 32	70	縄文土器	
23	154 × 88	104 × 48	58	縄文土器 (前期)	
24	142 × 130	68 × 62	100	縄文土器 (前・後期)	
25	130 × 100	50 × 98	48	縄文土器 (中期)	
26	105 × 100	50 × 42	100	縄文土器	
27	104 × 100	82 × 76	52	縄文土器 (中期)	

28	150 × 140	60	176	縄文土器 (中期)
29	132 × 60	110 × 32	52	縄文土器 (中期)
30	200 × 166	130 × 91	57	縄文土器 (中期)
32	118 × 93	78 × 60	50	縄文土器 (前・中期)
33	115 × 65	96 × 35	76	縄文土器 (中期)
34	142 × 92	97 × 40	80	縄文土器 (前期)
35	116 × 103	84 × 58	70	縄文土器 (前期)
36	300 × 120	198 × 44	56	縄文土器
37	200 × 83	155 × 30	32	縄文土器
38	112 × 84	74 × 36	80	縄文土器
39	180 × 155	68	91	縄文土器 (前期)
40	200 × 113	110 × 78	60	縄文土器
41	103 × 100	45 × 36	125	縄文土器 (中期)
42	245 × 100	112 × 72	30	
43	110 × 88	54 × 52	88	縄文土器
44	150 × 100	52 × 48	60	
45	128 × 85	82 × 54	76	
46	110 × 80	80 × 40	80	
47	103 × 81	64 × 48	60	
48	228 × 103	179 × 47	51	
49	198 × 103	146 × 47	64	縄文土器 (中期)
50	132 × 63	92 × 38	44	
51	130 × 66	88 × 36	48	
52	108 × 70	82 × 34	68	
53	122 × 70	96 × 30	83	
54	104 × 64	93 × 51	80	
55	122 × 103	74 × 56	45	
56	138 × 85	102 × 48	70	
57	224 × 83	100 × 36	96	
58	150 × 88	94 × 50	62	
59	124 × 103	76 × 58	133	
60	105 × 86	86 × 60	40	
61	93 × 80	80 × 60	10	縄文土器
62	110 × 98	78 × 56	93	
63	122 × 90	92 × 66	15	
64	132 × 90	112 × 73	13	

宿東山遺跡

土坑番号	法 量 (cm)			出土遺物	分類
	上 端 部	底 面	深 さ		
SK-20	165 × 137	85 × 85	130		Ⅱ B
21	175 × 125	110 × 63	115		Ⅳ C
31	250 × 185	132 × 70	158	縄文土器	Ⅰ C
35	138 × 130	68 × 63	153		Ⅱ B
36	94 × 90	70 × 68	152	縄文土器	Ⅱ B
42	134 × 110	87 × 52	106		Ⅱ A ₁
44	185 × 146	170 × 97	122		Ⅰ C
47	132 × 121	86 × 72	175		Ⅱ B
58	191 × 137	125 × 75	148	縄文土器	Ⅱ B
59	190 × 157	93 × 84	150	縄文土器	Ⅱ B

67	181 × 135	120 × 70	93		IVC
71	168 × 145	110 × 65	144		IVA
73	99 × 97	62 × 61	90		IB
79	130 × 105	74 × 69	70		IVB
88	125 × 122	77 × 70	130		II B
90	140 × 115	80 × 60	118		II B
91	117 × 115	70 × 63	68		II B
92	150 × 133	85 × 85	108	石鏃, 礫石錘	IB
100	147 × 118	81 × 77	142		II B
101	128 × 123	78 × 48	152	縄文土器	II B
102	95 × 78	72 × 58	130		IA

谷内石山遺跡

土坑番号	法 量 (cm)			出土遺物	分類
	上 端 部	底 面	深 さ		
1	104 × 74		94	縄文土器	IC
2	77 × 58		140	縄文土器	IB

竹橋油木谷遺跡

土坑番号	法 量 (cm)			出土遺物	分類
	上 端 部	底 面	深 さ		
1	123 × 113	62 × 42	121		III A
2	85 × 64	52 × 45	129		IVA
3	95	52	149		IVB
4	100 × 73	87 × 53	81		II A
5	154	23 × 21	134		IVA
6	142 × 130	44 × 32	210		II A
7	156 × 116	92 × 65	112		IVC
8	106 × 90	83 × 69	97		II A
9	138	48 × 40	123		IVA
10	159	54 × 49	127		IVA
11	120 × 80	105 × 50	66		IA
12	155 × 130	71 × 59	92		IVA
13	120 × 105	59 × 47	132		IVA
14	101 × 50	84 × 32	45		IC
15	137 × 121	111 × 87	115		IVA
16	110	59 × 43	119		IVA
17	142 × 126	71 × 51	100		IVA

4 縄文土坑研究の現状と課題

縄文時代の丘陵において検出される大型土坑群の機能については、神奈川県霧ヶ丘遺跡の調査〔今村編 1973〕以来これを落とし穴とする考えが大勢を占めている。検出例は東日本に多い。これを落とし穴とする根拠の一つに民族例があげられているが〔今村 1973、1976〕近年これをまとめたものには、基礎的な検討なしに落とし穴状遺構としているものもあり、慎重な検討が望まれる。

能登半島における縄文土坑については、報告書の公刊されているものを第10表で示した。さらに第169図で形態分類を試みた。これらを、形態、法量、出土遺物の三点について検討してみよう。

形態 分類にあたって大きな基準としたのは、まず平面形である。これには円形、方形、長方形の基本形がある。円形をA類、方形をB類、長方形をC類とする。さらに楕円形や長楕円形も存在するが判断がむずかしい。この他、分類しがたい不整形なものがある。次に横軸においたのは、付属施設の有無である。つまり底面における施設の有無である。施設のないものをⅠ類、中央部に大きなピットのあるものをⅡ類、Ⅱ類のうち二段掘りのものをⅡA₂とする。Ⅲ類としたものは2個の大きなピットを穿つ例である。Ⅳ類は小さなピットを穿つものである。さらに、図では示さなかったが、法量の大小や壁の角度でさらに細分することも可能である。

法量 報告書の公刊された資料によって坑底面積、容積をみると、中村畑遺跡は坑底面積が約0.5㎡、容積が約0.7㎡である。寺家オオバタケ遺跡は削平を被っているため容積は少なくなっているが、約0.3㎡である。宿東山遺跡は坑底面積が約0.6㎡、容積は0.9㎡を測る。この他に、縄文土坑ではないが竹橋油木谷遺跡をみると、坑底面積が0.4㎡、容積は0.5㎡を測る。いずれも平均値である。これらの数字は後述の弥生土坑との比較において明らかな差異を認めることができる。

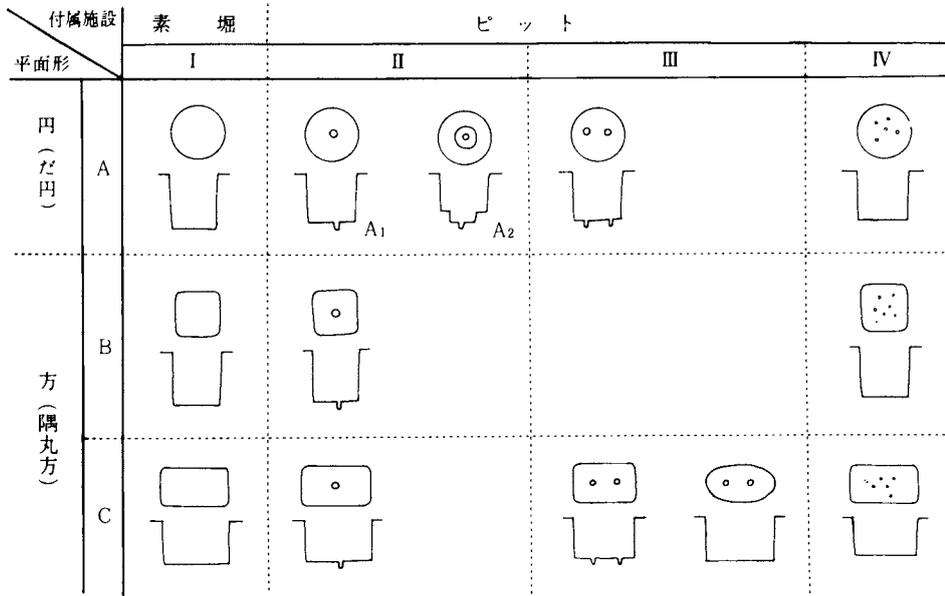
出土遺物 出土例はすべて小片である。土坑の機能との有機的な関連は見出しがたい。さらにこれをもって土坑の構築時期を考えることはできない。しかし、少なくともその上限を考えることは可能である。宿東山遺跡では構築面が弥生時代の包含層より下にあることが確認されており、土坑出土の土器も時期決定にあたって二次的資料としての意味をもとう。

土器でみると杉谷チャノバタケ遺跡、柳田シャコデ遺跡、柳田台地遺跡で前期のものが、寺家オオバタケ遺跡で前期と中期、宿東山遺跡で前・中期がそれぞれ認められる。小片のために時期を知り得ない例も見られる。

5 縄文土坑の機能をめぐって

これまで述べしてきたことをまとめておこう。

- 1 縄文土坑は丘陵上に存在し、その多くは群在する。
- 2 土坑群は形態的にいくつかの変化をみせるが、機能的には同一と考えられる。
- 3 土坑群と縄文時代の集落が接して検出された例はない。
- 4 出土土器のうち時期の明らかなものは早期～中期が多い。



第169図 大型土坑の形態分類図（縄文時代他）

第11表 各遺跡における大型土坑の類型（縄文時代）

分類 遺跡名	I			II				III		IV			確認 基数
	A	B	C	A ₁	A ₂	B	C	A	C	A	B	C	
杉谷チャノバタケ							○			○		○	10
中 村 畑	○	○		○									17
北吉田フルワ	○												9
柳田シャコデ	○	○		○	○		○		○	○	○		49
柳田台地										○		○	
宿 東 山	○	○	○			○					○	○	21
冬 野				○		○	○			○			22
免田一本松			○				○						
谷内石山	○												2
竹橋油木谷	○			○					○	○	○	○	17
岩出ウワノ			○		○					○			14

5 土坑の構築に要する仕事量は大きい。したがって日常生活に占める要素は小さくないと考えられる。

以上の要素をもつ土坑群であるが、現在のところその機能として有力なのが落とし穴説である。落とし穴説をとる今村啓爾氏によると〔今村 1980〕その機能をもつ土坑の検出例は1980年現在で北海道、東北、関東の全都道県と新潟、長野、山梨、岡山、鳥取の各県で見られるという。ほとんどの研究者が落とし穴説をとっているが、渡辺誠氏のようにこれに疑念を呈する研究者もみられる〔渡辺 1974〕。現時点における能登半島の例では落とし穴説をとる有力な証左を提示しえない。また、否定する資料にも乏しい。

今後、機能の解明に有力であると思われるものは土坑内覆土の水洗選別である。この方法の有効性については多くの実施例が証明しているが、石川県では実施例が皆無で、その理解は依然として停滞的であるといえよう。近年行なわれた小松市佐々木アサバタケ遺跡の例は中世の井戸であるが、その結果は固定的な中世の農業観に少なからぬ影響を与えるものであるという。土坑の機能については水洗選別法の例を重ねて論じても遅くはないし、より科学的な結論を導くことができよう。

勿論、多くの研究者がその可能性を指摘する落とし穴説についても検討を進める必要がある。落とし穴ならばどのように機能するのか、具体的には坑底のピットの性格や捕えようとする動物の種類は何なのかという点である。そして、東北日本に多く検出されることの原因や能登半島の例がそれらと系譜的なつながりをもつのかなど多くの課題が存在する。縄文土坑の機能を論じることは小論の目的ではないのでこれ以上紙幅を費さない。

6 弥生土坑の検討

かつて筆者は弥生時代の大型土坑の検討にあたって、その立地を丘陵上のものに限って考えた〔三浦 1987〕。しかし、その時点ですでに沖積平野においても近似する土坑の存在が指摘されており、その後新しい知見も得ている。これらが形態的な類似性のみならず、機能的にも同一であるのか、あわせて検討の対象としたい。なお、ここで述べることは筆者の土坑に対する過去の考えと基本的に同一であり、その記述において重複する部分が生じる可能性がある。この点において諸賢のご寛容を請いたい。

(1) 竹生野遺跡の概要

19基の土坑を検出した本遺跡をいくつかの要素において検討しよう。まず、平面的な分布をみると、南北にのびる本遺跡のなかでも南側に集まる傾向が見られる。さらに19基は次のように分けられる。北より第1次の第11号・12号土坑、第2次の第1号・11号土坑が1群をなす。次に第2次の第2～第5号が、その東側に第2次の第6号～第9号がそれぞれ一群を形成する。そして南側では第2次の第23～29号土坑が一群をなしている。第2次調査の第2号～第9号は本来半環状に連なっていた可能性も考えられる。

土坑と竪穴住居の関係は下表のように整理した。出土土器でみる限りは土坑が竪穴住居に先行する。そして土坑が盛期を迎える竹生野Ⅱ期に竪穴住居は見られない。

土坑と竪穴住居の関係

	竹生野Ⅰ期	竹生野Ⅱ期	竹生野Ⅲ期	竹生野Ⅳ期
土 坑	2次-12号	1次-2~5・7~9号	1次-11・22・24~29号	2次-11号
竪 穴 住 居			1次-3号, 2次-7号	2次2・11・21号

形態についてみると、平面円形のものが11基、方形のものが3基、長方形のものが3基となる。坑底施設でみれば、存在するものが8基あり、すべてが壁溝をもっている。最も多い形態は、平面円形で、坑底に壁溝をもつものである。

土器の出土状態は、第1次調査の第2号土坑々底より甕形土器が出土した例を除いて、土坑との有機的関連は認められない。多くは覆土上層より出土しており、土坑の本来の機能とは別に、捨て穴として使用された形跡を窺知しうる。

法量については、平面形が円形の土坑と方形ないし長方形の土坑の間に大きな差異が認められる。まず上端部の長さをみると円形のものが、径1.5~2mであるのに対し方形のものは一辺が3m前後のものから4mに近いものもある。したがって、坑底面積および容積に大きな違いが生じてくる。円形の土坑は坑底面積の平均が約1.8㎡、容積の平均が2.9㎡であるのに対し方形の土坑は坑底面積の平均が6.1㎡、容積の平均が9㎡を測る。

(2) 能登半島における弥生土坑の実態

国分高井山遺跡(第170図、第12表) 邑知地溝帯の北縁部、標高15~25mの丘陵上に立地する。大型土坑は8基検出された〔土肥 1984〕。うち5基は標高15m付近で幅約2mの平坦面をつくり、一列に並んで構築されている。この位置は集落の縁辺部にあたり、集落の入口にあたとされる。土坑出土の土器は月影Ⅰ式期を主体とするが、竪穴住居は月影Ⅰ式期から同Ⅱ式期にかけての土器を出土している。

冬野遺跡⁽⁹⁾ 竹生野遺跡と同じく宝達山麓の派生丘陵上に立地する。標高は約15mを測る。⁽¹⁰⁾26基の大型土坑を検出しているが、並行期の竪穴住居は確認されていない。土坑の形態をみると、平面方形のものが1基で他は円形ないし楕円形である。最も多いのが平面円形で壁溝をもつものであり約6割を占める。また壁溝をもつものは全体の7割をこえる。法量をみると上端部径が1.5~2.4mの間にあり平均1.8mを測る。深さは平均1.4mで最も深いものは2mに近い。坑底面積の平均が1.6㎡、容積の平均が2.4㎡を測る。

谷長割遺跡(第170図、第12表) 河北潟北縁の丘陵上に立地し、標高約20mを測る。約7,500㎡の調査面積のなかで検出した大型土坑は、1基である〔山川・吉野 1984〕。土坑は平面方形で3.3×3m、深さ1.6mを測る。壁面は外開きに立ち上る。坑底には幅20cm、深さ10cmの壁溝がみられる。3次にわたる調査のなかで竪穴住居14基、掘立柱建物13棟、土坑22基などが検出されている。大型土坑出土土器は月影式期(Ⅱか)であり、並行期の竪穴住居も存在する。

宇気塚越遺跡⁽¹¹⁾ 谷長割遺跡の南、標高約18mの台地上に占地する。大型土坑は2基検出された。

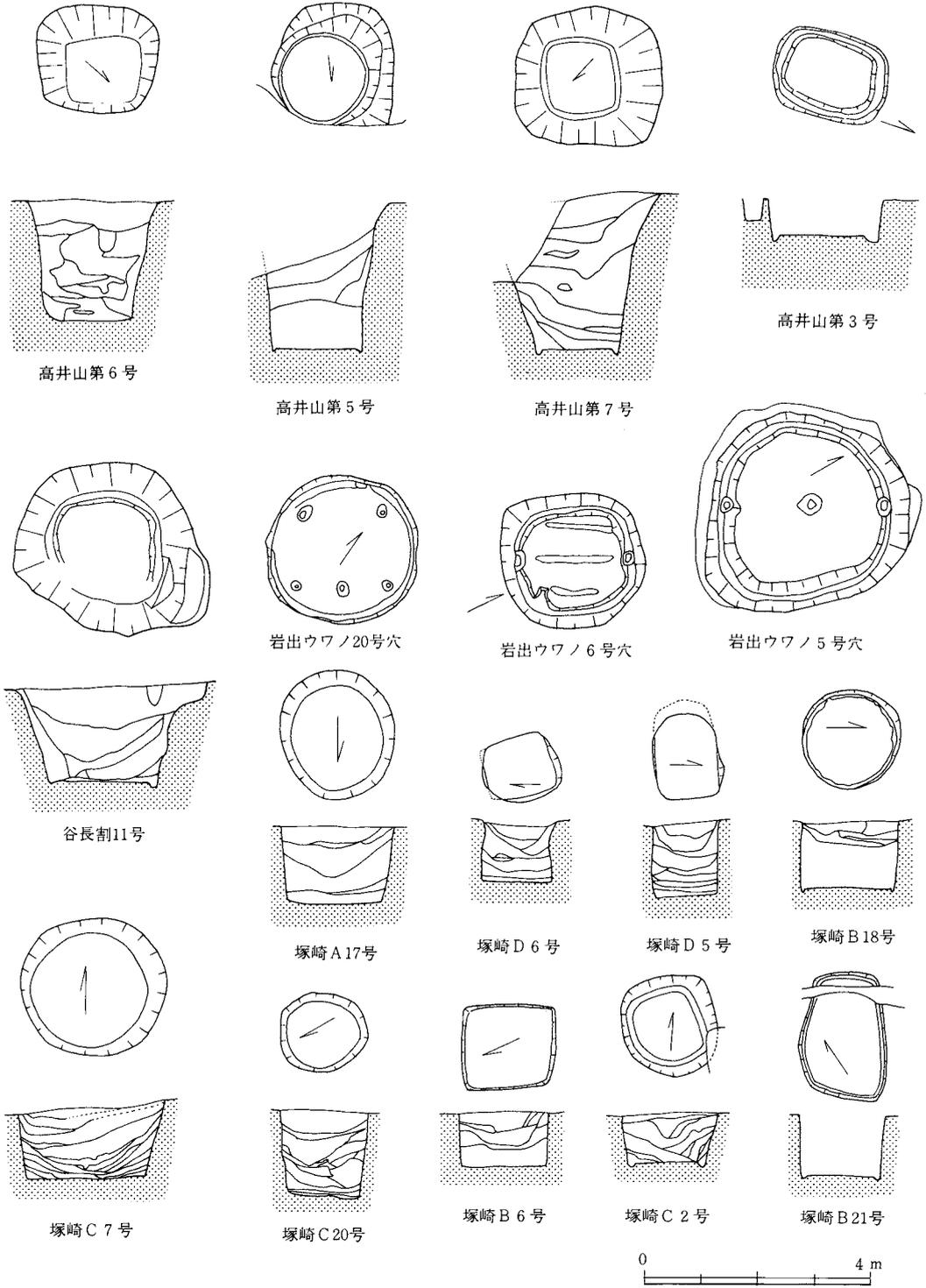
B V-01土坑は平面円形で上端部径1.8m、深さ0.75m、底径1.45mを測る。坑底には壁溝があり、幅20cmを測る。A-3号土坑は平面円形で袋状を呈する土坑で上端部径1.25m、くびれ部径1m、深さ0.6m、底径1.3mを測る。この土坑のように明らかに袋状を呈するものは、能登半島において他に例を見ない。両土坑の出土土器は月影Ⅱ式期と考えられる。

岩出ウワノ遺跡（第170図、第12表）河北潟の南にあり、森本・津幡丘陵の間をぬって流下する森下川の右岸洪積台地上に立地する。標高は約20mを測る。森下川を挟んだ対岸には塚崎遺跡、七ツ塚墳群が位置を占める。大型土坑は18基、並行期の竪穴住居が6基礎検出されている〔湯尻 1981〕。平面形をみると、円形、方形、長方形のものがあり、法量は長軸1.5～2.5m、短軸0.8～1m、深さ1m前後を測るものが多い。最大の5号穴は平面が隅円方形で、一辺3.6m、深さ2m、坑底面積約7㎡を測る。坑底には壁溝があり、三個のピットが一列に穿たれる。坑底は三面つくられているという。また、6号穴では板材、10号穴では丸太がともに炭化した状態で検出され、底面に施設として置かれていた状況が看取できるという。本遺跡の土坑は坑底施設の形態において特筆される。また土器の出土状態については「穴を廃棄する際にあたかも投げ込んだような雑然とした状態であった。土器も穴の床面から浮いたものが多い」と報告されている。土器は月影Ⅰ式期である。

月影遺跡（第170図、第12表）森本・津幡丘陵の端部に立地し、標高30m前後を測る。調査範囲が狭く土坑1基のみの検出である。〔吉岡・浜岡 1968〕土坑の平面は円形で、上端部は2.4×1.9mで、深さ約1mを測る。坑内は底面からほとんどシジミと思われる貝殻で充填されており、上層では弥生土器といわゆる碧玉の小片1点が出土している。土器は吉岡康暢、浜岡賢太郎両氏の検討を経て、月影式土器として紹介され、現段階では弥生時代後期後葉における型式名として認められている。

塚崎遺跡（第170図、第12表）森本・津幡丘陵の一端に位置し、森本川を挟んで先述の岩出ウワノ遺跡の対岸に占地する。北陸自動車道の建設によって遺跡の立地する丘陵の大半が調査された。標高30m前後を測る。確認された大型土坑は77基である。〔吉岡・小嶋他 1976〕。この他、竪穴住居25基、掘立柱建物3棟などが検出された。なお、第12表に掲げた土坑は筆者が報告書により、大型土坑と判断したものに限っている。土坑と竪穴住居との関係について、居住域に近接しつつも、数十cmから1m内外の間隔を保ちつつ地区を異にする4つの群と、居住域に重複して密集する2群が存在するという。時間的な動きについては、全般的には土坑域から居住域へ推移する傾向が見られるという。しかしながら、住居跡に後出する例も明らかにされている。土坑群の位置は、住居群とは別個の性格を有するものとして当初から一定の地区を占めていたのではないかと指摘される。

吉岡康暢氏は土坑群を整理して、その機能について墓坑説を展開されている。その根拠として、1 張り出し部のある土坑は遺物の供献を予測している。2 長方形土坑は形状、法量や遺物の出土状況からみて成人の伸展葬用として十分な条件を備えている。3 管玉や鉄鏃を出す土坑では覆土埋め戻し中の供献行為が窺える。4 土坑は掘削後それほどの時間の経過なしに埋め戻されている。5 広島県早稲田神社境内遺跡の例をはじめ墓坑と考えられる円形や長方形土坑の例



第170図 大型土坑実測図（弥生時代）

第12表 大型土坑一覽表(弥生時代)

国分高井山遺跡

土坑番号	法 量 (cm)			底面積 (m ²)	出 土 遺 物	分 類
	上 端 部	底 面	深 さ			
1	160 × 127	134 × 94	95	1.3	弥生土器	I C
2	170 × 75	160 × 64	55	1.0		I C
3	220 × 156	153 × 107	65	1.6	弥生土器	II C
5	250	150	260	1.8	弥生土器・砥石	II A
6	210 × 193	132 × 118	219	1.6	弥生土器	I B
7	262 × 250	130 × 123	300	1.6	弥生土器	II B
8	160 × 137	120 × 100	140	1.2	弥生土器	II B
9	150		75		弥生土器・馬歯	I A

竹生野遺跡

土坑番号	法 量 (cm)			底面積 (m ²)	出 土 遺 物	分 類
	上 端 部	底 面	深 さ			
1次-1	150				(未掘)	
2	206 × 165	160 × 130	173	2.0	弥生土器	II A
3	146 × 130	130 × 116	120	1.3	弥生土器	II A
4	228 × 194	184 × 162	180	2.7	弥生土器	I A
5	150				(未掘)	
6	210	180	105	2.5	弥生土器	I A
7	175 × 165	125	120	1.2	弥生土器	I A
8	215	180	110	2.5	弥生土器・砥石・種核	I A
9	210 × 180	160	155	2.0	弥生土器	II A
11	380 × 350	280 × 235	230	6.6	弥生土器	II C
22	300 × 280	250 × 235	170	5.9	弥生土器	II B
24	178 × 155	110	146	1.0	弥生土器	II A
25	175 × 160	130 × 120	208	1.3	弥生土器	II A
26	200 × 180	180 × 150	260	2.5	弥生土器	I A
27	290 × 290	230 × 200	145	4.6	弥生土器	I C
28	380 × 320	350 × 300	70	10.5	弥生土器	I C
29	140	105	150	0.9	弥生土器	II A
2次-11	240 × 220	195 × 190	90	3.7	弥生土器	I B
12	310 × 260	255 × 220	210	5.6	弥生土器	I B

谷長割遺跡

土坑番号	法 量 (cm)			底面積 (m ²)	出 土 遺 物	分 類
	上 端 部	底 面	深 さ			
11	330 × 300		160		弥生土器	II B

月影遺跡

土坑番号	法 量 (cm)			底面積 (m ²)	出 土 遺 物	分 類
	上 端 部	底 面	深 さ			
	240 × 190		100		弥生土器・貝	I A

塚崎遺跡

土坑番号	法 量 (cm)			底面積 (㎡)	出 土 遺 物	分 類		
	上 端 部	底 面	深 さ					
A 2	185 × 130	160 × 120	73	1.9	弥生土器 鉄鎌	IC		
A 3	180 × 160	190 × 170	60	2.8		IA		
A 9	180 × 160	165 × 145	105	2.1		IA		
A 10	190 × 185	170 × 165	70	2.3		IA		
A 11	205 × 203	185	80	2.7		IA		
A 12	280 × 245	235 × 190	65	4.5		IA		
A 17	230 × 210	190 × 170	140	2.8		IA		
B 1	175 × 143	160 × 130	25	2.1		鉄鏃	IC	
B 2	180 × 165		70				IA	
B 4	107 × 70	98 × 65	45	0.8			IA	
B 5	158 × 132	150 × 125	35	1.9			IC	
B 6	170 × 150	158 × 140	95	2.2			IC	
B 11	243 × 170	166	150	2.2			IIA	
B 13	130 × 110	110 × 90	50	1.0			IB	
B 14	160 × 97	130 × 80	60	1.0			IIIC	
B 16	190 × 186	183 × 174	130	2.4			弥生土器・鉄鏃 弥生土器・鉄器片	IIA
B 18	180 × 177	173	122	2.4				IIA
B 21	225 × 155	205 × 135	110	2.8	鉄器片	IIIC		
B 22	213 × 180		48			IA		
C 1		210 × 205	110	3.5	IA			
C 2	180 × 170	144 × 125	95	1.6	IIA			
C 3	218 × 120	220 × 110	47	2.4	管玉	IC		
C 4	162 × 145	140 × 130	40	1.5		IA		
C 7	260 × 245	210 × 205	130	3.5	弥生土器	IA		
C 10	190 × 170	140	130	1.5	弥生土器	IA		
C 14	115 × 110		52		IA			
C 19	197 × 182	153 × 140	92	1.8	弥生土器・鉄器片・石核 鉄器片	IA		
C 20	155 × 140	120	156	1.1		IA		
C 22	220 × 160	185 × 135	120	2.5	IC			
D 1	165 × 145	130 × 130	40	1.7	弥生土器・鉄器片	IB		
D 2	165 × 120	130 × 117	35	1.5		弥生土器	IB	
D 3	216 × 135		80		弥生土器・鉋	IIA		
D 4		266 × 166	130	5.6		IA		
D 5		235 × 146	174	3.4	弥生土器	IC		
D 6	190 × 158	163 × 145	150	2.4	弥生土器・鉄斧・鉋・刀子・鍬先	IB		
D 7	213 × 188	154 × 130	170	2.0		IC		
D 8	168 × 158	148 × 140	135	1.7		IA		

北塚B遺跡

土坑番号	法 量 (cm)			底面積 (㎡)	出 土 遺 物	分 類
	上 端 部	底 面	深 さ			
4	110 × 90		135		弥生土器	IA
11	120		50		弥生土器	IIIA

がある。などを提示されている。

北塚B遺跡(第12表) 犀川扇状地と手取川扇状地の縫合部に位置する。標高5m前後の沖積平野である。8基の古墳の他に11基の土坑が検出され〔戸澗・三浦編 1985〕、うち2基を大型土坑としてとりあげる。第4号土坑は不整であるが、第11号土坑は平面円形で垂直な壁面を見せる。両土坑とも坑底施設はない。月影Ⅱ式期の土器を出土している。並行期の竪穴住居は検出されていない。

本遺跡はこれまで述べてきた洪積台地の例とは立地を異にする。出土例が多い台地上の例と本遺を含む沖積平野の例を一様に考えることにはやや躊躇をおぼえる。後述する押野タチナカ遺跡、御経塚シンデン遺跡も含めて、共通する特徴は、基数が少ないことである。この他、金沢市西念南新保遺跡や小松市の高堂遺跡、白江ネブツドウ遺跡などの例もあげられることもある。沖積平野の例はさらに類例の集積をまって、同一立地遺跡のみで検討する必要も生じよう。

押野タチナカ遺跡^(1,2) 手取川扇状地北端部の沖積平野に位置し、標高約13mを測る。大型土坑は2基検出されている。第53号土坑は平面が不整形で上端部長2.8×2.6m、深さ0.7m、底面は2.4m×1.75mを測る。坑底施設はない。第87号土坑は平面方形である。上端部は2.7m四方で、深さ0.5m、底面は2.6m四方である。壁面はほぼ垂直に立ち上る。坑底には壁溝がみられる。第53号土坑は坑底面積4.2㎡、容積が2.9㎡、第87号土坑が坑底面積6.7㎡、容積3.4㎡とともに大きいのが特筆される。いずれも月影Ⅰ式期の土器を出土している。並行期の竪穴住居が存在する。

御経塚シンデン遺跡^(1,3) 押野タチナカ遺跡のやや西側の沖積平野に位置し、標高約10mを測る。土坑は1基で平面形は方形、上端部長1.9×1.75m、坑底長1.65×1.6mを測る。坑底面積は2.6㎡である。並行期の竪穴住居が検出されている。

(3) 大型土坑の検討

大型土坑を形態、法量、坑底施設の三要素について検討し、機能解明の手がかりとしたい。

形態分類 分類にあたって大きな要素となるのは、一つは坑底施設の有無、もう一つは平面形である。さらに断面形も加わると思われるが、壁面の立ち上りは、破壊したものとそうでないものとを十分に弁別すべきで、ここでは各個にあたる余裕はなかった。

さて、第171図に分類図を示した。縦軸を平面形、横軸を坑底の形とした。縦軸のA類は平面円形、B類は方形(隅円方形も含む)、C類は明らかに長方形(隅円長方形も含む)と認められるものである。A'類としたのは、平面円形であるが、断面形が明らかに袋状を呈しA類とは区別さるべきものである。ただし、宇気塚越遺跡に一例を知るのみである。

横軸のⅠ類は坑底施設をもたないもの、Ⅱ類は壁溝のみをもつもの、Ⅲ類は壁溝に加えてピットが見られるものである。坑底中央にピットをもつもの、大きなピットを数個もつもの、中央に大きなピットをもち、その周囲に小ピットを配するもの、さらに小ピットのみを多数穿つもの各形態がある。Ⅲ類は形態が多様で、さらに細分も可能となる。ただし、現在のところ1基のみの例もあり、類例の増加にまちたい。Ⅳ類は壁溝がなく、ピットのみ見られるものである。中央に1個穿つものや、竪穴住居の柱穴のように方形に4個配置されるもの、あるいは2個一列に並ぶものが見られる。

法 量 国分高井山遺跡では形態は異なっても法量はほぼ近似している。7号土坑のように3mを越える深さをもつものも存在する。坑底面積は平均1.4㎡、容積の平均は2.5㎡である。塚崎遺跡では、平面円形を呈するA類が方形のB類より平面的に大きいことが明らかにされている。B、C類は浅いものが多い。壁溝の有無による差異はとりたてて認められない。坑底面積の平均は2.2㎡、容積の平均は2.3㎡である。この他、すでに述べたが岩出ウワノ遺跡の5号穴や押野タチナカ遺跡の第87号土坑も坑底面積の大きい例として特筆できる。

塚崎遺跡の例を除いて、平面方形のものに規模の大きなものが多い傾向を窺知できる。前記の分類においては、規模の大小もその要素に加える必要も生じてこよう。

坑底施設 これは前記の分類では、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ類として、素掘のものと同様に区別する基本的な要素となっている。坑底に溝なりピットが設けられるのは、それを一定の目的に利用するためであろう。ピットの大小や配置の違いは、同一目的を達成するための、方途の違いとみられる。坑底施設のいくつかを検討してみよう。

坑底にみられる施設は、壁溝とピット、そして希少な例として岩出ウワノ遺跡にみられる木材である。壁溝の役割については、排水あるいは除湿、さらに板を立てる基礎などが想定される。その法量をみると幅10~20cm、深さは10cmに満たないものが多い。その断面は弧状を呈するものが多く、板を立てるには不適であるといえよう。

中央に穿たれるピットについては柱状に木を立てる穴として機能しうる。岩出ウワノ遺跡の20号穴は径15~20cmを測る。小さなピットが複数みられるのは、壁溝と同様の目的をみられる。木材を置く例も底面を湿気から離れた状態で利用しようとする意図のあらわれとみたい。

(4) 西日本の動態と土坑の機能

大型土坑についてこれまでに知りえたことを列記しよう。

- 1 能登半島の大型土坑は弥生時代後期後葉の集落内に存在する。集落のなかでは竪穴住居と近接せず、特定区域を占める。
- 2 土坑は洪積台地では群在し、沖積平野では基数が少ない。
- 3 土坑はいくつかの形態に分けられるが、基本的形態や分布状況をみると同一の機能を有するものと考えられる。
- 4 形態の特徴は深いことである。そして、坑底には溝やピットもみられる。
- 5 規模は大きく、構築に相当の作業量を要することより、生活のなかで重要な役割を担った遺構と考えられる。

弥生時代において、大きく、縦に深く掘られた土坑が群在する例がある。北部九州を中心とする西日本に多い袋状土坑群である。上に列記した能登半島の大型土坑群の特徴と共通点をみることができ、西日本の袋状土坑は植物質食料を出土した多くの例⁽¹⁴⁾によって、これを食料用貯蔵穴とする見方で一致している。

乙益重隆氏によると〔乙益 1983〕袋状土坑を検出した遺跡は、北部九州だけでも100ヶ所近く、基数は2,000基を上まわるといふ。以下各地の例をみながら能登半島の土坑群と比較してみよう。

西日本の貯蔵用土坑 弥生時代の貯蔵用土坑の研究は多くない。石野博信氏は、貯蔵の基本形態を屋外土坑、屋内小土坑、高床倉庫の三形態とし、これらの動態を九州から関東まで時期ごとに整理された〔石野 1967〕。佐原真氏は、袋状堅穴は唐古Ⅰ～Ⅱ様式期に北九州・山口でみられ、Ⅱ様式期で消滅する原因を高床倉庫の出現と関連づけている。また、Ⅳ様式期に岡山県北部から島根・鳥取にかけて再び袋状堅穴が出現することを指摘する。しかし、これがⅠ・Ⅱ様式期のものと系統をもつのか不明であるとしている〔佐原 1979〕。丸山潔氏は近畿地方の実例に即して、西日本における貯蔵穴の形態について、北部九州において袋状で大きかったものが、東進するにつれて小さくなり、袋状から円筒形になると指摘されており〔丸山 1980〕、能登半島の土坑群の系譜を考えるうえで示唆的である。乙益重隆氏は縄文時代の例も合わせて袋状堅穴を検討する〔乙益 1983〕。同氏によると、縄文時代の袋状堅穴は東北日本に盛行し、縄文時代のなかで終焉を迎え、弥生時代の袋状堅穴との関係は考えられないという。一方、北部九州においては縄文時代終末期とされる夜臼式期から弥生時代中期末に盛行期があると指摘する。衰退の理由については、その故地とみられる中国に較べて、日本が高温・高湿であったためとされる。

これら先学の所説に拠りつつ各地の動態にあたろう。

北部九州・山口 北部九州では前期から中期の前葉にかけて盛期をおく。山口では前期の後半に出現し、中期後半まで盛行するという。福岡県の門田遺跡谷地区では〔井上編 1979〕後期後葉にドングリの貯蔵穴が不整な形状をもって出現する。形態をみると、必ずしも袋状に限定されないようである。900基を越える土坑が検出された山口の綾羅木郷遺跡〔下関市教育委員会 1981〕の分類によると、平面形は円形または楕円形を呈するものがほぼ8割を占め、断面形は台形や袋状を呈するもの（上端部が狭窄状態になるもの）が5割を越え、壁面が垂直なものは15%余りである。坑底施設については、底面中央に一穴を穿つ例が2割余りを占め、複数のピットを穿つ例も報告されている。

坑内の貯蔵物については、多くの調査例のなかから、明らかに貯蔵状態にあったことを知りうる例がある。佐賀県梅坂遺跡、福岡県吉田遺跡、同剣崎遺跡、同横隅山遺跡、同立岩遺跡、同馬場山遺跡、山口県綾羅木郷遺跡などでは炭化米をはじめとする多量の植物質食料の出土が報告されており〔寺沢 1981〕、福岡県赤間石丸遺跡では粃穀つきの米が甕に入った状態で出土したという〔乙益 1983〕。坑内における貯蔵の一形態を示している。

山 陰 杉本源造氏の整理〔杉本 1984〕に依って山口県を除く山陰東部の動向を窺ってみよう。この地域では中期前葉末までに消えた西部山陰地方をうけて中期中葉より出現し古墳時代前期前葉まで続く。山陰西部から移った土坑はいく分小型化し、数も数十基から十数基へと減ずるといふ。後期になると土坑をもつ遺跡がふえ、それらは古墳時代前期まで営まれる。

鳥取県三朝丸山遺跡では35基をこえる土坑が検出されている。ここでの標準的な形態は袋状を呈しつつ垂直に近い壁面をもつものである。坑底には壁溝をもつものが6基、ピットをもつものは12基検出されている。ここでは遺存状態の良い土坑を選んで、8月の下旬に内外の温・湿度測定実験が行われている。それによると入口を封鎖した際の坑内温度は平均22°、平均湿度は90%であったという。類似する結果は福岡県の門田遺跡辻田地区の実験〔井上編 1978〕でも出てお

り、高湿の克服が課題である。各地域においてこのような実験の集積が望まれる。

山陽 瀬戸内と中国山地では様相を異にするようである。広島県では島根県境の横路遺跡が前期に比定されている。全体の動きとしては山陰よりいくぶん後出的で、中期中葉に出現し古墳時代前期まで続くようである。検出例は中国山地に多く、岡山県津山地方では鳥取県中部との強い関連も指摘されている〔杉本 1984〕。

近畿 明らかな例として兵庫県の東神吉遺跡、楠・荒田町遺跡が知られる〔丸山 1980〕。東神吉遺跡は12基が前期末、1基が後期に比定されている。楠・荒田町では30基検出されており、前期の後葉から中期の前葉に比定される。その形態をみると平面形は円形のものが多く、壁面は垂直に立ち上るものが多い。坑底にピットをもつものが3例見られる。この他、沖積平野における土坑群として奈良県の唐古遺跡があげられるが、すべてを貯蔵用土坑とみることに疑念もある〔丸山 1980〕。

北陸

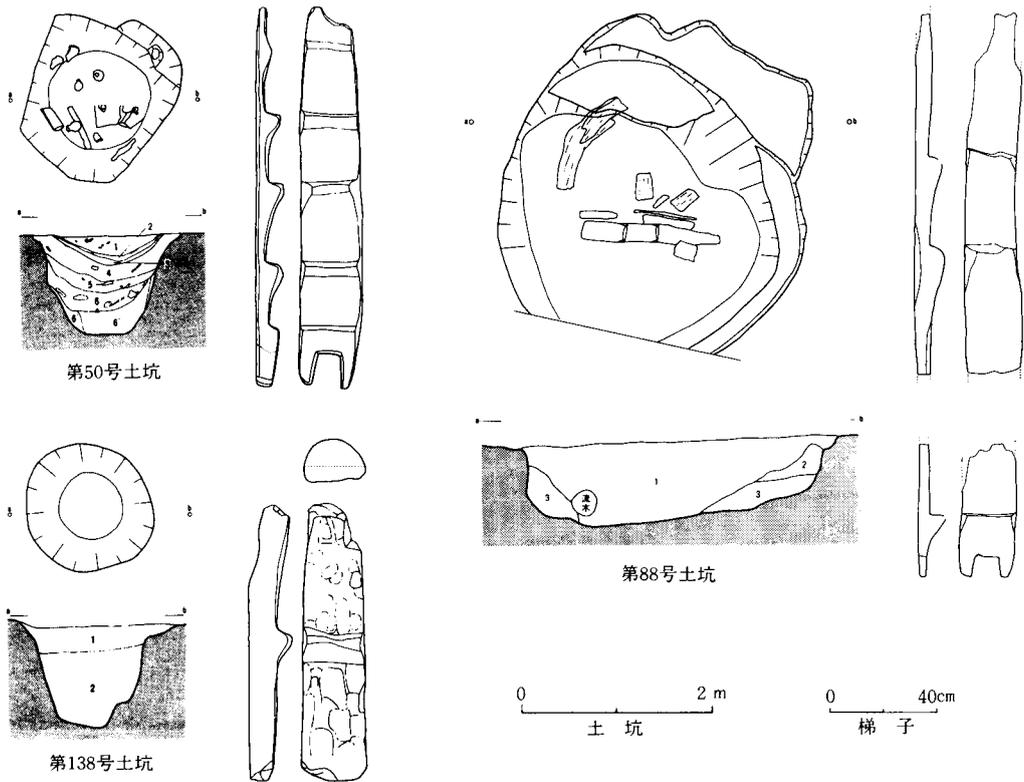
能登半島を除く北陸では富山県の小杉町小杉上野遺跡〔橋本正 1974〕、同中山南遺跡〔橋本正他 1971〕、新潟県新井市の斐太百両山遺跡〔駒井・吉田 1962〕、同柏崎市の下谷内遺跡〔戸根他 1979〕が知られる。やや細かくみてみよう。

小杉上野遺跡では報告書が公刊されていないため詳細は知り得ないが、20基以上の大型土坑が検出されているようである。概要報告の写真によると、平面円形で壁溝をもつもの、壁溝と中央にピットをもつもの、壁溝はないが中央にピットのみ穿つもの、平面方形では壁溝をもつもの、壁溝と中央のピットをもつもの、壁溝がなくて4本柱の竪穴住居のように4個のピットを穿つものがある。平面長方形では壁溝をもつ例がある。この他、小さなピットを複数穿つ例も知られる。第171図のIV B類は能登半島に例はないが、小杉上野遺跡に例を認めるので、これを設定した。弥生時代後期の所産と見られる。

中山南遺跡では報告書によって3基の大型土坑を知りうる。平面形はすべて円形である。第1号ピットは上端部1.3×1m、深さ1.4m、第2号ピットは径1.3m、第3号ピットは径2.25m、深さ0.7mを測る。第3号ピットには壁溝があり幅25cm、深さ10cmを測る。月影式期並行の時期と推定される。

斐太百両山遺跡は発掘調査によって1基の方形土坑が明らかになっているが、群在する模様である。10号ピットと命名された土坑は上端部長2.2×1.7m、深さ1.05mを測る。土器は月影式期に並行する。

下谷内遺跡は沖積平野に立地する。160基余りの土坑が検出されており、大型土坑の概念をもつものを抽出することはむずかしいが、明確に円形、方形の形状をとるものをその可能性をもつものとしてとり上げることができる。このなかで3基の注目すべき土坑がある。第50・88・138号土坑で、いずれも梯子を出土している(第172図)。とくに第50号土坑は、「東壁にたてかけられたような状態で梯子が出土している。上部は失われているが、下半は良く残っており、土坑の底面となる砂層にしっかりくい込んでいた。」という、明らかに梯子を使用していた状態が窺えるのである。出土土器は中期後葉であり、北陸における弥生時代の貯蔵用土坑の最も古い例として



第172図 新潟県下谷内遺跡の土坑と梯子

特筆されよう。土坑群の他に並行期の掘立柱建物や方形周溝墓が検出されている。

土坑の機能

北部九州にはじまり、西日本を中心として分布する弥生時代の縦に深い、大型の土坑群は、貯蔵用の土坑として機能していることが確実視されている。竹生野遺跡の土坑、そしてそれと同一の機能を有すると考えられる能登半島の土坑群は、前記の貯蔵用土坑と共通する要素が多く、これを貯蔵用土坑群と見ることは十分に可能である。

西日本から東進する土坑をみると、時期が下るにつれて形態や規模をやや変えるが、大きく、縦に深いという基本的形態を失っていないのは、そこに貯蔵すべきもの、すなわち植物質食料がその条件を要求していたからである。そして、能登半島の土坑が西日本のそれに比較して坑底における施設が多様なのは、不利な環境を克服するための努力の所産と考えられる。

7 おわりに

小論の前半で縄文土器を出土する土坑を扱ったのは、個別の形態において近似する弥生土坑との基本的な相違を抽出し、二つの土坑論の存在を明らかにするためである。

土坑の機能を形態の検討を通してしか明らかにできなかったのは、坑底における遺物の様相が全くといっていいほど不明なためである。再度、水洗選別法の実施を強調しておこう。

土坑の出入りに板梯子を使用したことが明らかとなった下谷内遺跡の例は重要である。板梯子

は竪穴住居の出入りに使用された例もあるが〔佐原 1979〕、基本的には脚のとどかない地上、あるいは地下へ昇降するための道具である。すなわちこの対象となるのが高床倉庫であり、貯蔵用土坑である。土坑のなかで深さ3mに達するものがあるが、島根県神田遺跡では長さ3.5mの板梯子が知られており〔三宅・広江編 1987〕十分にその機能を果しうる。土坑はその深さに意味があり、板梯子はその補助的道具として不可欠のものであった。能登半島における板梯子出土例をみると鳥屋町黒氏サクラマチ遺跡〔高堀 1956〕、金沢市西念・南新保遺跡⁽¹⁵⁾、同畝田遺跡⁽¹⁶⁾、同犀川鉄橋遺跡⁽¹⁷⁾、松任市八田中遺跡〔久田 1988〕がある。沖積平野の出土に限られるのは、遺存のために好条件であったからである。また、点数が少ないのは、梯子も貯蔵用土坑とともに共同利用、共同管理下にあった可能性を想起せしめる。

能登半島における貯蔵用土坑は弥生時代後期後葉に営まれる。土器型式でいえば、法仏式期から月影式期にかけてである。この屋外土坑が消滅するのは高床倉庫に貯蔵施設がとってかわったとする見方がある〔石野 1967、乙益 1983〕。また、屋内土坑については、石野博信氏は中期中頃に出現し、後期には壁際への固定が看取できるとされる〔石野 1967〕。北陸では、竪穴住居内に土坑が普遍的に見られるが、「工作用ピット」や「特殊ピット」などと呼ばれ、その論点がずれた感がある。その普遍性を認識し、基本的な集落生活のなかで再検討すべき遺構である。屋内の貯蔵用土坑を含んだ貯蔵の系譜を明らかにすること、さらには弥生社会における貯蔵の意義や貯蔵物の実相に迫ることが引き続き残された課題であるといえよう。 (三浦)

註

- (1) 金沢平野における土器編年のうち法仏式期・月影式期〔田嶋 1986〕並行のものと考えたい。
- (2) 地理学的にいう能登半島は畠知地溝帯を基部とする日本海への突出部を指すが〔矢ヶ崎孝雄 1981〕ここではつけ根の金沢平野までを包括した範囲を対象とした。
- (3) 昭和62年石川県立埋蔵文化財センターが調査。担当者の垣内光次郎氏の教示による。
- (4) 昭和62年石川県立埋蔵文化財センターが調査。担当者の栃木英道氏の教示による。
- (5) 湯尻修平氏の教示によると、積雪という悪条件を考慮すると、坑底施設が存在した可能性も考えられるという。
- (6) 昭和53年の調査である。筆者も参加し確認している。
- (7) 昭和61年石川県立埋蔵文化財センターが調査。担当者の西野秀和氏の教示による。
- (8) 調査担当者の垣内光次郎氏の教示によると、イネはもちろんであるが畠における栽培植物の検出が多く、周辺環境復元に大きく寄与する結果が出ているという。
- (9) 昭和61年石川県立埋蔵文化財センターが調査。担当者の松山和彦氏の教示による。
- (10) かつて23基の検出としたが〔三浦 1987〕、筆者の誤認がありⅢA類も存在しないことが判明した。
- (11) 昭和47・48年石川県文化室が調査。担当者の小嶋芳孝氏の教示による。
- (12) 野々市町教育委員会吉田淳・横山貴広両氏の教示による。
- (13) 野々市町教育委員会吉田淳・横山貴広両氏の教示による。
- (14) 寺沢薫・寺沢知子両氏の研究〔寺沢 1981〕によると昭和56年現在で30遺跡が知られる。
- (15) 金沢市教育委員会楠正勝氏の教示による。
- (16) 石川県立埋蔵文化財センター福島正実氏の教示による。
- (17) 石川県立埋蔵文化財センター栃木英道氏の教示による。
- (18) 栃木英道氏の教示によると、石川県鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡では中期後葉の竪穴住居に方形の2段掘り土坑が見られ、炭化した種子が検出されたという。

第3節 弥生時代後期後半の土器変遷について

—能登地域の甕形土器を中心として—

はじめに

県内における弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭にかけての土器編年の研究は、先学諸氏による試案の積み重ねによって着実に前進してきたものである。殊にここ数年の研究動向¹⁾に関しては、必ずや次代のステップにつながるものと確信している。中でも、吉岡編年の補填的立場で発表された谷内尾編年や、漆町遺跡の整理を通して発表された田島編年、また、小地域を対象としたものではあるが、栃木、北野、出越各氏による考察・論考等々いずれも鋭い視点から該期を見詰められたものばかりである。しかし、残念なことにそのほとんどが加賀地域を中心としたものであり、いまだ能登に関する考察・編年試案等は稀薄と言わざるを得ない。今回、竹生野遺跡出土土器の整理を通し、その流れを考えるに際し、加賀地域の編年案とは軌を一にしない様相が一部に認められたことから、この際、能登地域で蓄積されている資料を中心に、その流れを再確認することが、今後の能登地域における編年研究の一助になるのではと思ひ若干の私見を述べることにした。ただ、筆者の力量不足と期間・紙幅の制約によって、ここでは甕形土器の流れしか確認出来なかったことを予め断っておく。

1 画期の設定

時代と共に変化する事物に対し、一定の規準で区切りを付けるという作業は、難しいながらも可能である。しかし、その規準(視点)を何に求めるか、またどこに置くかによって、その区切りは人それぞれ様々なものになることは想像に難くない。より大きな視野で流れの様相を把握することにこしたことはないが、その裏付けとなる基礎資料の充実が不十分であれば、推定の域を出ることは不可能である。そこでここでは、近年能登地域で蓄積されてきた弥生後期後半の土器の中でも最も出土量の多い甕形土器に対して、その変化の流れを以下の基準で把握することにした。

I 期、確立期(旧形態からの分離期・旧形態と新形態との混在期でもある)

ここで言う旧形態とは後期前半の形態を指す。新形態とは後期後半の主要形態である。

II 期、発展期(多遺跡間での形式共有期)

能登地域における該期の主要形態を形成する時期である。

III 期、衰退期(形態の崩れに伴う多様化・共有形態の減少期)

当該期は同時に次期への転換期でもあり、再編形態土器の発生期とも捉えられる。

上記区分は、あくまでも弥生時代後期後半に主眼を置いた画期の設定であり、系譜的には一連の流れで捉えられるものもある。また同時に、明確に一線を画することの出来ない視点からの画期の設定であることも事実である。ただ、各種・各タイプごとに変化のスピードが異なるものを同一に取り扱うことは困難であるため、ここでは先ず各種別に把握することとし、それぞれ以下のように捉えることにした。



2 甕形土器の分類

能登における弥生後期後半の甕形土器を形態別（口縁部を中心として）に概観した場合、次の4類に分類することが出来る。

甕形土器Ⅰ類－有段口縁甕形土器

- Ⅰ－A・有段口縁帯に擬凹線を施すもの
- Ⅰ－B・有段口縁帯が無文のもの

甕形土器Ⅱ類－くの字口縁甕形土器

甕形土器Ⅲ類－付加状口縁甕形土器

甕形土器Ⅳ類－受口状口縁甕形土器

上記各類はそれぞれ各タイプに細分され、その各類・各タイプが独自のスピードで変化しながら該期の甕形土器の流れを構成する。その各類・各タイプの変化のスピードが同一でないことが、編年作業を混雑にする一要因とも考えられる。それをよりの確に把握するためには、各類・各タイプごとの変化の流れを性格に押えることが必要不可欠であろう。

3 各類の流れ（第173図～第175図参照）

Ⅰ類・有段口縁甕形土器

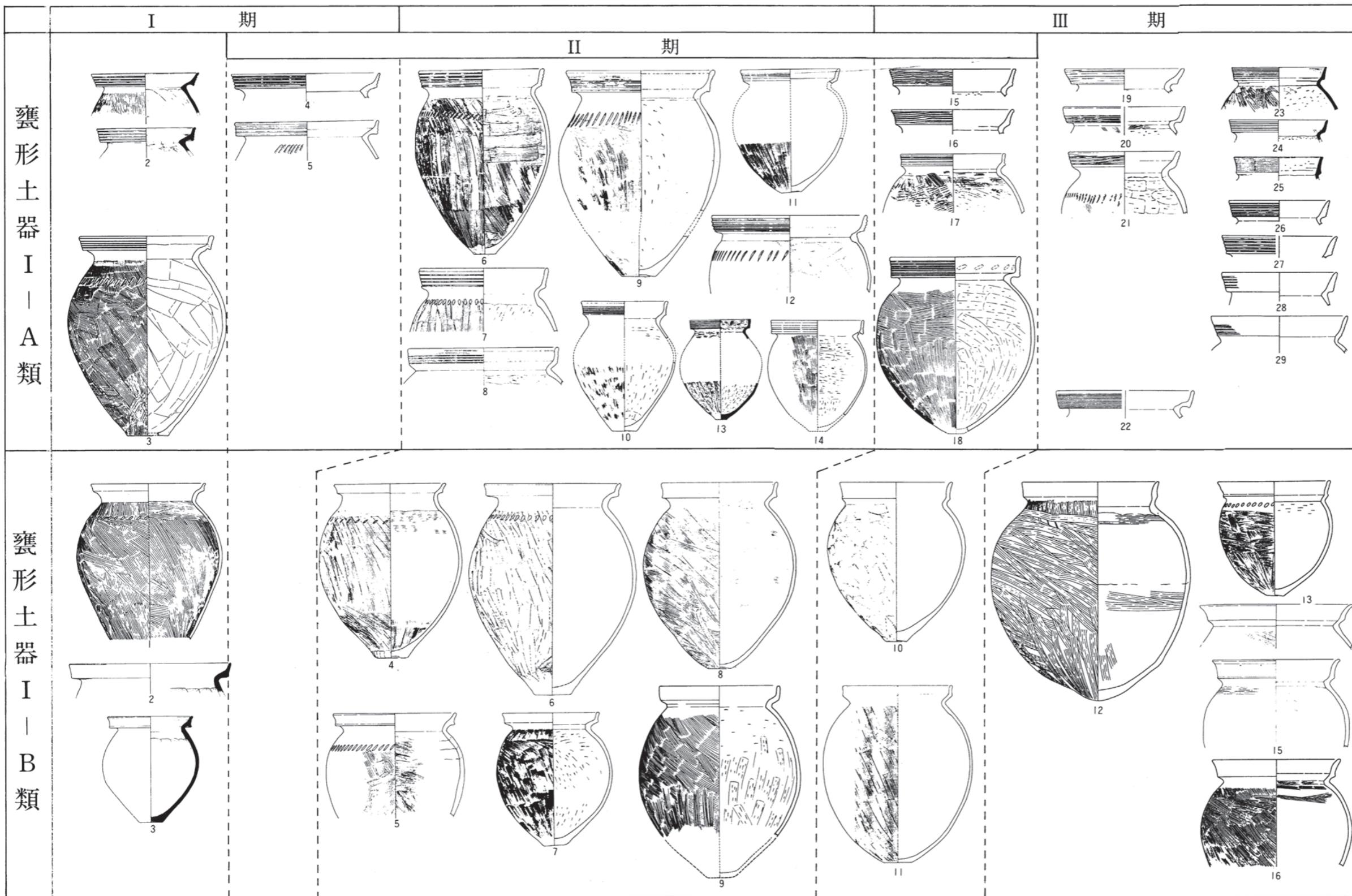
Ⅰ類はⅠ－A（有段口縁帯に擬凹線を施すもの）とⅠ－B（有段口縁帯が無文のもの）に大別出来る。Ⅰ－Aの発生母体は、加賀市猫橋遺跡や金沢市西念・南新保遺跡、羽咋市次場遺跡、志賀町ナベタカ遺跡等で出土している弥生時代後期前半期の土器群中にある。この時点では未だ能登・加賀の土器群に地域差と呼べるほどの明確な資料は確認されていないようである。

Ⅰ－Aの確立・発展期は谷内尾編年という法仏Ⅰ式期、能登では羽咋市柳田上野式期・鹿島町徳前Ⅰ様式期以降と考えている。Ⅰ－Bの発生母体に関してもⅠ－A同様と考えて良さそうである。ただし、確立・発展期については、Ⅰ－Aと同時期と考えるが、やや時期を遅らせて考えるかの判断は現時点ではつけかねる。しかし、Ⅰ－A確立以前、Ⅰ－Aに先んじて成立したとは考え難い。

Ⅰ類の変化の流れについては次の様に理解している。

Ⅰ期；後期前半の、口縁端部に肥厚が認められるくの字口縁甕形土器からの分離。プロポーシオンは他類同様、肩部の張りが強く、体部下半はやや直線的で、安定感のある底部が付くものが多い。

Ⅱ期；有段部の確立。口縁帯に擬凹線を施すものと無文で仕上げるものとが認められる。能登地域においては若干の地域差こそあれ、無文の方が圧倒的に優勢を占めている。プロポーシオンは他類同様、肩部に張りを欠き、胴部最大径も中位へと下がるものが多い。それに伴い体部下半も丸味を帯び、底部もやや径が小さくなる傾向が認められる。



甕形土器 I-A類

1・2 羽咋市柳田上野 溝状遺構、3 羽咋市次場 I-4 溝、4・5 鹿島町徳前 C 4 次・2 次、6 志賀町鹿首 T-18、7 七尾市矢田、8 押水宿向山 8 H、9 同 D-14 区、10 同 ビット、11 押水宿東山 6 H、12 徳前 C 4 次、13 七尾市大杉崎 H、14 宿東山 7 H、15・16 竹生野 1 次 9 土坑、17 宿東山、18 七尾市国分高井山 2 H、19・20 宿向山、21 徳前 C 2 次、22 宿向山 6 H、23~25 柳田上野 2 H、26・27 竹生野 2 次 11 H、28・29 同 2 次

甕形土器 I-B類

1 次場 J W、2・3 柳田上野溝状遺構、4 鹿首 T-18、5 徳前 C 2 次、6 矢田 4 溝、7 宿東山 SK-75、8 志賀町倉垣 17 溝、9 国分高井山 5 土坑、10 徳前 C 4 次、11 奥原 6 H、12 竹生野 2 次 21 H、13 竹生野 1 次 22 土坑、14 宿向山 14 H、15 宿向山、16 竹生野 1 次 29 土坑

第173図 甕形土器変遷概念図 (I)

Ⅲ期；有段部の退化が認められるようになる。退化の方向性は口縁帯の伸び及び内面くの字化による有段部の形骸化。地域によっては強固に有段を保持するものも認められるが、プロポーシオンは地域に関係なく丸味を帯び、球形状を呈するようになる。底部は平底から丸底へと漸次移行する傾向が認められる。

Ⅱ類・くの字口縁甕形土器

Ⅱ類としたくの字口縁甕形土器は、甕形土器における普遍的口縁形態であり、当該期に限って見れば微視的にならざるを得ない。とりあえず後期前半の資料を発生母体とし、その後の変化を追うことにした。

Ⅱ類の変化の流れについては次の様に理解している。

- I期；大きく外反する長めの口縁の端部に、外反する面や、やや凹みを形成するものと、外反度の弱い口縁に、同様の成形を施すものが存在する。基本的には後期前半のプロポーシオンの流れで追えるものと考えている。肩部の張りは依然として強いものの、体部下半はやや丸味を増す。底部は安定感のある平底である。このくの字口縁のプロポーシオンの変化が、該期の甕形土器各類に共通するプロポーシオンの変化の基本であると考えている。
- Ⅱ期；大きく外反する長めの口縁で、端部に外反する面を形成するものと、端部に強い押えを施すものが存在する。また外反度の弱い口縁で、端部に外反する面を形成するものも依然として存在する。プロポーシオンは共に体部に丸味が増し、胴部最大径は体部中位へと下がる。それに伴い底部もやや小型化する傾向が認められる。
- Ⅲ期；大きく外反する長めの口縁で、端部を撥ね上げ状にするものや、大きく外反する短めの口縁で、端部を丸く仕上げるもの、それに、大きく外反する短めの口縁で、端部に面を形成するものなどが存在する。いずれも一連の流れの中で理解出来るものである。プロポーシオン的には、体部の球形化、底部の丸底化の進行が認められる。ただ、一部に平底の残存するタイプも認められる。

Ⅲ類・付加状口縁甕形土器

発生母体は後期前半の土器群に求められる。有段口縁甕形土器とくの字口縁甕形土器との中間的口縁形態を呈するもので、甕形土器各類中で最もバラエティに富むものである。具体的には、つまみ上げ・粘土貼付・押え等の技法により、狭い口縁帯を形成するもので、タイプによっては擬凹線を施すものもある。

Ⅲ類の変化の流れについては次の様に理解している。

- I期；くの字口縁甕形土器を発生母体として有段口縁甕形土器が成立したと同時に、付加状口縁甕形土器形態も成立したのと考えている。後期前半に認められる、いわゆる口縁端部がT字状を呈する土器群がその初源的スタイルであったと思われる。それが多岐に分流し、各々独自の変化の流れを形成するようである。未だ不明な点も多い。プロポーシオンに関しては、くの字口縁甕形土器同様の変化を辿るものと理解している。
- Ⅱ期；発展期において最も多く認められる遺跡間共有形態は、つまみ上げ及び貼付技法によるものと、確立期以来認められる擬凹線を施すものである。擬凹線は2～3条程度のものが主

流で、いずれも押え技法との併用によるものと考えられる。くの字口縁甕形土器同様、体部に丸味を帯び、胴部最大径は中位に求められるものが多い。

Ⅲ期；体部の球形化が進むと同時に狭小な口縁帯の傾きも外方へ開くようになり、くの字化傾向が認められるようになる。ただ、この期の資料に関してはやや不足気味でもあり、明確さに欠けるのが実際でもある。

Ⅳ類・受口状口縁甕形土器

Ⅳ類とした受口状口縁甕形土器は、いわゆる近江系受口状口縁甕形土器の伝播によって土着化したものであるが、他類とは違い、能登地域において主流を占めるものではない。また変化の方向性に関しても、近江地方の流れと軌を一にしているとは必ずしも言えないようである。

Ⅳ類の変化の流れについては次の様に理解している。

Ⅰ期；伝播時期を中期のいつと考えるかは別として、ここでは後期前半期のスタイルを以って指標とする。ただし、遺跡間での出土例に量的偏りが認められることから、能登地域においても地域差を等閑視するわけにはいかないようである。形状的には、大きく外反する頸部に受口状の口縁帯が付くもので、口縁帯はほぼ直立する。口縁帯には草本茎を束ねた刺突具による施文が認められるのが一般的である。肩部の張りは弱く、胴部最大径は中位に求められるものと考えられる。

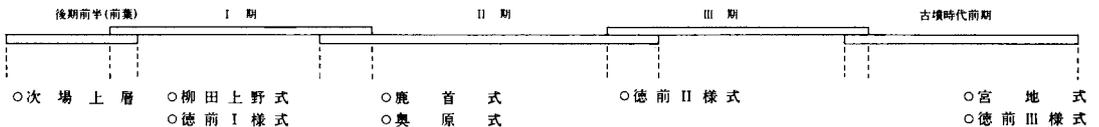
Ⅱ期；口縁帯に退化傾向が認められると同時に施文の簡略化も漸次進行するようである。この期に該当する資料で体部の形状が窺える資料が乏しく、明確化に欠けるのが実際である。

Ⅲ期；能登地域において該期の特徴を明示し得るほどの資料は皆無である。

以上、甕形土器Ⅰ類～Ⅳ類の変化の流れを概観したが、能登地域ではⅠ～Ⅲ類が流れの本流として捉えられるものである。Ⅳ類に関しては今後の資料の増加に期待したい。

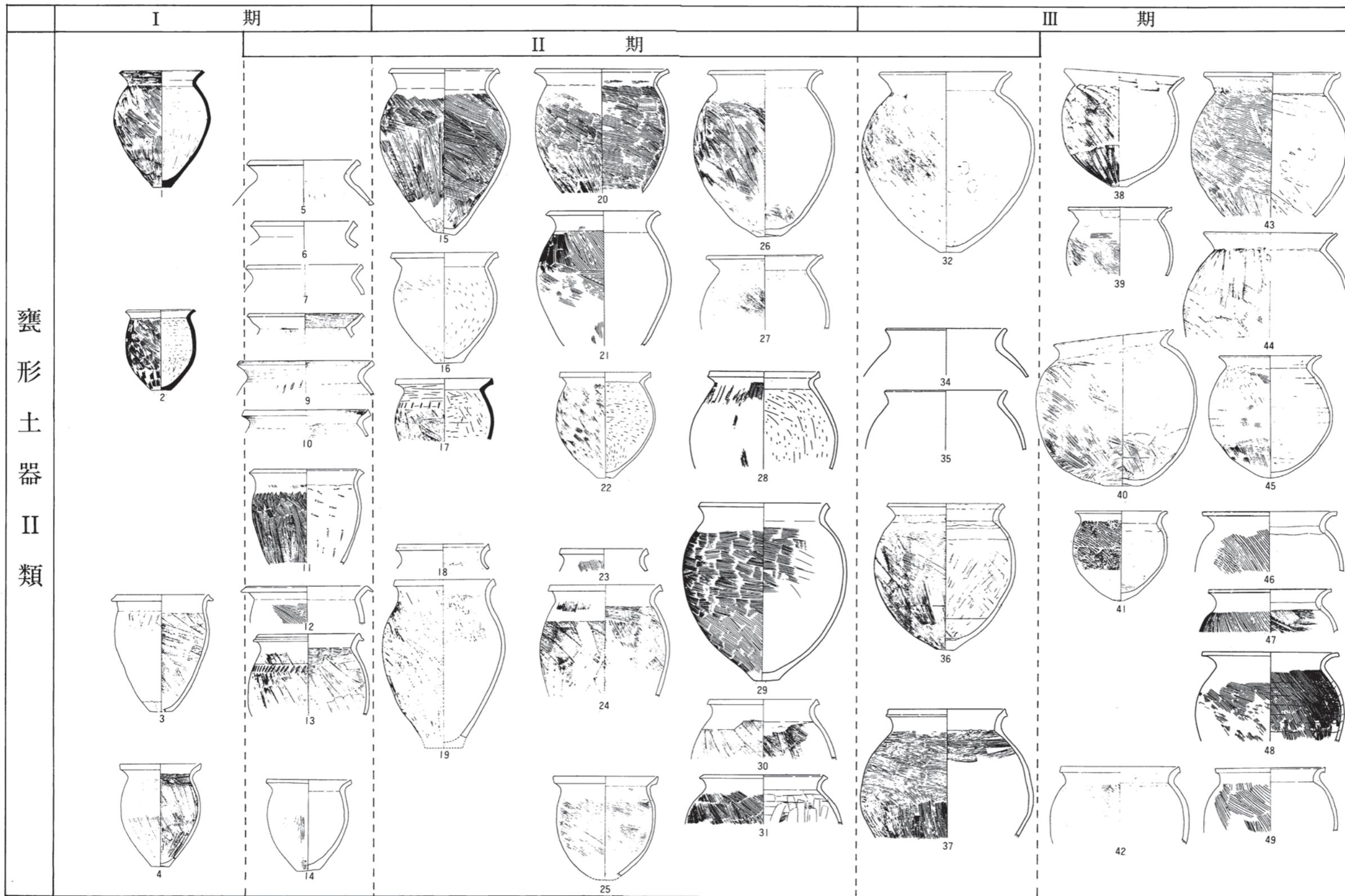
4 画期と形式名称について

弥生時代後期後半の甕形土器を能登地域の資料に基づきⅠ期～Ⅲ期に区分し、各類別にその変化の流れを概観したが、それぞれの区分内においても器形の変化は絶えず認められるのである。その変化を小期（小画期）として押えるのも必要なことであろう。しかし、出土資料の増加に伴い形式名称が乱立したのでは混乱を招く恐れのあることも事実である。



上記に示したのは、土器の変化で設定した画期に、従来の形式名称を付加したものである。後期前半の様相については、明確さに欠けることから言及することは出来ないが、後半の甕形土器の位置付けに関しては、名称の持つ曖昧さを指摘する事がある程度出来たようにも思う。（概念図参照）今後、他器種の変化をも考慮する事により、形式名による区分の曖昧さを補足して行きたい。

甕形土器 II 類

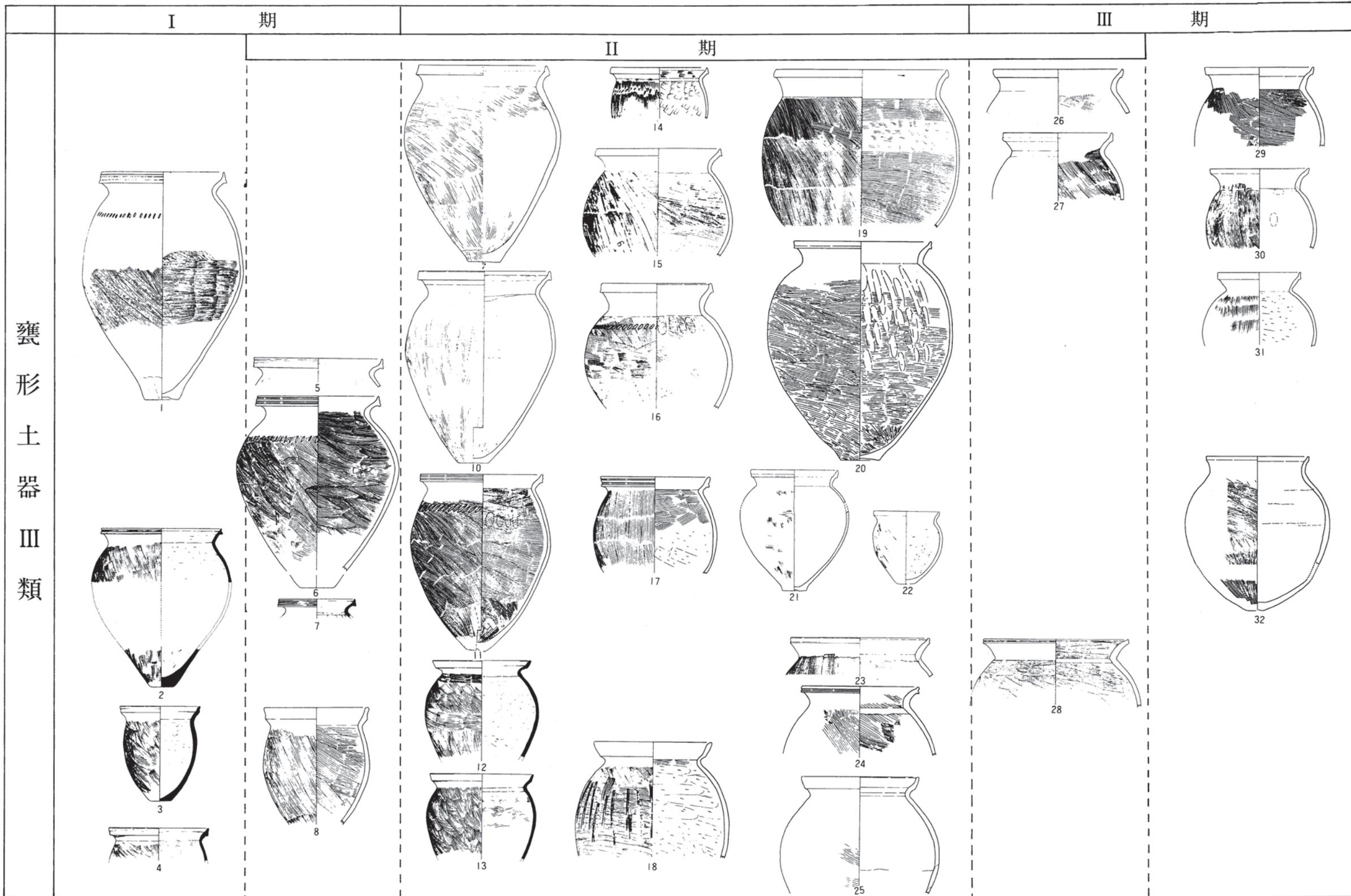


甕形土器 II 類

- 1・2 柳田上野溝状遺構 A、
 3・4 鹿首 T-18、5・6 徳前 C 4 次、7・8 奥原 2 H・4 H、9・10 徳前 C 1 次、11 矢田 4 溝、12 徳前 C 4 次、13 鹿首 T-18、14 宿向山 7 H、15 鹿首 T-18、16 倉垣 17 溝、17 七尾市祖浜、18 徳前 C 4 次、19 奥原 3 H、21・22 次場 J W、22 宿東山 S K-75、23 国分高井山 5 H、24 鹿首 T-18、25・26 倉垣 17 溝、27 宿向山 6 H、28 竹生野 1 次 29 土坑、29 国分高井山 2 H、30 鹿首 T-18、31 次場 J W、32 宿向山 8 H、34・35 竹生野 1 次 11 土坑、36 徳前 C 2 次、37 竹生野 2 次 21 H、38 徳前 C 2 次、39-41 宿向山 14 H、40 同 3 H、42 徳前 C 1 次、43 宿向山 5 H、44・46・47・49 徳前 C 2 次、45 宿東山 17 H、48 竹生野 2 次 8 H

第174図 甕形土器変遷概念図 (II)

甕形土器Ⅲ類



甕形土器Ⅲ類

1・8・11・15・16・18・19 鹿首T-18、2・4・7・13 柳田上野溝状遺構、3・12 同溝状遺構A、5・26・27 徳前C 4次、6・20・24 鹿首P-4 G、9 押水町上田出西山7土坑、10 宿向山4土坑、14 能都町真脇、17 国分高井山5 H、20 竹生野1次4土坑、21 宿東山12H、22 同SD-01、23 徳前C 2次、25 鉢状茶臼山2 H、28 宿向山12H、29 竹生野2次21 H、30 宿向山5 H、31 宿東山SK-64、32 竹生野2次11H

第175図 甕形土器変遷概念図(Ⅲ)

5 今後の課題と問題点

今回、弥生時代後期後半の甕形土器の変遷について、具体的に能登地域で出土している該期の土器を使用し、その変遷過程を辿ってみたが、種別のみの変遷に留まり、各タイプ毎の流れにまで言及する事が出来なかった。これは偏に筆者の怠慢に起因するものであったことをお詫びしておきたい。そこで、今回の作業を通して得た雑感を述べ、今後の課題にしたいと思う。

まず甕形土器各類の流れについてであるが、この中で最も注意しなければならないのが、Ⅱ類のプロポーシヨンの流れであると考えている。Ⅰ類・Ⅲ類に関しては、Ⅱ類の亜流として成立しその後独自の口縁形態を確立させ発展したものであり、その基本の流れ（プロポーシヨンに関して）はⅡ類に求められると考えられるからである。これは今回の作業を通し筆者の得た感想でもあるが、殊に、Ⅰ類の流れから得た印象が強い。というのは、有段口縁甕形土器とは巨視的にみると、くの字口縁甕形土器を母体として成立・発展し、その後の衰退過程を通し再びくの字口縁甕形土器形態へと収束するものであり、その発展期が能登地域における後期後半期であったのではないかと感じたからである。

次に後期後半の甕形土器の変遷を、その器形変化に基づき3期に区分した事についてであるが、これは後期前半の様相に未だ不明な点が多いために止むを得なかったものであり、Ⅰ期に関しては言えば前半期に食い込んで捉える事が出来るのではないかと考えている。いずれにしても、今後の資料の増加を待って再度後期全体を対象とした画期の設定を試み、その変遷を考えてみたいと思っている。ただ、現時点で筆者の試みている作業は、あくまで器形の変遷であり、究極の目的はそこにあるわけではないことを付言しておきたい。取り敢えずここでは、他器種の変遷についても同様の作業を進行させるのが当面の課題であるとしておきたい。

更に、近年盛んに行われている土器の細分作業についてであるが、細分作業に関しては筆者も必要不可欠な作業であり、様相把握の段階的手順と考えている。しかし、往々にしてタイプの細分と、変化の流れの段階とが混乱しているのではないかと感じる時があるのも実際である。本来、1固体1タイプとして捉える事も可能な個性を対象としたものではあるが、同時にタイプの乱立自体、流れを理解するうえで混乱を生じさせる要因になる恐れも有しているのである。変化の流れの方向性とタイプとは言わば座標の基軸であって、その細分作業は系統・系譜的に土器の変化を捉えるのに有効な手段と考える。しかしそこには形式学的視点からの共通属性の抽出が必要不可欠である。それによる集合体こそがタイプとして認識されるものと考えられるからである。

最後に、遺構内一括出土資料の取り扱いと土器変遷の段階的並行関係についてであるが、今回掲載した甕形土器変遷図表は、各類別の変化の流れ（方向性）を辿ったものであり、各種の変化が同スピードで進行しているとは必ずしも言えないと考えている。また、紙幅の関係で、掲載出来なかった資料も多数ある事から、やや虫食的なものになってしまった事が心残りである。今後の作業としては、遺構内一括資料（一等資料）により、各類の段階的並行関係を押え、各類毎の変化のスピードを確認したいと考えている。周知のように、一括資料とは「廃棄の同時性」・「消費の同時性」をしめすという特質を有するものである。その特質をより有効に生かすためにも、一括資料の検討は重要な意味を持つと考えている。

以上、脈絡のない文を重ねて来たが、土器論はあくまでも土器論であり、史学としての考古学を考えた場合、集落論・遺構論等の展開なくしては展望は開けないことを痛感している。今後共徴力を尽くしたい。

おわりに

今回この原稿を執筆するにあたり、三浦純夫氏から、土器論だけではなく集落論も展開させることによって、竹生野遺跡の意義を捉えてほしいとの依頼があった。しかし、筆者の力量不足によって、集落論どころか竹生野遺跡出土遺物に対するの考察さえもままならなかった。言うまでもなく、竹生野遺跡で検出された多数の大型土坑からは貴重な一括資料が多量に出土しているのである。この土坑群出土土器に関する考察についてはいずれ別の機会に私見を述べたいと考えているが、ここではひたすらお詫びする次第である。最後に、掲載した甕形土器変遷図に使用させていただいた各遺跡出土資料⁽²⁾に関し、報告者の意志・考え方と食い違う点多々あるかと思う。その点に関する御叱正については今後の糧として素直に受けとめたいと考えている。よろしく御教示願いたい。

(浜野)

註

(1) 1986年現在における後述の各氏の見解は次の文献に集約されている。

(石川考古学研究会 1986 『シンポジウム「月影式」土器について』 石川考古学研究会シンポジウム実行委員会発行。) 報告編における各氏の所説および資料編における各遺跡の出土土器については、小稿の作成にあたり資するところが大きかったことを明記しておきたい。

(2) 紙幅の都合で遺跡名を掲げるとどまった。註(1)の文献をはじめ多くの報告書に依拠していることを明らかにして各位のご寛容を請う次第である。

第4節 竹生野遺跡出土須恵器について

竹生野遺跡から出土した須恵器はパンケースで3箱程度と少ないが、当地域における須恵器の流通や消費の実態を知る上で重要なデータを提供してくれる。

1 次調査出土須恵器の分類

1次調査で出土した須恵器は古墳時代の古手のものがほとんどである。資料数はわずか63片にすぎないが、その内容は2次調査のものとは若干異なっている。A群・D群は確認されず、B群19片、C群13片、E群23片、F群1片、不明2片の他、2次調査では確認されなかったG群が5片認められた。

G群は器壁が極めて薄く、断面が赤褐色やクリーム色などのサンドイッチ状を呈しているもので、焼成が堅緻で極めて緻密である。時期的にはB・C群と同じ頃であるが、それらとも明瞭に識別できる。「在地産」の可能性も高いが今のところ同様の特徴をもった窯跡は確認されていない。胎土や焼成の特徴に限れば鳥屋窯跡群の春木～末坂支群の特徴と類似するが、深沢で確認されるMT15期の須恵器〔浜岡他 1965〕とは器壁の厚味などが異なる。

図化された資料は、B群が第21図1・15、C群が同図3・11・16～18、E群が同図2・7・10・12・13・14であった。14などE群の一部には海綿骨片をわずかに含むものがあるが、2次調査では海綿骨片はE群には認められず、A群にだけ認められた。分類に混乱をきたしているようにも受けとれるが、後述するようにA群とE群は同一産地の製品であると想定しているため、逆にその想定を裏付けるものと理解できる。

(1) 古墳時代の須恵器

産 地

A～E群に分類した須恵器のうち、もっとも古いB・C群は作りや胎土から大阪南部窯跡群の製品と考えられる。それに比べ、A・D・E群は形態や作りが個性的で胎土の特徴からも「在地産」の製品と考えられる。G群は「在地産」の可能性を残すが不明。

A群とE群 A群には胎土に海綿骨片を多量に含むものがある。周辺の窯跡群で海綿骨片を多量に含むものは、管見によると羽咋窯跡群・倉垣コマクラベ窯・池崎窯で認められるが、至近距離の高松・押水窯跡群では確認できない。また、池崎窯に隣接する鳥屋窯跡群でも確認できない。池崎窯を除けば羽咋周辺に集中しているが、海綿骨片を含む土は広く能登から北加賀、一部越中まで認められているため、地質学的な分布を示しているわけではない。一般的には陶土に不向きなために避けるべき粘土を羽咋周辺では多用する傾向があったと考えられる。また、池崎窯・倉垣コマクラベ窯のような9世紀中葉以降、「窯跡群の拡散化現象」以降の窯では陶土の選択にも変化を生じたと考えられることもできるだろうが、これらは時期的にA群とは結びつかない。

羽咋窯跡群にはTK47期に比定される柳田ウワノ1号窯〔福島・宮下 1982〕が確認されており、その胎土はI群とII群に大別できる。I群は海綿骨片を含まず焼成が堅緻でザラついた質感をもつ。竹生野遺跡E群に酷似する。II群は海綿骨片を多量に含み、焼成がやや甘い。I群に比

べてごく少量しか確認されておらず、竹生野遺跡A群に酷似する。このことから、必ずしも柳田ウワノ1号窯の製品と特定できないとしても、A群・E群は羽咋窯跡群の製品と考えるのが妥当であろう。ただし、A群の中に蓋と身の溶着した蓋杯片が認められることから、竹生野遺跡の至近距離に窯が存在した可能性も否定しきれない。⁽¹⁾

D群 赤く発色する特徴は高松・押水窯跡群に一定量認められるが、今のところ高松・押水窯跡群では6世紀後半代の窯は確認されていない。大甕の口縁形態は加賀地域では存在しないことから能登地域の製品と推定されるが、焼成がやや甘い⁽²⁾ため胎土で同定することが難しい。

(2) 奈良・平安時代の須恵器

産地

F-1群はザラついた質感、少量の砂礫を含むこと、器形の特徴などから高松・押水窯跡群の製品と考えられる。

F-2群はF-1群より焼成が極めてよく断面がクリーム色を呈するため、鳥屋窯跡群産の可能性はある。しかし、壺・瓶類などの液体を入れる容器は窯の火前で焼成されることが多いため焼成が極めて堅緻になり、あたかも鳥屋窯跡群産のような印象を与えることがある。胎土の特徴もF-1群と大差ないため、高松・押水窯跡群産の可能性のほうが高いと思われる。

いずれにせよ、ほとんどが至近距離の高松・押水窯跡群産から供給されていたことはほぼ間違いないだろう。

食器と貯蔵器の比率

奈良・平安時代の須恵器は8世紀から10世紀代の比較的長期間にわたるが、その中心となるのは箕打タカンニャマ3号窯〔川畑 1987〕に集中している。小片まで時期別に分類ができなかったため、ここでは包含層出土のF群須恵器のすべてを計測した。大まかに箕打タカンニャマ3号窯頃の傾向を知りうると思われる。計測の結果、食器と貯蔵器の比率はほぼ1対1であることがわかった。こうした状況は食器が全体の8～9割以上を占める7世紀後半の湯屋窯、9割以上を占める8世紀後半の後山谷2号窯〔滝上・木立他 1985〕とは大きく異なっている。なお、今回は土師器を計測しなかったが、それを含めれば土器全体における食器の割合は圧倒的に大きくなると思われる。土師器の食器増加に対応して須恵器は食器より貯蔵器に生産の重点を移した可能性がある。今後とも計測例を増やして検討したい。

無台杯と有台杯の比率

両者の比率はほぼ同じだが、わずかに無台杯が多い。一般的に8世紀後半代には明らかに有台杯が優勢であり、9世紀後半には無台杯が優勢となる〔吉岡 1983〕。当遺跡の計測値はその中間的な比率を示していると言えよう。無台杯が優勢となってゆく大きな流れと矛盾しない。ただし、計測した資料は時代幅をもっており、無台杯は有台杯より新しいものがやや多い傾向がある。

有台杯と杯蓋の比率

包含層から杯蓋は5個体しか出土していないが、それと組み合わせるべき有台杯は13個体（いずれも個体識別法）出土している。明らかに杯蓋が不足しており、有台杯の半数近くが無台杯として使用されていた可能性が高い。こうした現象は近接した宿東山遺跡の8世紀初頭の須恵器と全く

逆の現象である。宿東山遺跡では杯蓋が有台杯より明らかに多く、杯蓋を身の代用として使用していた可能性が高いと推定した〔木立 1987a〕。

竹生野遺跡で杯蓋が不足している原因は今のところ2通り想定することができる。

- ① 宿東山遺跡のように杯蓋ばかりを使用する消費地が同じ流通圏内に存在するため、竹生野遺跡への杯蓋供給量が不足した。この場合、蓋と身はほぼ等量出荷されたと推定できるなら、遺跡の社会的性格によって、A. 蓋・身とも等量供給される遺跡、B. 蓋が不足し、無蓋有台杯が一定量を占める遺跡、C. 身が不足し、蓋をも転用する遺跡の3大別にランクを分けることができる可能性がある。蓋の不足は遺跡の階層差に起因した現象である。
- ② 8世紀中葉以降は蓋杯の重ね焼き技術が変化して蓋がゆがみやすくなり、その結果として蓋の出荷量が不足した。蓋の不足は重ね焼きによる食器の大量焼成のためにおこった現象である。

①のような推定は対になるべき蓋と身がほぼ等量出荷しえたことが前提となるが、蓋杯の重ね焼き技術が変化する8世紀中葉以降の竹生野遺跡と、それ以前の宿東山遺跡と同等に比較することはできない。しかし、杯蓋の破損率は8世紀中葉以前の窯でも高く、②の推定が必ずしも妥当とは思えない。結論を出すことは不可能だが、②の重ね焼きと杯蓋の破損率の問題点について検討してみたい。

須恵器蓋杯の重ね焼き技術の変化

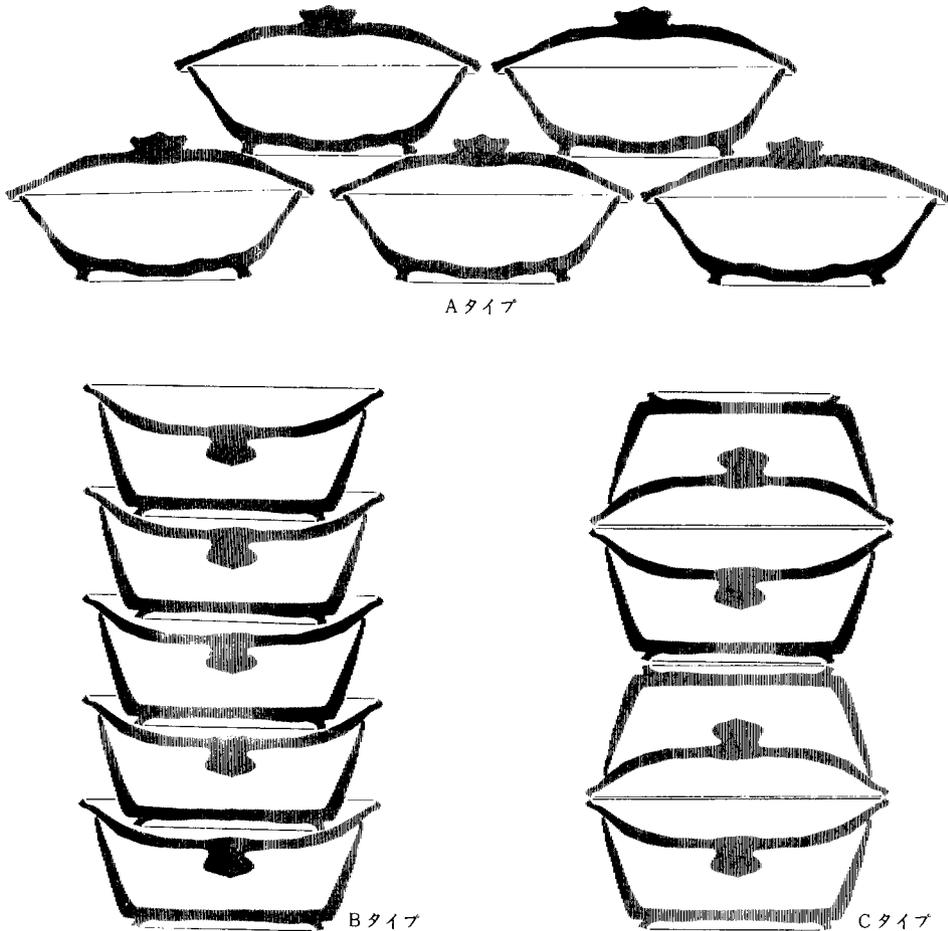
須恵器の蓋杯は、須恵器出現頃から9世紀後半のある段階まで、北陸では必ず蓋と身を1対1のセットとして窯詰めされている。9世紀後半以降は蓋だけの重ね焼きや身だけの重ね焼きが出現し、窯詰め可能な量が飛躍的に増大したと思われる。しかし、9世紀後半以前にも重ね方の工夫によって窯詰め量を増大させる画期があった。石川県下でもっとも研究の進んだ辰口町を中心とした窯跡群（能美窯跡群、もしくは辰口窯跡群）の変化を例にとりて以下に説明したい。

吉岡編年I₁期（7世紀末～8世紀初頭）の来丸サクラマチ3号窯では発掘調査によって部分的に窯詰め状態の蓋杯が検出されている。それによると身の上に通常の状態では蓋をかぶせ、同様の蓋杯を一面にならべしいたのち、さらにその上（真上もしくは2～4個の蓋杯にまたがるよう）に同様の蓋杯を積み上げている（Aタイプ）。部分的に小形の壺や平瓶などもならべられている。自然釉・降灰のかぶり方や溶着痕から、当窯以前の湯屋窯（7世紀後半）、当窯直後の来丸サクラマチ1号窯（吉岡編年I₂期、平城II併行）でも同様の窯詰め方法をとっていたことがわかる。また、北陸の他の窯跡群でも一部の例外を除き、管見による限り、8世紀中葉以前の窯では同じ方法をとっている。ところが、8世紀中葉以降は食器の様式の変化〔花塚・木立 1986〕に伴い、食器の窯詰め技術にも大きな変化がもたらされた。吉岡編年II₂期の和気後山谷2号窯では蓋をかきまにして身の上におとしこむものを一対としてその上に同様のものを何段も積み上げている（Bタイプ）。吉岡編年II₁期の和気金谷地窯は資料が少ないために確認できないが、他の窯跡群の例からもこの頃には後山谷2号窯と同様の重ね焼きを行っていると考えられる。なお、この変化は8世紀中葉頃を境にして北陸道全域で認められるが、辰口を含む加賀南部以外の地域ではCタイプの重ね焼きが一般的であり、その技術系譜が注目される。また、8世紀中葉には重ね焼き

だけでなく窯跡群の移動、食器の様式変化、甕当て具の木取りの変化、「北陸型煮沸セット」の完成⁽⁵⁾など様々な変化を伴っている。これらの諸変化の多くは吉岡編年I₂期の頃には「律令官人的」〔花塚・木立 1986〕な窯や消費地ですでに認められるが、8世紀中葉以降、窯跡群の移動などともなって普遍化することに大きな意義がある。Bタイプの重ね焼きについても7世紀後半の羽咋市柳田タンワリ1号窯、富山県山王奥堤窯・蓮沼新堤窯、吉岡編年I₂期（平城Ⅱ併行）の富山県小杉流通業務団地内No.16遺跡1・2号窯ですで行われている。しかし、これらの窯ではBタイプとAタイプが共存しており、それぞれ器形にも対応しているらしい。柳田タンワリ1号窯を例外として除けば、Bタイプの重ね焼きは新器種とセットになって導入され、その器種とともに普遍化している。器種と重ね焼きはセットとして1つの系譜を形作っていた可能性が高い。

重ね焼き技法の違いによる杯蓋の破損率

ところで、Aタイプはせいぜい2段か3段程度しか積み上げられないが、B・Cタイプは明らかにそれ以上積み上げることができる。しかし、多量に積み上げるため、蓋に過重がかかるという欠点もあわせてもっている。Bタイプの後山谷2号窯では蓋：身=73.5：26.5（口縁部計測法）、Cタイプの高松町ヤキノ窯では蓋：身=72.1：27.9（破片数）=60.9：39.1（個体識別法）となり、窯跡での蓋の失敗率は明らかに身よりも高い〔木立 1987b〕・〔西野他 1985〕。Aタイプの湯屋B-1号窯では蓋：身=59.7：40.3（個体識別法）=60.2：39.8（口縁部計測法）であり、や



第176図 須恵器蓋杯の重ね焼き方法模式図

はり蓋の失敗率が高い。Aタイプがほとんどを占める加賀市篠原遺跡4号土坑では蓋：身=60.4：39.6（口縁部計測法）となり、湯屋B-1号窯とほぼ同じである。篠原遺跡で蓋が多いのは転用硯として使用されたり、身に比べて割れやすかったりするためであろう。

また、湯屋B-1号窯に付属し、その丘陵上平坦面にある湯屋窯B支群製品集積地ではさらに蓋の破損率が高く、蓋：身=69：31（個体識別法）=71：29（口縁部計測法）であった。ここでは完形に近い蓋をまとめて捨てた場所がたまたま調査区内にあったこともあり、蓋の占める割合が大きくならざるを得ない。残念ながら製品集積地が半壊状態であったため、その全体的な比率が正確にあらわされているとは言えないが、製品の集積作業においては窯での焼成以上に蓋の破損率が高かったことを示す可能性も高い。窯での破損率だけでなく、製品集積地での破損率を考慮するなら、出荷された蓋杯の蓋はさらに少なくなるはずである。残念ながら製品集積地やその関連遺跡の調査は数少ないため、湯屋窯以外の例で検証することができない。

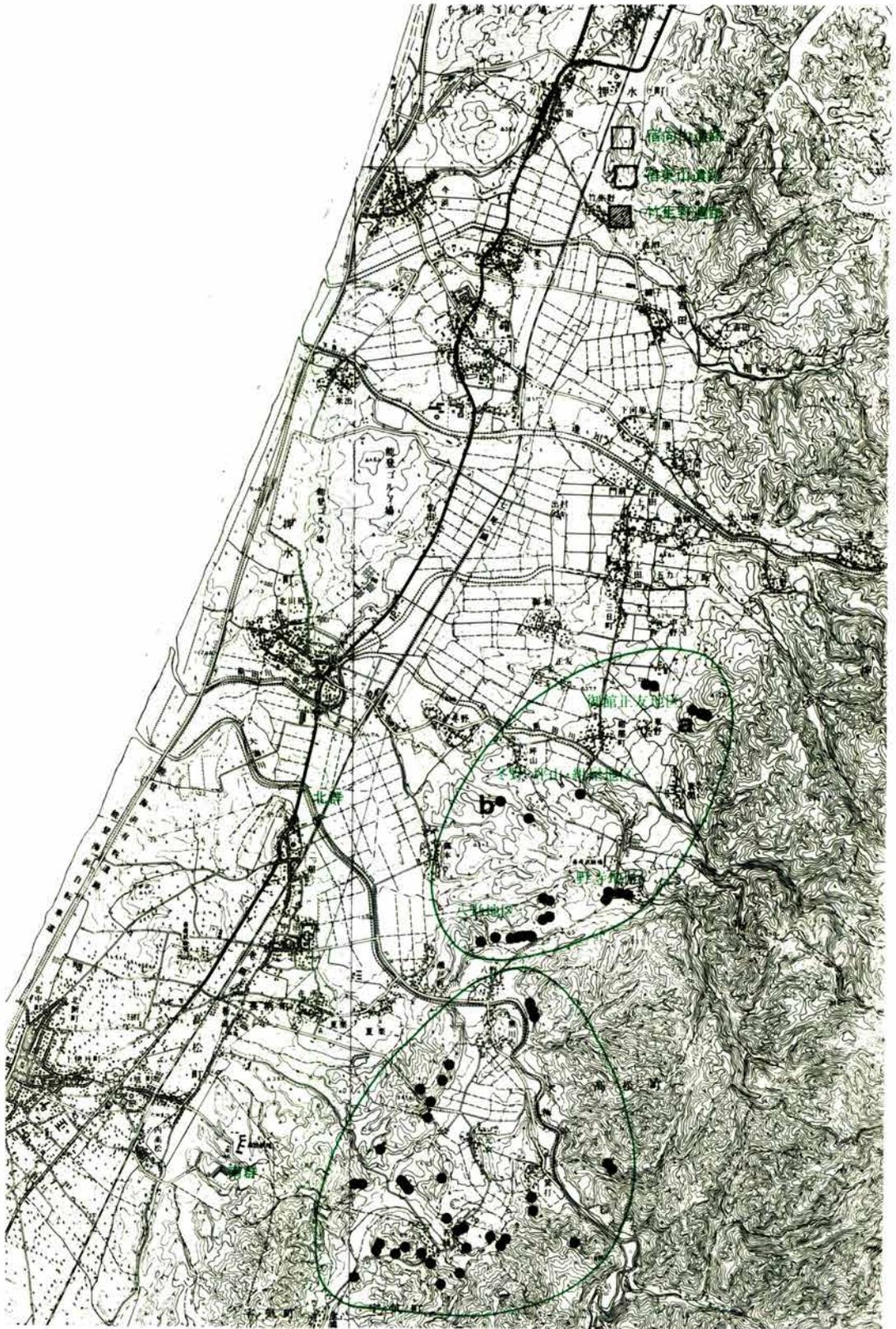
Aタイプでは蓋：身=6：4であるのに対し、B・Cタイプでは7：3であり、蓋の破損率がさらに高い。後山谷2号窯（Bタイプ）では過重と過熱によって焼きゆがんだ完形品がかなり大量に出土しており、出荷時点では蓋が不足していたと推定した〔木立 1987b〕。しかし、消費遺跡などでも蓋が極端に少ない遺跡は管見による限り顕著ではなく、普遍的な現象とも考えられない面がある。逆に、窯・製品集積地・消費地とも、既知の計測例による限り、身に対する蓋の割合が高いのが一般的である。今のところ、蓋を身以上に沢山製作・焼成したという重ね焼きの痕跡をB・Cタイプでは確認できていないが、将来はそのことも含めて蓋と身の破損率と量比の問題について再検討する必要がある（Aタイプでは蓋杯のセットの上に蓋だけを重ねた可能性がある）。

竹生野遺跡F群の蓋が少ないことの原因については前述の2つの推定ができるが、以上のように②について問題点が多い。①も同様であり、今後の資料増加を待ちたい。

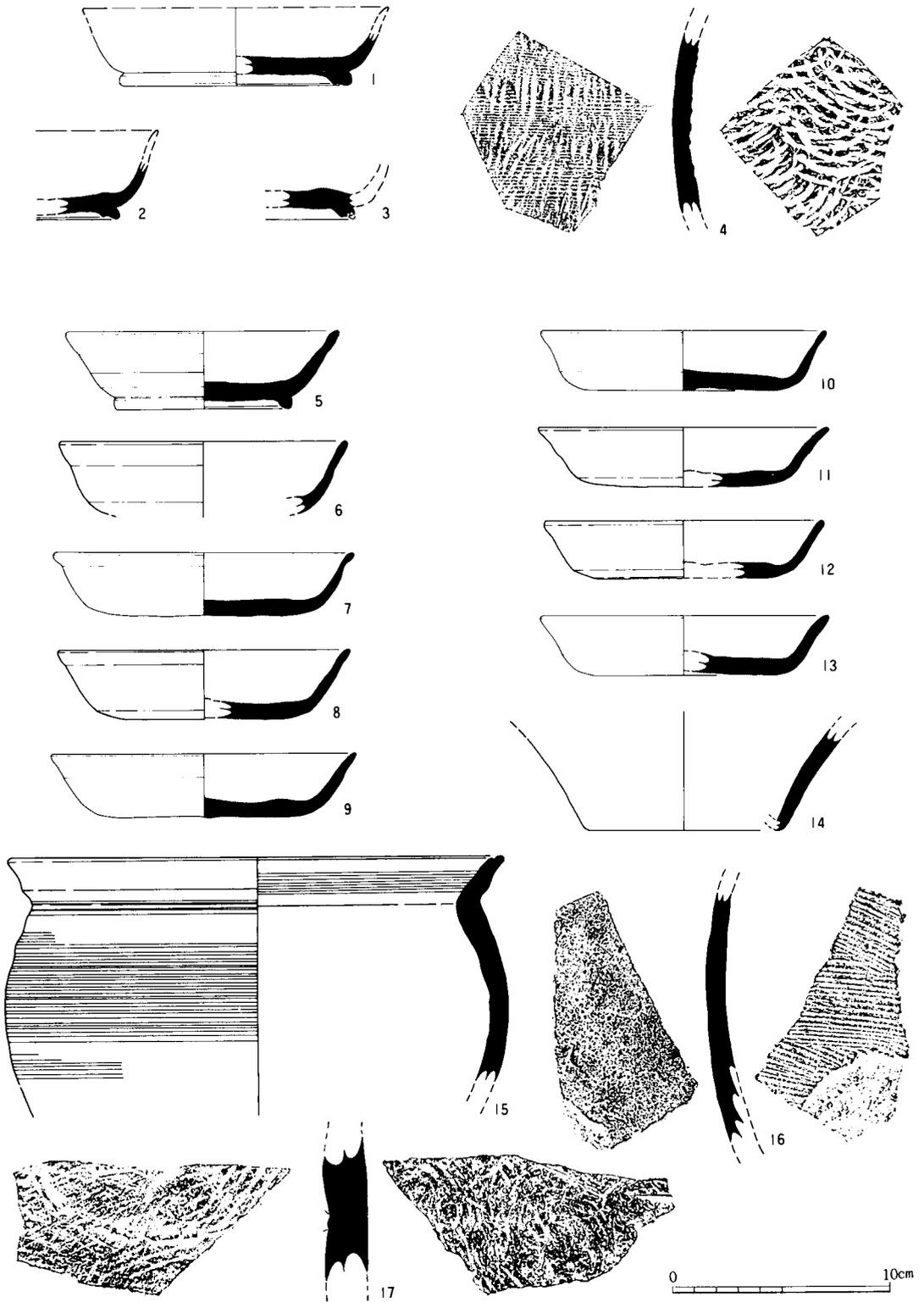
(3) 高松・押水窯跡群と竹生野遺跡周辺

高松・押水窯跡群の調査・研究は嵯峨井亮・村井一郎両氏を中心に進められてきたが、近年、川畑誠氏はそれをうけついでさらに精緻な報告を行い、その動態についても注目すべき指摘を行っている〔川畑 1987〕。それによると当窯跡群は7世紀前半に操業を開始し10世紀代まで存続するが、7世紀後半～8世紀前葉にかけての時期と9世紀前葉～中葉にかけての2つの時期に生産のピークがある。そして、8世紀中葉頃を境として窯の分布域が異なっており、それ以前は^{おうみ}大海川以北の北群に、以後は大海川以南の南群に明瞭に分かれて分布している。

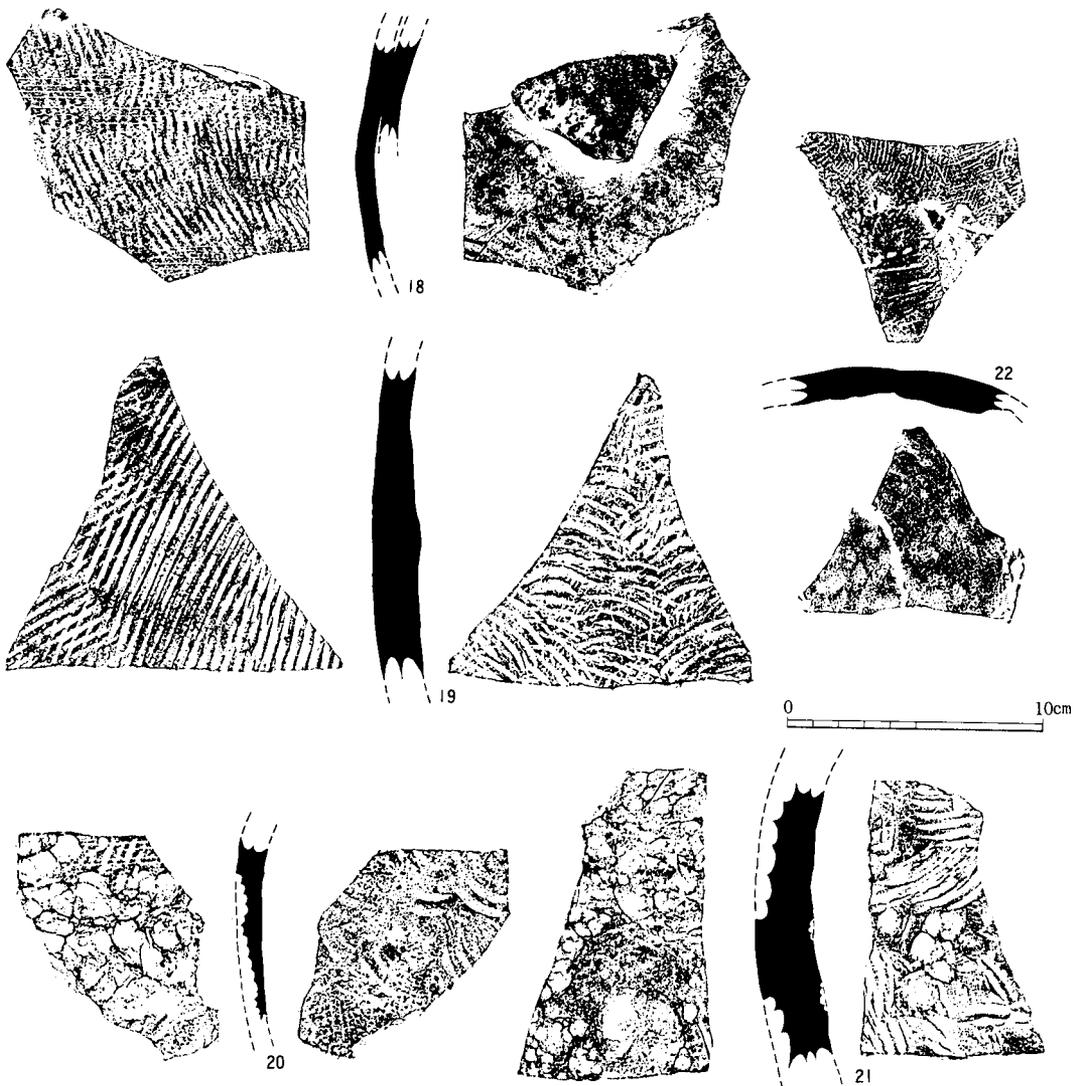
北群・南群はさらに小支群に分かれるが、最近北群に新たに2ヶ所の窯跡が発見された。第Ⅷaの^{まさとも}正友ヤチャマ1号窯と同Ⅷbの^{ふゆの}冬野オオクボ1号窯である。両者とも8世紀前半の窯であり、川畑氏の説を裏付けている。また、川畑氏は^{のてら}野寺地区と^{はちの}八野地区を別々の生産集団のものと考えたが、窯の分布状況から正友・御館地区と冬野・坪山・紺屋地区も別支群としてとらえられるだろう。ただし、後2者と前2者の関係は明らかでなく、北群内での生産集団の移動か、別の生産集団の存在を示すかは明らかにしえない。以下、新たに発見された窯から採集された須恵器を紹介する。



第177図 高松・押水窯跡群の分布(a:正友ヤチャマ1号窯。b:冬野オオクボ1号窯。縮尺5万分の1。)



第178図 正友ヤチヤマ1・2号窯(1~4)、冬野オオクボ1号窯(5~17)採集須恵器



第179図 冬野オオクボ1号窯採集須恵器

正友ヤチャマ1号窯(第178図1~4)

1~3は有台杯片で、いずれも高台は太くしっかりしている。1は高台径が約11.7cmを計る。4は甕胴部片である。低く太い高台や、1の器形から吉岡編年I₁期〔吉岡 1983〕か、その直前頃に比定できると思われる。

なお、当窯は農免道路予定地内にあり、近い将来発掘調査される予定である。また、1号窯の他に押水町教育委員会では別の2基の窯跡を確認している⁽⁶⁾。

冬野オオクボ1号窯(第178図5~17、第 図18~21)

当窯は1988年1月1日に村井一郎氏が発見した。近世に水田を開いた際に灰原の一部が削平されており、法面に厚さ20~50cm、幅約8.5mの灰原層が露出している。この斜面上方には窯体陥没状の落ち込みが認められる⁽⁷⁾。

5・6は有台杯片で5は径12.7cm、6は径13.4cmを計る。7~13は無台杯で底部はすべてヘラ切りの後、軽いナデ状の調整を行っている。7は径13.9cm、器高2.9cm。8は径13.5cm、器高3.2cm。

9は径14.1cm、器高3cm。10は径13.1cm、器高2.8cm。11は径13.3cm、器高2.7cm。12は径12.8cm、器高2.7cm。13は径13.2cm、器高2.8cm。いずれも有台杯より扁平な器形である。

14は壺類の頸部かとも思われるが不明。15は内外面にカキ目を施す甕で径23cmを計る。16は内面にハケ調整を施し、外面無文(ナデか)のもので胎土に砂粒を多く含んでいる。おそらく埴の体～底部片と思われる。17以下は甕胴部片である。17は焼台に転用されており、表面に高台の溶着痕が残る。その他の甕片も多くは焼台に転用されたものらしく、破面に自然釉がかかっていたり、20・21のように2次熱によってあばた状に剝離したものが目立つ。叩き板の木目が確認できるものは少ないが、19は外面が木目直交の平行叩きで、内面はB類(同心円状の木目)〔花塚 1984〕である。

有台杯や無台杯の器形から当窯は吉岡編年I期に比定できるだろう。

宿東山遺跡の須恵器〔木立 1987a〕

ここでは竹生野遺跡では空白の吉岡編年I期とその直前の須恵器が出土している。その産地は大半が高松・押水窯跡群のものだが、鳥屋窯跡群の製品も含む。その比率は3:1で、高松・押水窯跡群の至近距離にあるにもかかわらず遠距離の製品を搬入している。なお、この頃は羽咋窯跡群でもわずかながら操業していると思われるが、高松・押水窯跡群の製品と識別できなかった。

宿向山遺跡の須恵器

竹生野遺跡F群よりさらに新しい時期を中心に多量の須恵器が出土している。産地の観察を十分に行っていないが、そのほとんどが高松・押水窯跡群の製品と推定したい。

高松・押水窯跡群の供給圏

高松・押水窯跡群の須恵器は、北は寺家遺跡〔小嶋 1987〕・柳田シャコデ廃寺〔谷内他 1987〕まで、南は横江庄遺跡〔吉岡 1983〕まで流通していることが確認されている。とくに、寺家遺跡・柳田シャコデ廃寺における遺跡のピーク(大形掘立柱建物群の出現)と、高松・押水窯跡群の第2のピーク〔川畑 1987〕が一致していることは注目される。竹生野遺跡も当然その供給圏



第180図
加賀・能登の主要窯跡群と竹生野遺跡

の中におさまり、第2のピークにはほぼ確実にその一元的供給体制に組みこまれている。しかし、寺家遺跡でも宿東山遺跡でも、当窯跡群の第1のピーク〔川畑 1987〕であるべき吉岡編年I期に鳥屋窯跡群の製品がある程度供給されている。この頃、松任市北安田北遺跡でも鳥屋窯跡群の製品がある程度供給されており、鳥屋窯跡群の供給圏が極めて広く、また大量に生産していたと考えられる。寺家遺跡も同様だが、竹生野遺跡周辺においても当窯跡群の一元的供給に移行するのは、第1のピーク以降～第2のピーク以前のことと推定できる。

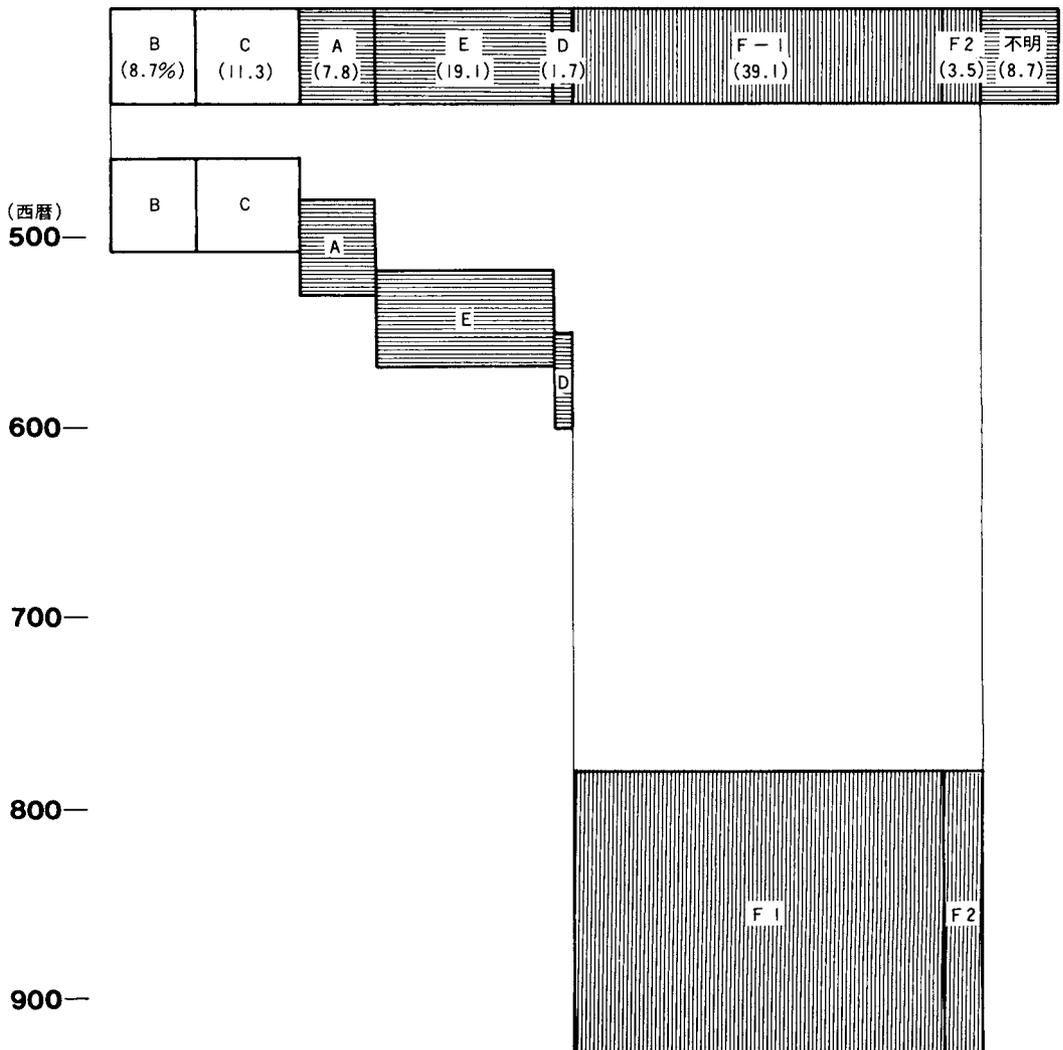
(4) 古墳時代須恵器の生産と流通

能登地域は比較的古くから6世紀前半代の須恵器窯が確認されており〔浜岡他 1965〕、消費地で出土する当期の須恵

器の大半は在地産であろうと推定されてきた。時には北陸の中核的窯跡群として能登以外の地域にも供給していた可能性すら考慮されてきた〔中村 1985〕。

しかし、能登の消費地の須恵器を検討した結果、6世紀前半においては能登産の製品がほとんど確認されず、6世紀後半以降にはほぼ自給体制に移行したことがわかった〔三辻・木立 1986〕。6世紀前半代能登の須恵器窯の稼働状況は極めて散発的であり、本格的な操業を開始するのは6世紀後半以降（おそらく6世紀末）と考えざるを得ない。

そうした状況などをふまえて田嶋明人氏は、6世紀前半にすでに、食器のほとんどを須恵器が占め土師器椀の少ない越前北部～加賀南部にかけての地域と、その逆に6世紀代を通じて食器の多くが土師器椀で須恵器の少ない加賀北部～能登・越中にかけての地域では、在地窯の供給量に著しい格差のあったことを指摘している〔田嶋 1987a・b〕。竹生野遺跡でも2次調査10号・14号竪穴住居の出土土器を見る限り、6世紀末～7世紀初頭であるにもかかわらず土師器椀が目



第181図 第2次調査包含層出土須恵器の比率と時代(比率は個体識別法による。スクリーン・トーンは在地産を示す。)

立っており、田嶋氏の指摘と矛盾しない（6世紀前半代は良好な資料がないが、少なくとも図化できる土師器碗が少ないことは問題として残る。今回は土師器碗の量について計測していない）。

七尾市矢田遺跡〔三辻・木立 1986〕と竹生野遺跡を比較すると、矢田遺跡では6世紀前半代には在地窯以外を主体とする複数の窯跡群から供給を受けており、その産地の1つに小松丘陵窯跡群（南加賀古窯跡群）を含んでいた。それに対し、竹生野遺跡では6世紀前半には産地はほぼ1つで、小松丘陵窯跡群の製品をほとんど含んでいないと思われる。小松丘陵窯跡群は北陸最古（TK47前後）で中核的な窯跡群であったと考えられるため、その供給圏と他の窯跡群との関係は重要な課題であり、小松丘陵窯跡群を含む複数産地からの供給を受けていた矢田遺跡と羽咋窯跡群からの一元的供給を受けていた竹生野遺跡の違いは注目される。

以上のように在地窯の供給量・供給の在り方などに能登内部にも地域差が認められることは確実であるが、TK47～MT15期頃を境にして大阪南部窯跡群の製品が著しく減少してゆく共通性が認められる。その意味では竹生野遺跡と矢田遺跡に差は認められず、加賀南部が在地窯による自給的体制に移行するのとはほぼ同時である。この頃を境に北陸の多くの地域で大阪南部窯跡群の製品を駆逐していったのではないだろうか。能登で在地窯が出現したTK47～MT15期では在地窯による自給体制を整えず、土師器碗を多量に使用する段階であったにせよ、それ以前から続いた大阪南部窯跡群の供給圏の中からはずれてゆく意味で重要な時期であると言えよう。

(5) おわりに

最後に2次調査包含層から出土した須恵器の比率をグラフ化したものをあげておく（第181図）。グラフからわかるとおり、7・8世紀代に空白期間がある。高松・押水窯跡群は今のところ7世紀初頭頃に操業を開始したと思われる。その頃の資料は竪穴住居内からわずかに出土しているにすぎず、ここではその状況について触れられなかった。（木立）

註

- (1) 資料が細片であるため、使用困難な溶着なのか、使用可能な溶着なのか断言できない。しかし、いずれにせよ、蓋と身を重ねあわせることは不可能であっただろう。集落から出土した溶着須恵器の類例としては、羽咋市・柳田シャコデ廃寺〔谷内他 1987〕、加賀市、敷地鉄橋遺跡〔田嶋他 1987〕がある。柳田シャコデ廃寺は羽咋窯跡群に隣接しており、何ら不思議はない。しかし、敷地鉄橋遺跡は小松丘陵窯跡群から約6km離れているうえ、至近距離に窯が存在したとは考えにくい。溶着須恵器が必ずしも窯の近くで出土しない例となる可能性が高い。こうした例は須恵器製作のために窯場に出仕していた人が、自らの失敗品を「記念」・「証拠」などの理由で本拠地に持ち返ったものであると考えることはできないだろうか。とすれば、竹生野遺跡も羽咋窯跡群から約10km離れているとは言え、同様であったと考えることができるだろう。ただし、その背景などについても説明できるわけではなく、あくまでも推定にとどまる。今後とも消費地出土の溶着須恵器に注目してゆきたい。
- (2) 田嶋明人氏の御教示による。
- (3) 矢田野ムカイヤマ窯については小松市教育委員会の宮下幸夫・望月精司両氏の御好意で実見させていただいた。小杉流通団地No.16遺跡1・2号窯については、富山県埋蔵文化財センターの上野章・池野正男氏らの御好意で実見させていただいた。〔上野他 1980・1984〕参照。

- (4) 羽咋市柳田タンワリ1号窯では蓋を転倒させた重ね焼きの方法をとるものがある。また、吉岡編年I₁期直前にも後述するようにその後続く重ね焼きが少量ではあるが新器種とともに導入されていると思われる。
- (5) 土師器系の技法や形態が残るなど多様性をもっていた土師器長甕・小甕・鍋などが、形態的にも技法的にも須恵器系にはほぼ統一され、須恵器窯でも同様のものが普遍的に出土するようになる。
- (6) パンケースに2箱程度の遺物が試掘調査で出土しているが実見していない。なお、押水町教育委員会村井伸行氏からは地名などについて種々御教示いただいた。記して感謝の意を表したい。
- (7) 村井一郎氏には現地の案内から地名調査など種々御教示・御協力いただいた。記して感謝の意を表したい。

第5節 中世～近世初頭における押水三箇荘地域の検証

1. はじめに

本遺跡所在地は、中世から近世にかけて大泉荘・大泉（押水）三箇荘と呼ばれた地域のうちにあたる。これは元来荘園名であったが、荘園制崩壊とともに地域呼称に転化したのである。当地域の中世史像に関しては、現在までのところ、文献史料・考古資料ともに稀少であって、調査研究の遅れている分野の一つと言える。確認されている遺跡では、宿エゾエ山・南吉田向山・米出ドダヤマの中世墳墓に加え、御館遺跡（館跡）・末森城跡（～近世初頭）が主なものとして指摘できる。文献史料からの研究では、末森合戦をめぐる論考は間々みうけられるものの、その多くは加賀藩関係者の藩祖前田利家を美化した史料を全く史料批判を行わず使用しており、実証的でない。この地域全体を論じたものは、管見の限り『押水町史』を数えるのみである。

そこで小稿では、本遺跡所在地域の中～近世初頭の状況を把握するため、先行諸研究に導かれつつ、中世史料以外の諸資料等をも可能な限り利用して、大泉荘に関する諸様相、末森城周辺の検討を柱として、若干の考察を行ってゆきたい。

2. 大泉荘に関する諸様相

立券とその相伝 承久3年(1221)能登国衙は、一国平均役賦課の目的で大田文を作成する。この文書には、荘・郷・保等の名と田積、立券・検注の年代等が記されている。また、後世に追記されたと考えられる地頭名註記があるものの、領有関係の詳細に関しては記載がない。大泉荘は其中で「大泉荘 弍百町 保延弍年立券□」と書かれている⁽¹⁾。すなわち、保延2年(1136)立券の公田200町を有する羽咋郡内最大の荘園としてあらわれる。

大泉荘の領有者が確認できる初見は、鎌倉初頭のものとして推定される中院流家領目録草案において「十六^八 能登国⁽²⁾ 大泉庄」との記載である。すなわち、大泉荘は村上源氏中院流の家領として見えるのである。この後については、次の二つの史料からいくつかのことがわかる。

(1) 龜山天皇院宣写（『山科毘沙門堂記録』『高松町史史料編』中世史料補遺9）⁽³⁾

院宣案 富小路殿御代 守忠所生以前、以^(堀川)定行^(堀川)本名^(堀川)可^(堀川)為^(堀川)子之由、弘安二年家定卿雖^(堀川)申^(堀川)置之^(堀川)、
定行敵^(堀川)对于養父為定^(堀川)、致^(堀川)告言^(堀川)之間、被^(堀川)下^(堀川)此^(堀川)院宣^(堀川)、永義絶早、
能登国大泉荘事、就^(堀川)称^(堀川)申^(堀川)兄弟和与之由、雖^(堀川)被^(堀川)裁^(堀川)許^(堀川)定行^(堀川)、資季・家定両卿約諾、為^(堀川)父子之条^(堀川)
勿論欵、養父^(堀川)〇与^(堀川)親同、定行不^(堀川)可^(堀川)告言^(堀川)、然者任^(堀川)父子之義^(堀川)、進退領掌不^(堀川)可^(堀川)有^(堀川)相違^(堀川)者、依^(堀川)

(2) 後深草上皇院宣写（『山城毘沙門堂記録』『高松町史史料編』中世史料補遺10）⁽⁴⁾

院宣案 後深草院御方

能登国大泉庄事、任^(堀川)先度^(堀川)勅裁之旨^(堀川)、相伝領掌不^(堀川)可^(堀川)有^(堀川)相違^(堀川)之由、可^(堀川)被^(堀川)伝^(堀川)仰守忠^(堀川)之旨^(堀川)、
御気色所^(堀川)候也、顯相惶謹言、

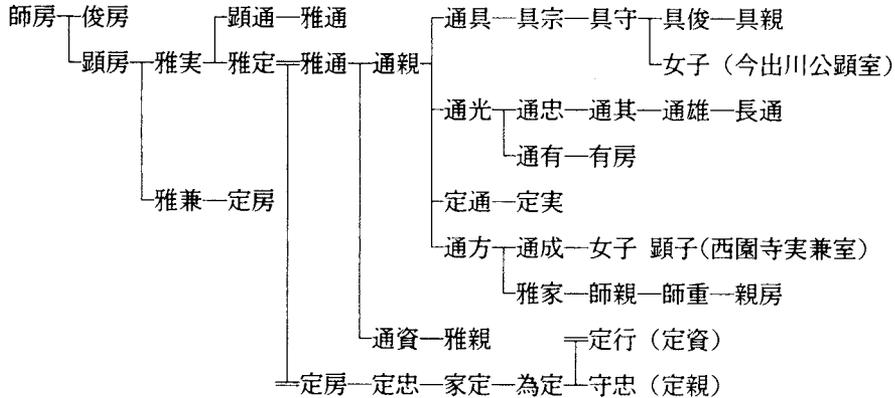
(1300)
正安二年九月十一日

宮内卿 判

(具守)
進上 堀川大納言殿

史料(1)は年月日未詳の文書であるが、龜山上皇の院宣であり、かつ弘安2年の家定置文の後でなければならぬから、1279～1287年の間のものと考えられる。この文書によれば、弘安2年(1279)

〔関係略系図〕



に堀川家定がその子為定の養子として定行を決めた。しかし為定と定行は不仲となったため、為定に利ありとしたこの龜山上皇の院宣発給を機に義絶したという。定行は『尊卑分脈』で単に為定の子としか記されていないが、この文書中では「兄弟和与」とあるように、為定と定行は本来兄弟であったと言えよう。大泉荘は為定と定行との相論の対象となったところであるが、その領有は家定から為定へ、さらに定行へ譲られた。その後相論となり定行が「兄弟和与」を主張したため、一旦は「他人和与法」適用による定行への裁許が下りた。しかし、この院宣で父子間の譲与と認め、為定による悔返が行われて、大泉荘はそのもとへ戻った。

そして史料(2)の中で、正安2年(1300)後深草上皇が、大泉荘を堀川守忠の相伝所領として安堵しているのである。ただ、この際留意せねばならないのは、院宣の宛所が堀川具守であって守忠でないことである。『公卿補任』によれば、守忠は本名を定親と言ひ、観応3年(1352)10月24日に61歳で出家したという。すなわち、守忠は正安2年当時9歳であった。とすれば、具守は幼少の守忠の後見として院宣を受けたものと考えられる。従って、守忠との名も具守との関係により命名されたものであろう。このような後見は、母親の実家との関係により成立する場合が多いが、この事例では確たる証拠もなく、事情は不明である。

以上から、保延2年(1136)立券の大泉荘は、鎌倉初頭までには村上源氏中院流家領となり、同流の家定から守忠まで相伝されたことがわかる。おそらくその伝領は、家定よりその系譜を遡ることができると思うが、それは中院家領目録草案の年代推定の厳密化作業をまたねばなるまい。^(補註)

これ以後の大泉荘の行方であるが、西園寺公重が建武2年(1335)後醍醐天皇より安堵された家領のうちに大泉南荘と見えることから、⁽⁵⁾何らかの事情で同庄は北・中・南の三荘に分割されるに至り、その地域区分が近世まで利用されたものと思われる。この後「大泉」の地名は史料上確認されておらず、「押水」の地名があらわれる戦国期に至るまで、当地域を表す史料もほとんどみられない。そして大泉荘の伝領関係も不明になってしまう。

荘域とその地形 大泉荘に関しては、これまで述べた伝領関係史料を除いては、荘園領主方からの収取形態を示す検注帳等の土地台帳等の史料は確認されておらず、在地状況はもちろん荘園経営を明らかにすることは、現状では不可能である。しかし、その荘域に関しては、近世の地誌書を利用して復元が可能である。すなわち『加能越三州地理志稿』・『越登賀三州志』・『能登志徴』⁽⁷⁾によれば、当地域の総称として押水三箇荘があり、その具体名としての押水北荘・押水中荘・押水大海荘も、それぞれ大泉北・中・南荘を表すものと考えてよからう。

大泉北荘 — 米出・門前・河原・今浜・小川・麦生・宿・竹生野・吉田・平床

大泉中荘 — 北川尻・冬野・坪山・正友・紺屋町・東間・東野・御館・三日町・上田・中野・上田出・山崎・宝達

大泉南荘 — 沢川・牛首・瓜生・上河合・下河合・大田・箕打・元女・黒川・野寺・瀬戸町・中沼・二屋・免田・大海川尻・森下・夏栗・八野

各荘の地名は上記のようになる。全体として大泉荘は、現在の志雄町南部より押水町を含んで、高松・津幡町の北部までの広大なものであった（第182図参照）⁽⁸⁾。

当地域内の河川に関して、『加能越三州地理志稿』では大海川（川尻川）に関して「其源出_二澤川村_一、六小流注焉。歴_二瀬戸町村南_一、二水自_レ東出而合_レ之、共入_レ海。」と記している。「二水」とは前田川・大坪川に相当し、「共入_レ海」となる如く、ほぼ明治42年測図の第182図の形と同じである。また、宝達川（米出川）については「出_二宝達村東_一、至_二米出村北_一、入_レ海。」、相見川（今浜川）は「出_二針山村_一、注_二平床村中_一、至_二今濱村南_一、入_レ海。」とあって、ほぼ第182図に近い。土屋義休が18世紀初頭に著した『加能越大路水系』でも、ほぼ同様の流路を呈している。以上の点をそのまま中世にあてはめることは危険であるが、現状では、重要な参考資料の一つとなると思う⁽⁹⁾。

ところで、これらの河川は大海川が約16kmの流長を持つものの、他は5～6kmにすぎず、急流である。近世の記録ではたびたび氾濫を起こしており、特に宝達川を始めとして相見川・前田川・大坪川は、いずれも天井川の性格を有する。斎藤晃吉氏によれば、当地域の平野部は、これら河川の影響を色濃くうけ、山麓部は扇状地的特徴を示し、下流部は潟湖を埋積した如くのデルタ的な性格を有する〔押水町史編纂委員会編 1974〕。従って、前者は灌漑用水の確保に苦しみ、後者は低湿地として水はけが悪かった。当荘の開発・経営については、全く明らかではないが、第182図の集落の位置をみると、低湿地部の開発は極めて遅れたことが窺われる。扇状地部の開発も湯堰とため池による用水の確保でなされていた⁽¹⁰⁾。

周辺の関連遺跡と地名 大泉荘のほぼ中央部に位置する御館には、その東の台地上に館跡がある。〔中西国男 1980〕の御館館跡の項には、二重長方形の土塁のほか空堀が旧状を留め、内側は東西19m×南北22m、外側は34m×35mを測るとある。南は杓子川（大坪川の支流）を堀としたためか、土塁がない。この館跡の小字は「御庵^{ブアン}」という。御館にはこの小字を含め、「門館口」・「若宮跡」・「正伝」・「堂後」・「表町」・「二丁目」・「中二丁目」という館や町場を窺わせる地名が多い⁽¹¹⁾。『石川県遺跡地図』におけるこの館跡の推定位置及びその規模は、現在の御館の集落の東端と三日町へ集落の西端とに接する一辺約470mの方形を示している。また、三日町に関

して『角川日本地名大辞典』17石川県は、中世における市の存在を推定している。この集落の小字名には「宮屋敷」・「宮地」・「宮田」・「門前」といった社寺関連地名が残っている。〔豊田武 1952〕によれば、鎌倉中期頃から地方荘園内の社寺の門前・政治の中心・交通の要地等に市場が次々に成立したという。三日町は、その要件を満たしている。また、御館の南の紺屋町⁽¹²⁾には、「城田」と呼ばれる所に館跡があったという。ここは、耕地整理によって現在はその痕跡すら残っていない。

ところで、御館館跡について『能登志徴』は「武家毘目集」をひいて岡部六弥太忠澄の居館と推定している。紺屋町のそれも同人物のものとして伝えられている。現在志雄町荻谷の岡部家に伝来している「当家歴代併旧新記」によれば、岡部六弥太忠澄が平忠度を討った功として押水荘地頭職を与えられ、2・3年に一度能登に居し、後に土着したという〔中西国男 1974〕。伝承や家譜の類から、地頭や館の主をそのまま推定することは危険であるが、御館・三日町・紺屋町が当荘園内の中心として中世地名及び遺構が集中しており、今後それらを有機的に検討していく必要がある。また、御館館跡には開発・調査の手が加えられておらず、範囲・時期の確認を含めての保存・研究は今後の課題となろう。

3. 末森城に関する検討

文献史料上の末森城 戦国期の押水三箇荘は加賀との国境に接する軍事上の要衝であったことから、能登畠山氏の内紛や家臣の反乱、加賀一向一揆との対立に際して、度々合戦の舞台となっている。⁽¹³⁾ その中でも「就_(水カ)能登国押野へ畠山駿河入国、加州罷立輩有_(レ)之」(『天文日記』天文16年閏7月16日)とあるように、天文16年(1547)の畠山駿河による加賀一向一揆と共同の能登進攻の際の押水合戦は、その代表例と言えよう。

末森城の初見は天文19年(1550)である。それは、畠山氏重臣遊佐統光が加賀一向一揆と共に能登に攻め入った際、末森城主として土肥但馬が見えることである(「長家家譜」『長氏文献集』)。この後天正8年(1580)閏3月には、柴田勝家を主将とする織田軍が「のとの末盛の土肥但馬守の構取懸け」(『信長公記』)ているが、同年8月には「末守」在城の土肥但馬守親真に対して織田方より羽咋郡が宛行われており、和議が成ったものと思われる。⁽¹⁴⁾ ここに、土肥親真は能登四郡を領することとなった前田利家の下に帰属したのである。

親真が天正11年(1583)近江国柳ヶ瀬において討死の後、末森城は奥村永福が主将、副将として親真の甥土肥伊予が城を守ることとなり、翌年には末森合戦をむかえる。この末森合戦に関する史料は、そのほとんどが加賀藩関係者による藩祖利家を讃美したものであり、史料価値は低い。客観的立場を取る、『宇野主水日記』(『石山本願寺日記』下)によれば、「越中佐々内蔵助敵ニナル。則前田又左衛門ト大合戦アリ。九月九日ト十一日十二日に合戦アリ。佐々打負、ヨキ軍兵十人余雑兵数輩討死二千斗ト云。又佐内蔵キリカヘシ、クリカラノウヘニ陣取。加州河北郡令_(成政)放火云々。」(天正12年9月10日)とあり、その評価は小牧・長久手の戦いの局地戦であるとするのが妥当なところである。また、この戦いを題材に佐々成政の人物論を目指す論著もかなりあるが、その多くは実証性に欠ける。⁽¹⁵⁾

末森城の絵図について 末森城に関しては多くの絵図が現存している。管見の限りで石川県立図書館蔵のものとして、以下のものがある。

- (a)能州羽咋郡末森古城図 森田平次写 天保15年(1844) 1枚 24×69cm
- (b)能州今浜末森古城之図 渡部知重手写 嘉永年間(推定) 1枚 27×39cm
- (c)能州末森城址之図 渡部知重手写 嘉永2年(1849) 1枚 36×50cm
- (d)能登末森城之図 森田平次手写 嘉永7年(1854) 1枚 40×55cm
- (e)能州末森城蹟全図 渡部知重手写 嘉永5年(1852) 2枚 38×94cm

この他に石川県立歴史博物館蔵のものとして、能州末森古城之図がある。

第183図は上記のうち(c)である。絵図の内容によれば、文政11年(1828)8月に鈴木菊英が模写したものを、嘉永2年に渡部知重が再び模写したという。残念ながらこれ以上、絵図の成立年や模写した人物に関しての詳細は明らかでない。この絵図の内容であるが、天正12年の末森合戦の際の末森城を詳細に描くため、河川や集落の位置については必ずしも正確とは言えない。免田や坪山が大海川以南に記されていることが、その例である。そして、本来同河川名となるべき宝達川と米出川が別河川として記されており、森下とすべき所を「森一」と書くなどの誤りもみられる⁽¹⁶⁾。但し、誤りが原本に起因するものか、模写段階でのものなのかは、明らかでない。また、この絵図中には末森合戦にあける前田方・佐々方の陣所を、色わけした■で示している(第183図では色わけは省略した)。

若干の検討 本遺跡では末森城関係の遺構・遺物に恵まれず、わずかに鉄砲玉2点、分銅1点等を数えるのみである。末森城に関しては、現在押水町教育委員会による調査が進行しており、その結果に待たねばならないが、村井伸行氏がその一部を論述されているので〔村井伸行 1987〕若干の検討を行ってみたい。

村井氏によれば、内縄張りは尾根づたいに形成された本丸・二ノ丸等の連郭を、二重の円心円状をした腰曲輪が取り巻く形状であると言う。また腰曲輪から谷に突き出す形で別の曲輪があり、端に切り通しや堀切りが設けられていると述べられている。実測図等が公になっていない現在、その内容に論評を加えることはできないが、『越登賀三州志』の故墟考で記されている郭の位置や広さを示す数値等のほか、第182図を含めた絵図の内容との対比の中で詳細に検討されることが望まれる。

また村井氏は外縄張りについて、尾根端部近くの掘り切りや平坦面の広がり、小字名(「大手門」・「搦手長坂」・「縄手」・「堀」・「ほりぬき坂」・「長御手」・「長割」・「城丸」・「若宮」・「城の下」・「侍屋敷」・「寺屋敷」・「伊予屋敷」^{テラヤシキ})等を確認しているとされた。また相見川も縄張りの一部と考えておられる(小字に関しては第3図参照)。私として、小字から考えた限りでは、この他にも「古屋敷」と末森城の鎮守である「鳥毛山」を加えてよいと思う。また「伊予屋敷」は土肥伊予屋敷との伝承なのだろう。ところで第3図には「竹生野近辺侍屋舗多シ、其形残ル」とある。現在のところ末森城の関連と目される遺構はテラヤシキ地区の土塁〔藤田邦雄・村井伸行 1987〕だけであり、絵図の記載のような痕跡がいかなるものか不明だが、今後の調査による解明を待ちたい。

さて、末森山麓の竹生野・南吉田には、「表町」・「江町」・「鍛冶屋道」・「段町」・「深町」という町場の存在を窺わせるような小字がある。町場の形成には、商工業を発達させる政治的要件のほか、消費人口の存在が必要となる。末森城の場合、その設置目的は領域支配を行うための中心設定とは言い難く、加賀・能登を結ぶ交通のネックを掌握するための軍事施設としての性格によるものと考えられる。ただ、守備の武士とその家族が居住していたことは諸史料から窺えるから、山麓の平坦部に小字名の如くその兵時の居住地があったものと思われる。しかし、それが商工業を育て得たかは疑問であろう。近世の一万石の陣屋所在地吹上（栃木県）を例にとれば、壬申戸籍における全戸数271戸のうち商家は1戸のみであった〔中島義一 1970〕。この吹上は元来市でも宿でもないところであって、中島氏はこの小藩の消費力では商工業の発達は無理とされた。末森城もその意味では同様であると思う。

しかし、末森城山麓には宿という集落もあり、『能登志徴』には興味深い記事を載せてある。すなわち「元宿」の項に「今濱の隣邑也。昔今濱の宿なき以前は此村驛なりし故に、今も元宿と呼べり。元は末森の城下にて、兵亂にあれ、其上此地砂に埋りて退転せしに、今また家出来一村と成れり。」とある。この史料によれば、戦国期には宿が宿駅として機能し、末森合戦と砂丘移動のため廃された後、その所在地を元宿と呼んでいることとなる。第183図に宿と本宿が別位置で描かれているのは、集落の移動を示す可能性が高いが、その可否は別として、戦国期の宿は町場を形成していたことが十分考えられる。従って末森城の設置とともに、新しい町場形成は行われず、宿がその購買力を吸収したか、城側が宿を吸収する形でそれを支配下に入れたかのいずれかではなからうか。いずれにせよ、前掲の小字名をもって城下町とすることは早計と考える。

4. むすびにかえて

小稿の目的は、本遺跡をめぐる中世～近世初頭の諸事象を、文献史料から検証することであった。しかし、検討作業の不充分さから課題ばかり残した感が強い。そして史料の存しないところは、かなり危険な推測も行った。特に末森城に関しては、押水町教育委員会の調査結果次第のところが多く、その成果が待たれる。

また、全く触れなかった事柄の中には、中世墓跡に関するものがある。本遺跡内にも、火葬を行ったとみられる中世土坑のほか、時期不詳の塚状遺構が検出された。それらを歴史上位置づけるには、葬制・墓制に関して学際的な検討がなされねばならぬだろう。さらに交通史面も重要な課題の一つであるが、史料も確認されず言及しなかった。

以上、誠に不十分なものとなってしまったが、大方の御叱正をいただければ幸甚である。

（宮本）

註

- (1) 承久3年9月6日付能登国大田文(『森田文書』『高松町史史料編』中世史料107号)。この文書は康応元年(1389)に作成された写本である。〔石井進 1970〕では、一部の地頭記載について、後年の記載とみてさしつかえないと述べておられる。また、同氏は大田文が反銭賦課等の基礎資料としてかなり後代まで利用されていることを指摘されて、伝来の過程で記載内容に追書・改竄等が加えられる可能性が大きいとされた。本文書もその点を含めて、今後再検討されることが望まれる。
- (2) 『久我家文書』第1巻3号。この文書に関しては〔久我家文書研究会 1970〕で、鎌倉初頭を降るものでないことが明らかとなった。また近年では、岡野友彦氏が日本古文学学会第20回大会(1987年)において、『中院流家領目録草案』(久我家文書)の検討」と題する口頭報告で、より厳密なる年代推定を行っておられるが、具体内容までは知り得なかったので、旧来の知見を示しておいた。
- (3)・(4) この両史料とも、この史料集の編者である東四柳史明・金田考順の両氏による人名比定がなされているが、史料(1)での「定行」・「為定」、史料(2)では「堀川大納言」に関しては、『公卿補任』・『尊卑分派』により訂正を行った。
- (5) 他人和与とは直系卑族への譲与を除く贈与行為である。「他人和与法」とは「他人和与物不_レ可_レ悔返_一」という法理で、公家法では少なくとも平安末から鎌倉にかけて定着していたという〔笠松宏至 1979〕。また、この法理を受けついで鎌倉幕府では、その追加法で「他人」の範囲から兄弟姉妹等を除外するなど、種々の面で「他人和与法」の効力縮小を行っている。しかし史料(1)から、公家法では13世紀末段階で兄弟は「他人」と判断されていたことが知られる。
- (6) 建武2年6月27日付後醍醐天皇綸旨写・同年7月12日付後醍醐天皇綸旨写(『柳原家記録』『高松町史史料編』中世史料109・110)。なお、和嶋俊二氏は〔押水町史編纂委員会編 1974〕中世編1章で西園寺家と大泉荘との関係を述べておられるが、実証性はない。また、西園寺家が太泉南荘を得た事情に関しては今後の研究にまたねばならない。
- (7) 『加能越三州地理志稿』は1830年富田景周・津田鳳卿による選定。『越登賀三州志』は18世紀末～19世紀初めころの富田景周による著書。『能登志徴』は森田柿園の著。
- (8) この図は、大日本帝国陸地測量部測図1/50000地形図邑知湯(明治43年測図・昭和5年部分修正測図)・津幡(明治42年測図)・石動(明治42年測図)より成る。
- (9) 小稿では、筆者の力量不足により、これ以上の論述は推測になってしまうので、詳述できない。河道復元は地籍図等による小字名からの方法のほか、発掘調査等によっても行われている。今後の検討作業に期待したい。
- (10) 近世の用水の状況は、高沢裕一・西節子の両氏が、〔押水町史編纂委員会編 1974〕近世編で論じておられる。
- (11) 小字名に関しては〔押水町史編纂委員会編 1974〕現代編7章より引用した。但し一部は〔中西国男 1980〕によって補足した。なお『押水町史』所載の小字名は漢字を宛てたものが多く、利用に不便である。今後、何か改訂の機会があれば、仮名とともに併記されることが望まれる。
- (12) 和嶋俊二氏は註(6)論文の中で、紺屋町を白山水引神人と結びつけて述べておられる。その根拠とされた史料は、次の「三宮古記」(『白山史料集』上巻)である。

一近年水引神人沙汰進分事

英田村^村一端^{ナハチ}賀茂^ノ畷^ノヨリ北大見河

津幡村^村一端^{ナハチ}大田ヨリ北賀茂^ノ畷^ノマテ

(中略)

白山ト^ノ劔^ノ敷地^ノ二端

い上河ヨリ北七村

この史料は、鎌倉末期の加賀一宮、白山水引神人の活動を示すもので、英田村（加賀国河北郡）の項での「賀茂畷ヨリ北大見河 」が、問題の箇所である。これを和嶋氏の解釈にしたがうと、大泉荘の一部が加賀国内の村落領域の内に含まれることとなり、極めて不自然であろう。「大見河」は加賀、能登国境と理解されてきた大海川と考えられ、大海川南方もその流域部は能登国に所属することから、当該部の解釈は、北は大海川流域の能登国との国境までと理解すべきであろう。従って和嶋氏の説には賛同しかねる。

(13) 能登畠山氏に関しては、〔東四柳史明 1975〕に詳しい。

(14) 「気多神社所蔵文書」20～24（『気多神社文書』第1巻）。

(15) 厳密な史料批判を行いつつ佐々成政を論じたものに〔奥田淳爾 1983〕がある。奥田氏の論調には、従来の成政論に対する憤りのためか、やや気負いが見られるものの、前田利家を論じた〔岩沢應彦 1966〕とともに必読の書と言えよう。

(16) この他にも村落名に関して、免田を「面田」、中沼を「中野間」、河原を「瓦」、鉢伏を「八伏」と記している。なお「每手」とあるのは米出でないかと思う。

(補註) 本稿校正段階で、註(2)で触れた岡野氏の報告レジュメを入手した。それによれば、中院家領目録草案の作成年代は、源雅定の代の保延2年(1136)以降応保2年(1162)以前とのことである。したがって、大泉荘は雅定・定房・定忠・家定と伝領していったものと考えてよからう。また、大泉荘立券と源雅定とのかわりかは、充分推測できるものの、現状では断定できない。

参考・引用文献

- 秋田喜一 1935 「能登国羽咋郡北大海村字東間宝殿古墳短報」『考古学雑誌』第25巻第9号 日本考古学会 東京。
- 秋田喜一 1937 「能登国コブシガセゴ」『考古学論叢』4
- 秋田喜一 1954 「羽咋郡中荘村上田通称地頭方遺蹟調査報告」『石川考古学研究会々誌』第6号 石川考古学研究会 金沢。
- 秋田喜一 1969 「能登宝達山出土土器の一例に就いて」『石川考古学研究会々誌』第12号 石川考古学研究会 金沢。
- 石井 進 1970 『日本中世国家史の研究』I - 第2章第1節 岩波書店 東京。
- 石野博信 1967 「弥生時代の貯蔵施設」『関西大学考古学研究年報』I 関西大学考古学研究室 吹田。
- 市堀元一 1983 「特殊ピットを伴う集落遺跡について」『北陸の考古学』石川考古学研究会 金沢。
- 井上裕弘編 1979 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7集 下巻 福岡県教育委員会 福岡。
- 今村啓爾編 1973 『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団 横浜。
- 今村啓爾編 1973 「霧ヶ丘遺跡の土壌群に関する考察」『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団 横浜。
- 今村啓爾 1976 「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化』27 物質文化研究会 東京。
- 今村啓爾 1983 「陥穴（おとし穴）」『縄文時代の研究』2 生産 雄山閣出版 東京。
- 岩沢愿彦 1966 『前田利家』吉川弘文館 東京。
- 上野章・池野正男 1980 『富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺跡群第2次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会 富山。
- 上野章・岸本雅敏・山本正敏・神保孝造・斎藤隆 1984 『富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺跡第6次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会 富山。
- 宇野富良 1986 「能登羽咋郡今浜新村の土器」『北陸人類学会誌』1 北陸人類学会 金沢。
- 大場磐雄・小出義治他 1963 『加賀市片山津玉造遺跡の研究』加賀市教育委員会 加賀。
- 奥田淳爾 1983 『佐々成政』桂書房 富山。
- 奥村吉信 1985 「白岩薮ノ上遺跡の技術基盤」『古代文化』第37巻第2号 古代学協会 京都。
- 奥村吉信 1987 「東日本のペン先形ナイフ形石器を伴う石器群」『旧石器考古学』35 旧石器文化談話会 京都。
- 押水町史編纂委員会 1974 『押水町史』押水町役場 石川県押水町。
- 押水町教育委員会編 1982 『押水のむかし話』押水町教育委員会 石川県押水町。
- 乙益重隆 1983 「袋状堅穴考」『日本史論集』上巻 吉川弘文館 東京。
- 折戸靖行 1985 『八野古窯跡群発掘調査概要報告書』高松町教育委員会 石川県高松町。
- 笠松宏至 1979 『日本中世法史論』第8章 東京大学出版会 東京。
- 角川日本地名大辞典編纂委員会編 1981 『石川県地名大辞典』角川書店 東京。
- 川畑 誠 1987 「高松押水窯跡群について」『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 河村好光 1984 『羽咋市柳田シャコデ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 北野博司 1986 「宝達山麓地域における“月影式”併行期の土器群」『シンポジウム「月影式土器について」報告編』石川考古学研究会 金沢。

- 北野博司他 1987 『宿東山遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 木立雅朗 1987 a 「奈良時代の遺物」『宿東山遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 木立雅朗 1987 b 「後山谷2号窯」『辰口町史』第2巻 前近代編 辰口町 石川県辰口町。
- 工藤俊樹・中司照世 1985 『右近次郎遺跡』II 大野市教育委員会 大野。
- 久我家文書研究会 1970 「鎌倉・室町時代の久我家領について」『国史学』81号 国史学会 東京。
- 越坂一也 1983 「押水町竹生野遺跡の石刃」『拓影』第12号 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 小嶋芳孝 1987 『寺家遺跡発掘調査報告I』 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 駒井和愛・吉田章一郎 1962 『斐太』 慶友社 東京。
- 嵯峨井 亮・村井一郎・松永 清 1965 「石川県高松町押水町入会・東間坂手山縄文遺跡概報」『石川考古学研究会々誌』第9号 石川考古学研究会 金沢。
- 嵯峨井 亮・村井一郎 1969 「石川県押水町紺屋町ホンデン遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌』第12号 石川考古学研究会 金沢。
- 嵯峨井 亮・村井一郎 1970 「石川県押水町紺屋町ホンデン遺跡調査報告（第二次）」『石川考古学研究会々誌』第13号 石川考古学研究会 金沢。
- 佐原 真 1979 「弥生時代の集落」『考古学研究』100 考古学研究会 岡山。
- 下関市教育委員会編 1981 『綾羅木郷遺跡発掘調査報告』第1集 下関市教育委員会 下関。
- 杉本源造 1984 「袋状土壌について」『丸山遺跡発掘調査報告書』 鳥取県三朝町教育委員会・花園大学考古学研究室 鳥取県三朝町。
- 須藤求馬 1898 「北陸発見埴輪図説」『北陸人類学会誌』 北陸人類学会 金沢。
- 須藤隆司 1986 「群馬県藪塚遺跡の石器文化」『明治大学考古学博物館館報』No.2 明治大学考古学博物館 東京。
- 高堀勝喜 1956 「鹿島郡鳥屋町黒氏出土の木器について」『石川考古学研究会々誌』第8号 石川考古学研究会 金沢。
- 高堀勝喜・西野秀和 1983 『上田うまばち遺跡』 押水町教育委員会 石川県押水町。
- 滝上秀明・木立雅朗 1985 『辰口町湯屋古窯跡』 辰口町教育委員会 石川県辰口町。
- 竹田 学 1985 『竹橋油木谷遺跡』 津幡教育委員会 石川県津幡町。
- 田嶋明人編 1986 『漆町遺跡群』I 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 田嶋明人 1987 a 「古代土器の編年軸設定」『篠原遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 田嶋明人 1987 b 「在地窯の成立と土師器－越前・加賀・能登・越中の状況」『第8回三県シンポジウム 東国における古式須恵器をめぐる諸問題』第Ⅱ分冊－各県の動向編－ 北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所。
- 田嶋明人・戸潤幹夫 1987 『敷地鉄橋遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 谷 幸信・西野秀和 1976 「羽咋郡押水町竹生野トリゲ山遺跡」『石川考古学研究会々誌』第12号 石川考古学研究会 金沢。
- 寺沢 薫・寺沢知子 1981 「弥生時代植物質食料の基礎的研究－初期農耕社会の前提として－」『考古学論攷』第5冊 奈良県立橿原考古学研究所 橿原。
- 戸根与八郎他 1979 『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷内遺跡』 新潟県教育委員会 新潟。

- 戸潤幹夫・三浦純夫編 『北塚遺跡群』 1985 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 戸潤幹夫・山本直人他 1986 『近岡遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 豊田 武 1952 『増訂中世日本商業史の研究』1-(3) 岩波書店 東京。
- 土肥 富士夫編 1984 『国分高井山遺跡』 七尾市教育委員会 七尾。
- 中島義一 1970 「市場町栃木と城下町吹上」『地形図に歴史を読む』第2集 大明堂 東京。
- 中西国男 1974 「中世志雄保と菅原荘」『石川県志雄町史』 志雄町役場 石川県志雄町。
- 中西国男 1980 「御館の館」「岡部六弥太館」『日本城郭大系』7 新人物往来社 東京。
- 中村 浩 1985 「飛騨路の初期須恵器」『古代窯業史の研究』 柏書房 東京。
- 西野秀和編 1980 『津幡町谷内石山遺跡』 津幡町教育委員会 石川県津幡町。
- 西野秀和編 1985 『高松町若緑ヤキノ窯跡』 高松町教育委員会 石川県高松町。
- 橋本澄夫 1966 「石川県押水町森本大塚古墳の予備的調査」『石川考古学研究会々誌』第10号 石川考古学研究会 金沢。
- 橋本澄夫 1974 「鹿頭神明森古墳」『富来町史』資料編 富来町役場 石川県富来町。
- 橋本澄夫・高橋 裕 1976 「古府クルビ遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅲ 石川県教育委員会 金沢。
- 橋本澄夫・谷内尾晋司 1982 『能登海浜道路関係埋蔵文化財調査報告』I 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 橋本澄夫 1984 「国分高井山遺跡が提起する問題点とそれへの所感」『国分高井山遺跡』 七尾市教育委員会 七尾。
- 橋本 正他 1971 『小杉町中山南遺跡調査報告書』 富山県教育委員会 富山。
- 橋本 正 1974 『小杉町上野遺跡』 富山県教育委員会 富山。
- 花塚信雄 1984 「須恵器甕類叩き目文について」『金沢市畝田・寺中遺跡』 金沢市教育委員会 金沢。
- 花塚信雄・木立雅朗 1986 「小松市・ニツ梨-貫山窯跡採集の須恵器について」『石川考古学研究会々誌』第29号 石川考古学研究会 金沢。
- 浜岡賢太郎・嵯峨井 亮・橋本澄夫・吉岡康暢 1965 「能登鳥屋古窯跡群の調査(第2次)」『石川考古学研究会々誌』第9号 石川考古学研究会 金沢。
- 浜岡賢太郎・吉岡康暢 1962 「加賀・能登の古式土師器」『古代学研究』古代学研究会 大阪府狭山町。
- 東四柳史明 1975 「戦国期の動乱と羽咋」『羽咋市史』中世社寺編 羽咋市役所 羽咋。
- 久田正弘 1988 『八田中遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 福島正実・宮下栄仁 1982 『柳田タンワリ1号窯』 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 藤田邦雄・米沢義光他 1987 『宿向山遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 松山和彦 1987 「近年出土の石器から-旧石器時代に遡り得る資料-」『拓影』第23号 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 丸山 潔 1980 『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 神戸。
- 麻柄一志 1985 「局部磨製石斧を伴う石器群について」『旧石器考古学』31 旧石器文化談話会 京都。
- 麻柄一志 1986 「いわゆる立野ヶ原型ナイフ形石器の基礎的理解」『旧石器考古学』33 旧石器文化談話会 京都。
- 三浦純夫 1980 『上田出西山遺跡発掘調査報告書』 押水町教育委員会 石川県押水町。

- 三浦純夫 1987 「北陸における弥生時代の大型土坑」『考古学と地域文化』 同志社大学考古学シリーズ刊行会 京都。
- 三辻利一・木立雅朗 1986 「須恵器」『矢田遺跡』 七尾市教育委員会 七尾。
- 三宅博士 「神田遺跡Ⅰ区・神田遺跡Ⅱ区」『北松江幹線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 島根県教育委員会 松江。
- 村井一郎 1966 「羽咋群押水町北川尻オサノ山遺跡」『石川考古学研究会々誌』第10号 石川考古学研究会 金沢。
- 村井一郎・平田天秋 1976 『高松町箕打・みやの古窯』 石川県教育委員会 金沢。
- 矢ヶ崎孝雄 1981 「加賀・能登－石川県の概要」『ふるさと加賀・能登』 東京法令出版 東京。
- 谷内尾晋司 1982 「まとめ」『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 谷内尾晋司・中島俊一他 1984 『鹿首モリガフチ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 金沢。
- 谷内碩央 1987 『柳田シャコデ廃寺』 羽咋市教育委員会 羽咋。
- 山川正一・吉野孝幸 1984 『谷長割遺跡』 宇ノ気町教育委員会 石川県宇ノ気町。
- 山本直人 1986 「石川県における古代中世の網漁業の展開」『石川考古学研究会々誌』第29号 石川考古学研究会 金沢。
- 湯尻修平 1978 『鹿島町徳前C遺跡調査報告』Ⅰ 石川県教育委員会 金沢。
- 湯尻修平 1981 『金沢市岩出うわの遺跡』(プリント) 石川県教育委員会 金沢。
- 吉岡康暢 1965 「石川県河北郡黒川第2号窯址」『日本考古学年報』6 日本考古学協会 東京。
- 吉岡康暢 1976 「土壌の諸類型と性格」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ 石川県教育委員会 金沢。
- 吉岡康暢・小嶋芳孝他 1976 『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ 石川県教育委員会 金沢。
- 吉岡康暢 1983 「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』 松任市教育委員会・石川考古学研究会 松任。
- 渡辺 誠 1974 「食料資源」『月刊考古学ジャーナル』 No.100 ニューサイエンス社 東京。

図 版



遺跡周辺の航空写真(S = 1/15,000)





竹生野遺跡遠景（東から）



竹生野遺跡遠景（北から）



調査前の遺跡(南から)



調査前の遺跡(北から)



調査風景（北から）



調査風景（東から）



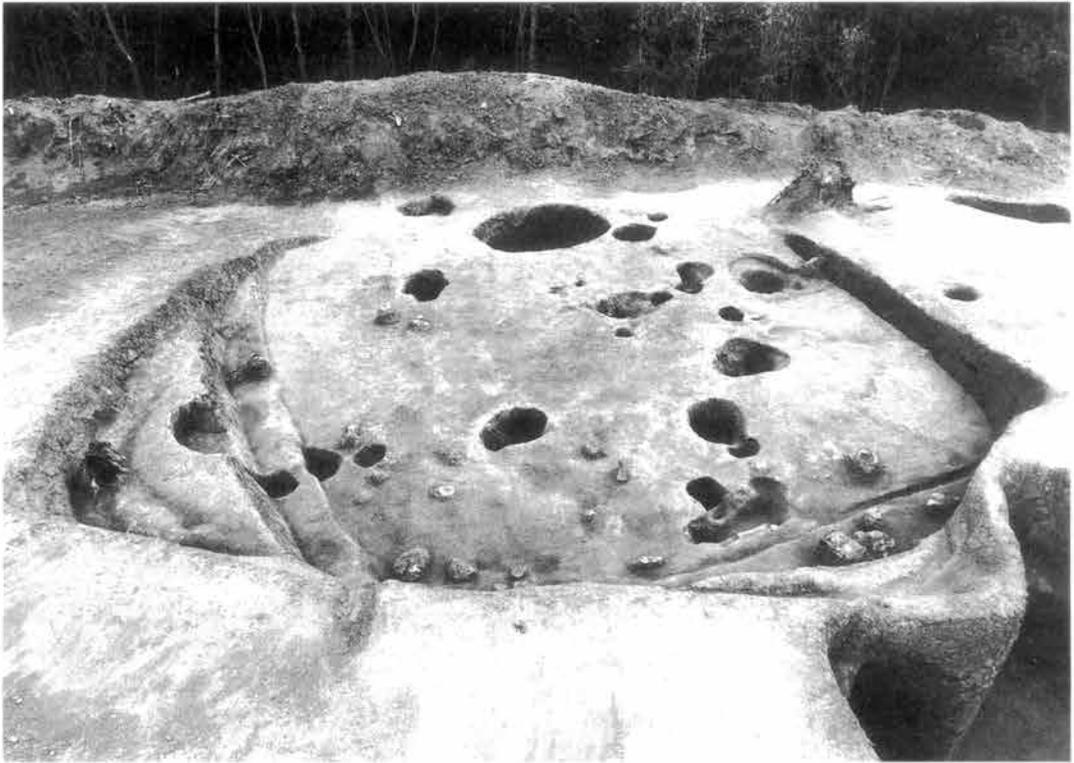
第1号竖穴住居(北から)



第2・3号竖穴住居(北から)



第2・3号竪穴住居と第24号土坑(東から)



第2・3号竪穴住居(西から)



第2号～第4号土坑(東から)



第2号～第4号土坑(北から)



第2号土坑



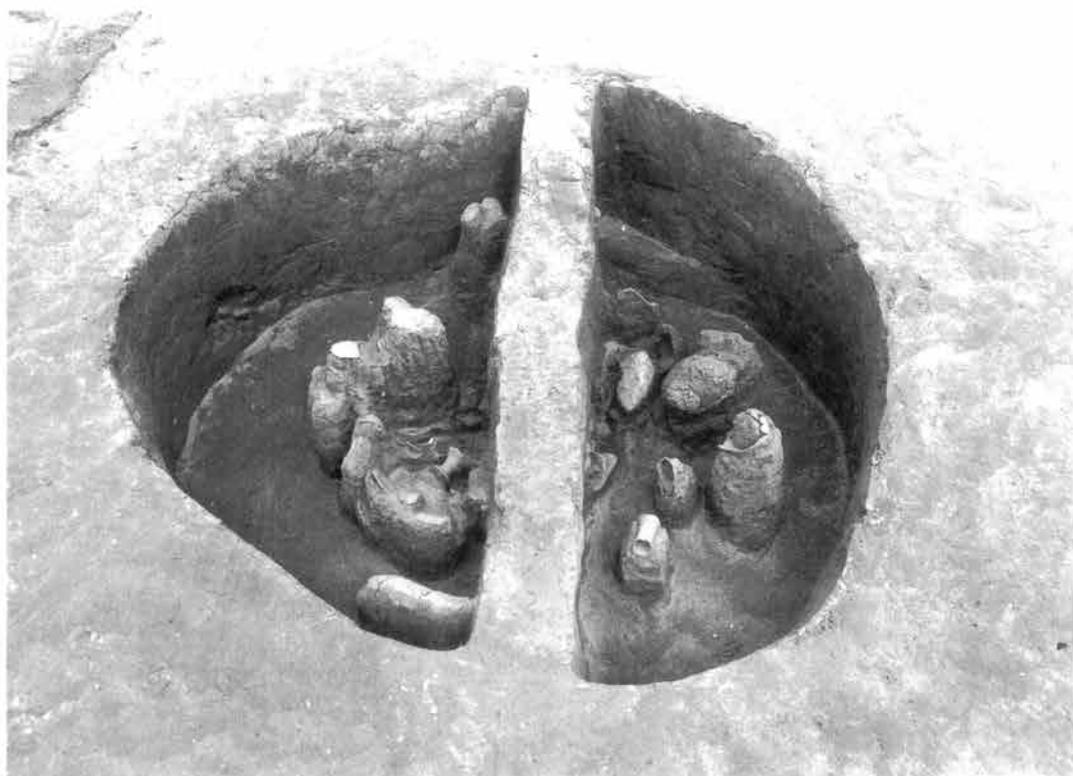
第2号土坑底面



第3号土坑土器出土状況



第3号土坑



第4号土坑土器出土状況



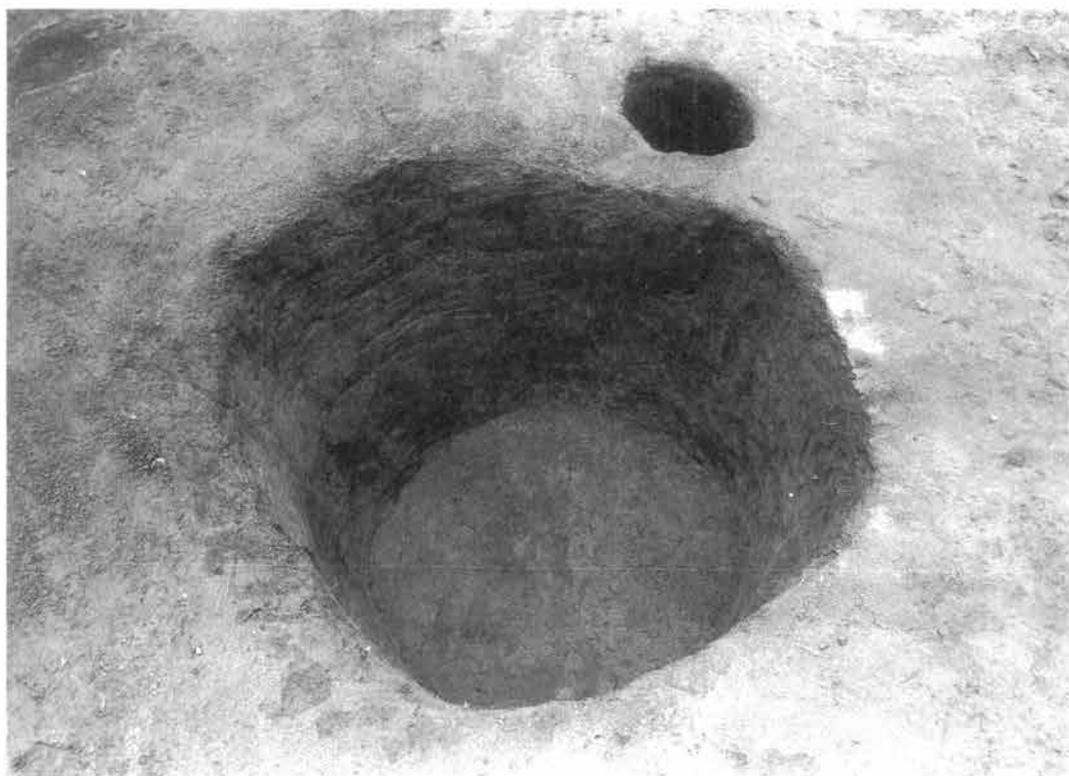
第4号土坑



第6号土坑



第6号土坑(西から)



第7号土坑



第8号土坑



第9号土坑土器出土状況



第9号土坑



第11号土坑(南から)



第11号土坑(西から)



第11号土坑



第11号土坑



第22号土坑土器出土状況(西から)



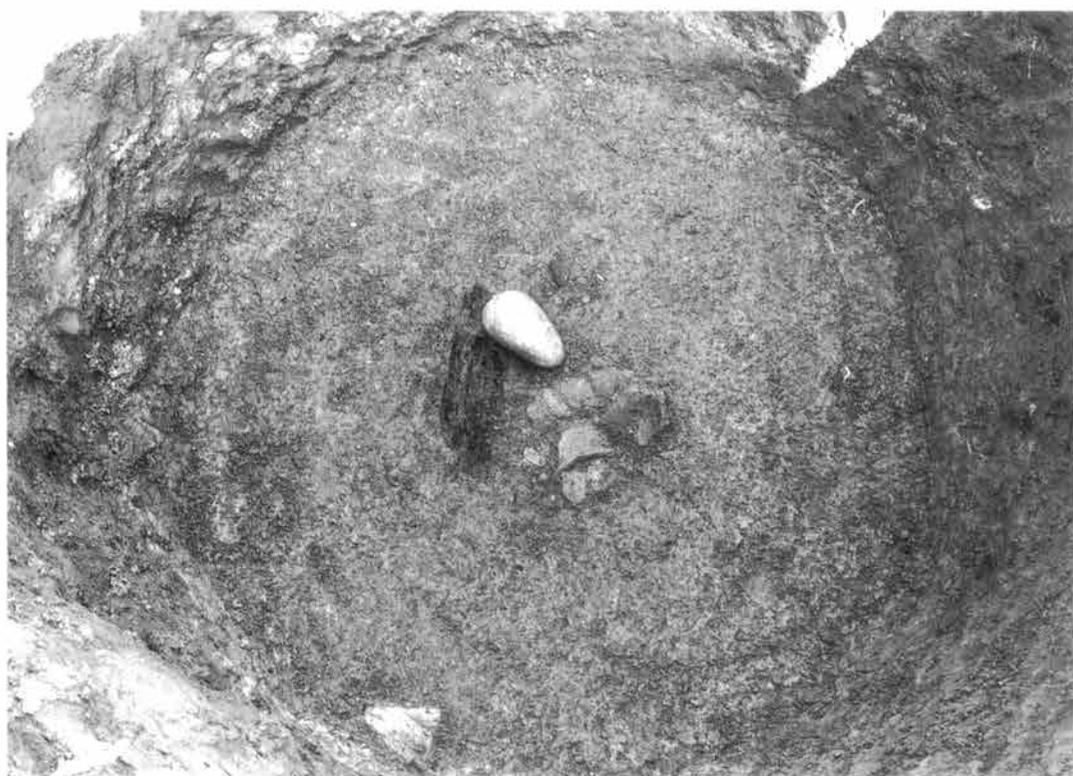
第22・23号土坑(東から)



第25号土坑土器出土状況



第25号土坑



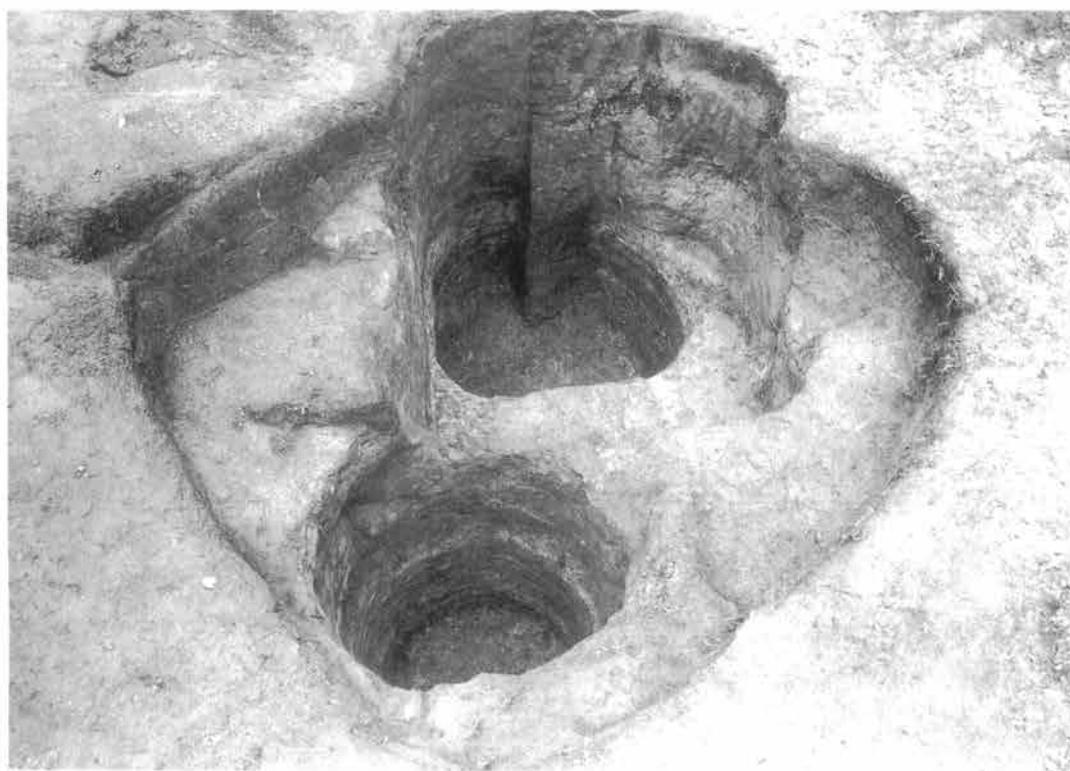
第24号土坑の底面



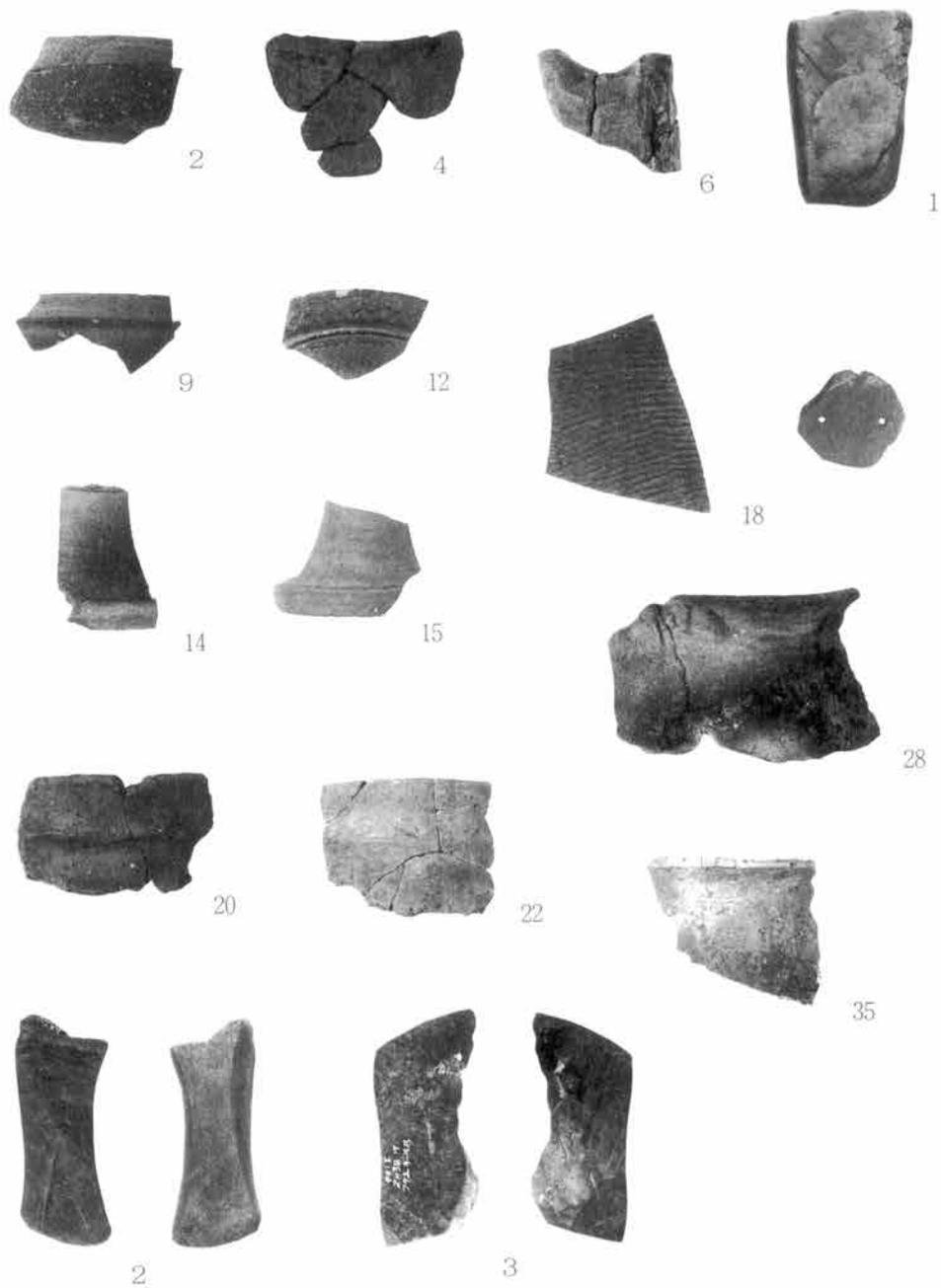
第28号土坑(西から)



第26号～第29号土坑(東から)



第26号～第29号土坑(南から)



第1号・第2号竪穴住居出土遺物
(最上段)



19



25



21



29



40



9



17



18



42



43



6



5





第2号・第3号・第8号土坑出土土器
(1) (8・10) (16・18・23・28)



27



32



31



39

第4号土坑出土土器



35



11



5



26

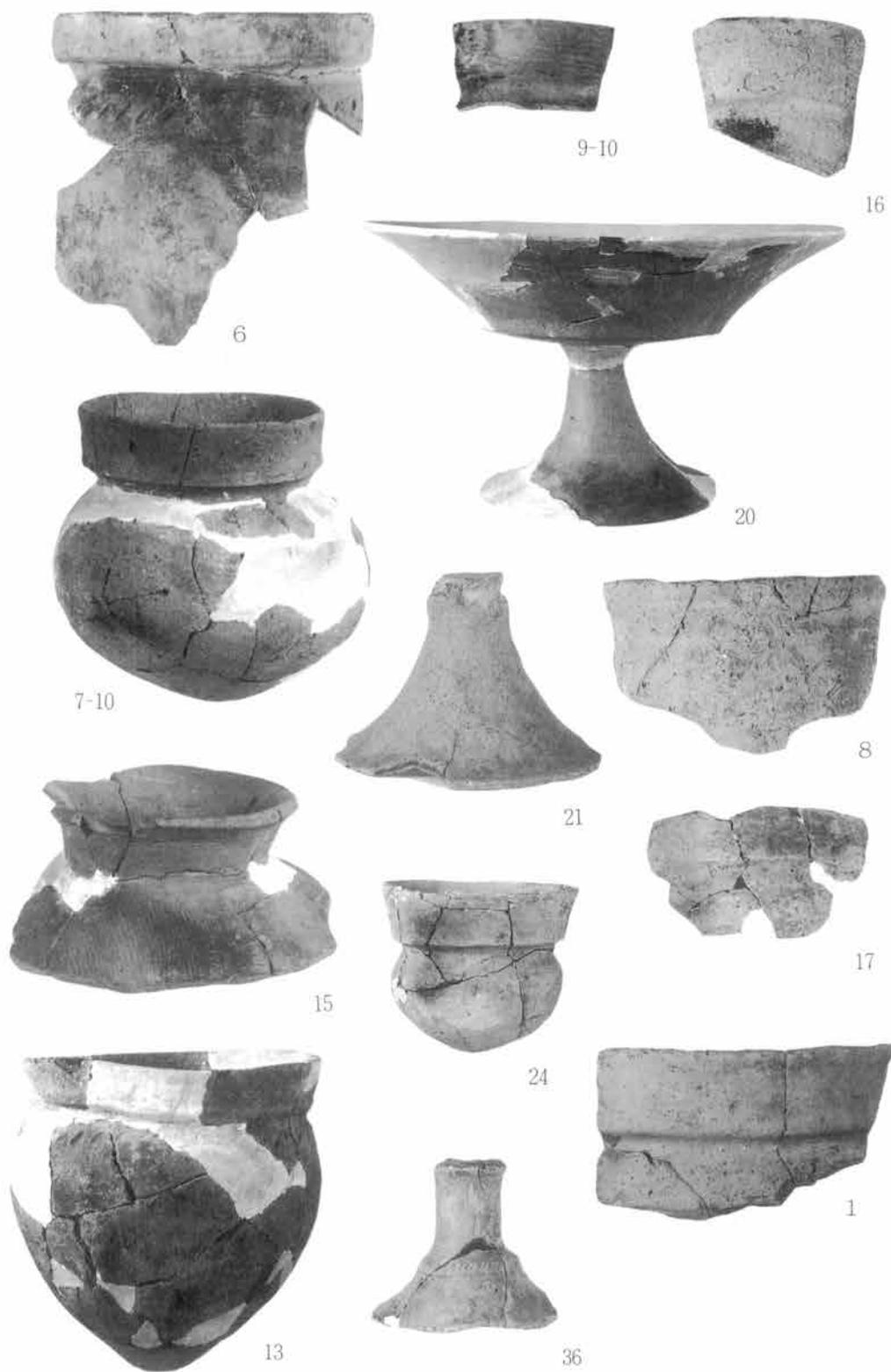


15



47

第4号土坑出土土器2



第7号・第9号・第11号・第22号土坑出土土器
 (6・10) (8・10・16) (15) (1・13・24・36)
 ・17・20・21)



1



5



2



3



6



25-7



11



29-7

第24号・第25号・第29号土坑出土土器
(1・5・6) (7・11) (2・3・7・11)



第26号土坑出土土器



第27号・第28号土坑出土土器
(右上壺)



第27号土坑

第2号溝

第3号竖穴住居

第4号掘立柱建物

第4号竖穴住居

第10号土坑

第17号土坑



第26号土坑

第13号土坑

第11号土坑

第14号土坑

第12号土坑

航空写真 (C・D-7・8区周辺)

第5号土坑



図版32

竹生野遺跡第2次調査

第6号土坑

第3号掘立柱建物

第7号土坑

第2号掘立柱建物

第1号掘立柱建物

第24号土坑

第57号土坑

航空写真(G・H-6・7区周辺)

第9号土坑

第1号竖穴住居

第2号竖穴住居

第52号土坑

第15号土坑

第8号土坑

第1号溝



図版34

竹生野遺跡第2次調査

第64号土坑 第15号竖穴住居

第14号竖穴住居

第56号土坑

第65号土坑

第51号土坑

第20号竖穴住居

第50号土坑

第36号土坑

第21号竖穴住居

第48号土坑

第47号土坑

第46号土坑

第32号土坑

航空写真 (N・O-4・5区周辺)

第45号土坑

第67号土坑

第66号土坑

第44号土坑

第42号土坑

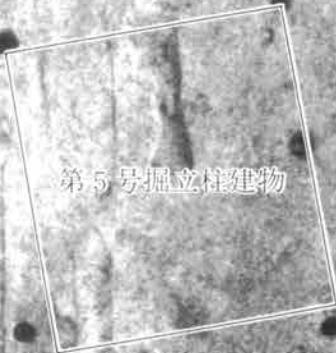
第22号土坑

第30号土坑

第43号土坑

第16号竖穴住居

第21号土坑



第5号掘立柱建物

第6号竖穴住居

第31号土坑

第28号土坑

第29号土坑

第53号土坑

第54号土坑

第62号土坑

第5号竖穴住居

航空写真(L・M-4・5区周辺)
第31号土坑

第13号竖穴住居

第46号土坑

第66号土坑

第32号

图版 36

第67号土坑

第45号土坑

竹生野遺跡第2次調査

第37号土坑

第35号土坑

第7号竖穴住居

第9号竖穴住居

第10号溝

第22号溝

第10号竖穴住居

第39号溝

第5号竖穴住居



図版37 竹生野遺跡第2次調査

第13号竖穴住居

第60号土坑

第33号土坑

第7号溝

第34号土坑

第11号竖穴住居

第9号溝

第63号土坑

航空写真 (L・M-5・6区周辺)

塚

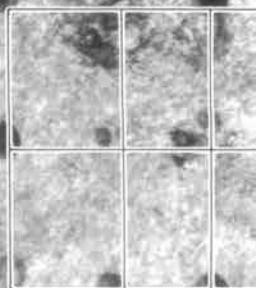
第60号土坑

第8号竪穴住居

第41号土坑

第7号掘立柱建物

航空写真 (Q・R-4・5区周辺)





第38号土坑

第55号土坑

第6号掘立柱建物

第69号土坑



調査前風景（北から）



表土除去作業（北から）



作業風景(北から)



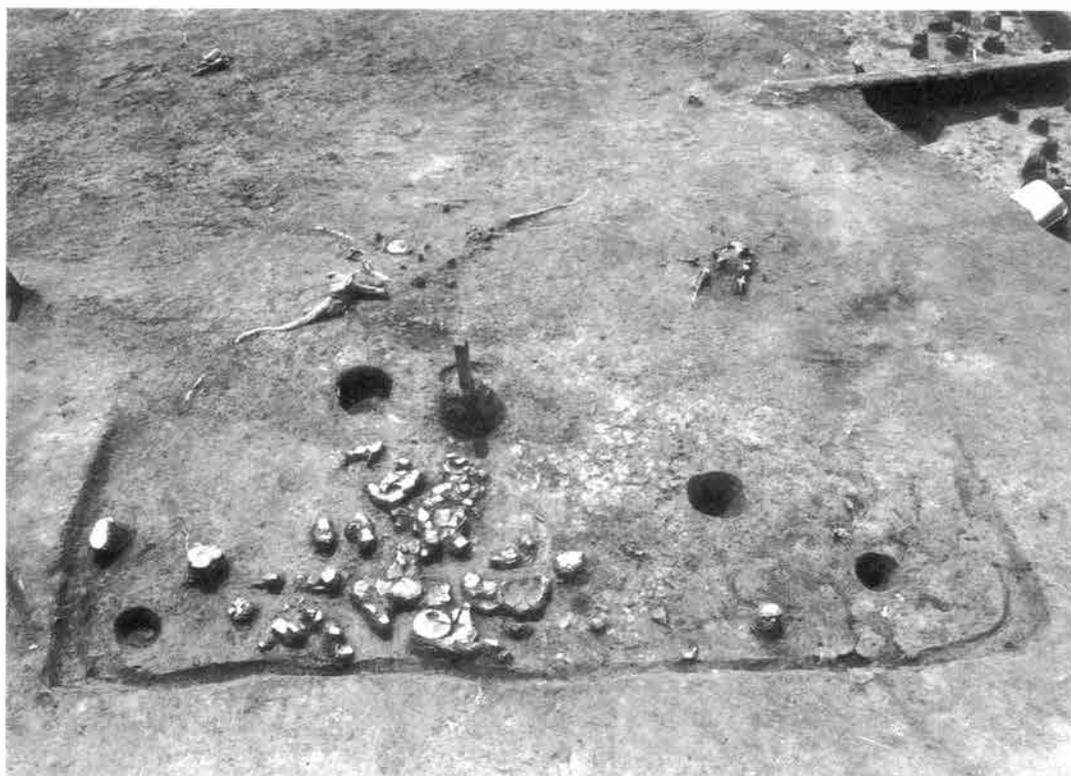
前期調査区完掘風景(北から)



第1号竖穴住居遺物出土状況(東から)



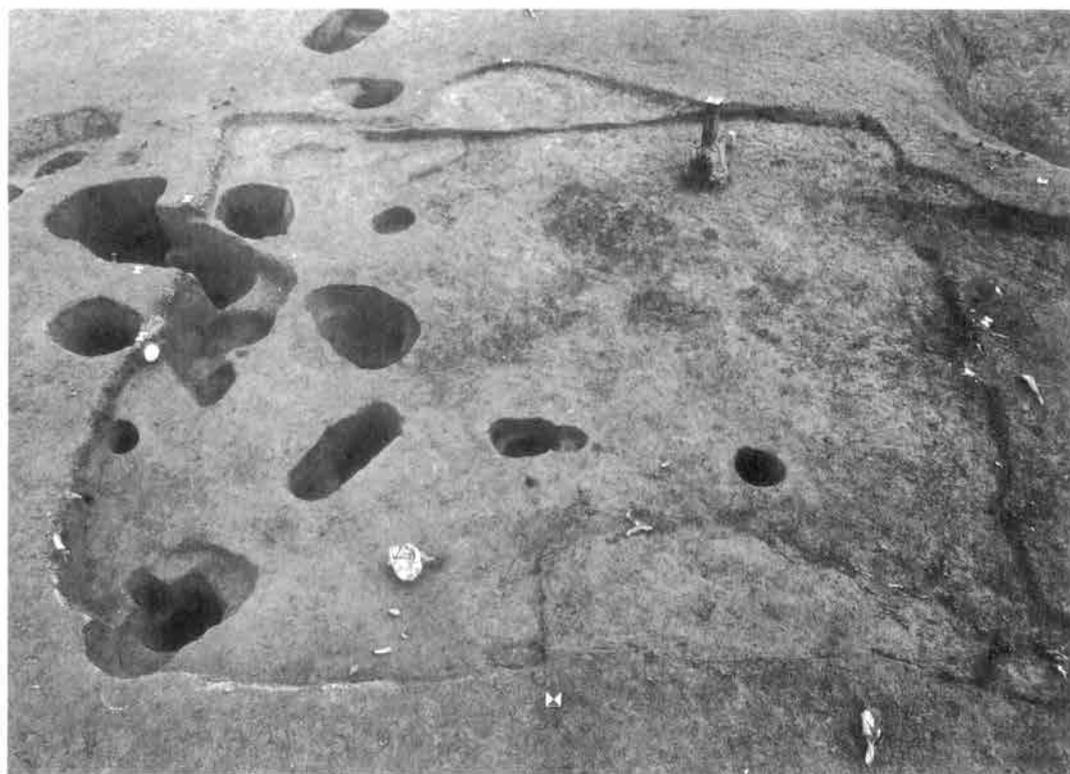
第1号竖穴住居(東から)



第2号竖穴住居(東から)



第3・4号竖穴住居(北から)



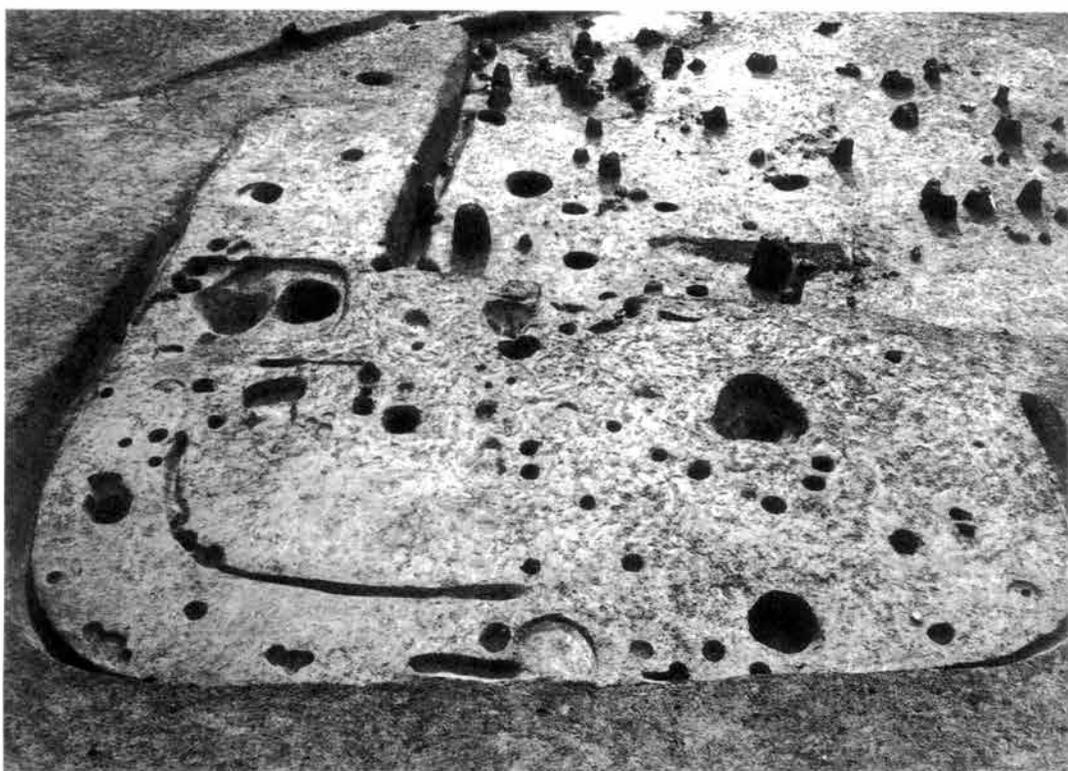
第5号竪穴住居(北から)



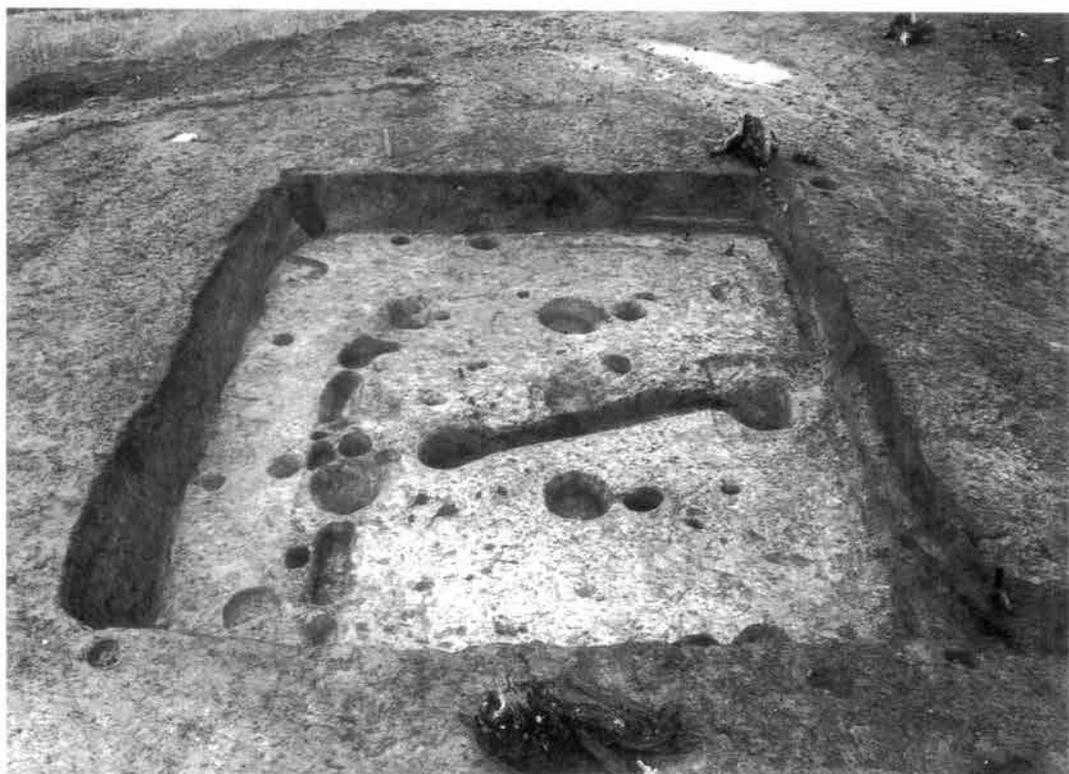
第6号竪穴住居(北から)



第6号竖穴住居土坑1~3(西から)



第7号竖穴住居(北から)



第8号竖穴住居(南から)



第8号竖穴住居土坑1・2(東から)



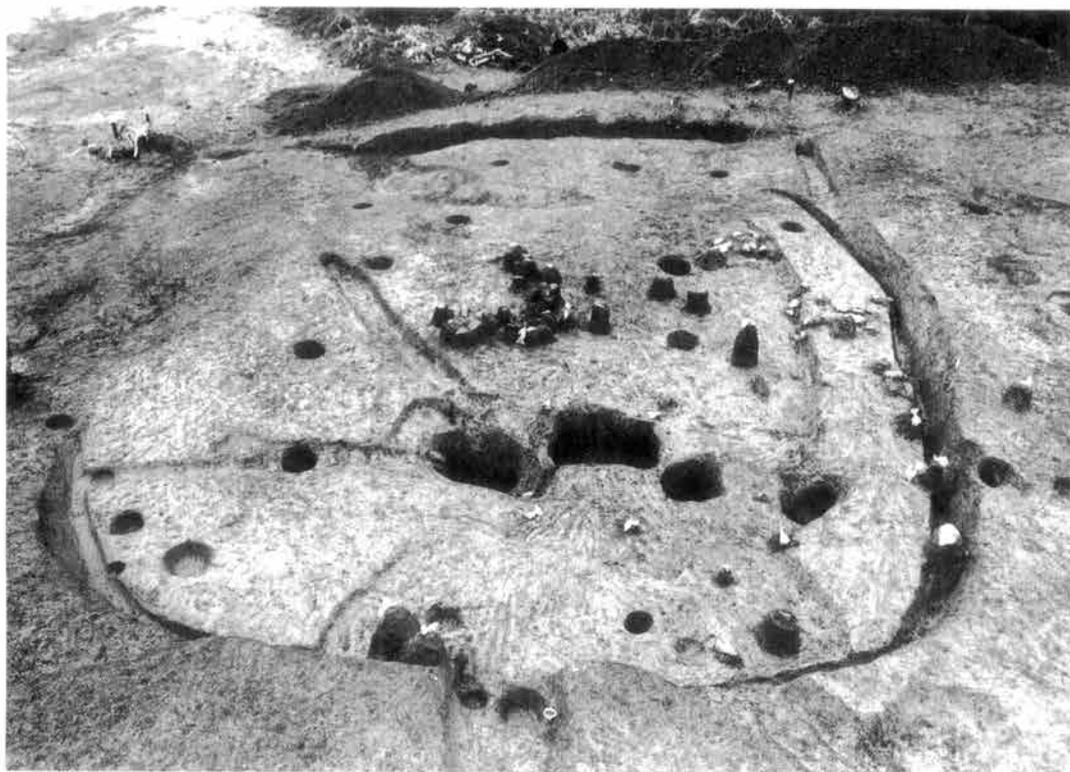
第9号〔新〕竪穴住居（東から）



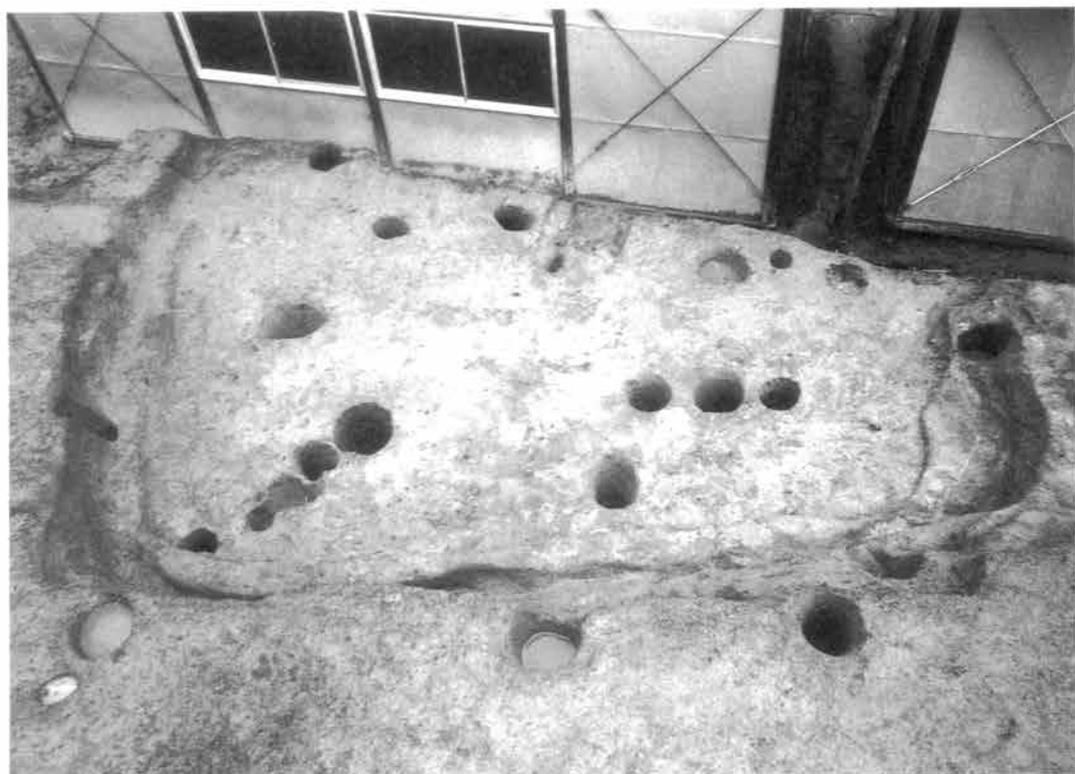
第9号〔古〕竪穴住居（東から）



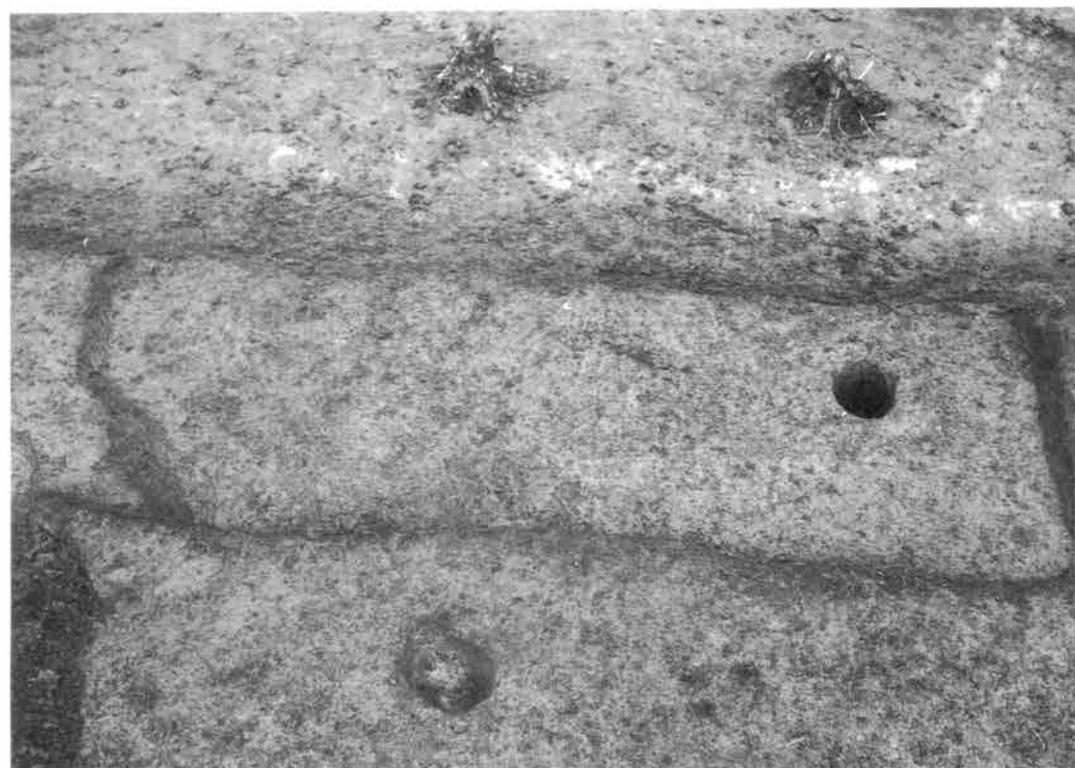
第10号竖穴住居(東から)



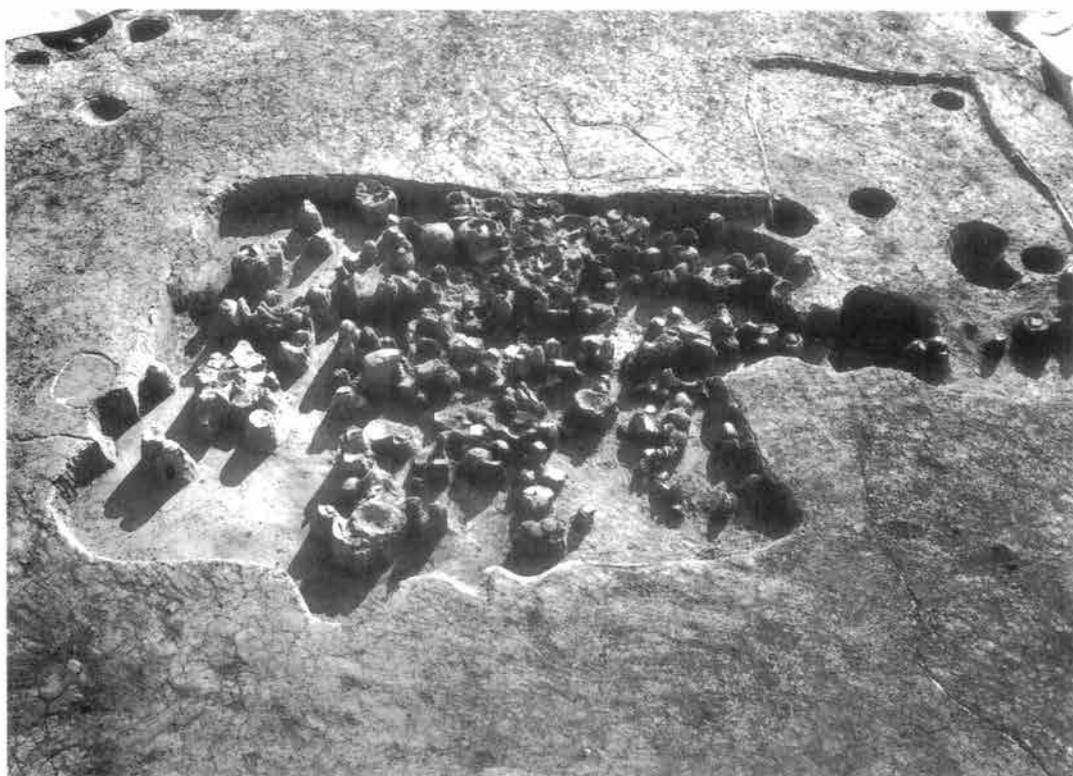
第11号竖穴住居(東から)



第14号竖穴住居(西から)



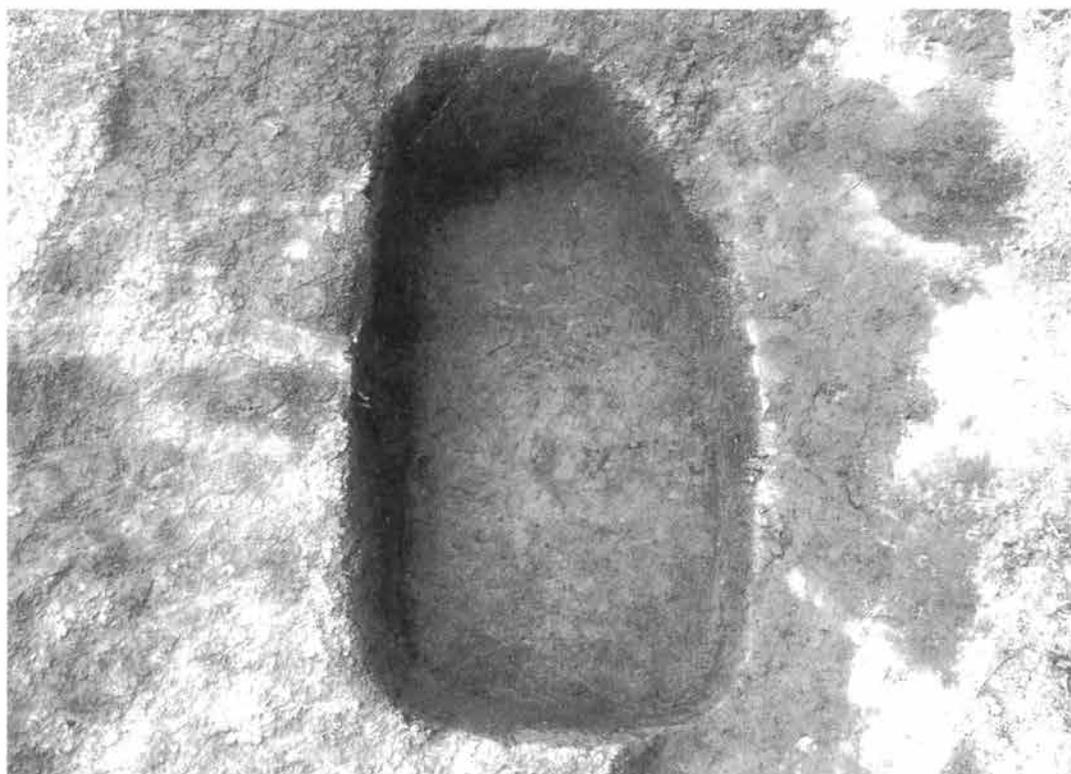
第20号竖穴住居(南から)



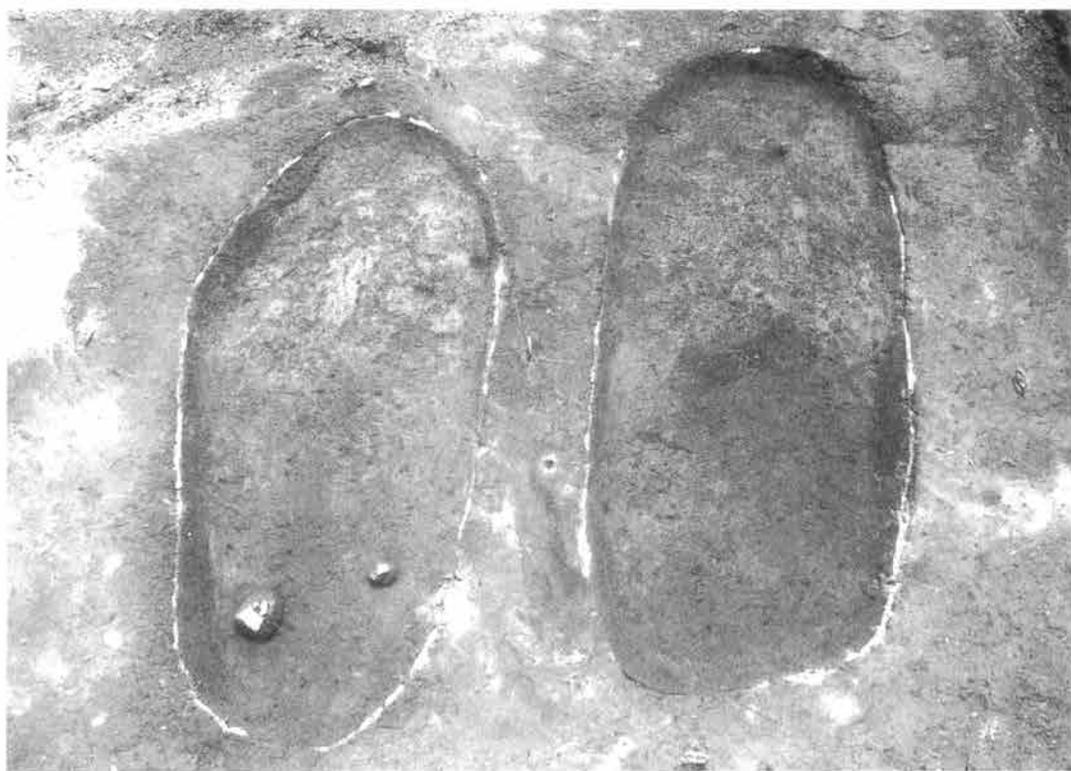
第21号竪穴住居遺物出土状況(北から)



第21号竪穴住居(南から)



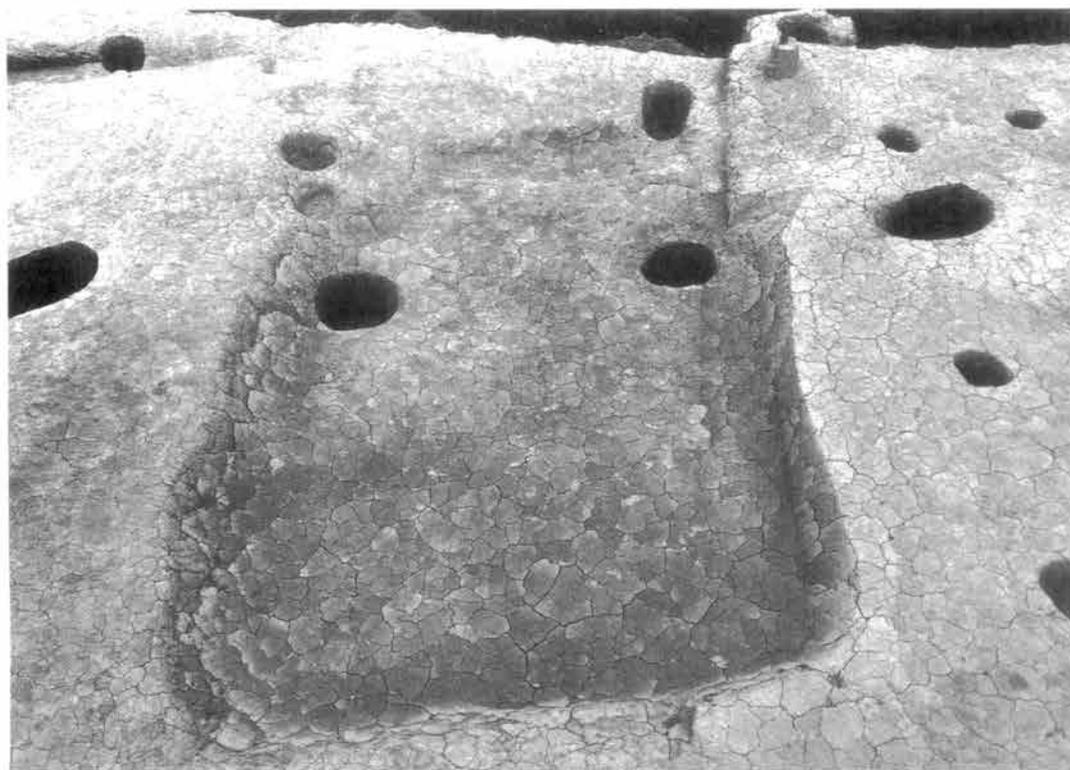
第1号土坑(南から)



第2・3号土坑(北から)



第 4 号 土 坑 (西から)



第 5 号 土 坑 (北から)



第 8 号 土 坑 (北から)



第 10 号 土 坑 (北から)



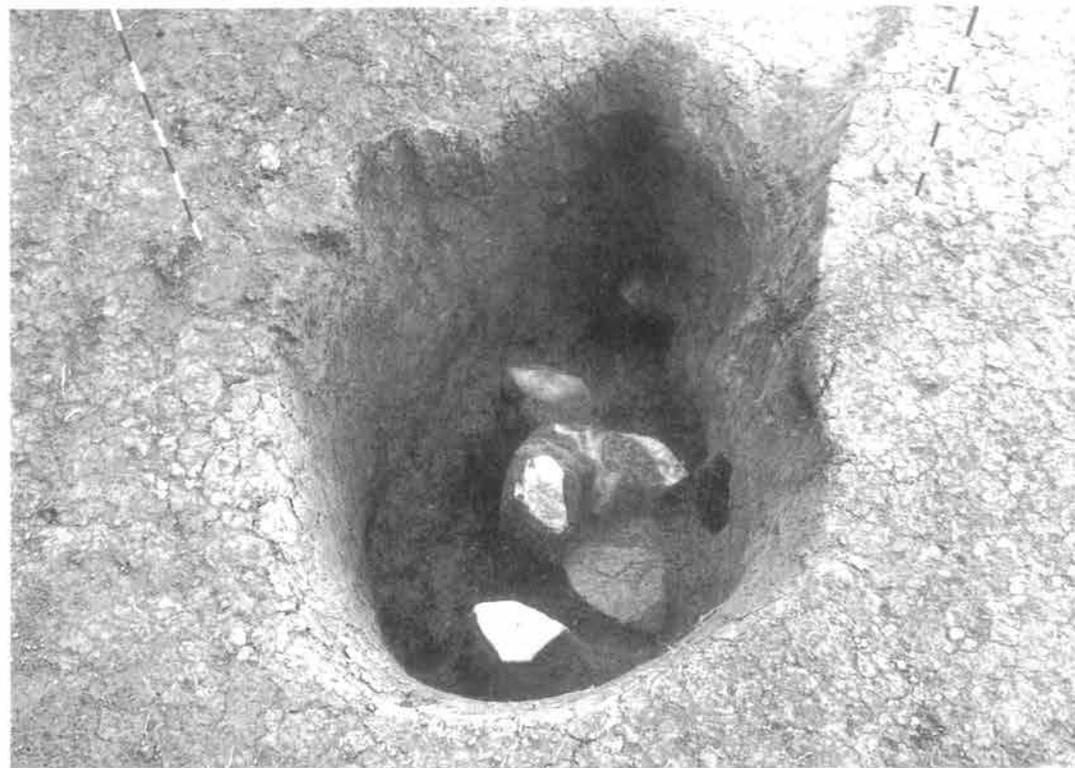
第11号土坑(西から)



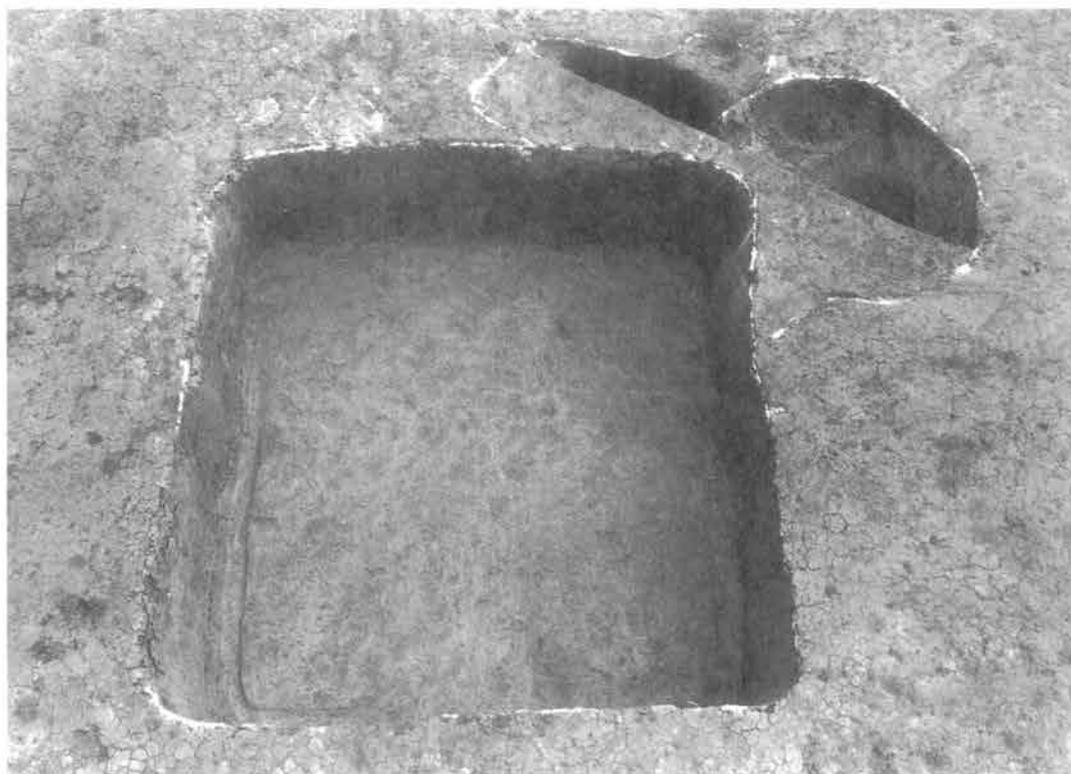
第12号土坑(東から)



第26号土坑〔東から〕



第27号土坑〔西から〕



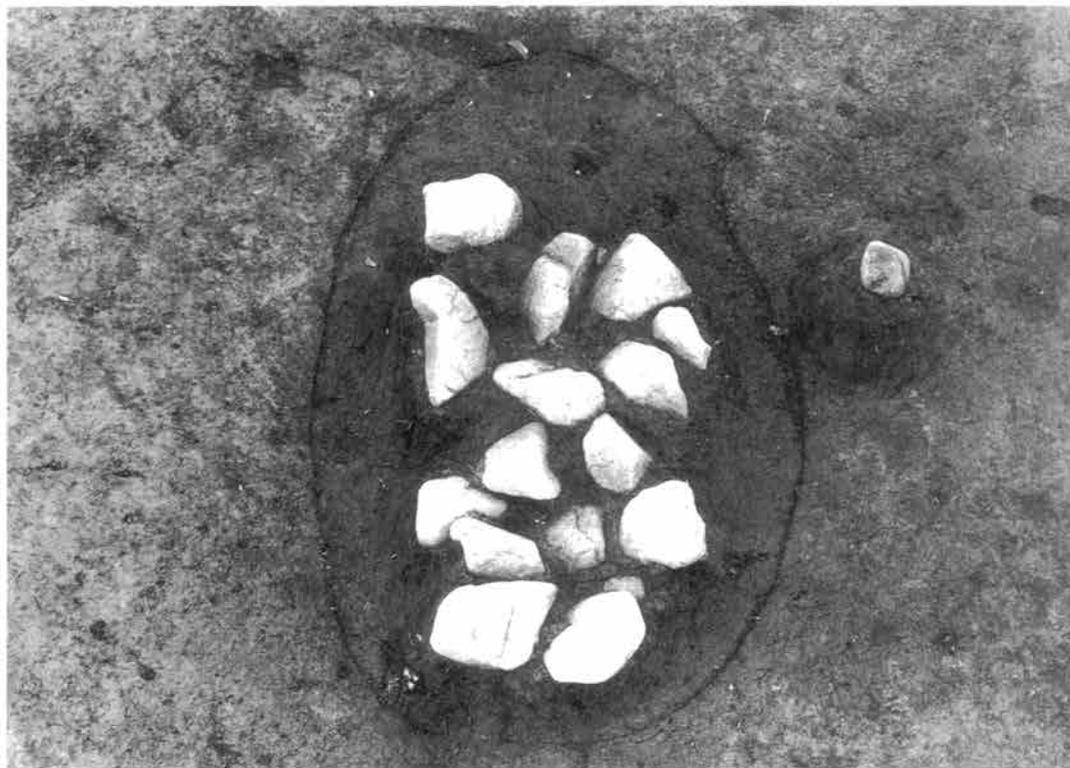
第 45 号 土 坑 (西から)



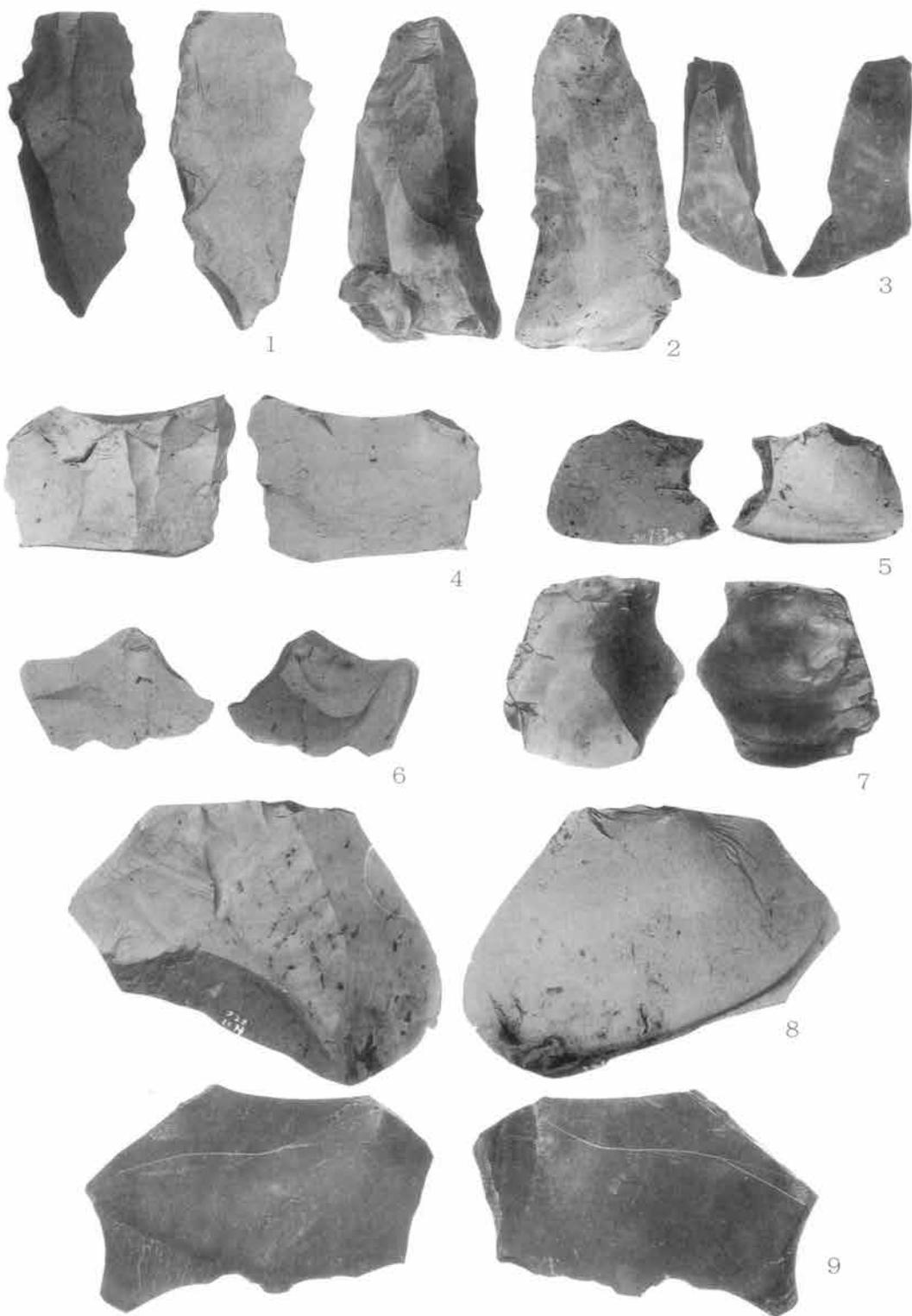
第 68 号 土 坑 (南から)



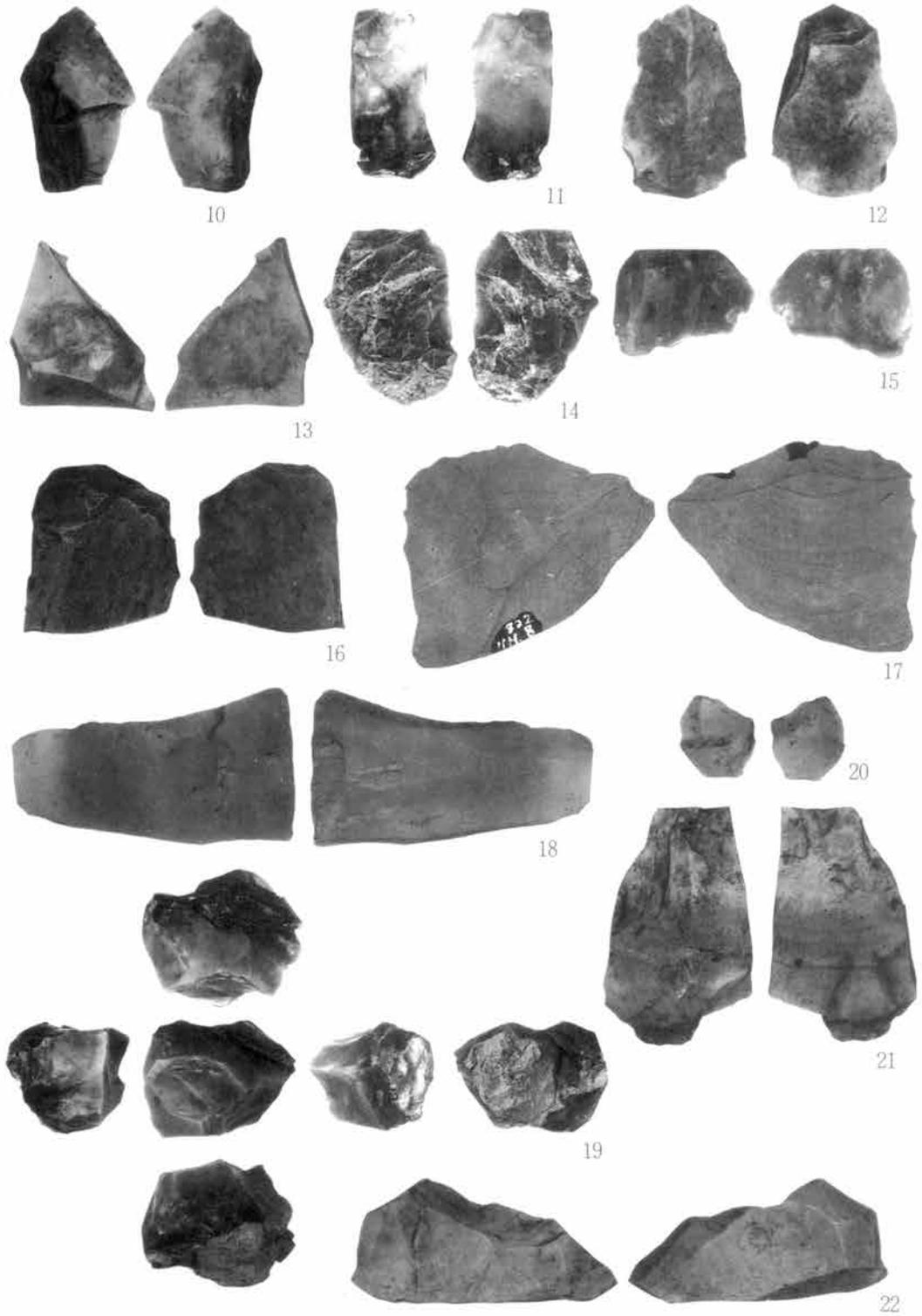
塚(西から)



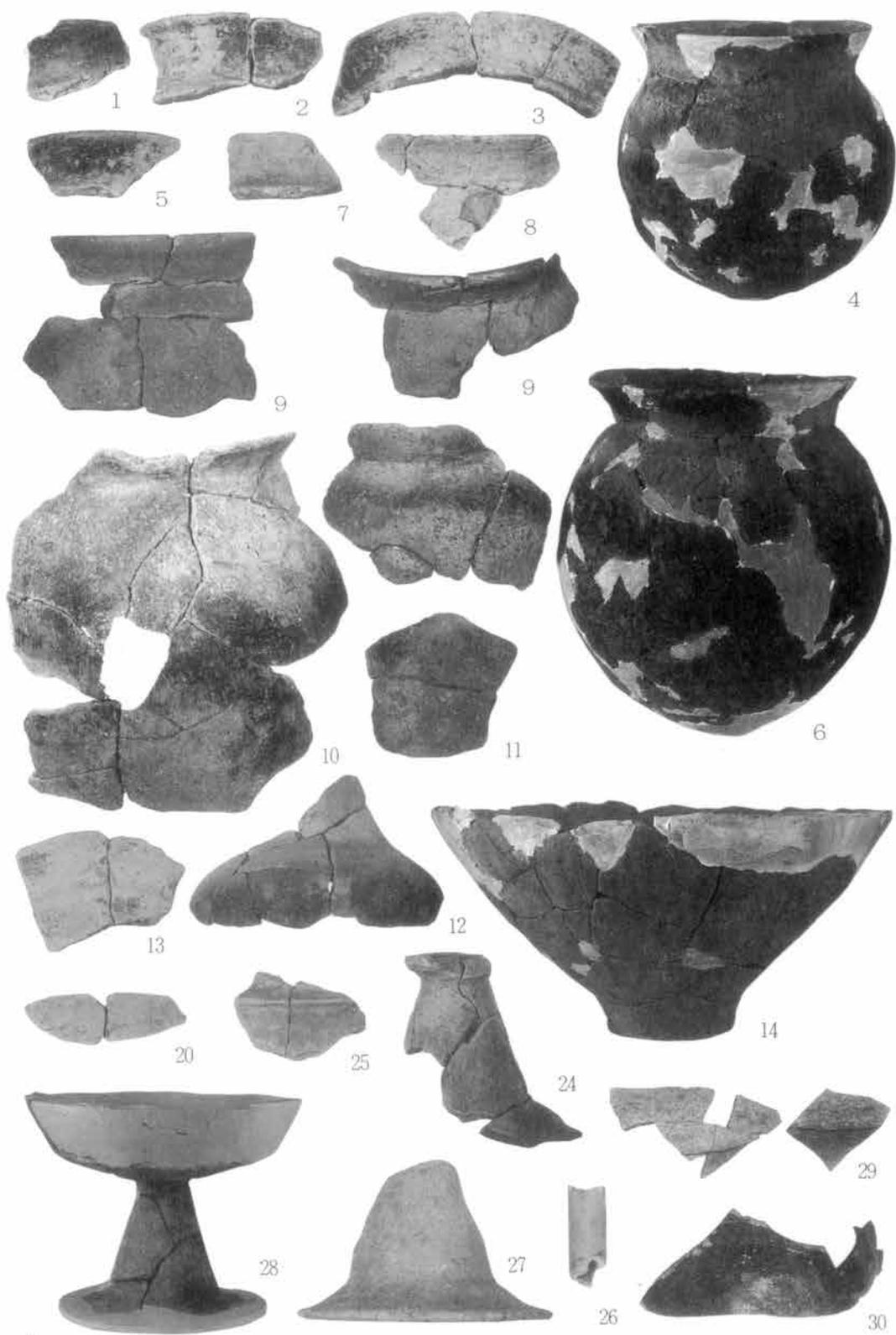
塚中心部の土坑(南から)



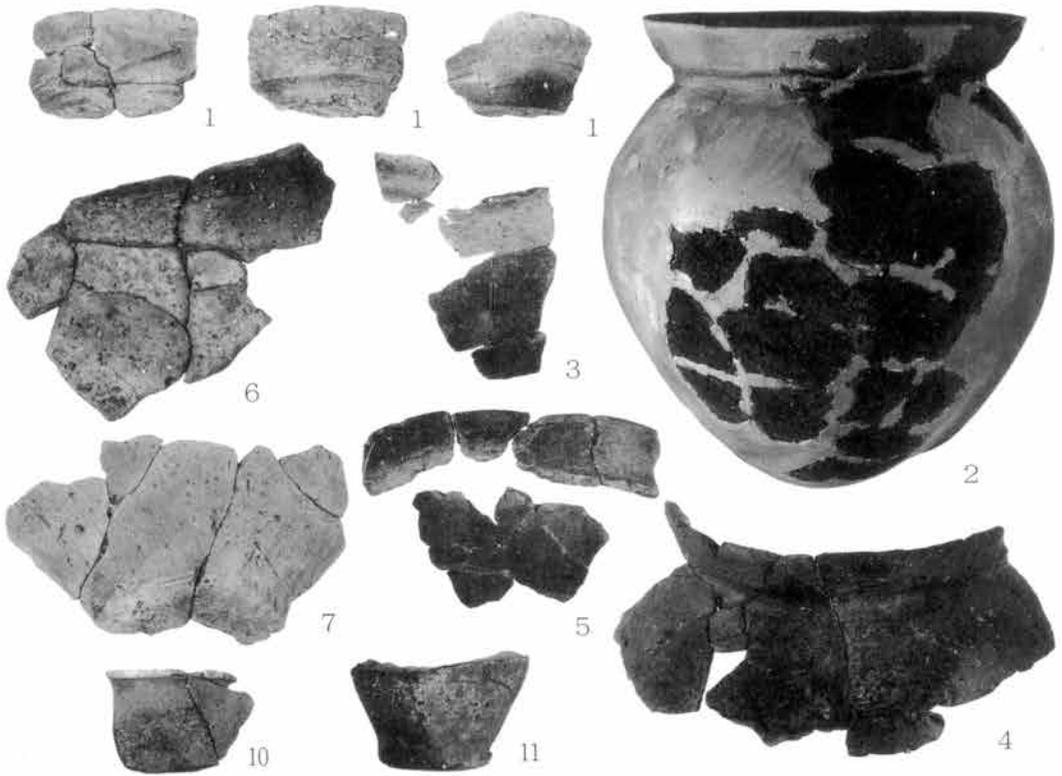
石器類(1) (1~8 A群 9 B群) S=4/5



石器類(2) (10~19 B群 20~22 宿向山遺跡) S=4/5



第1号竪穴住居出土遺物(26は原寸)

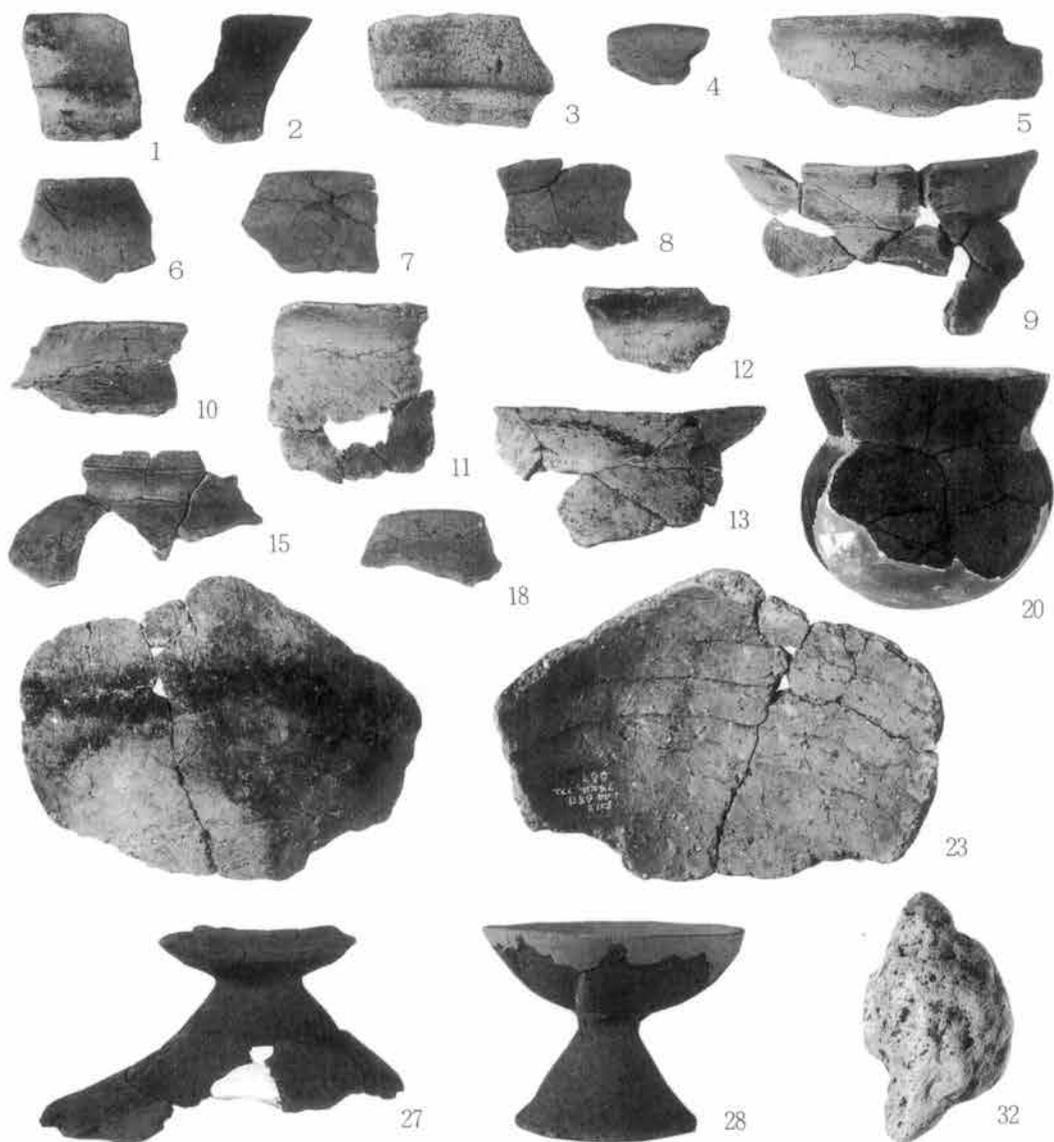


(上)第2号竖穴住居出土土器

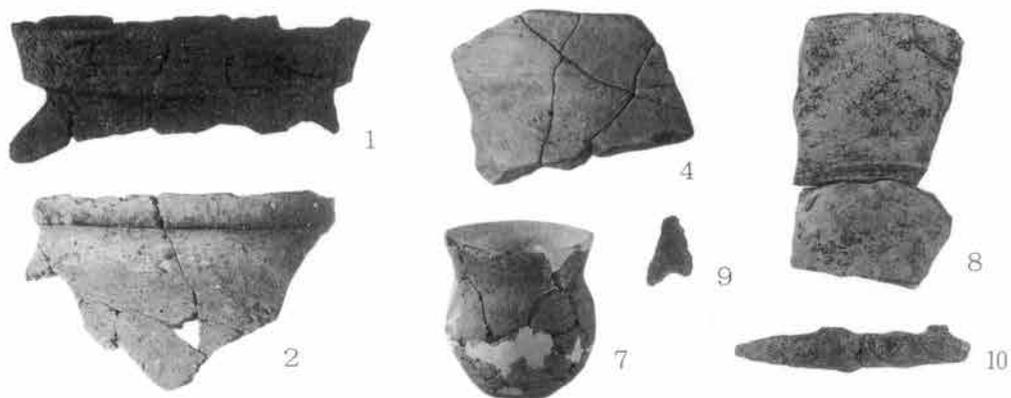
(左)第5号竖穴住居出土土器



第6号竖穴住居出土土器



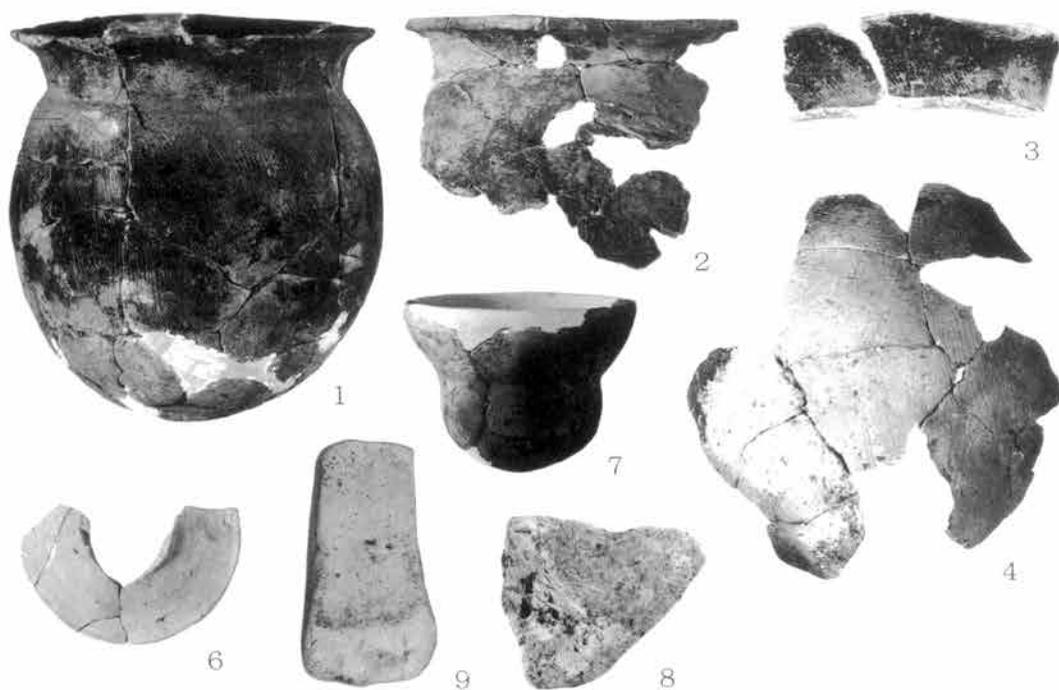
第6号竖穴住居出土遺物



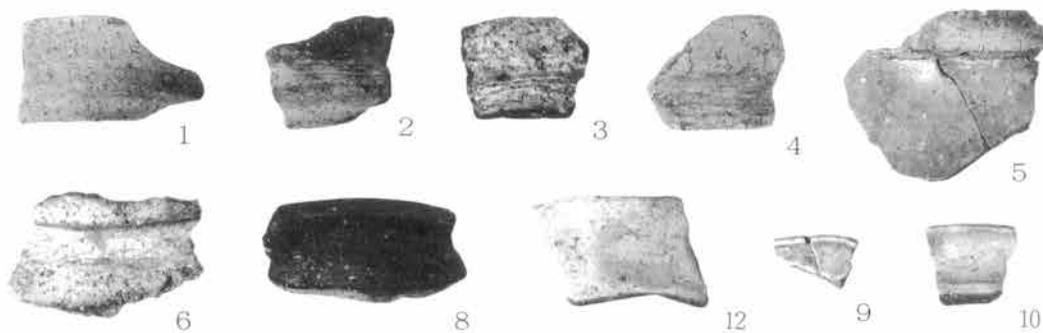
第7号竖穴住居出土遺物(9・10はS=1/2)



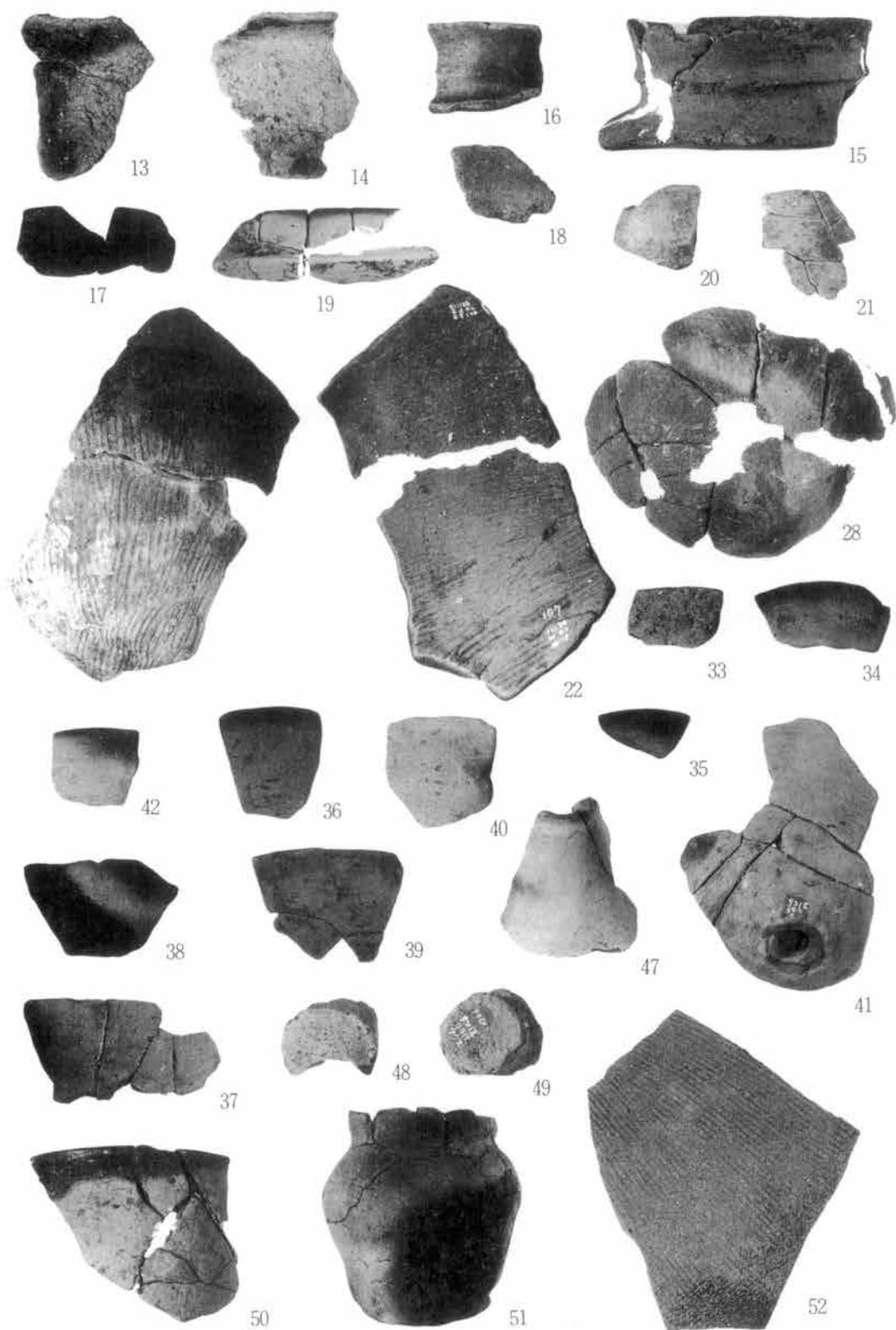
第7号竖穴住居出土土器



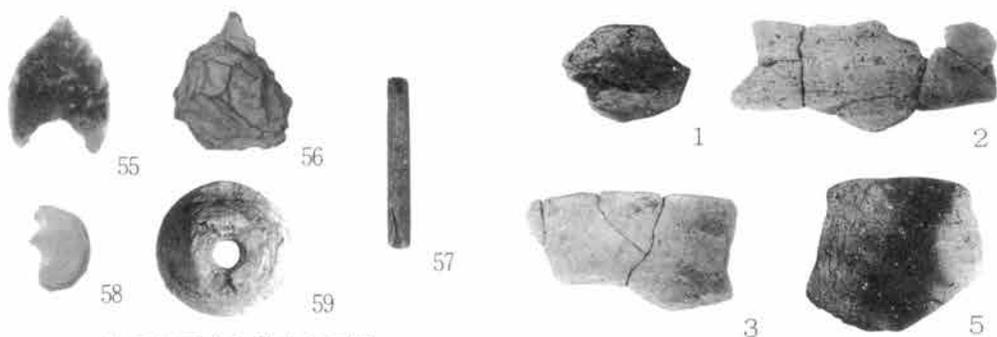
第8号竖穴住居出土遺物(9はS=1/2)



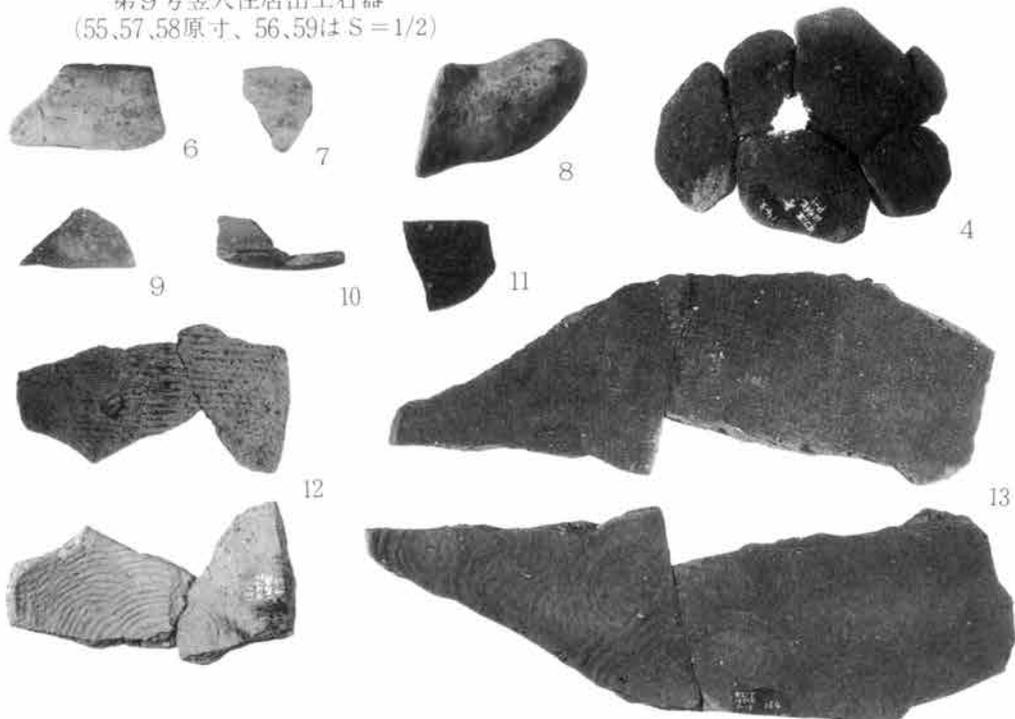
第9号竖穴住居出土土器



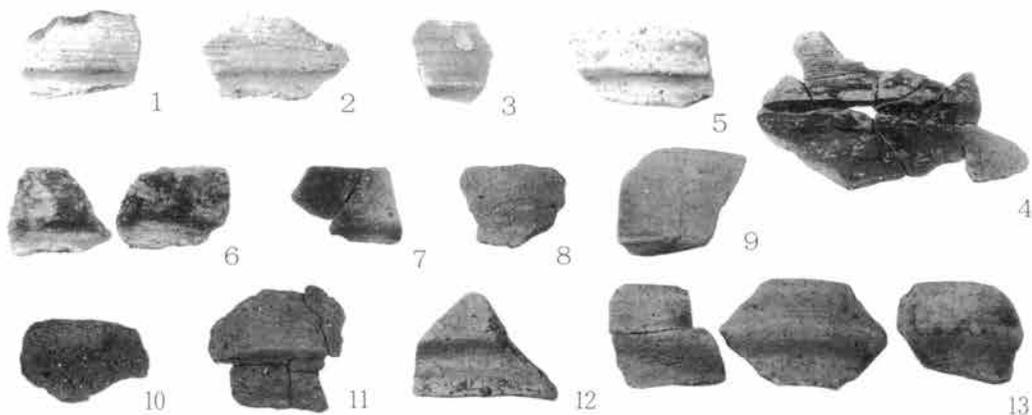
第9号竪穴住居出土土器



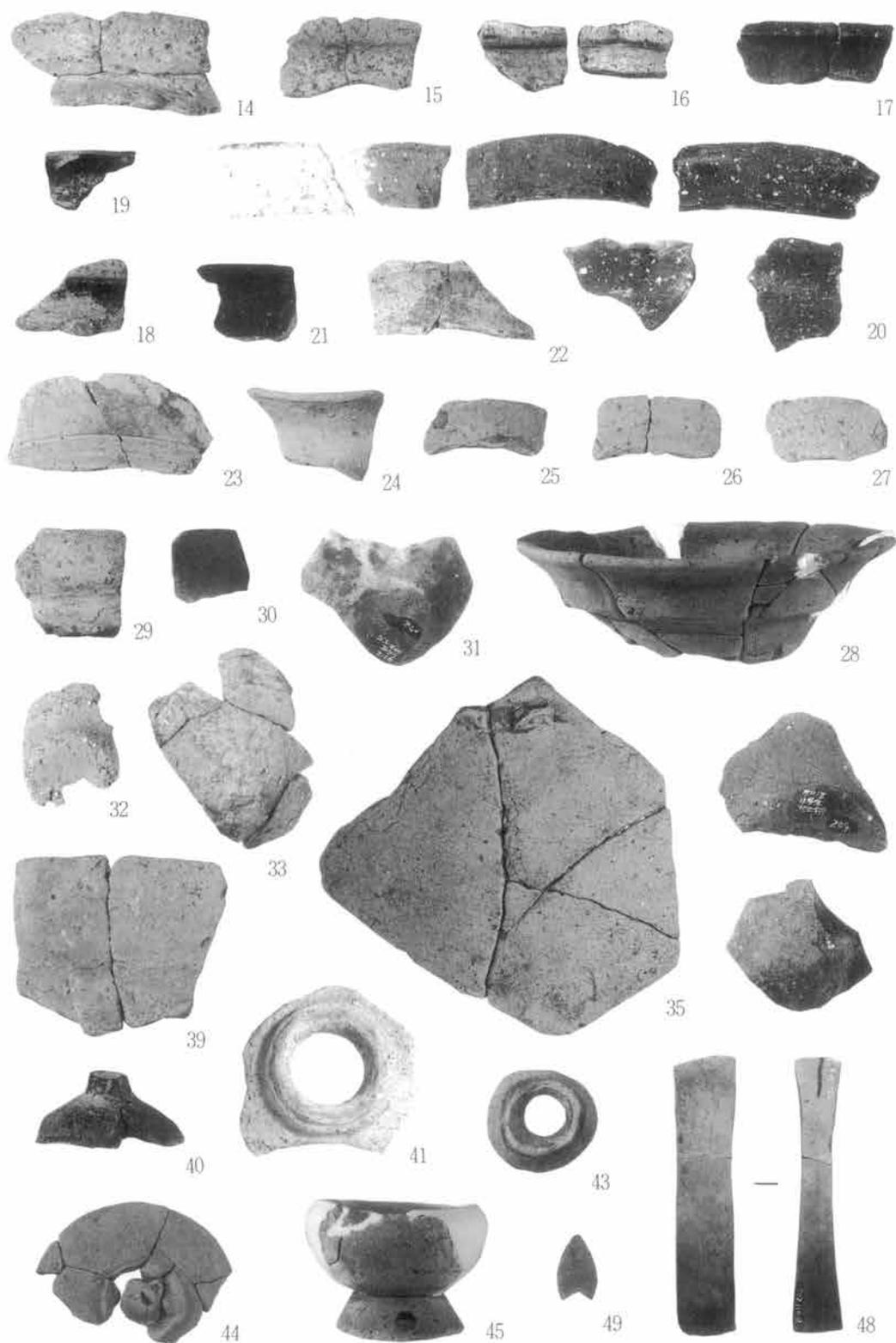
第9号竖穴住居出土石器
(55,57,58原寸、56,59はS=1/2)



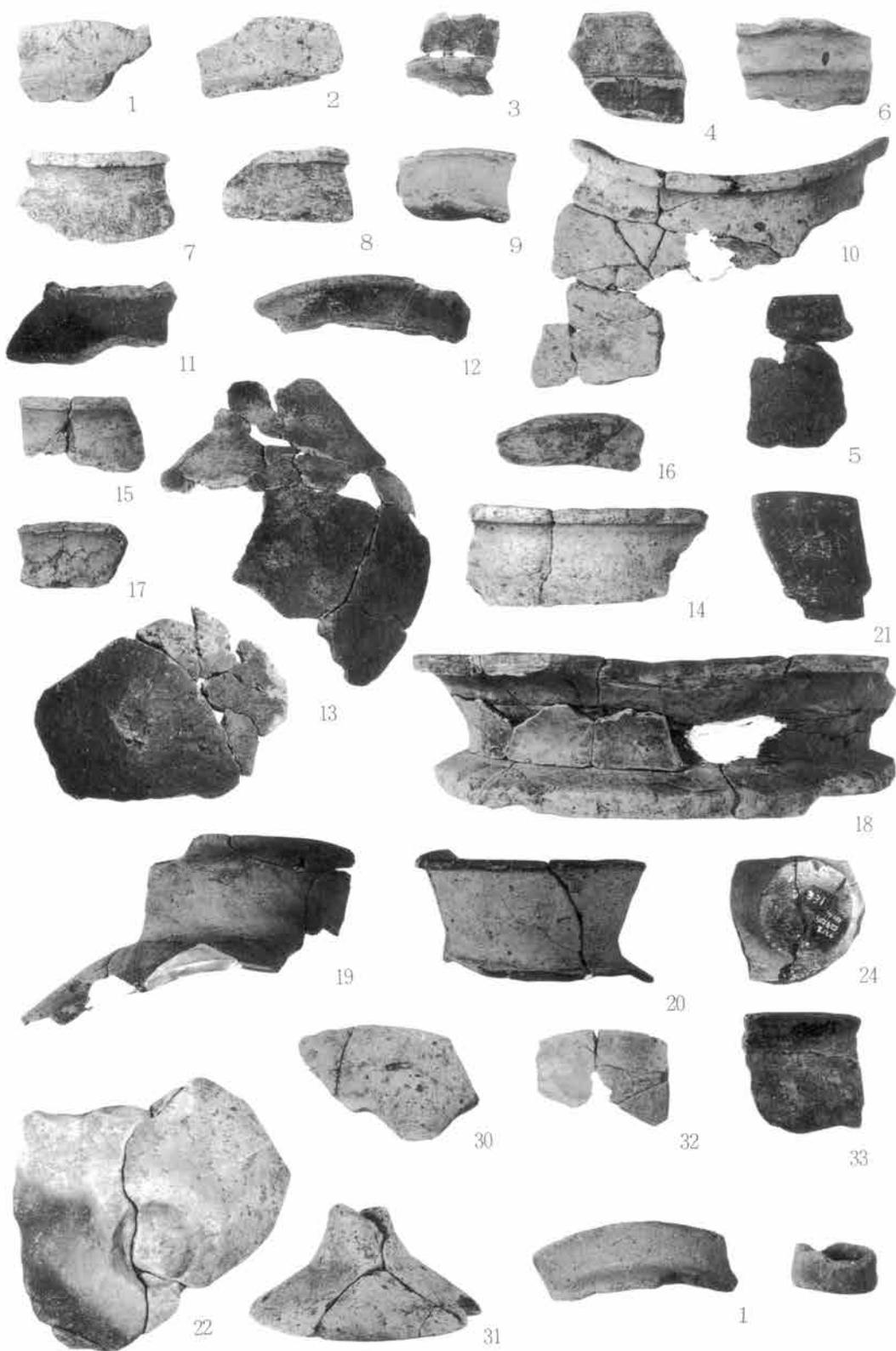
第10号竖穴住居出土土器



第11号竖穴住居出土土器

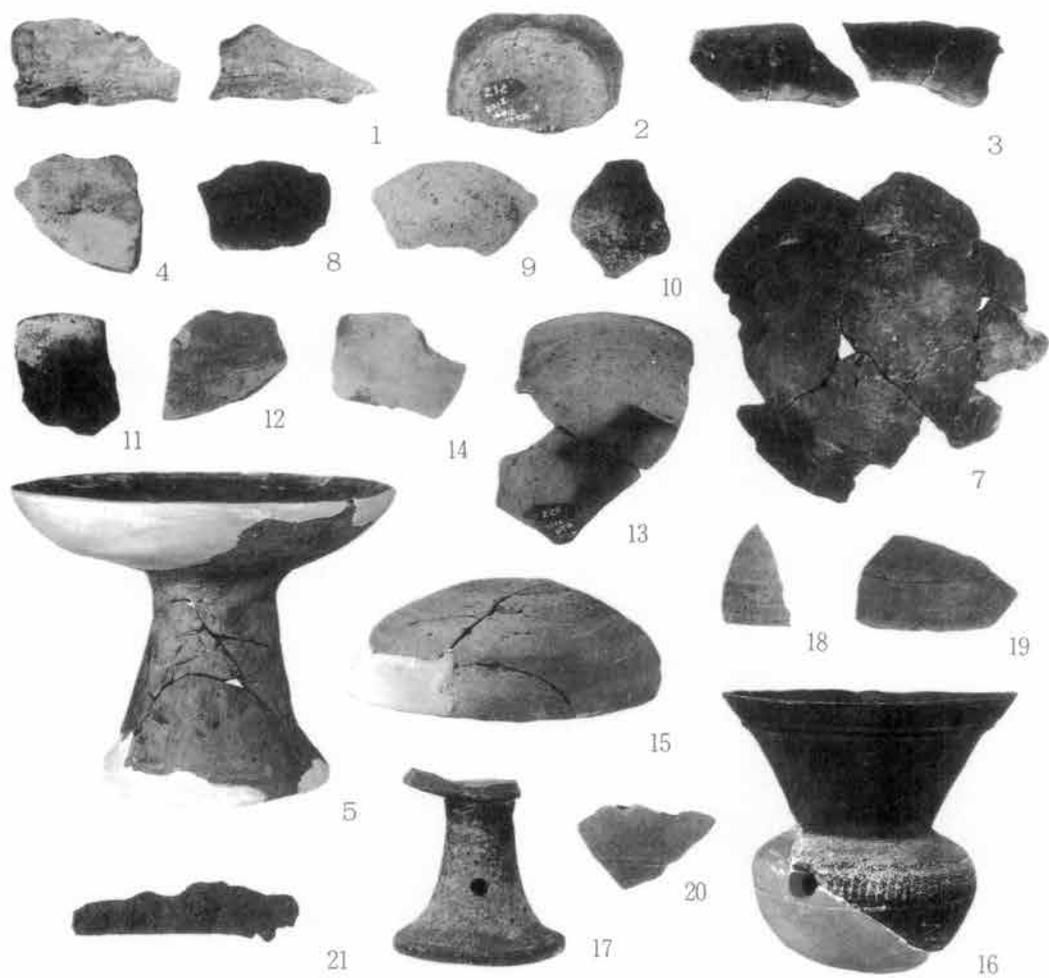


第11号竖穴住居出土遺物(48・49はS=1/2)

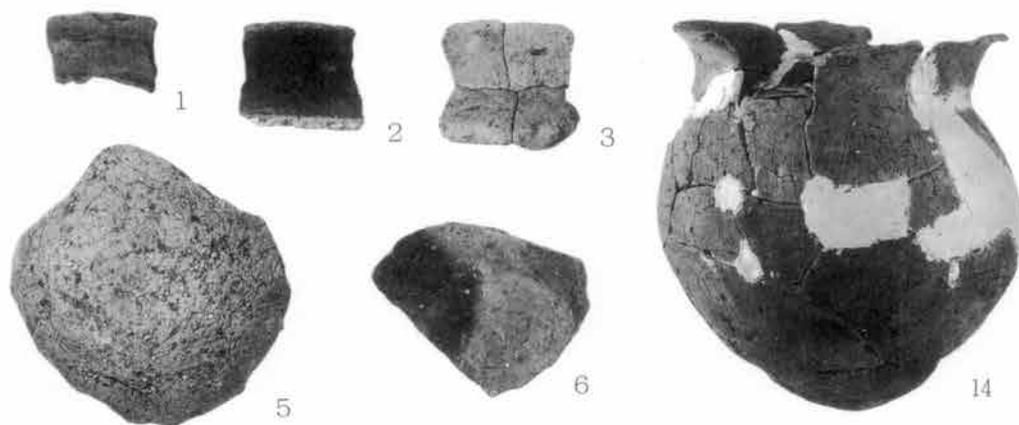


第11号竖穴住居(第52号土坑)出土土器

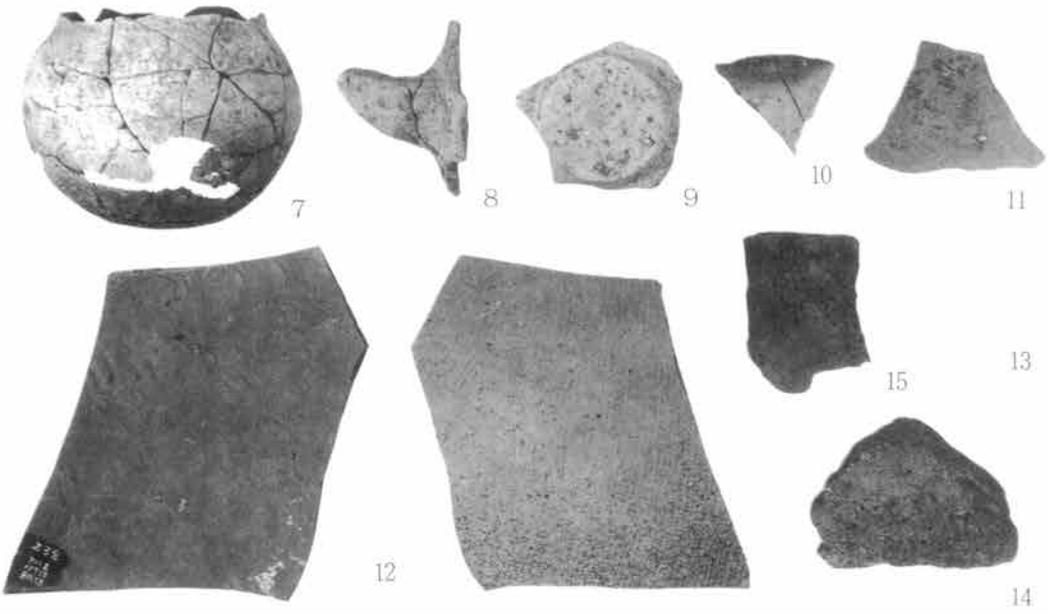
第13号竖穴住居出土土器



第14号竖穴住居出土遺物(21はS=1/2)



第15号竖穴住居出土土器

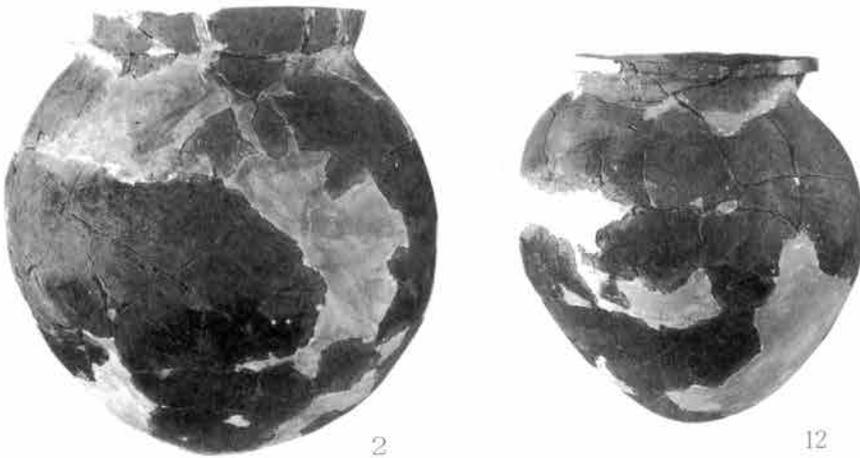


第15号竖穴住居出土遺物(13は原寸)

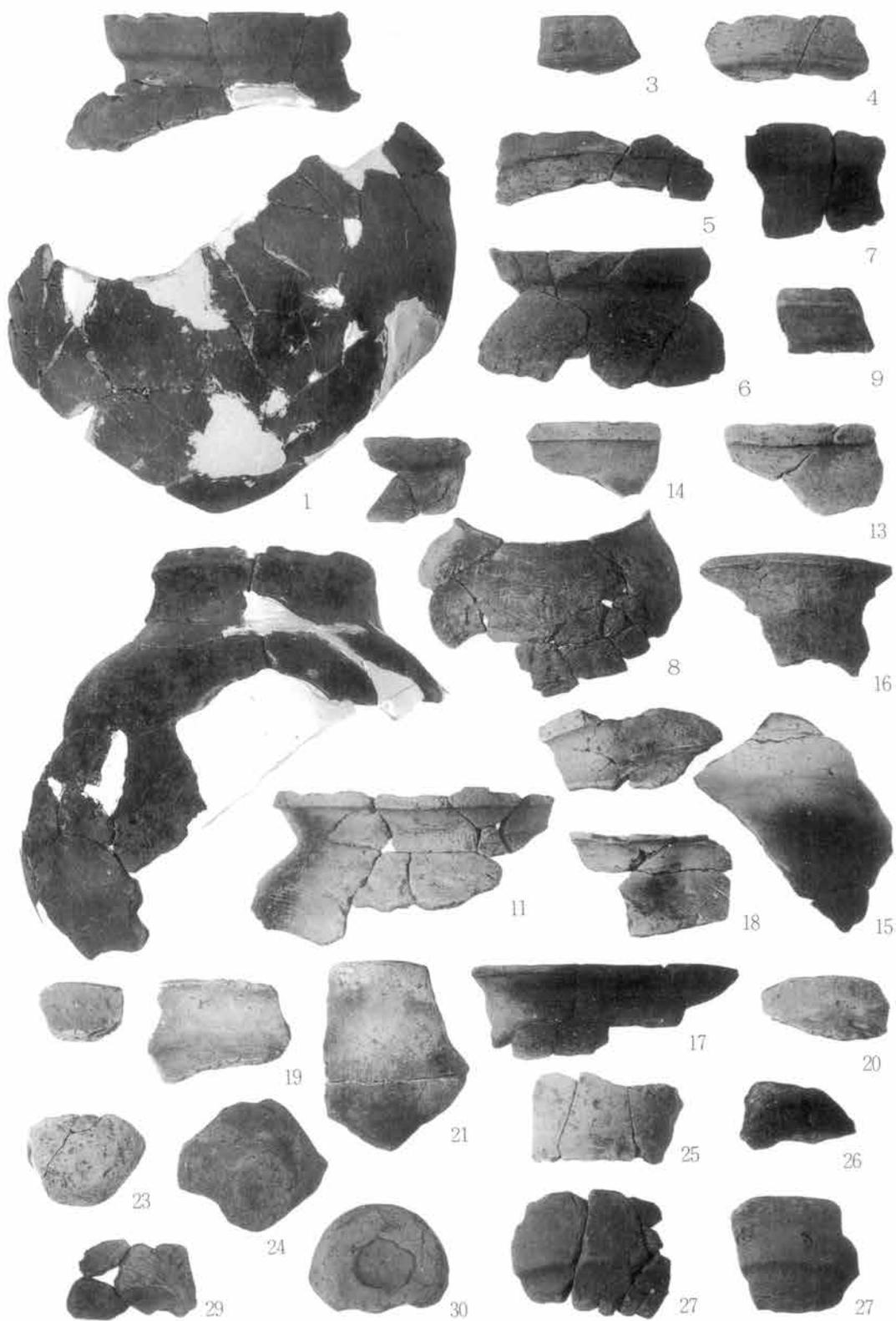


第16号竖穴住居出土土器

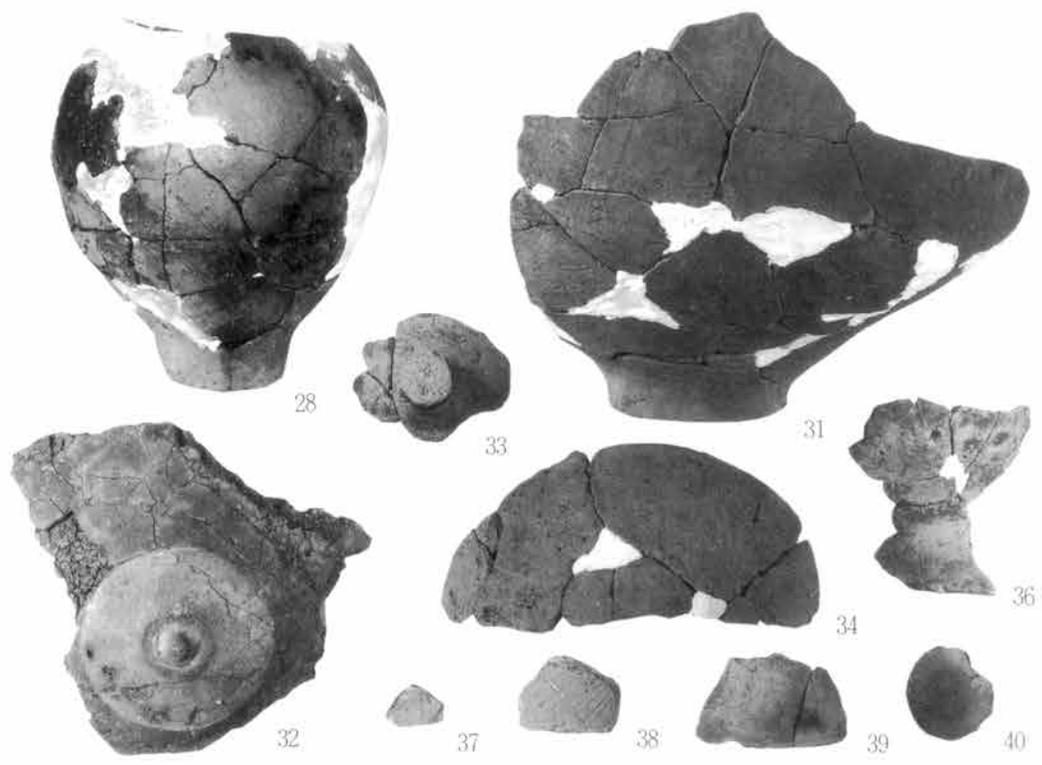
第20号竖穴住居出土土器



第21号竖穴住居出土土器(S=1/5)



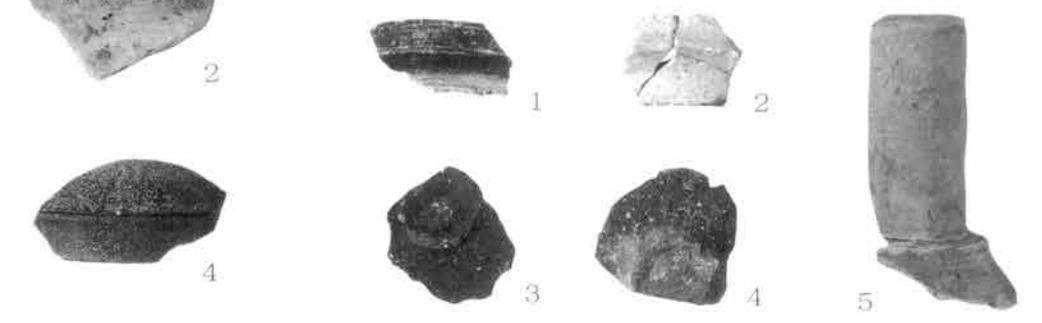
第21号竖穴住居出土土器



第21号竪穴住居出土土器(37・38は原寸)

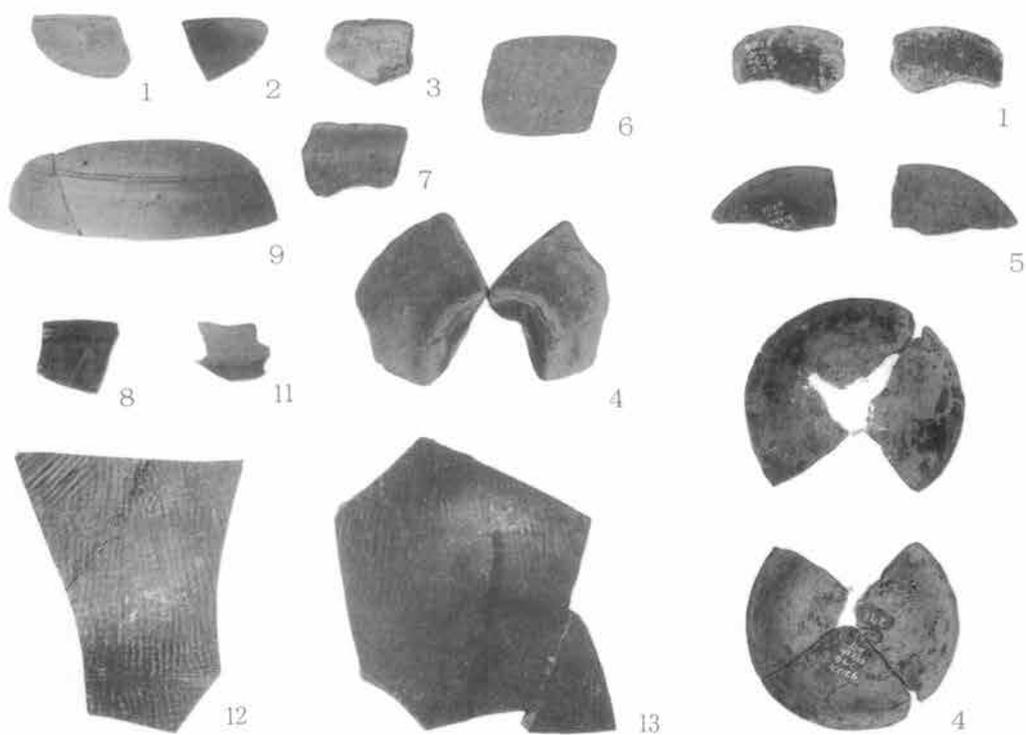


第11号土坑出土土器



第6号土坑出土土器

第12号土坑出土土器

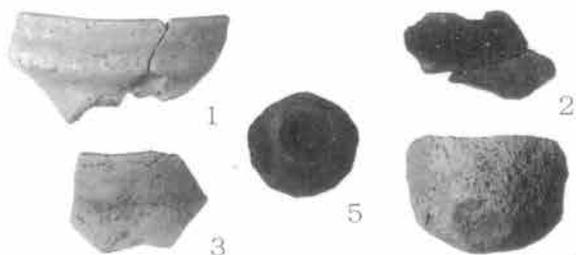


第26号土坑出土土器

第45号土坑出土土器



第48号土坑出土土器



第50号土坑出土土器



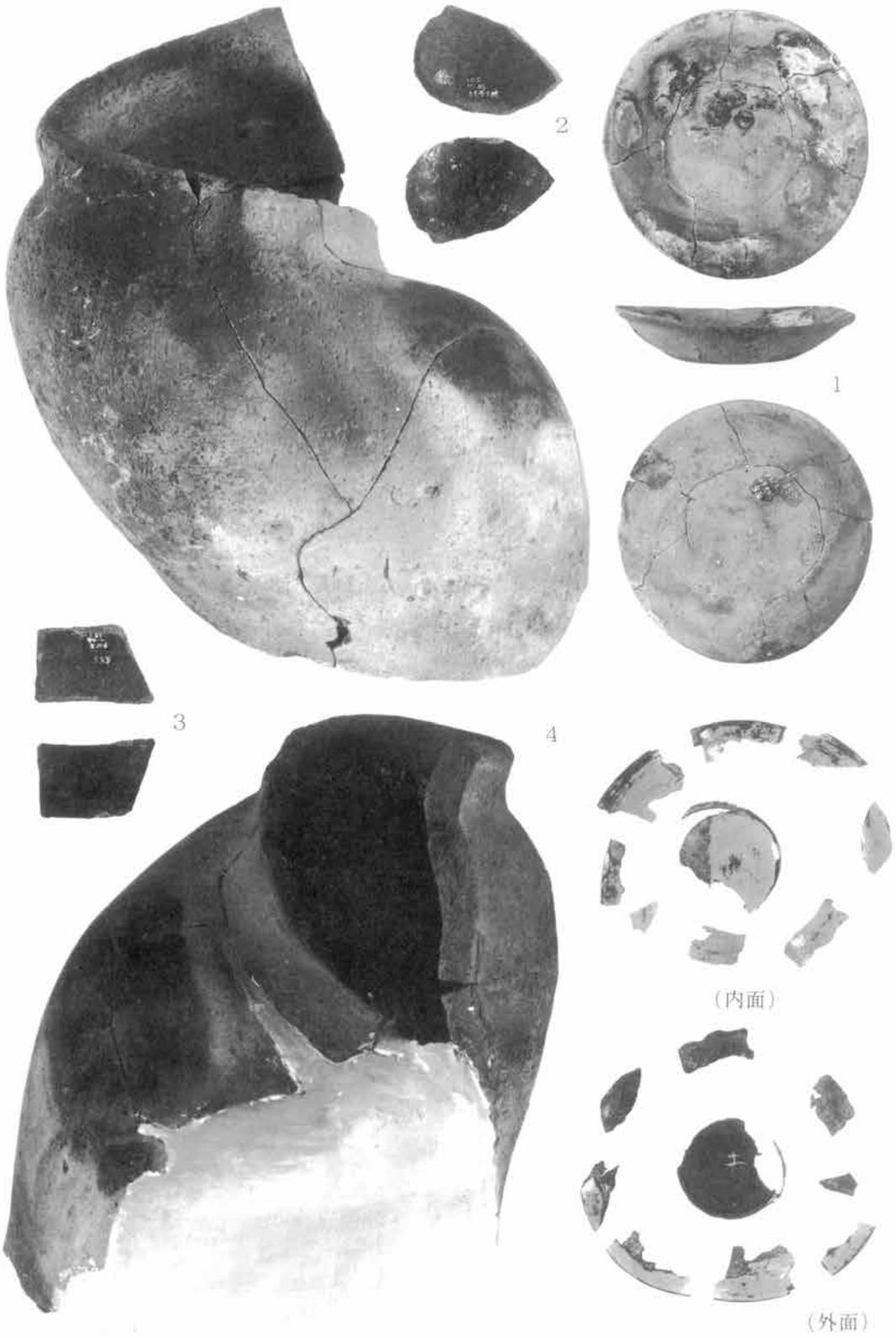
第59号土坑出土土器



第56号土坑出土鉄製品



第67号土坑出土土器



第68号土坑出土土器

ピット130出土漆器



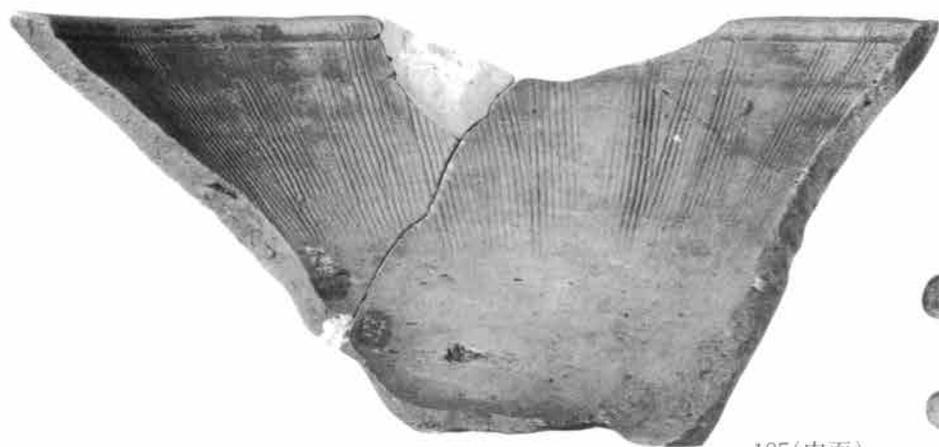
包含層出土石器



包含層出土古墳時代遺物



包含層出土土錘



185(内面)



185(外面)

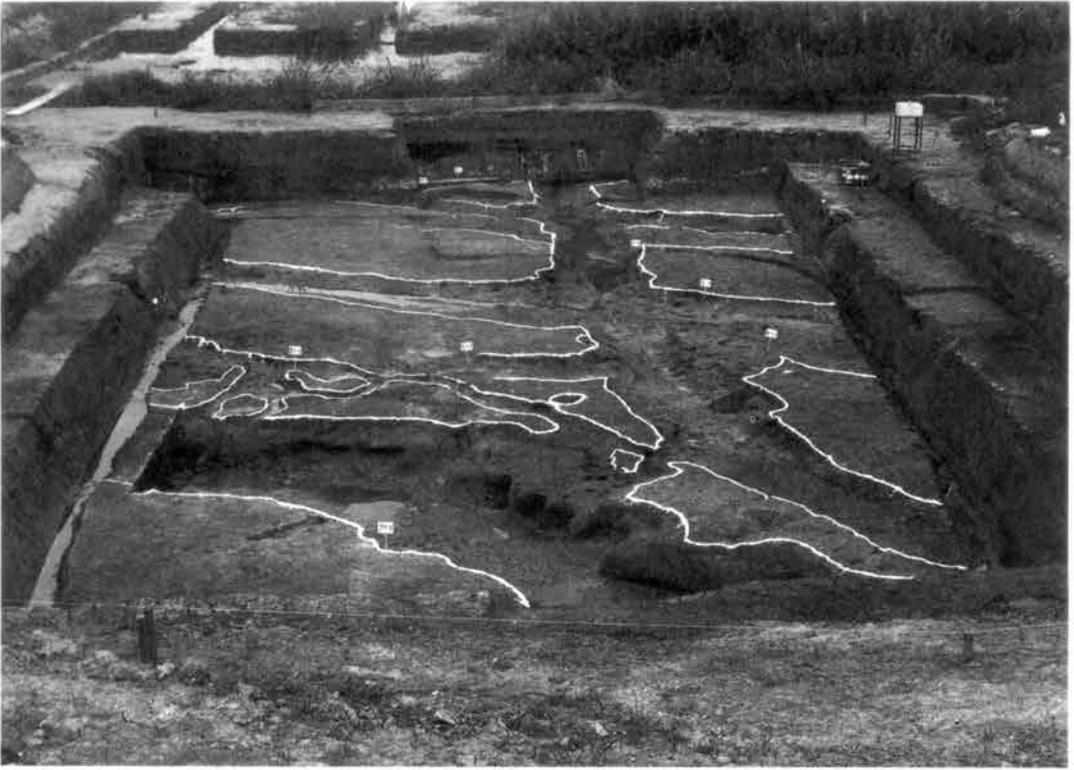
包含層出土中世遺物



遺跡遠景(北・竹生野台地より)



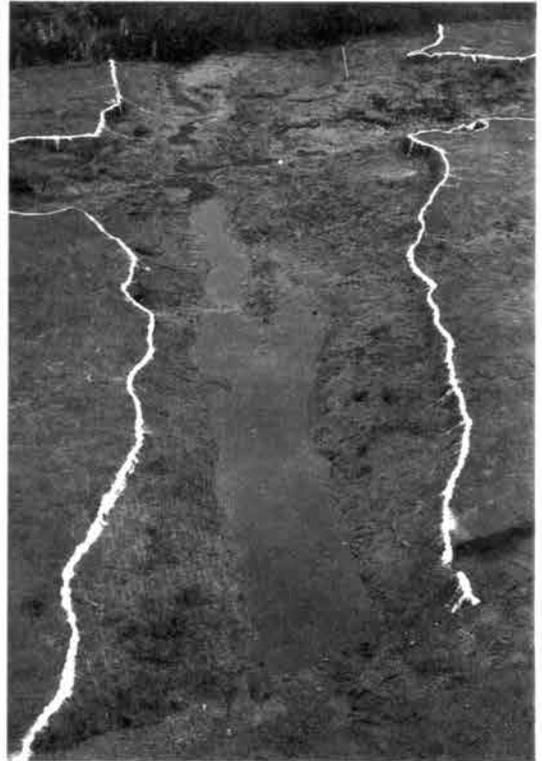
第1調査区遺構検出状況(南より)



第1調査区遺構完掘状況(南より)



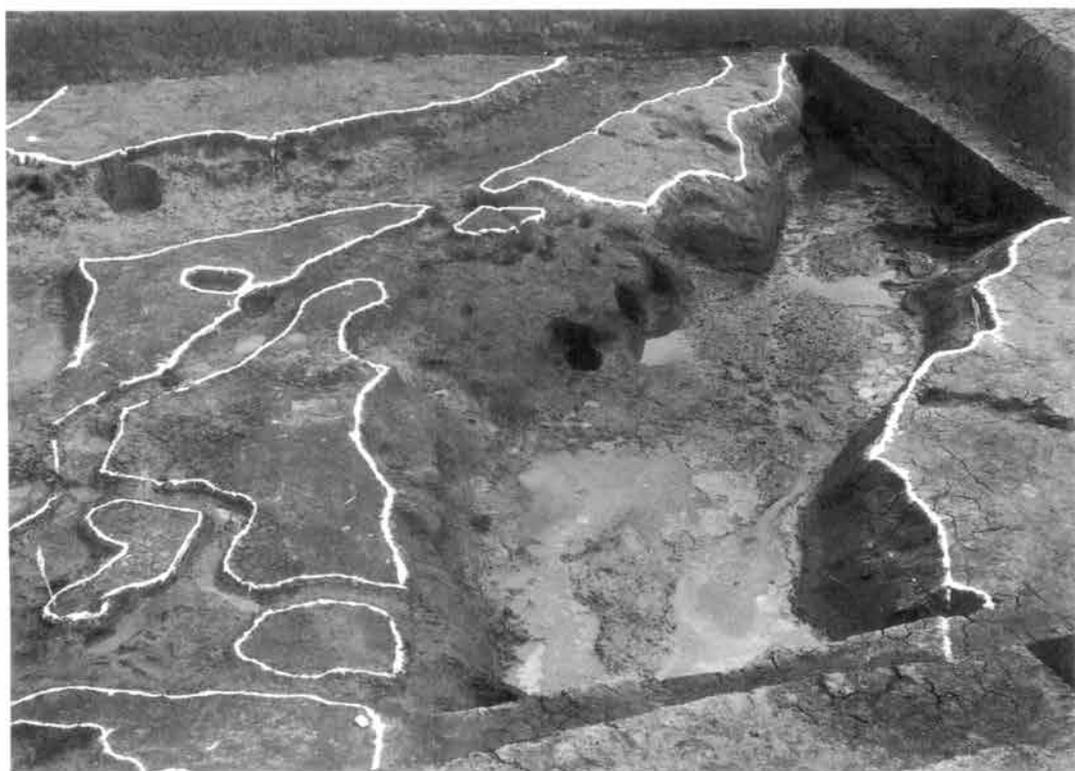
第1号溝



第3・4号溝



第2・8号溝(手前を横切るのは第1号溝)



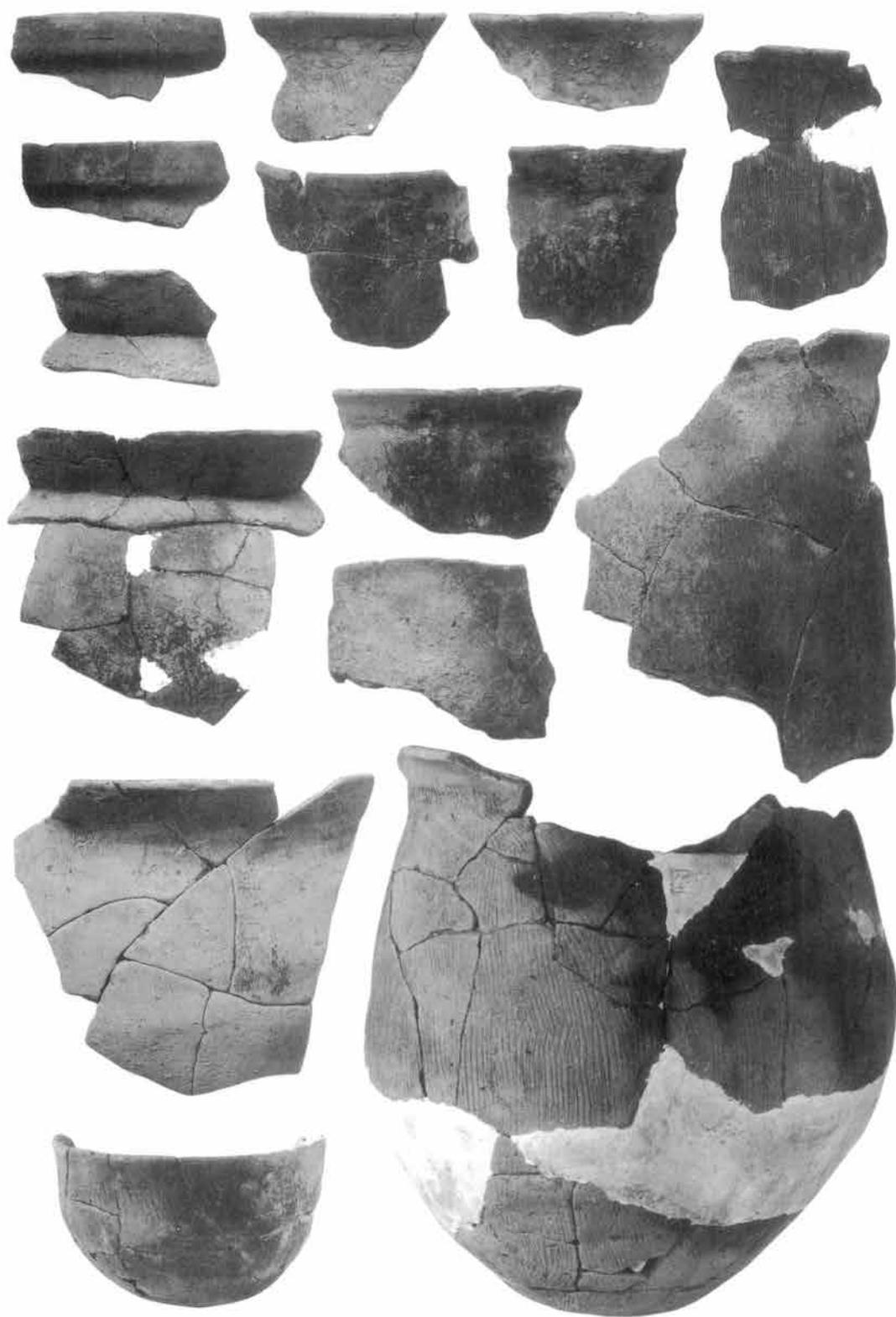
第6・7号溝



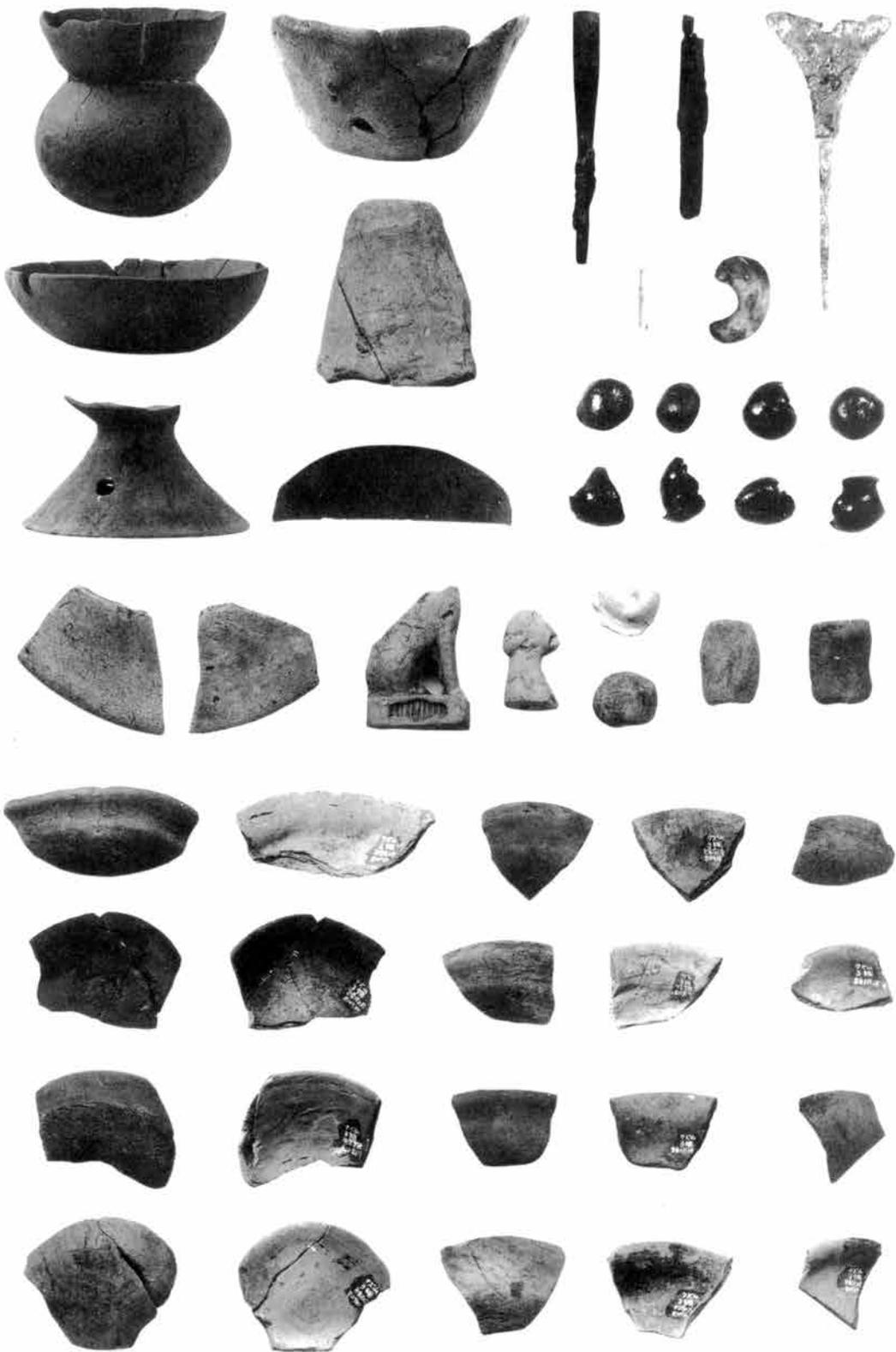
第9号溝(第4調査区)



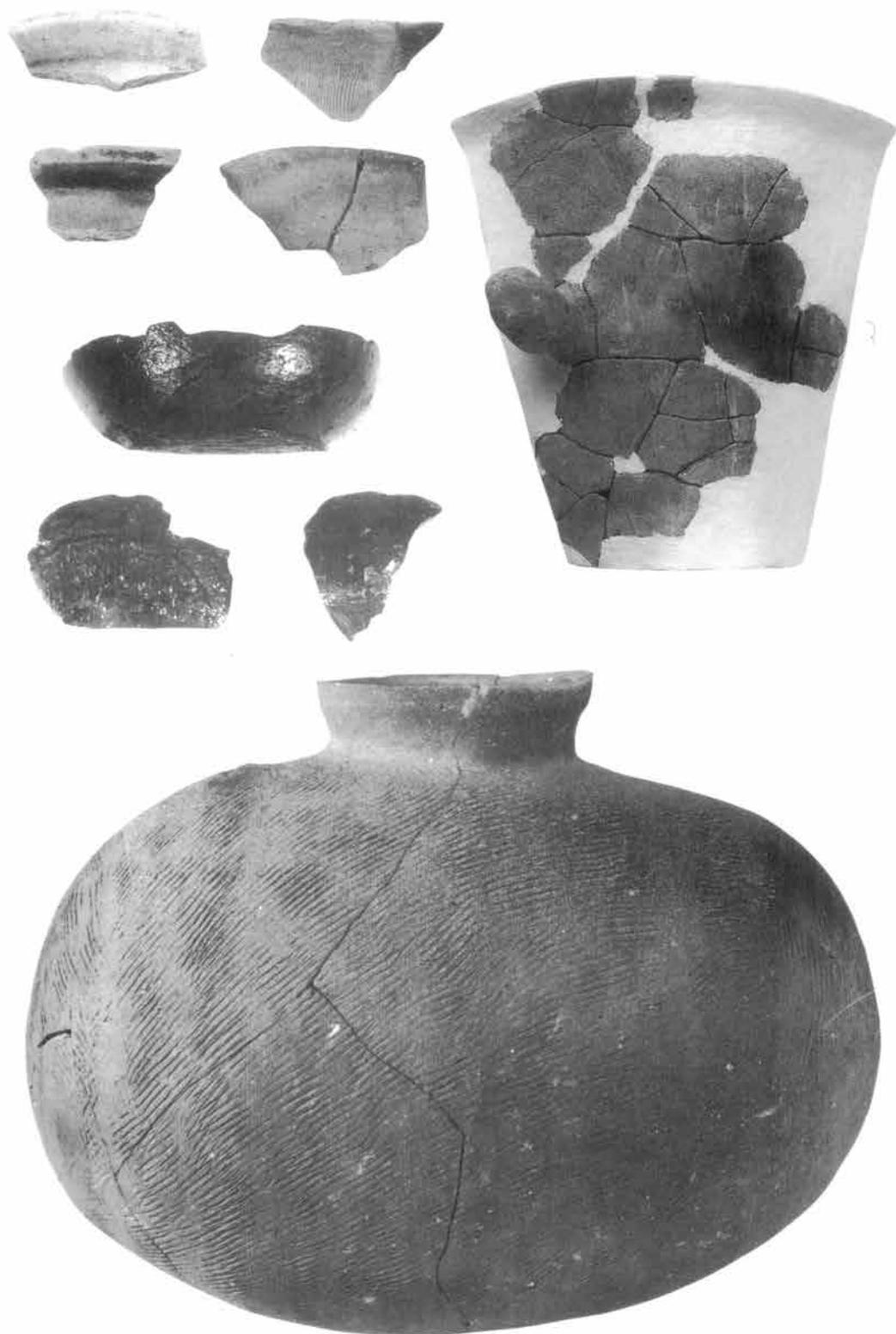
遺物出土状況



第1・第3・第4調査区出土遺物



第1・第3・第4調査区出土遺物



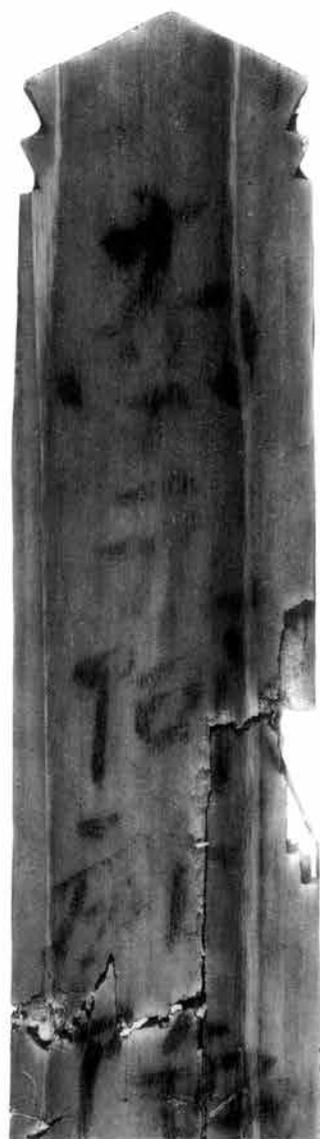
第2・第4調査区出土遺物



(1/2)



(原寸)



(原寸)

筒 塔 婆



空中写真



調査参加者

竹 生 野 遺 跡

昭和63年3月20日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
電話(0762)43-7692番

印 刷 ヨ シ ダ 印 刷 株 式 会 社
石川県金沢市御影町19-1

©石川県立埋蔵文化財センター1988

本文用紙：書籍用紙イエロー（中性紙）72kg

